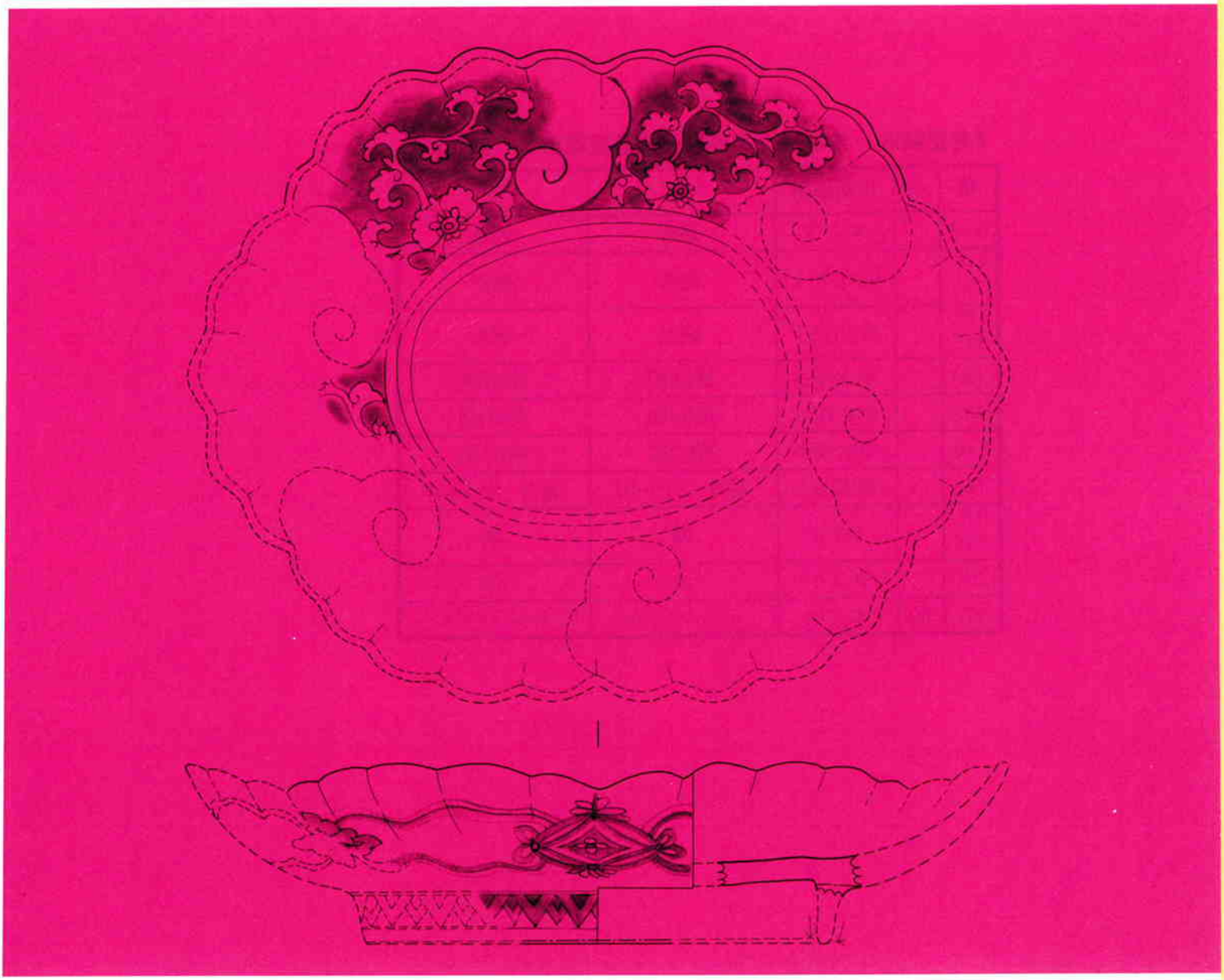
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第１集

首　里　城　跡

―管理用道路地区発掘調査報告書―



平成13年（2001年）３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』正誤表

項	行	正誤箇所	誤	正
110		本文中	銅板	銅版
111. 112		第15表上	碇部	砥部
111. 112		第15表下	銅板	銅版
139		第23表a	第58図	第59図
139		第23表a	第59図	第60図
140		第23表b	第60図	第61図
140		第23表b	番号　24～45	番号　23～44
197. 201		本文中	網	綱
201		本文中	漁	魚
201	59	本文中	ヤクシマサル	ヤクシマザル

序

今回報告します『首里城跡―管理用道路発掘調査報告書―』は沖縄県による首里城公園整備に伴い、平成９年度に実施された発掘調査の成果を報告するものであります。

この調査は、首里城公園の管理用道路を公園南側に新設することとなり、沖縄県教育委員会が沖縄県土木建築部から分任を受け、その事前の調査として実施したものであります。

この際に実施された調査では、次のような成果が上がっております。

まず、検出された遺構としては、18世紀以降に築かれたと思われる石敷き遺構を確認しております。出土遺物はこれまでの周辺地区の調査と同様に貿易陶磁器を中心とした様々な種類の遺物が確認されております。

琉球王国の王城であった首里城跡の調査では、京の内をはじめとして豊富な貿易陶磁器がみつかっております。その産地は広く中国や東南アジアといった各地からもたらされているわけですが、今回の調査では柿右衛門や鍋島などの肥前磁器に代表される九州や関西のものといった日本国内の陶磁器も多量に検出されており、これらの様々な出土遺物からは、往時の琉球王国の活発な交易の様子を垣間見ることができます。

今回の報告書の刊行が、琉球王国の歴史や文化、城内での活動等の解明、また貿易陶磁器研究につながることを願っております。

末尾ながら、今回の報告書の作成にあたりましては、猿の骨については毛利俊雄先生にＤＮＡの鑑定を依頼し、貴重な玉稿をいただいております。また、発掘調査及び資料整理に際し、ご指導を賜りました諸先生はじめ、ご協力を賜りました関係各位に対しては深く感謝申し上げます。

平成13年３月30日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　知　念　　勇

巻首図版　1　首里城跡航空写真

巻首図版　2　上　中国産　青磁碗・瓶　下　中国産　染付碗

巻首図版　3　初期鍋島菱形皿　上：表文様　下：裏文様

巻首図版　4　上：国産（有田）色絵　下：中国産色絵

報告書抄録

ふりがな	しゅり じょうせき
書名	首里城跡
副書名	― 管理用道路地区発掘調査報告書 ―
巻次	
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	盛本勲・比嘉優子・城間肇・新垣力・上原靜・藤崎京 (付編) 毛利俊雄　他
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　TEL 098-835-8751
発行年月日	2001年　3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
首里城跡 (しゅりじょうせき)	沖縄県那覇市首里当の蔵(おきなわけんなはししゅりとうぐら)3丁目1番	那覇市 47201		26° 12′ 46″	127° 43′ 14″	1997.09.01 ～ 1998.02.28	2,000㎡	県営公園整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡	城跡	中世・近世	石敷遺構	青磁、白磁、染付、釉裏紅・鉄釉染付・青磁染付、褐釉陶器、タイ産半練、中国産無釉陶器、黒釉陶器、瑠璃釉、中国産色絵、彩釉陶、ベトナム産磁器、銅緑釉、本土産染付、本土産色絵、本土産印判手、本土産陶器、南島須恵器、土器、陶質土器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦器、塼、瓦、円盤状製品、石製品、石造製品、古銭、鉄製品、銅製品、玉・簪・器種不明の銅製品、その他、煙管、骨製品、貝類遺存体、節足・脊椎動物遺存体	肥前鍋島藩窯製品の未確認資料が出土 県下の遺跡で初めてのサル骨が出土

例　言

1．本書は、平成９年度に実施された首里城跡管理用道路地区の発掘調査報告書である。
2．本書掲載の地形図は、国土地理院発行１/2,500を使用した。
3．本文に使用した首里城の各種地形図などは、沖縄県教育委員会が刊行したものを再度、複写した。
4．検出遺構や出土遺物の実測図は、その規模や種類によって整理縮小し、各図版スケールを付した。なお、出土遺物の写真図版については不定縮尺となっている。
5．陶磁器の分類・鑑定については、手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所）、鈴田由紀夫氏 佐賀県立九州陶磁文化館）大橋康二氏（佐賀県教育庁文化財課）のご協力を戴いた。記して謝意を表します。
6．本書の編集は城間肇、比嘉優子の協力を得て、盛本勲が行った。
7．各章の執筆は下記のように分担した。
　盛本　勲　第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章、第Ⅵ章第27節～第35節、第Ⅶ章結語
　比嘉優子　第Ⅵ章第１節～第４節
　城間　肇　第Ⅵ第５節～第17節
　新垣　力　第Ⅵ章第18節～第22節
　上原　静　第Ⅵ章第23節～第25節
　藤崎　京　第Ⅵ章第26節
8．付編については、下記の先生方に玉稿をいただいた。記して謝意を表します。
　毛利俊雄・川元芳氏　京都大学霊長類研究所
　五吾健・石上盛敏氏　高知医科大学環境保健学教室
9．本書に掲載された発掘調査の写真は盛本勲と矢沢秀雄が、出土遺物は長田剛の撮影によるものである。
10．本書に掲載した首里城跡管理用道路地区の発掘調査に関する写真・実測図などの記録はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。
11．発掘調査・資料整理などの調査体制については、第Ⅰ章の第２節に記した。

目　　次

序
巻首図版
報告書抄録
例　言
第Ⅰ章　調査に至る経緯…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の体制…… 1
第Ⅱ章　城跡の地理的環境と沿革及び概要等…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　城の沿革など…… 3
　第３節　城の変遷と整備事業など…… 3
第Ⅲ章　調査の概要…… 6
　第１節　調査地域…… 6
　第２節　調査区の設定…… 6
第Ⅳ章　層　序…… 8
第Ⅴ章　検出遺構…… 9
　第１節　石敷遺構…… 9
第Ⅵ章　出土遺物…… 15
　第１節　青　磁（中国）…… 15
　第２節　白　磁（中国）…… 40
　第３節　染　付（中国）…… 46
　第４節　釉裏紅・鉄釉染付・青磁染付（中国）…… 68
　第５節　褐釉陶器（中国・タイ）…… 71
　第６節　タイ産半練…… 77
　第７節　中国産無釉陶器…… 78
　第８節　黒釉陶器…… 80
　第９節　瑠璃釉…… 80
　第10節　中国産色絵…… 82
　第11節　彩釉陶…… 85
　第12節　ベトナム産磁器…… 85
　第13節　銅緑釉…… 85
　第14節　本土産染付…… 88
　第15節　本土産色絵…… 105
　第16節　本土産印判手…… 109
　第17節　本土産陶器…… 119
　第18節　南島須恵器…… 135
　第19節　土　器…… 135
　第20節　陶質土器…… 136
　第21節　沖縄産施釉陶器…… 144
　第22節　沖縄産無釉陶器…… 162
　第23節　塼…… 171
　第24節　瓦器…… 171
　第25節　屋瓦…… 171
　第26節　円盤状製品…… 182
　第27節　石製品及び石造製品…… 185
　第28節　古銭…… 187
　第29節　鉄製品及び銅製品…… 189
　第30節　玉・簪・器種不明の金属製品…… 191
　第31節　人形・土錘…… 193
　第32節　煙　管…… 193
　第33節　骨製品等…… 195
　第34節　貝類遺存体…… 197
　第35節　節足・脊椎動物遺存体…… 201
第Ⅶ章　結　語…… 208
付　編　首里城跡管理用道路地区出土の獣類遺存体について…… 295
　（ヤクシマザル、イヌ、ウマ、ブタ、ニホンジカ）
　　首里城跡管理用道路地区出土の獣類遺存体について
　　ミトコンドリア DNA 変異を用いた種判別：沖縄県首里城出土マカク古骨と現生種の比較

図 表 目 次

図目次

第１図　首里城跡の位置図と周辺の遺跡……5
第２図　首里城平面図……7
第３図　調査区の設定……10
第４図　土層図……11
第５図　石敷遺構……13
第６図　青磁１……20
第７図　青磁２……21
第８図　青磁３……22
第９図　青磁４……23
第10図　青磁５……27
第11図　青磁６……28
第12図　青磁７……31
第13図　青磁８……32
第14図　青磁９……37
第15図　青磁10……38
第16図　白磁１……44
第17図　白磁２……45
第18図　白磁３……43
第19図　染付１……53
第20図　染付２……54
第21図　染付３……55
第22図　染付４……56
第23図　染付５……57
第24図　染付６……58
第25図　染付７……64
第26図　染付８……65
第27図　染付９……66
第28図　染付10……67
第29図　染付11　釉裏紅・鉄釉・青磁染付……69
第30図　褐釉陶器中国１……75
第31図　褐釉陶器中国２・タイ……76
第32図　タイ産半練……72
第33図　中国産無釉陶器……79
第34図　黒釉陶器・瑠璃釉……81
第35図　中国産色絵１……83
第36図　中国産色絵２……84
第37図　彩釉陶・ベトナム産磁器……86
第38図　銅緑釉……87
第39図　本土産染付１……98
第40図　本土産染付２……99
第41図　本土産染付３……100
第42図　本土産染付４……101
第43図　本土産染付５……102
第44図　本土産染付６……103
第45図　本土産染付７……104
第46図　本土産色絵１……107
第47図　本土産色絵２……108
第48図　本土産印判手１……116
第49図　本土産印判手２……117
第50図　本土産印判手３……118
第51図　本土産陶器１……129
第52図　本土産陶器２……130
第53図　本土産陶器３……131
第54図　本土産陶器４……132
第55図　本土産陶器５……133
第56図　本土産陶器６……134
第57図　南島須恵器……135
第58図　土器……135
第59図　陶質土器１……141
第60図　陶質土器２……142
第61図　陶質土器３……143
第62図　沖縄産施釉陶器１……156
第63図　沖縄産施釉陶器２……157
第64図　沖縄産施釉陶器３……158
第65図　沖縄産施釉陶器４……159
第66図　沖縄産施釉陶器５……160
第67図　沖縄産施釉陶器６……161
第68図　沖縄産無釉陶器１……167
第69図　沖縄産無釉陶器２……168
第70図　沖縄産無釉陶器３……169
第71図　沖縄産無釉陶器４……170
第72図　瓦器・塼……177
第73図　高麗系瓦　大和系瓦　近世大和瓦……178
第74図　明朝系……179
第75図　明朝系……180
第76図　明朝系……181
第77図　円盤状製品１……183
第78図　円盤状製品２……184
第79図　石製品……186
第80図　古銭……188
第81図　金属製品……190
第82図　玉・簪・器種不明・人形・土錘……192
第83図　煙管……194
第84図　骨製品……196

図版目次

巻首図版１　首里城跡航空写真
巻首図版２　上：中国青磁碗・瓶
　　下：染付碗
巻首図版３　上：国産（有田）色絵
　　下：中国産色絵
巻首図版４　初期鍋島菱形皿
図版１　上下遺跡近影……211
図版２　上下検出遺構……212
図版３　青磁１……213
図版４　青磁２……214
図版５　青磁３……215
図版６　青磁４……216
図版７　青磁５……217
図版８　青磁６……218
図版９　青磁７……219
図版10　青磁８……220
図版11　青磁９……221
図版12　青磁10……222
図版13　白磁１……223
図版14　白磁２……224
図版15　染付１……225
図版16　染付２……226
図版17　染付３……227
図版18　染付４……228
図版19　染付５……229
図版20　染付６……230
図版21　染付７……231
図版22　染付８……232
図版23　染付９……233
図版24　染付10……234
図版25　染付11　釉裏紅・鉄釉・青磁染付……235
図版26　褐釉陶器１……236
図版27　上：褐釉陶器２　下：タイ産半練……237
図版28　中国産無釉陶器……238
図版29　黒釉陶器・瑠璃釉……239
図版30　中国産色絵１……240
図版31　中国産色絵２……241
図版32　上：彩釉陶・ベトナム産磁器　下：銅緑釉……242
図版33　本土産染付１……243
図版34　本土産染付２……244
図版35　本土産染付３……245
図版36　本土産染付４……246
図版37　本土産染付５……247
図版38　本土産色絵１……248
図版39　本土産印判手１……249
図版40　本土産印判手２……250
図版41　本土産印判手３……251
図版42　本土産陶器１……252
図版43　本土産陶器２……253
図版44　本土産陶器３……254
図版45　本土産陶器４……255
図版46　本土産陶器５……256
図版47　上：本土産陶器６　下：南島須恵器・土器……257
図版48　陶質土器１……258
図版49　陶質土器２……259

図版50　陶質土器３……260
図版51　沖縄産施釉陶器１……261
図版52　沖縄産施釉陶器２……262
図版53　沖縄産施釉陶器３……263
図版54　沖縄産施釉陶器４……264
図版55　沖縄産施釉陶器５……265
図版56　沖縄産施釉陶器６……266
図版57　沖縄産無釉陶器１……267
図版58　沖縄産無釉陶器２……268
図版59　沖縄産無釉陶器３……269
図版60　沖縄産無釉陶器４……270
図版61　瓦器、塼……271
図版62　高麗系瓦　大和系瓦　近世大和瓦……272
図版63　明朝系瓦１……273
図版64　明朝系瓦２……274
図版65　明朝系瓦３……275
図版66　円盤状製品１……276
図版67　円盤状製品２……277
図版68　石製品（硯・砥石・石柱・欄干の羽目板）……278
図版69　古銭……279
図版70　金属製品（鉄鏃・釘・手斧の先・不明〈しゃもじ状〉）……280
図版71　玉・簪・器種不明（銅製品）・人形・土錘……281
図版72　煙管……282
図版73　骨製品……283
図版74　貝類遺存体（巻貝１）……284
図版75　貝類遺存体（巻貝２）……285
図版76　貝類遺存体（二枚貝）……286
図版77　節足・脊椎動物遺存体（魚骨）……287
図版78　節足・脊椎動物遺存体（上：カメ・鳥類・ノコギリガサミ・下：ニワトリ）……288
図版79　節足・脊椎動物遺存体（上：イヌ・下：ネコ）……289
図版80　節足・脊椎動物遺存体（上：ネズミ・下：ウマ）・290
図版81　節足・脊椎動物遺存体（上：ヤギ・下：ブタ・シカ・種不明）……291
図版82　節足・脊椎動物遺存体（イノシシ歯・下：イノシシ）……292
図版83　節足・脊椎動物遺存体（ウシ）……293
図版84　節足・脊椎動物遺存体（ヤクシマザル）……294

表目次

第１表　青磁観察一覧……16
第２表　青磁出土状況一覧……39
第３表　白磁観察一覧……43
第４表　白磁出土状況一覧……46
第５表　染付観察一覧……47
第６表　釉裏紅・鉄釉染付・青磁染付出土状況一覧……68
第７表　染付出土状況一覧……70
第８表　褐釉陶器（中国・タイ）出土状況一覧……72
第９表　褐釉陶器観察一覧……73
第10表　中国産無釉陶器出土状況一覧……78
第11表　本土産染付出土状況一覧……91
第12表　本土産染付観察一覧……93
第13表　本土産色絵出土状況一覧……105
第14表　本土産色絵観察一覧……106
第15表　本土産印判手出土状況一覧……111
第16表　本土産印判手観察一覧……113
第17表　本土産陶器出土状況一覧……122
第18表　本土産陶器出土状況一覧……122
第19表　本土産陶器出土状況一覧……123
第20表　本土産陶器観察一覧……124
第21表　沖縄産土器出土状況一覧……135
第22表　陶質土器出土状況一覧……138
第23表　陶質土器観察一覧……139
第24表　沖縄産施釉陶器観察一覧……148
第25表　沖縄産無釉陶器観察一覧……164
第26表　瓦器・磚法量一覧……171
第27表　各種瓦の地区別出土状況……172
第28表　円盤状製品観察一覧……182
第29表　石製品及び石造製品一覧……185
第30表　古銭観察一覧……187
第31表　古銭出土状況一覧……187
第32表　鉄製品及び銅製品一覧……189
第33表　玉製品一覧……191
第34表　簪一覧……191
第35表　器種不明金属製品一覧……191
第36表　人形・土錘一覧……193
第37表　煙管製品一覧……193
第38表　骨製品（ハブラシ様製品）一覧……195
第39表　貝類遺存体種名一覧……197
第40表　貝類出土状況一覧（巻貝）……199
第41表　貝類出土状況一覧（二枚貝）……200
第42表　節足・脊椎動物遺存体種名一覧……201
第43表　魚類出土量……202
第44表　ノコギリガサミ出土量……202
第45表　カメ出土量……202
第46表　ニワトリ出土量……203
第47表　ネズミ出土量……203
第48表　イヌ出土量……204
第49表　ヤクシマザル雌出土量……204
第50表　ヤクシマザル雄出土量……204
第51表　ブタ出土量……204
第52表　シカ出土量……204
第53表　鳥類出土量……204
第54表　種・部位不明出土量……204
第55表　ヤクシマザル歯・牙出土量……204
第56表　ウシ歯・牙出土量……205
第57表　ウマ歯・牙出土量……205
第58表　イノシシ歯・牙出土量……205
第59表　ヤギ歯・牙出土量……205
第60表　イヌ歯・牙出土一覧……205
第61表　ウシ出土表……206
第62表　ウマ出土表……206
第63表　イノシシ出土表……207
第64表　ネコ出土表……207
第65表　ヤギ出土表……207

付　編

図１　プライマーの位置
図２　D-loop 領域の PRC 増幅
図３　塩基配列アライメント
図４　各種マカクの配列類似性

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

第２章第３節で記すように、国指定史跡首里城跡は昭和59年（1984）の閣議決定により、内郭4.2haが建設省所管の「ロ号国営公園」に指定され、国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）で復元整備されることが決定するとともに、城郭外側の区域約14haが県営公園として位置づけられ、年次的に整備事業が進められている。

これまでに、国営公園（内郭）地区は正殿、南北殿、奉神門、御庭、下御庭、二階殿等の整備が完了し、都市公園あるいは管理施設として機能している。

一方、城郭外側の県営公園地区も国営公園（内郭）地区と併行して、年次的に整備が進められ、これまでに龍澤エリア、上之毛エリア、首里杜館エリア等の整備が完了し、国営公園の補助公園あるいは付帯施設等として機能している。

このような中で、県営公園を所管している県土木部（所管：都市計画課）は、平成10年度事業として、国営公園の管理用道路の整備計画に関して、県教育委員会（所管：文化課）へ協議を行ってきた。

計画内容は、それまで使用していた暫定的な北側管理用道路の使用期限が平成10年度で終了することから、恒久的な管理用道路として、基本計画に位置づけられた崎山三叉路付近より継世門西側に至る南側からルートを整備したい旨の内容であった。

県教育委員会（所管：文化課）としては、当該区域は国指定首里城跡の指定地内にあることから、国（文化庁）への現状変更許可の手続きが必要であるとともに、工事着手前に埋蔵文化財の発掘調査が必要である旨の回答を行った。そして、発掘調査を実施する前に、これを必要とする範囲を明確にするための範囲確認調査を実施するとともに、平成9年（1997）度事業として、県教育委員会（所管：文化課）が予算の分任を受けて、記録保存を前提とした発掘調査を実施することになった。

第２節　調査の体制

発掘調査から資料整理及び報告書作成に至る間の体制は、下記の通りである。

事業責任者　安室　肇（沖縄県教育委員会教育長、1997～”98年度）
翁長良盛（　〃　　〃　、1999～”2000年度）

事業　総括　大城将保（沖縄県教育委員会文化課課長、1997～”98年度）
當眞嗣一（　〃　　〃　、1999～2000年度）
知念　勇（沖縄県立埋蔵文化財センター所長、2000年度）
日越国昭（沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1997年度）
當眞嗣一（沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1998年度）
千木良芳範（　〃　　〃、1999～2000年度）
上原　靜（　〃　　〃　史跡整備係長、1997～”98年度）
盛本　勲（　〃　　〃　　、1999年度）
〃　　〃（　〃　　〃　記念物係長、2000年度）
島袋　洋（沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長、2000年度）

事業　事務　稲嶺靖子（沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1997～”98年度）
名嘉政修（　〃　　〃　、1999～2000年度）
大浜　節（　〃　　〃　主幹兼管理係長、1997～”99年度）
比嘉　清（　〃　　〃　文化係長、2000年度）
知念廣義（沖縄県立埋蔵文化財センター副所長兼庶務課長、2000年度）
砂川邦子（沖縄県教育委員会文化課管理係主査、1997～”99年度）
當間正子（　〃　　〃　文化係主査、2000年度）
城間千賀（沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2000年度）

上原　浩（沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2000年度）

調査及び資料整理指導　渡辺　誠（名古屋大学文学部教授・考古学）
甲元眞之（熊本大学文学部教授・考古学）
高倉洋彰（西南学院大学文学部教授・考古学）
手塚直樹（鎌倉考古学研究所所長・考古学）
安里嗣淳（(財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室長・考古学）
Rechad Peason（カナダ・ブリティシュコロンビア大学教授・考古学・文化人類学）
鈴田由紀夫（佐賀県立九州陶磁文化館普及係長・考古学・陶磁器）
大橋康二（佐賀県教育庁文化財課副課長・考古学・陶磁器）
毛利俊夫（京都大学霊長類研究所助手・自然人類学）

発掘　担当　盛本　勲(沖縄県教育委員会文化課史跡整備係主任)

発掘調査員　矢沢秀雄(沖縄県教育委員会文化課嘱託調査員)
比嘉優子(　〃　　〃　)

資料　整理　城間　肇(沖縄県教育委員会文化課臨時的任用職員、1999年度)
〃　〃(沖縄県立埋蔵文化財センター嘱託調査員、2000年度)
比嘉優子(沖縄県教育委員会文化課嘱託調査員、1998～”99年度)
〃　〃　(沖縄県立埋蔵文化財センター嘱託調査員、2000年度)

発掘調査作業員(五十音順)
安次嶺政寿、上江洲春子、大城フサ子、大田吉光、嘉味田千枝子、喜舎場盛安、幸地ヨシ子、玉城史子、小橋川幸子、中村フサ子、中原ミツ子、比嘉洋子、宮城澄子、山内利江子。

資料整理作業員(五十音順)
1997年度　上原園子、大城勝江、城間千鶴子、外間　瞳、永友和子、村山理代、仲宗根三枝子。
1998年度　上原園子、大城勝江、佐藤奈穂美、城間千鶴子、外間　瞳、仲宗根三枝子、照屋利子、濱元春江。
1999年度　上原園子、大城勝江、藤田奈穂美、城間千鶴子、外間　瞳、仲宗根三枝子、照屋利子、比嘉なおみ、濱元春江。
2000年度　上原園子、大城勝江、藤田奈穂美、城間千鶴子、外間　瞳，仲宗根三枝子、照屋利子、比嘉なおみ、濱元春江。

第Ⅱ章　城跡の地理的環境と沿革及び概要等

第１節　地理的環境

首里城跡は、那覇市街東北方の琉球石灰岩から成る首里台地に築城された琉球王国の王宮跡である（第１図）。現在の地籍は、那覇市首里当蔵３丁目１番となっている。

王宮の立地する首里は、標高130ｍ前後の琉球石灰岩の丘陵上に形成された城下町である。一帯は、北方に標高100～280ｍの末吉山から虎頭山、弁ヶ嶽に至る丘陵によって、南方に金城川が流れる凹地、さらには識名丘陵、東方は南風原町との境界を流れるナゲーラ川、西方は真嘉比川に囲まれ、他地域とは隔絶されている。

このように、四方が丘陵や谷川などの自然の障壁に囲繞された首里台地の南縁部に当該城は築かれ、要塞としての条件を十二分に満たした王宮としての立地にふさわしい地理的環境にある。

また、城の南西眼下には那覇の街や貿易港であった那覇港を控えていたことも、貿易立国をなしていた琉球社会の往時の社会的背景を鑑みると、好条件の立地であった。

このように、当該城は一帯では最高所に立地することから、王宮の外郭石垣の東西に設けられたアザナと称される物見や京の内南側の物見からは、北に中山王の王宮であった浦添城跡を経て、遠くは座喜味城跡が立地する丘陵を、西には慶良間諸島や渡名喜島の島嶼を経て、良好な天候の際には遠く久米島までもが望見できる。また、東には久高島や大里城跡・糸数城跡の立地する丘陵を、南には多々名グスクや八重瀬グスクが立地する丘陵が望める。

第２節　城の沿革など

グスクの築城年および築城主等についての詳細については判然としない部分もあるが、現存する沖縄最古の金石文である「安国山樹華木碑記」（宣徳２年・1427年）に、尚巴志王により王城外に龍澤と称する人工池を掘って、安国山を築き、世界中の草木や華木を植えて城域を整備したとの記録があることから、尚巴志王の代（1422～1439年）には王宮としての基本的な構造や縄張りはほぼ確立していたであろう、とされる。

その後、第二尚氏王統の尚真王（1477～1526年）や尚清王（1527～1555年）代に北西部に歓会門や久慶門を設けたり、東南側の城郭石垣を二重に構築し、継世門を設けるなど城内外の拡張や整備等を経て、最終的な城全貌ができ上がったものとされる。

城域は東南約400ｍ、南北270ｍ、面積約4.2haの広さを有する県下最大のグスクである。全長1.080ｍの外郭には歓会門、久慶門、木挽門、継世門の４つの門が、内郭に瑞泉門、漏刻門、広福門、奉神門、右掖門、左掖門、淑順門、美福門、白銀門の９つの門がある。そして、これらの門を連ねる城壁は、琉球石灰岩の切り石を6～10ｍ前後の高さに積み上げ、外郭の門にはいずれも石造のアーチを架けた石造拱門の上に櫓を乗せるが、内郭の門には石造拱門は架けず門口の両石垣上に直接櫓を乗せた構造となしている。

城内の主要施設は内郭の東半部域に配されており、そのほぼ中央部に西向きの正殿を配し、前面には御庭と称される広い空間を挟んで、南北両側に脇殿としての南殿と北殿を配した伽藍配置となっている。

換言すれば、これらは国家の政治や諸行事等を行う行政施設であるが、その他にこれらの施設の背後にあたる東方には国王のプライベートな施設である二階殿や世添殿、女官居室、料理座等の10数カ所の王家関係の施設が配されていた。

正殿は別名百浦添御殿とも称され、高さ16.36ｍ、面積1,355㎡の規模を誇り、沖縄最大の建物であった。

構造的には基壇上に構築され、外観上は重層をなすが、内部は三層をなし、屋根は本瓦入母屋造で、正面は大きく唐破風造をなしていた。

城の大手門である歓会門から西へ向けて綾門大道と称される大路としての舗装道路が延び、その基点部付近に第一門としての中山門が、さらに歓会門の手前部に第二門としての守礼門が建立されていた。

城の北側には園比屋武御嶽や円覚寺、さらには庭園としても見られる弁財天堂や円鑑池、そして龍澤が造成されている。

第３節　城の変遷と整備事業など

前記したように、首里城跡は尚巴志王代（1422～1439年）に築城され、沖縄県が発足した明治12年（1879）までの約450年余にわたって琉球王国の王宮があったところである。そして、敗戦前までその偉容を誇っていた正

殿をはじめとした建物群は、その学術的価値から昭和８年には国宝に指定され、国家的歴史遺産となっていた。

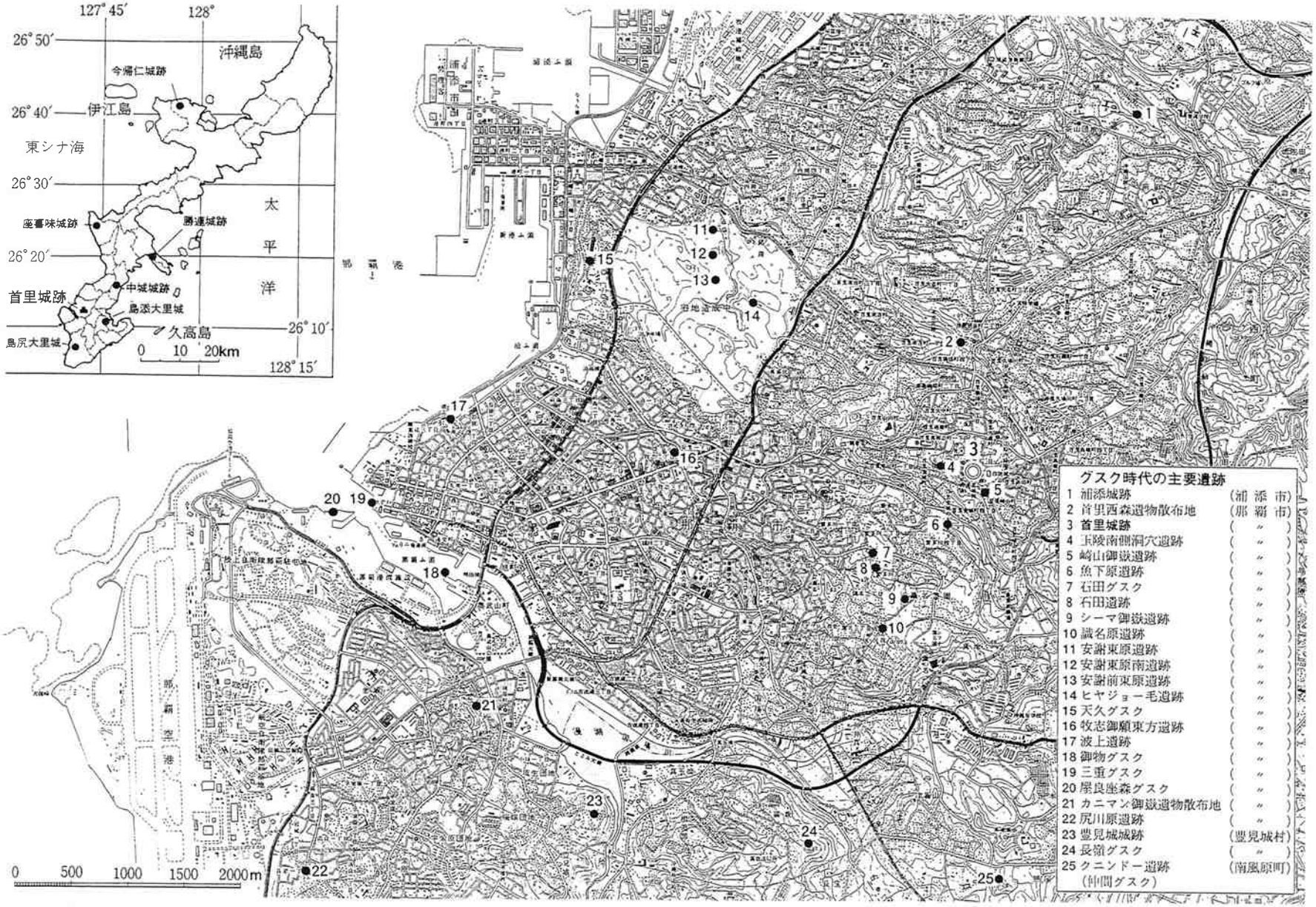
しかし、さる沖縄戦において城内の地下に日本陸軍の沖縄総司令部壕がおかれたこともあって、城一帯は集中砲火を浴びることになり、その際地上にあった城内外の国宝建造物群等の貴重な文化遺産の数々が、城壁等の一部を残してことごとく焼失してしまい、国宝指定も解除となってしまった。

さらには、この戦災に拍車をかけるように終戦直後の昭和25年（1950）には、城内を中心とした一帯に旧琉球大学が設置され、4.2haの内郭に所狭しと校舎や事務棟等の施設が建設されるとともに、一部の地形改変までもが行われ、大まかな旧地形が忍ばれる程にまで変貌してしまった。

このような変貌ぶりに県民は心を痛め、旧琉球政府文化財保護委員会などが中心となり、先祖が残したこのような貴重な文化遺産の修復に取り組み、昭和31～32年（1956～57）の園比屋武御嶽石門の復元整備を皮切りに、昭和32～33年（1957～58）には守礼門を、昭和35～42年（1960～67）には龍淵橋及び円鑑池を、昭和43年（1968）には円覚寺総門と弁財天堂、昭和44年（1969）には天女橋の復元を行っている。

そして、昭和47年（1972）の沖縄県の本土復帰と同時に、戦災文化財の復元整備事業として歓会門及び久慶門一帯の外郭石垣部分を首里城城郭等復元整備事業として位置づけ、事業が推進された。

また、昭和59年（1984）には旧琉球大学キャンパスが城内からの移転完了するとともに、内郭4.2haが建設省所管の「ロ号国営公園」に指定され、国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）で復元整備することが閣議決定されるとともに、城郭外側の区域約14haが県営公園として位置づけられ、首里城跡の本格的な復元整備が始動した。



第1図　首里城跡の位置図と周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査地域

発掘調査を実施した地域は、首里城の正殿、南殿、北殿、奉神門等の中心的な建物群が位置する南側の料理座や大台所等が在した郭の外郭石積みの南側斜面一帯で、継世門西側にあたる地点である（第２図・網点部）。

第Ⅰ章第1節でも述べたように、調査の契機が崎山交差地点からわずかばかり東行した地点から内郭地区の国営公園への管理用車輌や緊急車輌等の出入ための道路附設であったことから、入り口部の外郭石積み付近では対向車輌のすれ違い等と関係から若干幅広となり、南西部の崎山交差点付近ではやや幅狭となった、東西に長い不定形をなしている。

調査地点の地籍と対象面積は、下記の通りである。

那覇市首里当蔵三丁目１番　　約1,280㎡

発掘作業は、1997年９月１日より着手し、翌1998年２月28日までの延べ181日間にわたって行った。

調査対象地は、北側の内郭地区から外郭石積みを経て、約50～60度程の傾斜をなした斜面部と、斜面部裾部に広がる若干の平坦部である。この平坦部一帯には、旧琉球大学時の木造による学生のサークル棟などがあったらしく、調査区東側寄りにはフーチン基礎が一部に残存していた。

一帯は昭和53（1984）年の大学が新キャンパスへ移転完了するとともに荒撫地と化し、調査着手時には牧草やススキ、ギンネム等の雑草木が繁茂した状態にあった。

このようなことから、作業は初めに重機（バックホー）により、これらの除去作業から着手した。また、これと併行して、比較的平坦でかつまた雑草木の繁茂が少なかった対象地の北辺と南辺部に２×２ｍ及び３×３ｍの試掘穴を12箇所程設け、堆積土層等の確認調査を行った。

第２節　調査区の設定

グリッド設定は、対象地のほぼ中央部付近を南北の９ラインとし、そのほぼ中央部に位置する箇所をＥ列とした、４×４ｍのグリッドを対象地全域に組んだ。

南北にＢ～Ｇ列、東西に１～17列を設定し、各グリッドはこれらのアルファベットと数字を組み合わせて用いることにした。そして、各グリッドの示準は、北西隅の交点で示した。

その後、基本的な堆積土層を把握するために、対象地の西側部の３列にて南北方向に、南側部のＥで東西方向へのＴ字状のトレンチを設定し、試掘調査では把握できなかった本体部分の堆積土層等の確認を行った。

その結果、概して表土下20㎝前後までは表土・腐植土層で、その下位に比較的薄い遺物包含層が確認され、地山の琉球石灰岩の岩盤及びその風化土壌である赤土(島尻マージ層)へ移行して行く状況を呈していることが判った。

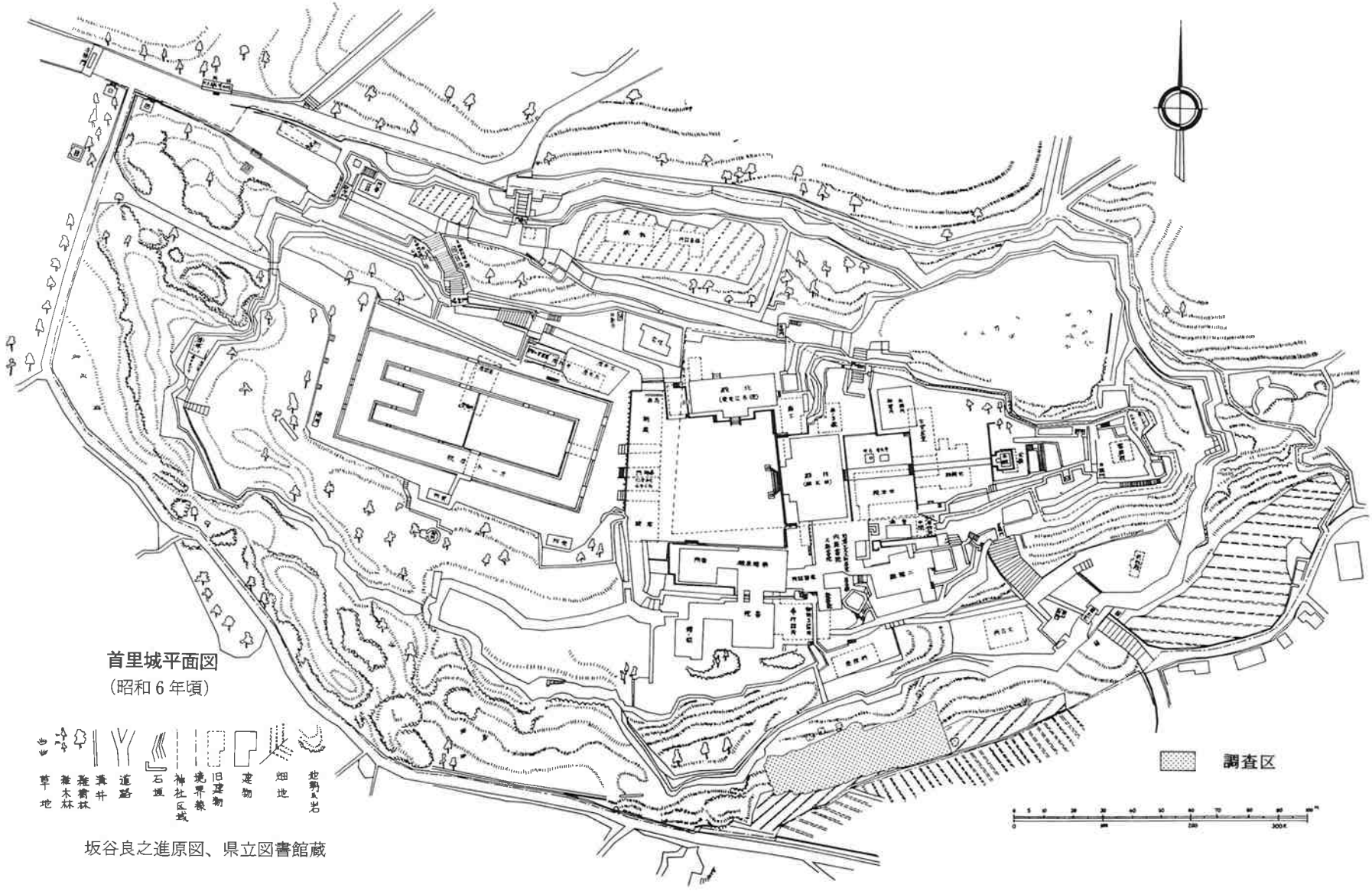
このため、本来ならば表土・腐植土層はバックホー等の機械力を導入して除去する必要があり、導入が可能な平坦部は機械力により実施したものの、対象地面積の約８割以上を占めている斜面部は技術的に不可能であったゆえ、人力作業で実施せざるを得なかった。

堆積土層の全体的な状況としては、北側から南側にかけて傾斜をなしているうえ、琉球石灰岩の岩盤が対象地のほぼ全域に広がっており、岩盤間等の凹部は堆積層が比較的厚かったものの、露頭岩あるいは表土・腐植土層を除去した段階で岩盤が露出した箇所では薄い堆積をなしていた。このような状況等からして、次章第１節でも述べているように、斜面部における堆積状況は、本来的な堆積ではなく、内郭地区からの投棄等によるものであろう、と推した。

その後、2～３列間隔で土層観察用の畔（セクションベルト）を設け、各グリッドごとに基本的には10㎝レベルで掘り下げながら発掘調査を進行して行った。また、調査区の各所において、戦時中のものと見られる大きく掘削された撹乱土壙や、西側寄りにおいて所謂「タコ壺」と称される屈曲した横穴状の遺構が検出された。

所謂「タコ壺」については丹念に調査を行い、写真記録にも収めたが、撹乱土壙については、現代遺物等の後世のものと見られるモノ等の混入も確認され、明らかに撹乱されていることが判明していたため、調査の進行等もあり、鍬により掘り下げた。

全体的な作業としては、廃土置き場が東西両側の調査区外にしか確保できなかったため、常に中央部付近を先行して進め、それから東西方向へと進行させて行った。



坂谷良之進原図、県立図書館蔵

第 2 図　首里城平面図

第Ⅳ章　層　序

第Ⅲ章の「調査の概要」でも述べたように、調査地区はその８割余が40～60度程の傾斜地形をなしているうえ、琉球石灰岩の露頭岩、若しくは表土・腐植土層を除去すると、琉球石灰岩が露出するという状況にあった。

このようなことから、琉球石灰岩の露頭岩、あるいは表土・腐植土層を除後、琉球石灰岩の露出が見られない箇所においては、表土・腐植土層下に遺物を含んだ黒褐色の土層が見られたものの、層厚も一応でなく、差異がある。

概して、堆積土層の基本層位はⅠ～Ⅱ層の２枚であるが、場所によってはⅡ層の細分が可能で、Ⅱａ・Ⅱｂ層、若しくはⅢ層に分層される。

このように、基本的にはほぼ同様の堆積状況を示すが、第４図に図示したように、Ｂ～Ｄ-２・６グリッド及びＣ～Ｄ-10グリッド、Ｂ～Ｃ-16グリッドの傾斜地区とＥ-６・10グリッド、Ｄ～Ｆ-16グリッド及び第６～８試掘穴が所在している平坦地区とは堆積状況が若干異なる。このため、傾斜地区及び平坦地区と仮称し、各々の層の状況について述べる。

傾斜地区

Ⅰ層＝　表土・腐植土層である。濃茶褐色を呈し、赤土（マージ）混じりの土層である。層厚は厚くなく、基本的には平鍬等を使用した人力による除去後、直ぐにⅡ層に達するが、場所によっては琉球石灰岩に達する。

上方の内郭地区に在していた旧琉球大学時に投棄されたと思われるガラス瓶や空き缶などが比較的多量に検出されるとともに、露頭岩の岩陰などの湿潤な所に生息後、自然死した陸産マイマイの殻が多く見られた。

これらに伴って、陶磁器を主体とした人工遺物なども比較的多く出土した。

Ⅱ層＝　拳大から親指大ほどの琉球石灰岩礫を比較的多量に含んだ黒褐色土層である。当該層は基本的には単一層であるが、場所によってはⅡａ・Ⅱｂ層、若しくはⅢ層に細分可能である。しかし、出土遺物等からして特に大きな時間差は見られない。

層の分布状況としては、琉球石灰岩の凹地、若しくはその間隙部に比較的厚い堆積を見せるが、概してさほど厚くない。このようなことからして、プライマリーな堆積を呈している状況としては捉えられず、全体として上方の内郭地区からの投棄、あるいは流入堆積したものであろう。

出土遺物は、貝類を主とした食料残滓や陶磁器などの人工遺物が比較的多く見受けられる。

Ⅲ層＝　基盤の赤土（マージ）層である。当該層に第二次世界大戦時に掘り込まれたと思われる所謂「タコ壺」と称される屈曲した横穴状の遺構が検出された。

平坦地区

第６及び第８試掘穴断面図に見られるように、土質等の差異により４～５層に細分されるが、当該地区も第７試掘穴南壁に見られるように、基本的には地山も含めてⅠ～Ⅲ層の３枚が基本層位をなしている。

Ⅰ層＝　表土・腐植土層である。第７及び第８試掘穴一帯は、調査着手前まで畑地として利用されていたことから、土質等により細分可能である。

Ⅰａ：粘性の強い褐色土である。

Ⅰｂ：粘性はほとんどなく、どちらかと言えば乾燥した土質である。濃茶褐色を呈す。

Ⅱ層＝　拳大から親指大ほどの琉球石灰岩礫を比較的多量に含んだ黒褐色土層である。基本的には単一層であるが、場所によっては細分されるところもあるものの、分けて記するほどの差異ではない。

出土遺物は、貝類を主とした食料残滓や陶磁器などの人工遺物などが見受けられるが、さほど多くはない。

Ⅲ層＝　基盤の赤土（マージ）層である。東側一帯には、当該層に旧琉球大学時のサークル棟のフーチングやゴミ捨て用の穴が掘り込まれ、現代遺物が比較的多く出土した。

第Ⅴ章　遺　構

第１節　石敷遺構

本遺跡より検出された遺構には、第５図に示したように、石敷遺構が１基ある。

石敷遺構は、調査区南西方向に位置するＥ－８～９、Ｅ・Ｆ～10・11、Ｆ12グリッドにまたがった地点で検出された。

一帯は、調査区の８割強を占める琉球石灰岩台地の広がりが途切れた裾部にあたる平坦地形をなした地点で、これらの石灰岩土壌である赤土（マージ土）が堆積しているところである。この赤土（マージ土）は、さらに南および東西へ延びており、調査区外へも当該遺構が広がっている可能性は十二分に予測される。

当該遺構の北東方の平坦部には旧琉球大学時のサークル棟などが建っていた場所で、建物のフーチングが、北西部には送水用のマンホールが残存していた。

遺構は、Ⅱ層の層厚10～25cm程の黒褐色土層を掘り下げた赤土（マージ土）のほぼ直上面において確認、検出された。

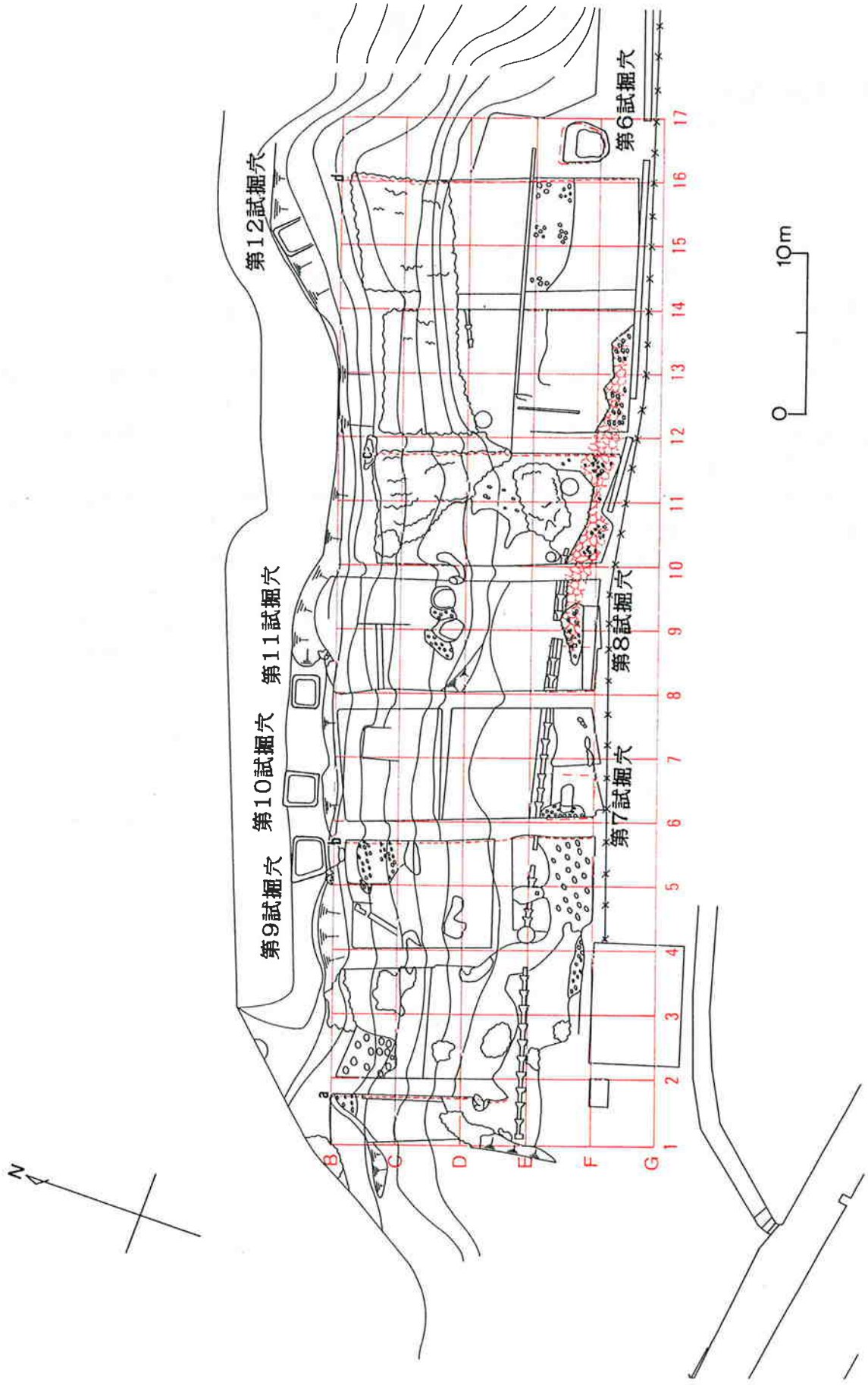
平面形態は、東西に延びた北辺部が凹凸状を呈した不正な形状を呈しているが、さらに調査区外の南側へも延びていることは明白である。

検出面全面に拳大ほどの琉球石灰岩礫を敷き詰めている。従横断面からも判るように、敷き詰められた礫群は一部に二重、あるいは三重に敷き詰めた箇所も見られたが、基本的には一重である。

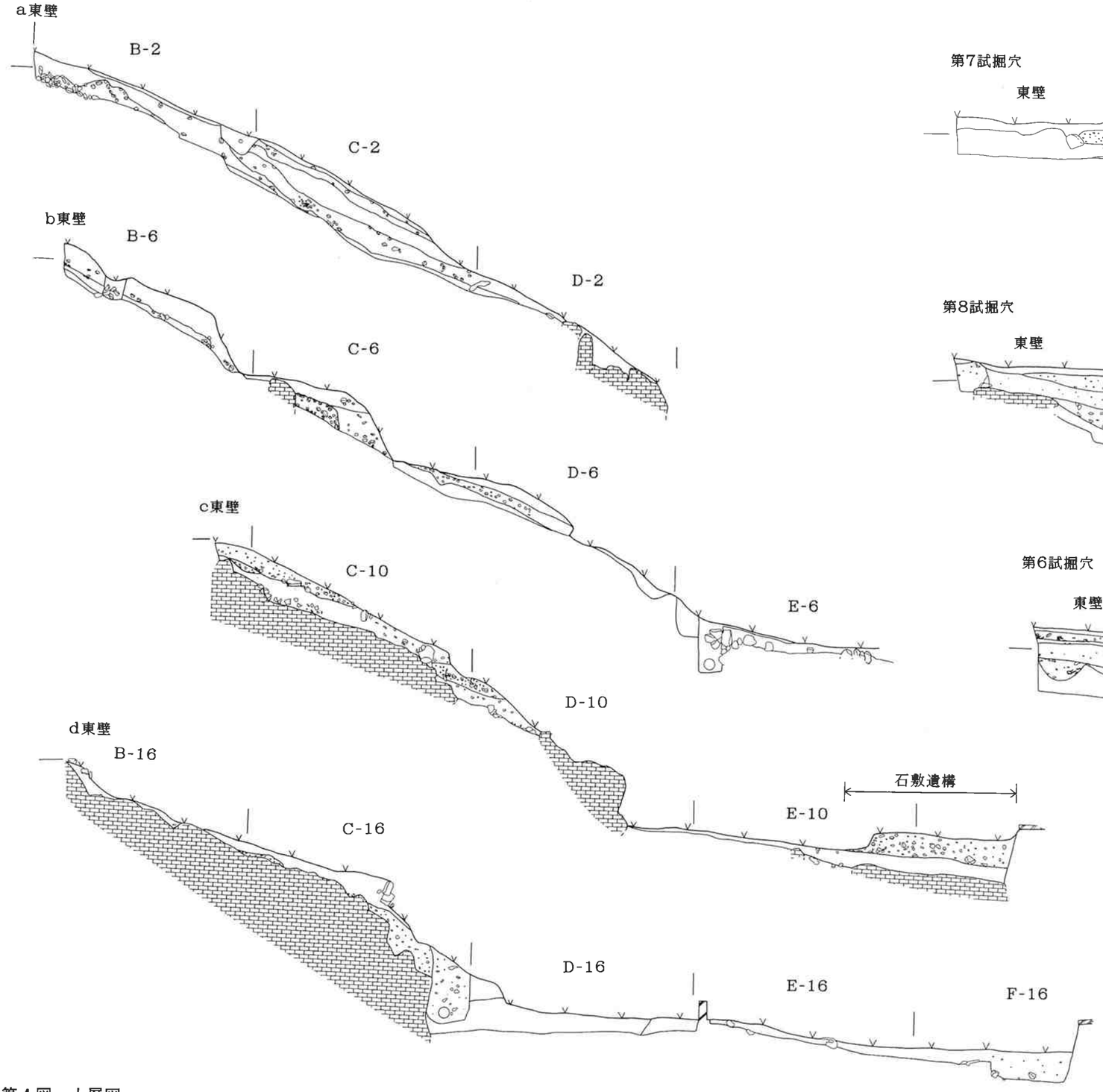
そして、その上面はほとんど凹凸がなく、ほぼ平坦面を呈している。なお、石敷内には、ピット等などの掘り込みなどは全く見られなかった。

石敷内からは、さほど多くはないものの、陶磁器等の遺物も検出されていが、砕片が多く、遺構の時期を特定できるものは少ない。したがって、近世（18Ｃ以降）のものが主体を占めていることから、概ね当該時期に構築されたものと推測される。

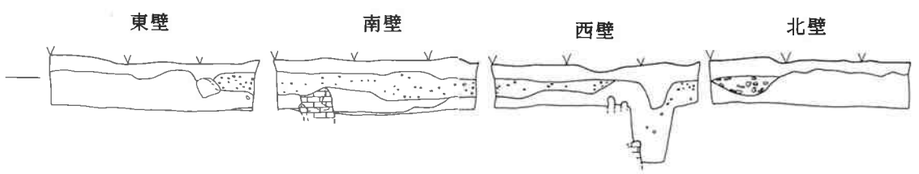
遺構の残存形状、検出状況等から当該遺構の性格、機能などについて総合的な検討を行った結果、未だ十分な検討の余地を残されているが、現状からして古道的な性格を有していたものであろう。



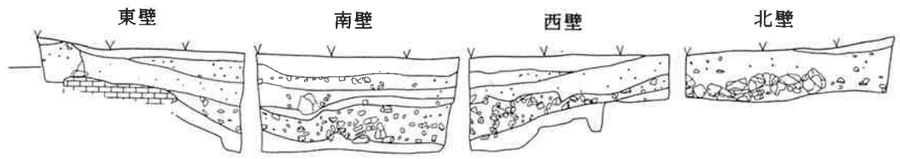
第３図　調査区の設定



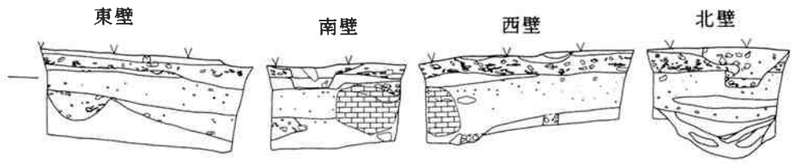
第7試掘穴

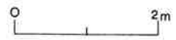


第8試掘穴



第6試掘穴





第4図　土層図

G7-G8横断図
G5-G6横断図
G3-G4横断図
G1-G2縦断図
G1-G2との交点
G3-G4との交点
G5-G6との交点
G7-G8との交点
G1
G2
G3
G4
G5
G6
G7
G8
P2
マンホール跡
客土
EL=113.00m
EL=112.00m
X=23530.00
Y=22158.00
X=23524.00
Y=22138.00
0
2m

第5図　石敷遺構

第Ⅵ章　出土遺物

本管理用道路地区から青磁（中国）、白磁（中国）、染付（中国）、釉裏紅・鉄釉染付・青磁染付（中国）、褐釉陶器（中国・タイ）、タイ産半練、中国産無釉陶器、黒釉陶器、瑠璃釉、中国産色絵、彩釉陶、ベトナム産磁器、銅緑釉、本土産染付、本土産色絵、本土産印判手、本土産陶器、南島須恵器、土器、陶質土器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦器、塼、瓦、円盤状製品、石製品（硯・砥石・人形）・石造製品（石柱・欄干の羽目板）、古銭、鉄製品、銅製品、玉、簪、陶製人形、土錘、煙管、骨製品（ハブラシ・骨製品）、貝類遺存体、節、脊椎動物遺存体などが出土した。特筆すべき遺物として本土産陶磁器・初期鍋島や県下で初めてサル骨が出土した。以下に報告する。

第1節　青　磁

青磁

本地区の青磁は総数1073点が出土した。完形品の出土は無く、全て破片であるが、うち10点は口縁から底部まで残し、復元が可能なものであった。

器種別には碗、皿、鉢、杯、壷、瓶、馬上杯、花盆台、香炉、形象物、器種不明、の10種1不明が得られた。

これらはそのほとんどが龍泉窯系の青磁であり、時代的には概ね13～16世紀に位置づけられる。

以下に、その概要を述べるが、その分類にあたっては、基本的には上田1982に準拠するものである。（註）

碗　（第6～9図、図版10～13）

青磁の碗は総数682点が出土し、復元可能なものが7点含まれる。

口縁部は直口、外反、玉縁タイプがある。底部はラマ式蓮弁文碗と無文碗の一部に蓮子心を示すものがある他はフラット若しくは饅頭心ぎみのフラット状をなすものが多い。高台の形状は断面が四角形状の短い高台をなすもの、同様に四角形状をなすものの、比較的高い高台を持つもの、高台畳付の側面を三角に削り出すもの、さらには型成形によるものも数点ある。釉の広がりは高台外面まで釉が掛かり畳付を含めて外底面が無釉のもの第6図3～5、第8図10・11高台内面途中まで釉がかかるもの第6図6・12・13、第7図8・10、8図1・20、第9図6・7・13、全面に施釉後外底面の釉を輪状に削り取るもの第6図11・14～16、第7図1・7・9、第8図12・13、高台外面の途中まで釉のかかるもの第8図9・19、第図5・15・20がある。また、第9図5・15のように、内底面を露胎させるものもみられた。

文様は蓮弁文、雷文帯、草花文、弦文があり、外体面に片切彫り、箆描き、線描き、印花により施文するものがほとんどである。内体面への施文率は13.8％で、片切彫りの雷文帯、ヘラ描きの草花文、印花文を施すものである。また内底面に施文するものは、印花文が殆どで43点あった。

碗Ⅰ　蓮弁文碗　（第6、7図1～7・11～15、図版10・11）

ほとんどが無鎬蓮弁文であるが、鎬蓮弁文も僅かではあるが6図1～5に示したものを含め6点が出土している。3、4、5は内底面に幅広の圏線を巡らし、腰部に僅かな屈曲を持つ、高台の低い断面が四角形を示す底部資料であり、鎬蓮弁文碗の底部と考えられものである。

無鎬蓮弁文は片切り彫りによるものと、線描きによるものとあり、片切り彫りにより施文するものは肉厚の蓮弁文と粗略な幅の広い蓮弁文と、ラマ式蓮弁文とある。肉厚タイプの中には丁寧な造りで鎬蓮弁タイプに属するものか判断に迷うものがあった。15、16がそれである。これらは蓮弁文を二段に施し、その間に何条かの横線文で画するものである。線描蓮弁の中には剣頭が蓮弁の単位を意識して施文される11、12と剣頭が斜位の短線に代わりもはや蓮弁としての単位を意識していないものや、剣頭を省略した13～15などがある。

無鎬蓮弁文を施すものは口縁が外反するものと、直口口縁がみられ、外体面に線描きの蓮弁文を施すものが総べて直口口縁であるのに対し、外体面にラマ式蓮弁文を施すものは端反り口縁で内体面にも文様を施すものがほとんどであった。

碗Ⅱ　雷文帯碗　（第7図16～22、図版11）

片切彫り、ヘラ描、印花により施文するものがある。いずれも口縁は直口をなす。また雷文帯のみで終始するも

の21と雷文帯下に蓮弁を組み合わすもの17、18、22や草花文を組み合わすもの19とある。19、21に示すような内体にヘラ描きの草花文を施文するものがやや多い。22は外体面に印花による雷文を施したもので内体面に印花による窓絵を施すものである。16に示すものは外反口縁を呈し、所謂、雷文帯とはやや異なるものである。口縁部に線描きの横線文を数条巡らし、その間に空白帯を設けたうえ、さらに横線で区画したものである。下段には蓮弁と思われる文様を施し、内体面に草花文を施文している。上田1982分類のC-1類に属するものと思われる。

碗Ⅲ　無文碗　（第８・９図、図版12・13）

無文玉縁の碗は13点で、無文口縁の中でも最も少なく、無文外反の碗は81点と最も多かった。また、無文碗の内底に施文するものがどの程度占めているかは口縁から底部まで残る資料が少ないため判然としないが、内底面有文は26点得られている。無文直口の碗は轆轤引きのものから型成形のものまで見られ、小碗も含み54点の出土があった。

第１表ａ　青磁碗観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

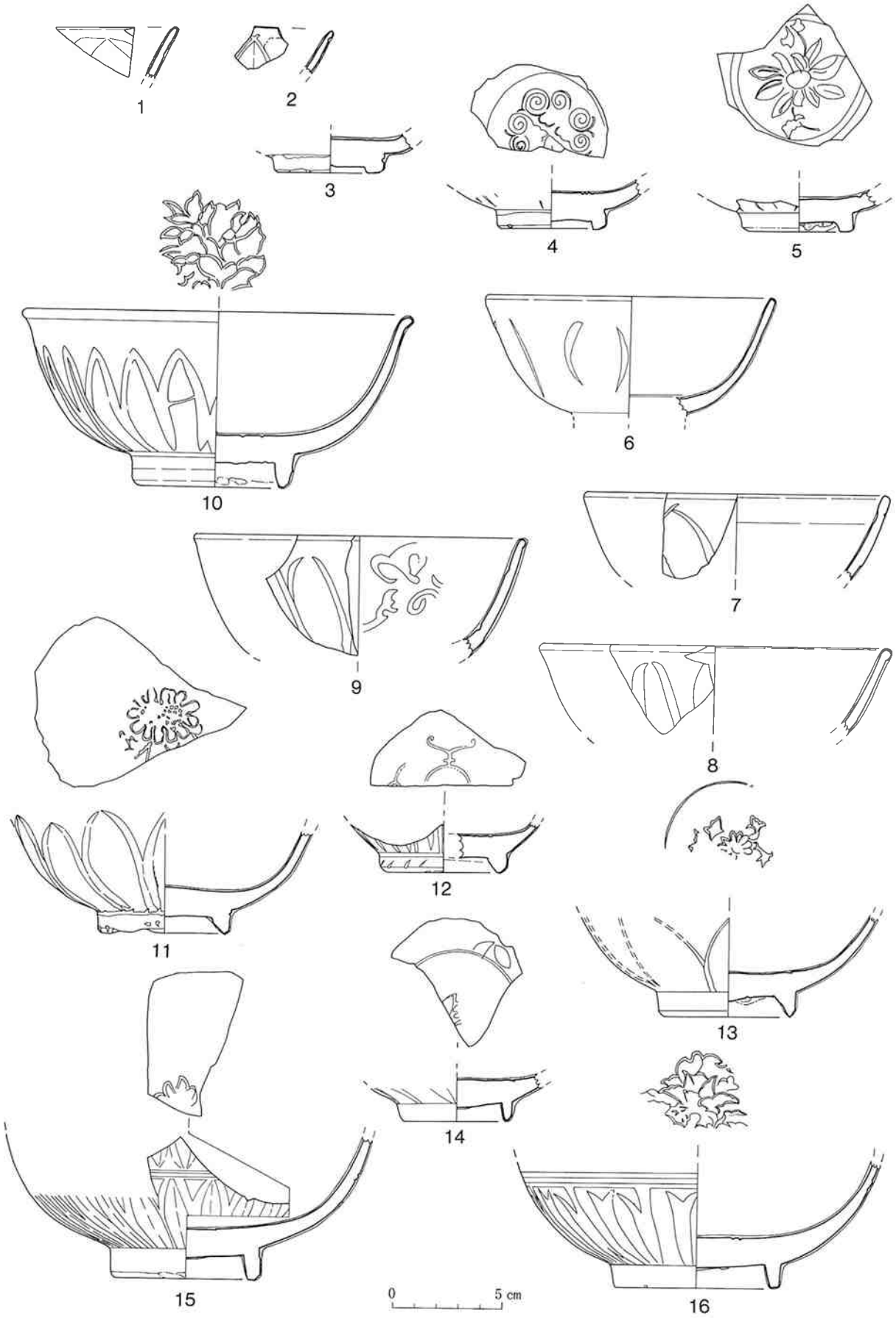
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第６図 図版３ 1	鏑蓮弁文碗	13c中～ 14c前半	-	-	-	淡灰緑	なし	口唇部が尖り直口口縁をなす。幅の広い鏑蓮弁文を施すものである。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 2		14c代	-	-	-	淡青緑	なし	口唇部に錆釉の覆輪を施す直口口縁である。外体面に弁先を箆描きにより表現する鏑蓮弁文を施文している。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 3		13c中～ 14c前半	-	-	5.0	淡灰緑	なし	鏑蓮弁文碗、底部と思われる。断面四角の低い高台を持ち外畳付を含め外底が無釉である。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 4		13c中～ 14c前半	-	-	5.0	淡　オリーブ	なし	鏑蓮弁文碗の底部、内底面に印花文を施す。断面四角の低い高台を持つ。畳付を含め外底無釉。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 5		13c中～ 14c前半	-	-	5.2	淡青緑	なし	鏑蓮弁文碗、底部である。内底面に幅広の圏線と印花文を施す。高台は断面四角形を示し釉は畳付けを含め外底が無釉になるものである。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 6	無鏑蓮弁文碗	14c後～ 15c前	13.3	-	-	オリーブ灰色	なし	口縁部が直口するもので片切り彫りによる弁先が開く幅広の蓮弁文碗である。	龍泉窯	C-9Ⅰ
第６図 図版３ 7		14c後～ 15c前	14.0	-	-	淡オリーブ色	なし	胴部から開きながら立ち上がり口縁が直口を成す。外体面に幅広の蓮弁文を片切り彫りで施している。	龍泉窯	4トレⅡ
第６図 図版３ 8		14c後～ 15c前	16.0	-	-	オリーブ灰色	なし	口縁部は直口を成し、片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施す碗である。	龍泉窯	4トレⅡ
第６図 図版３ 9		14c後半～ 15c前半	15.2	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が直口し口縁上部に凹線を廻らし。外体面に弁先の開く幅広の蓮弁文を片切り彫りで施す。内体面に片切彫りの草花文を施す。被熱を受けている。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 10		14c後～ 15c前	17.9	8.0	7.3	オリーブ	なし	口唇が玉縁状の丸み持つ端反り口縁である。幅広の蓮弁文を片切り彫りで施し、内底面に印花文を施す大振りの碗である。高台下部外面斜めの面取りを施している。釉は厚く施し、畳付けを越えて高台内面途中までかかるものである。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 11		14c後～ 15c前	-	-	6.0	淡灰緑	なし	幅の広い蓮弁を片切彫りで施文し、内底面に印花文を施す。高台は外面と高台内から斜めに削りだし、外面先端に刻みを施す。全面に施釉を高台内を蛇の目状に掻き取っている。	龍泉窯	B-6Ⅰ
第６図 図版３ 12		14c中～ 後半	-	-	5.8	淡緑色	粗い貫入有	片切彫りによる蓮弁文を施す碗底部である。内底面に印花文を施し高台は外面から三角形に削りだしている。畳付を含め外底無釉である。	龍泉窯	B-13Ⅱ
第６図 図版３ 13		14c後半～ 15c前半	-	-	6.2	淡オリーブ色	なし	外体面に片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施し内体面に草花文を施す。内底面見込みに圏線と印花文を施す。高台下部外面の斜めの面取りをし、釉は高台内途中までかかるものである。	龍泉窯	1トレⅡ
第６図 図版３ 14		14c後半～ 15c前半	-	-	5.1	淡緑色	なし	外体面に片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施し、内底面見込みに圏線と印花文を施す。釉を全面に施した後外底の釉を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	表採
第６図 図版３ 15		14c後半～ 15c前半	-	-	6.8	オリーブ	なし	片切彫りによる細長い蓮弁文を二段配置し、圏線で区画するものである。鏑蓮弁文なのか、釉が厚い為鏑の有無は明確でない。内底面見込みに印花文を施すものである。釉は全面に施した後畳付けと外底面を蛇の目状に掻き取っている。	龍泉窯	C-8Ⅰ

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第6図 図版3 16		14c後半～ 15c前半	-	-	7.5	オリーブ	なし	片切彫りにより碗腰部に弁先を表現しない蓮弁文を施し、蓮弁上位に二条の横線で区画するものである。内底面に印花文を施し、断面四角の高台を有する。全面に施釉後高台内を蛇の目状に掻き取る。大型の碗である。	龍泉窯	表採
第7図 図版4 1	ラマ式蓮弁文碗	15c前半～ 15c中	18.1	9.0	8.0	オリーブ	貫入有	体部に膨らみを持たせながら立ち上がり口縁によって端反り、口唇部を丸くおさめるものである。外体面に片切彫りによるラマ式蓮弁文を有し内体面に草花文、内底面見込みに圏線と印花文を施すものである。釉は厚く全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである。比較的大振りの碗である。	龍泉窯	表採
第7図 図版4 2		15c前半～ 15c中	14.3	-	-	淡灰緑	なし	"端反り口縁を呈し端部を丸くおさめるもので、外体部に片切り彫りによるラマ式蓮弁文を有し内体面に草花文を施すものである。"	龍泉窯	表採
第7図 図版4 3		15c前半～ 15c中	17.2	-	-	オリーブ	なし	口縁部は端反り、口唇端部を丸くおさめるものである。外体面に片切り彫りによるラマ式蓮弁文、内体面に草花文を施している。	龍泉窯	1トレⅠ下部
第7図 図版4 4		15c前半～ 15c中	19.4	-	-	淡灰緑	なし	端反り口縁を呈し、外体部に片切り彫りによるラマ式蓮弁文を施文し内体面に草花文を施すものである。	龍泉窯	B-5Ⅰ下部
第7図 図版4 5		15c前半～ 15c中	19.6	-	-	淡灰緑	なし	端反り口縁を呈する。外体部に片切り彫りによるラマ式蓮弁文を有し内体面に草花文を施すものである。	龍泉窯	表採
第7図 図版4 6		15c前半～ 15c中	22.0	-	-	淡灰緑	なし	端反り口縁を呈し、口唇端部を丸くおさめるものである。外体部に片切り彫りによるラマ式蓮弁文を有し内体面に草花文を施すものである。	龍泉窯	表採
第7図 図版4 7	無鎬蓮弁文碗	15c前半～ 15c中	-	-	4.9	淡青緑 灰色	なし	外体面に片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施し内底面見込みに圏線と印花文を施すものである。高台先端は外面から斜めの面取りをしている。釉は畳付けを越えて高台内面途中までかる。	龍泉窯	表採
第7図 図版4 8		15c前半～ 15c中	-	-	6.6	オリーブ	なし	内底面に印花文を施す底部資料である。釉は厚く全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取る。高台端部に刻みが見られる	龍泉窯	C-3Ⅰ
第7図 図版4 9		15c前半～ 15c中	-	-	6.3	淡灰緑	なし	外体面に蓮弁文を施し、内底面に圏線と印花文を施すものである。釉は厚く全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取る。	龍泉窯	TP-12Ⅰ
第7図 図版4 10		15c中～ 15c後半	-	-	5.4	淡青緑 灰色	なし	片切り彫りによる蓮弁文を外体面に施し、高台外面端部に刻み目を施す。内体面に片切り彫りによる草花文を施し、内体面見込みに印花文を施している。釉は高台内途中まで掛かり、外底面を露胎するものである。	龍泉窯	3トレⅠ
第7図 図版4 11		15c中～ 15c後半	-	-	-	淡灰緑	なし	口縁部は内彎ぎみに立ち上がり直口になるもので、外体面に線描きによる蓮弁文を施しているものである。	龍泉窯	TP-10Ⅰ
第7図 図版4 12		16c前半～ 16c中	-	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が直口の碗である。篦先による細描蓮弁文を施すが、剣頭が蓮弁としての単位を意識しないで施されているものである。	窯不明	表採
第7図 図版4 13		15c中～ 15c後半	13.8	-	-	淡青緑	なし	口縁部が開きぎみの直口になる碗である。外体面に篦先による細線の線描き蓮弁文を施すが、剣頭が省略され、蓮弁としての単位の意識を失ったものである。	窯不明	表採
第7図 図版4 14		15c中～ 15c後半	16.0	-	-	淡オリーブ色	貫入有	口縁部は開きぎみの直口碗である。外体面に片切り彫りによる線描き蓮弁文を施すものである。剣頭が省略され、蓮弁としての単位の意識を失っている。	窯不明	表採
第7図 図版4 15		15c中～ 15c後半	17.2	-	-	オリーブ 灰色	なし	胴下部に丸みを持ちながら真っ直ぐ立ち上がり口縁部が直口する碗である。外体面に二条の圏線を廻らし、細線による蓮弁文を施しているが剣頭は蓮弁としての単位の意識を失い斜線を配するのみである。	龍泉窯	1トレⅡ
第7図 図版4 16	雷文帯文碗	15c前半～ 15c中	-	-	-	淡青緑	なし	端反り口縁の碗である。外体面に篦描きの雷文帯風の四条の横線を配し、間を開け更に圏線を廻らしその下に蓮弁文を施すものである。内体面は片切彫りの草花文を施文している。	龍泉窯	E-13Ⅰ
第7図 図版4 17		15c前半～ 15c中	-	-	-	オリーブ 灰色	なし	内彎ぎみの直口口縁碗である。外体面は片切り彫りにより口縁上部に雷文帯を配し、その直下に蓮弁文を施文している。内体面は口縁上部に雷文帯を施すものである。	龍泉窯	表採
第7図 図版4 18		15c前半～ 15c中	14.2	-	-	淡灰緑	なし	直口口縁碗である。外体面は篦描きにより口縁上位に雷文帯を配し、その直下に蓮弁文を施すものである。	龍泉窯	B-5Ⅰ下部
第7図 図版4 19		15c前半～ 15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が直口の碗である。外体面は片切り彫りにより雷文帯と草花文を配するものである。内体面には草花文を施している。	龍泉窯	表採

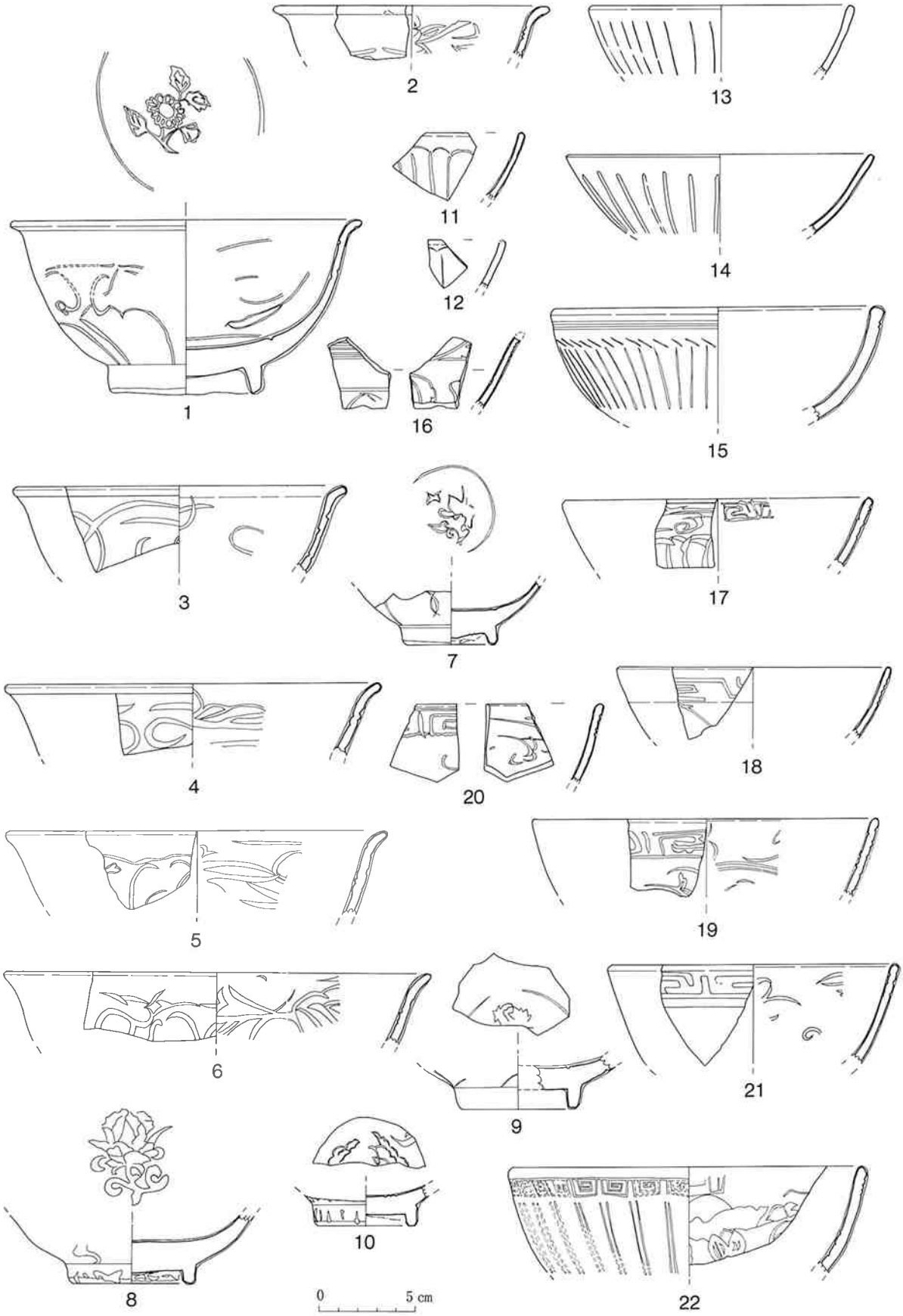
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第7図 図版4 20	雷文帯文碗	15c前半～15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	体部は幾らかふくらみ口縁で一端よって直口する。口唇先端は丸く納める。外体面に雷文帯と草花文を配し、内体面に草花文を施文している。	龍泉窯	4トレⅡ
第7図 図版4 21		15c前半～15c中	15.0	-	-	黄緑灰	なし	口縁部が直口する碗である。外体面は片切り彫りにより口縁上部に雷文帯を配し内体面に草花文を施している。	窯不明	B-8Ⅰ
第7図 図版4 22		15c 中 ～15c後半	18.3	-	-	オリーブ	なし	胴部から口縁部にかけて真っ直ぐ立ちあがる直口口縁碗である。外体面に印花の雷文帯と剣頭を省略した細描き蓮弁文を施し、内体面に印花文を施したものである。	龍泉窯	B-5Ⅰ
第8図 図版5 1	無文端反り碗	14c後半～15c中	15.5	6.8	6.2	淡オリーブ灰色	なし	体部にふくらみを持ちながら立ち上がり口縁部が外反をしめすものである。内外体面共に無文。外体面に轆轤目が顕著である。高台下部外面斜めの面取りし高台内途中まで施釉している。	窯不明	C-6Ⅰ
第8図 図版5 2		14c後半～15c中	16.2	-	-	オリーブ	なし	体部に僅かにふくらみをもちながら立ち上がり口縁部が外反りを呈するものである。内外体面共に無文。	窯不明	B-6Ⅰ
第8図 図版5 3		14c後半～15c中	14.7	-	-	オリーブ	なし	体部に僅かにふくらみをもちながら立ち上がり、端反り口縁を呈するものである。内外体面共に無文。	窯不明	表採
第8図 図版5 4		14c後半～15c中	15.5	-	-	オリーブ	なし	体部に僅かにふくらみをもちながら立ち上がり、端反り口縁を呈するものである。内外体面共に無文。	窯不明	5トレⅠ
第8図 図版5 5		14c後半～15c中	16.0	-	-	黄オリーブ色	細かい貫入	体部にふくらみをもちながら立ち上がり口縁部が外反し、口唇端部を丸おさめる。内外体面共に無文。	窯不明	B-5Ⅰ
第8図 図版5 6		14c後半～15c中	15.6	-	-	黄オリーブ色	なし	体部は真っ直ぐ立ち上がり口縁は外反し、口唇端部は丸くおさめている。内外体面共に無文。	窯不明	表採
第8図 図版5 7		14c後半～15c中	16.4	-	-	淡青緑	なし	体部は真っ直ぐ立ち上がり口縁は弱い外反を示す。内外体面共に無文。比較的釉は厚い。	龍泉窯	TP-10Ⅰ
第8図 図版5 8		14c後半～15c中	18.2	-	-	黄オリーブ灰色	細かい貫入有	体部は真っ直ぐ立ちあがり口縁は外に大きく折れるように外反する口唇端部は丸くおさめる。内外体面共に無文。	龍泉窯	B-6Ⅰ
第8図 図版5 9		15c前半～15c中	短17.6 長17.8	7.0	短7.7 長7.9	オリーブ	なし	"体部がややふくらみをもちながら立ち上がり口縁部が端反り口縁を成し口唇部は丸くおさめる。体面は無文で内底面見込みに印花文を施す,釉は厚く全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである。高台は断面四角形を呈する。大振りの碗である。"	龍泉窯	C-6Ⅱ
第8図 図版5 10		15c前半～15c中	14.2	-	-	淡青緑	貫入有	体部にふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部で外反し、口唇部を丸くおさめるものである。外体面に口唇部直下と口縁部下位に何条かの細線の圏線を廻らすものである。	窯不明	F-6･7
第8図 図版5 11		15c前半～15c中	16.2	-	-	黄緑灰	貫入有	体部に膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部によって外反ぎみの口唇部を呈しつつ端部を丸くおさめるもので、器の内外が無文のものである。	窯不明	B-13Ⅰ
第8図 図版5 12		15c前半～15c中	17.1	-	-	淡青緑	なし	体部は真っ直ぐ立ち上がり口縁部は僅かに肥厚し口唇部で外反する。内外体面共に無文。	龍泉窯	C-9Ⅰ
第8図 図版5 13		15c前半～15c中	17.3	-	-	黄緑灰	貫入有	いったん口縁部が内彎ぎみにより口唇部が外反するものである。内外体面共に無文。	龍泉窯	表採
第8図 図版5 14		15c前半～15c中	15.9	-	-	淡オリーブ色	貫入有	体部にふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部は口唇部で端反り端部を丸くおさめるもので、器の内外が無文のものである。	窯不明	表採
第8図 図版5 15	碗底部	14c後半～15c中	-	-	6.0	淡青緑	なし	内底面に印花文を施す碗底部である。高台が断面四角形を呈し、釉は高台外面まで施釉。畳付け及び、外底は露胎している。	窯不明	表採
第8図 図版5 16		14c後半～15c中	-	-	6.7	オリーブ	なし	内面見込みに印花文を施し高台外面まで釉がかかり畳付を含め外底が無釉になるものである。外体面無文。	龍泉窯	4トレⅡ
第8図 図版5 17		14c後半～15c中	-	-	5.9	淡灰緑	なし	内底面に印花文を施すものである。全面に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである	窯不明	1トレⅠ
第8図 図版5 18		14c後半～15c中	-	-	6.7	淡灰緑	なし	比較的大振りの碗で内底面に印花文を施すものである。高台は下部斜めの面取りが大きく釉は高台外面までかかり畳付けを含め外底無釉のものである。	窯不明	D-6Ⅲ
第8図 図版5 19		15c前半～15c中	-	-	6.0	オリーブ	なし	内底面に印花文を施すものである。僅かに高台下部外面に斜めの面取りを施している。釉は畳付けを越えて高台内途中までかかり外底が無文のものである。	窯不明	表採

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

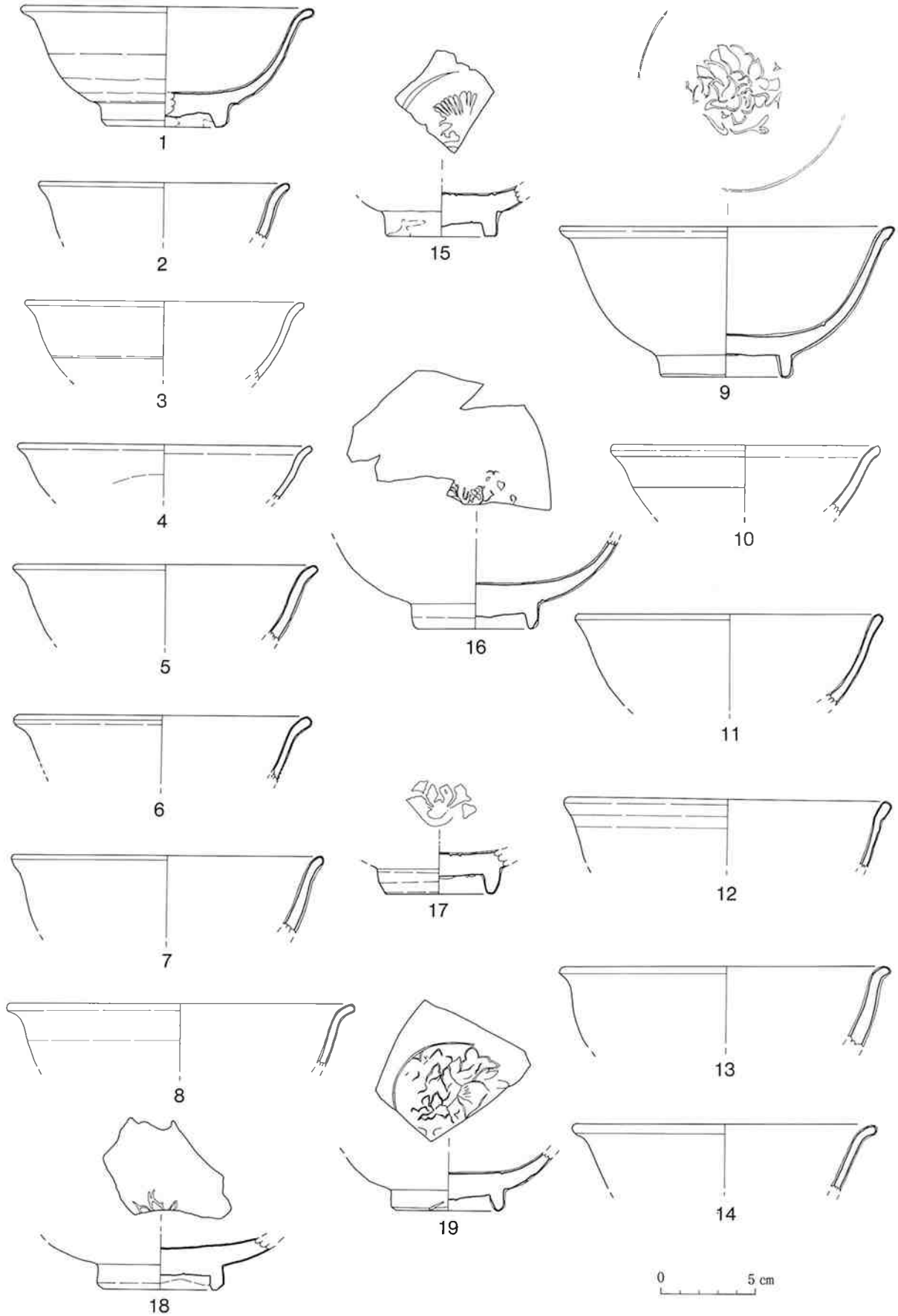
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第9図 図版6 1	玉縁口縁碗	15c前半～15c中	16.6	-	-	淡オリーブ灰色	なし	体部にふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部が玉縁を呈する。体部は無文である。	窯不明	表採
第9図 図版6 2	無文直口口縁碗	14c後半～15c中	-	-	-	淡青緑灰色	なし	口縁部が直口し、口唇部を平坦に整え錆釉の覆輪を施している。	龍泉窯	表採
第9図 図版6 3		15c中～15c後半	16.6	-	-	淡青緑灰色	なし	内彎ぎみに立ち上がる直口口縁である。外体部は無文。内体面は草花文を施すものである。	龍泉窯	表採
第9図 図版6 4		15c前半～15c中	14.9	7.4	6.5	オリーブ	なし	体部が内彎ぎみに立ち上がる直口口縁碗である。体部は無文で内底面見込みに印花文を施すものである。高台先端外面を面取りし釉は全体に施釉後外底の釉を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	表採
第9図 図版6 5		15c前半～15c中	15.0	7.7	6.2	淡灰緑	なし	口縁部がやや内彎する碗である。外体面上位に圏線を施し内体面は無文である。内底面見込みに印花文を施文するものである。高台外面先端を面取りしている。釉は全体に施釉後外底の釉を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	C-3Ⅰ
第9図 図版6 6	碗底部	15c前半～15c中	-	-	6.7	淡灰緑	なし	内底面に印花文を施し、内底面見込みを露胎させるている。高台外面まで釉がかかり畳付けを含めて外底無釉のものである。	窯不明	TP-6Ⅱ
第9図 図版6 7		15c前半～15c中	-	-	6.6	オリーブ	なし	内底面に印花文を施すものである。断面四角の高台を持ち高台内途中まで釉がかかるものである。	龍泉窯	表採
第9図 図版6 8		15c中～15c後半	-	-	7.0	オリーブ	なし	内底面に印花文を施すものである。細い高台を持ち高台外面端部を斜めに面取りしている。釉は畳付けを越えて高台内途中まで掛かり外底が無釉になるものである。	窯不明	3トレⅠ
第9図 図版6 9		15c前半～15c中	-	-	6.8	淡オリーブ灰色	なし	釉は厚く全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻きとるものである。断面四角形の高台を呈するものである。	龍泉窯	TP-3Ⅱ
第9図 図版6 10		15c前半～15c中	-	-	6.6	オリーブ	なし	内底面見込みに圏線を施している。内底面無文。高台はほぼ断面四角形を呈し、ほぼ全面に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取っている。	窯不明	B-5Ⅱ
第9図 図版6 11		16c前半～16c中	-	-	5.5	淡灰緑	なし	内底面に印花文を施した底部資料で、全面に施釉後外底の釉を蛇の目状に掻き取っている。	窯不明	4トレⅡ
第9図 図版6 12		15c～16c代	-	-	-	淡灰緑	なし	高台脇から腰にかけ錆釉を輪状に施すものである。小破片である為詳細不明。	窯不明	TP-11 Ⅰa
第9図 図版6 13		15c中～15c後半	-	-	6.0	淡青緑	なし	内底面が無文の底部資料である。細めの四角い高台を持ち全面に施釉後外底を蛇の目状に掻き取るものである。	窯不明	B-5Ⅰ
第9図 図版6 14		16c前半～16c中	-	-	5.2	淡青緑	なし	低めの高台を持ち高台内面途中まで釉がかかるもの。	窯不明	2トレⅠ
第9図 図版6 15		16c代	-	-	6.2	黄土緑	なし	無文碗の底部資料である。型造りによるものであり釉は全面に施釉後畳付けの釉を拭取ている。被熱を受けている。	窯不明	B-14Ⅰ
第9図 図版6 16	無文直口口縁碗	16c前半～16c中	11.9	6.3	4.5	淡青緑	なし	体部がやや開きぎみに立ち上がり口縁は直口する無文碗である。釉は高台外面までかかり、畳付けを含めて外底は無釉になる。また内底面見込みを露胎させる。小型の碗であるが、比較的器壁は厚く高台の高さはやや高めである。	窯不明	表採
第9図 図版6 17		16c代	11.4	-	-	淡青緑	なし	体部が直線的に立ち上がり、口唇部でやや内彎する直口口縁碗である。外体面の上位に幅広の凹線を施している。	窯不明	TP-3 Ⅰ黒土
第9図 図版6 18		16c代	10.0	-	-	淡灰緑	なし	口縁部がやや内彎する小振りの無文丸碗である。口唇端部を丸くおさめる。	窯不明	表採
第9図 図版6 19		16c代	9.6	-	-	淡灰緑	なし	口縁部がやや内彎する小振りの無文丸碗である。口唇端部を丸くおさめる。	窯不明	B-9Ⅰ
第9図 図版6 20		16c代	7.9	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が直口する小振りの無文丸碗である。口唇部は尖る。	窯不明	1トレⅠ
第9図 図版6 21	碗底部	18c前半～18c中	-	-	7.0	オリーブ	なし	内底面の釉を蛇の目状に掻き取り露胎させている。高台は外側に開き、外面端部に斜めの面取りを施している。釉は高台外途中まで掛かり畳付け及び外底面が無釉になるものである。	福建省広東省などの中国南部	表採



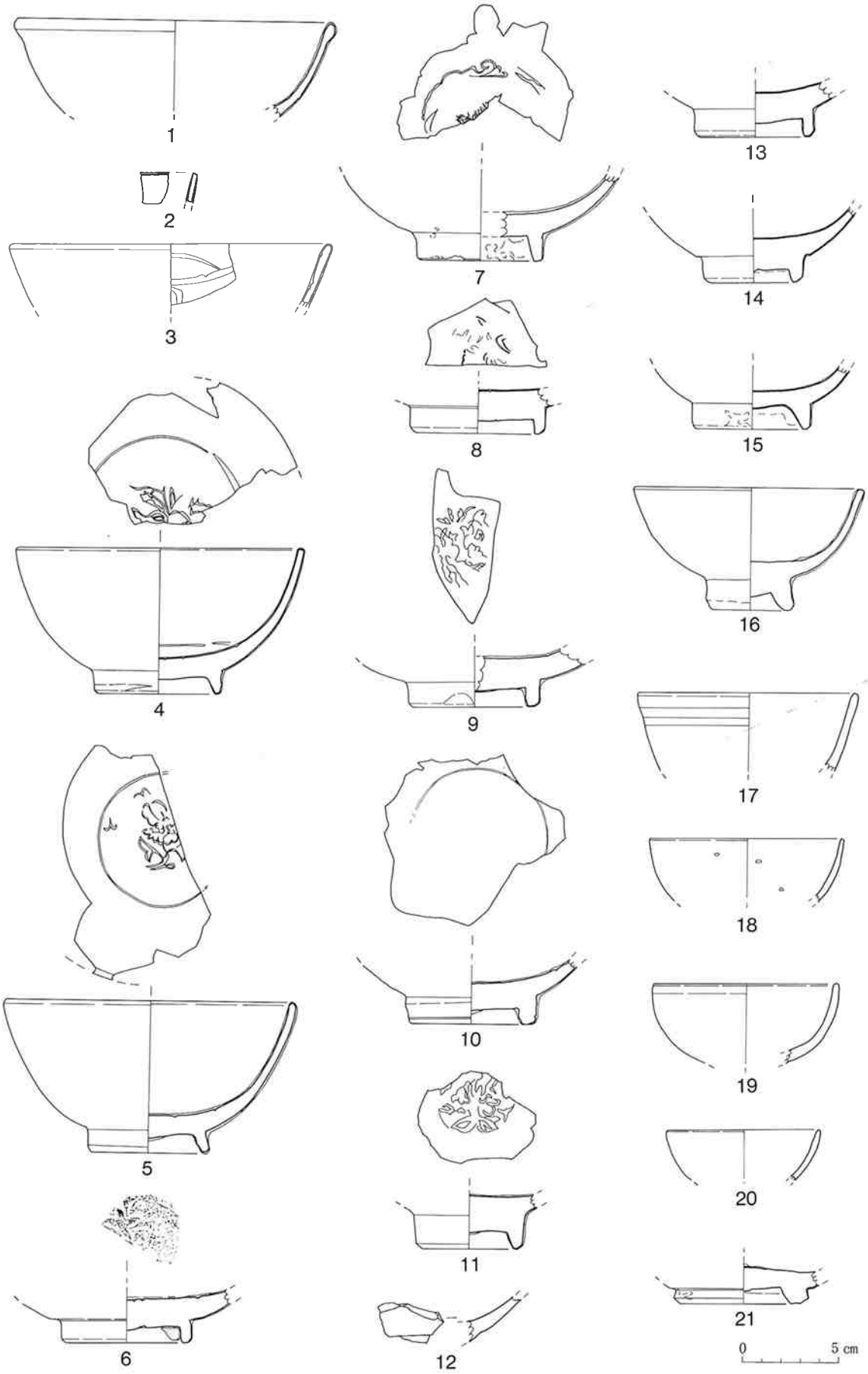
第 6 図　青磁 1（碗）



第 7 図　青磁 2（碗）



第 8 図　青磁 3（碗）



第 9 図　青磁 4（碗）

皿　(第10・11図、図版14・15)

総数136点が出土し、うち1点は復元が可能なものであった。口縁部破片には口折れ、外反、直口、玉縁、稜花、八角、がある。底部の形状は内底がフラットになるものが殆どであったが、やや饅頭心になるもの第10図４や、内底見込みを露胎させるもの11～13、碁笥底同図20などがある。第10図２、３は劃花文皿の底部と思われるものである。同図１は外体面に鎬蓮弁文、内体に劃花文を施す胴部資料である。

口折口縁は16点が得られた。外体面には蓮弁文が施されるが、無鎬蓮弁文を施すものが多く、鎬蓮弁文は僅かである。10図４・５に示したものは外体面に鎬蓮弁文を施すものである。４は鍔縁上面と内体面に草花文を施している。無鎬蓮弁文は片切り彫りにより施文され、幅の広い蓮弁文６～10がある。内体面は無文が多い。

外反の口縁は33点が得られた10図11・18～22。殆どが無文であったが、１点のみ有文のものがあった図11。口縁の外反は口折れに近い様な外反を示すものから、やや直口に近いものまで見られた。

直口口縁は11図１～４を含む７点が得られた。１・２に示したものは外体面に片切り彫りによる幅広の連弁文を施すものである。３・４は無文直口口縁である。

玉縁口縁は11図５に示す1点のみの出土であった。無文である。八角皿は口縁が1点出土している。11図21は八角皿の角部分を残すものである。内体面に十字の文様区画に雷文と雲文を施し、外体面は無文である。稜花皿は２点のみ出土した。11図22は口縁は外体面に上部に圏線を施し、内体面に草花文を施文している。

第１表ｂ　青磁皿観察一覧

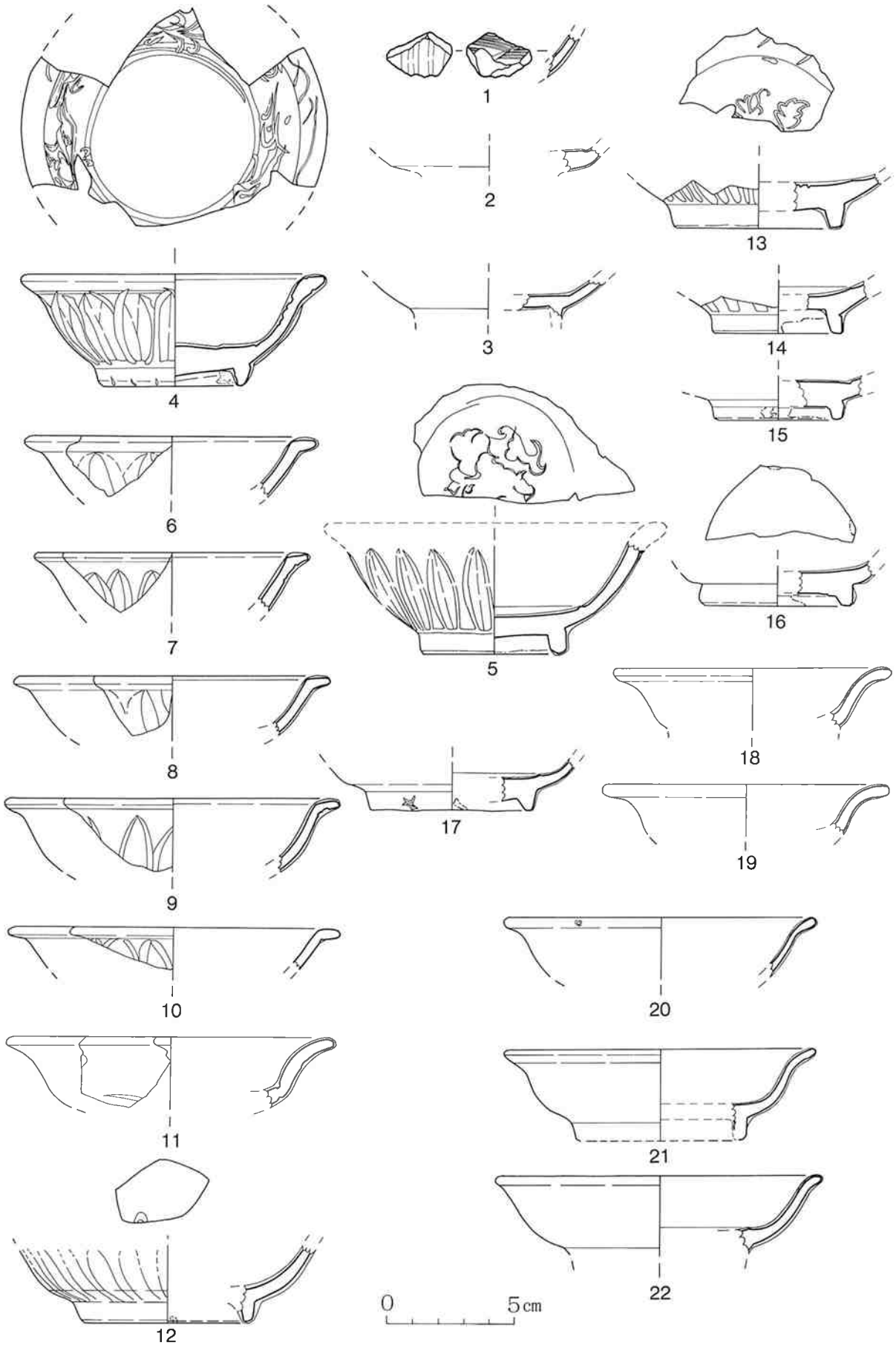
凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第10図 図版７ 1	劃花文皿	12c後～ 13c前半	-	-	-	淡青緑	なし	外体面に鎬蓮弁文を施文し内体に劃花文を施す皿胴部である。	龍泉窯	TP-3 Ⅱ0/1
第10図 図版７ 2		12c後～ 13c前半	-	-	-	淡灰緑	なし	劃花文を伴う皿胴部と思われる。腰部を屈曲させ開きながら直行するものである。内底面に凹線の圏線を施す。	龍泉窯	TP-3 Ⅱ0/1
第10図 図版７ 3		13c中～ 14ｃ前半	-	-	-	淡灰緑	なし	畳付けを除き総釉で、器の内外無文。 劃花文を伴う皿底部と思われる。	龍泉窯	TP-12 Ⅰ
第10図 図版７ 4	口折皿	14c中～ 14ｃ後半	11.8	4.4	5.7	淡ｵﾘｰﾌﾞ 灰色	細かい貫入	腰部に丸みをもち、直線的に体部をのばし口縁部を折れ口に仕上げるものである。鍔上面は平坦に整え沈線による流線文を施し外体面は片切り彫りによる肉厚な鎬蓮弁文を施し、更に内体面には草花文を施すものである。釉は高台内畳付けを越えて施釉し、外底面は無釉で露体している。	龍泉窯	4トレⅡ
第10図 図版７ 5		14c中～ 後半	-	-	5.7	淡ｵﾘｰﾌﾞ 灰色	貫入	鎬蓮弁文の碗底部である。細長い連弁を持ち釉が厚い。内底面に印花文を施し断面四角の高台を有し畳付まで施釉、高台内は露胎。	龍泉窯	E-13Ⅰ
第10図 図版７ 6		14c後半～ 15ｃ中	11.3	-	-	灰緑色	なし	体部は腰部に丸みをもちながら、直線的に立ち上がり口縁部を折れ口に仕上げるものである。外体面に片切り彫りによるやや幅広の蓮弁文を施し、内体面は無文である。	龍泉窯	B-6Ⅰ
第10図 図版７ 7		14c後半～ 15ｃ中	10.6	-	-	淡灰緑	なし	体部が直線的に立ち上がり口縁部を折れ口に仕上げるものである。外体面に片切り彫りによる蓮弁文を施し、内体面は無文である。	龍泉窯	B-5Ⅰ
第10図 図版７ 8		14c後半～ 15ｃ中	12.2	-	-	ｵﾘｰﾌﾞ	なし	体部は腰部に丸みをもちながら、直線的に立ち上がり口縁部を折れ口に仕上げるものである。外体面に片切り彫りによる蓮弁文を施し、内体面は無文である。	龍泉窯	TP-9Ⅰ
第10図 図版７ 9		14c後半～ 15ｃ中	12.9	-	-	ｵﾘｰﾌﾞ	なし	腰部に丸みをもちながら体部は直線的に立ち上る。口縁部を折れ口に仕上げ。外体面口縁の屈曲部に幅広の圏線をめぐらし、片切り彫りによる連弁文を施している。内体面は無文である。	龍泉窯	表採
第10図 図版７ 10		14c後半～ 15ｃ中	12.8	-	-	黄緑灰	なし	体部が直線的にのび、口縁部を折れ口に仕上げるものである。鍔上は平坦になり外体部に丸彫りによる蓮弁文を施す。内体面は無文。	窯不明	3トレⅠ
第10図 図版７ 11	有文外反口縁皿	15c前半～ 15ｃ中	12.6	-	-	淡灰緑	なし	腰部に丸みをもち直線的に体部をのばし、端反り口縁を呈するものである。内外体面	龍泉窯	表採

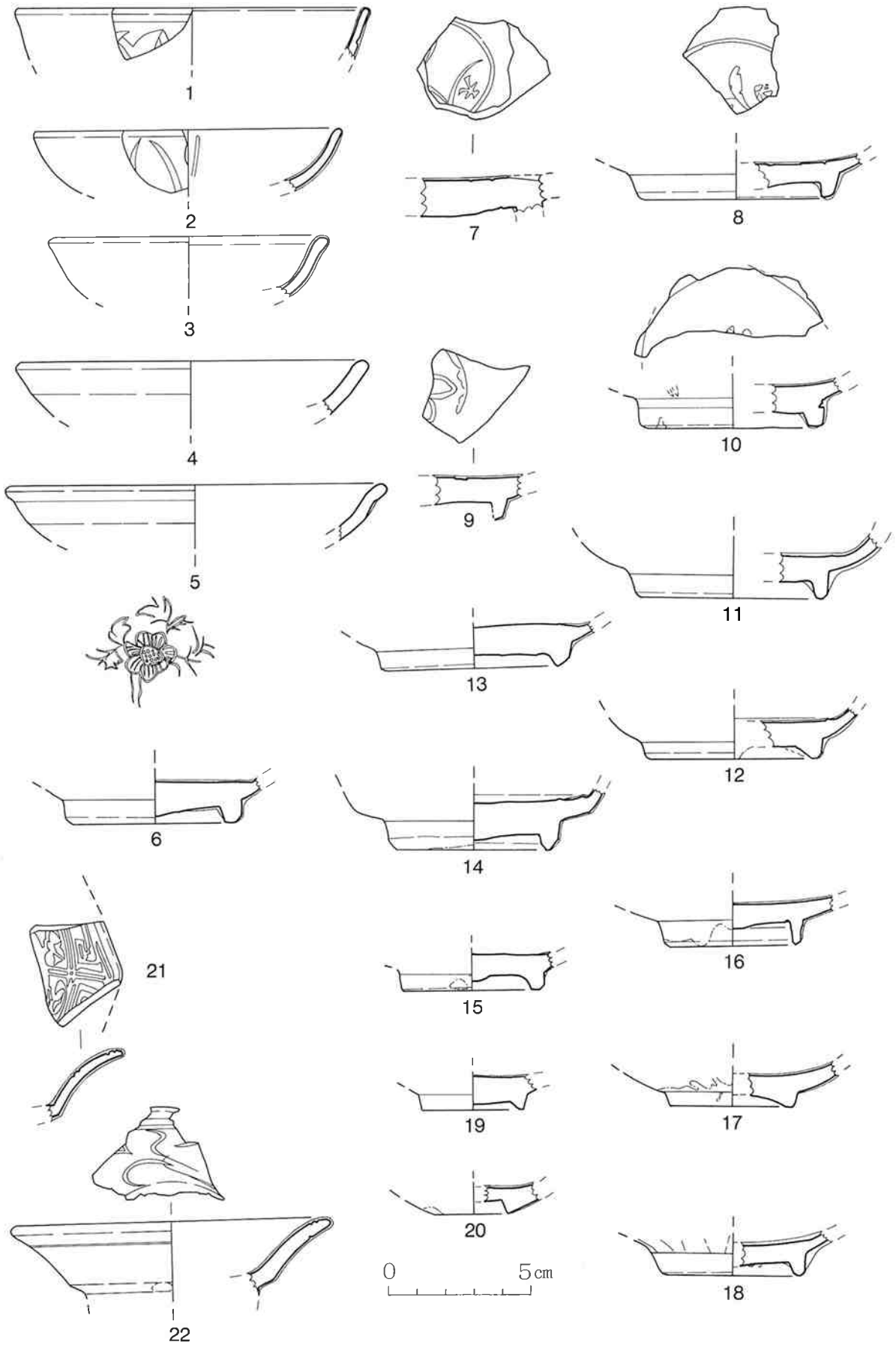
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第10図 図版7 12	皿底部	14c後半～15c中	-	-	6.6	灰緑色	なし	外体面に片切り彫りによる蓮弁文を施文し内底面に印花文を施すものである。	龍泉窯	表採
第10図 図版7 13		14c後半～15c中	-	-	6.6	灰緑色	なし	外体面に箆描きによる蓮弁文を描き、内底面に印花文を施すものである。器全体に施釉し外底面を蛇の目状に掻き取っている。内体面にも施文しているが小破片のため詳細不明。	龍泉窯	TP-6Ⅰ
第10図 図版7 14		14c後半～15c中	-	-	6.3	淡青緑	なし	内底面に凹線による圏線を巡らし、釉は全面に施し畳付けを拭取っている。外体面に蓮弁文を施文している。	窯不明	表採
第10図 図版7 15		14c後半～15c中	-	-	5.5	黄緑灰	なし	内底面に凹線による圏線と印花文を施している。高台の外面まで釉がかかり畳付けを含む外底面が無釉になるものである。	龍泉窯	TP-Ⅰa
第10図 図版7 16		14c後半～15c中	-	-	5.9	淡黄緑	なし	内底面に陽線の圏線を施す。釉は高台外面までかかり、畳付け及び外底面が露胎している。	窯不明	表採
第10図 図版7 17	無文外反口縁皿	15c前半～15c中	10.8	-	-	淡緑灰	なし	腰部に丸みをもち直線的に体部をのばし、口縁が外反するものである。器の内外体面。	龍泉窯	表採
第10図 図版7 18		15c前半～15c中	11.1	-	-	オリーブ	なし	腰部に丸みをもち直線的に体部をのばし、口縁が外反するものである。器の内外体面無文。	窯不明	B-5 Ⅰ下
第10図 図版7 19		15c前半～15c中	12.0	-	-	淡緑灰	なし	腰部に丸みをもち直線的に体部をのばし、口縁が外反するものである。器の内外体面無文。	窯不明	表採
第10図 図版7 20		15c前半～15c中	12.0	3.5	-	淡灰緑	なし	腰部に丸みをもち直線的に体部をのばし、口縁で外反するものである。器の内外体面。	龍泉窯	表採
第10図 図版7 21		15c前半～15c中	12.6	-	-	淡灰緑	なし	腰部に丸みをもちながら直線的に体部をのばし、口縁が外反するものである。器の内外体面。	龍泉窯	B-5 Ⅰ 下部
第11図 図版8 1	有文直口口縁皿	14c後半～15c中	12.4	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が直口の皿である。外体面に片切り彫りによる蓮弁文を施し、内体面は無文である。	龍泉窯	4トレⅡ
第11図 図版8 2		14c後半～15c中	10.8	-	-	オリーブ	なし	腰部が丸くなりながら、口縁部が直線的に立ち上がるものである。片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施すものである。内体面に線描きによる蓮弁文を施している。	窯不明	TP-11 Ⅰa
第11図 図版8 3		15c前半～15c中	9.8	-	-	淡灰緑	なし	腰部に丸みをもち、口縁部は直口口縁を成し口唇部は丸くおさめる。器の内外体面無文。	龍泉窯	表採
第11図 図版8 4		15c中～15c後半	12.2	-	-	緑灰色	なし	体部が丸く伸び口縁は、直口口縁である。器の内外面無文。	窯不明	表採
第11図 図版8 5		15c中～15c後半	13.2	-	-	淡灰緑	なし	体部が丸く、口縁部は直口口縁である。器の内外面無文。	窯不明	TP-9Ⅰ
第11図 図版8 6	皿底部	15c前半～15c中	-	-	6.2	淡オリーブ灰	なし	内底面に印花文を施し、釉は高台内途中までかかり外底が無釉になるものである。	龍泉窯	表採
第11図 図版8 7		15c前半～15c中	-	-	-	淡オリーブ灰色	なし	内底面に印花文を施す。釉は高台内途中までかかり外底が無釉になるものである。	龍泉窯	表採
第11図 図版8 8		15c前半～15c中	-	-	6.8	淡灰緑	なし	内底面に印花文を施す皿である。全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	表採
第11図 図版8 9		15c前半～15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	内底面に印花文を施す。釉は高台内途中までかかり外底が無釉になる。	龍泉窯	表採
第11図 図版8 10		15c前半～15c中	-	-	6.3	オリーブ	なし	内底面に印花文を施し、全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	TP-12 Ⅰ

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第11図 図版8 11	皿底部	15c中～ 15c後半	-	-	6.6	黄土緑	なし	内底面見込みを円形に露胎させるものである。高台の釉は畳付まで施釉し、外底面は無釉である。	窯不明	B-5Ⅱ
第11図 図版8 12		15c中～ 15c後半	-	-	6.0	黄土緑	なし	内底面見込みを円形に露胎させるものである。高台の釉は畳付まで施釉し、外底面は無釉である。	窯不明	表採
第11図 図版8 13		15c中～ 15c後半	-	-	5.0	黄土緑	なし	内底面見込みを円形に露胎させるものである。高台の釉は畳付まで施釉し、外底面は無釉である。	窯不明	C-8Ⅰ
第11図 図版8 14	皿底部	15c前半～ 15ｃ中	-	-	6.7	淡緑灰	なし	全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	表採
第11図 図版8 15		15c前半～ 15ｃ中	-	-	6.2	オリーブ	なし	高台内途中まで施釉。器の内外体面無文。	龍泉窯	TP-7. 6/9.5
第11図 図版8 16		15c中～ 15c後半	-	-	4.8	オリーブ	なし	釉は高台外面までかかり、畳付け及び外底面が無釉になるものである。	窯不明	4トレ Ⅰ黒土
第11図 図版8 17		15c中～ 15c後半	-	-	4.3	淡灰緑	なし	高台内が三日月状に整形され釉は高台ぎわまで施釉。	窯不明	4トレ Ⅰ黒土
第11図 図版8 18		15c前半～ 15ｃ中	-	-	5.0	淡灰緑	なし	全体に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	表採
第11図 図版8 19		15c中～ 15c後半	-	-	3.6	黄土緑	なし	小型の皿底部である。外底は無釉である。	窯不明	表採
第11図 図版8 20		15c中～ 15c後半	-	-	2.6	淡青緑	なし	底形が碁笥底をなすものである。釉は底部ぎわまで施釉。	窯不明	TP-9Ⅰ
第11図 図版8 21	八角皿	15c前半～ 15ｃ中	-	-	-	オリーブ	なし	口縁部を八角形に面取りし、腰部を屈曲させ直線的に体部を外側にのばし口縁部が外反を示すものである。内体面に角を中心とした十字の文様区画を設け上下段左右対称に篦描きの雷文と雲をそれぞれ配するものである。	龍泉窯	B-9Ⅰ
第11図 図版8 22	稜花皿	15c前半～ 15ｃ中	11.1	-	-	オリーブ	なし	口縁部を稜花に面取りしたものである。腰部を屈曲させ直線的に体部をのばし口縁部が外反するものである。内体面に篦描きの草花文を施し、外体面腰部に刺突文を施している。	窯不明	2トレ Ⅰb



第10図　青磁 5 （皿）



第11図　青磁６（皿）

盤　(第12・13図、図版16・17)

総数89点が出土し、鍔縁の盤37点、直口の盤４点、外反の盤１点がある。鍔縁は折れ口１と鍔の端部を上に摘み上げるもの12図８～12・13図１～３と、稜花になるもの12図３～５とある。内体に幅広の蓮弁文を施す12図３～５・７～12や櫛描きの蓮弁文を施文する13図１～３・８～10などが多く見られたが、ヘラ描きの草花文を施すもの13図５もある。同図６、７は体面が無文になるもので６は口縁内上位に一条の圏線を巡らしている。内底に印花文や貼花、片切り彫りによる文様を施すもの12図２・８・13。13図10・15があり、12図２は貼花龍文と思われる。

鉢　(第13図17～19、図版17)

大型の鉢になると思われるが、小破片であることから詳細は不明である。口折れになるもの17・18と直口をなすもの19がある。４点の出土であった。

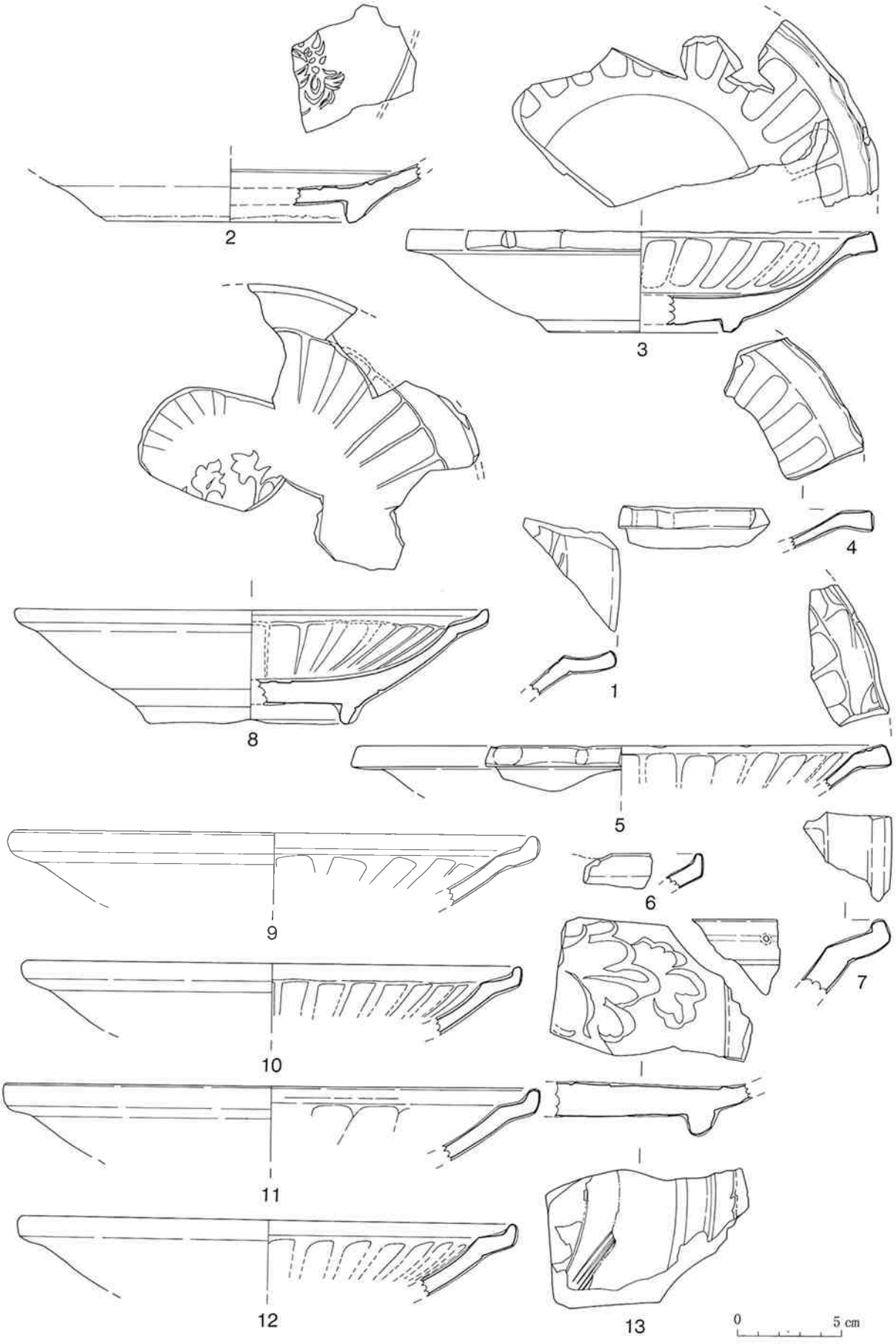
第１表ｃ　青磁盤・鉢観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

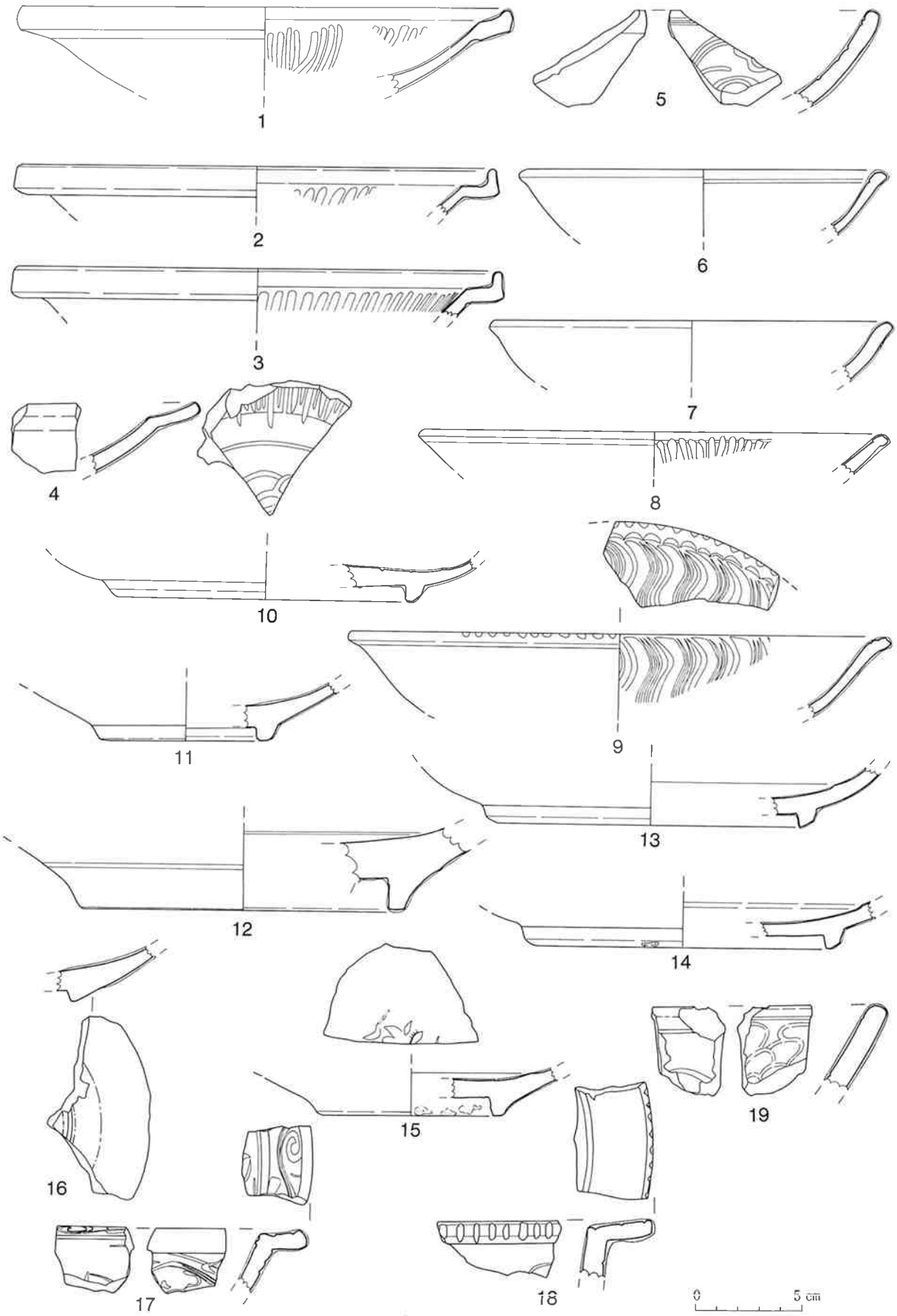
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第12図 図版９ 1	鍔縁盤	13c中～ 14c前半	-	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が鍔縁状をなし、鍔上面は浅く窪む盤である。内体面に片切り彫りによる彫花文が施されている。	龍泉窯	表採
第12図 図版９ 2		13c中～ 14c前半	-	-	13.0	灰黄緑	なし	内底面に貼花龍文を施す盤底部である。釉は高台外面から畳付けを含む高台内面途中を露体させ器全体に施釉している。	龍泉窯	表採
第12図 図版９ 3		14c後半～ 15c中	23.0	4.9	9.0	灰黄緑	貫入	口縁部は鍔縁状をなし、鍔端が稜花を示すものである。鍔上面には片切り彫りによる稜花文を施し、内体面に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。外体面は無文である。釉は高台内面までかかり外底面が無釉になるものである。	龍泉窯	B-5 Ⅰ 下部
第12図 図版９ 4		14c後半～ 15c中	-	-	-	灰黄緑	貫入	口縁部は鍔縁状をなし、鍔端が稜花を示すものである。鍔上面には片切り彫りによる稜花文を施し、内体面に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。外体面は無文である。	龍泉窯	表採
第12図 図版９ 5		14c後半～ 15c中	26.2	-	-	灰黄緑	貫入	口縁部は鍔縁状をなし、鍔端が稜花を示すものである。鍔上面には片切り彫りによる稜花文を施し、内体面に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。外体面は無文である。	龍泉窯	表採
第12図 図版９ 6		15c前半～ 15c中	-	-	-	黄土色	細かい貫入	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げ更に、端部を稜花に仕上げた盤である。	窯不明	TP-6Ⅲ
第12図 図版９ 7		14c後半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。	龍泉窯	表採
第12図 図版９ 8		14c後半～ 15c中	23.0	5.5	10.1	オリーブ	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に幅広の凹線による蓮弁文を施し、内体面に印花文を施している。釉は器全体に施釉後、外体面を蛇の目状に掻き取っている。	龍泉窯	表採
第12図 図版９ 9		14c後半～ 15c中	25.8	-	-	オリーブ	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。	龍泉窯	3トレⅠ
第12図 図版９ 10		14c後半～ 15c中	24.4	-	-	淡オリーブ 灰色	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。	龍泉窯	TP-9Ⅰ
第12図 図版９ 11		14c後半～ 15c中	26.0	-	-	淡オリーブ 灰色	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。	龍泉窯	表採
第12図 図版９ 12		14c後半～ 15c中	24.2	-	-	淡灰緑	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に幅広の凹線による蓮弁文を施すものである。	龍泉窯	C-8Ⅰ
第12図 図版９ 13	盤底部	14c後半～ 15c中	-	-	-	黄オリーブ色	なし	陽圏線と片切り彫りによる牡丹文を施す盤である。釉は高台内まで及ぶが、内底面中央は露体している。	龍泉窯	表採
第13図 図版10 1	鍔縁盤	15c前半～ 15c中	23.4	-	-	淡灰緑	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に４本の櫛による蓮弁文を施すものである。外体面は無文。	龍泉窯	C-3Ⅰ

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土 地点 出土層
第13図 図版10 2	鍔縁盤	15c前半～ 15c中	23.0	-	-	オリーブ	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に櫛状の工具による蓮弁文を施すものである。外体面は無文。	龍泉窯	表採
第13図 図版10 3		15c前半～ 15c中	23.2	-	-	オリーブ	なし	口縁部は鍔縁状をなし、端部を上方に引き上げた盤である。内体部に櫛状の工具による蓮弁文を施すものである。外体面は無文。	窯不明	4トレⅡ
第13図 図版10 4		15c前半～ 15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が外面に屈曲し、一見鍔縁状をなすが屈曲が弱い為、鍔縁上面はかなり傾斜している盤である。器の内外体面は無文である。	龍泉窯	表採
第13図 図版10 5	直口口縁盤	15c前半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	口縁部が開きながら直口口縁盤である。内体面に片切り彫りによる草花文を施文している。外体面は無文。	龍泉窯	E-10Ⅰ
第13図 図版10 6		15c前半～ 15ｃ中	17.5	-	-	淡灰緑	なし	口唇部がやや肥厚する直口口縁の盤で、内体面に幅広の沈線文帯を施す。	龍泉窯	TP-3 Ⅱ8/9
第13図 図版10 7		15c前半～ 15ｃ中	19.1	-	-	黄土色	なし	腰部が丸くなり口縁端反りの盤である。器の内外体面無文。	龍泉窯	B-12Ⅰ
第13図 図版10 8		14c後半～ 15ｃ中	22.2	-	-	淡灰緑	なし	内面体部に幅の広い丸のみ状施文具で蓮弁を表現した盤である。外体面は無文。	龍泉窯	E-10Ⅰ
第13図 図版10 9		14c後半～ 15ｃ中	25.5	-	-	淡緑灰	なし	開きながら直線的に体部をのばし口縁上部で外反し口唇部が、僅かに肥厚し丸くおさめている。外体面は無文。内体面に櫛描きと篦描きにより流線状の蓮弁文を施している。口唇部に刻み目を巡らしている。	龍泉窯	TP-7Ⅱ 6/9.5
第13図 図版10 10	盤底部	15c前半～ 15c中	-	-	14.8	淡緑灰	なし	内体面に櫛描きによる蓮弁文を施し、内底面に印花文を施すものである。釉は全面に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものである。	龍泉窯	B-11Ⅰ
第13図 図版10 11		15c中～ 15c後半	-	-	8.2	オリーブ	なし	高台脇まで施釉、外底面を露胎させている。	窯不明	表採
第13図 図版10 12		15c前半～ 15c中	-	-	15.3	オリーブ	なし	釉は全面に施釉後外底面を蛇の目状に掻き取るものと思われるが破損の為不明。器厚が厚いことからかなり大型なものになると思われる。	龍泉窯	表採
第13図 図版10 13		15c前半～ 15c中	-	-	15.4	黄土色	なし	内底面に陽圏線をもち、器全体に施釉後内底面を蛇の目状に掻き取るものである。	窯不明	C-3 表採
第13図 図版10 14		15c前半～ 15c中	-	-	14.8	黄土色	なし	内底面に陽圏線をもち、器全体に施釉後内底面を蛇の目状に掻き取るものである。	窯不明	2トレⅡ
第13図 図版10 15		15c中～ 15c後半	-	-	8.9	オリーブ	なし	内底面に陽圏線と印花文を施す盤で、高台脇まで施釉、外底面を露胎させている。	窯不明	C-9Ⅰ
第13図 図版10 16		15c中～ 15c後半	-	-	-	淡青緑	なし	内外面が無文の盤である。底部は碁笥底状を成し高台脇から高台内まで錆釉を施すものであるが、外底に施釉後内外体面に施釉している。高台畳付けの錆釉は拭き取っている。	龍泉窯	TP-10Ⅰ
第13図 図版10 17	大鉢	14c後半～ 15ｃ中	-	-	-	淡緑灰	なし	胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が外側に屈曲し、鍔縁状をなす。鍔上面に片切り彫りにより波濤文を施し、外体面に唐草文。内体面に同工具による文様を施している。	龍泉窯	表採
第13図 図版10 18		14c後半～ 15ｃ中	-	-	-	淡緑灰	なし	胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が外側に屈曲し、鍔縁状をなす。鍔端部に刻み目を施している。外体面に篦描きによる文様を施すが、小片の為詳細不明。	龍泉窯	表採
第13図 図版10 19		14c後半～ 15ｃ中	-	-	-	黄土色	なし	口縁部が直行し口唇部は丸く整えている。釉は比較的厚い。器の内外体面無文。	龍泉窯	表採



第12図　青磁７（盤）



第13図　青磁８（盤・鉢）

壺　(第14図、図版18)

総数115点が出土し、大型壷89点、大型壷の蓋14点、小型壷８点が得られた。４～11は酒会壷の身部で、短頸になるものである。５は外体面頚部に圏線、肩部に片切り彫りによる草花文を施している。４は外体面肩部に牡丹文を施すものである。６～10は外体面腰下部に片切彫りによる蓮弁文を施文、９・10は圏線のみの施す。いずれも落とし底の底部である。18は小型の酒会壷の底部である。１～３は大型酒会壷の蓋で、１は蓋の上面に片切り彫りにより牡丹文を施し、裏面には印花の双魚文を二組施文している。２は上面に片切り彫りによる草花文、裏面は印花文を施し施釉せず露胎されている。14は短頸の口唇部が露胎する、蓋付きの小壷と考えられる。19は筒型に立ちあがる壷の底部である。

第１表ｄ　青磁壺・蓋観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第14図 図版11 1	大型壺蓋	14c後半～15c中	-	-	15.2	オリーブ	なし	蓋甲頂周から蓋甲下周に片切り彫りによる花唐草を施している。鍔の形状は破損の為不明。釉は蓋甲全体に厚く施釉し、裏面は蓋甲内面のみ施釉、内甲頂部に円形に魚文を配するものである。身受けの突起から鍔にかけて露胎させてある。撮みは破片の為不明。	龍泉窯	表採
第14図 図版11 2		14c後半～15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	蓋甲頂周から蓋甲下周に片切り彫りによる花唐草を施している。鍔の形状は破損の為不明。釉は蓋甲全体に厚く施釉している。蓋甲内面は露胎し、牡丹の印花文を施している。撮みは破損の為形状不明。	龍泉窯	表採
第14図 図版11 3		14c後半～15c中	27.6	-	-	オリーブ	なし	鍔のみを残す資料である。蓋甲外面から鍔端部まで施釉。鍔内面は露胎。	龍泉窯	TP-11 Ⅰa
第14図 図版11 4	大型壺	14c後半～15c中	18.4	-	-	淡青緑	貫入	口縁部が直行し頸部がくの字状に屈曲し肩部に至る短頸壺である。肩部と胴部にかけて凸線により文様を区画するものであるが、区画内には片切り彫りよる花文を施している。	龍泉窯	C-3Ⅰ
第14図 図版11 5		14c後半～15c中	18.4	-	-	オリーブ	貫入	口縁部が直行し頸部でくの字状に屈曲し、肩部から胴部へ丸くなる壺である。肩部に叉状工具による圏線を巡らし、片切り彫りによる雲文を配するものである。	龍泉窯	TP-4 Ⅱ5/6
第14図 図版11 6		14c後半～15c中	-	-	16.9	淡灰緑	なし	外体面に連弁文を施す壺である。底部は落とし底である。	龍泉窯	表採
第14図 図版11 7		14c後半～15c中	-	-	19.2	オリーブ	なし	外体面に連弁文を施す壺底部である。内底は落とし底で中心の釉を円形状に、掻き取り露胎させている。	龍泉窯	表採
第14図 図版11 8		14c後半～15c中	-	-	17.4	オリーブ	なし	外体面に連弁文を施す壺である。底部は落とし底である。	龍泉窯	E-11Ⅰ
第14図 図版11 9		14c後半～15c中	-	-	15.6	オリーブ	なし	底部は落とし底になり外体面に叉状工具による圏線を巡らしている他は無文である。	龍泉窯	4トレⅡ
第14図 図版11 10		14c後半～15c中	-	-	20.6	オリーブ	なし	底部は落とし底になり外体面に叉状工具による圏線を巡らしている他は無文である。	龍泉窯	TP-3 Ⅱ0/10
第14図 図版11 11		14c後半～15c中	-	-	-	淡青緑	貫入	口縁部が直行し頸部がくの字状に屈曲し肩部に至る短頸壺である。肩部と胴部にかけて凸線により文様を区画するものであるが、区画内には片切り彫りよるラマ連弁文を施している。	龍泉窯	B-11Ⅰ
第14図 図版11 12	蓋	14c後半～15c中	-	-	8.0	淡灰緑	貫入	蓋甲上面に花型の透かしを施すものであるが釉は蓋甲頂部から縁辺部まで施釉。裏面は露胎させ縁辺部に錆釉を施している。	龍泉窯	E-14Ⅰ
第14図 図版11 13		14c後半～15c中	-	-	-	淡灰緑	貫入	蓋甲上面、周縁部を逆くの字状に屈曲させるものである。釉は蓋甲上面のみ施釉し、裏面は露胎させている。	龍泉窯	表採
第14図 図版11 14	小型壺	14c後半～15c中	6.0	-	-	淡緑灰	なし	口縁部が直行し、頸部から肩にかけて、急激に張り出し胴部に至る小壺である。口唇部を露胎させている。	窯不明	表採

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第14図 図版11 15	小型壺	16c代	3.2	-	-	灰緑色	なし	口縁部が直行し頸部が屈曲し、肩部にふくらみ胴に至る小壺である。頸部と圏部に圏線を施している。	窯不明	B-11Ⅰ
第14図 図版11 16		14c後半～15c中	-	-	6.9	オリーブ	なし	外体面に鎬の連弁文を施すものである。畳付け脇に圏線を施し、高台やや外開きで、畳付け脇に面取りしている。釉は外体面から畳付けまで施釉、高台内面は釉剝ぎするものである。内底面に轆轤目を明瞭に残す。	窯不明	F-11Ⅰ
第14図 図版11 17		14c後半～15c中	-	-	7.0	オリーブ	なし	やや鉢高台を示す底部資料である。内底面が露胎し高台は畳付けを除き総釉である。	窯不明	表採
第14図 図版11 18		14c後半～15c中	-	-	11.2	オリーブ	貫入	小型な壺の底部資料である。外体面にラマ蓮弁文と思われる文様を施している。釉は全面に施釉し、畳付けのみを露胎させている。	龍泉窯	B-5 Ⅰ 下部
第14図 図版11 19		17c代	-	-	6.3	淡青緑	なし	底部から筒状に立ち上がる壺である。器の内面は露胎し高台内面に錆釉を施している。	窯不明	表採

瓶　(第15図１～10、図版19)

大瓶（第15図１）、瓶（同図２～３）、玉壷春瓶（同図４～８）、台座付き瓶（同図９・10）などが得られた。総数16点であった。1は胴下部に鎬連弁文を配する、大瓶の落とし底をなす底部である。6は玉壷春瓶の底部であるが、胴下部に片切彫りにより蓮弁文を施し、二条の圏線を挟んで胴上部に牡丹唐草を施文している。９と10は同一固体と思われる台付瓶の底部と台座部分である。

その他の青磁　(第15図11～20、図版19)

馬上杯２点、花盆台３点、香炉２点、形象物４点、器種不明18点などが出土している。馬上杯は坏部11と脚部12が出土している。花盆台は脚の付け根部分13、14と器台部の天板部分15が見られる。また23、24に示したものは小壷の類かと思われたが、壷に属するには比較的浅く、器高の割に口が広い、浅鉢風であることや、底部形状が判然としない点などから器種不明とした。

註

註１　上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究第２号』　1982年。

参考文献

・金武正紀、宮里未廣、他　『今帰仁城跡発堀調査報告書Ⅰ』　今帰仁村教育委員会　1983年。

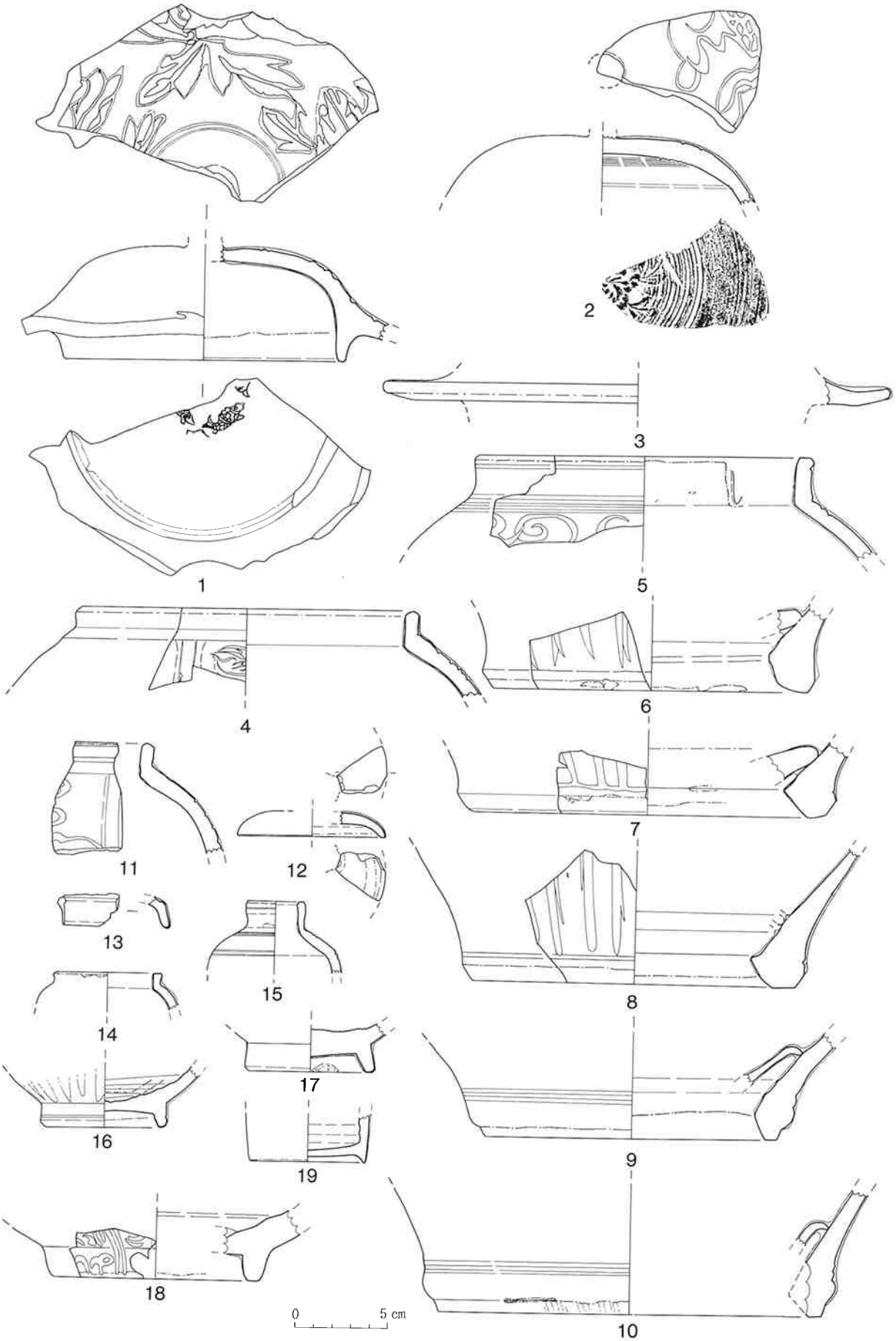
・金城亀信、上原静、城間肇、他　『首里城跡　京の内跡発堀調査報告書(Ⅰ)』　沖縄県教育委員会　1998年。

第１表ｅ　青磁瓶・その他の青磁観察一覧

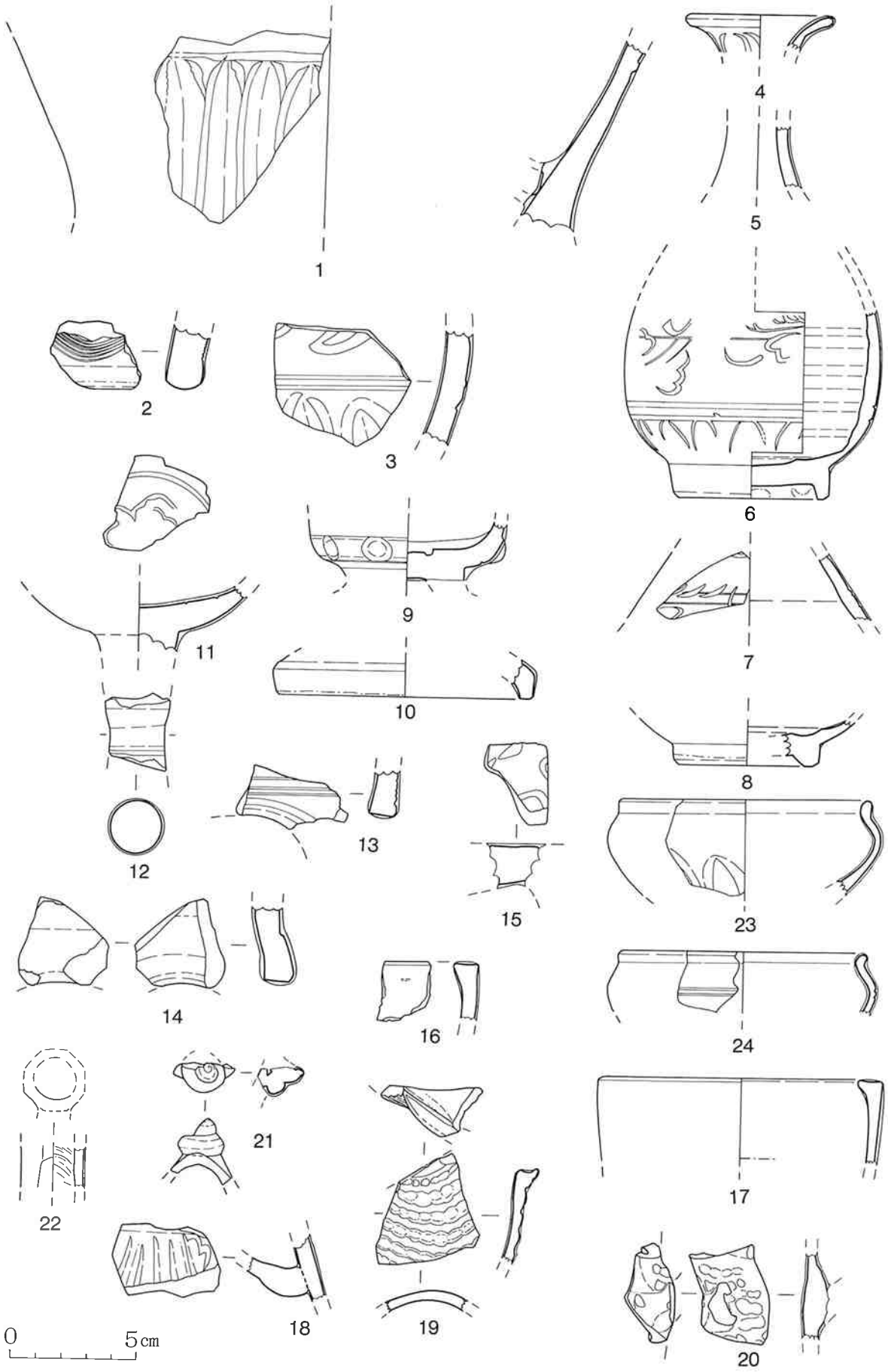
凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第15図 図版12 1	瓶	14c後半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	胴上部に膨らみを持ち、直線的に底部に至る花瓶になるものと思われる瓶底部である。文様は胴下部に陽圏線を巡らしその直下に鏑蓮弁文を施している。には牡丹唐草が配されていたと思われる。内底は落とし底を呈する。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 2		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	大瓶の高台部と思われる。外体面に櫛描きによる文様を施している。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 3		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡緑灰	なし	文様は胴部に牡丹唐草を配し胴下部に陽圏線を巡らしその直下に鏑蓮弁文を施している。底部は落とし底である。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 4		14c後半～ 15c中	5.9	-	-	淡灰緑	なし	玉壺春瓶と思われる口縁である。口縁は大きく外側に開くように外反させ、口縁内上部に篦書きによる圏線を巡らしている。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 5		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡緑灰	なし	玉壺春瓶のものと思われる頚部である。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 6		14c後半～ 15c中	-	-	6.1	オリーブ	なし	玉壺春瓶である。口縁部をラッパ状に大きく外側に開かせ、頸部から胴上部にかけふくらみをもち、直線的に至る。文様は胴部に片切り彫りによる牡丹唐草文を施し胴下部に二叉工具による沈線文を巡らしその直下に片切り彫りによる連弁文を施している。釉は全面に施釉後外底面を掻き取っている。	龍泉窯	TP-9Ⅰ
第15図 図版12 7		14c後半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	玉壺春瓶胴部資料。外体面に片切り彫りによる文様がみられる。	窯不明	B-5Ⅱ
第15図 図版12 8		14c後半～ 15c中	-	-	5.6	淡緑灰	なし	玉壺春瓶と思われる底部である。釉は内体面と外面は高台脇まで施釉、畳付けから内底面までかけ露胎している。	窯不明	1トレⅠ下部
第15図 図版12 9		14c後半～ 15c中	-	-	4.7	オリーブ	なし	瓶底部である。胴下部に団子状の突起を数個巡らしている。底部は破損しているが10と同一個体と思われる。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 10		14c後半～ 15c中	10.1	-	-	オリーブ	なし	台座形の瓶底部である。9と同一個体と思われる。畳み付けを除き総釉	龍泉窯	D-5Ⅰ
第15図 図版12 11	その他の青磁	14c後半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	馬上杯の杯部資料である。内底面に印花文を施すものであるが、外底面は無文、口縁部、脚部、破損の為不明。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 12		14c後半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	馬上杯の脚部のみの資料であるが竹節状を成し沈線帯を施している。	龍泉窯	TP-9Ⅰ
第15図 図版12 13		14c後半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	中空の花盆台と思われるもので、胴部の透かし部縁と思われる資料である。外体面に櫛描きによる文様を施している。	龍泉窯	表採
第15図 図版12 14		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	中空の花盆台と思われるもので、胴部の透かし部縁と思われる資料である。縁端部を有段にし縁取りしている。	龍泉窯	4トレⅠ
第15図 図版12 15		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	器台の脚部から台座にかけての破片と思われる。台座面に片切り彫りによる文様を施している。脚部破損の為不明。	龍泉窯	E-13Ⅰ
第15図 図版12 16		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡青緑	なし	筒型香炉の口縁部である。口唇部が平坦な寄り口縁を成す。	龍泉窯	E-14Ⅰ
第15図 図版12 17		14c後半～ 15c中	11.2	-	-	淡青緑	なし	筒型香炉の口縁部である。口唇部が平坦な寄り口縁を成す。	龍泉窯	B-8Ⅰ
第15図 図版12 18		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	羽毛と思われる文様を残す破片である。小破片の為詳細不明。型物	龍泉窯	表採
第15図 図版12 19		14c後半～ 15c中	-	-	-	オリーブ	なし	螺貝の形象物と思われる。外面に貝の螺肋が見られる。	窯不明	表採

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	時期	口径 cm	器高 cm	高台径 cm	釉色	貫入	器形・文様などの特徴	産地	出土地点 出土層
第15図 図版12 20	その他の青磁	14c後半～ 15c中	-	-	-	淡灰緑	なし	型物の形象物外面にうろこ状の文様を施している。型物	窯不明	4トレⅠ
第15図 図版12 21		15c代	-	-	-	淡青緑	なし	螺貝型の撮み状のものである。詳細不明。	龍泉窯	B-12Ⅰ
第15図 図版12 22		14c後半～ 15c中	-	-	-	淡青緑	なし	八角瓶状の筒の破片である。釉は外面のみで内面に施されていない。溶着痕がみられる。詳細不明である。	龍泉窯	4トレⅡ
第15図 図版12 23		14c後半～ 15c中	10.0	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が直行し、頸部から肩にかけて急激に張り出し胴部に至る。最大径を胴上部にもつものである。外面胴下部に片切り彫りによによによる連弁文を施すものである。小型短頚壷？	窯不明	表採
第15図 図版12 24		14c後半～ 15c中	9.8	-	-	淡灰緑	なし	口縁部が直行し、頸部から肩にかけて、急激に張り出し胴部に至る。小型短頸壺？	窯不明	3トレⅠ



第14図　青磁 9（酒会壺・蓋・小壺）



第15図　青磁10（瓶・その他）

第2表　青磁出土状況一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

分類		トレンチ・地区	表採	10トレ	9-8トレ	3・6トレ			7・1トレ			5トレ		4・2トレ			11トレ				12トレ	TP2	TP3		TP4		TP5	TP6			TP7		TP8		TP9	TP10		TP11			TP12	合計
				I	I	黒土	I	II	I	II	III	I	II	I	Ib	II	I	II	P8	P10	I	I	I	II	II	IV	I	I	II	IV	I	II	I	II	I	I	Ib	I	Ia	Ib	I	
碗	直口口縁	鎬蓮弁文	2																																							2
碗	直口口縁	片切彫りによる幅の広い蓮弁文	12									3		1		2								1	1		2															22
碗	直口口縁	細い線描きの蓮弁文	9				1			1				1																					1							13
碗	直口口縁	片切彫り、ヘラ描きの雷文帯	9				1		1			1				2					1																					15
碗	直口口縁	印花による雷文帯					1																																			1
碗	直口口縁	弦文	2																																							2
碗	直口口縁	有文不明											2																												1	3
碗	外反口縁	片切彫りのラマ式蓮弁文	3(1)				1	1	1																																	6(1)
碗	外反口縁	片切彫りによる幅の広い蓮弁文	1						1							1																										2(1)
碗	外反口縁	片切り草花文										1																														1
碗	外反口縁	雷文帯風文															1																									1
碗	外反口縁	有文不明	2									1																													1	4
碗	有文	玉縁口縁	1				1																																			2
碗	無文	玉縁口縁	5				1			2				1							1				1										1	1						13
碗	無文	端反口縁	35(1)				3	1	5	2	1	5	1	4	1	4	2	3				2	1		3			1	1				1	1	2	1						80(1)
碗	無文	直口口縁	28		(1)		2		1	1		7	(1)	2		2	1				1		1				1											1	3	1		52(2)
碗	胴部	鎬蓮弁文										1																														1
碗	胴部	片切彫りによる幅の広い蓮弁文	27				1			1		3	1	5		4											2								2						2	48
碗	胴部	雷文帯風文	1																																							1
碗	胴部	片切彫り草花文	4													1																				1						6
碗	胴部	無文	133			2	12	3	6	6		19	3	24	1	24	3		1	1		1	2	2	4				2	1	1	4		3	2	8			4		3	275
碗	胴部	有文不明	20					1				2					1		1			1													2		1		2		2	33
碗	底部	高台四角形の鎬蓮弁文	1(2)																																							1(2)
碗	底部	片切彫りによる幅の広い蓮弁文	(3)	(2)					(1)	(1)		(1)						(1)																	(1)							(10)
碗	底部	無文 内底有文	10		1		3	1	2		1					3								1					1						1	1					1	26
碗	底部	無文	26				1					2		3		3			1		1		1	4	1	1		1				1	1						2	1	2	52
碗		型づくり																							1					1												2
碗		その他																																					1			1
皿	口縁	口折皿	6				2		1							1																			2							12
皿	口縁	外反 有文	4																																							4
皿	口縁	外反 無文	18				2					2				1	1																		3				1		1	29
皿	口縁	直口 有文	1													1																							1			3
皿	口縁	直口 無文	4																																							4
皿	口縁	玉縁 無文																																	1							1
皿	口縁	輪花皿													1	1																										2
皿	口縁	八角皿										1																														1
皿	胴部	有文	14																											1		1			1						2	19
皿	胴部	無文	12				1		1	1				1		1									1		1			1			1		2							23
皿	底部	碁笥底																																	1							1
皿	底部	内底有文	4													1	2											2													1	10
皿	底部	無文	17					1				1		2															1			1							1		3	27
盤		稜縁盤	23		1		2			1		1		1		2	1								1							1			2					1		37
盤		直口盤												2			1							1																		4
盤		端反の盤																														1										1
盤		胴部	16						1	1		1		1		7									1																1	29
盤		底部	9				1					1		2		3	1																			1						18
鉢		口折	3																																							3
鉢		直口	1																																							1
鉢		胴部	1																																							1
壺		酒会壺（身）	55		1		4					3		6	1	3	1					1		1	3		1	2	1						1	1			1	2	1	89
壺		酒会壺（蓋）	11												1	1																							1			14
壺		壺	1											1																												2
壺		小壺	5				1							1															1													8
壺		その他の蓋	1																		1																					2
瓶		瓶	3				1									1																				1						6
瓶		大瓶	1																																							1
瓶		玉壺春瓶	4				2	1	1																										1							9
		壺・瓶類	1				1		1																1											1						5
		馬上杯	1																																1							2
		花盆台	1											1			1																									3
		香炉										1									1																					2
器種不明	胴部	有文	4				1																																		1	6
器種不明	口縁	無文														1																										1
器種不明	胴部	無文	2			1																										1										4
		その他	3				1							1		1	1																									7
		合計	564	2	4	3	47	9	23	17	2	57	8	60	5	71	17	4	3	1	6	5	5	10	18	1	7	6	7	4	1	10	3	4	27	16	1	1	17	5	22	1073

※（　）は内底有文

第２節　白　磁

白磁

白磁は総数267点得られ、器種別の内分けは碗、皿、杯、壷、香炉、水滴、形象物（動物形、人形）の９種がある。出土点数は杯126点が最も多く、次いで碗の60点、皿40点と続く。年代的には14世紀後半～19世紀に位置つけられる。又、白磁碗、底部資料の中には16図．６～８のように破損後、見込み周縁を敲打剝離し円盤状製品として二次使用されたと考えられるものもあった。

碗

無文の端反の碗ａ（第16図１～８）

森田1982分類のＣ群に属するものと思われるものである。Ｃ群の碗については、幅広の高台を有し口縁は基本的には外反するが、反しないものも若干含まれる。胎土は白灰色、釉は灰色味を帯びる。内底に型押しによる花文を描く場合が多い。形態的には枢府磁に類似するが胎土、釉調及び内面の文様に大きな違いがあり枢府磁が砂底になるのに対し、当該群では砂の付着は見られない。年代的には当該製品を多く出土する勝連城跡の年代から15世紀前後に位置つけられている。（註１）

１～３は腰部が丸く張り、体部上位で一旦内側にすぼんだのち口縁部を外反させるもので、口唇を僅かに平坦に整えるもの１と、丸みを帯びる2.3とがある。胎土は白灰色を呈し、釉色は灰色を帯びる。４～８は内底面に型押しによる花文を施す。高台は幅広で畳付を平坦に仕上げ、断面は四角形状を呈する。高台内を斜位に削り出し、中心部が尖る。釉は腰部まで施され、底部は露胎している。胎土は白灰色を呈し、釉色は灰色を帯びるもの１～７と青味を帯びた灰色８とある。９は無文の碗底部である。高台は幅広で高台際を斜位に面取りし、釉は腰部まで施され、底部は露胎している。胎土は黄白色を呈し、釉色は黄白色である。

無文の端反の碗ｂ（第16図11～18）

11・12は１～３に比べて器壁が薄めで、体部が外側に開くように立ち上がり、口縁で若干厚みを増し僅かに外反するものである。釉の厚みは１～３に比べると薄いが、胎土や釉色は同じである。13～15は、胴部から口縁部に向かって直線的に開き口縁上部で僅かに外反するものである。13・14は胎土が白灰色を呈し、釉色は淡灰色を示す。15は胎土、釉色とも淡褐灰色を呈する。16～18は、胴部から口縁部に向かって直線的に開き口唇部を外面に屈曲させている。胎土はいずれも灰白色を呈し釉色は褐色がかった灰色16と青味がかった灰色17と灰白色18とある。11～18は、いずれも15ｃ後半～16ｃ前半に位置づけられる。

無文直口の碗（第16図10、19～22）

10は薄作りの口縁で、胴部から開きながら直線的に立ち上がる。胎土は灰白色を呈し釉色は淡灰色を呈する。15ｃ前半～中葉に位置つけられる。

19～21は器壁が薄く、胴部から口縁部に向かって直線的に開き直口をなす。口唇部は平坦に仕上げている。胎土は灰白色を呈し釉は淡い緑がかった灰色を呈する。15ｃ後半～16ｃ前半 に位置づけられる。

22は器壁が薄く、口縁が内彎気味の直口口縁である。胎土、釉色とも灰白色を呈する。16ｃ後半～17ｃ中葉に位置づけられる。

無文の碗底部（第16図24、25）

24は内底面に蛇の目状の砂目が見られる。胎土、釉色とも灰白色を呈する。15ｃ後半～16ｃ前半に位置づけられる。 25は高台際と高台内から斜位に面取りし、兜状を成すものである。釉は畳付まで施釉するが、内底面は露胎にしている。内底面に砂目が見られる。胎土は白色を呈し、釉色は薄青の青白磁である。16ｃ後半～17ｃ前半に位置づけられる。

その他の碗（第16図23、26）

23は腰部に丸みを有し、胴部から伸びるように立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部に錆釉の覆輪を施している。胎土は黄白色、釉色は青味がかった灰色。18ｃ以降に位置づけられる。

26は外体面に片切り彫りによる文様を施すものである。碗になると思われるが小破片のため、詳細は不明。胎土、釉色ともに灰白色を呈する。16ｃ前半～中葉頃に位置付けられる。

皿（第17図１～20）

第17図１～３に示すものは、森田1982のＤ群に属すると思われるものである。Ｄ郡は小型高台付き皿、杯、多角杯で構成される一群で、灰白色を呈する高熱焼成されたものと低温焼成のため黄色味を帯びるものとあるが、量的には後者が多いようである。皿と多角杯は高台を４～５箇所弧状に抉り込みを入れるものと、入れないものとがある。抉れ高台のものは、内面に重ね焼きの目跡を残す。釉は細い貫入を多く伴う。14ｃ後半～16ｃ代に位置つけられている。（註２）１は見込み部分が盛り上がり、内底部に厚みを有するが、腰部に至るまでにかなり薄くなっていく。高台は外に向かって開く形をなし、外側下端部を面取りする。釉は高台際まで施釉、高台および高台内を露胎させている。直口の皿になると思われる資料である。胎土、釉色ともに黄白色を呈する。15ｃ前半～中葉に位置づけられる。２は口縁が外反し、内底面に型押しによる花文を施すものである。高台はやや外開きで高台外側下端を面取りしている。釉は高台脇まで施釉する。胴部に明瞭な髑髏痕を残す。胎土、釉色ともに黄白色を呈する。15ｃ～後半。３は無文の直口皿で、腰部から僅かに丸みを有しながら開くように口縁に至り、口縁は唇部をやや平坦に整える。高台の５箇所に弧状の抉り込みを入れ、施釉は全面におよび、内底には目痕を残す。胎土は淡黄白色を呈し、釉色は灰白色を呈する。15ｃ中葉～後半に位置づけられる。

第17図４・５・17～19は森田1982のＥ群に属すると思われるものである。（註３）

４は口縁が外反し胴部に面取りをした皿である。胎土、釉色ともに灰白色を呈する。16ｃ前半～中葉に位置づけられる。５は口縁が逆八字状に外側に開く直口口縁皿である。胎土は白色を呈し、釉色は淡灰色を呈する。16ｃ前半～17ｃ中葉に位置づけられる。17・18は断面三角状の高台を持ち畳付脇まで施釉するものである。畳付に砂目が見られる。胎土、釉色ともに灰白色を呈する。16ｃ前半～中葉に位置づけられる。

９は波状口縁を持つ大形な変形皿と思われる。口唇は舌状を成す。胎土、釉色共に灰色を呈する。16ｃ代に位置づけられる。

６～13・14は輪花の皿であるが６・７・14は菊花を形取る。いずれも型成形によるもの思われる。底部は腰部で丸みをもつ13と、腰部から開く様に広がる14がある。高台はいずれも比較的丸い。16ｃ中葉～17ｃ前半に位置づけられる。

15・16は鍔縁口縁を持つ型成形の皿である。16は鍔縁の端部をつまみあげるような形状を成し、15は楕円形の皿で口縁内にループ状の縁飾りを有する。いずれも胎土、釉色ともに黄白色を呈する。16ｃ中～17ｃ前半に属する。

12は線彫りによる蓮弁文を有する底部資料で弁幅は均一でない。内底面の釉を蛇の目状に剝ぎ取っている。胎土、釉色ともに白色を呈する。16ｃ～17ｃ前半に位置づけられる。

杯（第17図21～31）

21～24に示すものは森田1982のＤ群に属すると思われる杯である。（註２）23・24が角杯、22が直口の上面観が八角形を呈する杯である。口縁から胴部まで面取りするもの24と、口縁のみを八角に面取りした23がある。いずれも腰部から真っ直ぐ立ち上がるように口縁に至り、口縁上部で、外反させる。23は口唇が八角の稜を持つもので、口唇の断面が四角形を呈する。24は底部から胴下部にまで残す資料であるが、腰部より下に丸みを持たせ胴部を八角形に面取りするものである。釉は腰下部まで施釉、高台は僅かに外側に開き高台内も斜めに削り出している。高台内の凹みは比較的浅い。畳付外端は斜めの面取りを施している。15ｃ中～後半に位置づけられる。

22は胴部から開きながら内彎ぎみに立ち上がり口縁に到る直口の杯である。胎土、釉色ともに淡灰白色を呈し、貫入が見られる。15ｃ中～後半に位置づけられる。

21は胴部下位が若干膨らみ、やや開きながら立ち上がり口縁に至る。口縁は外反し、胴部に顕著な轆轤目を残す。胎土は黄白色を呈し釉色は青味がかった白色を呈している。15ｃ中～後半に位置づけられる。

25～31は徳化窯系の型よる、比較的、薄作りの杯である。25～28・30・31は腰部から胴下部が若干膨らみ口縁にかけて外反するもので、緩やかに開きながら口縁に至り外反する。口唇部の釉を掻き取り、口禿をなす。25～27・30・31は胎土及び釉色が灰白色を呈し、28は胎土が黄白色を呈し釉色は青味がかかる白色を呈している。29は胴上部から直に立ち上がり口縁で外反するものである。口縁はやや玉縁状に丸みを持ち、胎土、釉色は灰白色を呈する。25は16ｃ前半～中葉、26～29は16ｃ後半～17ｃ中葉、30・31は18ｃ代に位置づけられる。

32は高台がやや内向するように削り出された小杯底部である。畳付は高台内側から外側に向けて斜めに削り出されている。釉は高台際まで施釉、高台内と畳付は露胎している。胎土は灰白色、釉色は青味がかる白色を呈する。16ｃ後半～17ｃ中葉に位置づけられる。

壷（第17図33～37）

35は頸部に一条の沈線を巡らした短頸壷である。口唇部は丸く、露胎され内側に面取りした部分がある。胎土、釉色とも黄白色を呈する。16ｃ代に位置づけられる。

36は碁笥底を呈し高台内にも施釉、畳付の釉を掻き取り露胎させている。胎土は黄白色、釉色は青味がかる灰色を呈する。16ｃ代に位置づけられる。

33・34はいわゆる「安平壷」と言われる壷である。33は口縁が肥厚し、Ｒ字状の断面形を示す。頸部で一旦すぼみ肩部から胴部にかけ開くように厚くなる。胎土は灰白色を呈し釉色は青味がかる灰色を呈する。34は口縁が台形状を呈し、口唇は扁平で露胎している。頸部で「く」の字状に屈曲させ、肩部上位に沈線を巡らしている。胎土は淡い褐色、釉色は淡緑がかった灰色。33、34ともに17ｃ代に位置づけられる。

37は口径が4.4cmの小壺である。短頸で胴部が丸く、胴部の中間あたりに底部と縫合痕と思われる積み痕が見られ、胴下部外側に溶着痕が見られる。胎土、釉色ともに淡灰白色を呈する。17ｃ代に位置づけられる。

香炉（第17図38、40、第18図））

第17図38は口縁部が内湾し口唇部を平坦に整えるもので、ほぼ筒型になると思われる。胎土、釉色ともに灰白色を呈する。15ｃ前半～中葉に位置づけられる。

第18図は胴部から肩にかけ丸みを持ち、頚部は真っ直ぐのび口縁に至る。口唇は逆Ｌ字状に外に張り出す。肩部にカマボコ状の突帯を廻らし更に突帯上部、数ヶ所に丸い瘤状の突起を配する。胴外面に牡丹と思われる草花文の陽刻文が施された香炉である。胎土釉色ともに黄白色を呈する。近世のものと思われる。第17図40は第18図と同一個体と思われる胴部資料である。いずれも被熱を受けている。

水滴（第17図39）

水滴は一点のみ出土した、体部を短い筒状に造り四ないし五の沈線を廻らす。底部は断面四角の高台を持ち、肩部が水平状を示す。口縁は上面中央部に穿孔するように設け、口唇は上方に僅かに摘み上げた形を成す。肩部端に粗孔がみられ、周囲の釉が円形に剝落していることから、管状の注ぎ口が付いていたと思われる。釉はほぼ全面に施釉している。胎土、釉色はともに黄白色を呈する。16ｃ代に位置づけられる。

形象物（第17図41～43）

動物形と人形と思われる型形である。41は馬の尾を模ったものと思われ、尻らしき部分に円孔を穿っている。胎土、釉色ともに灰白色を呈する。42・43は人形で42が着物の襟部分、43は肩部分である。胎土は白色、釉色は青味がかった白色を呈する。いずれも15ｃ代に位置づけられる。

註

註１　森田勉　『14～16世紀の白磁の型分類と編年』　貿易陶磁研究第２号　1982年

註２　註１に同じ。

註３　註１に同じ。

参考文献

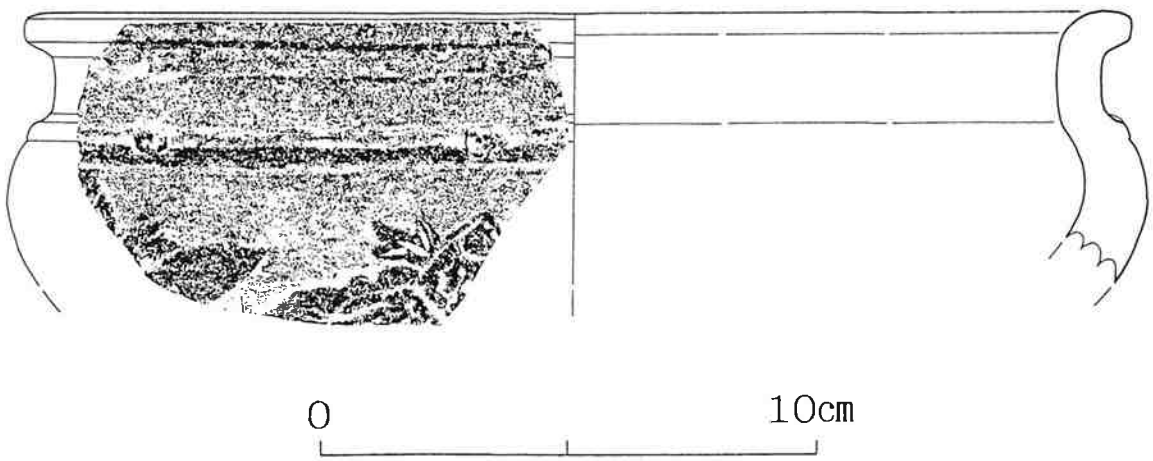
・金武正紀、宮里末廣他　『今帰仁城址発掘調査報告書Ⅰ』　今帰仁村教育委員会　1983年

・金城亀信、上原靜、城間肇他　『首里城跡　京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会1998年

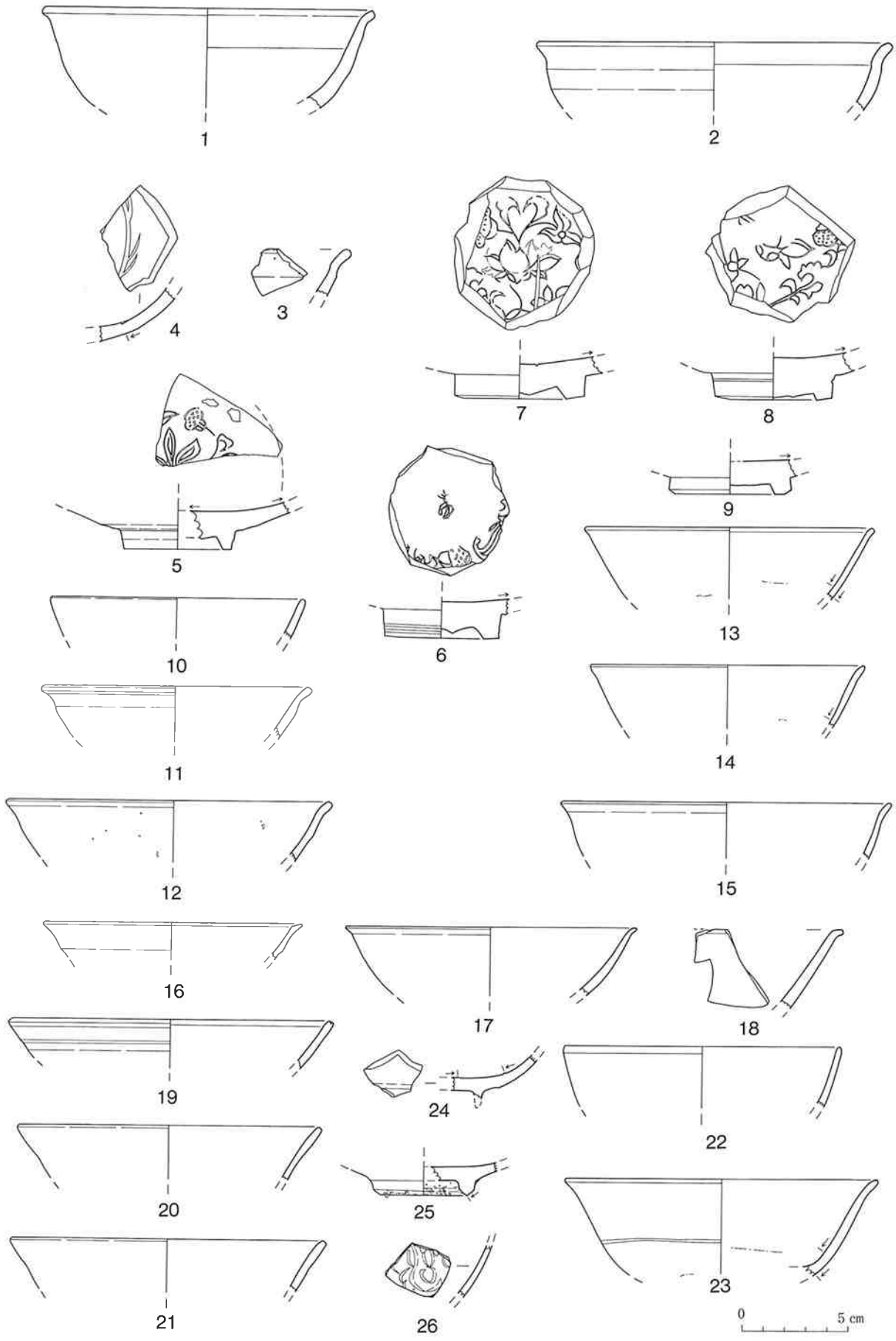
第３表　白磁　観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

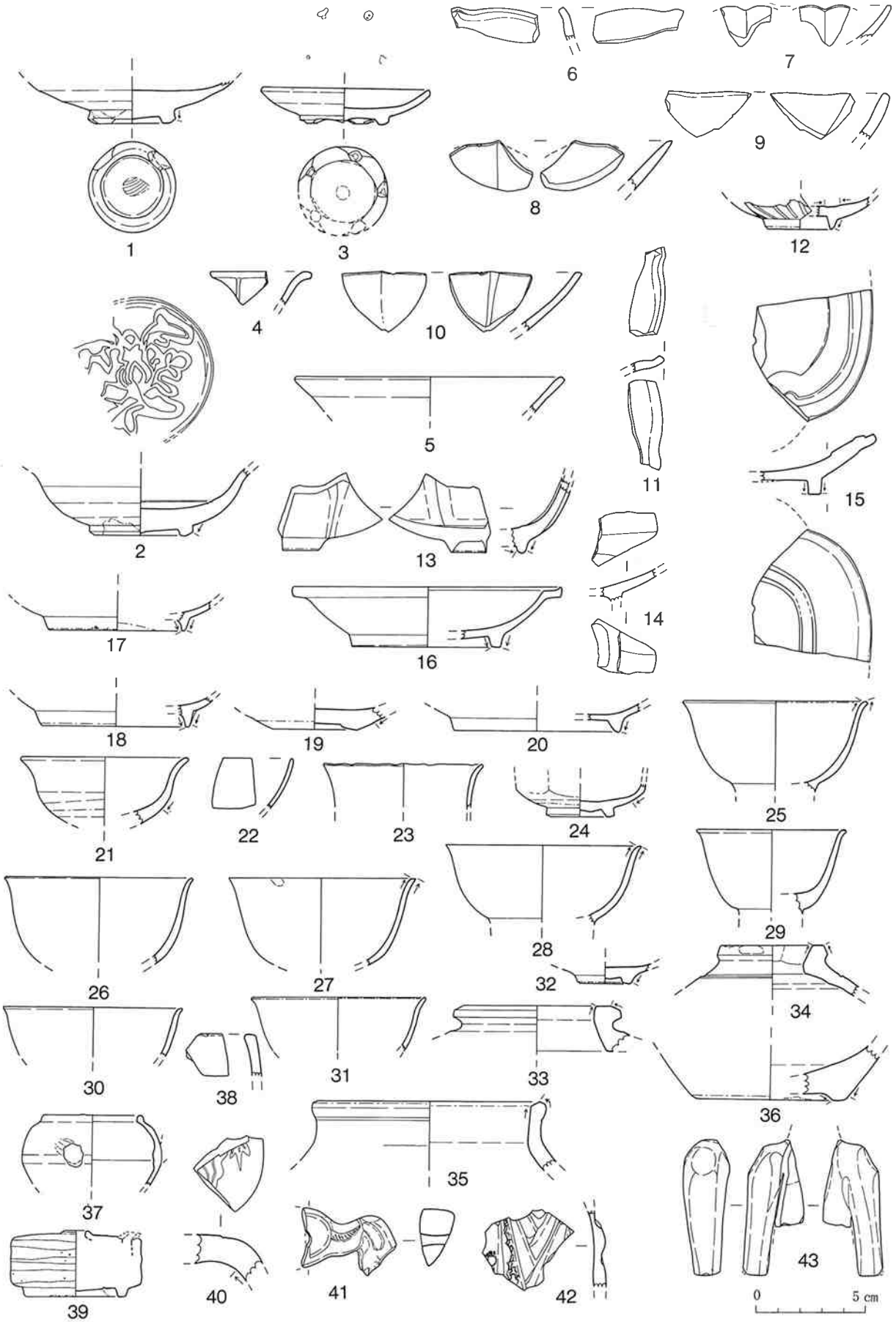
挿図No 図版No 遺物No	口径 器高 高台径 (cm)	出土 地点 出土層	挿図No 図版No 遺物No	口径 器高 高台径 (cm)	出土 地点 出土層	挿図No 図版No 遺物No	口径 器高 高台径 (cm)	出土 地点 出土層	挿図No 図版No 遺物No	口径 器高 高台径 (cm)	出土 地点 出土層	挿図No 図版No 遺物No	口径 器高 高台径 (cm)	出土 地点 出土層	挿図No 図版No 遺物No	口径 器高 高台径 (cm)	出土 地点 出土層
第16図 図版13 1	15.8 - -	4トレⅡ	第16図 図版13 13	13.7 - -	TP11 Ⅰb	第16図 図版13 25	- - 4.8	表採	第17図 図版14 11	- - -	C-11 Ⅰ	第17図 図版14 23	7.2 - -	B-9 Ⅰ	第17図 図版14 35	10.6 - -	TP10Ⅱ
第16図 図版13 2	17.3 - -	4トレ 表採	第16図 図版13 14	12.9 - -	B-8Ⅰ	第16図 図版13 26	- - -	E-13P7	第17図 図版14 12	- - 3.2	2トレ 表採	第17図 図版14 24	- - 3.1	D-6Ⅲ	第17図 図版14 36	- - 6.8	表採
第16図 図版13 3	- - -	2トレⅡ	第16図 図版13 15	15.6 - -	5トレⅠ	第17図 図版14 1	- - 4.0	F-15 表採	第17図 図版14 13	- - -	B-9 表採	第17図 図版14 25	8.4 - -	E-15・2	第17図 図版14 37	4.4 - -	TP10 Ⅰb
第16図 図版13 4	- - -	TP9Ⅰ	第16図 図版13 16	12.2 - -	4トレ 表採	第17図 図版14 2	- - 4.7	4トレⅡ	第17図 図版14 14	- 2.7 -	B-9Ⅰ	第17図 図版14 26	8.5 - -	B-11 Ⅰ	第17図 図版14 38	- - -	4トレ 表採
第16図 図版13 5	- - 5.1	TP4Ⅱ	第16図 図版13 17	13.8 - -	TP3 Ⅰ黒土	第17図 図版14 3	7.6 1.6 4.0	D-1 表採	第17図 図版14 15	- - -	4トレ Ⅱ	第17図 図版14 27	8.4 - -	E-15 P4	第17図 図版14 39	1.1 3.0 4.4	D-8・9 表採
第16図 図版13 6	- - 5.4	E-10Ⅰ	第16図 図版13 18	- - -	C-8Ⅰ	第17図 図版14 4	- - -	表採	第17図 図版14 16	12.1 2.7 6.7	表採(南 崖下)	第17図 図版14 28	8.9 - -	C-11 Ⅰ	第17図 図版14 40	- - -	TP8Ⅰ
第16図 図版13 7	- - 6.1	TP94Ⅱ	第16図 図版13 19	15.3 - -	B-6Ⅰ	第17図 図版14 5	12.2 - -	E-7	第17図 図版14 17	- - 6.2	表採 (フェンス ネット間)	第17図 図版14 29	6.8 - -	1トレ Ⅱ	第17図 図版14 41	- - -	B-13 Ⅰ
第16図 図版13 8	- - 5.5	4トレⅡ	第16図 図版13 20	14.3 - -	2トレ Ⅰb	第17図 図版14 6	- - -	TP8Ⅱ 土 埋土	第17図 図版14 18	- - 6.6	表採(南 崖下)	第17図 図版14 30	8.1 - -	2トレ Ⅰb	第17図 図版14 42	- - -	表採
第16図 図版13 9	- - 5.8	E-15Ⅰ	第16図 図版13 21	14.8 - -	B-5Ⅰ	第17図 図版14 7	- - -	B-9 表土	第17図 図版14 19	- - 3.8	表採	第17図 図版14 31	7.8 - -	表採(南 崖下)	第17図 図版14 43	- - -	4トレ
第16図 図版13 10	12.0 - -	B-8Ⅰ	第16図 図版13 22	13.0 - -	4トレⅡ	第17図 図版14 8	- - -	B-9 表採	第17図 図版14 20	- - 7.6	E-15 P4	第17図 図版14 32	- - 2.4	表採(南 崖下)	第18図 図版14 44	22.3 - -	表採
第16図 図版13 11	12.7 - -	E-13P8	第16図 図版13 23	14.7 - -	B-8Ⅰ	第17図 図版14 9	- - -	E-17 表採	第17図 図版14 21	7.6 - -	E-6 表採	第17図 図版14 33	6.6 - -	B-12 Ⅱ			
第16図 図版13 12	15.4 - -	2トレⅠ	第16図 図版13 24	- - -	4トレ Ⅰ黒土	第17図 図版14 10	- - -	2トレⅡ	第17図 図版14 22	- - -	B-9Ⅰ	第17図 図版14 34	4.7 - -	TP6Ⅰ			



第18図　白磁３



第16図　白磁１（碗）



第17図　白磁 2（皿・杯・壷・香炉・水滴・形象物）

第4表　白磁出土状況一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

分類	トレンチ、地区	表採	3,6トレ	7,1トレ			5トレ		4,2トレ			11トレ				12トレ		TP3	TP4		TP6		TP8		TP9	TP10	TP11		合計
			Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰb	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	P7	P8	Ⅰ	P4	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰb	Ⅲ	
碗	サビ釉覆輪外反口縁						1																						1
	無文外反口縁	4					2		2		3				1			1											13
	無文直口口縁		1	1			3			1	1	1						1		1									10
	印花文（底部）	1					1		1		2									1									6
	無文底部	2					1		(1)							1						1							5(1)
	片切り彫り（胴部）	1							1		2			1											1				6
	無文胴部	7			1		2		1		4		1												1			1	18
皿	無文外反口縁	2					1				1																		4
	無文直口口縁	2																											2
	無文直口口縁（復元可能）	1																											1
	口禿外反口縁	2																											2
	口禿直口口縁						1																						1
	角皿								1																				1
	変形皿	1																											1
	蓮弁文底部	(1)																											(1)
	印花文底部	1																											1
	型押し 輪花 口縁	5					1		1		1												1						9
	型押し 輪花 底部	1					1																						2
	型押し 鍔縁口縁（口～底）	1									1																		2
	無文胴部	2					1																						3
	無文底部	5					3				1						1												10
盃	無文外反口縁	3					5																						8
	無文直口口縁	8	1				5	1	1		2			1									2						21
	口禿外反口縁	7		1			2	1	6	1	1	1				1	1												22
	口禿直口口縁	2					1	1			1																		4
	八角 口縁						1																						1
	八角 底部					1	4				1																		5
	無文胴部	33					17		2		3	1				1		3							1				61
	無文底部	17	1						5			2		3		1			1										31
壺	口縁							1					1									1				1	1		4
	胴部	3					1				1																		5
	底部	1																											1
香炉（口縁）		1																					1						2
水滴（復元可能）		1																											1
形象物		1									1										1								3
計		115(1)	3	2	1	1	54	3	20	2	25	5	3	5	1	4	2	5	1	2	1	1	1	3	3	1	1	1	267(2)

（　　）は内底蛇の目釉剝ぎ

第3節　染付

染付（第19～29図）

総数1839点が出土し、中国の景徳鎮窯、をはじめ福建･広東窯系の染付が多く含まれる。器種別の内訳は碗、皿、を主体に杯、鉢、壷、瓶、その他がある。

年代的には15ｃ～19ｃまでの幅を有するものの、16・17ｃに位置づけられるものが最も多く出土している。

碗（第19～24図）

図上復元により全形を窺うことのできる資料20点を含む総数1376点が出土している。

端反り口縁碗、直口口縁碗、があり、底部形は蓮子心形、饅頭心形、中間タイプが見られた。多くは全面釉で高台畳付を釉剝ぎするものである。外底に銘款を施すもの第19図５・13・14・16・17・18、20図４・13・14、17・22、22図３・13・14、23図５・６・８・13・17・18、24図16～19がありそのほとんどが方形の枠に１字を記すものであるが第20図４の「宴楽□清」などや、22図５は双魚文などの吉宝文、22図13は梵字文である。施文文様は外体面に蓮華唐草、牡丹唐草、菊花唐草、などの花唐草を施すものが多く、これらのほとんどが、ラマ式蓮弁文や龍文、福字、壽字などと組合せている。内底面の文様は圏線に花卉文が最も多かった。23図21～24に示すものは福建、広東窯系の一群である。口径が10cm、前後は小碗、口径23cm以上のものは鉢に含めた。

第5表a　染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第19図 図版15 1	12.5 － －	碗	口縁	外体面に二条の横線と龍を配している。	15後～16中	薄青呉須暗	直口口縁を成す。	B－12 Ⅰ	景徳鎮
第19図 図版15 2	－ － －	碗	口縁	外体面に龍を配し内体面に唐草文を施している。	15後～16中	薄青灰呉須やや暗	胴部から口縁まで直線状に伸びる。	2トレⅡ	景徳鎮
第19図 図版15 3	14.8 － －	碗	口縁	外体面に二条の横線と獅子を配し、口縁内面に四方襷を巡らしている。	15後～16中	薄青灰呉須やや暗	胴部から直線状立ち上がり口縁で端反する。	2トレⅡ	景徳鎮
第19図 図版15 4	－ － －	碗	口縁	外面に二条の横線と牡丹唐草を施し口縁内面に四方襷に卍を組み合わせた文様帯を巡らす。	15後～16中	薄青呉須やや暗	胴部から直線的に口縁に至り口縁部で僅かに端反する。	表採	景徳鎮
第19図 図版15 5	－ － 6.8	碗	底部	内底面に二条の界線と花文が施している。外体部に横線文を施し高台外面に二条の横線を巡らし高台内に銘款が認められる。	15後～16中	薄青灰呉須やや暗	底内面が僅かに膨らむ、饅頭心を示している。畳付けと畳付け脇を除き施釉するものである。	E－13 Ⅰ	窯不明
第19図 図版15 6	－ － 5.9	碗	底部	内底面に二条の界線と十字花文が施されている。外体面に僅かに文様の一部が認められるが、破損の為詳細は不明である。	15後～16中	薄青呉須薄	腰部でいったん屈曲するものである。畳付けと畳付け脇を除き施釉するものである。	B－15 表採	窯不明
第19図 図版15 7	－ － －	碗	底部	腰部外面にアラベスクと思われる文様を配し内体面に二条の圏線と草花文を施している。	15後～16中	薄青灰呉須やや暗	詳細不明	4トレ Ⅱ	景徳鎮
第19図 図版15 8	－ － －	碗	底部	外体面に唐草と腰部に蓮弁文を配し内体面に二条の圏線と花唐草を施している。高台内に二条の圏線が認められる。	15後～16中	薄青呉須やや暗	詳細不明	1トレⅠ	景徳鎮
第19図 図版15 9	－ － 7.0	碗	底部	外体面に雲文、内底面に界線と雲、鳥文と唐草文を配している。高台脇と高台の外面と外面高台ぎわに横線を巡らしている。高台内に二本の圏線が認められる。	15後～16中	薄青呉須やや暗	畳付けと畳付け内側脇をのぞく、全面に施釉。	表採	景徳鎮
第19図 図版15 10	－ － 5.2	碗	底部	外体面と内体面に唐草を施し、内底面に幅の異なる二本の界線と草花文を配している。高台外面に横線を巡らしている。	15後～16中	薄青灰呉須やや暗	様部が丸く膨らみ胴部に至るものと思われる。釉の範囲は畳付け畳付脇以外、高台内を含む全面に及ぶ。	4トレ 表採	景徳鎮
第19図 図版15 11	－ － 7.0	碗	底部	内底面に二本の界線と如意雲、鳥文と唐草文を配している。高台ぎわと高台の外面と外面高台脇に横線を巡らしている。高台内に圏線が認められる。	15後～16中	薄青灰呉須やや暗	高台形は先端部分がやや丸みを帯びた方形を成す。釉の範囲は高台内面の一部と畳付けをのぞく、全面に及ぶ。	4トレ Ⅱ	景徳鎮
第19図 図版15 12	－ － 7.0	碗	底部	内底面に二本の圏線と雲鳥文を配している。高台脇と高台の外面と外面高台ぎわに横線を巡らしている。高台内に二本の圏線が認められる。	15後～16中	薄青呉須やや暗	高台形は先端部分が丸みを帯びた方形を成す。釉の範囲は畳付けと畳付け内側脇をのぞく、全面に及ぶ。	2トレⅠ	景徳鎮
第19図 図版15 13	18.0 7.6 7.8	碗	口～底	外体面に蓮華唐草を配し胴腰部にラマ蓮弁を配する。口縁内と内底に二条の横線による界線を巡らし中に花唐草文を施す。高台内に銘款がみられるが破損のため詳細は不明。	16中～後	薄青呉須やや暗	腰部がやや張り体部が直線状に伸び口縁で端反する器形をしめす。	C－8 Ⅰ	景徳鎮
第19図 図版15 14	14.9 6.9 6.8	碗	口～底	外体面に界線と蓮華唐草を配し胴腰部にラマ連弁を配する。口縁内に二条の界線を巡らし中に花唐草文を施している。内底面に二条の圏線と草花文を配し、高台内に崩れた文字の銘款がみられる。	16中～後	薄青灰呉須やや明	体部は腰部から開きながら真っ直ぐ立ち上がり口縁で僅かに端反する。	B－8 Ⅰ	景徳鎮
第19図 図版15 15	14.8 5.3 6.3	碗	口～底	外体面に界線と蓮華唐草を配し胴腰部にラマ連弁を配する。口縁内に二条の横線による界線を巡らし中に花唐草文を施す。内底面に二条の圏線と草花文を配している。高台内に「」の銘款がみられる。	16中～後	薄青灰呉須滲んで明	体部が直線状に外側に伸びるように口縁に至り口縁は端反を示す。	B－8 Ⅰ	景徳鎮
第19図 図版15 16	9.6 4.8 4.7	小碗	口～底	外体面に蓮華唐草を配し、口縁内に二条の横線による界線を巡らし中に花唐草文を充填する。内底面に草花文と二条の圏線を施す。高台内に銘款がみられるが破損のため詳細は不明。	16中～後	薄青灰呉須やや明	体部が直線状に外側に伸びるように口縁に至り口縁は端反を示す。	B－9 Ⅰ	窯不明
第19図 図版15 17	9.7 4.5 4.8	小碗	口～底	外体面に蓮華唐草を配し、口縁内に二条の横線による界線を巡らし中に花唐草文を充填する。内底面に草花文と二条の圏線を施している。高台内に銘款がみられる。	16中～後	薄青灰呉須やや明	体部が直線状に外側に伸びるように口縁に至り口縁は端反を示す。	B－8 Ⅰ	窯不明
第19図 図版15 18	9.9 4.6 4.3	小碗	口～底	外体面に蓮華唐草を配し、口縁内に二条の横線による界線を巡らし中に花唐草文を充填する。内底面に草花文と二条の圏線を施している。高台内に銘款がみられる。	16中～後	薄青灰呉須やや明	体部が直線状に外側に伸びるように口縁に至り口縁は端反を示す。	B－8 Ⅱ	窯不明
第19図 図版15 19	14.8 6.8 6.8	碗	口～底	外底面に界線と蓮華唐草を配し胴腰部にラマ連弁を配する。口縁内に二条の横線にる界線を巡らし中に花唐草文を施す。内定面に二条の横線による界線を巡らし中に花唐草文を施す。内底面に二条の圏線が認められる。	16中～後	薄青灰呉須やや明	体部は腰部からやや開きながら真っ直ぐ立ち上がり口縁で僅かに端反する。	B－8 Ⅰ	景徳鎮
第19図 図版15 20	11.8 － －	小碗	口縁	外体面に界線と蓮華唐草を配するものである。口縁内に二条の横線による界線を巡らし中に花唐草文を施す。口唇部に帯状の淡い呉須を施す。	16中～後	薄青灰呉須やや明	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁で内彎する。	B－8 Ⅰ	景徳鎮

第５表ｂ　染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区 ・ 出土層	産地窯
第20図 図版16 1	19.5 7.6 7.8	碗	口～縁	口縁部に二条の界線を巡らし、丸形の壽に蓮華唐草を配するものである。内底面に二条の界線を施している。	16 中 ～前	薄青灰呉須やや暗	口縁が直口した蓮子碗	C－8 Ⅰ	窯不明
第20図 図版16 2	14.8 － －	碗	口縁	外体面に二条の界線を巡らし、丸形の壽に蓮華唐草を配するものである。口縁内面に二条の界線を施している。	16 中 ～ 17 前	薄青呉須やや明	口縁は直口を成す。	TP11 Ⅰb	景徳鎮
第20図 図版16 3	－ － 7.3	碗	底部	外体面に丸形の壽に蓮華唐草を配するものである。内底面に二条の圏線と草花文を施す。高台際と高台に界線を巡らす。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや暗	底部は蓮子碗型を成す。	C－8 Ⅰ	景徳鎮
第20図 図版16 4	－ － 7.3	碗	底部	内底面に菊唐草を配するものである。高台の外面と高台内に界線を施し高台内に「宴楽□清」の銘款が認められる。	16代	薄青呉須やや明	高台形は先端部分がやや丸みを帯びた方形を成す。釉の範囲は高台内面の一部と畳付けを除き全面に及ぶ。	4トレ Ⅰ	景徳鎮
第20図 図版16 5	－ － －	碗	口縁	外体面に二条の界線を巡らし、如意頭に唐草を配するものである。口縁内面に二条の界線を施している。	16 中 ～後	薄青呉須やや明	口縁がやや内彎するものである。	2トレⅡ	景徳鎮
第20図 図版16 6	－ － 6.0	碗	底部	外体面に唐草を配するものである。内底面に二条の界線を配し、草花文を施す。	16 中 ～ 17 後	薄青呉須やや明	底部は蓮子碗型を成す。	B－8 Ⅱ	景徳鎮
第20図 図版16 7	－ － 5.2	小碗	底部	腰部と高台際に界線を巡らし更に高台外面に呉須を帯状に施している。内底面に二条の圏線を巡らしその内側に不明な文様を配し更に円の構図の中に方形の枠と文字なのか不明な文様を入れている。外体面の文様は一部認められるが破損のため詳細不明。	16 中 ～後	薄青灰呉須やや明	底部は、饅頭心を示し、高台の高さが高台内と外で異なる。畳付けを除き施釉するものである。	TP7 Ⅱ	窯不明
第20図 図版16 8	－ － 4.0	小碗	口～縁	外体面に唐草、内底に丸形の壽を配している。	16 中 ～後	薄青灰呉須やや明	底部は中間タイプ	TP1 2Ⅰ	窯不明
第20図 図版16 9	9.4 － －	小碗	口縁	外体面に界線と唐草と副字を配し、口縁内に界線を施すものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	口縁がやや内彎するものである。	2トレ 表採	景徳鎮
第20図 図版16 10	－ － 4.0	小碗	底部	外体面に唐草、内底に丸形の壽を配している。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	底部は中間タイプ	4トレ Ⅱ	景徳鎮
第20図 図版16 11	9.3 － －	小碗	口縁	外体面に界線と唐草と副字を配し、口縁内に界線を施すものである	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁で端反する。	2トレⅠ	景徳鎮
第20図 図版16 12	10.2 － －	小碗	口縁	外体面に唐草文を施すものである。	16 中 ～後	薄青灰呉須やや明	体部が直線状に外側に伸び、口縁は端反を示す。	B－8 Ⅰ	窯不明
第20図 図版16 13	9.4 4.8 4.8	小碗	口～縁	口縁部に二条の界線を巡らし、外体面に龍と花唐草を配するものである。内底に二条の界線と草花文を施すものである。高台の外面と高台内に二条の圏線を配し、方形の枠に花詰めの銘款が施すものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁で端反する。	4トレ Ⅰ	景徳鎮
第20図 図版16 14	9.8 5.0 5.0	小碗	口～縁	縁部と高台際に二条の界線を巡らし、花唐草を充填している。内底に二条の圏線と草花文を施すものである。高台内に二条の圏線を配し、方形の枠に花詰めの銘款が認められる。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	部は直線状に開きながら立ち上がり口縁で端反する。	B－11 Ⅰ	窯不明
第20図 図版16 15	10.0 － －	小碗	口縁	外体面と高台際に二条の界線を巡らし、花唐草を充填している。口縁内に幅広の界線を配している。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁で端反する。	4トレ Ⅱ	窯不明
第20図 図版16 16	8.8 － －	小碗	口縁	外体面に二条の界線を巡らし、花唐草を施し口縁内に二条の界線を配し間に連続文様を施している。内底面に二条の圏線と文様をを施すが破損のため構図は不明。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁で端反する。	B－8 Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 1	11.7 － －	碗	口縁	口縁に二条の界線を巡らし、外体面に八宝文を配するものである。内底面に二条の圏線を施している。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁に至る。	TP11 Ⅰ	景徳鎮
第21図 図版17 2	－ － －	碗	口縁	外体面に界線と花唐草を施し口縁内面上部に四方襷を巡らすものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁に至る。	B－8 Ⅰ	景徳鎮
第21図 図版17 3	10.3 － －	碗	口縁	外体面に界線と花唐草を施し口縁内面上部に四方襷を巡らすものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	体部が直線的に立ち上がり、口縁で端反する。口唇部は平坦に整えている。	B－8 Ⅰ	景徳鎮
第21図 図版17 4	－ － －	碗	口縁	外体面に界線と花唐草を施し口縁内面上部に帯条の唐草文を巡らすものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	口縁が端反りを示し、胴部は直線状を成す。	表採	窯不明
第21図 図版17 5	－ － －	碗	口縁	外体面に界線と花唐草を施し口縁内面上部に帯条の唐草文を巡らすものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや明	口縁が端反りを示し、胴部は直線状を示す。	表採	窯不明
第21図 図版17 6	－ － －	碗	口縁	外体面に界線、雷文、雲文を配するものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや暗	口縁が端反りを示し胴部が直線状を成す。	B－8 Ⅱ	窯不明
第21図 図版17 7	－ － －	碗	口縁	外体面に界線と花唐草を施し口縁内面上部に帯条の唐草文を巡らすものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰呉須やや暗	口縁が端反りを示し、胴部は直線状を示す。	表採	窯不明

第５表ｃ　染付観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第21図 図版17 8	－ － －	碗	口縁	外体面に宝文と思われる文様を配し、口縁内面に雷文を施すものである。	16 中 ～ 17 前	薄青灰 呉須やや暗	口縁が端反りを示し胴部が直線状を成す。	２トレ Ⅱ	窯不明
第21図 図版17 9	－ － －	碗	口縁	縁に界線を配し、外体面に花唐草を施すものである。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁に至る。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 10	－ － 4.9	碗	底部	外体面に宝文と思われる文様を配し、高台外面と、高台内、内底面に圏線を施し、内底面に文様を施すものである。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	体部は直線状に開きながら立ち上がり口縁に至る。	表採	景徳鎮
第21図 図版17 11	－ － 7.1	碗	底部	外体面に宝文と思われる文様を配し、高台外面と、高台内、内底面に圏線を施し、内底面に文様を施すものである。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	部は直線状に開きながら立ち上がり口縁に至る。	Ｃ－11 Ⅱ	景徳鎮
第21図 図版17 12	－ － －	碗	底部	外体面に唐草を施し内底面に菊花文配するものである。高台、高台際、高台内に界線が施されている。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	詳細不明	表採	窯不明
第21図 図版17 13	－ － 7.0	碗	底部	外体面に唐草を施し内底面に菊花文配するものである。高台、高台際、高台内に界線が施されている。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	高台は先端に行くほど細く、先端を両側から削り出し畳付けが尖る。畳付けの釉を拭き取っている。	Ｂ－11 Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 14	－ － 7.2	碗	底部	内底面に圏線と菊花を配し、高台内に圏線を施すものである。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	底部が蓮子碗形を成す。高台形は方形を示し先端を外側から僅かに削り出している。釉は畳付けと畳付け脇まで剝ぎ取るものである。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 15	－ － －	碗	口縁	口縁の内外に二条の界線を配し外体面に菊花唐草を施す、内底面に二条の圏線を施している。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	口縁が端反りを示し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	ＴＰ３ Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 16	10.8 － －	碗	口縁	口縁の内外に二条の界線を配し外体面に菊花唐草を施す、内底面に二条の圏線を施している。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	口縁が端反りを示し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 17	－ － 5.0	碗	底部	腰部に蓮弁文を配し、外体面に菊花唐草を施すものである。内底面に梅花を配している。高台と高台内に二条の界線を設け高台内に方形の枠に略字の銘款が認められる。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	高台形は先端に行くほど細くなり更に先端を外側から削り出している。釉は畳付けと畳付け脇まで剝ぎ取るものである。	ＴＰ11 Ⅰｂ	窯不明
第21図 図版17 18	9.2 4.8 4.6		口～底	外体面に界線、雷文、雲文を配し、腰部にラマ蓮弁文を施すものである。高台外面に二条の界線を施している。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	口縁が端反りを示し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	Ｃ－２ Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 19	9.6 － 4.8		口～底	外体面に界線、雷文、雲文を配し、腰部にラマ蓮弁文を施すものである。高台外面に二条の界線を施している。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	口縁が端反りを示し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第21図 図版17 20	11.8 － －	碗	底部	外体面に草花文を配し、腰部にラマ連弁文を施すものである。高台外面に二条の界線を施している。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	高台形は先端の丸く成った方形をしめし、釉は畳付けと畳付け脇まで剝ぎ取るものである。	４トレ Ⅱ	窯不明
第21図 図版17 21	－ － －	碗	胴部	外体面に帯状の渦巻きを連ねた文様を配し、腰部にラマ蓮弁文を施すものである。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	高台形は方形を成すが、先端の外側から僅かに削り出している。釉は畳付けと畳付け脇まで剝ぎ取る。	５トレ Ⅰ	窯不明
第21図 図版17 22	8.8 5.0 4.2	碗	口縁	口縁部と高台に界線を巡らし、外体面に花唐草を充填している。内底には二条の圏線と草花文を施し、高台内に二条の圏線と方形の枠の銘款が認められる。	16 中 ～後	薄青灰 呉須やや暗	口縁は直線状を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台はばち高台状を示し高台脇と高台外面に二条の横線文を施している。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第22図 図版18 1	9.4 － －	小碗	口縁	外体面に二条の界線と蓮華唐草を配するものである。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや明	口縁が端反りを示し、胴部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第22図 図版18 2	9.4 － －	小碗	口縁	外体面に二条の界線と蓮華唐草を配するものである。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや明	口縁が端反りを示し、胴部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第22図 図版18 3	－ － 4.5	小碗	底部	外体面に界線と蓮華唐草を配し、高台内に二条の圏線と銘款が認められる。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや明	台先端の外側を僅かに削り出し、釉は畳付け両側面と畳付けを剝ぎ取るものである。	表採	窯不明
第22図 図版18 4	10.4 － －	小碗	口縁	外体面に宝文と思われる、双魚文を施こすものである。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台は先端で丸みを持つ方形を成す。	Ｃ－９ 表採	景徳鎮
第22図 図版18 5	10.0 4.9 4.3	小碗	口～底	口縁と高台際に界線を巡らし、花唐草を充填している。内底に二条の圏線と花文を施す。高台内に二条の圏線を配し、花文が認められる。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台は先端で丸みを持つ方形を成す。	Ｃ－９ Ⅱ	景徳鎮
第22図 図版18 6	10.4 4.9 4.7	小碗	口～底	口縁と高台際に界線を巡らし、花唐草を充填している。内底に二条の圏線と花文を施す。高台内に二条の圏線を配し、花文が認められる。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台は先端で丸みを持つ方形を成す。	Ｂ－８ Ⅰ	景徳鎮
第22図 図版18 7	10.0 5.1 3.8	小碗	口～底	口縁と高台際に界線を巡らし、花唐草を充填している。内底に二条の圏線と花文を施す。高台内に二条の圏線を配し、花文が認められる。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台は先端で丸みを持つ方形を成す。	Ｂ－８ Ⅰ	景徳鎮
第22図 図版18 8	10.0 5.2 4.3	小碗	口～底	外体面に花唐草文を施し、高台、高台際、内底に圏線を配するものである。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや薄	口縁が直口を成し、胴部から開くような器形になると思われる。	Ｂ－12	景徳鎮
第22図 図版18 9	－ － 4.6	小碗	底部	外体面に花唐草をはいし、高台、高台内、内底に界線を施している。	17 前 ～中	薄青灰 呉須やや薄	胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台は徐々に細くなり先端で丸みを持つ形状を成す。釉は畳付けと畳付けに接する外面を削る。	Ｂ－９ Ⅰ	景徳鎮

第５表ｄ　染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第22図 図版18 10	9.8 － －	小碗	口縁	外体面に界線と宝文と花唐草をはいし、口縁内と内底に二条の界線を施している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	Ｂ－９ Ⅰ	景徳鎮
第22図 図版18 11	－ － 4.4	小碗	底部	高台際に二条の界線を巡らし、花唐草を充填するものである。内底に二条の圏線と花文を施している。高台内に二条の圏線と宝文が認められる。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	残存する胴部の厚みから比較的薄めの器だったと思われる。高台は先端で徐々に細くなり丸みを持つ形状を成し、釉は畳付けと畳付け周辺をふき取っている。	Ｂ－９ Ⅰ	景徳鎮
第22図 図版18 12	－ － 5.6	小碗	底部	外体面に唐草文を施し、高台、高台際、内底に圏線を配するものである。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	高台は先端で徐々に細くなり丸みを持つ形状を成し、釉は畳付けと畳付け周辺をふき取る。	Ｂ－９ Ⅰ	景徳鎮
第22図 図版18 13	－ － 4.4	小碗	底部	外体面に花唐草文を施し、高台、高台際、内底に圏線を配し花文を施している。高台内に四角文銘を施している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	高台は先端で徐々に細くなり丸みを持つ形状を成し、釉は畳付けと畳付け周辺をふき取る。	ＴＰ11 Ⅰ	景徳鎮
第22図 図版18 14	－ － 5.6	碗	底部	外体面と高台に二条の界線を施し、藻魚文を充填するものである。高台、高台際、圏線を配している。高台内に圏線と四角文銘を施している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	部で丸みを持ちながら真っ直ぐ胴部に至る。高台の先端を外面から	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第22図 図版18 15	9.0 4.8 4.6	小碗	口～底	外体面と高台に二条の界線を施し、藻魚文を充填するものである。高台、高台際、圏線を配している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第22図 図版18 16	8.6 4.9 4.2	小碗	口～底	外体面と高台に二条の界線を施し、藻魚文を充填するものである。高台、高台際、圏線を配している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第22図 図版18 17	－ － 6.4	碗	底部	腰部外面に蓮弁文と界線を施し内底見込みに花文、高台外面に界線を施す。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	高台は先端が丸みを持つ形状を成し、釉は全面に施され、畳付けと畳付け周辺はふき取る。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第22図 図版18 18	－ － 5.5	碗	底部	腰部外面に蓮弁文と界線を施し内底見込みに花文、高台外面に界線を施す。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	高台は方形を成し、釉は全面に施され、畳付けと畳付け周辺はふき取っている。	表採	窯不明
第22図 図版18 19	8.4 4.8 3.5	小碗	口縁	外体面の腰部にアラベスクと口縁近くに団花を配する。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁から胴部までは直線的に伸び、胴下部でやや丸みを持ちながら底部に至る。高台は僅かに内彎状を成し畳付けを除き全面施釉である。	表採	窯不明
第22図 図版18 20	－ － 4.1	小碗	底部	外体面の腰部にアラベスクを配する。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	高台は先端が丸みを持つ形状を成し、釉は全面に施され、畳付けと畳付け周辺はふき取る。	４トレ Ⅱ	窯不明
第22図 図版18 21	10.2 － －	小碗	口縁	外体面に界線を施し、鳳凰と宝文を施すものである。口縁内面に圏線を配している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	２トレ Ⅰ	窯不明
第22図 図版18 22	9.8 － －	小碗	口縁	外体面に界線を施し、鳳凰と宝文を施すものである。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は一旦すぼみ胴部で直線状を示す。	５トレ Ⅰ	窯不明
第22図 図版18 23	10.9 － －	小碗	底部	外体面に界線と文様を配し口縁内に界線を施している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第22図 図版18 24	10.8 － －	小碗	底部	外体面に界線と文様を配し口縁内に界線を施している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第22図 図版18 25	9.4 － －	小碗	口縁	外体面に界線と文様を配し口縁内に界線を施している	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	Ｅ－１ ３	窯不明
第22図 図版18 26	10.0 － －	小碗	口縁	外体面に界線と花唐草を配し、内底面に圏線を巡らしている。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第22図 図版18 27	9.7 － －	小碗	口縁	外体面に花唐草をはいし、口縁に界線を施している。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は直口を成し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。	表採	窯不明
第22図 図版18 28	－ － －	小碗	口縁	外面に葡萄唐草を施し口縁内面に幅弘の界線を巡らす。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁は端反りを示し胴部は直線状を成す。	Ｂ－８ Ⅰ	景徳鎮
第22図 図版18 29	－ － －	碗	口縁	外体面に唐草を施すものである。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁はやや端反を成す。	表採	景徳鎮
第22図 図版18 30	－ － －	碗	口縁	外体面に唐草を施すものである。	17前～中	薄青灰呉須やや薄	口縁はやや端反を成す。	表採	景徳鎮
第23図 図版19 1	19.8 － －	碗	口縁	外体上位に唐草の文様帯を廻らしその下に箆彫りの蓮弁文を施している。	17後～18	薄青呉須やや暗	口縁から胴部までは直線的に伸びる。	表採	景徳鎮
第23図 図版19 2	16.8 － －	碗	口縁	体部に界線を巡らし中に花文と点描による陰影を施し、更に葦と思われる文様を施している。口縁内面に二条の界線を配している。	17中～後	薄青呉須やや暗	口縁から胴部までは直線的に伸び、胴下部でやや丸みを持ちながら底部に至る。	４トレ Ⅱ	窯不明
第23図 図版19 3	13.0 － －	碗	口～底	外体部に界線と牡丹と雲を施し腰部には蓮弁文を配するものである。内底面に圏線と外体部と同一の文様構成を施している。	17中～後	薄青呉須やや暗	口縁から胴部までは直線的に伸び、胴下部でやや丸みを持ちながら底部に至る。	ＴＰ６ Ⅱ	窯不明

第５表ｅ　染付観察一覧

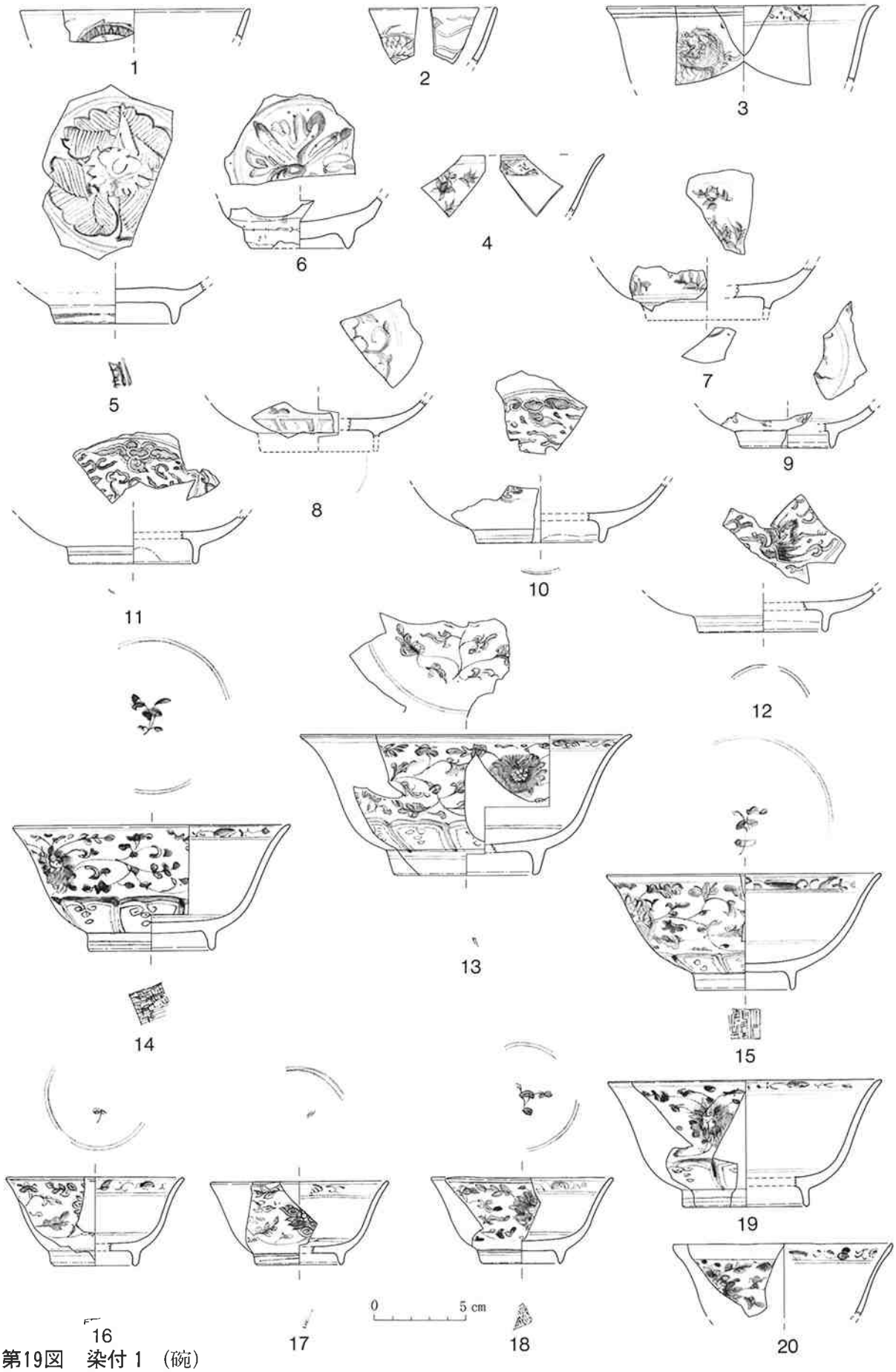
凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第23図 図版19 4	－ － 7.3	碗	底部	外体部に界線と牡丹と雲を施し腰部には蓮弁文を配するものである。内底面に圏線と外体部と同一の文様構成を施している。高台内に圏線を施している。	17 中～後	薄青呉須ややや明	腰部から胴にかけ全体に丸みをもち、高台は外開きになり先端の外面を削り出している。釉は畳付け周辺を除き全面施釉。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 5	－ － 5.5	碗	底部	外体部に界線と牡丹と雲を施し腰部には蓮弁文を配するものである。内底面に圏線と外体部と同一の文様構成を施している。高台内に圏線を配し吉祥文の双魚文を施している。	17 中～後	薄青呉須ややや暗	高台は外開きになり先端の外面を削り出している。釉は畳付け周辺を除き全面施釉。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 6	－ － 6.8	碗	底部	部分に葦と思われる文様を施し、内底面に湖面に映る雁の群と葦、水鳥などを描き、高台内に圏線と「大明宣徳年」の銘款が認められる。	17 中～後	薄青呉須ややや暗	高台は先端が丸みを持つ形状を成し、釉は全面に施され、畳付けと畳付け周辺はふき取っている。	ＴＰ３ 黒土	景徳鎮
第23図 図版19 7	9.4 － －	小碗	口縁	外内体面に仙芝祝寿文を施し、口唇部に界線を施す。	17 中～後	薄青呉須ややや暗	口縁は端反りを示し胴部は直線状を成す。	Ｂ－８ Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 8	－ － 4.2	小碗	底部	外内体面と内底面に仙芝祝寿文を施し、高台と高台内に圏線を施し銘款を施す。	17 中～後	薄青呉須ややや暗	胴部は比較的まっすぐ立ちあがる。高台は先端で丸みを持ち、釉は畳付け以外全面施釉。	Ｂ－11 Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 9	8.0 － －	小碗	口縁	外体面に界線と崩れた寿字を施す。口縁内にも二条の界線が施されている。	17 中～後	薄青呉須ややや明	口縁から胴部まで直線的に伸びるものである。	表採	窯不明
第23図 図版19 10	7.6 － －	小碗	口縁	外体面に人物、風景が見られる。口縁内面に四方襷と松と梅を組み合わせた文様帯を巡らしている。内底面に圏線が認められる。	17 後～18 前	薄青呉須ややや暗	口縁から胴部までは直線的に伸び、胴下部でやや丸みを持ちながら底部に至る。	Ｂ－８ Ⅰ	景徳鎮
第23図 図版19 11	8.3 － －	小碗	口縁	外体面に松、口縁と内底面に圏線が認められる。	17 後～18 前	薄青呉須ややや暗	口縁から胴部までは直線的に伸び、胴下部でやや丸みを持ちながら底部に至る。	ＴＰ11 Ⅰｂ	景徳鎮
第23図 図版19 12	－ － －	碗	胴部	外体面に馬文を施すものである。被熱を受けている。	17後	薄青呉須ややや暗	不明	Ｂ－９ Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 13	9.7 4.8 4.1	小碗	口～底	外体面に仙芝祝寿文を施し、口唇と高台に界線を施す。内底面に圏線と花卉を施している。高台内に圏線と款識がみとめられる。	17 中～後	薄青呉須ややや暗	腰部が丸みを持ち胴部はやや開きながら直線的のたちあがる。口縁部は端反を成す。	２トレ 表採	窯不明
第23図 図版19 14	11.0 － －	碗	底部	外体面に界線と山水文を施している。	17 末～18 前	薄青呉須ややや暗	口縁から胴部まで直線的に伸びるものである。	Ｂ－８ Ⅰ	景徳鎮
第23図 図版19 15	－ － 6.5	碗	底部	外体面に草文、高台内に岩と葦に図を施している。高台内に兎？と思われる文様がある。	17代	薄青呉須ややや暗	高台が細く高台際からかなり急激に立ち上がる。	５トレ Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 16	－ － －	碗	口縁	外体面に界線と鳳凰文を施すものである。口縁内にも界線が施されている。	17 後～18 初頭	薄青呉須ややや明	口縁から胴部まで直線的に伸びるものである。	４トレ Ⅱ	景徳鎮
第23図 図版19 17	－ － 4.2	碗	底部	外体面腰部に松、竹、梅が描かれ、内底面と高台内に圏線と花卉が認められる。	17 末～18 前	薄青呉須ややや明	高台は先端が丸みを持つ形状を成し、釉は全面に施され、畳付けをふき取っている。	表採	景徳鎮
第23図 図版19 18	－ － －	碗	口縁	外体面腰部に松、竹、梅が描かれ、内底面と高台内に圏線と花卉が認められる。	18 前～中	薄青呉須ややや暗	高台は先端が丸みを持つ形状を成し、釉は全面に施され、畳付けをふき取っている。	表採	景徳鎮
第23図 図版19 19	－ － 6.1	碗	底部	外体面に界線と唐草と団花が見られる。口縁内にも二条の界線が施されている。	18 前～中	薄青呉須ややや暗	胴部から開きながら伸び口縁に至る。直口を成す。	表採	景徳鎮
第23図 図版19 20	15.0 － －	碗	口縁	外体面に界線と八宝文と思われる文様が施されている。口縁内と内底面に二条の圏線が施され、見込みに波頭文と思われる文様が施されている。	18 前～中	薄青灰呉須ややや暗	口縁が端反りを示し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台形はやや方形を成し、内底まで釉が掛かる。畳付けと周辺の釉はふき取られ、砂目と思われる砂粒が見られる。	Ｃ－８ Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 21	4.6 － －	碗	底部	外体面に団花を施している。	18 前～中	薄青灰呉須ややや暗	腰部が丸みをもち、高台は畳付と周辺の釉をふき取っている。	Ｃ－８ Ⅰ	窯不明
第23図 図版19 22	15.2 6.0 8.2	碗	口～底	外体面に界線と八宝文と思われる文様が施されている。口縁内と内底面に二条の圏線が施され、見込みに波頭文と思われる文様が施されている。	18 前～中	薄青灰呉須ややや暗	口縁が端反りを示し、胴下部で丸みを持ちながら底部に至る。高台形はやや方形を成し、内底まで釉が掛かる。畳付けと周辺の釉はふき取られ、砂目と思われる砂粒が見られる。	Ｃ－８ Ⅰ	窯不明
第24図 図版20 1	15.6 － －	碗	口縁	外体面に草花文を施している。	18 前～中	薄青灰呉須ややや暗	胴部が開きながら口縁に至り端反する。	５トレ Ⅰ	窯不明
第24図 図版20 2	－ － 6.4	碗	底部	外体面と見込みに草花文を施し、高台外面と内底面に圏線を配するものである。	18 前～中	薄青灰呉須ややや暗	底部は見込み部分が盛り上がる饅頭心を示す。高台は先端を丸く整え、畳付けの釉をふき取っている。	ＴＰ６ Ⅳ	窯不明
第24図 図版20 3	15.3 － －	碗	口縁	外体面に菊唐草文を施している。	18 前～中	薄青呉須滲んでいる	胴部から開きながら伸び直口口縁を成す。	２トレ Ⅰ	窯不明
第24図 図版20 4	16.0 － －	碗	口縁	外体面に梅花を帯状にデフォルメした半梅花文を施している。	18代	薄青灰呉須ややや暗	腰部からやや開きながら立ち上がり口縁に至たり、口縁は端反する。	表採	福建南部
第24図 図版20 5	－ － 7.2	碗	底部	腰部に蓮弁文を施している。	18代	薄青灰呉須ややや暗	高台は先端が面取りされ、釉は高台内まで施されている。畳付けから外面際を剝ぎ取る。	２トレ Ⅰｂ	福建南部

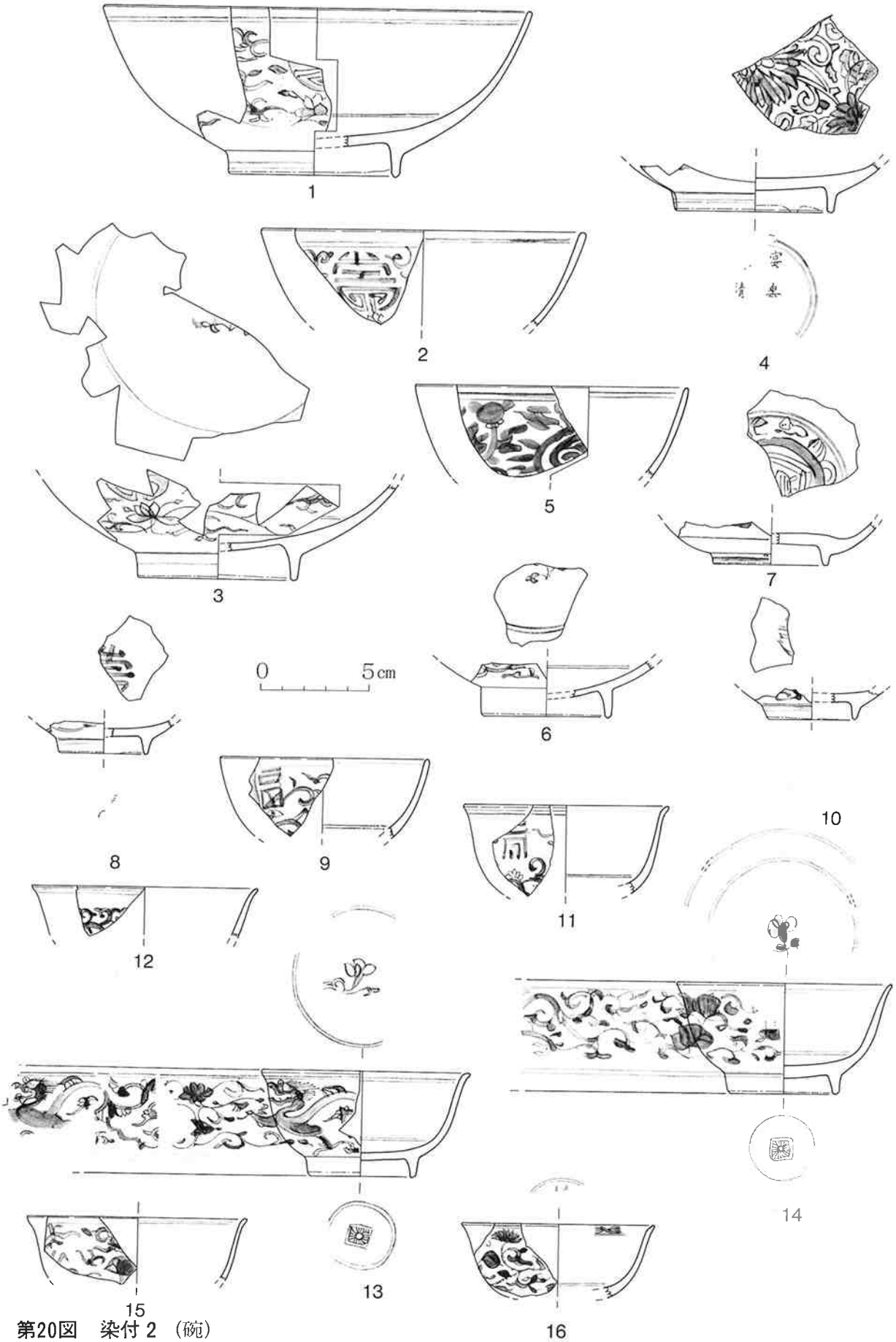
第５表ｆ　染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

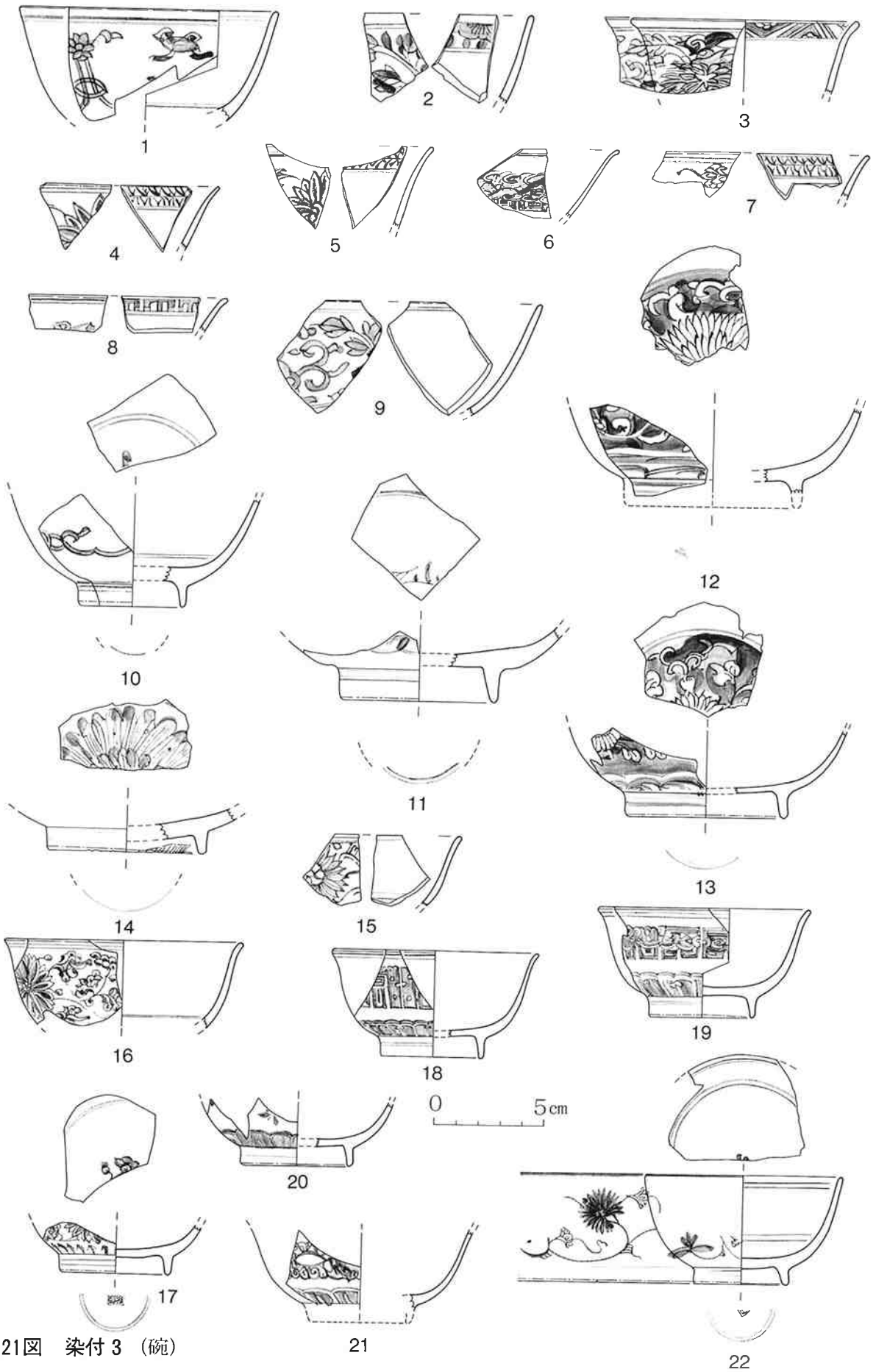
挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第24図 図版20 6	13.6 － －	碗	口縁	外体面に唐草文を施している。	18代	薄青灰呉須やや暗	腰部からやや開きながら立ち上がり口縁で僅かに内彎する。	表採	福建南部
第24図 図版20 7	11.4 － －	小碗	口縁	外体面に草花文を施し、口縁と腰部内底面に界線を配するものである。	18 前～中	薄青灰呉須やや暗	胴部から開きながら伸び口縁が端反るものである。	1トレⅡ	窯不明
第24図 図版20 8	－ － 7.6	碗	底部	外体面と内体面及び内底面に雲龍文を施すものである。高台内に二条の圏線を施している。	18 前～中	薄青灰呉須やや暗	高台は先端を丸く整え、畳付けの釉をふき取っている。	C－9Ⅰ	窯不明
第24図 図版20 9	16.0 6.1 7.7	碗	口～底	外体面の口縁部分と胴下部に界線、を配し、その間に唐草、を充填している。腰部に蓮弁文を配している。口縁内面と内底面に圏線を配する。	18代	薄青灰呉須やや暗	腰部からやや開きながら立ち上がり口縁に至たり、口縁は端反する。高台は外側に開く形を示し、畳付けを丸く整え畳付けの釉を剝ぎ取る。	4トレⅡ	福建南部
第24図 図版20 10	9.8 － －	小碗	口縁	外体面上面に二条の界線を上下二段配し中に羽状文を充填する文様帯を配しその下に花弁を配する。	18代	薄青灰呉須やや暗	腰部から開きながら伸びるように立ち上がり口縁に至たる。口縁は端反する。	C－9Ⅰ	景徳鎮
第24図 図版20 11	8.8 － －	小碗	口縁	外体面上面に二条の界線を上下二段配し中に草文と思われる文様を施している。その直下に七宝文を施し、腰部に蓮弁を施している。	18代	薄青灰呉須やや暗	腰部からやや開きながら立ち上がり口縁に至たる。口縁は直口を成し、口唇の釉を剝ぎ取る。	C－9Ⅰ	福建南部
第24図 図版20 12	－ － 4.7	碗	底部	内底に圏線を配し見込み部分に草花文を施している。	18 前～中	薄青灰呉須やや暗	高台がやや内向する形を示す。高台外面に面取りを施し、釉は高台内まで施し畳み付けを含む高台尖端は釉剝ぎしている。	表採	窯不明
第24図 図版20 13	11.0 － －	小碗	口縁	外体面に雲文を配するものである。	18 前～中	薄青灰呉須やや暗	胴下部から開きながら口縁に至り、直口を成す。	C－9Ⅰ	景徳鎮
第24図 図版20 14	12.0 － －	小碗	口縁	外体面と内体面に龍文を施すものである。	18 中葉～後	薄青灰呉須やや暗	胴部から開きながら口縁に至り、直口を成す。	E－13 Pピット 5Ⅰ	福建？
第24図 図版20 15	9.4 － －	小碗	口縁	外体面上面に二条の界線を上下二段配し中に草文を施している。口縁内面に界線を施してえる。	18代	薄青灰呉須やや暗	腰部からやや開きながら立ち上がり口縁に至たる。口縁は直口を成し、口唇の釉を剝ぎ取る。	表採	福建徳化窯系
第24図 図版20 16	10.0 4.4 5.2	小碗	口～底	外体面に梵字を満遍なく施すものである。口縁内と内底に圏線を巡らし見込みに梵字を施している。高台内に圏線と四角銘款を施している。	18 末～19 初頭	薄青灰呉須やや暗	腰部からやや開きながら立ち上がり口縁に至たり、口縁は端反する。高台は畳付けを丸く整え畳付けの釉を剝ぎ取っている。	4トレⅡ	窯不明
第24図 図版20 17	10.2 4.0 4.8	小碗	口～底	外体面に梵字を満遍なく施すものである。口縁内と内底に界線を巡らし見込みに梵字を施している。高台内に圏線と銘款を施している。	18c～19 初頭	薄青灰呉須やや暗	腰部からやや開きながら立ち上がり口縁に至たり、口縁は端反する。高台は先端の外側を面取りし、畳付けの釉を剝ぎ取る。	表採	福建徳化窯系
第24図 図版20 18	11.4 5.8 6.3	碗	口縁	外体面に界線、団花、唐草、を施し、腰部に蓮弁文を配している。口縁内に界線と内底面に団花と唐草高台内に二条の圏線と花弁を施している。	18代	薄青灰呉須やや明	部から僅かに開きながらやや真っ直ぐ立ち上がり口縁に至たる。口縁は直口を成す。高台は外側に開く形を成し先端外面を面取りし畳付けが尖るものである。釉は全面に施され、たたみ付けの外面側を剝ぎ取る。	B－8Ⅰ	窯不明
第24図 図版20 19	8.6 5.5 4.6	小碗	底部	外体面に界線、団花、唐草、を施し、腰部に蓮弁文を配している。口縁内に界線と内底面に団花と唐草高台内に二条の圏線と四角銘款を施している。	18代	薄青灰呉須やや明	高台は外側に開く形を成し先端外面を面取りし畳付けが尖るものである。釉は全面に施され、たたみ付けの外面側を剝ぎ取るものである。	表採	窯不明
第24図 図版20 20	－ － 4.2	小碗	口～底	腰部に菱型に房のようなものをつけた文様を施している。	18 末～19 前	薄青灰呉須やや暗	台は先端の外側を面取りし、畳付けの釉を剝ぎ取っている。	表採	窯不明
第24図 図版20 21	13.6 5.5 7.0	小碗	口～底	外体に筆書きの文様を施している。	18 前～中	薄青灰呉須やや暗	底部から口縁に向かって真っ直ぐに外に開くように立ち上がり、直口口縁を呈する。高台は高台内から斜めに削り出し先端が角ばった三角を成す釉は体部に掛、内底と外ていは露胎している。	表採	広東窯系
第24図 図版20 22	14.1 5.6 7.4	碗	口～底	外体に筆書きの文様を施している。	18 前～中	薄青灰呉須やや暗	底部が比較的大きく腰部から口縁に向かって真っ直ぐに外に開くように立ち上がり、直口口縁を呈する。高台は高台内から斜めに削り出し先端が角ばった三角を成す釉は体部に掛、内底と外ていは露胎している。	4トレⅠ	広東窯系
第24図 図版20 23	14.8 － －	碗	口縁	外体にコンニャク印判の文様を施している。	18 前～中	薄黄灰呉須やや暗	腰部から口縁に向かって真っ直ぐに外に開くように立ち上がり、直口口縁を呈する。	B－9Ⅱ	広東窯系
第24図 図版20 24	14.0 17.6 4.7	碗	口～底	外体に筆書きの文様を施している。	18 前～中	薄灰呉須やや暗	底部が比較的大きく腰部から口縁に向かって真っ直ぐに外に開くように立ち上がり、直口口縁を呈する。高台は高台内から斜めに削り出し先端が角ばった三角を成す釉は体部に掛、内底と外ていは露胎している。	TP11 Ⅰb	広東窯系
第24図 図版20 25	14.0 － －	碗	口縁	外体に筆書きの文様を施している。	18 前～中	薄灰呉須やや暗	腰部から口縁に向かって真っ直ぐに外に開くように立ち上がり、直口口縁を呈する。	B－ B－9Ⅰ	広東窯系
第24図 図版20 26	13.0 － －	碗	口縁	外体にコンニャク印判の文様を施している。	18 前～中	薄青灰呉須やや暗	腰部から口縁に向かって真っ直ぐに外に開くように立ち上がり、直口口縁を呈する。	B－9Ⅰ	広東窯系



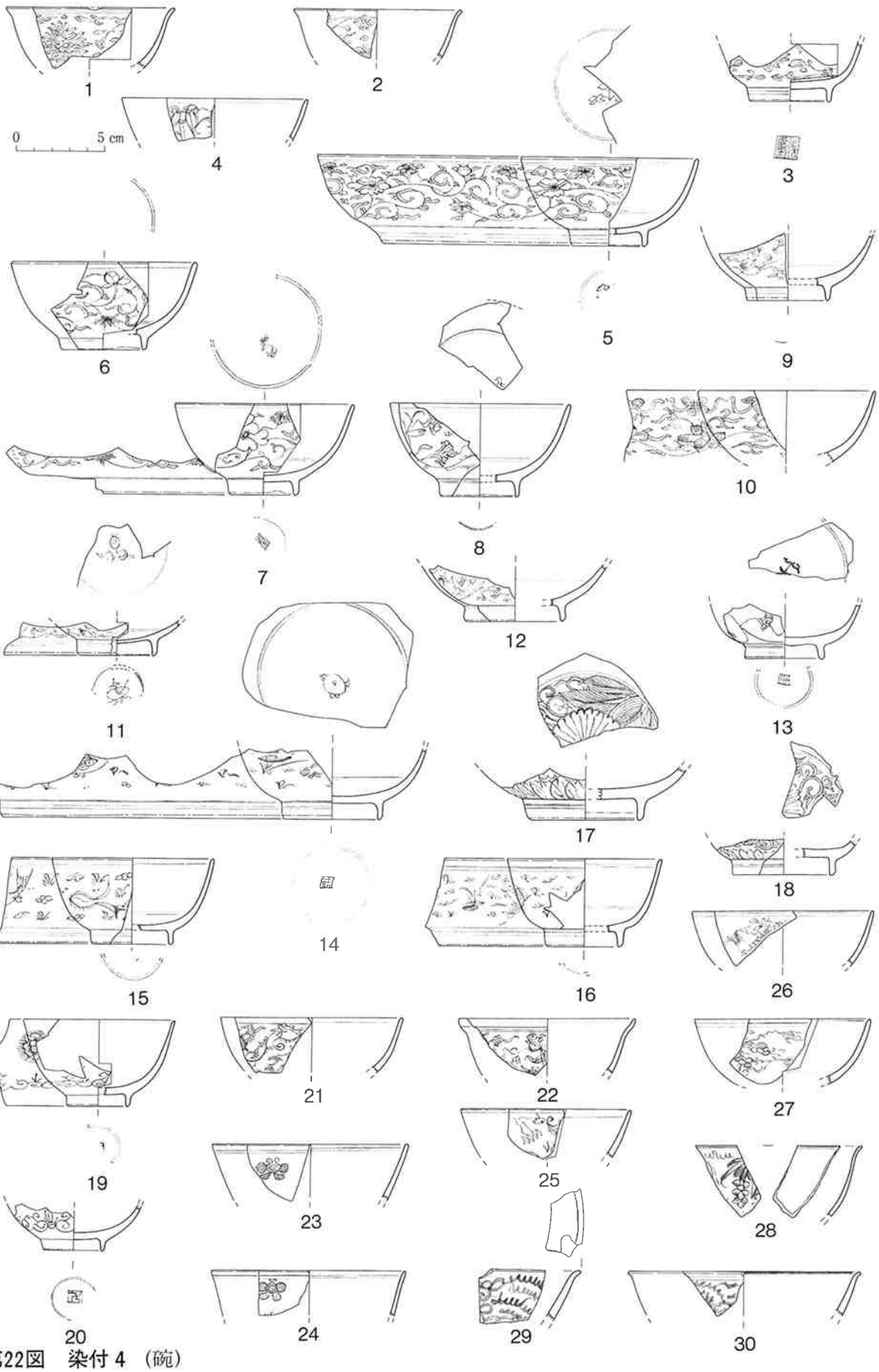
第19図　染付 1 （碗）



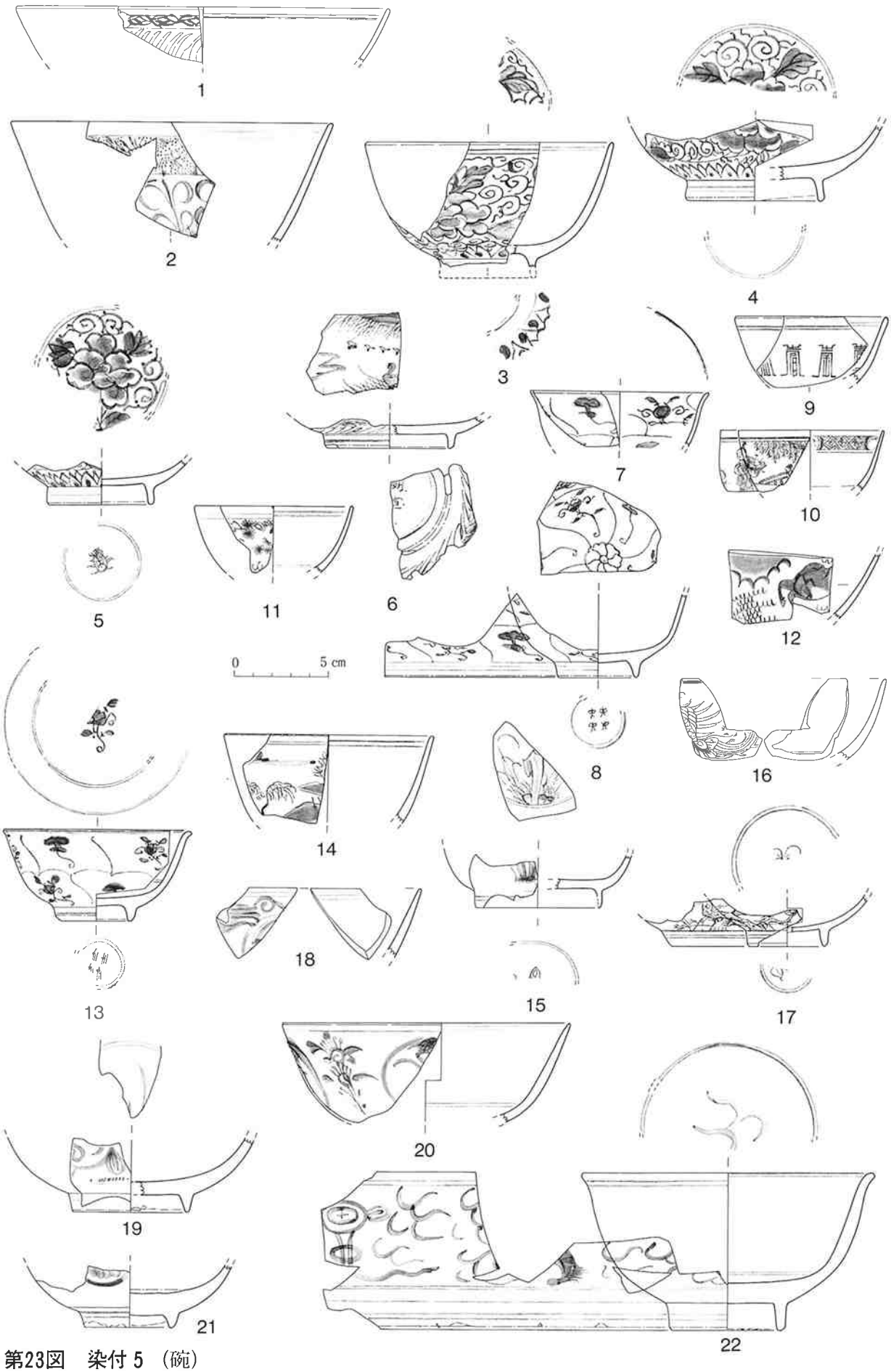
第20図　染付 2 （碗）



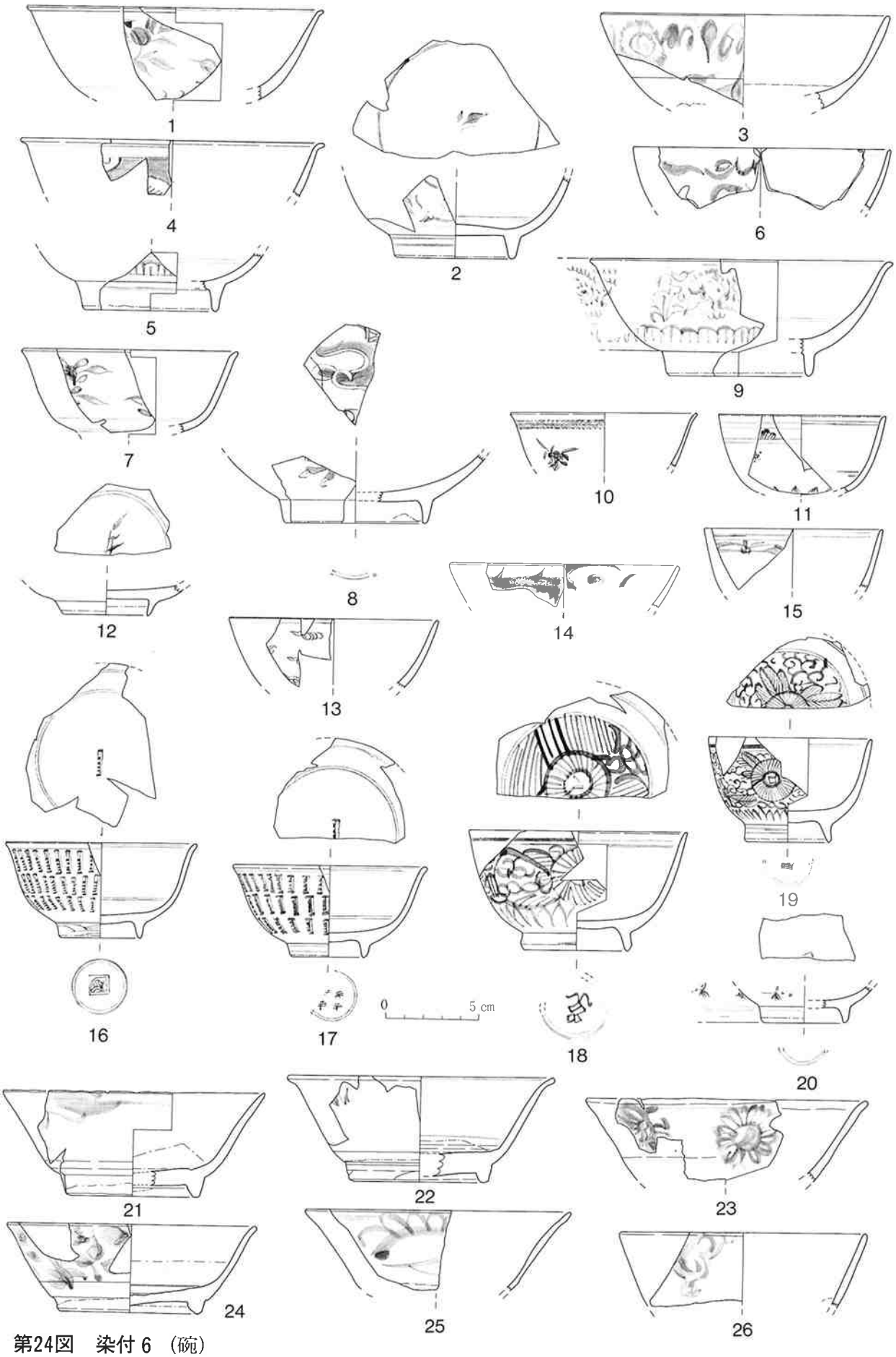
第21図　染付３（碗）


0 5 cm
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第22図　染付 4 （碗）



第23図　染付５（碗）



第24図　染付 6 （碗）

皿（第25～27図１～６）

総数147点が出土し、うち５点が全形を窺うことができた。器形別には口縁端反りの皿、口縁直口の皿、鍔縁の皿輪花皿、角皿がある。底部は高台底、碁笥底が見られ、高台を持つ皿の大方は低めの高台であったが、第24図20、21のような高い高台のものもみられた。25図２は外底に鉋痕を顕著に残すものである。釉は高台畳付を除き全面に施す。外底に銘款を施すものはほとんどが四角形の枠に１字を記すものであった第24図14、17、20、25図１・９・25・13は「和美」の文字がみられた。

杯（第27図７～32）

杯は総数36点が出土し内６点が復元可能なものであった。

30～31は短筒型腰折れの杯である。外面中央に隆圏線を廻らし上段に花鳥折枝文を、下段に如意頭繋ぎ文を配している。内底面に梅らしき樹木文を配する。30～31は腰部からやや開きながら真っ直ぐ立ち上がり、口縁が直口をなすもので、８は外体面に二条の圏線文と宝文を施している。10、11は花唐草を施している。18と19は外体面に雲龍文を施す。24～28は腰部から逆八の字に開くように立ち上がり、直口口縁をなすものである。24～27は内面に山水文を施文し、24は錆釉の覆輪を施している。９、13、15、17、20～23、29は端反りの口縁を呈するものである15は外体面に圏線と草花文を施文している20､21は外体面に豹文を施し９､22､23は梵字文を施している。14に示した底部は高台内に「成□年製」の字款がみられる。

大鉢（第27図33・34、第28図）

総数218点が出土し、内３点が復元可能なものであった。

33 、に示すものは腰部に丸みを持ち口縁で一旦寄って外反する。口唇は尖り、口縁が輪花を呈する。器壁は薄く体部は蓮弁状の凹凸を有する。外体面の口縁上部に水草帯文を配し体部に雲文と唐草、口縁内面に亀甲つなぎを廻らしている。15ｃ後半～16ｃ中頃に位置づけられる。腰部側面に、窓文を施し、中に草花文を配している。内底面に牡丹に蝶の文様を施すものである。34は高台がやや内湾を呈する。17ｃ後半に位置づけられる。33、34のいずれも景徳鎮窯系の鉢である。

28図１～14に示すものは口径が29.6cm～37cmとかなり大型なものである。いずれも体部が腰部から外側に開きながら立ち上がり、口縁で外反する。高台は角張った作りで、高台の内側から削り出し面取りしている。釉は外底以外の全面に施釉後、内底面を蛇の目状に剝ぎ取るものである。文様は外体面に草花文を施すもの１、７や福字文を施すもの２、４、14などがあり、内底面は印花による銘款を施すものが多く、瞬、標、萬、嵩、慶の文字が見られた。17ｃ～19ｃに位置づけられる。

壷･瓶（第29図１～17）

壷は総数31点が出土した｡ほとんどが小破片であり､全形をうかがえる資料はなかった｡１～５に示すものは景徳鎮窯系の壷と思われる破片である｡６を除き全て､15ｃ代に位置付けられる｡１～５は胴部資料で､１は芭蕉文､２は窓文､３は人物､４・５は草花文を施している｡６は体部に染付の文様はみられないが､高台内に染付による四角文銘が認められる｡19ｃ代に位置付けられる底部資料である｡畳付に錆釉を施している。

瓶は総数８点が出土し、総べて小破片である。７～12･14～17は景徳鎮窯系の瓶で､13は花枝文を施す漳州窯系の瓶である｡８は口縁がラッパ状に広がる瓶の口縁部分で､外面に草花文が施されている｡９は頚部に芭蕉文、10は雷文に樹木文、14はラマ式蓮弁文を施す瓶胴部片である。15・16は瓶底部であるが、15がラマ式蓮弁文、16は如意頭文を施す。12は山水文を施す胴部片である。17は唐草文を施す底部破片である。

その他の染付（第29図18～23）

18は火炉なのか香炉か判然としないものである｡内面は無釉である。19は景徳鎮窯系の持ち手の付いたボウル状の容器と思われる｡外体面に点描により同遠心状の半円を横位に繰り返し描がく。17ｃ末から18ｃ代に位置付けられる。20は管状の破片であるが、小瓶の可能性が高い。側面に「□堂唄」のような文字が見られる。21・22は蓮華であるが21は受け、22は柄部破片である。共に唐草文を施す。17ｃ前半から17ｃ中頃に位置づけられる｡23は蓋物である。輪状の摘みをもつ。蓋上面に寿文と鋸歯状の文様を施す18ｃ以降に位置付けられる。

参考文献

・小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」　『貿易陶磁研究第２号』　1982年

・金武正紀、宮里末廣他　『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』　今帰仁村教育委員会　1983年

・金城亀信、上原静、城間肇他　『首里城跡京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会　1998年

第５表９　染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第25図 図版21 1	－ 8.6 －	皿	底部	内底面に二条の界線に花鳥文と思われる文様を施している。	15ｃ後半～16ｃ中	薄青呉須やや薄	高台際に横線を巡らし畳付けの釉を掻きとる。	表採	景徳鎮
第25図 図版21 2	12.2 7.1 2.39	皿	口縁～底部	口縁内面と内底面高台内に圏線を巡らし、内底に宝文を施している。外体面にも施文しているが文様部分が破損しているため詳細は不明。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	口縁はまっすぐ開きながら口唇でやや端反る全面に施釉後畳み付けの釉を掻き取っている。	B-9.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 3	－ － 7.0	皿	底部	内底面と高台内に圏線を巡らし、内底に施文しているが文様部分の多くが破損しているため詳細は不明。	15ｃ後半～16ｃ中	薄青呉須やや暗	施釉後、畳み付けの釉を掻き取っている。	表採	景徳鎮
第25図 図版21 4	－ － 2.9	皿	底部	内底面に二条の圏線と、花文を配している。外体面の腰部に芭蕉文を巡らしている。	15ｃ後半～16ｃ中	薄青灰呉須やや暗	外底内にも施釉し、畳み付けの釉は掻き取っている。碁笥底を成す。	表採	景徳鎮
第25図 図版21 5	－ － 2.8	皿	底部	内底面に二条の圏線と、花文を配している。	15ｃ後半～16ｃ中	薄青灰呉須やや暗	外底内にも施釉し、畳み付けの釉は掻き取っている。碁笥底を成す。	T.P.3.Ⅰ	窯不明
第25図 図版21 6	20.2 － －	皿	口縁	口縁に圏線を巡らし、外体に八宝文を施している。	16ｃ中～後半	薄青灰呉須やや暗	体部が丸みを持ちながら外側に開き、口縁で端反る。	B-11.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 7	－ － 5.9	皿	底部	内底面に二条の圏線に荒磯文、を配し高台内には二条の圏線を巡らし、銘款を施している。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや明	全面に施釉後、畳み付けの釉を掻き取っている。	4T.トレ.Ⅱ	景徳鎮
第25図 図版21 8	－ － 5.7	皿	底部	口縁内に幅広の帯を巡らし、内底面に二条の圏線と、荒磯文を施すものである。高台内に二条の圏線を巡らしている。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや明	口縁が体部から屈曲し鍔状を成す。全面に施釉後、畳み付けの釉を掻き取っている。	表採	景徳鎮
第25図 図版21 9	8.3 － －	皿	口縁	体部に唐草文を施している。	16ｃ代	薄青呉須やや暗	体部が内彎し口縁が直口する。	B-5Ⅰ	窯不明
第25図 図版21 10	11.0 － 6.9	皿	口縁～底部	外体面に宝文内体面に雷文を施す。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	体部が内彎し、口縁が端反る。	4.トレ.Ⅱ	景徳鎮
第25図 図版21 11	9.4 － 4.8	皿	口縁～底部	外体面に花卉、内体面に雷文を施す。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	体部が内彎し、口縁端反り。	表採	景徳鎮
第25図 図版21 12	－ － 5.4	皿	口縁	内底面に二条の界線に花文と思われる文様を施している高台内に二条の圏線が認められる。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	低い高台	4.トレ.Ⅱ	景徳鎮
第25図 図版21 13	11.4 － －	皿	口縁	口縁に幅広の帯を巡らし、内底面に二条の圏線が見られる。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	腰部が僅かに、屈曲し鍔広の口縁に至る。	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 14	－ － 5.8	皿	底部	口縁に帯文、内底面に二条の界線にち龍文を施している高台内に二条の圏線と銘款が認められる。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや薄	腰部が僅かに、屈曲し鍔広の口縁に至る。高台は低くやや丸い	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 15	－ － 4.0	皿	底部	内底面に十字花文を施している。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや薄	高台は低い。	6-12P7	窯不明
第25図 図版21 16	－ － 5.8	皿	底部	内底面にホラガイ？を配している。	16ｃ中～後半	薄青灰呉須やや暗	底部は饅頭心になり高台が低く、碁笥底の様相を呈する	表採	窯不明
第25図 図版21 17	－ － 5.4	皿	底部	内底面に二条の界線にち龍文を施している高台内に二条の圏線と銘款が認められる。	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	高台は低くやや丸い	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 18	－ － 12.0	皿	口縁	外体に唐草文、口縁内口唇近くに覆輪	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	体部が丸みを持ちながら外側に開き、口縁で端反る。	表採	窯不明
第25図 図版21 19	－ － 6.2	皿	底部	外体に唐草文、内底に圏線と玉取り獅子	16ｃ中～後半	薄青呉須やや暗	低い高台。	T.P.12・Ⅰ	窯不明
第25図 図版21 20	－ － 5.2	皿	底部	内底面に草花文を施している。 高台内に二条の圏線と銘款を施す。	16ｃ中～17前半	薄青呉須やや明	低い高台。	2トレⅢ	景徳鎮
第25図 図版21 21	－ － 6.2	皿	口縁～底部	内体から内底面に草花文を施している。	16ｃ中～17前半	薄青呉須やや明	腰部に丸みを持たせながら立ち上がり口縁で端反る。高台は細く造りだされ、高台内は高台脇に比べより深く削り出している。	B-9.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 22	－ － 6.2	皿	底部	内底面に二条の圏線に花文を施している。	16ｃ中～17前半	薄青呉須やや暗	25図２１と同じ	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 23	－ － －	皿	口縁	外体面に寿文、口縁内上位に圏線を施している。	16ｃ代	薄青呉須やや暗	口縁端反り	E-12.Ⅰ	窯不明
第25図 図版21 24	－ － －	皿	口縁	外体面に唐草、内体面に芙蓉手文を施こす。	16ｃ代	薄青呉須やや暗	口縁端反り	E-12.Ⅰ	窯不明
第25図 図版21 25	15.2 － －	皿	口縁	外体面に圏線を施し、内体面に龍文を配する。	16ｃ中～17後半	薄青呉須やや暗	腰部に丸みを持たせ口縁で端反る。	1.トレ.Ⅰ	景徳鎮

第５表ｈ　染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第25図 図版21 26	－ － 8.5	皿	底部	体部と内底に有文、高台脇に圏線を施こしている。	16c中～17前半	薄青呉須ややや暗	低い三角の高台。	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第25図 図版21 27	－ － 12.4	皿	底部	内底面に草花文を施している。	16c中～17前半	薄青呉須ややや明	低い三角の高台。	表採	景徳鎮
第25図 図版21 28	－ － －	皿	口縁	外体面に牡丹文を配する。	17 c代	薄青呉須ややや暗	口縁端反り	4．トレ．Ⅱ	景徳鎮
第25図 図版21 29	－ － 11.0	皿	底部	内面に施文しているが詳細不明。 高台内圏線あり。	16c中～17前半	薄青呉須ややや暗	比較的畳み付けは平坦に整えている。	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第26図 図版22 1	－ － 8.9	皿	底部	内底面に二条の圏線と唐草文に宝文を配する内底面に二条の圏線と銘款が認められる。	16c中～17前半	薄青呉須ややや暗	口縁端反り	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第26図 図版22 2	－ － 11.7	皿	底部	内体面に芙蓉手を、内底面に二条の圏線と草花文を施する。	16c中～17前半	薄青呉須ややや明	畳み付け際に砂目が見られる。高台内に放射状の鉋痕が見られる。	C-8.Ⅰ	景徳鎮
第26図 図版22 3	16.3 2.7 9.5	皿	口縁～底部	外体面に八宝文、内体面に宝相華唐草文を施し、内底面に幅広の帯状と線との組み合わせの圏線を配し、草唐草文を施する。	16c中～17前半	薄青呉須ややや暗	口縁端反りでやや浅めのⅢである。低い高台を持ち畳み付けが三角に尖る。内底面に二条の圏線と銘款が認められる。	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第26図 図版22 4	17.6 － －	皿	口縁	内体面に圏線と芙蓉手。	17c後半～8初め	薄青呉須ややや暗	腰部に丸みを持たせながら立ち上がり口縁で端反る。被熱	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第26図 図版22 5	11.8 2.6 6.2	皿	口縁～底部	外体面、内体面、から内底面、共に仙芝祝寿文を施文する。	17 c中～後半	薄青呉須ややや暗	体部は腰部に丸みを持ちつつ外側に開く。口縁は口唇で僅かに端反る。高台は低めで畳み付けを釉剝ぎしている。	D-5．Ⅰ	窯不明
第26図 図版22 6	－ － 6.1	皿	底部	内底面に二条の圏線と水面に泡と波紋が描かれている。高台内に二条の圏線が認められる。	17c末～18c前	薄青呉須ややや暗	高台は低めで畳み付けを釉剝ぎしている。	表採	窯不明
第26図 図版22 7	15.5 3.9 7.5	皿	口縁～底部	内体面、に凡字文を施文、口唇下に一条、内底面に二条の圏線を配する。	18 c後半	薄青呉須ややや暗	高台は低めで畳み付けを釉剝ぎしている。	表採	福建省
第26図 図版22 8	13.4 － －	皿	口縁	内体面に墨はじきによる菊花文を施文している	17c代	薄青呉須ややや暗	体部は丸みを持ち外側に開く。口縁はやや内彎ぎみの直口。	表採	窯不明
第26図 図版22 9	－ － －	皿	底部	内底面に二条の圏線に花鳥文が描かれている。高台内に二条の圏線と四角銘款が認められる。	17 c中～後半	薄青呉須ややや暗	高台を持ち、畳み付けを釉剝ぎしている。	B-8.Ⅰ	窯不明
第26図 図版22 10	11.4 2.4 6.2	皿	口縁～底部	口縁内と内底に二条の圏線、内底面に花文が描かれているものであるが、○図９と同様な文様構成になると思われる。高台内に二条の圏線が認められる。	17 c中～後半	薄青呉須ややや暗	体部は腰部から外側に開くように立ち上がり、口縁は直口する。高台は低めで畳み付けを釉剝ぎしている。	B-8.Ⅰ	窯不明
第26図 図版22 11	12.0 － －	皿	口縁	内体面にたこ唐草を施している	17 c末～18初	薄青呉須ややや暗	体部は真っ直ぐ外側に開くように立ち上がり、口縁は端反り。	TP11 Ⅰa	景徳鎮
第26図 図版22 12	14.0 － －	皿	口縁	内体面、有文、詳細不明。	17 c末～18初	薄青呉須ややや暗	体部は丸みを持ち外側に開く。口縁はやや内彎。	5．トレ．Ⅰ	景徳鎮
第26図 図版22 13	15.6 3.4 8.0	皿	口縁～底部	内体面に帯状文、内底面に「志在書中」を施文する。高台内に「和美」の銘款がある。	18代	薄青呉須ややや暗	体部は腰部に丸みを持ちつつ外側に開く。口縁は口唇で僅かに端反る。高台は低めで先端は三角をなし、釉剝ぎしている。	C-6．Ⅰ	福建省
第26図 図版22 14	14.0 － －	皿	口縁	外体面に草花文、内体面に圏線と唐草文を施する。	18 c前～中	薄青呉須ややや暗	体部は丸みを持ち外側に開く。口縁はやや内彎。	B-8.Ⅰ	窯不明
第26図 図版22 15	10.4 4.0 4.8	皿	口縁～底部	内体面に圏線と草花文を施する。	18代	薄青呉須ややや暗	体部は丸みを持ち外側に開く。口縁はやや内彎。	表採	景徳鎮
第26図 図版22 16	－ － 9.4	皿	底部	内体面に圏線と草花文を施する。	17c末～18c中	薄青呉須ややや暗	高台は細く低め、畳み付けを釉剝ぎしている。	表採	景徳鎮
第26図 図版22 17	－ － 9.8	皿	底部	内底面に二条の圏線と山水文を施している。	17c末～18c前	薄青呉須ややや暗	高台は細く低め、畳み付けを釉剝ぎしている。	表採	景徳鎮
第26図 図版22 18	－ － 8.5	皿	底部	折れ面の角に二条の圏線を配し、内底面に二条の圏線と山水文を施している。	17c後半～8初め	薄青呉須ややや暗	口縁が鍔縁になるⅢである。 高台は低く先端が丸い。	表採	景徳鎮
第26図 図版22 19	16.5 3.3 8.8	皿	口縁～底部	内体面と内底面に圏線と草花文を施する。	18 c前～中	薄青呉須ややや暗	体部は腰部に丸みを持ちつつ外側に開く。口縁はほぼ直口。高台は低めで先端は三角をなし、釉剝ぎしている。	表採	窯不明
第26図 図版22 20	15.0 － －	皿	口縁	内体面に圏線と草花文を施する。体部は腰部に丸みを持ちつつ外側に開く。口縁は口唇で僅かに端反る。	18 c代	薄青呉須ややや暗	体部は腰部に丸みを持ちつつ外側に開く。口縁は口唇で僅かに端反る。	表採	窯不明
第26図 図版22 21	－ 7.7 －	皿	口縁	内体面に圏線と草花文を施する。	18 c代	薄青呉須ややや暗	口縁はやや内彎。	表採	徳化

第5表ⅰ　染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径 (cm)	名称	部位	文様構成	時期	釉調	施釉・素地貫入・器形	出土地区・出土層	産地窯
第26図 図版22 22	－ － 12.3	皿	口縁～底部	内体面から内底まで梅花氷裂文を施文している。高台内に二条の圏線が認められる。	18 c 前 ～ 中	薄青呉須やや暗	体部は腰部から外側大きくに開き、口縁は僅かに端反る。高台は低めで三角形をなし、先端を釉剝ぎしている。	B-8.Ⅰ	景徳鎮
第27図 図版23 1	－ － －	皿	口縁	口縁から内体面に墨はじきによる波に花文が施されている。	17 c 代	薄青呉須やや暗	口折れの陵花皿である。屈曲はさほど著しくない。	B-8.Ⅱ	窯不明
第27図 図版23 2	－ － －	皿	口縁	体部に型押しによる蓮弁文を施し、口縁内に渦巻き文を施文する。	16c中 ～16後 半	薄青呉須やや暗	口折れの陵花皿である。屈曲はさほど著しくない。	2トレ・Ⅰ	窯不明
第27図 図版23 3	－ － －	皿	口縁	内体面に草花文が」施されている。	17 c 代	薄青呉須やや暗	口縁が波状を示す皿	1トレ・Ⅰ	窯不明
第27図 図版23 4	－ － －	皿	口縁	外体面に草花文が施されている。	17 c 代	薄青呉須やや暗	口縁が波状を示す皿	B－11 Ⅰ	窯不明
第27図 図版23 5	－ － －	皿	底部	内体面に縦位に四条の線描きと内底面に二条の圏線が施されている。	1590～ 1630年 代	薄青呉須やや暗	方形皿である。	表採	窯不明
第27図 図版23 6	－ － －	皿	口縁	鍔状の口縁上面に市松格子柄を描く。	16 末 ～ 17 前半	薄青呉須やや暗	口縁が鍔になる方形皿である。	E-13・Ⅰ	ショウ州

第５表ｊ 染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径	名称	部位	時期	出土地点 出土層	産地窯
第27図 7 図版23	3.0	杯	底部	17c4/4~18前	4トレⅡ	景徳鎮
第27図 8 図版23	5.9	杯	口縁	17c代	4トレⅡ	不明
第27図 9 図版23	-	杯	口縁	17後~18初	2トレⅡ	不明
第27図 10 図版23	7.4 4.6 3.4	杯	口~底	18c代	D-8·9表採	不明
第27図 11 図版23	6.8 4.4 3.2	杯	口~底	18c代	B-8·Ⅰ	不明
第27図 12 図版23	5.7	杯	口縁	17c代	5トレⅠ	不明
第27図 13 図版23	8.2	杯	口縁	17c4/4~18前	B-8·Ⅰ	不明
第27図 14 図版23	3.1	杯	底部	17c代	表採	不明
第27図 15 図版23	5.9	杯	口縁	17c代	E-12·Ⅰ	不明
第27図 16 図版23	2.5	杯	底部	16後~17初	B-14表採	不明
第27図 17 図版23	5.5	杯	口縁	17c代	表採	不明
第27図 18 図版23	5.1 2.7 2.4	杯	口~底	18c代	B-9·Ⅰ	不明
第27図 19 図版23	5.0 ~ 2.2	杯	口~底	18前~中葉	C-8·Ⅰ	景徳鎮
第27図 20 図版23	4.0 ~ 1.8	杯	口~底	18c代	B-8·Ⅰ	不明
第27図 21 図版23	4.55 ~ 2.1	杯	口~底	18c代	B-8·Ⅰ	不明
第27図 22 図版23	4.8	杯	口縁	18c代	B-9·Ⅰ	不明
第27図 23 図版23	2.4	杯	底部	18c代	TP10·Ⅰb	不明
第27図 24 図版23	9.6 3.45 3.6	杯	口~底	18c代	B-8·Ⅰ	不明
第27図 25 図版23	4.0	杯	底部	18c代	2トレⅡ	不明
第27図 26 図版23	4.2	杯	底部	17後半	表採	景徳鎮
第27図 27 図版23	9.9 3.5 3.7	杯	口~底	18c代	C-11·Ⅰ	不明
第27図 28 図版23	-	杯	口縁	17末~18前	B-8·Ⅰ	景徳鎮
第27図 29 図版23	-	杯	口縁	16後~17中	表採	不明
第27図 30 図版23	9.8	杯	口縁	15前~中	表採	景徳鎮
第27図 31 図版23	-	杯	胴部	15前~中	C-9·Ⅰ	景徳鎮
第27図 32 図版23	-	杯	底部	15前~中	C-9·Ⅰ	景徳鎮
第27図 33 図版23	23.0	大鉢	口縁	15後~16中	TP11·Ⅰb	景徳鎮
第27図 34 図版23	6.2	大鉢	底部	17後半	B-9·表採	景徳鎮

第５表ｋ　染付(大鉢)

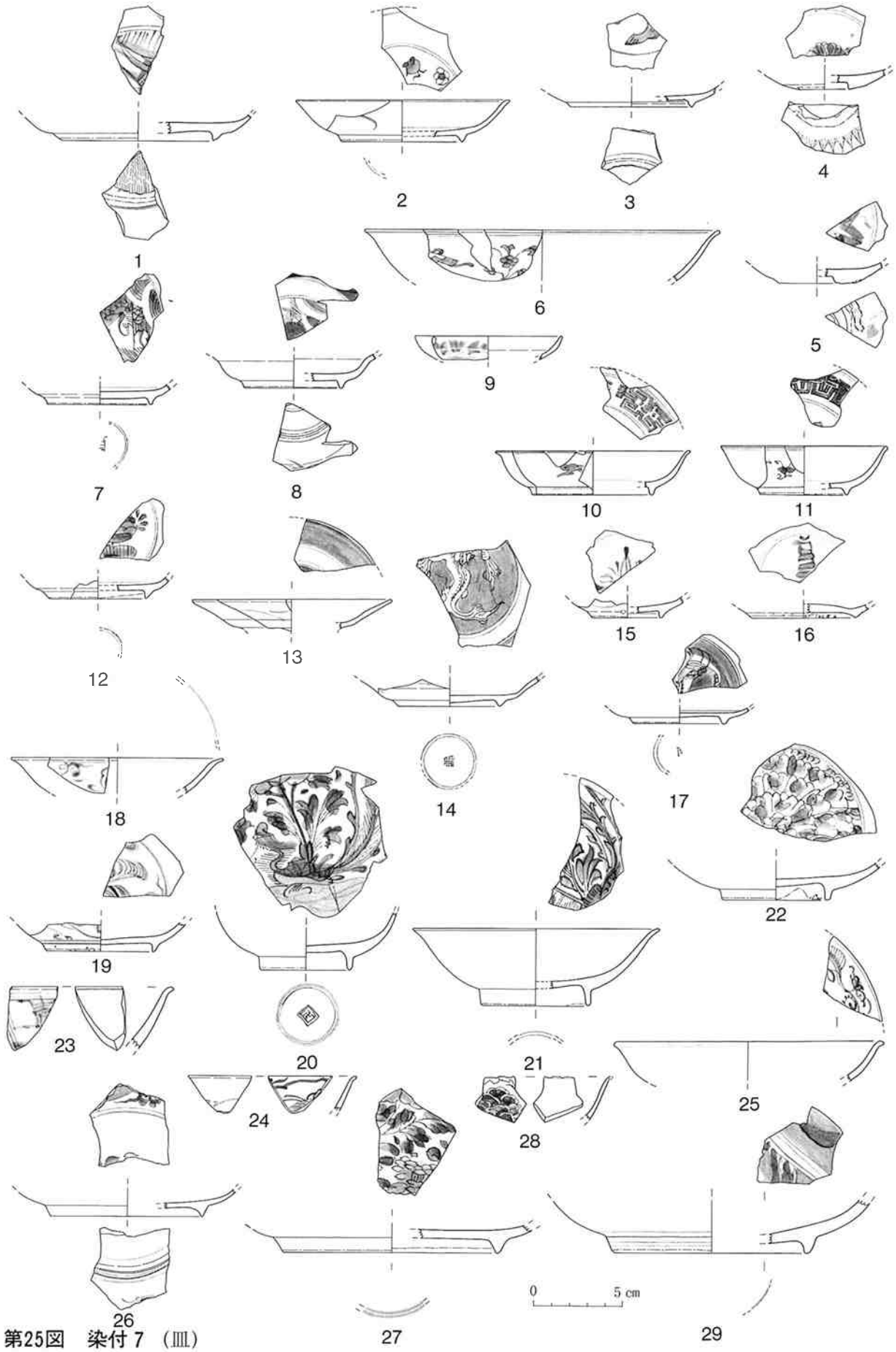
凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径	名称	部位	時期	出土地点 出土層	産地窯
第28図 1 図版24	30.0	大鉢	口縁	17c~19c	C-9·Ⅰ	不明
第28図 2 図版24	37.0	大鉢	口縁	17c~19c	4トレⅡ	不明
第28図 3 図版24	31.0	大鉢	口縁	17c~19c	表採	不明
第28図 4 図版24	29.8	大鉢	口縁	17c~19c	C-8·Ⅰ	不明
第28図 5 図版24	29.6	大鉢	口縁	17c~19c	C-11·Ⅱ	不明
第28図 6 図版24	23.2 10.15 12.4	大鉢	口~底	17c~19c	C-8·Ⅰ	不明
第28図 7 図版24	-	大鉢	口縁	17c~19c	4トレⅡ	不明
第28図 8 図版24	13.2	大鉢	底部	17c~19c	4トレⅡ	不明
第28図 9 図版24	12.8	大鉢	底部	17c~19c	表採	不明
第28図 10 図版24	11.8	大鉢	底部	17c~19c	B-9·Ⅰ	不明
第28図 11 図版24	12.8	大鉢	底部	17c~19c	E-13·Ⅰ	不明
第28図 12 図版24	12.2	大鉢	底部	17c~19c	C-8·Ⅰ	不明
第28図 13 図版24	12.4	大鉢	底部	17c~19c	4トレⅡ	不明
第28図 14 図版24	29.8 13.8~ 14.5 13.0	大鉢	口~底	17c~19c	C-8·Ⅱ	不明

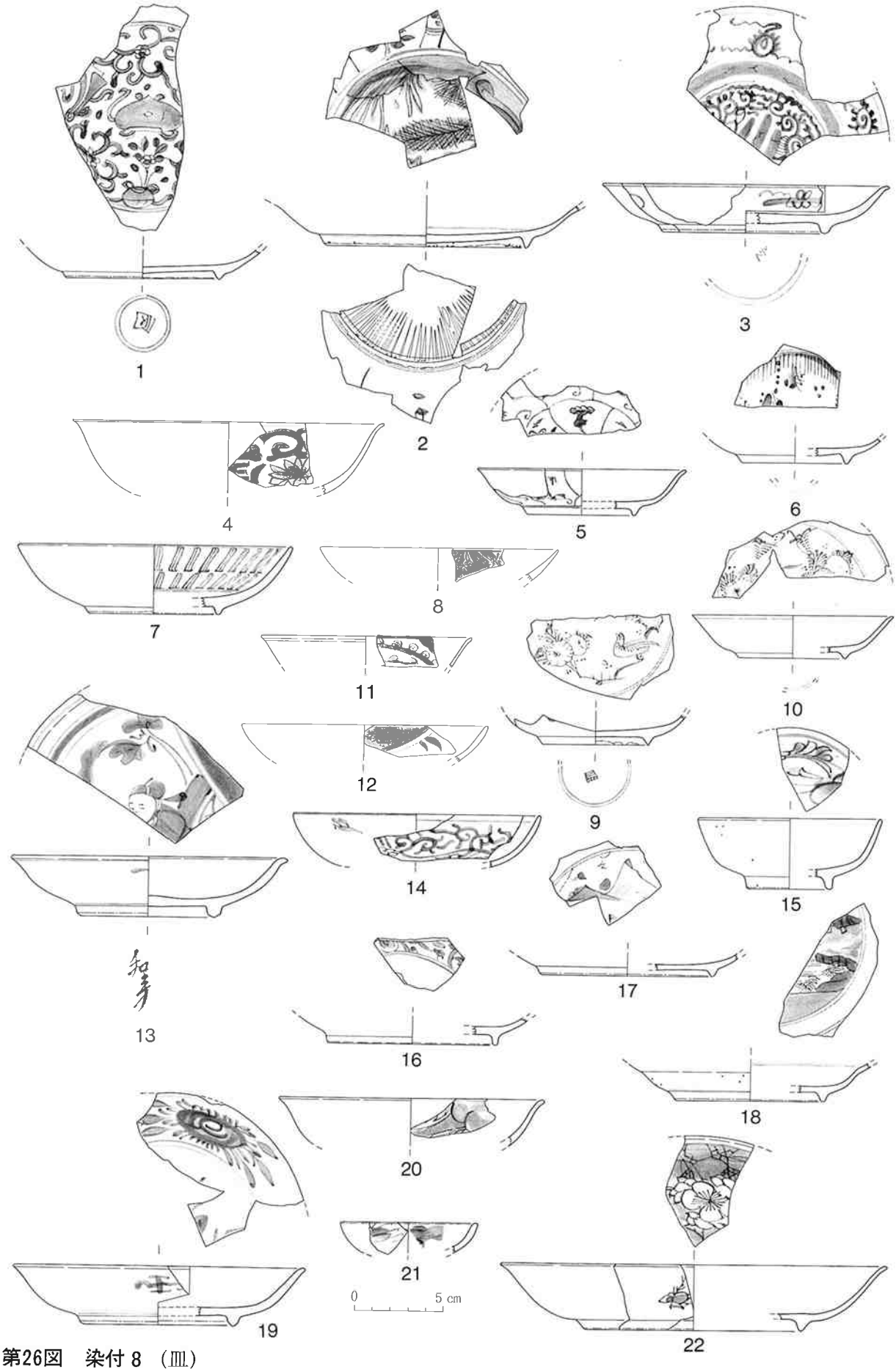
第５表ｌ　染付・釉裏紅・鉄釉染付・青磁染付(壷・瓶・その他)

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

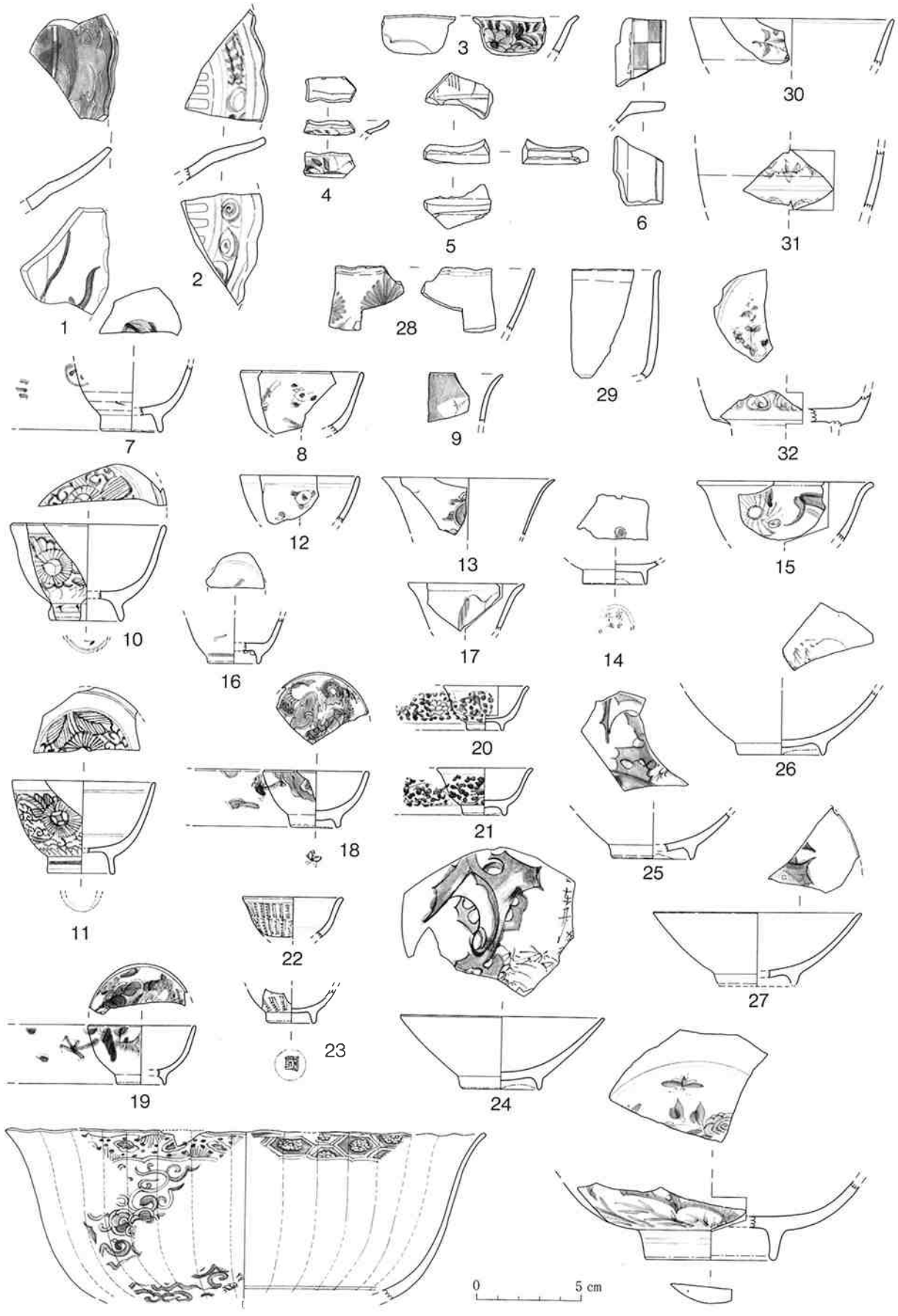
挿図番号 図版番号 遺物番号	口径 器高 高台径	名称	部位	時期	出土地点 出土層	産地窯
第29図 1 図版25	-	壷	胴部	15前~中	TP4Ⅱ5/6	景徳鎮
第29図 2 図版25	-	壷	胴部	15c代	5トレⅡ	景徳鎮
第29図 3 図版25	-	壷	胴部	15c代	TP6Ⅲ	景徳鎮
第29図 4 図版25	-	壷	胴部	15c代	12トレ表採	景徳鎮
第29図 5 図版25	-	壷	胴部	15c代	1トレⅠ	景徳鎮
第29図 6 図版25	14.0	壷	底部	19c	B-5·Ⅰ	景徳鎮
第29図 7 図版25		壷	口縁	15前~中	B-12·Ⅰ	景徳鎮
第29図 8 図版25		瓶	胴部	15前~中	B-8·Ⅰ	景徳鎮
第29図 9 図版25	5.9	瓶	胴部	15前~中	TP4·Ⅰ	景徳鎮
第29図 10 図版25		瓶	胴部	15前~中	表採	景徳鎮
第29図 11 図版25		瓶	胴部	15前半	F-15表採	景徳鎮
第29図 12 図版25		瓶	胴部	17~18初頭	表採	景徳鎮
第29図 13 図版25	-	壷か瓶	胴部	18末~17前半	TP4Ⅱ7/8	漳州窯
第29図 14 図版25	-	瓶	胴部	15前~中	C-9*Ⅰ	景徳鎮
第29図 15 図版25	7.1	瓶	底部	16前~中	4トレⅡ	景徳鎮
第29図 16 図版25	7.3	瓶	底部	16前~中	TP5·Ⅰ	景徳鎮
第29図 17 図版25	-	瓶	底部	15前~中	E-15·Ⅰ	景徳鎮
第29図 18 図版25	24.2	その他	口縁	18~19	D-5·Ⅰ	景徳鎮
第29図 19 図版25	-	その他	胴部	18~ (17末?)	B-9·Ⅰ	景徳鎮
第29図 20 図版25	-	その他	胴部	16c代	F-15表採	不明
第29図 21 図版25	-	レンゲ	口縁	17前~中	C-11	不明
第29図 22 図版25	-	レンゲ	胴部	17前~中	4トレⅡ	不明
第29図 23 図版25	-	蓋	-	18c以後	表採	不明
第29図 24 図版25	7.0	釉裏紅碗	底部	17末~18前	表採	景徳鎮
第29図 25 図版25	3.5	鉄釉 染付・杯	底部	17後半~17中	表採	不明
第29図 26 図版25	7.4	鉄釉 染付	口縁	16後半~17中	B-9·Ⅰ	不明
第29図 27 図版25	-	青磁 染付碗	口縁	16後半~17中	TP11·Ⅰb	不明


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
5 cm

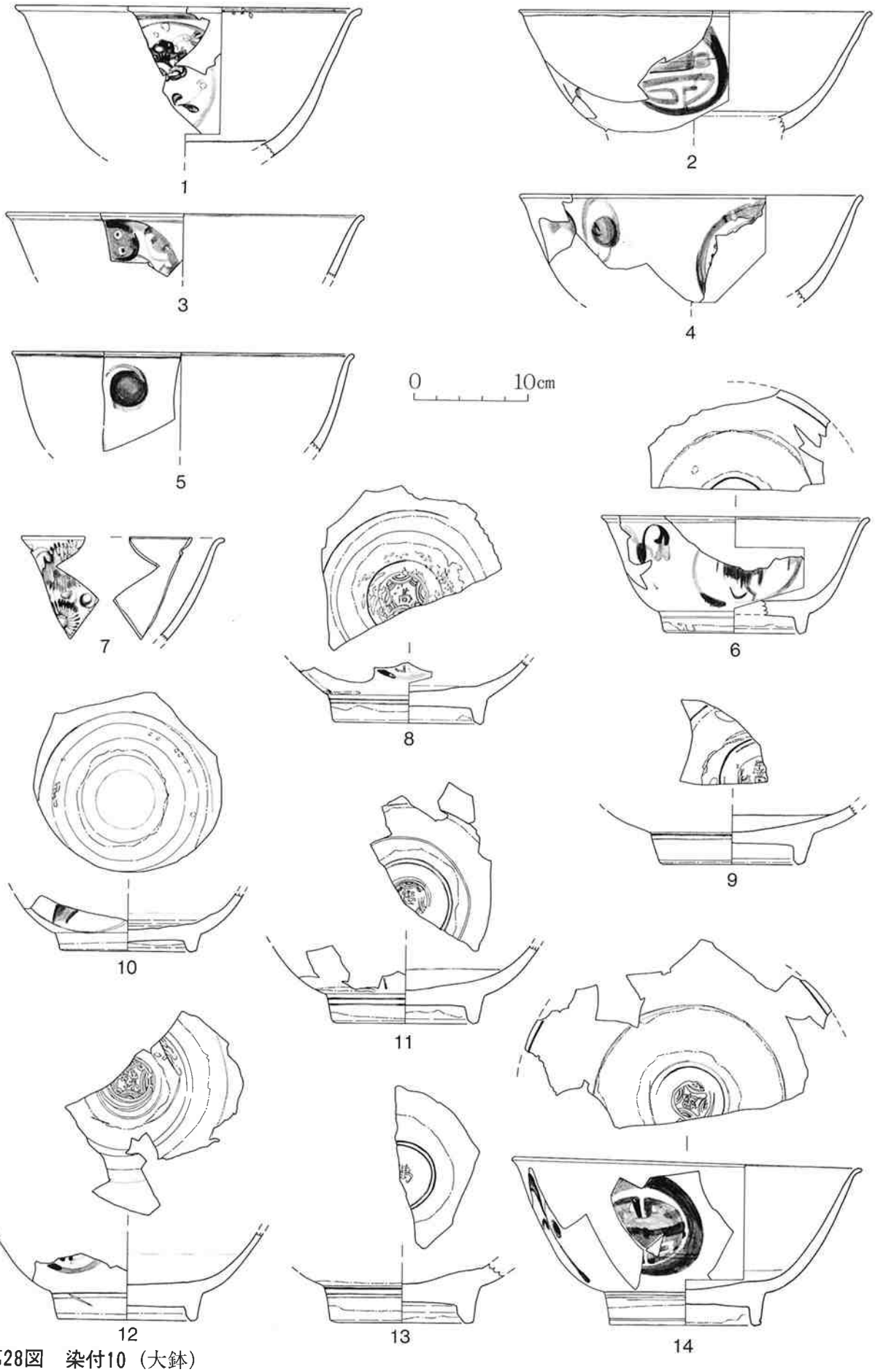
第25図　染付７（皿）



第26図　染付 8 （皿）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
5 cm

第27図　染付 9 （皿・杯・鉢）



第28図　染付10（大鉢）

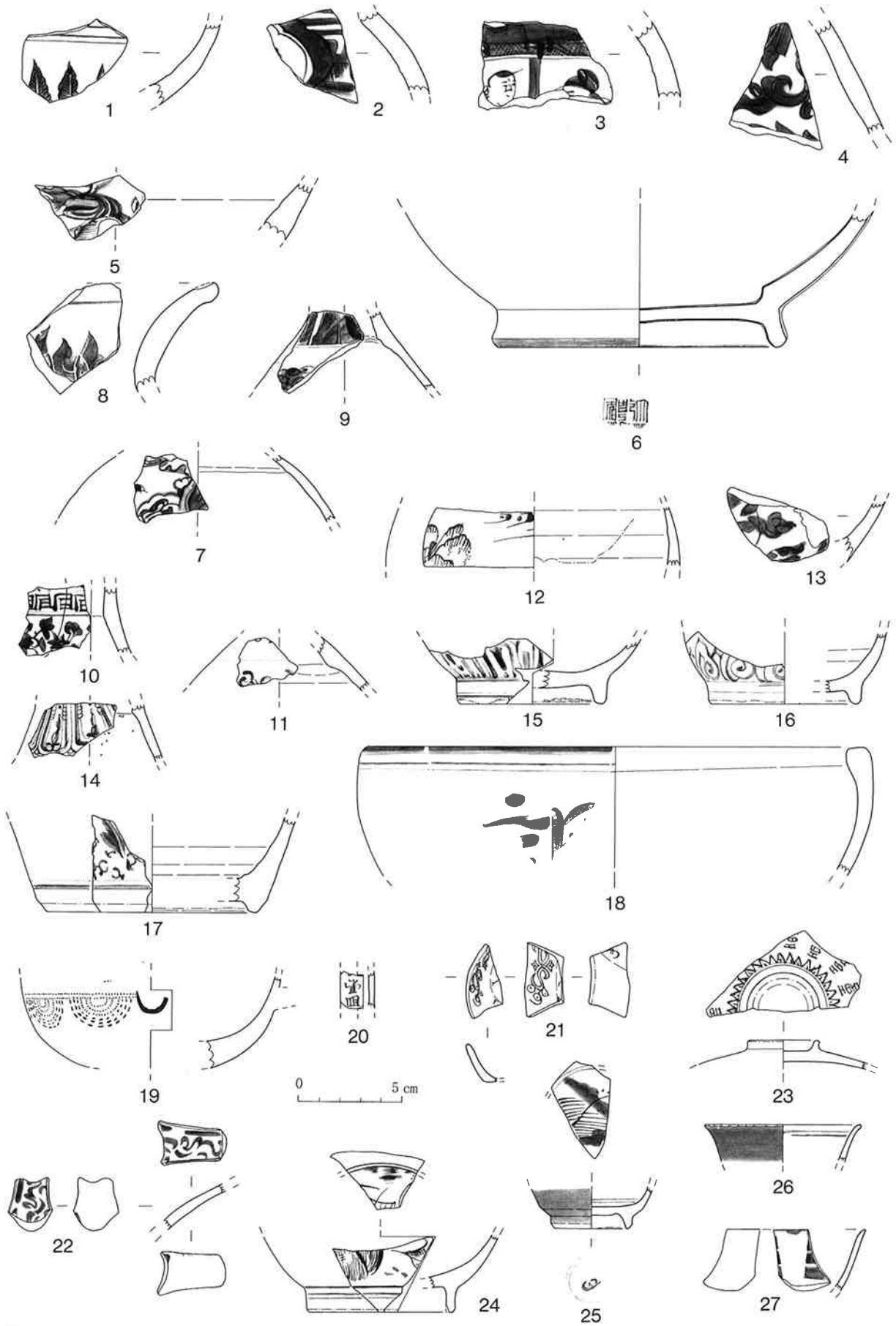
第４節　釉裏紅・鉄釉染付・青磁染付　（第29図24～27）

24は景徳鎮窯系の釉裏紅碗である。外体面と内底面に山水文を描き内底面に釉裏紅を施こしている。17ｃ末から18ｃ前に位置づけられる。25・26は外体面に鉄釉を施す鉄釉染付の杯である。26は口縁が端反りを呈し、口縁内面に胡須により二条の圏線を施している。25は内底面に山水文を施している。16ｃ後半から17中に位置づけられる。27は青磁染付の杯である。外体面は薄緑灰色の釉を施し、内体面に八卦文を呉須により施す。16～17ｃ前半に位置付づけられる。

第16表　釉裏紅・鉄釉染付・青磁染付出土状況一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

分類＼トレンチ地区		表採	7.1トレ	5トレ	TP11	合計
			Ⅲ	Ⅰ	Ⅰb	
釉裏紅・碗	底部	1				1
鉄釉染付杯	口縁		1			
	底部	1				1
青磁染付杯	口縁				1	1
合計		2	1	0	1	4



第29図　染付11（壺・その他）　釉裏紅・鉄釉・青磁染付

第7表　染付出土状況一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

分類	部位	表採	9.8トレ	3.6トレ		7.1トレ		5トレ		4.2トレ			11トレ					12トレ		TP1	TP2		TP3			TP4			TP5			TP6				TP7	TP8		TP9	TP10			TP11				TP12	合計
			Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰb	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	P7	P8	P10	Ⅰ	P4	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰ	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱ	Ⅰ	
碗	口～底	8						10		3		4	1					1																								1						20
	口縁	303		14	3	13	7	211	9	80	5	53	35		2	1	1	14		1	1		6	2			6	2	2	1		1	1	3	4	3	1	3	9	17		3		10	16		13	553
	胴部	347	2	23	6	11	4	164	4	85	6	52	38	1	3	2		7	2	1	1		7	4	2	1	15	1		1		1	4	1	5	3	3	1	7	8		2	2	18	8		10	516
	底部	152	2	8	1	6		92	5	33	5	29	17	1	4		1	3	1		1		6	4		2	15	1				2	2	1	3	3	8		2	5		1	2	6	12		3	287
皿	口～底	4		1				3				1																																				5
	口縁	29		1		3		27		5		1	5		1																				1						1			1	1			47
	胴部	25				1		3		2		5	5																	1														1	1		2	21
	底部	54		6		3	2	19		14		7	3		1			2					3				2					2	1	1		2			1	1				2			2	74
杯	口～底	6						6																																								6
	口縁	10						8		2		2	2								1																											15
	胴部							1																																							1	2
	底部	5						4			1	4	1				1																									1			1			13
皿 大鉢	口～底							1	1																																				1			3
	口縁	23		2		1	3	22		3		18	2					2									1			1	1								1	2			1		3		2	63
	胴部	57		1		1		47	1	14	3	22	9	1		1		2					3				3			1				3		2	1		1	2				2	1	1	3	126
	底部	13				1		3		2		5	3														2																		1			18
皿 小鉢	口縁	8								1			1																													1						4
	胴部	2						1		1																																		1				3
	底部							1																																								1
壺	口縁							1																																								1
	胴部	13		9	2	2	1	1				3	3									1											1			1			1	1		2						28
	底部							1		1																																						2
瓶	胴部	7											1													1	1			1																		5
	底部											1																	1																1			3
瓶・壺	胴部																										1																					1
レンゲ	柄											1																																				1
	受け									1																																						1
蓋	物	1								1																																						1
器種不明	口縁	5		1				1		1	1													1										1	1	1												8
	胴部	31																					1	1			2												2					1				7
	底部	6										1																											1					1	1			4
合	計	1109	4	66	12	42	17	628	20	249	21	209	126	3	11	4	3	31	3	2	4	1	26	12	2	4	48	4	3	6	1	6	9	10	14	15	13	4	25	36	1	11	5	43	48	1	36	1839

第５節　褐釉陶器

本節では、中国・タイの褐釉陶器について述べることにする。出土状況としては、中国産・タイ産のほとんどが小破片で、全形が窺えるような大型の破片や接合可能な破片も少なく、総点数が2974点を数える(第８表)という状況であった。確認された器種は、中国産褐釉陶器が壷の１器種、タイ産褐釉陶器が壷と小壷の２器種であった。タイ産の小壷については、県内では出土例が少なく貴重な資料であると言える。

以下、中国産・タイ産の順に、産地別に器種別の分類概念を記すことにする。なお、個々の特徴等については観察表に呈示した(第９表)。

中国産褐釉陶器　(第30～31図１～31)

中国産褐釉陶器で確認された器種は壷のみである。大部分が小破片資料であることから、比較的に残存率の高い破片資料を図化した。

(１)　壷　(第30～31図１～31)

口縁形態により、Ⅰ類～Ⅴ類までの５つに分類した。

Ⅰ類　(第30図１～４)

口縁部の断面形が方形状を呈する有頚の壷である。

Ⅱ類　(第30図５～６)

口縁部の断面形が逆三角形状を呈する有頚の壷である。

底部資料　(第30図７～10)

Ⅰ類もしくはⅡ類の底部になるものと思われるものを図化した。

Ⅲ類　(第30図11～20)

口縁形態や焼成状態に若干の差異はあるが、薄手で小型のタイプをまとめた。

Ⅳ類　(第31図21～29)

口縁形態や焼成状態に若干の差異はあるが、両面に叩き成形や線刻文様が見られる資料ををまとめた。

Ⅴ類　(第31図30～31)

口縁部が玉縁状を呈する有頚の壷である。

タイ産褐釉陶器　(第31図32～43)

タイ産褐釉陶器で確認された器種は、壷・小壷の２器種である。中国産褐釉陶器と同様に、小破片資料が大部分を占めていることから、残存率の高い破片資料を図化した。

(１)　壷　(第31図32～42)

口縁形態により、Ⅰ類～Ⅲ類までの３つに分類した。

Ⅰ類　(第31図32～33)

口縁部をきつく外反させて、丸みのある肥厚帯をつくる。

Ⅱ類　(第31図34～38)

頚部から口縁部にかけて外側に大きく外反させ、口唇部を上方に突出させるが、１例のみ下方に突出させるタイプも確認されている。

破片資料　(第31図39～41)

Ⅰ類もしくはⅡ類の耳・底部になるものと思われるものを図化した。

Ⅲ類　(第31図42)

頚部をほぼ垂直に立ち上がらせて、そこから口縁をきつく外反させる。口唇部は丸く成形する。

(２)　小壷　(第31図43)

耳付の小壷の口縁部破片資料が１点のみ検出されている。双耳になるものと考えられる。

第８表　中国産・タイ産褐釉陶器出土状況一覧

出土地＼分類		中国産 壺 Ⅰ類 口	Ⅱ類 口	Ⅰor Ⅱ類 頚	Ⅰor Ⅱ類 胴	Ⅰor Ⅱ類 底	Ⅲ類 口	Ⅲ類 頚	Ⅲ類 耳	Ⅲ類 胴	Ⅲ類 底	Ⅳ類 口	Ⅳ類 頚	Ⅳ類 耳	Ⅳ類 胴	Ⅳ類 底	Ⅴ 口	不明 胴	種不明 底	小計	タイ産 壺 Ⅰ類 口	Ⅱ類 口	Ⅱ類 頚	Ⅰor Ⅱ類 口	Ⅰor Ⅱ類 頚	Ⅰor Ⅱ類 耳	Ⅰor Ⅱ類 胴	Ⅰor Ⅱ類 底	Ⅲ類 口	不明 口	不明 底	小計	合計
表採		25	1	12	632	370	1			44	9	3			23	3	1	20		1144	2	4		9	8	7	233	8		1	7	279	1423
9·8トレ	Ⅰ				4													1		5							1				1	6
3·6トレ	Ⅰ				18										3			3		24							10				10	34
	Ⅱ				3					1										4							1				1	5
	黒土				2															2											0	2
7·1トレ	Ⅰ				6	1				3					1	1		2		14							3				3	17
	Ⅱ	1			6					1					1			3		12							4				4	16
	Ⅱ下部			1	6															7		1			1						2	9
5トレ	Ⅰ	5		3	88	2	1			9		3			22	3		15		151		1		1			31				34	185
	Ⅱ				6					1					2	1		1		11							1				1	12
4·2トレ	Ⅰ	2		1	113				1	6		1	1		13	1		4	1	144					4		14				18	162
	Ⅰb				23					2					1			1		27							5				5	32
	Ⅰ黒土	1			3										2					6					1		3				4	10
	Ⅱ	1		3	137	6				13	1		1	1	13			1		177		1		1	1	2	54			1	60	237
	P8																			0							1				1	1
11トレ	Ⅰ	1			27	2	1			2			1		2			5		41	1			1			8				10	51
	Ⅱ				12	1				1								3		17							7				7	24
	P7	2			4					1		1								8					2		2	2		1	7	15
	P8				5															5							5				5	10
	P9				1															1											0	1
	P10				2					1										3							1				1	4
12 トレ	Ⅰ	1		1	21					5								1		29							15				15	44
	P4				4															4											0	4
	P6				1															1											0	1
TP	Ⅰ黒土				1															1											0	1
	Ⅱ				1															1											0	1
TP 1	Ⅰ				3															3							1				1	4
TP 2	Ⅰ				10										1					11							1				1	12
TP 3	Ⅰ				5															5	1			1			1				3	8
	Ⅰ黒土				22					1					2			2		27				1			5				6	33
	Ⅱ				17										2			1		20											0	20
	Ⅲ				3					1										4											0	4
TP 4	Ⅰ	1			1		1													3							2				2	5
	Ⅱ	1		1	43		1	1							2			2		51		1					9	1		2	13	64
	Ⅲ																			0							1				1	1
TP 5	Ⅰ				2															2											0	2
	Ⅱ				5															5											0	5
TP 6	Ⅰ		1		6					1										8							2				2	10
	Ⅱ				5															5							1				1	6
	Ⅲ	1		2	58					1								1		63							7				7	70
	Ⅳ				9															9											0	9
	Ⅳ黒土				1															1											0	1
TP 7	Ⅱ				20					1					1					22							3				3	25
TP 8	Ⅰ				5	1				1										7							2				2	9
	Ⅱ				7													1		8							1				1	9
TP 9	Ⅰ		1		30					1								1		33							5				5	38
	Ⅱ																			0							1				1	1
TP10	Ⅰ	1			23	1						1			1					27							7				7	34
	Ⅰb				3															3											0	3
	Ⅱ				2															2											0	2
TP11	崩土				1															1											0	1
	Ⅰ																			0							2				2	2
	Ⅰb				20										2					22		1	1	1			5				8	30
	Ⅰb	1			18					2		2			8	1		1		33		1					2		1		4	37
	Ⅱ				1										2					3							1				1	4
TP12	Ⅰ	1			18	1					1				2		1			24					2		11	1			14	38
合計		45	3	24	1464	385	5	1	1	99	11	11	3	1	106	10	2	69	1	2241	4	10	1	15	19	9	469	12	1	1	12	553	2794

第９表ａ　褐釉陶器観察一覧

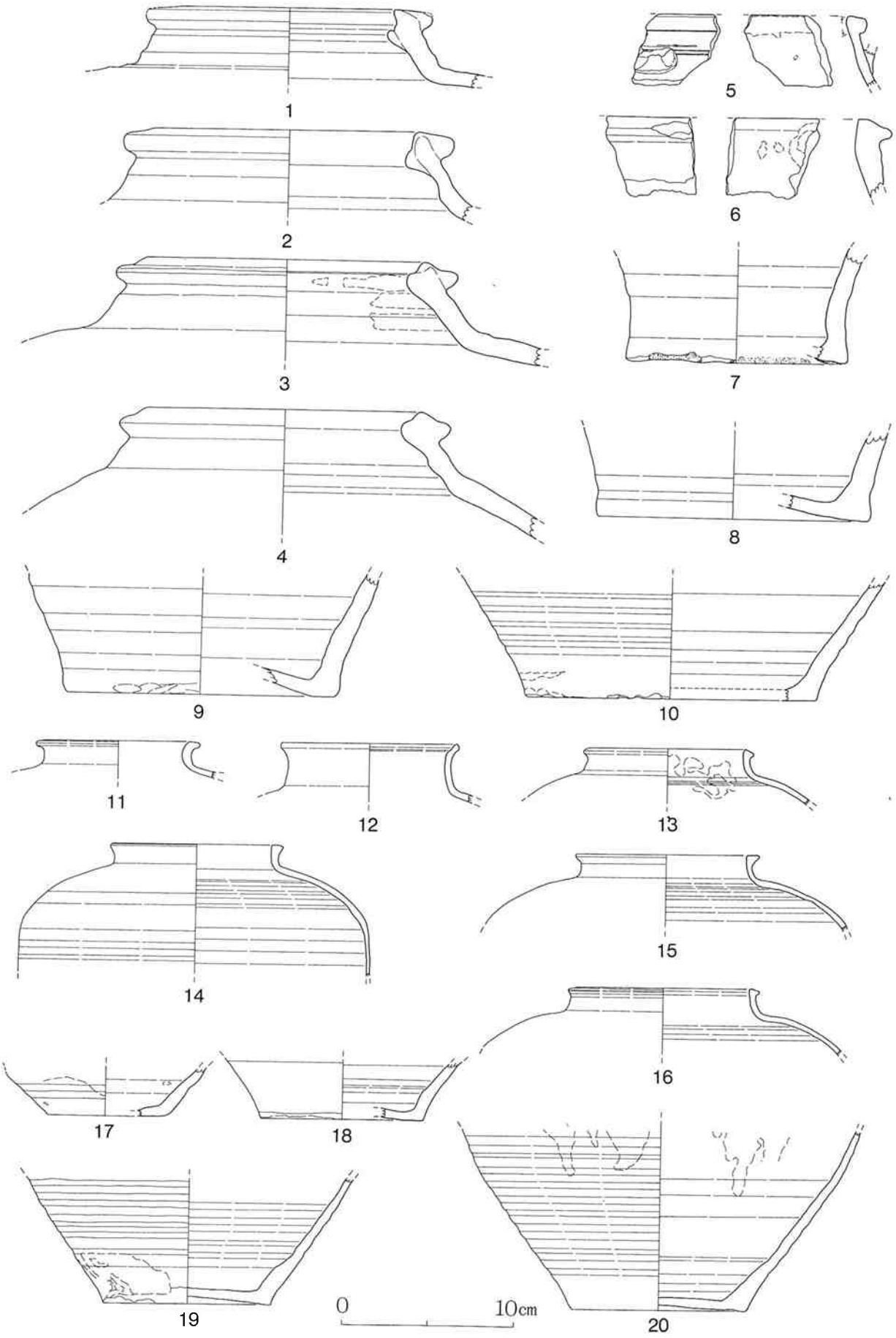
凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 台径 (cm)	器形・成形・器面調整等	素地	釉色	産地	出土地区 ・ 出土層
第30図 図版26 1	壺	Ⅰ	16.8 － －	口縁断面方形状。外面上部と内面下部が強く突出。外面頚部に轆轤痕。	淡灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉禿げが見られる。	中国産褐釉陶器	表採 崖下
第30図 図版26 2			19.6 － －	〃　〃。〃　〃。 〃　〃。	淡灰白色の細粒子。 〃　〃。	〃　〃。 〃　〃。		表採 ネット外
第30図 図版26 3			20.0 － －	〃　〃。〃　〃。 〃　〃。	灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を多量に含む。	〃　〃。 〃　〃。 二次的な被熱？		C－8 Ⅰ
第30図 図版26 4			19.4 － －	〃　〃。〃　〃。 〃　〃。	〃　〃。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	〃　〃。 〃　〃。		D－6 Ⅱ
第30図 図版26 5		Ⅱ	16.8 － －	口縁断面逆三角形状。頚部に耳痕と３条の沈線。内面には調整痕。	桃褐色の粗粒子。 〃　〃。	淡黄茶褐色の釉を外面と内面口縁直下に施釉。口唇部は釉を掻き取る。		TP9 Ⅰ
第30図 図版26 6			－ － －	〃　〃。内面には調整痕。	〃　〃。微細な白色の鉱物を多量に含む。	淡黄茶褐色の釉を外面のみ施釉。		TP6 Ⅰ
第30図 図版26 7		Ⅰ or Ⅱ	－ － 13.0	外底面は盛り上がる。胴部は両面とも轆轤痕が確認できる。	灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉禿げが見られる。		表採
第30図 図版26 8			－ － 16.2	〃　〃。〃　〃。	淡灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	〃　〃。 〃　〃。		〃 〃
第30図 図版26 9			－ － 15.6	〃　〃。〃　〃。 〃　〃。	淡燈褐色の粗粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	淡黄緑色の釉を両面に施釉。〃　〃。		4トレ Ⅱ
第30図 図版26 10			－ － 17.0	外底面は平坦に成形されている。 〃　〃。	明茶褐色の粗粒子。微細な白色の鉱物を多量に含む。	暗茶褐色の釉を両面に施釉。		表採 フェンス・ ネット間
第30図 図版26 11		Ⅲ	9.6 － －	口縁部をＬ字状に成形する。	灰紫色の細粒子。 〃　〃。	〃　〃。		B－8
第30図 図版26 12			10.4 － －	口縁部を微弱に外反させる。内面の口縁直下には蓋受けの段？のようなものが確認できる。	桃褐色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	〃　〃。		B－3 表採
第30図 図版26 13			10.0 － －	口縁断面逆三角形状。内面には轆轤痕が見られる。	茶紫色の微粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	〃　〃。		表採 ネット外
第30図 図版26 14			10.1 － －	〃　〃。〃　〃。	〃　〃。〃　〃。	茶褐色の釉を両面に施釉。		TP11 Ⅰb
第30図 図版26 15			11.2 － －	口縁部をＬ字状に成形する。 〃　〃。〃　〃。	〃　〃。白色の鉱物を多量に含む。	〃　〃。		B－8 Ⅰ
第30図 図版26 16			11.3 － －	口縁断面逆三角形状。 〃　〃。〃　〃。	〃　〃。白色の鉱物を僅かに含む。	〃　〃。		表採 フェンス・ ネット間
第30図 図版26 17			－ － 6.8	外底面は平坦に成形されている。 両面とも轆轤痕が見られる。	灰紫色の細粒子。	黄茶褐色の釉を外面にのみ施釉。		3トレ 表採
第30図 図版26 18			－ － 9.6	外底面は盛り上がる。胴部は両面とも轆轤痕が確認できる。	茶紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	外面以外は茶褐色の釉を施釉。		表採
第30図 図版26 19			－ － 9.8	〃　〃。〃　〃。	〃　〃。白色の鉱物を多量に含む。	茶褐色の釉を両面に施釉。		TP11 Ⅰb
第30図 図版26 20			－ － 10.2	〃　〃。〃　〃。	〃　〃。〃　〃。	〃　〃。		C－9 Ⅰ
第31図 図版26 21		Ⅳ	22.4 － －	口縁部を微弱に外反させる。外面には轆轤痕。内面口縁直下には調整痕。	断面の芯部は灰褐色。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	〃　〃。		TP4
第31図 図版26 22			21.0 － －	口縁断面は逆三角形状。頚部に轆轤痕。肩部に叩きの痕が見られる。内面には調整痕。	淡桃褐色の粗粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	無釉か？		TP4 Ⅱ
第31図 図版26 23			19.1 － －	〃　〃。〃　〃。 外面の一部に叩きの痕。	灰褐色の粗粒子。微細な白色の鉱物を多量に含む。	〃　〃。		B－12 Ⅰ
第31図 図版26 24			16.6 － －	〃　〃。〃　〃。 両面の胴部に叩き文。	茶紫色の粗粒子。 〃　〃。	暗茶褐色の釉を両面に施釉。		C－8 Ⅰ
第31図 図版26 25			－ － －	外面に線刻の文様が見られる。	灰白色の細粒子。	外面は淡黄灰色。 内面は錆釉。		B－9 Ⅰ

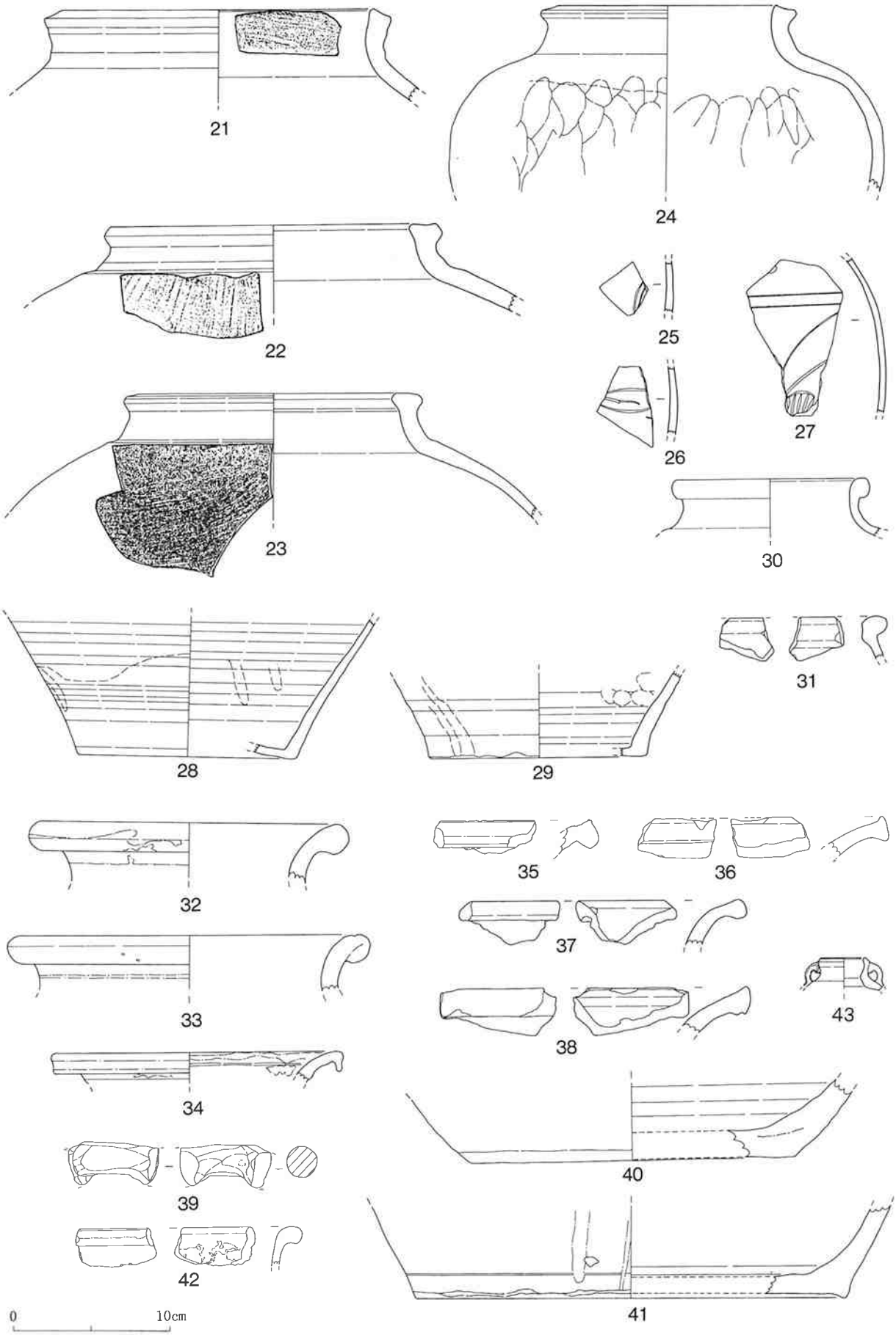
第９表ｂ　褐釉陶器観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・成形・器面調整等	素地	釉色	産地	出土地区 ・ 出土層
第31図 図版26 26	壺	Ⅳ	－ － －	外面に線刻の文様が見られる。	灰白色の細粒子。	外面は淡黄灰色。 内面は錆釉。	中国産褐釉陶器	Ｂ－６ Ⅰ
第31図 図版26 27			－ － －	〃　〃　〃　〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃		Ｂ－３ 表採
第31図 図版26 28			－ － 14.0	外底面は盛り上がる。両面とも轆轤痕が見られる。文様は確認できない。	〃　〃　〃	〃　〃　〃		Ｃ－３ 表採
第31図 図版26 29			－ － 14.0	〃　〃　〃　〃　〃　〃	灰色の細粒子。	黄灰色の釉を外面に施釉。二次的な被熱？		Ｃ－３ 表採
第31図 図版26 30		Ⅴ	12.6 － －	口縁部を玉縁状に肥厚させる。	燈灰白色の粗粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。		Ｅ－６ 表採
第31図 図版26 31			－ － －	〃　〃　〃　〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃		ＴＰ12 Ⅰ
第31図 図版26 32		Ⅰ	2.6 － －	口縁部をきつく外反させて、丸みのある肥厚帯をつくる。	灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉禿げが見られる。	タイ産褐釉陶器	Ｂ－12 Ⅰ
第31図 図版26 33			23.3 － －	〃　〃　〃　〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	〃　〃　〃 〃　〃　〃		ＴＰ３ Ⅰ
第31図 図版26 34		Ⅱ	19.6 － －	頚部から口縁部にかけて外側に大きく外反させ、口唇部を上方に突出させる。	茶紫色の粗粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	濃黄茶褐色を両面に施釉する。　〃　〃　〃		Ｃ－９ Ⅰ
第31図 図版26 35			－ － －	頚部から口縁部にかけて外側に大きく外反させ、口唇部を上方に突出させる。	灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	〃　〃　〃 〃　〃　〃		Ｆ－12 Ⅰ
第31図 図版26 36			－ － －	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	〃　〃　〃 〃　〃　〃		４トレ Ⅱ
第31図 図版26 37			－ － －	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	〃　〃　〃 〃　〃　〃		ＴＰ11 Ⅰａ
第31図 図版26 38			－ － －	〃　〃　〃	灰褐色の粗粒子。 〃　〃　〃	暗茶褐色の釉を両面に施釉する。		表採
第31図 図版26 39		Ⅰ or Ⅱ	－ － －	Ⅰ類orⅡ類の横耳。貼り付けた痕が確認できる。	灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	濃黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉禿げが見られる。		〃
第31図 図版26 40		Ⅰ or Ⅱ	－ － 20.8	外底面は平坦に成形されている。内面には轆轤痕。	淡茶紫色の粗粒子。	暗茶褐色の釉を両面に施釉する。		〃
第31図 図版26 41			－ － 27.4	外底面は若干上げ底状に成形されている。内面には轆轤痕。	灰褐色の粗粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	濃黄茶褐色の釉。		ＴＰ12
第31図 図版26 42		Ⅲ	－ － －	頚部をほぼ垂直に立ち上がらせて、口縁をきつく外反させる。口唇部を丸く成形する。	灰紫色の細粒子。微細な白色の鉱物を僅かに含む。	濃黄茶褐色の釉を両面に施す。一部に釉禿げが見られる。		ＴＰ11 Ⅰａ
第31図 図版26 43	小壺		3.0 － －	胴部から次第に締まり、頚部から外反し口縁部で立ち上がる。縦耳が付される。	淡黄灰白色の細粒子。	〃　〃　〃 〃　〃　〃		４トレ Ⅱ



第30図　褐釉陶器１　中国産　壺（１～20）



第31図　褐釉陶器 2　中国産　壺 (21～31)、**タイ産**　壺 (32～42)、小壺 (43)

第６節　タイ産半練

タイ産半練が出土しているが、小破片であるため全形が窺えるような資料はほとんどない。器種は蓋が確認されている。身は確認されていない。比較的、残存率の高い破片資料を図化してみた。また今回は、胎土や器形に若干の差異は認められるものの、類似するタイプであると思われる破片資料を器種不明として扱った。

１～３は落し蓋の摘み部分である。１は饅頭形を呈するものと思われるが破損しており判然としない。蓋下面には調整の際についたものと思われる擦痕が顕著に認められる。器色は橙白色で、焼成は良く硬い。胎土は細かく、芯部は灰褐色を帯びる（Ｂ－５Ⅰ）。

２も落し蓋の摘み部分の破片資料である。摘みの形状は判然としない。胎土が若干半練とは異なる。器色・胎土ともに明橙色である（ＴＰ４Ⅱ8/9）。

３も落し蓋の摘み部分の破片資料である。摘みは下部より破損していることから形状は判然としない。摘み下部と蓋下面には調整痕と擦痕が認められる。器色は明橙色。胎土は芯部が橙灰色を呈する（表採南崖下）。

４は落し蓋の端部破片である。折り曲げた先端部をややきつく突起状に成形。端部上面と下面には調整痕が顕著に認められる。器色は橙白色で焼成は良く硬い。胎土は細かく、淡灰白色で微細な白色の鉱物を含む（表採）。

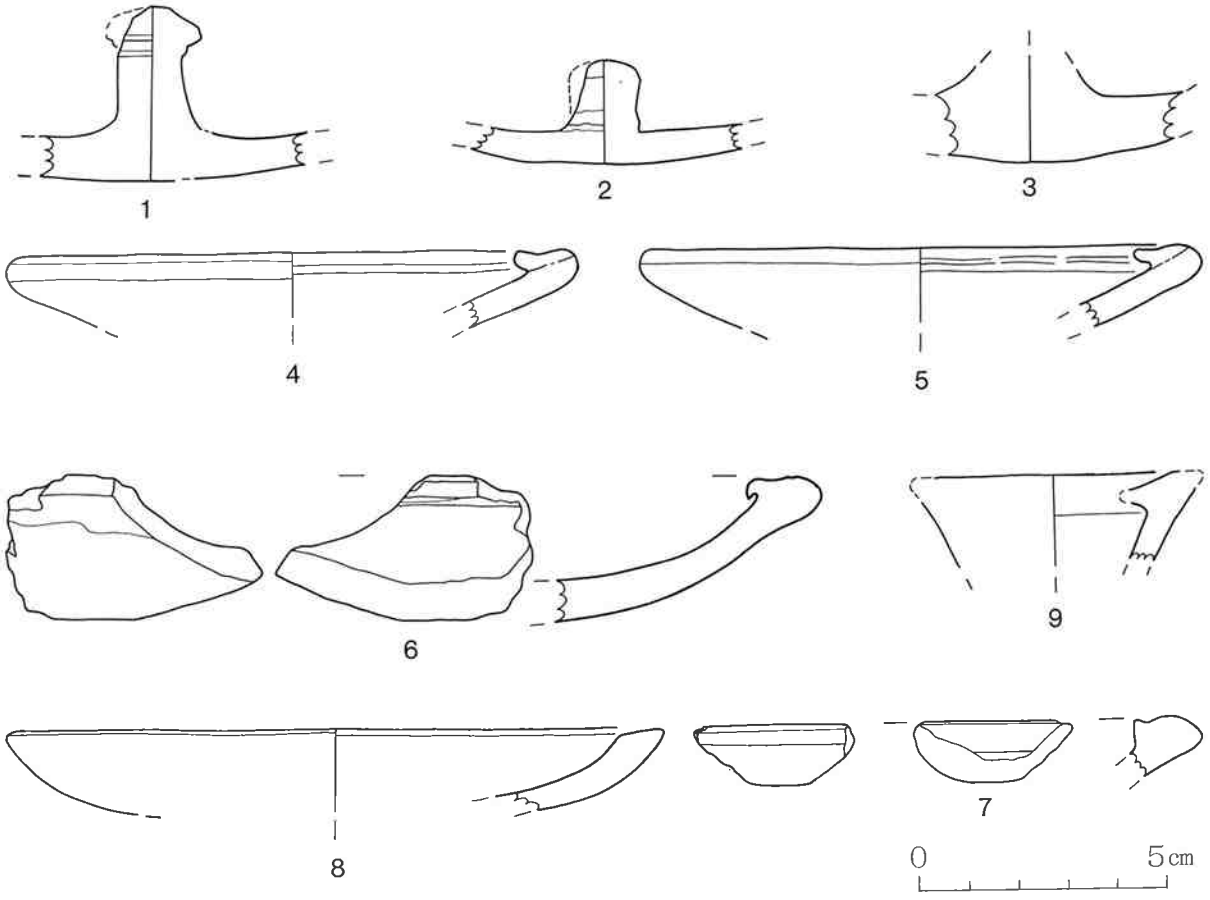
５も落し蓋の端部破片である。折り曲げた先端部を突起状に成形する。端部上面には調整痕が認められる。器色は明橙白色で、焼成は良く硬い。胎土は細かく、灰白色で微細な白色の鉱物を含む（４トレⅡ）。

６も落し蓋の端部破片である。折り曲げた先端部を下方に突出させて成形する。端部上面と下面には調整痕が認められる。器色は明橙白色で、焼成不良気味である。胎土は荒く、明橙白色を呈する（ＴＰ11Ⅰａ）。

７も落し蓋の端部破片で、折り曲げた先端部を上方に垂直に突出させて成形する。端部上面と下面には調整痕が認められる。器色は明橙白色で、焼成不良気味である。胎土は荒く、明橙白色を呈する（２トレⅡ）。

８も落し蓋の端部破片であるが、胎土が若干半練とは異なる。器色・胎土ともに明橙色である（Ｅ－13）。

９は器種不明の破片資料である。器色・胎土ともに明橙色である（ＴＰ－８Ⅰ）。



第32図　タイ産半練　蓋（１～８）、器種不明（９）

第７節　中国産無釉陶器

中国江蘇省宜興窯の茶器類が得られている。17～19世紀頃の範疇に納まるものと思われる資料で、確認された器種は急須・杯・水指・合子の４器種である。比較的残存率の高い破片資料について図化した。

（１）　急須　（第33図１～13）

１は口径6.7㎝。口唇部は平坦に成形され、外面は磨かれるが、内面には調整痕が残る。暗茶紫色の微粒子（TP12Ⅰ）。２は口径7.6㎝。口唇部は平坦に成形される。外面は磨かれるが、内面に調整痕。暗茶紫色の微粒子（2トレ表採）。３も口縁部破片だが、図1･2とは素地が異なる。成形は図1･2と同様。茶褐色の微粒子（D-1表採）。４は肩部から胴下部にかけての胴部破片である。図1･2と同様に暗茶紫色の微粒子（C-11Ⅰ）。５は底部である。外底面は碁笥底状。外面に磨きを加えるが、内面には調整痕。外底面に印文。図３と同様で茶褐色の微粒子（4トレⅡ）。６は蓋の摘み破片である。上面観は四角形。中心に１㎜の孔を穿孔。器面を薄く成形。茶褐色の微粒子（4トレⅡ）。７は蓋甲面から蓋端部にかけての破片である。外面は磨くが、内面に調整痕。蓋端部から推算された最大径は6.4.㎝である。茶褐色の微粒子（TP11Ⅰb）。８も蓋甲面から蓋端部にかけての破片である。上面観が方形状をなす。外面は磨きを加えるが、内面は調整痕。明茶褐色の微粒子（B-9Ⅰ）。９は注口の破片である。薄手の胴部に付されており、外面は丁寧に磨いているが内部は雑に成形されている。暗茶紫色の微粒子である（2トレⅠ）。10は外面は比較的丁寧に磨くが内部は雑に成形される。茶褐色の微粒子（TP11Ⅰb）。11は把手である。細く成形されており、丁寧に磨かれている。茶褐色の微粒子（表採フェンス･ネット間）。12も把手の破片である。図11に比してかなり太く成形される。暗茶紫色の微粒子である（2トレⅠ）。13も把手の下部破片である。暗茶紫色の微粒子である（P-8Ⅱ）。

（２）　小杯　（第33図14～15）

14は口縁部破片である。口径は5.7㎝。外面は磨きを加え、内面は調整痕。外面口縁直下に沈線が１条、印刻による雷文帯。胴部には線刻による文字。茶紫色の微粒子（B-8表採）。15は双耳の小杯の口縁部破片。口径は最大で3.65㎝。耳には鳥を表す。淡茶褐色の細粒子（TP11Ⅰb）。

（３）　水指　（第33図16～22）

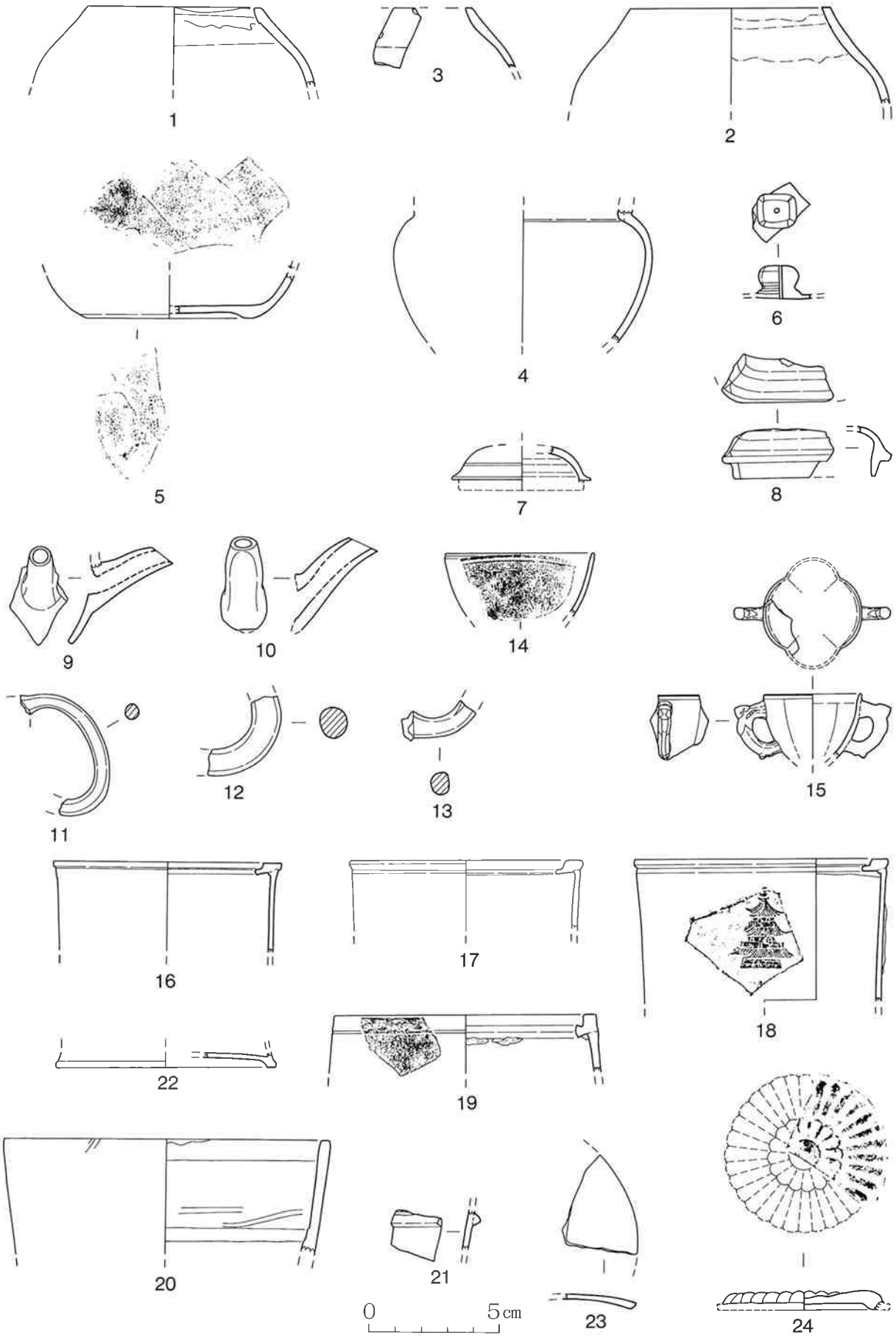
16は口縁部破片である。口径は8.7㎝。内面の口縁下部が突出し蓋受けをつくる。外面は丁寧に磨くが、内面は調整痕。茶褐色の微粒子（B-8Ⅰ）。17も口縁破片である。口径は8.9㎝。図16同様、内面の口縁下部が突出し蓋受けをつくる。外面は丁寧に磨くが、内面は調整痕。茶褐色の微粒子（表採フェンス･ネット間）。18も口縁部破片である。口径9.8㎝。口縁部や器面調整は図16･17と同様。外面に型押しの三重塔を貼り付ける。茶褐色の微粒子（B-9Ⅰ）。19は口径10,0㎝。口縁部や器面調整は図16･17･18と同様。外面の口縁直下に唐草文を巡らす。暗茶褐色の微粒子（3トレⅠ）。20は口径が12.4㎝。両面とも雑に調整している。暗茶褐色の微粒子（表採フェンス･ネット間）。21は胴部破片である。外面は磨いているが、内面は調整痕が残る。外面に貼り付け凸帯文を巡らせている。茶褐色の微粒子（1トレ）。22は底部破片。底径が8.3㎝。外面は丁寧に磨きを加えている。内面には調整痕が残る。茶褐色の微粒子（B-4Ⅰ）。

（４）　蓋　（第33図23～24）

急須以外の蓋になるものと思われる資料をまとめた。23は薄手の蓋である。急須の蓋の可能性も考慮されるものと思われるがここで扱った。両面とも雑な成形である。淡茶褐色の細粒子（B-8Ⅰ）。24は合子の蓋になるものと思われる。上面観は菊花状に型押し成形されている。蓋端部は破損しているため全形は窺えない。内面の調整は比較的雑である。灰黒色の微粒子である（4トレⅡ）。

第10表　中国産無釉陶器（宜興窯）出土状況一覧

出土地＼分類		杯		水注						水指			合子	不明	合計
		小杯	耳付杯												
		口	口	蓋	口	注口	把手	胴	底	口	胴	底	蓋	胴	
表採		1	1		2		2	3		3	1				13
3.6トレ	Ⅰ	1								1					2
7.1トレ	Ⅰ										1				1
5トレ	Ⅰ			1	1	1	4	1	1	1	2				12
	Ⅱ									1					1
4.2トレ	Ⅰ					1		2						1	4
	Ⅰb									1					1
	Ⅱ			1			1	1	1				1		5
11トレ	Ⅱ							1							1
TP11	Ⅰb			1		1		1							3
TP12	Ⅰ				1										1
合計		2	1	3	4	2	4	12	2	7	3	2	1	1	44



第33図　中国産無釉陶器　水注（1～13）、小杯（14～15）、水指（16～24）

第８節　黒釉陶器

本節では黒色の釉薬が施された陶器を黒釉陶器として取り扱った。黒釉陶器には黒釉天目茶碗・黒釉茶入壷・黒釉碗の３つが確認されている。今回得られた資料は全て小破片であるため全形が窺える資料はない。

（１）　黒釉天目茶碗　（第34図１～２）

１は底部破片で、底径は4.5cm。高台脇を水平に削るタイプの碗で、露胎部は比較的丁寧に成形されている。高台内刳りは浅い。黒色と茶褐色の釉を二度掛けする。淡灰白色の細粒子で微細な気泡痕が見られる(F-15表採)。２は底径3.8cm。高台脇を水平に削るタイプの碗で、露胎部は丁寧に成形されている。高台内刳りは浅い。黒色の釉を薄く施す。灰白色の微粒子で微細な白色の鉱物を僅かに含む(2トレⅡ)。

（２）　黒釉茶入壷　（第34図３）

３は茶入壷の肩部破片資料である。内面には轆轤痕が認められる。外面には薄い黒色の釉を施す。灰褐色の微粒子である(TP4Ⅱ)。

（３）　黒釉碗　（第34図４～６）

器形・釉調ともにいわゆる天目茶碗とは異なるタイプをまとめた。４は底部片である。高台径は3.4cm。内面の見込みは窪み、外底は糸切り痕が認められる。黄茶褐色の釉を両面に施す。淡灰白色の粗粒子で微細な白色の鉱物を含む(4トレ表採)。５は薄手の碗で、黒褐色の釉を両面に施す。淡灰白色の細粒子である(B-9表採)。６は底部片である。高台径は4.9cm。薄手の碗で、高台のつくりも小さめである。錆釉を掛けた後、黒褐色の釉を二度掛けする。淡灰白色の細粒子(B-9Ⅰ)。

第９節　瑠璃釉

瑠璃釉で確認された器種は碗・小杯・水注の3つである。

（１）　碗　（第34図７～13）

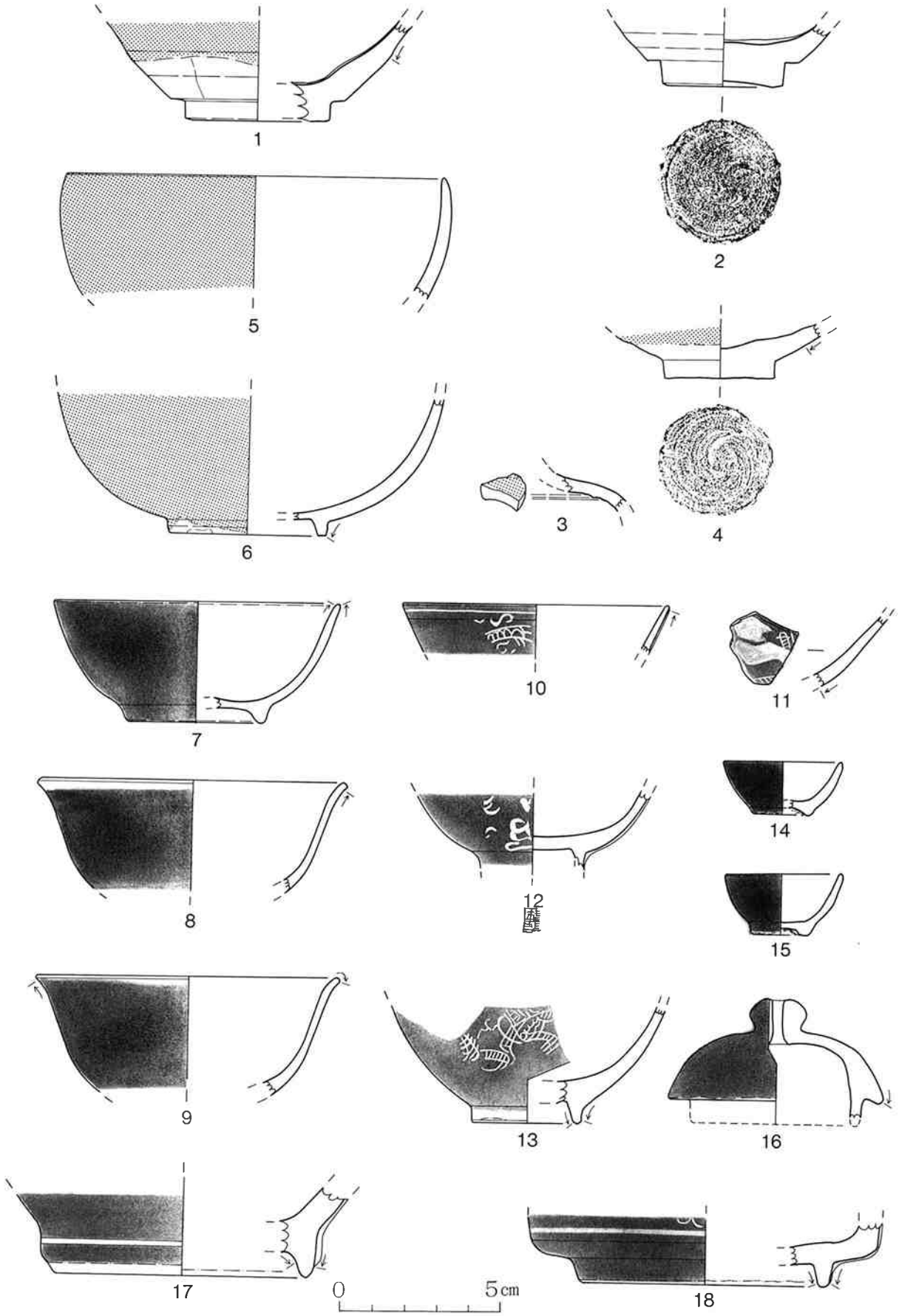
７は口径8.8cm、器高3.7cm、底径4.3cm。型押し成形。釉は二次的な被熱を受けているものと思われ、外面は藍濁色、内面は黄白濁色を呈する。口唇部は口禿となっている。淡灰白色の微粒子(表採フェンス・ネット間)。８は口径9.3cm。口縁部は微弱に外反する。釉は外面が濃い藍色、内面は青白濁色。淡灰白色の微粒子(表採南崖下)。９も外反タイプで口径9.5cm。釉は外面藍濁色、内面青白濁色。淡灰白色の微粒子(表採南崖下)。10は直口タイプで口径8.2 cm。釉は外面に藍色、内面に淡黄白濁色。外面に上絵付けによる文様を表しているが判然としない。淡灰白色の微粒子(TP8Ⅰ)。11は胴部破片である。外面に藍色、内面に青白濁色の釉を施す。外面には上絵による樹木等の文様を表している。淡灰白色の微粒子(B-8Ⅰ)。12は底部破片である。外面に藍色、内面に灰白濁色の釉を施す。外面には上絵による文様が表されるが判然としない。外底見込みに銘が入る。白色の細粒子(5トレⅠ)。13も底部破片である。外面に淡藍濁色、内面と外底面に灰白濁色の釉を施す。畳付は露胎。外面には上絵による文様が表されるが判然としない。淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕が入る(表採)。

（２）　小杯　（第34図14～15）

14は口径3.6cm、器高1.9cm、底径1.8cm。型押し成形である。二次的な被熱を受けているものと思われ、外面は淡黄藍濁色、内面は淡灰白濁色の釉を施す。口唇部は口禿である。淡灰白色の細粒子(表採南崖下)。15は口径3.7cm、器高1.6cm、底径1.8cm。釉は外面に濃藍濁色、内面に淡灰白濁色を施す。口唇部は口禿である。白色の微粒子(B-8Ⅰ)。

（３）　水注　（第34図16～18）

水注の蓋であると思われる。摘みは饅頭形を呈しており、蓋甲面は丸みを持って成形される。蓋端部は斜位に削り取られている。摘みの中心部には２㎜程度の孔を穿孔する。内面には調整痕。摘みと蓋甲面には藍色の釉を施すが、二次的な被熱を受けていることから本来の釉調は判然としない。淡灰白色の細粒子(TP8Ⅰ)。17は水注の底部と思われる。高台径は7.7cmである。外面は藍色、内面は淡青白濁色の釉を施している。畳付は露胎である。高台外面には上絵による１本の圏線を巡らせている。淡灰白色の細粒子(表採)。18も水注の底部破片で、高台径が7.7cmを測る。高台脇から角度を変えて立ち上がる。外面には藍色、内面には青白濁色の釉を施している。畳付は露胎である。外面の腰部には上絵による１本の圏線を巡らせている。淡灰白色の微粒子である(B-12Ⅰ)。



第34図　黒釉陶器　天目茶碗（1～2）、茶入壺（3）、黒釉碗（4～6）、**瑠璃釉**　碗（7～13）、小杯（14～15）、水注（16～18）

第10節　中国産色絵

中国産色絵が出土している。16～18世紀の範疇に納まる資料である。確認された器種は碗(35点)、蓋付碗(５点)、小碗(16点)、皿(37点)、小杯(２点)、鉢(２点)の６器種である。

(１)　碗　(第35図１～11)

１は微弱に外反する。口径は14,0cm。口唇部に口錆。口縁直下に上絵による雷文を巡らす。淡灰白色の釉。白色の微粒子(B-8Ⅰ)。２は上絵で文様を表すが判然としない。淡灰白色の釉。白色の微粒子(B-13Ⅰ)。３は口縁直下に２本の圏線。呉須による下絵と上絵(赤)が施すが、釉裏紅の可能性もある。淡灰白色の釉に白色の微粒子(表採フェンス・ネット間)。４は口縁に如意雲、四方襷。胴部に上絵で花卉文？を表す。淡青白色の釉に淡灰白色の微粒子(B-8Ⅰ)。５は口径15,0cm。上絵で花卉文を表す。淡灰白色の釉に白色の微粒子(B-9Ⅰ)。６は胴部片で、上絵で口縁直下に雷文帯と胴部に窓を設け内部に文様を表す。淡灰白色の釉に白色の微粒子(5トレⅠ)。７は上絵で人物や宝？を表現する。釉は淡灰白色を呈するが、二次的な被熱を受ける。白色の細粒子(2トレⅠb)。８も７と同様に両面に人物や宝？を表現する。白色の微粒子(表採南崖下)。９は蛸唐草？を上絵で表すが判然としない。淡灰白色の釉に白色の微粒子(表採)。10は高台径が6.6cm。高台脇に上絵による縦位の連続文。灰白色の釉で畳付以外は総釉。淡灰白色の細粒子(TP4Ⅱ)。11もで高台径は6.4cmを測る。高台脇に連続文。灰白色の釉で畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子(1トレⅠ)。

(２)　蓋付碗　(第35図12～16)

12は蓋付碗の蓋。撮み径は3.4cm。撮みの見込みには銘。上絵で文様を表すが判然としない。釉は淡灰白色で撮み上端は露胎。白色の微粒子(E-6表採)。13は蓋端部径は8.8cm。上絵で笹？を表す。白色の釉に白色の微粒子(B-8Ⅰ)。14は蓋付碗の身。口径10,0cm、器高5,1cm、底径5,7cm。上絵が見られるが判然としない。淡灰白色の釉を施すが、畳付は露胎。白色の微粒子(C-8Ⅰ)。15は口径が8.0cm。下絵による文様を描いた後、上絵による葉等を表す。淡青灰白色の釉。口唇部は口錆。白色の微粒子(E-6表採)。16は上絵による笹等を表す。白色の釉を施すが、蓋受け部分は露胎。白色の微粒子(B-9Ⅰ)。

(３)　小碗　(第35図17～23)

17は口径9.3cm、器高5.9cm、底径3.1cm。主文に花文、地に蛸唐草文。口唇部は口錆。淡灰白色の釉に淡灰白色の微粒子(C-8Ⅰ)。18は口径が9.2cm。上絵を施すが判然としない。口唇部口錆。淡灰白色の釉に白色の微粒子(B-8Ⅰ)。19は口径8.2cm。外面に上絵により文字？を表す。二次的な被熱により釉調は淡黄白色。白色の微粒子(B-19Ⅰ)。20は口径が9.9cm。上絵により花卉文。淡灰白色の釉に白色の微粒子(B-9Ⅰ)。21は下絵で素描き後、上絵で彩色する。白色の釉に白色の微粒子(表採)。22は高台径が5.2cm。高台脇に上絵による文様が認められる。淡灰白色の釉に白色の微粒子(B-9Ⅰ)。23は高台径が3.4cm。高台外面に下絵で連続文、胴下部に上絵による菊花文を表す。淡灰白色の釉に白色の細粒子(B-9表採)。

(４)　小杯　(第36図24)

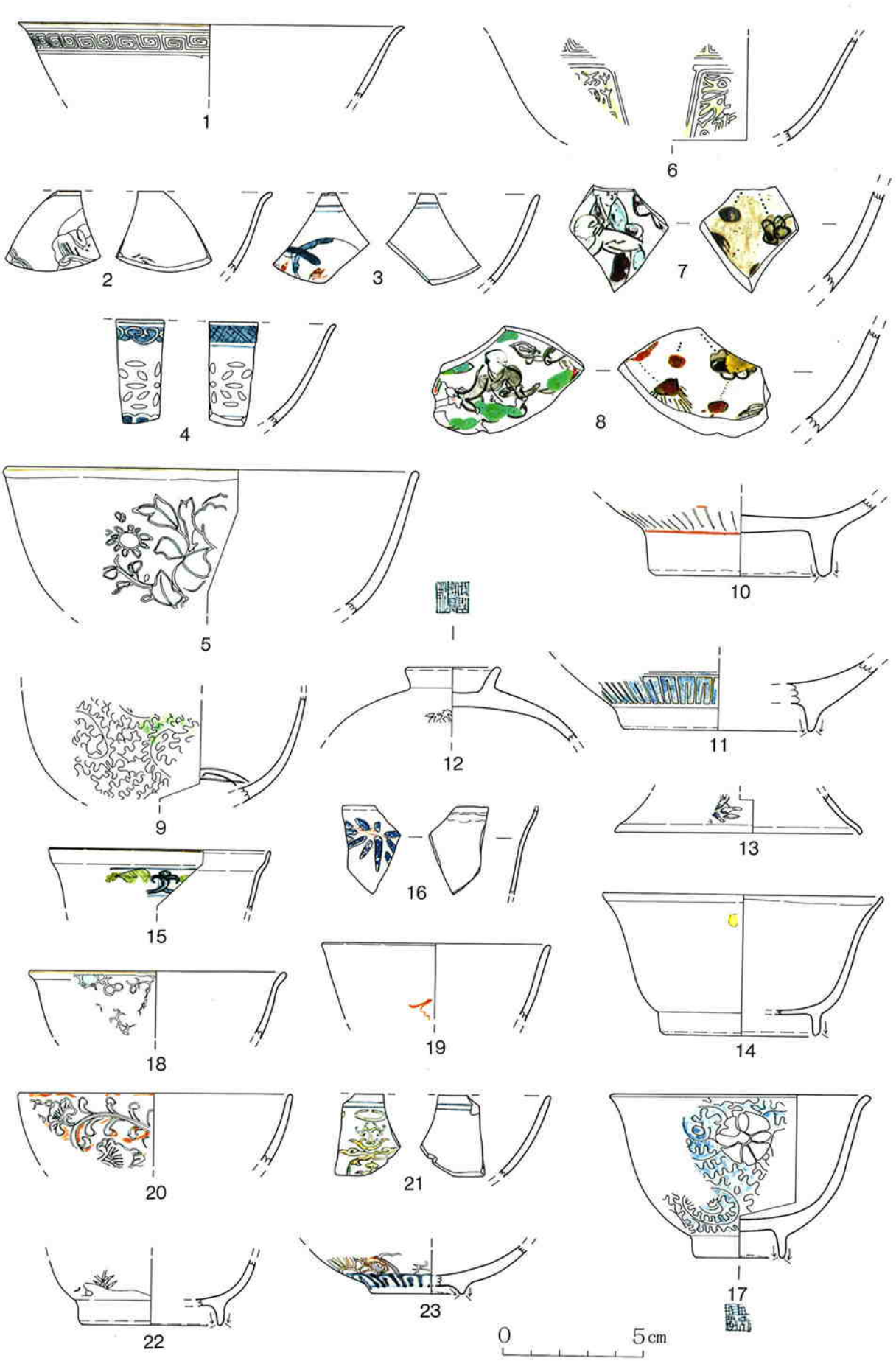
24は口径が7.2cm。外面に花卉文。口唇部は口錆。白色の釉に白色の細粒子(表採ネット外)。

(５)　皿　(第36図25～33)

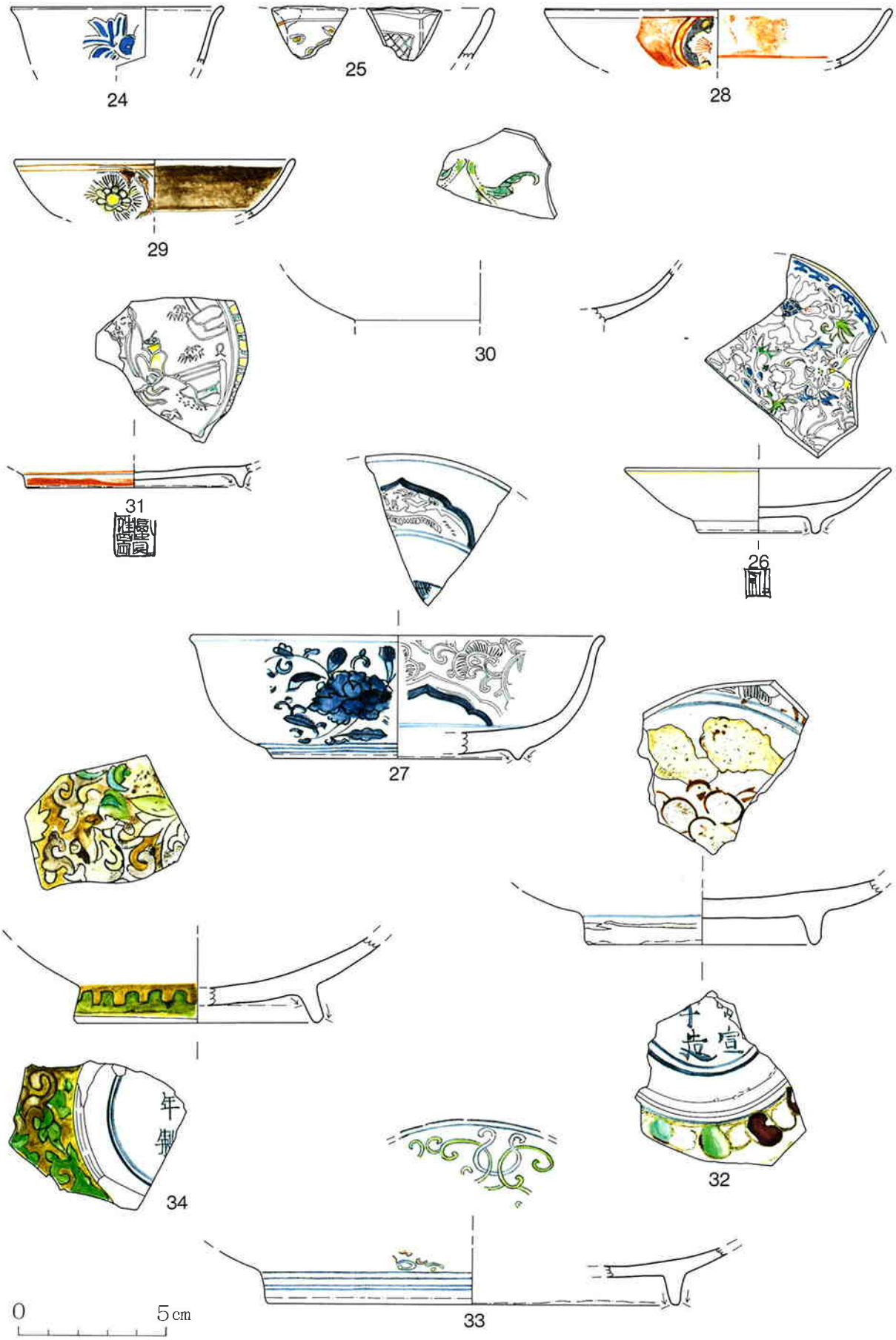
25は変形皿である。両面に上絵による文様を表す。淡灰白色の釉に白色の細粒子(5トレⅠ)。26は小皿で、口径は9.0cm、器高2.2cm、高台径4.0cm。上絵による花卉文等を表す。外底見込みに銘が入る。口唇部は口錆。畳付は露胎。淡灰白色の釉に白色の微粒子(B-9表採)。27は深めの皿である。口径14.0cm器高4.2cm底径8.4cm。28は浅めの皿である。口径が11.8cm。上絵による区画を設け内部に花卉文を表す。淡灰白色の釉に白色の微粒子(表採)。29は口径が9.5cm。上絵による区画を設けた後に、内部に花卉文を表す。淡灰白色の釉に白色の微粒子(表採)。30は薄手の皿である。内面に上絵により花卉文を表している。淡灰白色の釉に白色の微粒子(表採)。31は薄手の皿の皿の底部である。高台径は7.4cm。内面の見込みに上絵による人物等を表現する。高台外面に上絵による２本の圏線。外底面に銘が入る。淡灰白色の釉に白色の微粒子(B-9Ⅰc)。32は高台径が7.9cmで、内面の見込みに上絵で花卉文を表す。外面高台脇にも上絵による文様が見られる。外底面には呉須による「大明宣徳年製」の銘が入る。淡灰白色の釉に白色の微粒子(TP4Ⅱ8/9)。33は大皿の底部になるものと思われる。両面に呉須で素描きを施した後、上絵により彩色する。白色の釉に白色の微粒子(B-5Ⅱ)。

(６)　鉢　(第36図34)

34は両面に上絵による花卉文や唐草文が施されるが、二次的な被熱を受けており表面があばた状を呈する。外底面には呉須により銘(大明宣徳年製か？)が入る。釉調は不明。白色の微粒子(B-14表採)。



第35図　中国産色絵１　碗（１～16）、小碗（17～23）



第36図　中国産色絵 2　小杯（24）、皿（25～33）、鉢（34）

第11節　彩釉陶

中国明代に南部地域で生産された三彩及び緑釉、法花、翡翠釉等を扱った。確認された器種は水注・小杯・壷である。

三　彩　(第36図１～５)

三彩・緑釉で確認された器種は水注・小杯であるが、特徴的な破片資料についても図化した。１と２は鶴型水注の破片資料である。１は頚部の破片で、白化粧を施した後に外面に緑釉と黄釉を施釉する。内面には緑釉の釉垂れが見られる(表採)。２は鶴の左羽に位置する。型押し成形による羽が表されており、白化粧を施した後に緑釉・黄釉を施釉する(B-5Ⅰ)。３は小杯で口径が7.2cmを測る。外面には印刻の龍が表されている。龍には錆釉を、地には緑釉を施釉する。内面には淡灰白色の釉を施している(B-8Ⅰ)。４は瓶の胴部になるものと思われるが不明。外面には白化粧後、緑釉と透明釉を掛けていると思われるが二次的な被熱を受けたと見られ、本来の発色は判然としない(G-9表採)。５は器種不明で、両面に透明な緑釉・黄釉・透明釉を施釉する(TP10Ⅰ)。

法　花　(第36図６～７)

法花で確認された器種は壷のみである。６は壷の口縁部破片。口唇部から内面にかけて淡青緑色の釉を施し、外面口縁直下に藍色の釉を施す(表採)。７は胴部破片。外面は文様を浮き上がらせるため、貼付や線刻が施される。釉は外面に藍色・水色等を、内面には緑釉を施す(表採)。

翡翠釉　(第36回８～10)

翡翠釉で確認された器種は、皿・瓶・壷の３つである。８は薄手の皿の底部片である。内面には翡翠釉を上絵で施す。淡灰白色の釉(B-8Ⅰ)。９は瓶の胴部片である。外面には線刻文。白化粧後、翡翠釉を施す。内面には轆轤痕(表採南崖下)。10は壷の頚部から胴部にかけての破片資料である。外面には鎬文を表し、翡翠釉を施す。内面には轆轤痕(2トレⅡ)。

第12節　ベトナム産磁器

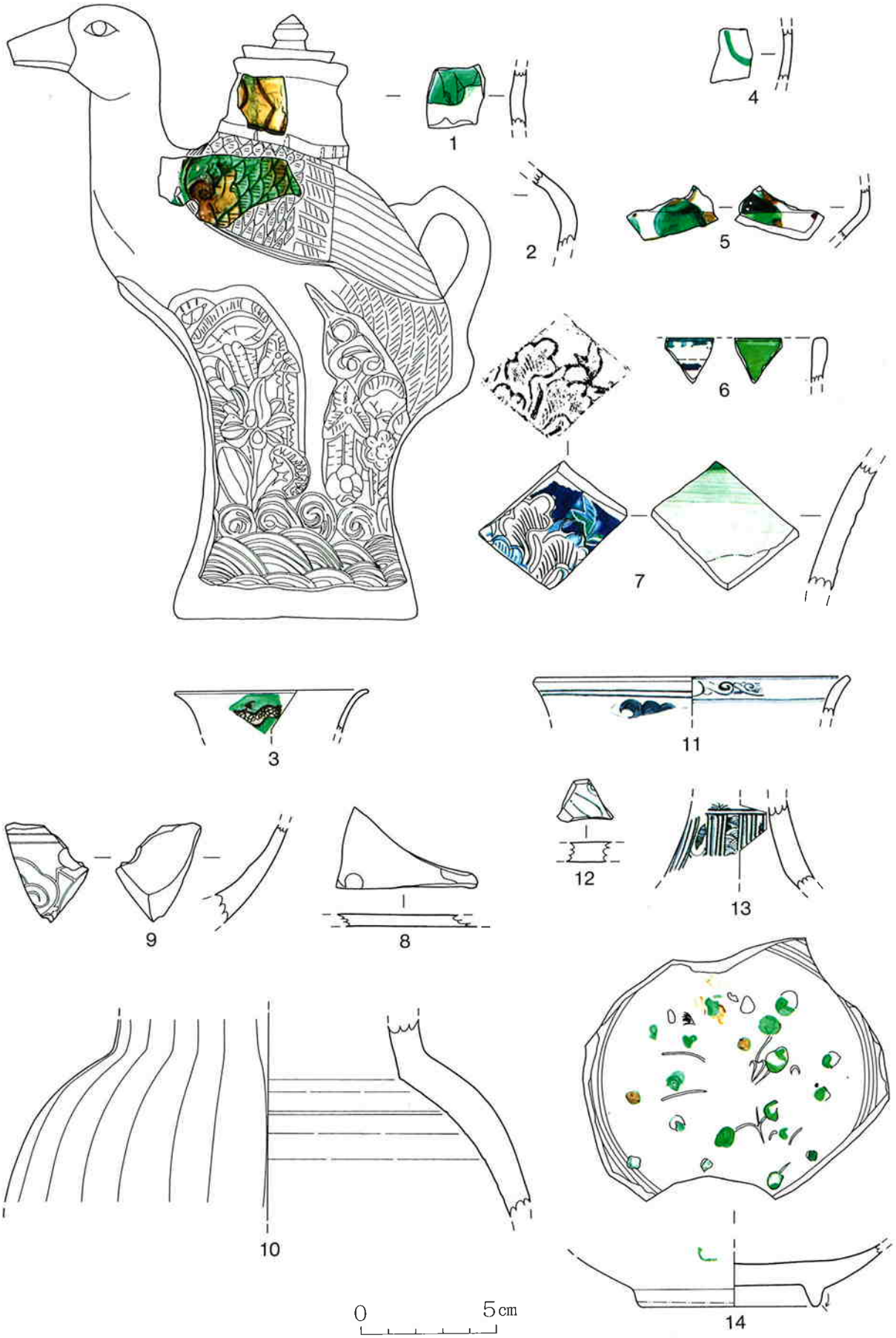
(第37図11～14)

ベトナム産磁器で確認されたのは青花と色絵の２つである。11は青花碗である。口径は11.8cm。両面に呉須による唐草文や圏線等が表されているが、二次的な被熱を受けているため呉須の発色・釉調は本来のものではない(表採)。12は青花碗の底部資料である。内面見込みは有文であるが判然としない。外底面に錆釉を施す。淡灰白色の釉(表採)。13は青花瓶の頚部片である。外面には青海波と宝？。内面に釉垂れ。チューダオ・バッチャン窯(2トレ表採)。14は色絵皿の底部である。底径は6.7cm。両面に上絵が観察できる。チューダオ・バッチャン窯(表採)。

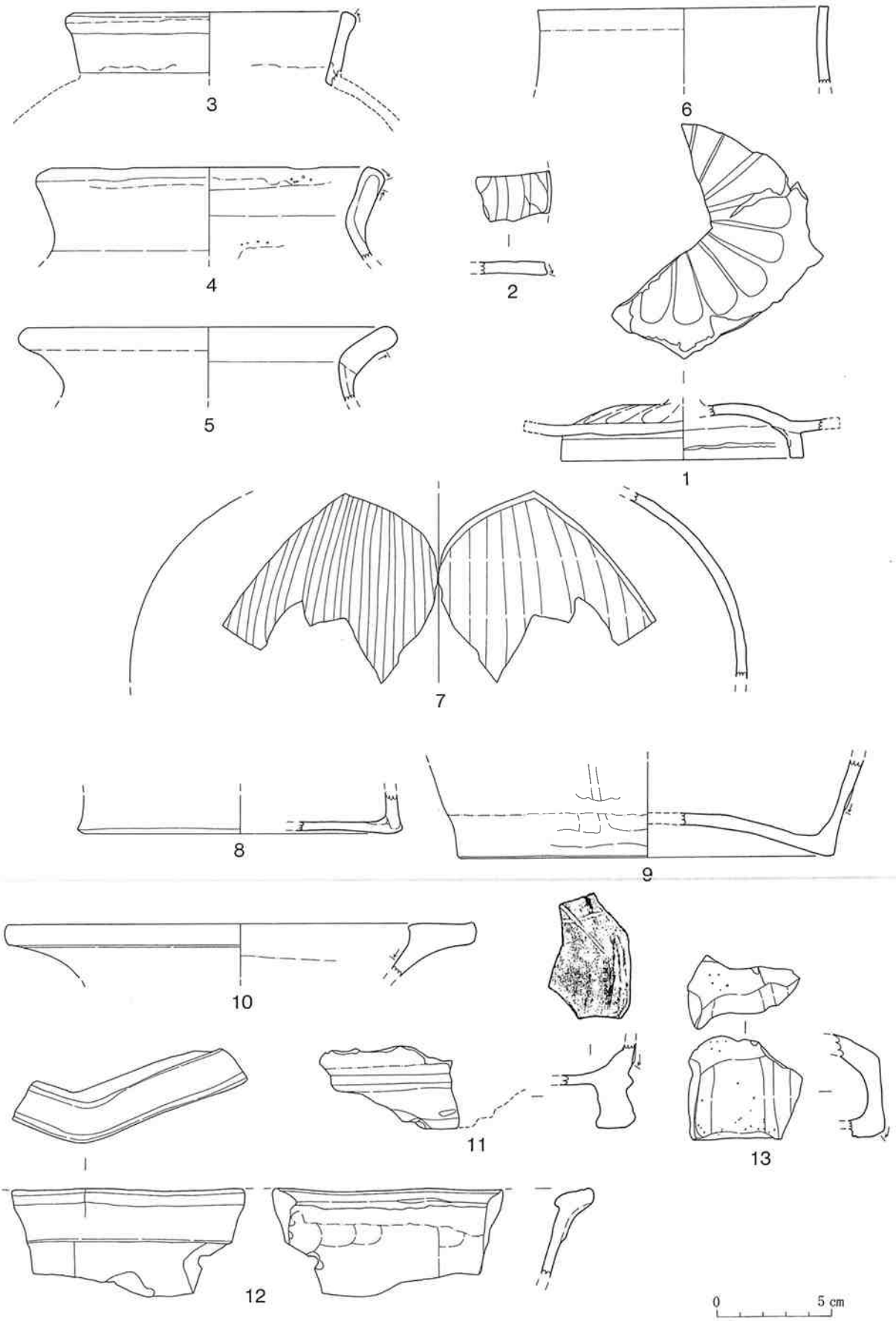
第13節　銅緑釉

(第38図１～13)

銅緑釉が施釉された陶器をまとめた。確認された器種は壷・鉢・香炉の３つである。器種不明の特徴的な資料についても図化した。１～９は酒会壷である。１は蓋で型成形。短径で10.6cm。蓋甲面に鎬文(B-8Ⅰ)。２は蓋の端部である。上面に鎬等の陽刻文(TP6Ⅰ)。３は身の口縁部。口径12.6cm。外面に銅緑釉、口唇部から内面にかけて錆釉を掻き取った痕跡が見られる(表採)。４は口径 15.1.cm。釉調は17と同様(B-8Ⅰ)。５は口径が16.4cmを測る。釉調は17・18と同様である(TP4Ⅱ)。６は口径が12.6cm。外面口縁直下にのみ銅緑釉を施す。内面は無釉である(TP10Ⅰb)。７は胴部片である。両面に鎬文を型押成形した際の凹凸が顕著に見られる。外面のみ銅緑釉を施す(TP10Ⅰb)。８は底部片である。底径は14.0cm。外面に銅緑釉を施している(B-12Ⅰ)。９も底部資料で、底径が16.4cmを測る。両面に鎬文を型押成形した際の凹凸が見られる。外面の底部際まで施釉する(4トレⅡ)。10は鉢の口縁破片であると思われる。口径は20.4cmを測る。外面から内面口縁直下まで銅緑釉を施している(2トレⅠ)。11は香炉の底部資料である。平底に成形後、足を貼り付ける。外面胴下部まで銅緑釉を施釉する(B-8Ⅰ)。26は器種不明の口縁破片である。型成形であると思われる。外面から内面口縁直下まで施釉する(4トレⅡ)。27の資料は器種・部位ともに不明である。外面の銅緑釉が白濁化している(B-11)。



第37図　三彩　水注(1～2)、小杯(3)、瓶(4)、器種不明(5)、**法花**　壺(6～7)、**翡翠釉**　皿(8)、瓶(9)、壺(10)、**ベトナム産磁器　青花**　碗(11～12)、瓶(13)、**色絵**　碗(14)



第38図　銅緑釉　壺（1～9）、鉢（10）、香炉（11）、器種不明（12～13）

本土産陶磁器

今回の調査により、首里城跡南側管理用道路地区において、有田・波佐見・鍋島を中心とした肥前や九州の各諸窯を産とする陶磁器類の他に、京・信楽焼を含めた関西系の陶器、志野焼(系)陶器等の近世～近代にかけての資料が多量に確認された。また型紙摺りや銅板転写・ゴム判・コンニャク判等の一般に印判手と称される資料や瀬戸・美濃を産とする磁器類等の近代～現代にかけての資料も比較的多量に確認することができた。南側管理用道路地区における本土産陶磁器類の出土点数は1523点を数え、本地区において確認された陶磁器類全体の約19％を占める。本土産陶磁器の産地別出土傾向としては、有田を中心とした肥前陶磁器、京・信楽焼を含めた関西系陶器がやや拮抗する形で確認されており、これに次いで薩摩・砥部焼等が比較的多いようである(第11・13・15・17表)。本節以降では(～第17節)、これらの本土産陶磁器類を産地別・器種別に分類してみた。以下染付磁器・色絵磁器・印判手・陶器の順に述べる。

第14節　本土産染付

本土産磁器の中で最も多く確認されたのは染付磁器(以下、本土産染付)である。総点数が424点を数え、本土産陶磁器全体の約30％を占めている。産地別に見てみると有田を中心に、鍋島・波佐見などを産とする肥前が356点、これに瀬戸・美濃が37点と続く。本土産染付の器種としては、碗・小碗・皿・大皿・小皿・長皿・小杯・鉢・蓋・瓶・猪口の11器種が確認されている。中でも碗は193点が確認されており、全体の46％を占めている状況である(第11表)。首里城跡管理用道路地区において確認された本土産染付は、古くは17c後半から大正・昭和までの資料が幅広く得られており注目される。

以下、本地区より検出された本土産染付（有田・肥前・波佐見・鍋島・瀬戸・美濃）の分類概念を記す。なお、個々の特徴等については観察表（第12表）に呈示した。

有　田

有田磁器で確認されたのは、碗・小碗・皿・大皿・小皿・長皿・鉢・蓋・瓶・猪口の10器種である。器種別出土傾向を見てみると、総点数264点に対して碗が91点と全体の約35％で、以下、皿66点、大皿43点と続いている。

(1)碗　(第39図1～19、40図20～24)

管理用道路地区にて確認された有田を産とする碗は、外反碗・丸碗・直口碗・筒型碗・蓋付碗の5つに大別し、必要に応じてa～eに細分した。

Ⅰ類　外反碗　(第39図　1)

外面に網目文を施す碗の胴部片が1点のみ確認される。

Ⅱ類　丸　碗　(第39図　2～15)

文様構成や器形等からa～eの5つに細分した。

a　菊文や雪輪文が主体となり、地として氷裂文を全体に表現する碗である。

b　薄手のタイプの碗で外面に花唐草文を表現する碗である。花唐草文の退化による時間差が見られる。

c　薄手の碗で外面に蛸唐草文を表現する。

d　高台が非常に低くて小さく、器壁が薄いタイプの碗である。

e　花文の文様が主体となり、矢羽状文を全体に表現する。内面の口縁部直下には四方襷文が見られる。

Ⅲ類　直口碗　(第39図　16～19)

直口タイプの碗で、外面に魑龍文や青海波文などを表現する。

Ⅳ類　筒型碗　(第40図　20～21)

腰折の筒型タイプである。外面には圏線や草花文、内面には四方襷文等を表現する。

Ⅴ類　蓋付碗　(第40図　22～24)

蓋付碗がセットで確認されている。蓋・身の両方とも口縁内面には四方襷文を施しているほか、外面にも文様が見られる。

(2)　小碗　(第40図25～32)

薄手の直口タイプと腰折タイプの2種類がある。

(3)　皿　(第40図33～35、第41図36～48)

皿はⅠ類～Ⅱ類の2つに大別し、必要に応じてa・bなどに細分した。

Ⅰ類　碁笥底皿　(第40図33)

碁笥底皿が一点得られている。やや厚手のタイプである。

Ⅱ類　輪花皿　(第40図34～35、第41図36～48)

文様構成から次の４つに細分した。

ａ口縁が微弱に外反するタイプで内面に半菊花文と花唐草文の組み合わせや芙蓉手の裏文様を表現する。

ｂいわゆる「なます皿」である。内面には花唐草文や蛸唐草文を表現し、見込み周辺には帯状に剣先繋文と中央には松竹梅文を環状に巡らす。外面には如意頭文崩れの唐草文を表現する。

ｃ内面には炭弾き(白抜き技法)による絵付けが見られ、外面には如意頭文を入れる。

ｄ内面に波文を、外面には唐草文を施す。

(４)　大皿　(第42図49～60、第43図61)

大皿はⅠ～Ⅴ類の５つに大別した。

Ⅰ類　厚手でやや深めの大皿である。鍋島と同時期であると思われる資料である。

Ⅱ類　口縁直下で角度を変えて立ち上がるタイプの大皿である。口縁部の内外面には四方襷文が見られる。

Ⅲ類　柿右衛門(南川原窯系)と思われるもので、高台外面には渦「福」文やハリ支え痕が見られる。

Ⅳ類　稜花タイプで内面に花唐草文や蛸唐草文を表すタイプや型打ち陽刻や絵付けによる宝文が、高台外面には鉋目やハリ支え痕が見られる。それぞれａ・ｂ・ｃとした。

Ⅴ類　大振りの八角皿である。内面には花卉文と波濤文を表した芙蓉手のタイプである。

(５)　長皿　(第42図62～63)

タタラ作りされた素地を型打ち成形する。貼り付け高台で、内面には蛸唐草文、見込みには松竹梅文を施す。

(６)　鉢　(第43図64～65)

口縁部をきつく外反させるのと微弱に外反させるタイプとがある。前者は逆「ハ」の字状に開き口縁をきつく外反させる、内外面とも圏線と草花文を組み合わている。後者は若干腰が膨らみ、口縁を微弱に外反させる。外面には花唐草、内面には蛸唐草文が見られる。

(７)　蓋　(第43図66～67)

蓋付鉢の蓋と思われる資料である。熨斗形の紐を貼り付けており、蓋甲面には菊文や草花文を表現する。

(８)　瓶　(第43図68)

胴部に網目文を表現するやや古手の瓶である。

(９)　猪口　(第43図69～70)

口径に若干の差異は見られるが同タイプの猪口である。外面には蛸唐草文、口縁内面には四方襷文を表現する。

肥　前

ここではいわゆる肥前系とされる窯不明の資料を扱った(以下、肥前)。肥前磁器で確認されたのは、碗・小碗・皿・瓶の４器種である。器種別の出土状況は総点数81点に対して碗が63点と全体の約78％を占めており、以下、皿８点、小碗７点という状況である。

(１)　碗　(第44図71～83)

確認された碗は丸碗・筒型碗・蓋付碗・外反碗の４つに大別した。

Ⅰ類　丸碗　(第44図71～78)

線描きによる松・竹文？や八卦(算木)文、または石畳地文等を絵付けする。

Ⅱ類　筒型碗　(第44図79～80)

外面には格子文を地とし、雪輪文の中には梅花文を描いているのも見られる。

Ⅲ類　蓋付碗　(第44図81～83)

胴部外面に片藤花を円形状に表した文様や蛸唐草文を全面に表す。

Ⅳ類　外反碗　(第44図84)

口縁部が微弱に外反するタイプの碗である。

(２)　小碗　(第44図85～87)

外面に草花文等を表している。高台脇には圏線が見られる。

(３)　皿　(第44図88～91)

外面に唐草文等を表し、見込みには七宝繋文を帯状に表すものも見られる。

（4） 鉢 （第44図92）
胴部外面には草花文、見込みには圏線が見られる。
（5） 瓶 （第44図93）
外面の胴部に円形の窓に構成の判然としない文様を表している。

波佐見
波佐見を産地とする磁器については、碗胴部2点、皿口縁2点の合計4点が検出されている。
（1） 碗 （第45図94～95）
2点とも高台脇から腰にかけての胴部片である。胴部外面は有文で見込みは蛇の目状に釉を掻き取っている。
（2） 皿 （第45図96～97）
外面は轆轤痕が顕著に見られ、内面には雁や雲と思われる文様を表している。みこみは蛇の目状に掻き取る。

鍋 島
鍋島の資料としては、菱形状の皿が検出されている。文様構成や器形の差異等から少なくとも2～3個体はあるものと思われる。色絵の生地としての可能性も考慮されるものと思われる。全形をうかがえるような破片資料から図上復元を試みた(第45図98)。
口縁部は稜花を形成し、上面観菱形状をなす内面6面の中心には型打ち陽刻の渦文を施し、その右輪郭に沿い線描きを加えている。また渦文の間には牡丹唐草文を表している。外面には渦文の裏に2種類の宝文を表している。高台外面には剣先文を表す。

瀬戸・美濃
確認された器種としては、碗・小碗・皿・小杯・壺・瓶・蓋・香炉の8つがある。
（1） 碗 （第45図99）
検出された碗の大部分が小破片であることから、比較的に残りのよい底部資料を1点のみ図化した。外面は2本1組による区画が3つあり、区画内には松文等を表す。高台外面には1本の圏線。内面見込みには圏線と寿文を表す。
（2） 小碗 （第45図100～101）
両面の口縁には2本の圏線、胴部外面には草花文を表すものや福文を表すものなどがある。
（3） 皿 （第45図102）
小振りの皿で、口縁部に抉りを加えて稜花とする。口唇部に呉須による口紅を施し、見込みには折枝文を表す。
（4） 小杯 （第45図103～104）
口縁部と底部の破片資料をそれぞれ1点ずつ図化した。外面や見込みには折枝文や草花文と圏線の組み合わせが見られる。高台外面には印文が確認できる。
（5） 壺 （第45図105）
蓋付壺の身の完形品が1点得られている。肩から胴中央辺りにかけて横位の直線と縦位の波線を表す。
（6） 瓶 （第45図106）
薄手の瓶である。両面施釉で外面には手描きの文様が見られる。底部は上げ底状に成形する。
（7） 蓋 （第45図107～109）
急須の蓋になるものと思われる資料である。蓋甲部には絵付けをした後に透明釉を施す。内面は身受け部分以外は総釉である。
（8） 香炉 （第45図110）
比較的薄造りの香炉である。高台内を「ハ」の字状に削り取って成形し、畳付外端部を斜位にきつく削り取る。外面は釉を施すが内面は無釉である。高台外面には3本の圏線が確認できる。

第11表　本土産染付出土状況一覧

出土地		有田 碗 Ⅰ 胴	碗 Ⅱ a 口	碗 Ⅱ a 胴	碗 Ⅱ a 底	碗 Ⅱ b 完	碗 Ⅱ b 口	碗 Ⅱ b 胴	碗 Ⅱ b 底	碗 Ⅱ c 口	碗 Ⅱ c 胴	碗 Ⅱ d 口	碗 Ⅱ d 胴	碗 Ⅱ d 底	碗 Ⅱ e 口	碗 Ⅱ e 胴	碗 Ⅱ e 底	碗 Ⅱ f 口	碗 Ⅱ f 胴	碗 Ⅱ f 底	碗 Ⅱ 不明 口	碗 Ⅱ 不明 底	碗 Ⅲ 口	碗 Ⅲ 胴	碗 Ⅳ 底	碗 Ⅴ 底	小計
表採					2	1	3	3	1	2	1	2	3	6	1	1		2				2	3	1		1	35
3.6トレ	Ⅰ												1			1											2
	Ⅱ							1		1																	2
7.1トレ	Ⅰ							1																			1
	Ⅲ																										0
5トレ	Ⅰ		2	1	1		5	2		2	2	1	1	3			2		1	1				2	1		27
	Ⅱ												1														1
4.2トレ	Ⅰ	1					4			1								1				1	1				9
	Ⅰb																										0
	Ⅰ黒土						1																				1
	Ⅱ					1							1	1		1											4
11トレ	Ⅰ							1																			1
	P7																										0
	P10																										0
12トレ	Ⅰ																										0
	P4																										0
TP3	Ⅰ																										0
	Ⅱ																							1			1
TP4	Ⅱ						1															1				1	3
TP5	Ⅰ																										0
	Ⅱ																										0
TP6	Ⅱ																										0
TP7	Ⅱ																										0
TP8	Ⅰ																						1				1
	Ⅱ																										0
TP9	Ⅰ																										0
TP10	Ⅰ																				1						1
	Ⅰb																										0
TP11	Ⅰ						1																				1
	Ⅰa																										0
	Ⅰb														1												1
	Ⅱ																										0
TP12	Ⅰ																										0
合計		1	2	1	3	2	15	8	1	6	3	3	7	10	2	3	2	3	1	1	1	4	5	4	1	2	91

出土地		有田 小碗 口	小碗 胴	小碗 底	小計	皿 Ⅰ 胴	皿 Ⅰ 底	皿 Ⅱ a 口	皿 Ⅱ a 胴	皿 Ⅱ b 口	皿 Ⅱ b 胴	皿 Ⅱ c 完	皿 Ⅱ c 口	皿 Ⅱ c 胴	皿 Ⅱ d 完	皿 Ⅱ d 口	皿 Ⅱ d 胴	皿 Ⅱ 不明 口	皿 Ⅱ 不明 胴	皿 Ⅱ 不明 底	皿 不明 底	小計
表採		6	7	2	15	1	6		2				2	1			1	3	2	14		23
3.6トレ	Ⅰ			1	1											1					1	2
	Ⅱ	1			1																	0
7.1トレ	Ⅰ				0									1								1
	Ⅲ				0																	0
5トレ	Ⅰ	3	1		4						1	3	1				1	4	1		1	12
	Ⅱ				0																	0
4.2トレ	Ⅰ	1	1		2		2	1				1	1					3			2	10
	Ⅰb				0																	0
	Ⅰ黒土				0																	0
	Ⅱ	1			1								2	1				1				4
11トレ	Ⅰ	2			2																	2
	P7	1			1																1	1
	P10				0																	0
12トレ	Ⅰ				0																	0
	P4				0																	0
TP3	Ⅰ				0																	0
	Ⅱ				0																	0
TP4	Ⅱ				0																1	1
TP5	Ⅰ				0																	0
	Ⅱ				0																	0
TP6	Ⅱ				0																1	1
TP7	Ⅱ				0																	0
TP8	Ⅰ				0																	0
	Ⅱ				0																	0
TP9	Ⅰ				0					1												1
TP10	Ⅰ		1		1					1								1				2
	Ⅰb				0																	0
TP11	Ⅰ				0																	0
	Ⅰa				0																	0
	Ⅰb				0					1	1				1			1	1			5
	Ⅱ				2																	0
TP12	Ⅰ	2			0																	1
合計		1	3	3	30	1	8	1	2	3	2	5	7	3	1	1	2	1	4	1	2	66

出土地		有田 大皿 Ⅰ 底	大皿 Ⅱ 口	大皿 Ⅲ 底	大皿 Ⅳ a 口	大皿 Ⅳ a 胴	大皿 Ⅳ a 底	大皿 Ⅳ b 完	大皿 Ⅳ b 口	大皿 Ⅳ b 胴	大皿 Ⅳ b 底	大皿 Ⅳ c 完	大皿 Ⅳ c 口	大皿 Ⅳ c 底	大皿 Ⅴ 口	大皿 不明 底	小計
表採			1	1	1	1	1		1	1	2	1					10
3.6トレ	Ⅰ																0
	Ⅱ																0
7.1トレ	Ⅰ		1														1
	Ⅲ																0
5トレ	Ⅰ		1		1		1	1	1	1	3	3	1	1			14
	Ⅱ								2			1			1		3
4.2トレ	Ⅰ	1							1								3
	Ⅰb	1															1
	Ⅰ黒土																0
	Ⅱ										1						1
11トレ	Ⅰ		1														1
	P7																0
	P10									1							1
12トレ	Ⅰ																0
	P4																0
TP3	Ⅰ																0
	Ⅱ																0
TP4	Ⅱ																0
TP5	Ⅰ																0
	Ⅱ																0
TP6	Ⅱ															1	1
TP7	Ⅱ																1
TP8	Ⅰ																0
	Ⅱ																0
TP9	Ⅰ																0
TP10	Ⅰ		1														0
	Ⅰb																0
TP11	Ⅰ																0
	Ⅰa																0
	Ⅰb			1			1										0
	Ⅱ						1		1							1	3
TP12	Ⅰ					1											1
合計		2	5	2	2	2	4	1	6	3	6	5	1	1	1	2	1

出土地		有田 小皿 完	小皿 口	小皿 底	小計	長皿 完	長皿 口	長皿 胴	長皿 底	小計	鉢 口	鉢 胴	小計	蓋	瓶 胴	猪口 完	猪口 口	猪口 胴	猪口 底	小計	器種不明 胴	合計
表採		1		1	2		1	1	1	3	1	1	2	2	3		1			6		96
3.6トレ	Ⅰ				0					0			0							0		5
	Ⅱ				0					0			0							0		3
7.1トレ	Ⅰ				0					0			0							0		3
	Ⅲ				0					0			0							0		0
5トレ	Ⅰ				0	3	1		1	5	1		1			1	1	1	1	4		67
	Ⅱ				0					0			0							0		4
4.2トレ	Ⅰ				0					0	1		1							0		25
	Ⅰb			1	1					1			0							0		2
	Ⅰ黒土				0					0	1		1							0		2
	Ⅱ				0					0	1		1							0		11
11トレ	Ⅰ				0					0	1		1							0		7
	P7		1		1					0			0							0		3
	P10				0					0			0							0		1
12トレ	Ⅰ				0					0			0	1						1		1
	P4				0					0			0							0		0
TP3	Ⅰ				0					0			0							0		0
	Ⅱ				0					0			0							0	1	2
TP4	Ⅱ				0					0			0							0		4
TP5	Ⅰ				0					0			0							0		0
	Ⅱ				0		1			1			0							0		0
TP6	Ⅱ				0					0			0							0		1
TP7	Ⅱ				0					0			0							0		0
TP8	Ⅰ				0					0			0	1						1		3
	Ⅱ				0					0			0							0		0
TP9	Ⅰ				0					0			0							0		2
TP10	Ⅰ				0					0		1	1							0		6
	Ⅰb				0					0			0							0		0
TP11	Ⅰ				0					0			0							0		1
	Ⅰa				0					0			0							0		0
	Ⅰb				0					0			0							0		8
	Ⅱ				0					0			0							0		5
TP12	Ⅰ				0					0			0							0		2
合計		1	1	2	43	3	3	1	2	9	6	2	8	4	3	1	2	1	1	12	1	264

出土地		肥前 碗 Ⅰ 口	碗 Ⅰ 胴	碗 Ⅰ 底	碗 Ⅱ 口	碗 Ⅱ 胴	碗 Ⅲ 完	碗 Ⅲ 口	碗 Ⅳ 口	碗 Ⅳ 胴	碗 不明 口	碗 不明 胴	小計	小碗 胴	小碗 底	小計	皿 口	皿 胴	皿 底	小計	鉢 胴	瓶 胴	器種不明 口	合計
表採		6	10	2								2	23		1	1		1	1	2	1	1	2	30
3.6トレ	Ⅰ		1										1			0				0				1
	Ⅱ												0			0				0				0
7.1トレ	Ⅰ												0			0				0				0
	Ⅲ												0			0				0				0
5トレ	Ⅰ	1	2	2		1		2					8		2	2				0				10
	Ⅱ												0			0				0				0
4.2トレ	Ⅰ	3	3	2								1	9	1		1	1		1	2				12
	Ⅰb												0			0				0				0
	Ⅰ黒土	1	1										2	1		1				0				3
	Ⅱ	2	4		1								7			0				0				7
11トレ	Ⅰ		1										1			0	2			0				3
	P7						1						1		1	1				2				2
	P10												0			0				0				0
12トレ	Ⅰ	1											1			0				0				1
	P4			1									1			0				0				1
TP3	Ⅰ										1		1			0				0				1
	Ⅱ									1			1			0				0				1
TP4	Ⅱ		3										3	1		1				3				4
TP5	Ⅰ												0			0				0				0
	Ⅱ									1			1			0				0				1
TP6	Ⅱ												0			0				0				0
TP7	Ⅱ												0			0				0				0
TP8	Ⅰ												0			0				0				0
	Ⅱ												0			0				0				0
TP9	Ⅰ												0			0				0				0
TP10	Ⅰ											1	1			0			1	1				2
	Ⅰb												0			0				0				0
TP11	Ⅰ												0			0	1			1				1
	Ⅰa	1											1			0				0				1
	Ⅰb		1										1			0				0				1
	Ⅱ												0			0				0				0
TP12	Ⅰ												0			0				0				0
合計		15	26	7	1	1	1	2	1	4	1	4	63	3	4	7	4	1	3	8	1	1	2	82

出土地		波佐見焼 碗 胴	波佐見焼 皿 口	合計	鍋島焼 皿 口～底	鍋島焼 皿 口	鍋島焼 皿 胴	鍋島焼 皿 底	合計	瀬戸・美濃 碗 口	碗 胴	碗 底	小碗 口	小碗 胴	皿 完形	皿 底	小杯 口	壷 完形	瓶 口	瓶 底	蓋	香炉 底	不明 胴	合計	産地不明 碗 口	碗 胴	碗 底	小碗 口	小碗 胴	小碗 底	皿 底	長皿 完	不明 口	不明 胴	合計	総合計
表採		1		1	1	1		1	3	3	4	2		1		1	2	1	1		2	1	1	19	1	5	2			1		1	1	1	12	161
3.6トレ	Ⅰ			0					0	1														1											0	7
	Ⅱ			0					0															0											0	3
7.1トレ	Ⅰ			0					0			1												1											0	4
	Ⅲ			0					0												1			1											0	1
5トレ	Ⅰ			0		1			1	1		1	1											3				1	1	2					4	85
	Ⅱ			0					0															0											0	4
4.2トレ	Ⅰ		2	2					0			1												1	1	1									2	42
	Ⅰb			0				1	1															0											0	3
	Ⅰ黒土			0					0															0											0	5
	Ⅱ	1		1	1				1			1												1											0	21
11トレ	Ⅰ			0					0		2					1								3		1					1		2		4	17
	P7			0					0															0											0	5
	P10			0					0															0											0	1
12トレ	Ⅰ			0					0	1				1										2											0	4
	P4			0					0															0											0	1
TP3	Ⅰ			0					0	1														1											0	2
	Ⅱ			0					0															0											0	3
TP4	Ⅱ			0					0															0		1									1	9
TP5	Ⅰ			0					0															0	1										1	1
	Ⅱ			0					0		1													1		1									1	3
TP6	Ⅱ			0					0															0											0	1
TP7	Ⅱ			0					0															0		1					1				2	2
TP8	Ⅰ			0					0															0											0	3
	Ⅱ			0					0											2				2											0	2
TP9	Ⅰ			0					0		1													1											0	3
TP10	Ⅰ			0			1		1															0											0	9
	Ⅰb			0					0		1													1											0	1
TP11	Ⅰ			0					0						1									1											0	3
	Ⅰa			0					0															0											0	1
	Ⅰb			0		1			1															0											0	10
	Ⅱ			0					0															0											0	5
TP12	Ⅰ			0					0															0											0	2
合計		2	2	4	2	3	1	2	8	7	9	6	1	2	1	2	2	1	1	2	3	1	1	39	3	10	2	1	1	3	2	1	3	1	27	424

第12表ａ　本土産染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第39図 図版33 1	腕	Ⅰ	－ － －	外面に網目文。内面は無文である。	やや不鮮明である。	淡黄灰色。	両面に施釉。淡黄白色の粗粒子。陶胎磁器。細かい貫入。	D－11 Ⅰ
第39図 図版33 2		Ⅱa	8.8 － －	地に氷裂文、主文に雪輪文。雪輪文内には草花文。内面は無文。	比較的鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。白色の微粒子。	B－8 Ⅰ
第39図 図版33 3			－ － 4.4	〃　〃　。主文に菊文。内面は無文。	鮮明である。	白色。	〃　〃　。白色の微粒子。	〃 〃
第39図 図版33 4			－ － －	内外面とも地に氷裂文。	比較的不鮮明である。	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	10トレ 表採
第39図 図版33 5		Ⅱb	10.2 － －	花唐草を線描きした後、丁寧に濃を施す。内面は無文。	やや不鮮明である。。	淡青白色。	〃　〃　。白色の微粒子。	B－11 Ⅰ
第39図 図版33 6			10.6 － －	〃　〃　、5つ葉のみに濃を施す。〃　〃　。	鮮明である。	白色。	〃　〃　。〃　〃　。	〃 〃
第39図 図版33 7			10.0 － －	〃　〃　。5つ葉以外の唐草は退化する。〃　〃　。	やや不鮮明である。	〃　〃　。	〃　〃　。淡灰白色の微粒子。	B－8 Ⅰ
第39図 図版33 8			8.6 2.8 4.0	線描きした後、5つ葉と2つ葉に濃を施す。〃　〃　。〃　〃　。	鮮明である。	〃　〃　。	畳付け以外は総釉。淡黄灰白色の微粒子。	南崖下 表採
第39図 図版33 9			11.4 － －	〃　〃　、花文と5つ葉のみに濃を施す。他は微塵唐草的に退化する。〃　〃　。	鮮明である。	〃　〃　。	両面に施釉。白色の微粒子。	表採
第39図 図版33 10			10.0 4.5 3.2	〃　〃　。〃　〃　。〃　〃　。	やや不鮮明である。	淡灰白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	4トレ Ⅱ
第39図 図版33 11		Ⅱc	9.6 － －	外面に蛸唐草文。内面は無文。	やや不鮮明である。	淡灰白色。	両面に施釉。〃　〃　。	B－8 Ⅰ
第39図 図版33 12			11.4 － －	〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	淡青白色。	〃　〃　。〃　〃　。	4トレ Ⅱ
第39図 図版33 13		Ⅱd	－ － 3.2	外面は有文であるが判然としない。高台脇には上向きの鋸歯文。内面は無文。	やや鮮明である。	淡灰白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	〃 〃
第39図 図版33 14		Ⅱe	8.4 － －	地に矢羽状文、主文に花文。内面口縁直下には四方襷文。見込みに圏線。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。〃　〃　。	B－8 1層
第39図 図版33 15			－ － 3.6	胴部外面には矢羽状文。高台脇に連続文。見込みに五弁花。15と同一個体か？	〃　〃　。	〃　〃　。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	〃 〃
第39図 図版33 16		Ⅲ	－ － －	外面に魑龍文。内面口縁直下には2本の圏線。	やや不鮮明で呉須が一部黒ずむ。	淡青白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	表採
第39図 図版33 17			－ － 3.7	外面に魑龍文。高台脇に1本の圏線。見込みに1本の圏線と五弁花。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	C－8 Ⅰ
第39図 図版33 18			11.2 － －	地に青海波。主文に船を表す。内面は無文。	やや鮮明である。	淡灰白色。	〃　〃　。淡黄灰白色。	4トレ 表採
第39図 図版33 19			9.8 － －	地に素描きの笹文？主文に花文。内面口縁直下と見込みにそれぞれ2本と1本の圏線。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。気泡痕が僅かに入る。	B－9 表採
第40図 図版40 20		Ⅳ	－ － －	地に素描きの笹文？主文に花文。内面口縁直下と見込みにそれぞれ2本	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。気泡痕が僅かに入る。	4トレ Ⅰ
第40図 図版40 21			－ － －	見込みに2本の圏線と丸文内に判然としない文様を表す。	鮮明であるが若干黒みを帯びる。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。微細な気泡痕。	E－9 Ⅰ
第40図 図版40 22		Ⅴ	蓋縁端 10.8 －	輪郭を伴わない線描きの上から濃を入れ花卉文を表す。内面には四方襷文。	鮮明である。	白色。	〃　〃　。〃　〃　。微細な気泡痕。	表採
第40図 図版40 23			11.6 － －	外面に花卉文。内面口縁直下には四方襷文。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。〃　〃　。	B－8 Ⅰ
第40図 図版40 24			－ － －	外面胴部有文。高台脇に連続文。高台外面に圏線。見込みに2本の圏線と丸文。	鮮明であるが若干黒みを帯びる。	淡黄灰色。	〃　〃　。〃　〃　。	4トレ 表採

第12表ｂ　本土産染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第40図 図版34 25	小腕		－ － －	外面に雁を表す。内面は無文	やや鮮明である。	黄灰白色に変色している。	両面に施釉。白色の微粒子。両面に細かい貫入。	Ｂ－13 Ⅰ
第40図 図版34 26			－ － 3.4	〃　〃　。　〃　〃　。	鮮明である。	白色。	畳付以外は総釉。 〃　〃　。	南崖下 表採
第40図 図版34 27			10.0 － －	外面は有文。内面は口縁直下と見込みにそれぞれ２本と１本の圏線。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。白色の微粒子。	5トレ 表採
第40図 図版34 28			－ － 3.4	外面に素描きの折枝文。見込みには素描きの十字花文。	〃　〃　。	淡灰白色。	畳付以外は総釉。	表採
第40図 図版34 29			－ － －	外面には梅樹文。内面は無文。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。白色の微粒子。	Ｂ－5 Ⅱ
第40図 図版34 30			－ － －	外面に竹文と松文？腰と高台脇に圏線。	〃　〃　。	〃　〃　。	内面口縁直下以外は総釉。淡黄灰白色の微粒子。細かい貫入。	Ｅ－13 Ｐ７
第40図 図版34 31			－ － －	外面は有文。　〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	Ｂ－11 Ⅰ
第40図 図版34 32			－ － －	外面は格子文。内面は圏線による区画内有文。	やや不鮮明である。	灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	Ｂ－12 Ｐ７
第40図 図版34 33	Ⅲ	Ⅰ	－ － －	外面に僅かに文様が確認できる。内面見込みには花唐草文。	鮮明である。	淡灰白色。	畳付以外は総釉。淡黄灰白色の微粒子。	表採
第40図 図版34 34		Ⅱａ	－ － －	外面に唐草文。内面には半菊花と５つ葉の組み合わせ。	やや不鮮明である。	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	4トレ Ⅰ
第40図 図版34 35			－ － －	外面は芙蓉手の裏文様。内面には藤文？	鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	ＴＰ10 Ⅰ
第41図 図版34 36		Ⅱｂ	14.8 9.0 4.8	外面如意頭文唐草文。内面花唐草文、見込み連続文と松竹梅文を環状に巡らす。外底面には銘。	〃　〃　。	白色。	外底面の外周無釉。〃　〃　。	Ｂ－9 Ⅰ
第41図 図版34 37			13.2 8.4 3.5	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	〃　〃　。	淡灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	Ｃ－9 Ⅰ
第41図 図版34 38			14.4 9.0 4.9	〃　〃　。内面蛸唐草文。見込み剣先文状の連続文と松竹梅文を環状に巡らす。　〃　〃　。	〃　〃　。	淡青白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	Ｂ－8 Ⅰ
第41図 図版34 39		Ⅱｃ	－ － －	外面には如意頭文。腰には２本の圏線。内面は魑龍文、炭弾きによる白抜きで雲文。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	Ｄ－5 Ⅰ
第41図 図版34 40		Ⅲ	－ － 3.0	外面には唐草文。高台脇と高台外面にそれぞれ１本、２本の圏線。内面には丸文。	やや鮮明である。	〃　〃　。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	表採
第41図 図版34 41			－ － －	内外面とも花唐草線描きした後、丁寧に濃を入れる。	鮮明である。	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	5トレ Ⅰ
第41図 図版34 42			－ － －	外面には唐草文。内面には花唐草文。口唇部には口錆を施す。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	ＴＰ11 Ⅰａ
第41図 図版34 43			－ － －	外面有文。内面は格子文等を表す。	不鮮明である。	灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	Ｂ－9 Ⅰ
第41図 図版34 44			－ － －	外面は区画内に筆による文様と炭弾きによる雲文。内面には口縁直下に炭弾きによる雲文。	鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	Ｅ－6 表採
第41図 図版34 45			－ － －	外面は唐草文。内面には雨文の地に炭弾きによる雷文。	やや鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	Ｂ－3 表採
第41図 図版34 46			－ － 6.0	高台脇、外面には１、２本の圏線。外底面に銘。内面微塵唐草文。見込み連続文と松竹梅文。	〃　〃　。	白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	ＴＰ４ Ⅱ７/８
第41図 図版34 47			－ － 8.8	高台脇に波濤状連続文。高台外面に２本の圏線。内面は区画と見込みに渦状の連続文と花弁文。	鮮明である。	淡青白色。	畳付と外底面の外周は無釉である。	表採
第41図 図版34 48			－ － －	高台脇に１本、外面に２本、外底面に１本の圏線。内面は花唐草文。見込みに花弁文。	〃　〃　。	〃　〃　。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	Ｂ－11 Ⅰ

第12表ｃ　本土産染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第42図 図版35 49	大皿	Ⅰ	－ － －	外面有文。高台脇に1本、高台外面に2本の圏線。内面も有文であるが判然としない。	二次的な被熱のため不鮮明である。	本来は青白色か	両面に施釉。白色の細粒子。細かい貫入。	2トレ Ⅰb
第42図 図版35 50			－ － －	高台外面に2本の圏線。内面は区画の内に鱗状文等を表す。見込み有文。	鮮明である。	淡青白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	2トレ Ⅰ
第42図 図版35 51		Ⅱ	－ － －	外面口縁は七宝繋文。胴部有文であるが判然とせず。内面口縁にも七宝繋文。見込み花唐草文。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	TP10 Ⅰb
第42図 図版35 52		Ⅲ	21.6 － －	見込みには花卉文を表す。外底面には渦「福」文。ハリ支え痕が認められる。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	TP11 Ⅰa
第42図 図版35 53			－ － －	〃　〃　〃。高台外面には圏線。外底に1本の圏線。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	B－9 表採
第42図 図版35 54		Ⅳa	－ － －	外面は唐草文？内面には花唐草文。口唇部には口錆を施す。	やや鮮明である。	〃　〃　〃	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	表採
第42図 図版35 55			－ － 15.8	〃　〃　〃。高台脇1本、高台外面2本、外底面1本の圏線。内面は花唐草文。見込み2本の圏線。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	B－11 Ⅰb
第42図 図版35 56		Ⅳb	22.6 15.6 2.8	外面は如意頭文崩れ唐草文。高台脇に○×連続文。高台外面2本、外底1本の圏線。内面は蛸唐草文。見込み剣先文の連続文。	鮮明である。	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	B－8 Ⅰ
第42図 図版35 57		Ⅳc	28.2 － －	外面には唐草文。高台脇1本の圏線。内面には型打ち陽刻の宝文。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	B－11 Ⅰb
第42図 図版35 58			－ － 18.4	外面には唐草文。高台脇1本、高台外面2本の圏線。外底面には鉋目。内面には型打ち陽刻の宝文。見込みには染付の宝文。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	B－9 表採
第42図 図版35 59			－ － －	見込み中央に宝文を表す。外底面には鉋目と中央に圏線とハリ支え痕が見られる。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	B－8 Ⅰ
第42図 図版35 60			－ － －	外底面には1本の圏線と中央に銘が確認できる。内面は有文。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	表採
第43図 図版35 61		Ⅴ	長22.0 短20.4 －	外面は雲文と波濤文。内面は花卉文と波濤文の芙蓉手タイプ。	やや鮮明である。	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	B－11 Ⅰ
第43図 図版35 62	長皿		20.3 3.6 13.2	外面は唐草文。高台脇1本、高台外面2本の圏線。外底に銘。内面蛸唐草文。見込み剣先の連続文と松竹梅文。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	C－8 Ⅰ
第43図 図版35 63			－ － －	外底見込みに「嘉晴年製」の銘が見られる。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃	表採 フェンネット間
第43図 図版35 64	鉢		14.0 － －	内外面ともに圏線と草花文の組み合わせが見られる。	〃　〃　〃	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	2トレ 表採
第43図 図版35 65			12.6 － －	外面には花唐草を線描きした後に濃を入れる。内面は蛸唐草文。	〃　〃　〃	淡青白色。	〃　〃　〃　〃　〃　〃	表採
第43図 図版35 66	蓋		－ － －	蓋甲面に菊花文を表す。	〃　〃　〃	淡青灰白色。	身受け以外は総釉。身との接地面には白土。淡黄灰白色の微粒子。	TP8 Ⅱ 墓埋土
第43図 図版35 67			大7.0 小6.4 －	蓋甲面には花卉文、紐部分と端部に圏線	〃　〃　〃	〃　〃　〃	〃　〃　〃　〃　〃　〃 〃　〃　〃	E－15 Ⅰ
第43図 図版35 68	瓶		－ － －	胴部外面に網目文を表す。	〃　〃　〃	〃　〃　〃	外面のみに施釉。内面に釉垂れが見られる。	E－12 表採
第43図 図版35 69	猪口		5.2 5.8 3.3	外面は蛸唐草文。高台外面に2本の圏線。内面口縁直下に四方襷文。見込みに圏線。	〃　〃　〃	白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	5トレ Ⅰ
第43図 図版35 70			7.4 － －	〃　〃　〃。内面の口縁直下に四方襷文。	〃　〃　〃	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	表採
第44図 図版35 71	碗		－ － －	外面には素描きによる松・竹・笹？を表す。内面は無文。	鮮明である。	白色。	〃　〃　〃。白色の微粒子。	4トレ Ⅱ
第44図 図版35 72			10.0 － －	〃　〃　〃　〃　〃　〃	不鮮明である	黄灰白色。	両面に施釉。〃　〃　〃	B－8 Ⅰ

第12表ｄ　本土産染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第44図 図版36 73	碗	Ⅰ	10.4 － －	外面には素描きによる松・竹・笹？を表す。内面は無文。	不鮮明である。	黄灰白色。	両面に施釉。白色の微粒子。	B－9 Ⅰ
第44図 図版36 74			－ － 3.4	〃　〃　。見込みには十字花文を表す。	鮮明である。	白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	E－9 表採
第44図 図版36 75			－ － 3.4	外面は有文であるが判然としない。高台脇１本、高台外面２本の圏線。	不鮮明である。	黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 細かい貫入。	表採 フェンスネット間
第44図 図版36 76			－ － －	内外面とも口縁直下に圏線、八卦(算木文)。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第44図 図版36 77			8.7 － －	外面は口縁直下に圏線、胴部に山水文を表す	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 細かい貫入。	B－8 Ⅰb
第44図 図版36 78			9.2 － －	外面に石畳地文。内面には口縁直下に四方襷文、胴部有文。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	〃 〃
第44図 図版36 79		Ⅱ	－ － －	外面は氷裂文の退化を地とし、雪輪文内に梅樹文を表す。内面は口縁直下に四方襷文。	鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第44図 図版36 80			－ － －	外面は雪輪文内にコンニャク印判による蝶文。内面は口縁直下四方襷文。見込みに圏線。	やや鮮明である。	黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	南崖下 表採
第44図 図版36 81		Ⅲ	11.6 － －	外面胴部に片藤花の丸文。内面は無文。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第44図 図版36 82			撮 3.3 器高4.0 縁端9.3	蓋甲部には蛸唐草文と撮下に連続文。内面縁に連続文。見込み有文。	〃　〃　。	淡青白色。	撮上部以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	B－8 Ⅰ
第44図 図版36 83			10.8 － －	外面に蛸唐草文と高台脇に連続文。内面口縁直下に連続文。見込み有文。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	〃 〃
第44図 図版36 84		Ⅳ	14.6 － －	内面は有文であるが判然としない。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第44図 図版36 85	小碗		－ － 3.2	外面は高台脇に連続文。高台外面に１本の圏線。内面見込みに五弁花。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	B－9 Ⅰ
第44図 図版36 86			－ － 3.5	外面胴部有文。高台脇に１本の圏線。内面は文様は見られない。	〃　〃　。	〃　〃　。	畳付以外は総釉。 〃　〃　。	E－13 P 7
第44図 図版36 87			－ － 3.0	外面胴部には花弁文。高台脇に２本の圏線。外底面には圏線と銘。	鮮明である。	白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	B－9 Ⅰ
第44図 図版36 88	皿		12.8 － －	外面には唐草文。内面有文。	やや鮮明である。	淡青灰白色。	両面に施釉。内面には素が入る。淡灰白色の微粒子。細かい貫入。	B－8 Ⅰ
第44図 図版36 89			13.4 － －	〃　〃　。　〃　〃　。	鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。淡灰白色の微粒子。	E－6 表採
第44図 図版36 90			－ － 7.0	外面腰１本、高台外面２本、外底面１本の圏線。外底面に銘。内面に七宝繋文。見込み五弁花。	二次的な被熱のため不鮮明である。	本来は青白色か。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	南崖下 表採
第44図 図版36 91			－ － 6.4	外面胴部は有文。高台脇１本、高台外面２本、外底面１本の圏線。内面見込み有文。	鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	TP12 Ⅰ
第44図 図版36 92	鉢		－ － －	外面胴部には花弁文。内面は見込みに２本の圏線。	不鮮明である。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	南崖下 表採
第44図 図版36 93	瓶		－ － －	外面に丸文。	〃　〃　。	〃　〃　。	外面のみに施釉。内面の一部に釉垂れ。淡灰白色の微粒子。	E－13 Ⅰ
第45図 図版37 94	碗		－ － －	外面胴部有文。腰に１本の圏線。内面は無文。	〃　〃　。	灰白色。	両面に施釉。灰白色の微粒子。	4トレ 表採
第45図 図版37 95			－ － －	内外面ともに無文である。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。内面見込み蛇の目状に釉を掻き取る。白色の微粒子。	4トレ Ⅱ
第45図 図版37 96	皿		11.6 － －	外面は無文。内面に雲文？	やや鮮明である。	乳白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	C－11 Ⅰ

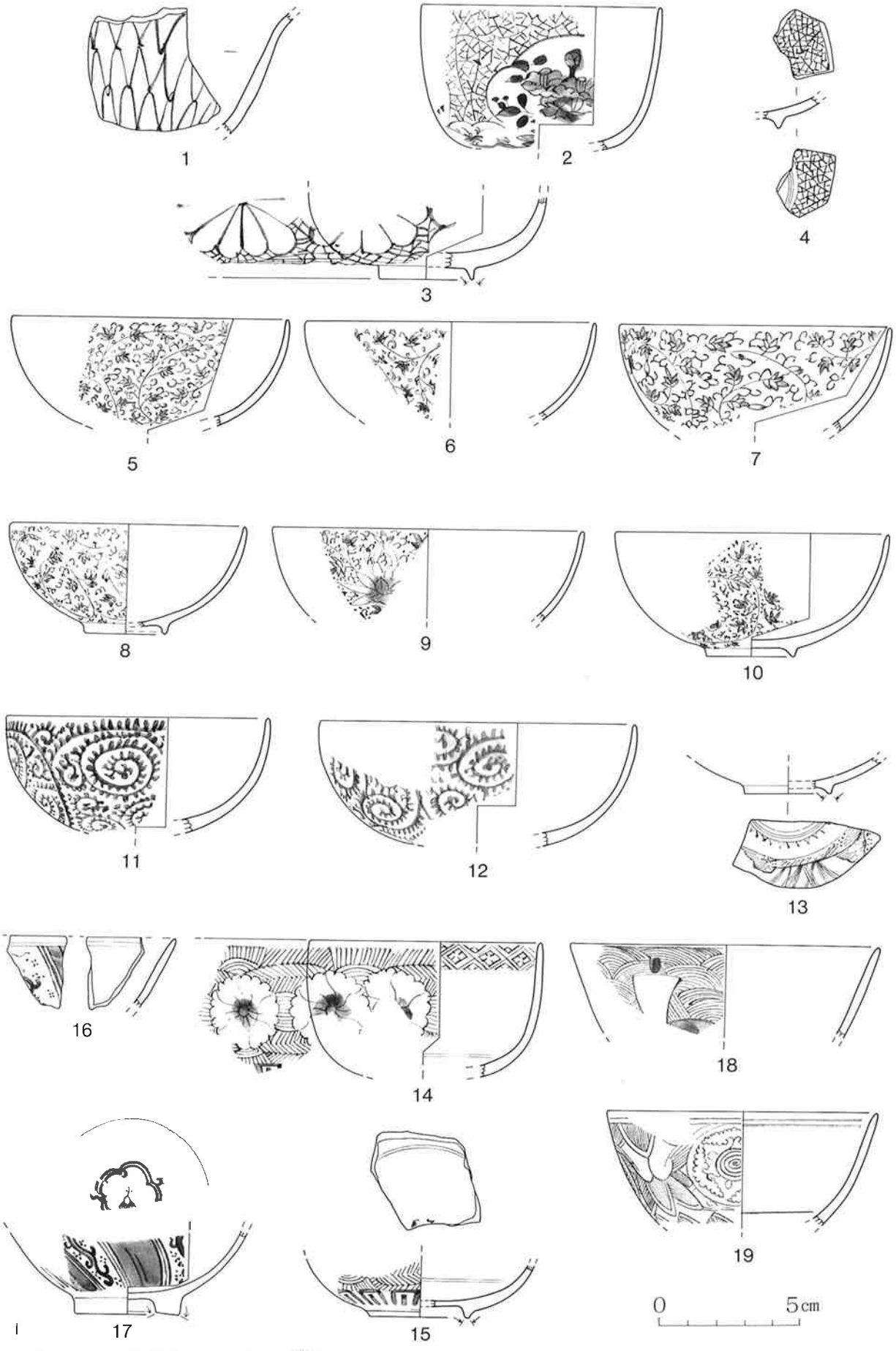
第12表ｅ　本土産染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

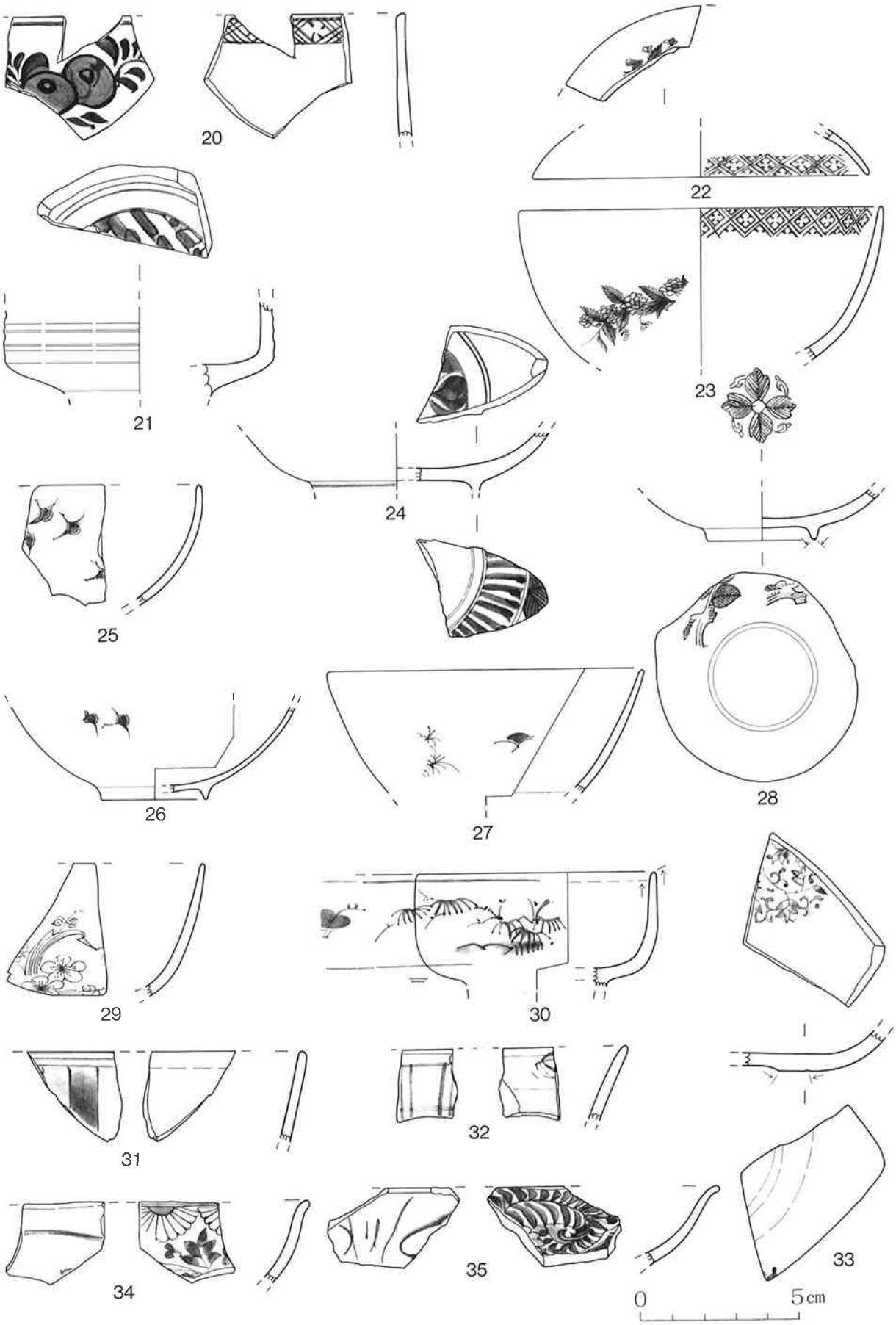
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第45図 図版37 97	Ⅲ		－ － －	外面は無文。内面には雁。	やや鮮明である。	乳白色。	両面に施釉。白色の微粒子。	4トレ Ⅰ
第45図 図版37 98	Ⅲ		17.2 13.0 4.0 3.3 11.3 8.8	内面6面の中心に型打陽刻で渦文(雲？)。その間に牡丹唐草文。外面は2種類の宝文を表す。高台外面には剣先の連続文。	鮮明である。	淡青白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	4トレ Ⅱ
第45図 図版37 99	碗		－ － 3.6	外面には2本1組の区画が3つあり内部に松等を表す。高台外面には圏線。内面見込みには圏線と寿文。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採 ネット外
第45図 図版37 100	小碗		9.0 － －	両面とも口縁直下に2本の圏線を入れる。胴部外面には草花文。	不鮮明である。	淡青灰白色	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	B－9 Ⅰ
第45図 図版37 101			－ － －	外面胴部に福の文字。内面は無文である。	鮮明である。	白色。	両面に施釉。白色の微粒子。	E－15 Ⅰ
第45図 図版37 102	Ⅲ		8.8 1.9 5.4	口唇部に口錆を施す。内面の見込みには折枝文。	〃　〃　。	淡青灰白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	E－13 Ⅰ
第45図 図版37 103	小杯		6.2 － －	外面の口縁直下に1本の圏線。胴部に花卉文。内面は無文。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	表採
第45図 図版37 104			－ － 1.8	外面胴部に花卉文。高台外面に1本の圏線。外底面に印文。内面見込みに圏線と花卉文。	〃　〃　。	白色。	畳付以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	〃 〃
第45図 図版37 105	壷		9.4 8.7 7.4	外面に横位の直線と縦位の波線。	〃　〃　。	淡青灰白色。	口唇部と口縁内面、畳付以外は総釉。畳付には白土。	〃 〃
第45図 図版37 106	瓶		－ － 7.2	外面は胴部有文であるが判然としない。	〃　〃　。	淡灰白色。	胴下部から外底にかけて路胎。淡灰白色の微粒子。	TP8 Ⅱ 墓擴埋土
第45図 図版37 107	蓋		6.8 － －	蓋甲面には鳥・松・圏線。	〃　〃　。	〃　〃　。	身受け以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	D－6 Ⅲ
第45図 図版37 108			6.6 － －	蓋甲面は有文であるが判然としない。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	C－3 表採
第45図 図版37 109			8.2 － －	蓋甲面全面に花卉文。	やや鮮明である。	白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第45図 図版37 110	香炉		－ － 10.0	外面は高台外面に3本の圏線。	〃　〃　。	〃　〃　。	外面のみ施釉。淡灰白色の微粒子。	E－6 表採

参考文献

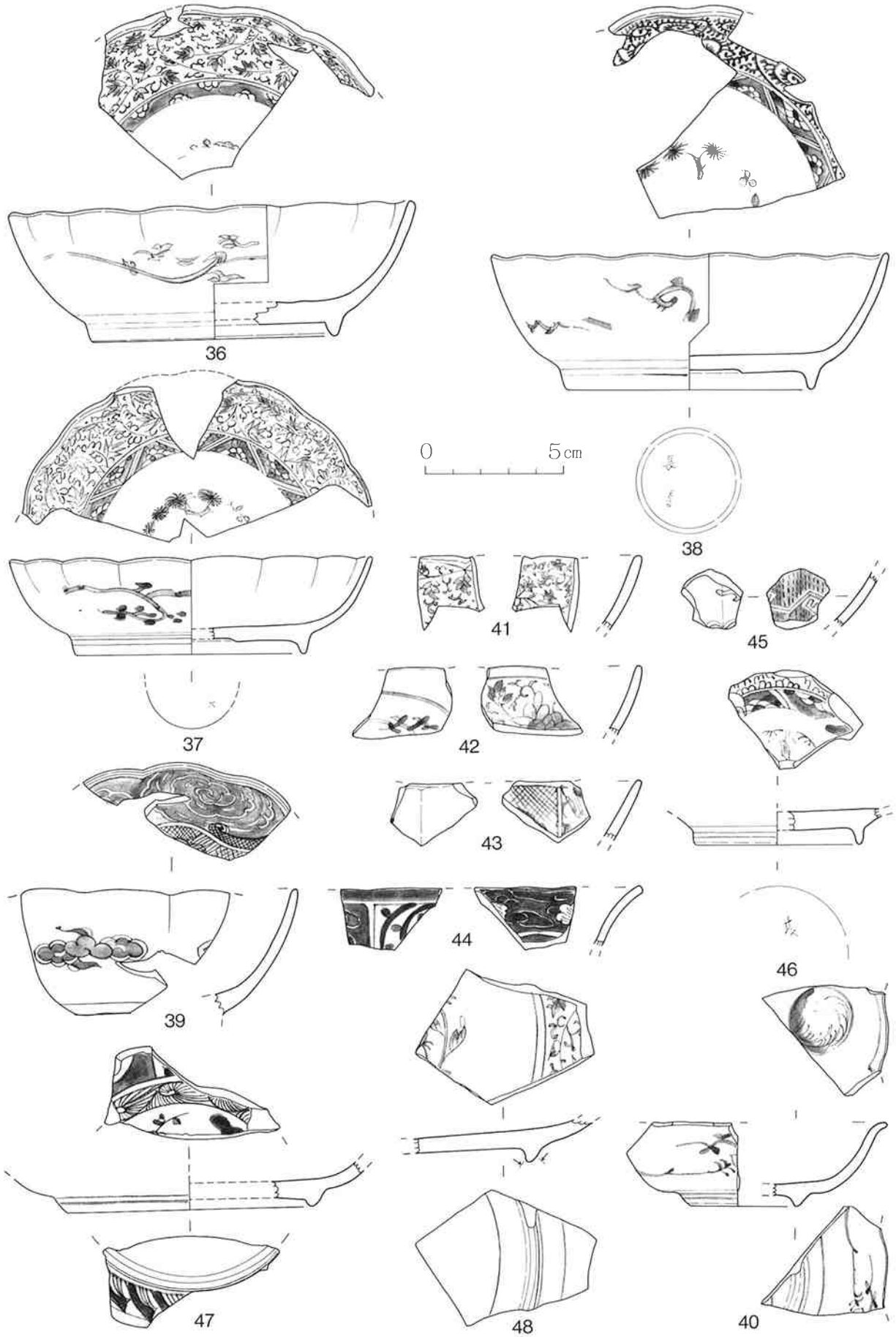
- 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』　九州近世陶磁学会　2000年
- 『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通をさぐる－』　九州近世陶磁学会　2001年
- 『肥前陶磁シリーズ1　初期鍋島』　古伊万里刊行会　1996年
- 『やきもの事典』　平凡社　1984年
- 『初期伊万里と鍋島－山本コレクション受贈記念－』　根津美術館　1998年
- 大橋康二　『古伊万里の文様』　理工学社　1994年



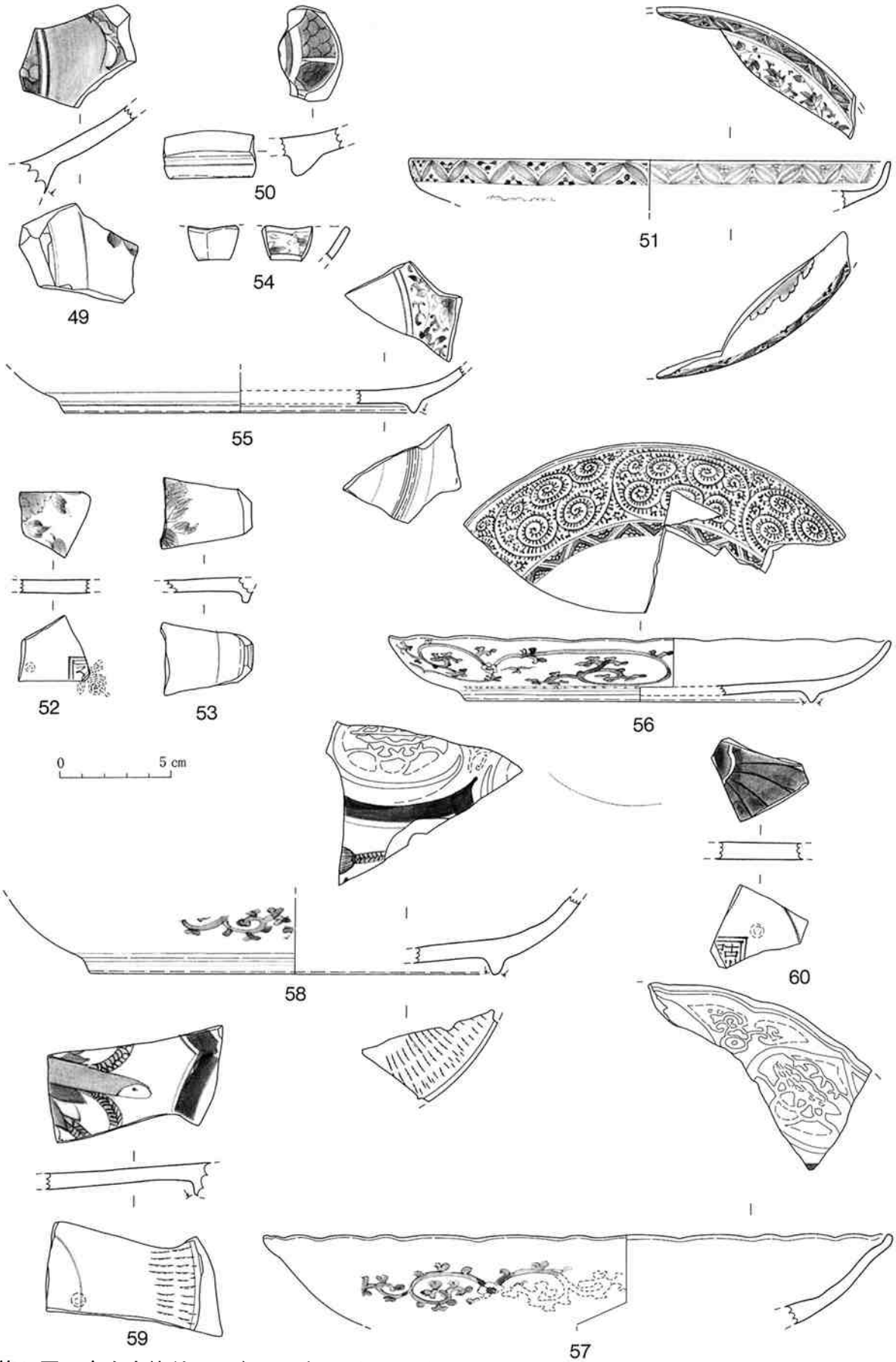
第39図　本土産染付 1　有田　碗



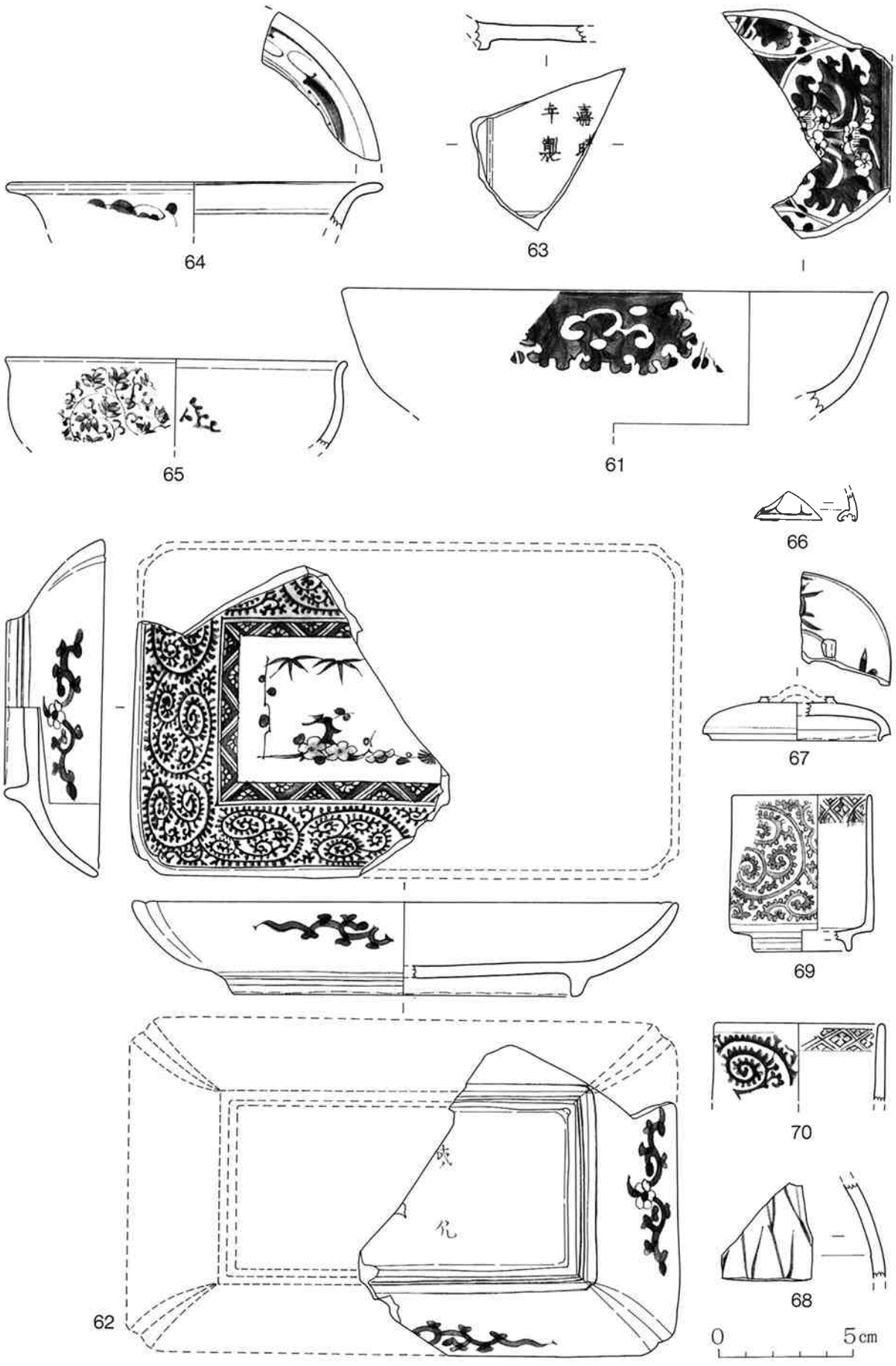
第40図　本土産染付２　有田　碗（20～24）、小碗（25～32）、Ⅲ（33～35）



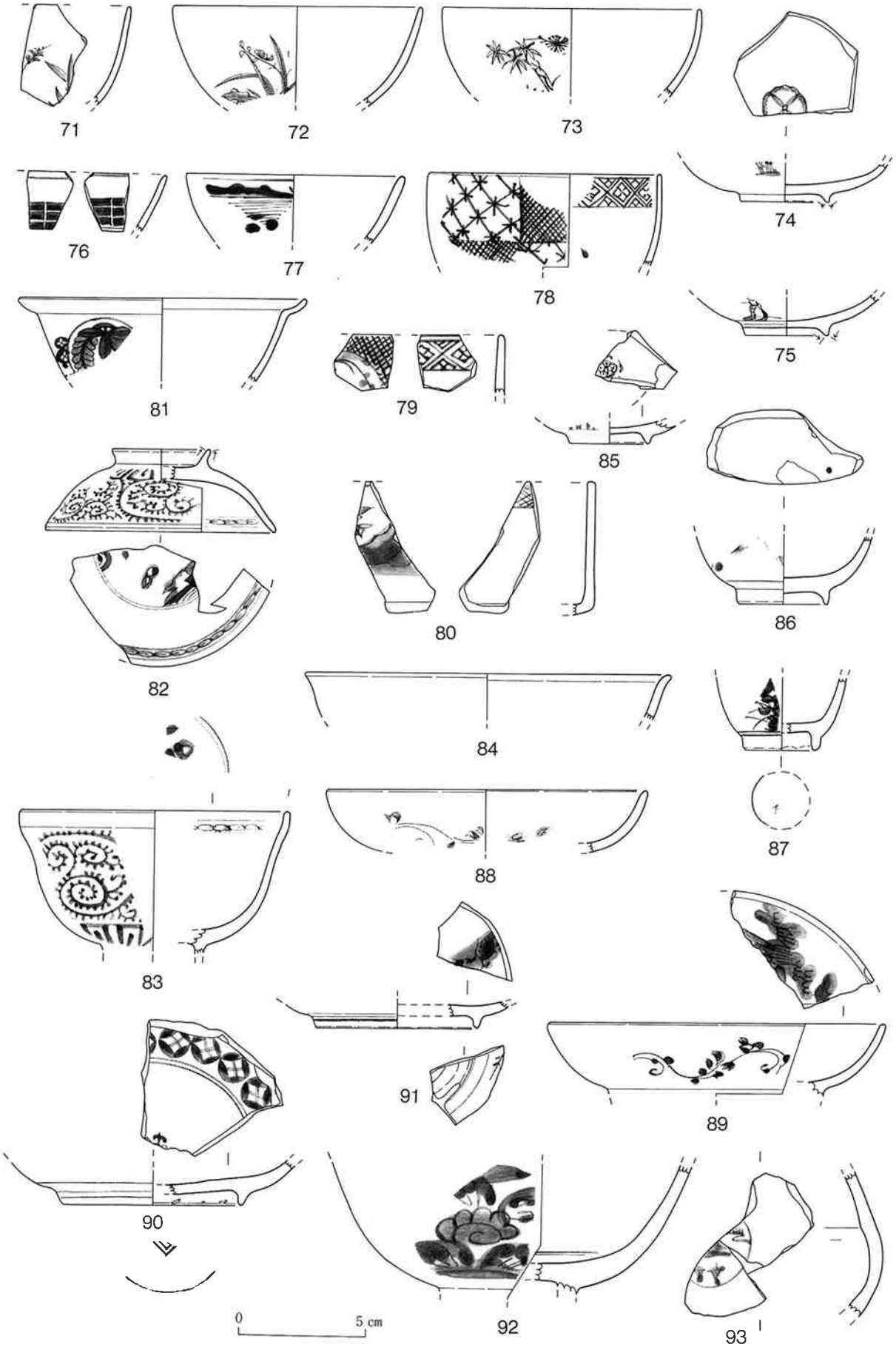
第41図　本土産染付３　有田　Ⅲ（36～48）



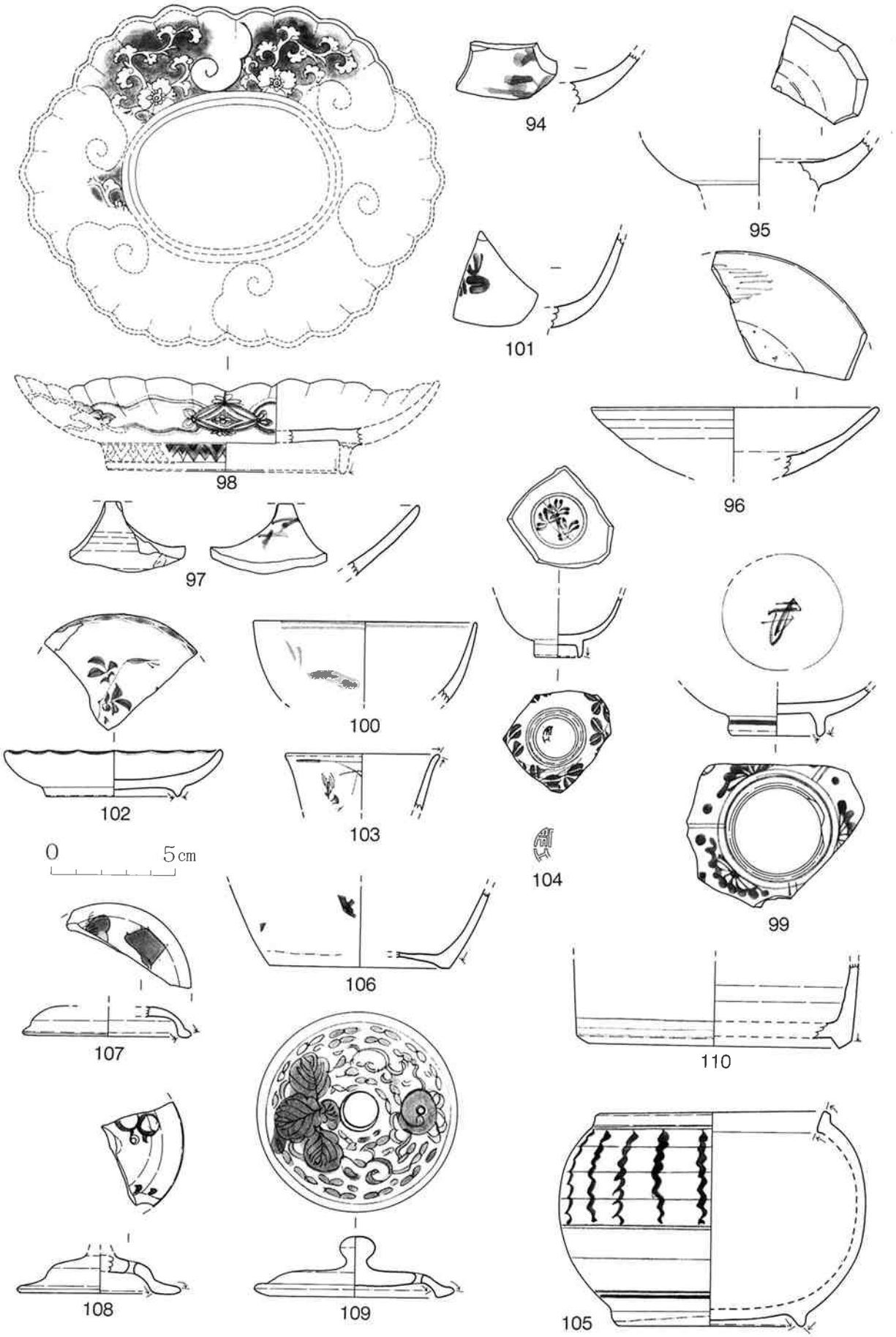
第42図　本土産染付 4　有田　大皿（49～60）



第43図　本土産染付 5　有田　大皿（61）、長皿（62～63）、鉢（64～65）、蓋（66～67）、瓶（68）、猪口（69～70）



第44図　本土産染付 6　肥前　碗(71～84)、小碗(85～87)、皿(88～91)、鉢(92)、瓶(93)



第45図　本土産染付７　波佐見　碗(94～95)、皿(96～97)、**鍋島**　皿(98)、**瀬戸・美濃**　碗(99)、小碗(100～101)、皿(102)、小杯(103～104)、壺(105)、瓶(106)、蓋(107～109)、香炉(110)

第15節　本土産色絵

本節では、本土産の磁器に上絵付けを施したものを本土産色絵として取り扱った。本土産色絵の出土総点数は40点で、本土産陶磁器全体のわずか約0,03％である。産地別の出土傾向を見てみると、そのほとんどが有田を中心とした肥前の産である（第13表）。今回検出された本土産色絵の中には、柿右衛門系（南川原）の上手の資料も確認できたのは注目されるところである。確認された器種は碗・皿・変形皿・大皿・鉢の５つがあり、これらを産地・器種別に分類してみた。なお、個々の特徴等については観察表（第14表）に呈示した。

有　田

確認された器種としては、碗・皿・鉢・蓋の４つがある。

（１）　碗　（第46図１～６）

全て破片資料で、全形が窺える資料はない。内外面に雲文や四方襷文等が見られるが、色絵は外面のみである。

（２）　皿　（第46図７～11、第47図12～17）

皿はⅠ～Ⅲの３つに大別した。

Ⅰ類　深目の内彎皿。口唇部は口錆、外面樹木文、内面口縁直下に垂れ絞文。内面は色絵による七宝文。

Ⅱ類　腰から角度を変え、口縁を微弱に外反させる。外面唐草文、内面は区画窓に色絵により花・雲等を表す。

Ⅲ類　輪花皿。深目と浅目の２タイプ。外面唐草文、内面は区画窓に色絵による四方襷文や花文等を表す。

Ⅳ類　長皿の底部資料が１点のみ確認されている。内面の見込みに下絵と上絵が確認できるが判然としない。

（３）　蓋　（第76図18～19）

蓋付碗もしくは蓋付鉢の蓋になるものと思われる。前者は蓋甲面の撮下部に連続文、内面に四方襷文と圏線。蓋甲面に窓を伴う花卉文と四方襷文？を表す。後者は、縁に身受けの突起が確認できる。蓋甲面に窓・花卉文・圏線を表し、花卉文との組み合わせで花文を表現する。

（４）　鉢　（第47図20）

蓋付鉢の身である。外面口縁直下に１本の圏線。その下に色絵を施している。

肥　前

肥前の色絵磁器で確認されたのは変形皿と大皿でいずれも小破片である。変形皿については可能な限り図上復元を試みた。また産地不明の色絵磁器についても１点しか得られていないことからここで取り扱った。

（１）　変形皿　（第47図21）

変形皿で富士山型。左端部と長辺部の一部が検出。口縁部は呉須で縁取り、見込みは色絵による雁等を表す。

（２）　大皿　（第47図22）

陶胎磁器の色絵で、内面の見込みに下絵と上絵が確認できるが、判然としない。

（３）　産地不明の色絵　（第47図23）

器種不明の胴部片である。外面には輪花を成形した際の凹凸が確認できる。腰と高台脇には圏線。内面には四方襷文等を表す。

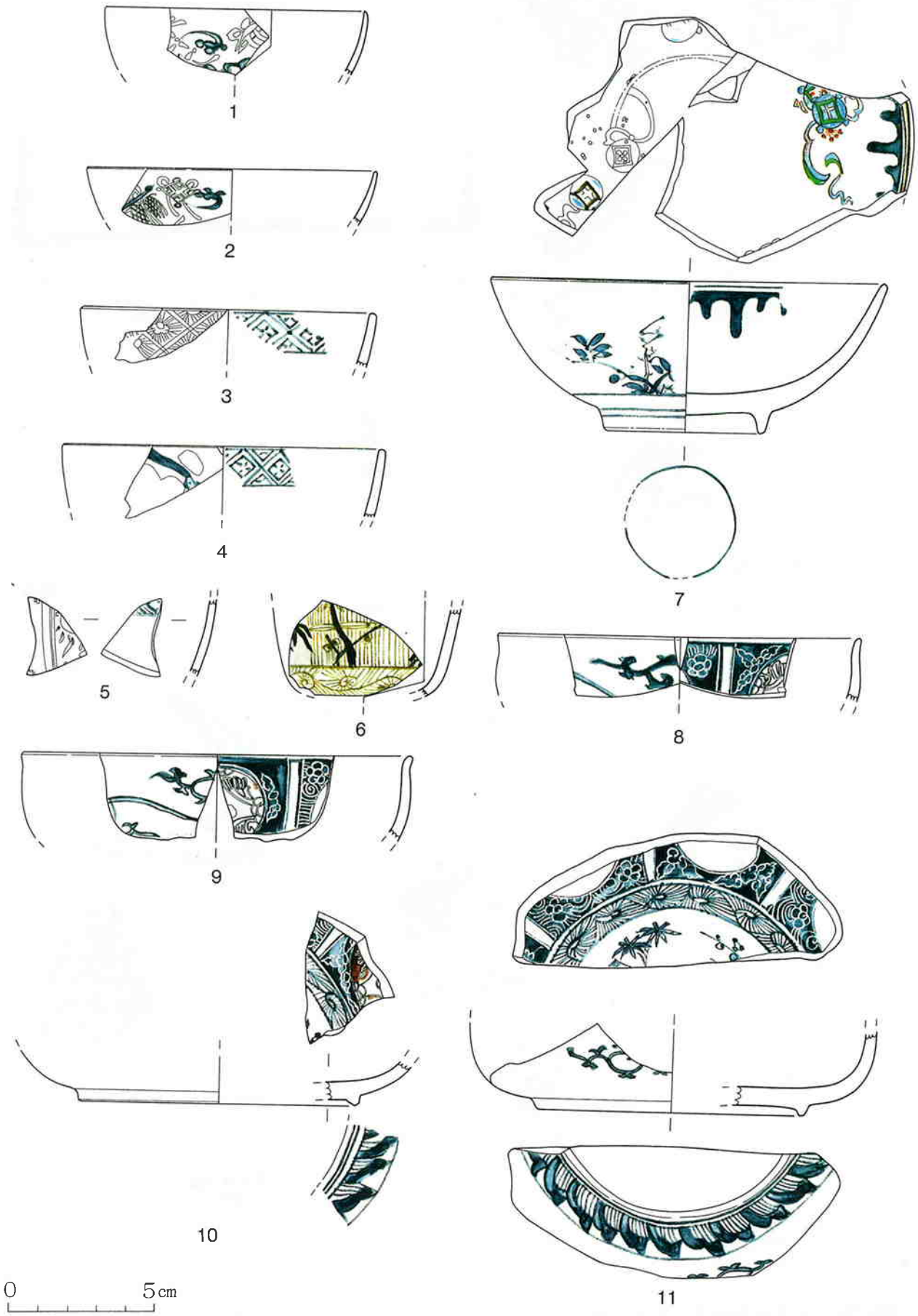
第13表　本土産色絵出土一覧

出土地＼分類		有田															肥前		産地不明	合計
		碗（丸碗）		Ⅲ Ⅰ		Ⅲ Ⅱ a			Ⅲ Ⅱ b		Ⅲ Ⅲ a		Ⅲ Ⅲ b	Ⅲ Ⅳ	鉢	蓋	富士山型	大皿	器種不明	
		口	胴	完形	口	口	胴	底	口	底	口	底	口	底	口		口～底	底	胴	
表　採		3	1		2		2		1	1		3						1		14
3.6トレ	Ⅰ																		1	1
5トレ	Ⅰ	1		1	4	1	1	1	2		1		1			1				14
	Ⅱ						1													1
4.2トレ	Ⅰ				1		1													2
	Ⅰ黒土		1																	1
	Ⅱ				1												1			2
11トレ	Ⅰ	1													1					2
12トレ	Ⅰ															1				1
TP3	Ⅱ																			0
TP9	Ⅰ													1						1
TP11	Ⅰa				1															1
	Ⅰb						1													1
合　計		5	2	1	9	1	6	1	3	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	41

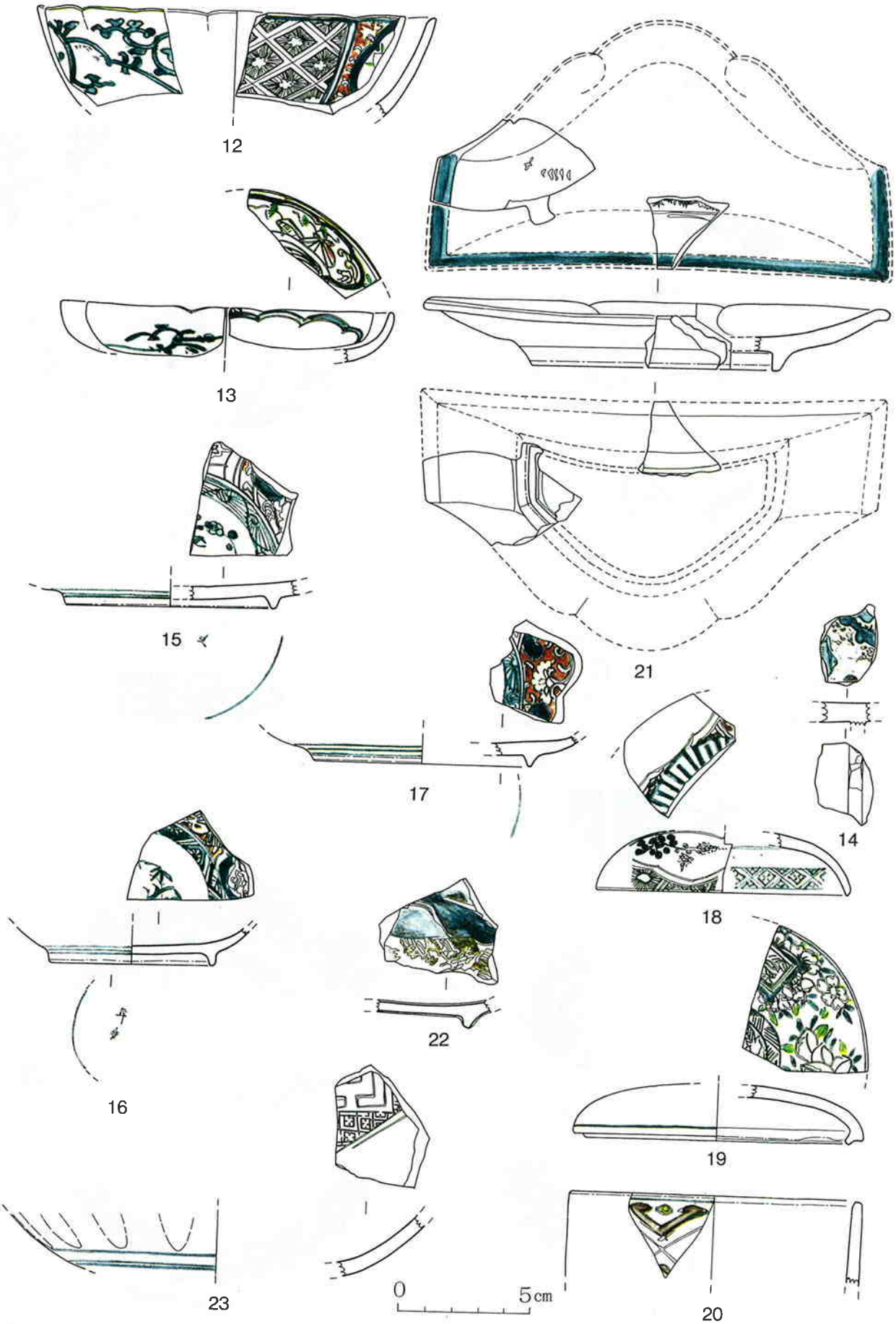
第14表　本土産色絵観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第46図 図版45 1	碗		9.0 － －	外面には呉須により雲文等を下絵付け。宝文？等を色絵で表す内面は無文。	やや不鮮明である。	淡青白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	表採
第46図 図版45 2			9.9 － －	〃　〃　。四方襷文や亀を色絵により表す。　〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	〃 〃
第46図 図版45 3			10.1 － －	外面の口縁直下に色絵による襷文？。内面は口縁直下に呉須による四方襷文。	〃　〃　。	淡青灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	〃 〃
第46図 図版45 4			11.0 － －	外面には唐草文？を下絵付け。内面は口縁直下に四方襷文。外面胴部に色絵。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	C－8 Ⅰ
第46図 図版45 5			－ － －	外面胴部には色絵。内面口縁直下に四方襷文。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	4トレ Ⅰ 黒土
第46図 図版45 6			－ － －	外面胴部に色絵による樹木と垣根を表す。腰には渦の連続文。	確認できない。	淡灰白色。	〃　〃　。白色の微粒子。	表採
第46図 図版45 7	Ⅲ	Ⅰ	13.6 5.2 5.5	外面に樹木。高台脇1本、高台外面2本、外底面1本の圏線。口唇部は口錆。内面口縁直下に垂れ絞。色絵で七宝文を表す。	不鮮明である。	〃　〃　。	畳付以外は総釉。〃　〃　。二次的な被熱。	B－8 Ⅰ
第46図 図版45 8		Ⅱ	12.5 － －	外面に唐草文。内面には区画。区画には色絵による花文・雲文を表す。	鮮明である。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	B－9 Ⅰ
第46図 図版45 9			13.4 － －	〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。白色の微粒子である。	表採
第46図 図版45 10			－ － 9.4	高台脇に波濤の連続文、高台外面に2本の圏線。内面は区画した後、花文・雲文。見込みは渦の連続文と松竹梅文？を表す。	〃　〃　。	淡青灰白色。	外底面以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	5トレ Ⅰ
第46図 図版45 11			－ － 9.1	〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第47図 図版45 12		Ⅲ	15.3 － －	外面には唐草文。内面は区画した後、色絵による襷文や花文を表す。	不鮮明である。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	B－8 Ⅰ
第47図 図版45 13			12.8 － －	〃　〃　。内面は区画した後、色絵による貝・海藻・波濤等を表す。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	〃 〃
第47図 図版45 14		Ⅳ	－ － －	内面の見込みに下絵付けと上絵付けが確認できるが判然としない。	やや不鮮明である。	淡青白色。	〃　〃　。〃　〃　。	TP9 Ⅰ
第47図 図版45 15			－ － 8.0	高台脇1本、高台外面2本、外底1本の圏線。外底面に銘。内面は見込みに渦の連続文と松竹梅文。唐草文の色絵が見られる。	鮮明である。	〃　〃　。	畳付以外は総釉。白色の微粒子。	2トレ 表採
第47図 図版45 16			－ － 6.3	〃　〃　。〃　〃　。内面は区画と色絵の唐草文？見込みは連続文と松竹梅。	不鮮明である。	青灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第47図 図版45 17			－ － 8.3	〃　〃　。内面は呉須による下絵と色絵の唐草文。見込みに渦の連続文。	鮮明である。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	〃 〃
第47図 図版45 18	蓋		9.6 － －	撮下部に連続文と色絵による区画と花卉文・四方襷文。内面は四方襷文。	〃　〃　。	白色。	両面に施釉。灰白色の微粒子。	E－13
第47図 図版45 19			11.0 － －	外面に呉須による圏線と区画窓、花卉文を色絵で表す。	やや鮮明である。	淡灰白色。	身受け以外は総釉。淡灰白色の微粒子。	B－8 Ⅰ
第47図 図版45 20	鉢		11.1 － －	外面の口縁直下に1本の圏線。その下には色絵が確認できる。	〃　〃　。		内面口縁直下以外は総釉。	B－12 Ⅰ
第47図 図版45 21	変形皿		－ － －	口縁部上面を呉須で縁取る。内面には色絵による雁等が見られる。	〃　〃　。	〃　〃　。	畳付以外は総釉。白色の微粒子。	2トレ Ⅱ
第47図 図版45 22	大皿		－ － －	内面の見込みに下絵付けと上絵付けが確認できるが判然としない。	〃　〃　。	〃　〃　。 二次的な被熱。	〃　〃　。砂目有。淡灰白色の微粒子。陶胎磁器である。	2トレ 表採
第47図 図版45 23	器種不明		－ － －	腰と高台脇に圏線。内面には色絵による紗綾型文と四方襷文。	〃　〃　。	淡灰白色。	両面に施釉。　〃　〃　。	B－5 Ⅰ



第46図　本土産色絵１　有田　碗（１～６）、皿（７～11）



第47図　本土産色絵２　有田　皿（12～17）、蓋（18～19）、鉢（20）、**肥前**　変形皿（21）、大皿（22）、不明（23）

第16節　本土産印判手

本節ではいわゆる印判手・吹き絵等と称される技法による絵付けがなされた近代以降の磁器について取り扱った。明治期に入り、磁器の絵付けの技法に新たな手法が取り入れられる。これまでの筆による絵付けに代わり、間接的に絵付けを行う印判または印判手と称される絵付け技法が一般的となる。この印判手には技法により、型紙摺・銅版転写・ゴム判・コンニャク判に分けられる。またその他の特殊な技法として吹き絵と称される絵付け技法もあり、これらのいくつかの技法とあわせて絵具としてのクロムの普及が、日常的な一般雑器の大量生産を助長したようである。

そこで今回は、絵付け技法別に大別した後、産地・器種別に分類を試みた。技法別にこれらの磁器の産地・器種別出土傾向を見てみると、型紙摺が総点数184点に対して砥部178点、瀬戸・美濃６点で、碗が圧倒的に検出されている。銅版転写は82点中80点が瀬戸・美濃で、２点は産地不明で、皿が若干多いようである。ゴム判は瀬戸・美濃のみが確認されており、碗・小碗がある。コンニャク判は肥前の碗のみが確認されている。吹き絵は産地不明の小碗、クロム磁器は瀬戸・美濃で、碗・皿・小杯がある(第15表)。

以下、本地区より検出された印判手(近代以降の磁器含)の分類概念を述べることとする。なお、個々の特徴については観察表(第16表)に呈示した。

型紙摺

型紙摺の生産地は砥部と瀬戸・美濃が確認されている。確認された器種としては、砥部が碗・皿・香炉の３器種、瀬戸・美濃は小碗・皿の２器種がある。

砥　部

(１)　碗　(第48図１～14、第49図15～33)

本地区で検出された型紙摺の碗は外反タイプ・直口タイプの２つに大別し前者をＡ、後者をＢとした。それぞれ文様による分類を試み、必要に応じてａ・ｂ・ｃ等に細分化した。

Ａ　外反タイプ

Ⅰ類　五弁花状(梅？)の窓に水仙文を表し、窓枠外に花卉文(笹？)と松を表している。内面の口縁直下には笹と松を表現し、見込みには圏線と梅花文を表している。高台脇の文様パターンでａ・ｂ・ｃに細分した。

Ⅱ類　外面には円形の窓内に鶴文を表し、窓枠の外には笹と松を表している。内面の口縁直下には笹と松を巡らしている。円形の窓内の鶴の向き(左右)及び高台脇の文様のパターンでａ・ｂに細分した。

Ⅲ類　菱形の窓内に三角文を円形に表す。内面は口縁直下に三角文を巡らせ、見込みには圏線と梅花文を表す。

Ⅳ類　外面には星形の点描文を表現する。内面は口縁直下に笹と松を表し、見込みには圏線を表す。

Ⅴ類　円形の窓に日章旗を表す。内面の口縁直下は有文だが判然としない。見込みに圏線と中央に松？・花文を表している。

Ⅵ類　外面全体に梅花文？を表す。内面は口縁直下に梅花文を巡らしている。見込みには圏線と花文。内面の口縁直下の梅花文のパターンでａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅ・ｆ・ｇの７つに細分した。

Ⅶ類　外面には笹等を主文とし、地に馬蹄形の文様を細かく表す。内面口縁直下も同様に表す。見込みには圏線が確認できる。

Ｂ　直口タイプ

Ⅰ類　外面の胴部に文字を表すタイプをⅠ類としてまとめた。福・寿を表すものと吉祥文字を表すものとでそれぞれａ・ｂに細分した。

Ⅱ類　地に青海波文、主文に桜花文を表す。内面の口縁直下には瓔珞文を巡らせ、見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。

Ⅲ類　蛸唐草文と青海波文で窓を設け、内部に笹等を表す。内面の口縁直下はⅡ類と同様の文様を巡らせる。

Ⅳ類　外面の胴部に主文として花文(桜？)を表す。内面は口縁直下と見込みに圏線。

Ⅴ類　外面には地に馬蹄形の文様を細かく表し、窓を設け内部に文様を加える。内面の口縁直下はⅡ・Ⅲ類と同様である。

(２)　皿　(第50図34～38)

若干内彎気味の浅い皿である。内面には捻花・松・笹・鶴等を表し、見込みには松竹梅文や鶴を表している。

(３)　香炉　(第50図39～42)

厚手と薄手のタイプがある。外面の口縁直下には紗綾文に桜花文を散らしたり、草花文に区画窓を設けて中に

花卉文等を表している。高台外面には連続文を巡らせる。

瀬戸・美濃

（1） 小碗 （第50図43）

薄手の小碗である。口唇部に口錆を施し、外面の胴部には鳥？を表している。

（2） 皿 （第50図44～45）

内面には菊花と桜花を散らすタイプと区画内に文字を表すタイプがある。

銅板転写

銅板転写による絵付けがなされた磁器は82点得られており、うち80点は瀬戸・美濃を生産地とする。確認された器種としては、碗・小碗・皿・小杯・猪口・蓋・香炉があるが、碗・猪口については小破片で全形が窺えるような資料がないことから今回は割愛した。

（1） 小碗 （第50図46）

厚手で丸形小碗である。外面には区画を設け、地に七宝繋文等を表し、区画内には窓を設けて文字等を表している。高台外面には圏線を入れる。

（2） 皿 （第50図47～48）

内彎気味の浅い皿である。内面に区画を設け、区画内には芭蕉文、区画間には菱形文を表している。見込みには梅花文や寿文を表す。

（3） 小杯 （第50図49）

銅板転写とゴム判を併用するが、今回はここで扱った。腰折タイプの小杯で口縁部が微弱に外反する。外面には銅板転写による銘やゴム判による壷？を表している。

（4） 鉢 （第50図50）

厚手でやや浅めの鉢である。外面には船や遠山等を表し、内面には磯に人物と船が表現されている。

（5） 蓋 （第50図51）

急須等の蓋になるのであろうか？蓋甲面に花卉文が表されている。

（6） 香炉 （第50図52）

口縁資料で、外面に唐草文等を表してる。

ゴム判

ゴム判による絵付けがなされた磁器で確認された器種は碗・小碗の2つである。

（1） 碗 （第50図53）

外面の胴部に判然としない文様を表し、高台脇に宝？を巡らせている。内面の見込みには2本を圏線を入れる。

（2） 小碗 （第50図54）

口縁部が微弱に外反するタイプの小碗で、高台の造りも小さめである。外面には樹木を表し、高台外面には2本の圏線を入れる。

コンニャク判

コンニャク判による絵付けがなされた磁器で確認された器種は碗のみである。外面にコンニャク判による花卉文が表されている（第50図55）。

吹き絵

小碗の口縁破片が1点のみ得られている。外面に葉の模様が確認できる（第50図56）。

クロム青磁

クロム青磁で確認された器種は碗・皿・小杯であるが、皿・小杯については小破片で全形が窺えるような資料がないことから今回は割愛した。外面に笹を表している（第50図57）。

第15表　本土産印判手出土状況一覧

出土地	区	型紙摺 碇部 碗 A Ⅰ a 口～底	A Ⅰ a 底	A Ⅰ b 口～底	A Ⅰ c 口	A Ⅰ c 胴	A Ⅱ a 口	A Ⅱ a 胴	A Ⅱ a 底	A Ⅱ b 口	A Ⅱ b 胴	A Ⅱ b 底	A Ⅲ 口～底	A Ⅲ 口	A Ⅲ 胴	A Ⅲ 底	A Ⅳ 口	A Ⅴ 胴	A Ⅴ 底	A Ⅵ a 口	A Ⅵ b 口	A Ⅵ c 口	A Ⅵ d 口	A Ⅵ d 胴	A Ⅵ e 口	A Ⅵ e 底	A Ⅵ f 口	A Ⅵ g 口	A Ⅵ 底	A Ⅶ 口	A Ⅶ 胴	A Ⅶ 底	A 不明 口	A 不明 胴	B Ⅰ a 口～底	B Ⅰ a 口	B Ⅰ a 胴	B Ⅰ b 底	B Ⅱ 口～底	B Ⅲ 口	B Ⅳ 口	B Ⅴ 口	B 不明 口	B 不明 底	不明 胴	不明 底	小計	皿 口～底	皿 口	皿 胴	皿 底	香炉 口	香炉 底	小計	瀬戸・美濃 小碗 口	瀬戸・美濃 皿 口～底	瀬戸・美濃 皿 底	小計	合計
表採			2		2	1						1	1	5	3	1		1		6	1	1	1		2			1	1		1		2	1	1	2	2	1			1	1	1	1	12	4	60	3	1	12	7	2		85				0	60
9.8トレ	Ⅰ																																														0							0				0	0
3.6トレ	Ⅰ								1			1							1				2																							2	7		1	2	1			11				0	11
	Ⅱ													1															1																		2							2				0	2
7.1トレ	Ⅰ	1								1				2															1	1		1	1											1			9			1				10				0	10
	Ⅱ									1				1			1																2														5							5			1	1	6
	Ⅲ	1																																													1							1				0	1
5トレ	Ⅰ													2																			1						1						2		6				1			7		1		1	8
	Ⅱ						1	1																																							2							2				0	2
4.2トレ	Ⅰ			1					1			1		1									1			1	1						1			2				1						1	12						2	14				0	14
	Ⅰb																																														0	1						1				0	1
	Ⅰ黒土																											1																			1			1				2				0	2
	Ⅱ		1																										1					1									1		1		5					1		6				0	6
11トレ	Ⅰ						1																										2			1							1		1	1	7							7				0	7
	p7										1																																				1							1				0	1
12トレ	Ⅰ													1																																	2							2	1			1	3
TP4	Ⅰ																												1																		1		1					2				0	2
	Ⅱ													1																																	2			1			1	4				0	4
TP5	Ⅰ													1																																	1							1				0	1
	Ⅱ														1																																1						1	2				0	2
TP6	Ⅱ																																1														1							1				0	1
	Ⅳ																																												1		1							1				0	1
TP9	Ⅱ																						1																				1				2							2				0	2
TP10	Ⅰ																						1	1																							2			1	1			4				0	4
TP11	Ⅰ																										1																				1							1				0	1
	Ⅰb														1																																1					1		2				0	2
TP12	Ⅰ																												1																		1							1				0	1
不明																																															0							0				0	0
合計		2	3	1	2	1	2	1	2	2	1	3	1	15	5	1	1	1	1	8	1	1	6	1	2	1	2	2	6	1	1	1	10	2	1	5	2	1	1	1	1	1	4	2	17	8	134	4	3	18	10	4	4	177	1	1	1	3	180

出土地	区	銅板転写 瀬戸・美濃 碗 口	碗 胴	碗 底	小碗 口～底	小碗 口	小碗 胴	小碗 底	皿 口～底	皿 口	皿 胴	皿 底	小杯 口～底	猪口 口	猪口 胴	鉢 口～底	鉢 底	蓋	香炉 口	不明 口	不明 胴	不明 底	産地不明 碗 胴	合計	ゴム判 瀬戸・美濃 碗 口	碗 胴	碗 底	小碗 口	不明 胴	合計	コンニャク印判 肥前 碗 口	碗 胴	合計	吹き絵 産地不明 小碗 口	合計	クロム青磁 瀬戸・美濃 碗 口	皿 口～底	皿 口	皿 底	小杯 口	合計	総合計
表採		3	10	1		6		2	2	3	1	9	1	2	2			1	1	2	6	1	1	54		5	1	3	1	10			0		0		1				1	150
9.8トレ	Ⅰ							1																1						0			0		0						0	1
3.6トレ	Ⅰ	1																		1			1	3						0			0	1	1				1		1	16
	Ⅱ																							0						0			0		0						2	2
7.1トレ	Ⅰ			1																				1						0			0		0						9	11
	Ⅱ																							0						0			0		0						5	6
	Ⅲ				1																			1						0			0		0						0	2
5トレ	Ⅰ	1								1	1	1									1			5	1					1	2		2		0						0	16
	Ⅱ																							0						0			0		0						1	3
4.2トレ	Ⅰ							1																1						0			0		0	1					1	16
	Ⅰb																							0						0			0		0						0	1
	Ⅰ黒土																							0						0			0		0						0	2
	Ⅱ		1												1	1					1	1		5						0		1	1		0						0	12
11トレ	Ⅰ											1												3						0			0		0					1	0	10
	p7																							0						0			0		0						0	1
12トレ	Ⅰ					1						1												2						0			0		0						0	5
TP4	Ⅰ																							0						0			0		0						0	2
	Ⅱ																							0						0			0		0						0	4
TP5	Ⅰ																							0						0			0		0						0	1
	Ⅱ																							0						0			0		0						0	2
TP6	Ⅱ																							0						0			0		0						0	1
	Ⅳ																							0						0			0		0						0	1
TP9	Ⅱ							1																1			1			1			0		0						0	4
TP10	Ⅰ					1	1														1			3						0			0		0						0	7
TP11	Ⅰ																							0						0			0		0						0	1
	Ⅰb																							0			1			1			0		0						0	3
TP12	Ⅰ											1												1						0			0		0						0	2
不明																	1							1						0			0		0						0	0
合計		5	11	2	1	8	1	5	2	4	2	13	1	2	3	1	1	1	1	3	9	4	2	82	1	5	3	3	1	13	2	1	3	1	1	1	1	1	1	1	4	283

第16表ａ　本土産印判手観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第48図 図版39 1	碗	AⅠ a	13.8 4.7 5.6	五弁花状の窓に水仙文。窓外に笹と松。内面口縁直下に笹と松。見込みに圏線と梅花文。	鮮明である。	淡青灰白色。	畳付以外総釉。見込みハリ支え。淡灰白色の微粒子。	1トレ Ⅰ
第48図 図版39 2			12.8 — —	窓外に笹と松。内面口縁直下に菊と矢羽状の連続文。内面見込みに圏線。	失透釉気味である。	淡黄灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	D－6 Ⅰ
第48図 図版39 3		AⅠ b	12.6 4.6 5.3	五弁花状の窓に水仙文。窓外に松。内面口縁直下に松。見込みに圏線と梅花文。	鮮明である。	白色	畳付以外総釉。見込みハリ支え。淡灰白色の微粒子。微細な気泡痕。	4トレ Ⅰ
第48図 図版39 4		AⅠ c	12.6 — —	五弁花状の窓に水仙文。窓外に笹と松。内面口縁直下に菊。見込みに圏線。	〃　〃　。	淡青灰白色。	両面に施釉。内面見込みにハリ支え。淡灰白色の微粒子	表採
第48図 図版39 5		AⅡ a	— — —	外面には円形の窓に左向きの鶴。窓外に笹。内面は口縁直下に寿。	やや鮮明である	〃　〃　。	〃　〃　。内面見込みにハリ支え。淡灰白色の微粒子。	B－8 Ⅱ
第48図 図版39 6			— — —	〃　〃　。窓外に松。内面は見込みに圏線。	やや鮮明である。	〃　〃　。	〃　〃　。内面見込みにハリ支え。淡灰白色の微粒子。	B－11 Ⅰ
第48図 図版39 7		AⅡ b	13.5 — —	外面には円形の窓に右向きの鶴。窓外に松。内面は口縁直下に松や笹。	やや鮮明である。	淡灰白色	〃　〃　。淡灰白色の微粒子。	B－6 Ⅰ
第48図 図版39 8			— — —	〃　〃　。〃　〃　。内面は見込みに圏線。	失透釉気味である。	淡黄灰白色。	〃　〃　。〃　〃　。	E－12 P 7
第48図 図版39 9			— — 4.7	外面には円形の窓に右向きの鶴。窓外に笹と松。内面は見込みに圏線と梅花。	鮮明である。	淡青灰白色。	畳付以外総釉。淡灰白色の微粒子。	E－11 Ⅰ
第48図 図版39 10		AⅢ	13.2 4.9 5.6	菱形の窓内に三角文を円形に表す。内面は口縁直下に三角文。見込みに圏線と梅花。	〃　〃　。	〃　〃　。	畳付以外総釉。見込みハリ支え。淡灰白色の微粒子。	表採 ネット外
第48図 図版39 11		AⅣ	13,0 — —	外面に星形の点描文。内面は口縁直下に笹と松。見込みに圏線。	やや不鮮明である。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	D－6 Ⅱ
第48図 図版39 12		AⅤ	— — 5.2	円形の窓に日章旗を表す。内面の口縁直下は有文だが判然としない。見込み圏線と松竹梅文？	鮮明である。	淡青白色。	畳付以外総釉。淡灰白色の微粒子。	B－5 Ⅰ
第48図 図版39 13		AⅥ a	11.6 — —	外面全体に梅花文。内面の口縁直下に梅花を巡らす。見込みに圏線。	〃　〃　。	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	表採 ネット外
第48図 図版39 14			13.0 — —	〃　〃　。〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	TP4 Ⅱ 2/3
第49図 図版40 15		AⅥ b	14.6 — —	〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	B－3 表採
第49図 図版40 16			12.5 — —	〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	TP9 Ⅰ
第49図 図版40 17		AⅥ c	12.6 — —	〃　〃　。〃　〃　。	やや不鮮明である。内面失透釉気味。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	C－2 表採
第49図 図版40 18		AⅥ d	12.8 — —	〃　〃　。〃　〃　。〃　〃　。見込みに圏線。	〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	B－5 Ⅰ
第49図 図版40 19			14.6 — —	〃　〃　。〃　〃　。	やや不鮮明である。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	表採
第49図 図版40 20		AⅥ e	14,0 — —	〃　〃　。〃　〃　。	鮮明である。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。	E－6.7
第49図 図版40 21			— — 5.2	〃　〃　。〃　〃　。	やや不鮮明である。内面失透釉気味。	淡黄灰白色。	畳付以外総釉。見込みハリ支え。淡灰白色の微粒子。微細な気泡痕。	B－11 Ⅰ
第49図 図版40 22		AⅥ f	13.4 — —	〃　〃　。〃　〃　。	鮮明である。	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	4トレ Ⅰ
第49図 図版40 23			— — —	〃　〃　。〃　〃　。	やや鮮明である。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	TP11 Ⅰa
第49図 図版40 24		AⅥ g	13.6 — —	〃　〃　。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。〃　〃　。微細な気泡痕。	4トレ Ⅰ

第16表ｂ　本土産印判手観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第49図 図版40 25	碗	AⅥ	－ － 4.2	外面全体に梅花文。見込みに圏線と花文？	鮮明である。	淡青灰白色。	畳付以外総釉。見込みハリ支え。淡灰白色の微粒子。微細な気泡痕。	2トレ Ⅱ
第49図 図版40 26			－ － 4.8	〃　〃　。　〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	〃 〃
第49図 図版40 27		AⅦ	13.6 － －	外面は地に馬蹄形の模様を全面に散らす。主文は笹。内面の口縁直下も同様に表す。見込みには圏線。	やや鮮明である。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	D－4 Ⅰ
第49図 図版40 28		BⅠa	10.6 － －	外面の胴部に福・寿を表す。内面の口縁直下には連続文を巡らす。	鮮明である。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第49図 図版40 29		BⅠb	－ － 6.0	外面の胴部には吉祥文字を表す。内面の見込みには圏線と花文？	やや鮮明である。	〃　〃　。	畳付以外総釉。見込みハリ支え。淡灰白色の微粒子。	表採 ネット外
第49図 図版40 30		BⅡ	11.8 4.1 4.1	地に青海波文、主文に桜花文。内面の口縁直下は連続文を巡らせる。	鮮明である。	〃　〃　。	畳付と見込みを蛇の目状に掻き取る。黄灰白色の微粒子。	C－9 Ⅰ
第49図 図版40 31		BⅢ	10.5 － －	蛸唐草文と青海波文で窓を設け、内部に笹を表す。内面の口縁直下はBⅡ類と同様の連続文。	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	4トレ
第49図 図版40 32		BⅣ	12.2 － －	外面に胴部に花文（桜？）を表す。内面は口縁直下と見込みに圏線を入れる。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	4トレ 表採
第49図 図版40 33		BⅤ	10.0 － －	外面には馬蹄形の模様を地とし、窓を設けて内部に文様を加える。内面口縁直下はⅡ・Ⅲと同様。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	表採
第50図 図版41 34	Ⅲ		10.2 1.9 6.5	外面に捻花等を表す。口唇部には口紅状に仕上げる。	やや鮮明である。	〃　〃　。	畳付以外総釉。淡灰白色の微粒子。	D－1 表採
第50図 図版41 35			12.0 3.5 7.2	口縁部を稜花状に成形する。内面に捻花、窓に松等を表す。口唇部を口紅状に仕上げる。	〃　〃　。	〃　〃　。	畳付から外底にかけて露胎。内面にハリ支え痕。灰白色の微粒子。	2トレ Ⅱb
第50図 図版41 36			12.5 3.4 7.8	外面胴部に草花文、内面には鶴と星の丸文。見込みにも鶴丸文を表している。	不鮮明である。失透釉気味である。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 淡灰白色の微粒子。	表採 ネット外
第50図 図版41 37			12.9 － －	外面の胴部に唐草文。内面は窓に笹を表す。口唇部は口紅状に仕上げる。	鮮明である。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	7トレ 表採
第50図 図版41 38			－ － 7.4	内面に三角の連続文。見込みも連続文と松竹梅文。	〃　〃　。	〃　〃　。	畳付から外底にかけて露胎。内面にハリ支え痕。灰白色の微粒子。	表採 ネット外
第50図 図版41 39	香炉		7.9 － －	外面には花卉文を表す。	不鮮明である。失透釉気味である。	淡黄灰白色。	内面の口縁直下のみ無釉。淡灰白色の微粒子。	〃 〃
第50図 図版41 40			9.1 － －	外面は草花文に窓を設け、中に花卉文を表す。胴部も有文である。	〃　〃　。 〃　〃　。	〃　〃　。	外面から内面口縁直下まで施釉。白色の微粒子。	2トレ Ⅱ
第50図 図版41 41			10,0 － －	外面の口縁直下には紗綾文に桜花文を散らしている。胴部は有文である。	〃　〃　。 〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	TP11 Ⅰb
第50図 図版41 42			－ － 11.5	外面の胴部は有文。高台外面は連続文。	〃　〃　。 〃　〃　。	〃　〃　。	畳付外端まで施釉。内面と外底は無釉。	4トレ Ⅱ
第50図 図版41 43	小碗		9.0 － －	口唇部に口錆。胴部には鳥？を表している。	鮮明である。	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。微細な気泡痕。	E－15 Ⅰ
第50図 図版41 44	Ⅲ		11.0 1.9 6.8	口唇部は口紅状に仕上げる。内面は区画を設け、内部に文字を表す。見込みに千鳥？	やや鮮明である。	〃　〃　。	畳付以外総釉。淡灰白色の微粒子。	C－8 Ⅰ
第50図 図版41 45			－ － 8.4	外面有文。高台脇、外面に圏線。内面は菊花文、桜花文。見込みに連続文と笹。	鮮明である。	〃　〃　。	畳付から外底にかけて露胎。灰白色の微粒子。	1トレ Ⅰ
第50図 図版41 46	小碗		－ － 3.8	外面には区画を設け、地には七宝繋文等を表し、区画内には窓を設けて文字などを表す。	〃　〃　。	淡青灰白色。	畳付以外総釉。淡灰白色の微粒子。	表採
第50図 図版41 47	Ⅲ		10.7 2.5 6.3	内面には区画内に芭蕉文、区画間には菱形文を表す。見込みには梅花文。	〃　〃　。	淡緑灰色。	〃　〃　。　〃　〃　。	〃
第50図 図版41 48			－ － －	見込みには梅花文。	〃　〃　。	淡灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	C－9 Ⅰ

第16表ｃ　本土産印判手観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

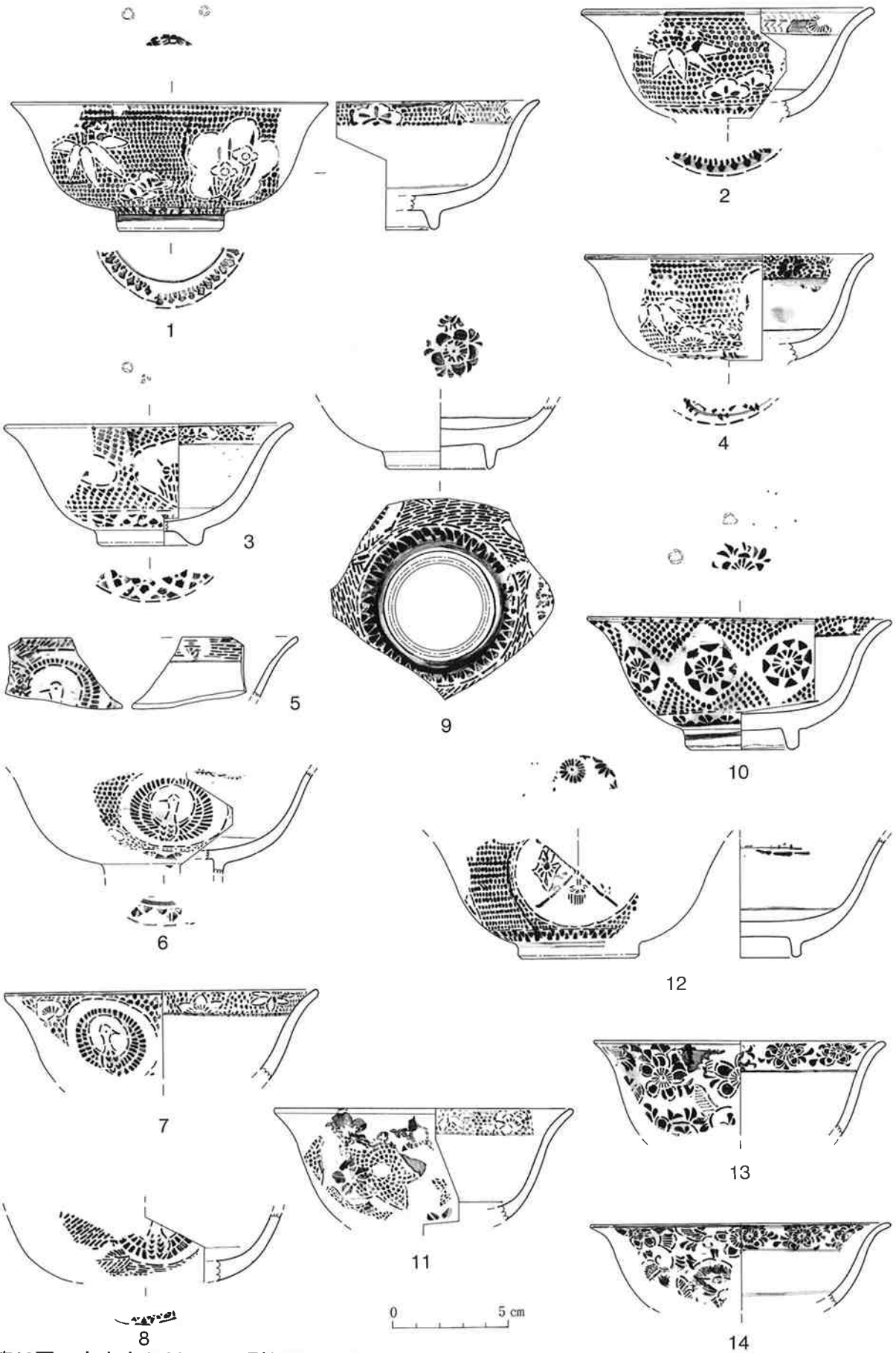
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	呉須の発色	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第50図 図版42 49	小碗	Ⅰ	8.3 4.3 4.6	外面には銅板転写による銘やゴム判による壷？を表している。	鮮明である。	淡青白色。	畳付以外総釉。白色の微粒子。	表採
第50図 図版42 50	鉢	Ⅰ	12,0 － －	外面には船や遠山を表す。内面には磯に人物と船が表されている。	〃　〃　。	淡青灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	4トレ Ⅱ
第50図 図版42 51	蓋	Ⅰ	5.4 － －	蓋甲面に花卉文を表している。	不鮮明である。	〃　〃　。	身受け以外は総釉。	B－15 表採
第50図 図版42 52	香炉	Ⅰ	9.2 － －	外面の胴部に唐草文を表している。	やや鮮明である。	淡青白色。	内面の口縁直下のみ無釉。淡灰白色の微粒子。微細な気泡痕。	表採
第50図 図版42 53	碗	Ⅰ	－ － 4.2	外面胴部に判然としない文様を表し、高台脇に宝文？を巡らす。内面の見込みには２本の圏線。	鮮明である。	白色。	畳付以外総釉。白色の微粒子。	1トレ Ⅰ
第50図 図版42 54	小碗	Ⅰ	5.5 4.6 2.9	外面には樹木を表し、高台外面には２本の圏線。	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	D－6 Ⅲ
第50図 図版42 55	碗	Ⅰ	6.8 － －	外面の胴部に花卉文を表す。	不鮮明である。	灰白色。	両面に施釉。淡灰白色の微粒子。	B－9 Ⅰ
第50図 図版42 56	小碗	Ⅰ	－ － －	外面には葉の模様が確認できる。	鮮明である。	白色。	〃　〃　。白色の微粒子。	D－5 Ⅰ
第50図 図版42 57	碗	Ⅰ	7.7 － －	外面に笹を表している	〃　〃　。	淡青緑色。	〃　〃　。　〃　〃　。	C－11 Ⅰ

参考文献

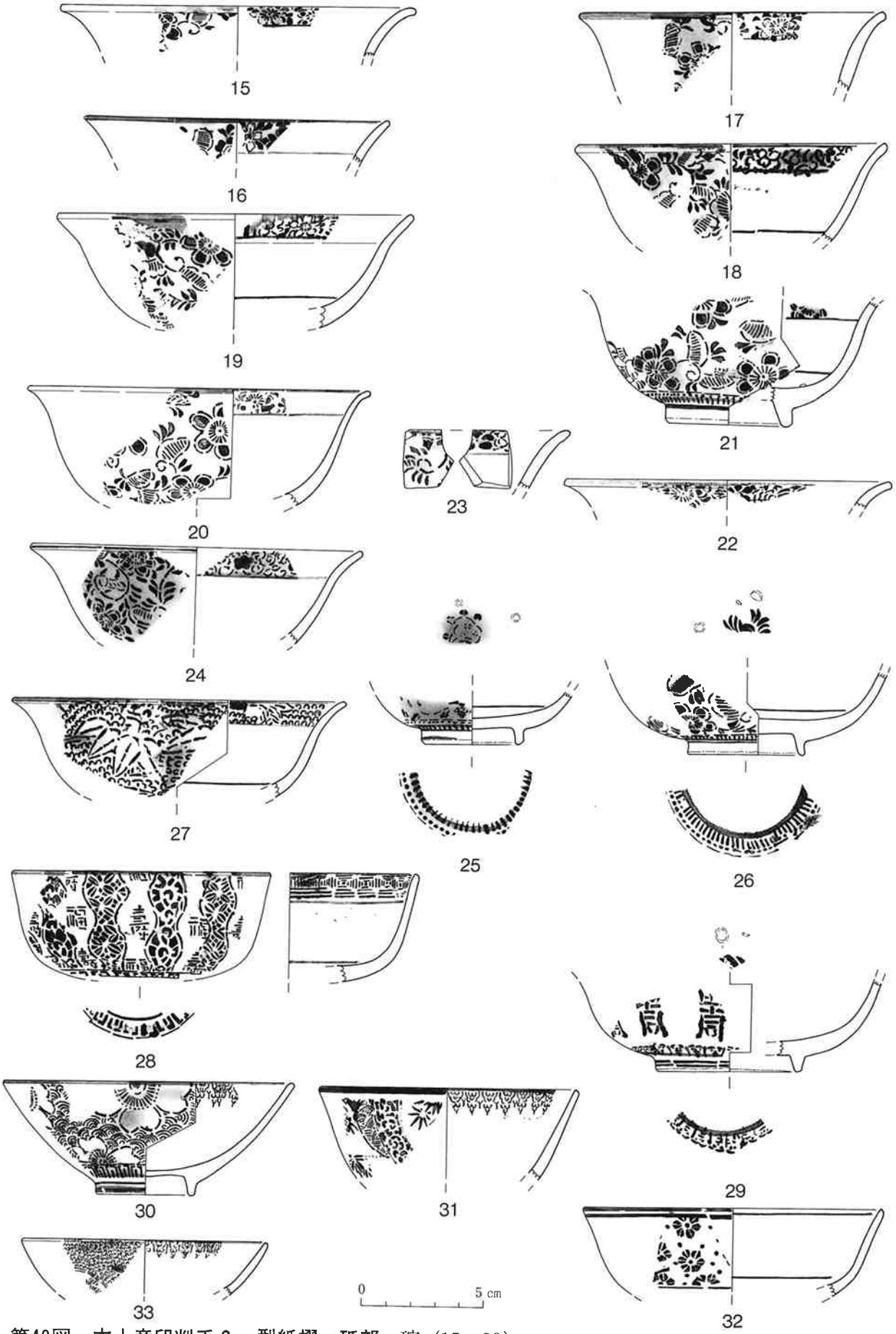
・『近代の九州陶磁展』　佐賀県立九州陶磁文化館　1984年

・大橋康二　『古伊万里の文様』　理工学社　1994年

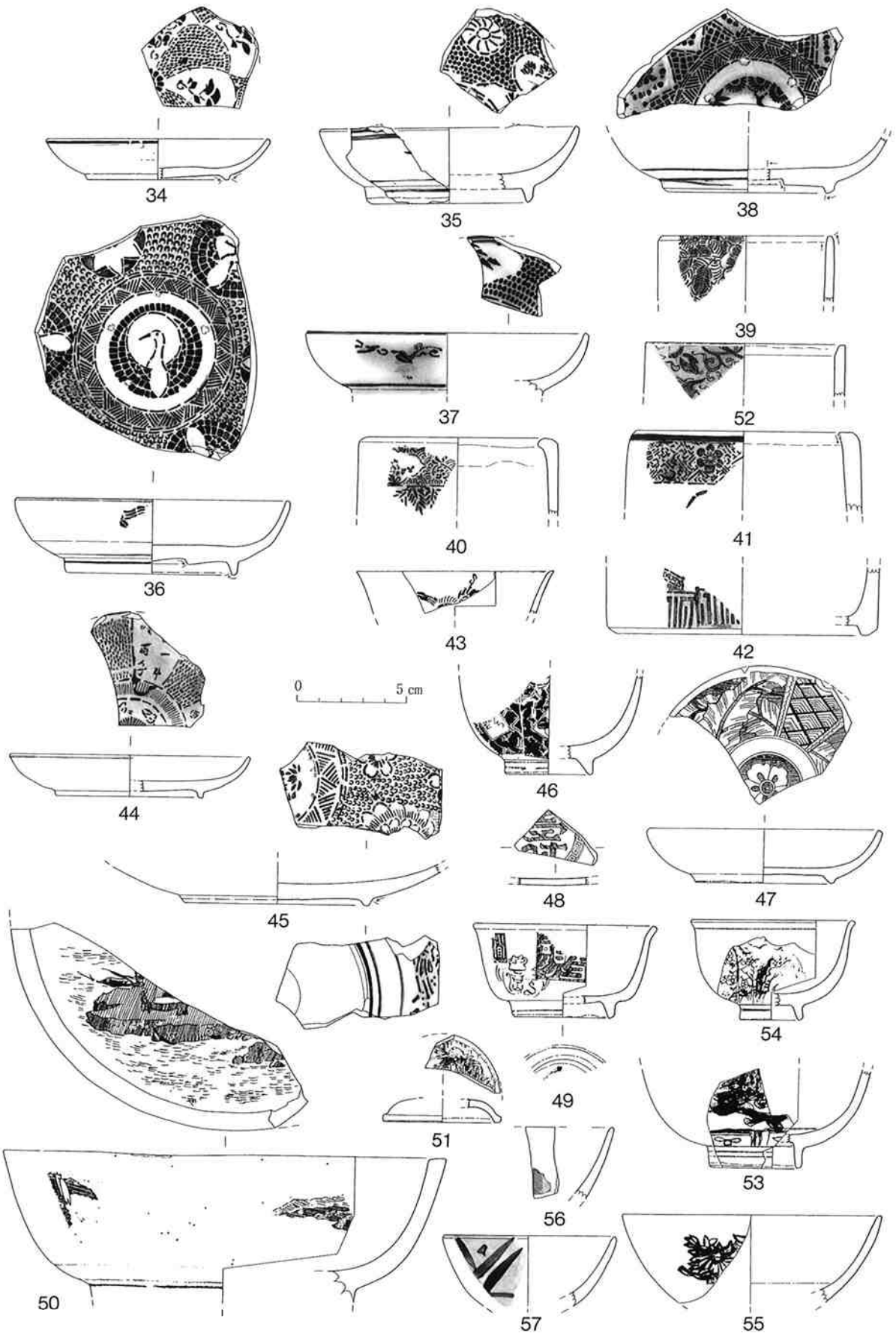
・下地安広　「沖縄の遺跡から出土する近代陶器－浦添の遺跡を中心に－」　『南島考古』　No.14　沖縄考古学会　1994年



第48図　本土産印判手１　型紙摺　砥部　碗（１～14）



第49図　本土産印判手２　型紙摺　砥部　碗（15～33）



第50図　本土産印判手３　型紙摺　砥部　皿(34～38)、香炉(39～42)、**瀬戸・美濃**　小碗(43)、皿(44～45)、**銅版転写**　小碗(46)、皿(47～48)、小杯(49)、鉢(50)、蓋(51)、香炉(52)、**ゴム判**　碗(53)、小碗(54)、**コンニャク判**　碗(55)、**吹き絵**　小碗(56)、**クロム青磁**　碗(57)

第17節　本土産陶器

本地区にて検出された本土産陶器は総点数が667点を数え、本土産陶磁器全体の約44％を占める。産地別に見てみると、最も多く確認されたのは京・信楽(関西系含)で437点と圧倒的である。これに次いで薩摩166点、肥前77点、志野(系含)16点、八代１点となっている。本土産陶器の器種としては、碗・皿・鉢・瓶・蓋・土瓶・壷・急須・行平の９器種が確認されている。中でも碗は347点と全体の52％を占める(第17～19表)。

以下、本地区より検出された本土産陶器(京・信楽・肥前・薩摩・八代・志野)の分類概念を述べることとする。なお、個々の特徴等については観察表(第20表)に呈示した。

京・信楽

京・信楽で確認された器種は、碗・皿・瓶・土瓶・鉢の５器種である。器種別の出土傾向は、総点数166点に対して、皿が87点と全体の約52％を占めている状況で、以下、碗・土瓶と続く。

（１）　碗　(第51図１～10)

碗は丸碗・筒型の２つに分類した。

Ⅰ類　丸碗　(第51図１～６)

器形に若干の差異は見られるが、丸形の碗をまとめてみた。無文タイプ、下絵に上絵で色付けするタイプ、上絵付けのみするタイプがある。

Ⅱ類　筒型碗　(第51図７～10)

比較的浅めの筒型碗である。見込みに色絵による梅花や鉄絵で若松文を表現している。

（２）　皿　(第51図11～23)

内彎皿と変形皿の２つに分類した。

Ⅰ類　内彎皿　(第51図11～16)

内彎タイプの皿である。内面には笹や梅樹文等を色絵や鉄絵で表している。

Ⅱ類　変形皿　(第51図17～23)

抉りを入れて成形するタイプや型押しによる成形、または彫り込み、ヘラ削りによる稜が見られるタイプをまとめた。文様は梅？、笹、若松等を表している。

（３）　瓶　(第52図24)

瓶の胴部が１点検出されている。外面に花卉文を表す。内面には轆轤痕が顕著に見られる。

（４）　土瓶　(第52図25～30)

土瓶の蓋・耳・胴部・底部の破片資料が得られている。蓋には文様を施すものとそうでないものがあり、前者には鉄絵と呉須による梅樹文が表されている。耳・胴部片には色絵による菊花・花卉文等が表されている。

（５）　鉢　(第52図31～33)

蓋付鉢の蓋と身が検出されている。蓋には３カ所の切れ込みが確認できる。身は底部外端に抉りを入れて、内側は浅く削る。胴部外面には梅樹文や笹を呉須や色絵で表している。

関西系

関西系で確認された器種は、碗・皿・鉢・瓶・土瓶・壷・行平の７器種であるが、瓶と壷については小破片で全形が窺えるような資料がないため今回は割愛することにする。器種別の出土傾向は、総点数271点に対して碗が210点で、関西系全体の77％と圧倒的である。以下、壷・皿と続く。

（１）　碗　(第52図34～43)

確認された碗は丸碗・外反碗・筒型碗の３つに大別した。

Ⅰ類　丸碗　(第52図34～39)

関西系の丸碗については、色絵の痕跡が残る資料は１点のみで他は無文であった。高台を小さく、低く成形するタイプがほとんどである。

Ⅱ類　外反碗　(第52図40)

逆「ハ」の字状に開き、口縁部を微弱に外反させる碗である。内外面とも文様は確認できない。

Ⅲ類　筒型碗　(第52図41～43)

比較的浅めのタイプである。外面の胴部に鉄絵による文様が見られる。

（２）　皿　(第53図44～52)

関西系で確認された皿は、内彎皿・外反皿・変形皿・碁笥底皿・大皿の５つに分類した。

Ⅰ類　内彎皿　（第53図44）

厚手の内彎タイプの皿である。図上復元ができる資料を１点図化した。

Ⅱ類　外反皿　（第53図45～46）

逆「ハ」の字状に開き、口縁部を微弱に外反させるタイプの皿である。内面に鉄絵による文様を確認できるものもある。

Ⅲ類　変形皿　（第53図47～49）

口縁部に抉りを加える比較的大きなタイプを変形皿としてまとめた。口唇部に口錆を施すものもある。

Ⅳ類　碁笥底皿　（第53図50）

外底に内刳りを加えて碁笥底状に成形しているタイプである。見込みには沈線が認められる。

Ⅴ類　大皿　（第53図51～52）

大皿になるものと思われる底部片が得られている。鉄絵や呉須で下絵を施すタイプと上絵付けによる文様を施すタイプがある。

（３）　土瓶　（第53図53～56）

土瓶は底部資料のみが検出されている。厚手のタイプと比較的薄手になるタイプがある。

（４）　鉢　（第53図57～58）

鉢も底部資料のみが検出されている。底部外端には抉りを入れて、内側は内刳りを入れて成形する。

（５）　行平　（第53図59～60）

行平の口縁部と思われる資料が得られている。胴部中央から内彎し、口縁部で外に折り曲げたあと口唇部をさらに内彎させる。外面に鉋目が入るものもある。

（６）器種不明　（第53図61～64）

器種不明の資料で特徴的なものを図化した。小壷や瓶が考えられるものや型物の部位不明破片資料がある。

肥　前

ここでは、嬉野、内野山、武雄などを生産地とする陶器を扱った。確認された器種は嬉野、内野山が碗・皿・蓋・香炉・鉢があるが、鉢については小破片であることから今回は割愛した。武雄は水甕が確認されている。

（１）　碗　（第54図65～66）

小振りで、丸碗タイプの碗である。両面に藁灰釉や灰釉を施釉する。

（２）　皿　（第54図67～69）

浅いタイプの皿である。両面とも銅緑釉を施釉するものや外面には灰釉、内面は銅緑釉で見込みを蛇の目状に掻き取るものがある。外底面に墨書が入るものも確認されている。

（３）　蓋　（第54図70～71）

急須や土瓶、鉢等の蓋にのなるものと思われる資料が得られている。蓋甲面に錆釉や化粧土に刷毛目を加えて、灰釉を施すものがある。

（４）　香炉　（第54図72～76）

特徴的な口縁部と胴部の破片資料を図化した。成形時に外反させた口縁部に抉りや胴部に凹凸面を加えているタイプや外面口縁直下に象嵌による雷文帯を巡らすものとがある。

（５）　水甕　（第54図77～78）

外面は化粧土に刷毛目を加え、櫛目で波状沈線を巡らす。鉄釉と銅緑釉を掛け分ける。底部には錆釉を施す。内面は灰釉と錆釉の掛け分けである。

薩　摩

ここでは薩摩等の南九州を生産地とする資料を扱った。確認された器種は碗・皿・大皿・壷・瓶・急須がある。一般に白物、白薩摩と称される資料とそうでないものとに大別できるが、前者の瓶、後者の壷については小破片であることから今回は割愛した。

（１）　碗　（第55図79～87）

碗は丸碗と外反の２つに大別できる。両者とも焼成の際による若干の差異はあるものの、両面に細かい貫入が入るのが特徴である。高台脇に千鳥印が見られるのもある。

Ⅰ類　丸碗　(第55図79～86)

器形や焼成状態は若干異なるが、丸形の碗をまとめてみた。両面に細かい貫入が観察できる。高台脇には千鳥印が表現されている。

Ⅱ類　外反碗　(第55図87)

口縁部を微弱に外反させるタイプの碗である。Ⅰ類同様、両面に細かい貫入が入るのが特徴的である。

(2)　皿　(第55図88～89)

型押しにより成形された変形皿であると思われる。内面の見込みに陰刻を施すものもある。碗同様に両面には貫入が観察できる。

(3)　大皿　(第55図90)

図上復元を試みたが、変形皿の可能性も考慮される。浅めで高台径が大きい。内面には鉄絵による文様が表現されている。全体的に失透釉気味である。

(4)　壷　(第55図91～92)

壷の肩部～胴部の破片資料を図化した。なで肩タイプと肩が張るタイプがあるが、後者には耳の痕も確認できる。いずれも両面に細かい貫入が見られる。

(5)　器種不明　(第55図93)

性格等は判然としないが、袋物の底部として図化してみた。外底面には千鳥印が見られる。

(6)　急須　(第55図94～95)

急須の口縁部破片資料が2点得られている。図95は外面の釉があばた状を呈しており、両面とも調整痕が観察できるが、内面のそれは顕著である。図96も窯変が認められる。いずれも鮫釉であると思われる。

志　野

美濃で1580年以降に焼かれた長石釉を施した白色の陶器、もしくはこれに後続するタイプと思われる資料を扱ったが、大半は19世紀以降の範疇に納まるようである。確認された器種は皿・猪口・急須の3器種である。

(1)　皿　(第56図96～100)

皿は変形皿と角皿の2タイプが確認されている。前者は稜花状に成形されており、後者は肩押しによる成形であるものと思われる。外面には上絵付けによる文様が確認できる。

(2)　猪口　(第56図101)

比較的小振りの猪口である。両面とも文様は確認できない。

(3)　急須　(第56図102)

急須になるものと思われる口縁部破片資料が1点のみ検出されている。

八　代

愛媛県八幡浜市八代で1910年前後に焼かれた焼き物で、本地区からそれに相当すると思われる香炉の破片資料が1点のみ検出されている(第56図103)。外面胴部には象嵌による文様が表されている。

参考文献

・『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』　九州近世陶磁学会　2000年
・『やきもの事典』　平凡社　1984年

第17表　本土産陶器　京・信楽出土状況一覧

出土地＼分類		碗							皿							瓶	土瓶			鉢		器種不明		合計
		Ⅰ				Ⅱ			Ⅰ				Ⅱ											
		口~底	口	胴	底	口~底	胴	底	口~底	口	胴	底	口~底	胴	底	胴	蓋	身	耳	蓋	身	胴	底	
表採		1	4	3	4			1	2	2	6	9	2	1	1			2			2		3	43
3·6トレ	Ⅰ		1								1													2
	黒土													1										1
7·1トレ	Ⅰ										2													2
	Ⅱ			1																				1
5トレ	Ⅰ	1	2	1	5	1		4		3	7	5	2		1		2	6					8	48
4·2トレ	Ⅰ		2	1	1		1			2	1	2	1		1		1						4	17
	Ⅰ黒土										1													1
	Ⅱ		1	1						6	4	2			1	1		1		1			1	19
11トレ	Ⅰ										1	3						1				1		6
	Ⅱ			1																				1
	P8							1																1
	P10																1							1
12トレ	Ⅰ				1					1														2
TP 3	Ⅰ黒土																					1		1
TP 4	Ⅱ			1																				1
TP 5	Ⅱ										1			1										2
TP 8															1									1
TP 9	Ⅰ		1									2												3
TP10	Ⅰ												1											1
TP11	Ⅰa											2		2										4
	Ⅰb				1				1										1					3
TP12	Ⅰ										1													1
不明										1	1	2												4
合計		2	11	9	12	1	1	6	3	15	26	27	6	5	5	1	4	10	1	1	2	2	16	166

第18表　本土産陶器　関西系出土状況一覧表

出土地＼分類		碗								皿									瓶	土瓶		鉢	壺	行平	器種不明		合計
		Ⅰ				Ⅱ	Ⅲ			Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ		Ⅳ	Ⅴ											
		口~底	口	胴	底	口	口	胴	底	口~底	口	底	口	口	底	口~底	底	底	胴	底	底	底	胴	口	胴	底	
表採		2	20	2	30			1	1		1		1		1	1		3		1	1	5		1	2	73
3·6トレ	Ⅰ		2		1																	1				4
	Ⅱ				1																					1
7·1トレ	Ⅰ	1	2		1																					4
	Ⅰ下部			1	1																					2
	Ⅱ				1																			1		2
5トレ	Ⅰ	8	22	2	30	2	1		1		2								1	1		1	1			72
	Ⅱ				1																					1
4·2トレ	Ⅰ	2	6	3	9					1	2						1					1	5			30
	Ⅰb			1																			1			2
	Ⅰ黒土				2																					2
	Ⅱ		2		7		1								1					1	1	2			1	16
	黒土															1										1
11トレ	Ⅰ		4	1	7															1		2			1	16
	Ⅱ		2		1											1						1				5
	P8				1																					1
12トレ	Ⅰ	1			3				1				1	1												7
TP 3	Ⅰ黒土																			1						1
	Ⅱ											1														1
TP 4	Ⅱ			2	1														1							4
TP 6	Ⅳ			1																						1
TP 7	Ⅱ	1		1																			2			4
TP 8	Ⅰ		1	2																						3
	Ⅱ																						2			2
TP10	Ⅰ			1											1											2
	Ⅰb		1																							1
TP11	Ⅰa			2																						2
	Ⅰb	1	5	1							1															8
TP12	Ⅰ		1		1																		1			3
合計		16	68	20	98	2	2	1	3	1	6	1	2	1	1	3	1	5	2	5	3	23	2	2	3	271

第19表　本土産陶器　肥前・薩摩・八代・志野出土状況一覧

分類 / 出土地		肥前																薩摩											
		嬉野・内野山（系）											唐津（武雄系）						白薩摩										
		碗			皿		蓋	香炉		鉢	不明	小計	水甕				小計	合計	碗					皿		大皿		壺		
																			Ⅰ			Ⅱ							
		口	胴	底	口	底		口	胴	口	胴		口	肩	胴	底			口～底	口	胴	底	口	口	底	完形	口	頚部	頚～胴	胴部
表採		1	5	1	2	2			3			14	4	1	7		12	26	1	7	12	4		1	1			1	1	8
9·8トレ	Ⅰ											0					0	0												1
3·6トレ	Ⅰ				1							1					0	1												1
7·1トレ	Ⅰ											0					0	0			1									
	Ⅰ下部											0					0	0			2									
	Ⅱ											0					0	0			1									
5トレ	Ⅰ	5	1	4	1			2		1	1	15	1		9	1	11	26	1	5	5	1								3
	Ⅱ											0	1				1	1				1								
4·2トレ	Ⅰ		2	2		1						5	1	1			2	7		1	6		2					1		2
	Ⅰb										1	1					0	1		1		1								
	Ⅱ	1					1				1	3					0	3		1	1					1	1		1	
11トレ	Ⅰ		1	1								2			1		1	3			1		1							
	Ⅱ	1										1					0	1												
	P7											0			1		1	1												
	P10											0					0	0												
12トレ	Ⅰ											0					0	0			2									1
	P4											0					0	0												
TP4	Ⅱ											0					0	0			2									
TP5	Ⅱ											0					0	0												
TP6	Ⅱ											0					0	0		1										
	Ⅳ											0			1		1	1												
TP7	Ⅱ											0	1				1	1			1									
TP8	Ⅰ											0					0	0												
TP9	Ⅰ		1									1					0	1			1	1								1
TP10	Ⅰ			1								1					0	1												
	Ⅰb																													
TP11	Ⅰ											0					0	0												
	Ⅰa						1					1					0	1			1	1								
	Ⅰb	1										1					0	1		1										
TP12	Ⅰ							1				1					0	1						1	1					
合計		9	10	9	4	3	2	3	3	1	3	47	8	2	19	1	30	77	2	17	36	9	3	2	2	1	1	2	2	17

分類 / 出土地		薩摩										合計	八代	合計	志野（系）							合計	総計
		白薩摩			壺				急須	鮫肌焼			香炉		1850～1610	19c～20c							
		瓶		器種不明	Ⅰ			Ⅱ							変形皿	変形皿			角皿	猪口	急須		
		胴	底	－	頚	胴	底	口	底	急須	－		胴		口	胴	口	胴	底	底	口	口		
表採				1		6		1				44		0			1	1	1		1	1	5	75
9·8トレ	Ⅰ											1		0									0	1
3·6トレ	Ⅰ	1										2		0									0	3
7·1トレ	Ⅰ									1		2		0									0	2
	Ⅰ下部											2		0									0	2
	Ⅱ											1		0									0	1
5トレ	Ⅰ			2	1	13		1	1			33	1	1				1		1			2	62
	Ⅱ					2						3		0									0	4
4·2トレ	Ⅰ					3		1				16		0			1		1				2	25
	Ⅰb											2		0									0	3
	Ⅱ					2						7		0	1				1				2	12
11トレ	Ⅰ					1						3		0									0	6
	Ⅱ											0		0									0	1
	P7						1					1		0									0	2
	P10					1						1		0									0	1
12トレ	Ⅰ					1						4		0									0	4
	P4										1	1		0									0	1
TP4	Ⅱ											2		0									0	2
TP5	Ⅱ											0		0					1				1	1
TP6	Ⅱ											1		0									0	1
	Ⅳ											0		0									0	1
TP7	Ⅱ											1		0									0	2
TP8	Ⅰ		1									1		0									0	1
TP9	Ⅰ					1						4		0									0	5
TP10	Ⅰ											0		0				1					1	2
	Ⅰb											0		0		1							1	1
TP11	Ⅰ											0		0			1						1	1
	Ⅰa	1										3		0					1				1	5
	Ⅰb											1		0									0	2
TP12	Ⅰ											2		0									0	3
合計		2	1	3	1	30	1	3	1	1	1	138	1	1	1	1	3	3	5	1	1	1	16	232

第20表ａ　本土産陶器観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第51図 図版42 1	碗	Ⅰ	10.8 6.9 4.2	両面とも下絵付け、上絵付けは確認できない。	淡黄白色。	畳付以外は総釉。内面に素が入る。両面に細かい貫入。白色の細粒子。	Ｂ－８ Ⅰ
第51図 図版42 2			11.2 － －	外面に下絵で鉄絵による梅樹文を表した後、上絵により梅花に彩色が施されている。内面は無文である。	灰白色。	両面に施釉。両面に細かい貫入が入る。灰白色の粗粒子。	Ｂ－９ Ⅰ
第51図 図版42 3			9.8 5.5 3.6	外面には上絵付けで六角形を繋いで、腰に連続文を表している。内面は無文である。	淡黄白色。	高台脇まで施釉。両面に細かい貫入が入る。淡黄白色の粗粒子。	Ｂ－９ 表　採
第51図 図版42 4			－ － －	外面の口縁直下に雷文帯を上絵付(赤・緑)する。胴部にも上絵(緑)による文様が確認できる。内面は無文である	〃　〃　。	両面に施釉。両面に細かい貫入が入る。灰白色の粗粒子。	ＴＰ９ 表　採
第51図 図版42 5			－ － －	外面の口縁直下に上絵(赤・藍)で四方襷文を表す。胴部には上絵(赤・藍・緑)で花卉文を表している。内面は無文である。	淡黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	５トレ Ⅰ
第51図 図版42 6			－ － －	外面に笹と花を上絵で表している。内面は無文である。	黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 淡灰白色の細粒子。	Ｓ－11　Ⅱ
第51図 図版42 7		Ⅱ	10.8 5.6 3.4	外面の胴部には鉄絵による文様が確認できるが判然としない。内面は無文である。	〃　〃　。	腰まで施釉する。両面に細かい貫入。見込みにハリ支え。灰白色の細粒子。	Ｂ－８ Ⅰ
第51図 図版42 8			－ － 6,0	内面の見込みに上絵(赤等)による梅花を表している。外面は文様が確認できない。	〃　〃　。	台脇まで施釉。両面に細かい貫入が入る。白色の粗粒子。	Ｅ－13 Ｐ－８
第51図 図版42 9			－ － 4.6	内面の見込みに呉須による若松文が表現されている。外面は文様が確認できない。	淡灰白色。	〃　〃　。淡灰白色の細粒子。	２トレ Ⅰ
第51図 図版42 10			－ － 6.0	〃　〃　。　〃　〃　。	黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	Ｃ－８ Ⅰ
第51図 図版42 11	皿		12.4 4.3 4.0	内面に上絵(赤・緑)による笹を表現する。外面には文様が確認できない。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 見込みにハリ支え。	ＴＰ11 Ⅰｂ
第51図 図版42 12			－ － 4,0	〃　〃　。　〃　〃　。	淡黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	表　採 南崖下
第51図 図版42 13			－ － 3.8	鉄絵による文様を施した後、上絵(赤・緑)による笹等を表現している。外面は無文である。	淡灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 見込みにハリ支え。	不　明
第51図 図版42 14			－ － 3.6	〃　〃　。　〃　〃　。	淡黄灰白色。	高台脇まで施釉。両面に細かい貫入が入る。白色の粗粒子。	４トレ Ⅰ
第51図 図版42 15			－ － 4.1	内面に上絵(緑)による笹を表現する。〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。淡灰白色の細粒子。	Ｃ－８ Ⅰ
第51図 図版42 16			－ － 4.2	内面に上絵(青・緑)による梅樹文を表している。　〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	Ｂ－９ Ⅰ
第51図 図版42 17		Ⅱ	－ － －	内面に上絵(赤)による笹や花卉文？を表している。　〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉。両面に細かい貫入が入る。淡灰白色の粗粒子。	Ｂ－８ Ⅰ
第51図 図版42 18			－ － －	内面には下絵で呉須と鉄絵による若松文が表されている。　〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	〃 〃
第51図 図版42 19			－ － 9.8	内面には下絵で呉須と鉄絵による笹が表されている。　〃　〃　。	黄灰白色。	高台脇まで施釉。両面に細かい貫入が入る。白色の粗粒子。	４トレ Ⅱ
第51図 図版42 20			－ － 4.4	両面とも下絵付け、上絵付けは確認できない。	淡黄灰白色。	畳付以外は総釉。内面に素が入る。両面に細かい貫入。白色の細粒子。	ＴＰ８ Ⅰ
第51図 図版42 21			－ － 9.6	内面には下絵で呉須と鉄絵による笹が表されている。外面に文様は見られない。	〃　〃　。	高台脇まで施釉。両面に細かい貫入が入る。淡灰白色の粗粒子。	４トレ Ⅰ
第51図 図版42 22			－ － 6,0	両面とも下絵付け、上絵付けは確認できない。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	５トレ Ⅰ
第51図 図版42 23			－ － 6.7	〃　〃　。	黄灰白色。	両面に白化粧を施した後に両面に施釉。外底の外周のみ無釉。両面に細かい貫入。灰色の細粒子。	Ｂ－３ 表　採
第52図 図版43 24	瓶		－ － －	外綿の胴部に鉄絵による花卉文を表している。	淡黄灰白色。失透気味である。	外綿に施釉。内面には釉垂れ。淡灰白色の微粒子。	４トレ Ⅱ

第20表ｂ　本土産陶器観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第52図 図版43 25	土瓶		内7.3 内5.3	両面とも下絵付け、上絵付けは確認できない。	黄灰白色。	蓋甲面のみ施釉する。細かい貫入。淡灰白色の細粒子。	E－12 表採
第52図 図版43 26			外9.6 内8.0	蓋甲面に呉須と鉄絵による梅樹文？が表されている。	淡黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	C－9 Ⅰ
第52図 図版43 27			5.0 － －	外面の口縁部から胴部にかけて上絵(赤・緑)による菊花・唐草文を表している。	淡黄白色。	外面に白化粧を施した後に施釉する。細かい貫入。淡黄灰白色の細粒子。	B－8 Ⅰ
第52図 図版43 28			－ － －	外面に上絵(赤)による唐草文を表している。	淡灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。　灰白色の微粒子。	C－8 Ⅰ
第52図 図版43 29			－ － －	外面に上絵(赤・緑)による唐草文を表している。	〃　〃　。	両面に施釉する。外面に細かい貫入。淡灰白色の微粒子。	TP11 Ⅰb
第52図 図版43 30			－ － 5.4	外面の胴下部に上絵(緑)による連続文が表されている。	淡黄白色。	白化粧を施した後、両面に施釉。内底は露胎。外面に細かい貫入。淡黄白色の粗粒子。	B－8 Ⅰ
第52図 図版43 31	鉢		外12.2 内9.4 －	両面とも下絵付け、上絵付けは確認できない。蓋甲面には溶着痕が見られる。	黄緑灰色。	身受け以外は総釉。両面に細かい貫入。灰白色の細粒子。	TP11 Ⅰb
第52図 図版43 32			－ － 11.8	外面に上絵(緑)による笹が表されている。	灰白色。	両面白化粧。畳付以外は総釉。両面に細かい貫入。灰色の細粒子。	表採 フェンスネット間
第52図 図版43 33			－ － 11.8	外面には下絵(鉄絵・白釉)で梅樹文を表現した後、上絵(赤・緑)で彩色する。	淡灰白色。 黄灰白色。	白化粧を施した後、両面に施釉。畳付は露胎。両面に細かい貫入。淡黄白色の細粒子。	E－6 表採
第52図 図版43 34	碗	Ⅰ	9.6 4.1 3.9	両面とも無文である。	灰白色。	高台外面から外底にかけて露胎。外面には素が入る。灰白色の細粒子。	B－9 Ⅰ
第52図 図版43 35			10.1 4.6 4.0	〃　〃　。	焼成不良。 淡黄白色。	台脇まで施釉。両面に素が観察できる。淡桃褐色の細粒子。	4トレ Ⅱ
第52図 図版43 36			9.0 4.4 4.1	〃　〃　。	〃　〃　。 黄緑灰色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	B－8 Ⅰ
第52図 図版43 37			9.6 4.3 3.8	〃　〃　。	灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 淡灰白色の微粒子。	1トレ Ⅰ
第52図 図版43 38			－ － 5.0	外面に上絵による雲文？を表す。内面は無文である。	淡灰白色。	畳付以外は総釉。白色の微粒子。微細な気泡痕。	2トレ Ⅰ
第52図 図版43 39			－ － 3.6	両面とも無文である。	灰濁色。	高台脇まで施釉。内面には水挽き痕。桃褐色の細粒子。	B－8 Ⅰ
第52図 図版43 40		Ⅱ	14.0 － －	〃　〃　。	焼成不良？灰色。	両面に施釉。灰色の細粒子。	〃 〃
第52図 図版43 41		Ⅲ	9.6 － －	外面に鉄絵による文様を表している。内面には文様は見られない。	黄灰白色。	〃　〃　。淡灰白色の微粒子。	C－11 Ⅱ
第52図 図版43 42			－ － 4.2	両面とも無文である。	淡灰白色。	高台脇まで施釉。両面に細かい貫入が入る。淡灰白色の微粒子。	B－15 Ⅰ
第52図 図版43 43			－ － 4.8	〃　〃　。	灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	C－8 Ⅰ
第53図 図版44 44	皿	Ⅰ	13.4 4.6 5.2	〃　〃　。	淡緑灰色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	B－11 Ⅰ
第53図 図版44 45		Ⅱ	－ － －	内面に鉄絵による文様を表している。外面に文様は見られない。	淡桃褐色。	両面に施釉。淡燈色の細粒子。	B－8 表採
第53図 図版44 46			－ － －	両面とも無文である。	焼成不良？灰色。	両面に施釉。灰色の細粒子。	5トレ Ⅰ
第53図 図版44 47		Ⅲ	14.8 － －	〃　〃　。	二次的な被熱。灰色。	〃　〃　。　〃　〃　。	D－8.9 表採
第53図 図版44 48			－ － －	内面に鉄絵による文様を表している。口唇部は口錆。外面に文様は見られない。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	TP10 Ⅰ

第20表 c　本土産陶器観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 台径 (cm)	文様構成	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第53図 図版44 49	Ⅲ	Ⅲ	－ － －	内面に鉄絵による文様を表している。口唇部は口錆。外面に文様は見られない。	黄灰白色。	両面に施釉する。外面に細かい貫入。白色の細粒子。	4トレ Ⅱ
第53図 図版44 50		Ⅳ	－ － 5.4	内面の見込みに沈線。	淡緑灰色。	底部近くまで施釉する。両面に細かい貫入。淡灰白色の細粒子。	表採
第53図 図版44 51		Ⅴ	－ － 12.0	内面の見込みに鉄絵と呉須で花卉文を表している。	淡黄灰白色。	高台脇まで施釉。両面に細かい貫入が入る。淡灰白色の微粒子。	C－8 表採
第53図 図版44 52			－ － 9.6	内面の見込みに上絵付けによる花卉文を表されている。	淡灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	F－14 表採
第53図 図版44 53	土瓶		－ － 5.6	両面とも無文である。	淡黄白色。	外面の胴下部まで施釉 〃　〃　。	B－12 Ⅰ
第53図 図版44 54			－ － 4.6	〃　〃　。　〃　〃　。	焼成不良？	外面のみ胴下部まで施釉。灰白色の細粒子。	4トレ Ⅱ
第53図 図版44 55			－ － 6.2	〃　〃　。　〃　〃　。	淡灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。	F－14 表採
第53図 図版44 56			－ － 5.4	〃　〃　。　〃　〃　。	淡灰白色。	外面の胴下部まで施釉 〃　〃　。	B－8 Ⅰ
第53図 図版44 57	鉢		－ － 11.4	〃　〃　。　〃　〃　。	淡黄灰白色。	内面のみ釉薬を観察できる。白色の細粒子。	4トレ Ⅱ
第53図 図版44 58			－ － 7.8	〃　〃　。　〃　〃　。	〃　〃　。	外面の腰まで施釉する。 見込みにハリ支え。淡黄白色の細粒子。	表採 フェンス・ ネット間
第53図 図版44 59	行平		－ － －	外面に錆目が確認できる。	暗茶褐色。	外面の耳の辺りと内面に錆釉を施している。桃褐色の粗粒子。淡灰白色の細粒子。	C－8 Ⅰ
第53図 図版44 60			－ － －	両面とも無文である	灰白色。	蓋を受ける面から内面口縁直下以外は総釉。淡黄白色の粗粒子。	1トレ Ⅱ
第53図 図版44 61	器種不明		－ － －	外面の胴部は有文である。外底の見込みに印文。	淡黄白色。	畳付以外は総釉。白色の粗粒子。微細な気泡痕。	B－12 Ⅰ
第53図 図版44 62			－ － －	両面とも無文である。	暗茶褐色。	両面に施釉。	4トレ 表採
第53図 図版44 63			－ － －	〃　〃　。　〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。	表採 フェンス・ ネット間
第53図 図版44 64			－ － －	内面？に陽刻文が見られる。	灰白色。	〃　〃　。	表採 南崖下
第54図 図版45 65	碗		－ － 4.1	両面とも無文である。	青白濁。	高台脇まで施釉する。両面に荒い貫入が入る。灰色の粗粒子。	B－9 Ⅰ
第54図 図版45 66			－ － 4.0	〃　〃　。　〃　〃　。	灰色。	畳以外は総釉。灰色の粗粒子。微細な気泡痕。	C－9 Ⅰ
第54図 図版45 67	Ⅲ		－ － 5.2	〃　〃　。　〃　〃　。	藁灰釉。 青白濁。	高台脇まで施釉する。両面に細い貫入が入る。淡灰色の粗粒子。	B－9 Ⅰ
第54図 図版45 68			－ － 4.2	外底面に墨書が観察できる。	外灰釉。 内胴縁釉。	〃　〃　。見込みは蛇の目状に掻き取る。淡黄白色の粗粒子。	B－11 Ⅰ
第54図 図版45 69			13.6 3.5 4.3	両面とも無文である。	〃　〃　。 〃　〃　。	高台外面まで施釉。〃　〃　。 淡灰白色の粗粒子。	表採 南崖下
第54図 図版45 70	蓋		外8.4 内6.5 高3.4	〃　〃　。蓋甲面に1条の沈線を巡らせる。	茶褐色。	蓋甲面のみ施釉。淡灰白色の粗粒子。	1トレ Ⅱ
第54図 図版45 71			外14.4 － －	化粧土に刷毛目を加えて灰釉を施している。	黄緑灰色。	〃　〃　。灰白色の細粒子。	B－11 Ⅰa
第54図 図版45 72	香炉		－ － －	両面とも無文である。	失透気味 藁灰釉。 青白濁。	両面に施釉する。淡灰色の細粒子。	C－9 Ⅰ

第20表ｄ　本土産陶器観察一覧

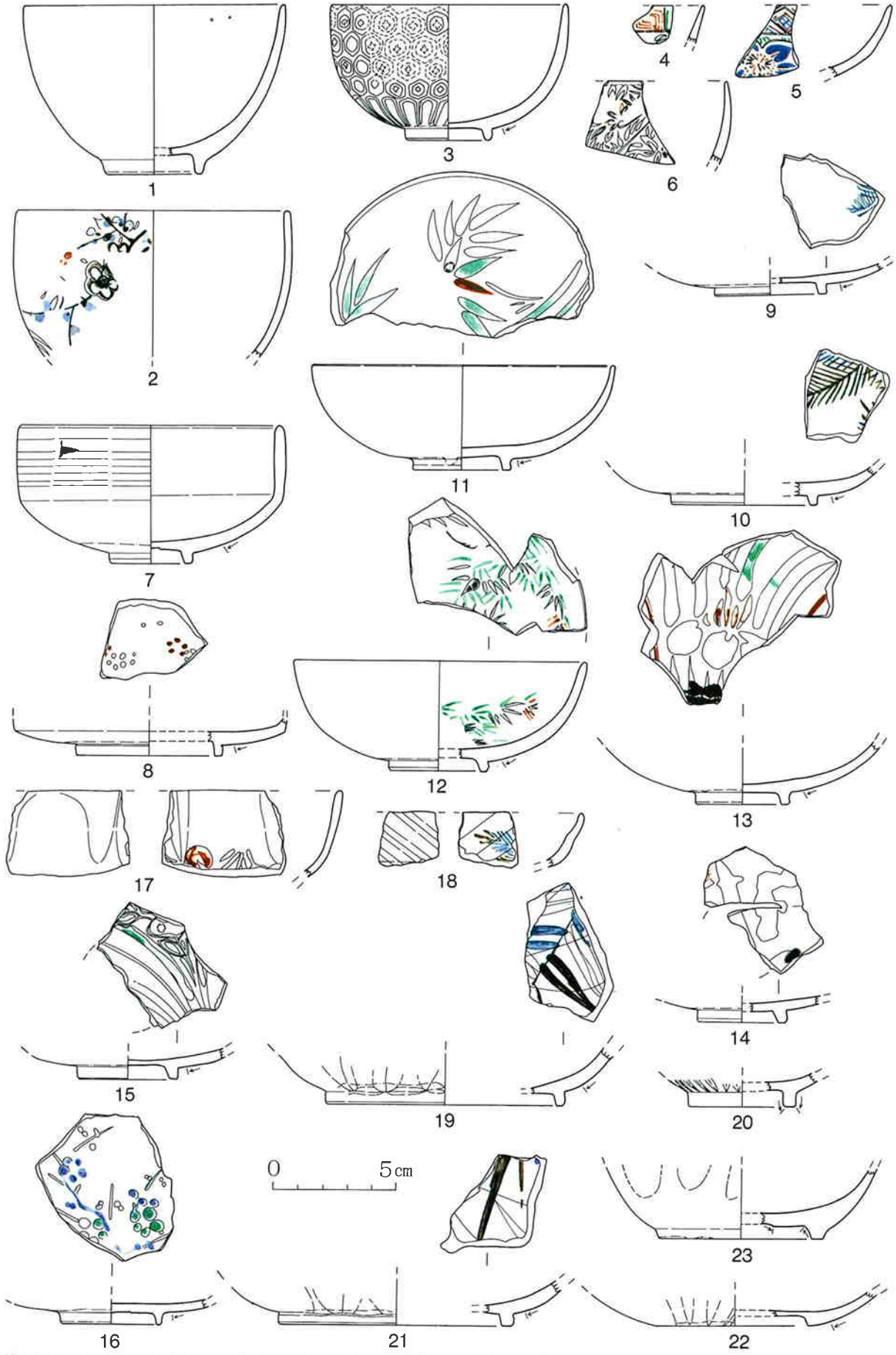
凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 台径 (cm)	文様構成	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区・出土層
第55図 図版45 73	香炉		－ － －	外面の口縁直下に象嵌による圏線と雷文帯を巡らせる。内面は無文である。胴部には把手？	失透気味。黄緑色。	〃　〃　。両面に細かい貫入。灰白色の細粒子。	E－12 表採
第55図 図版45 74			9.8 － －	外面の口縁直下に象嵌による圏線と雷文帯を巡らせる。内面は無文である。胴部には把手？	失透気味。黄緑色。	〃　〃　。両面に細かい貫入。灰白色の細粒子。	TP12 Ⅰ
第55図 図版45 75			－ － －	外面に象嵌による圏線と雷文帯を巡らせている。〃　〃　。	〃　〃　。 〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	表採
第55図 図版45 76			10.4 － －	外面に上絵付けによる笹？を表している。内面は無文である。	淡黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 白色の細粒子。	5トレ Ⅰ
第55図 図版45 77	水甕		37.4 － －	外面は化粧土に刷毛目を加え、櫛目で波状沈線を施している。	外面鉄釉と銅緑釉の掛け分け。内面錆釉。	両面に施釉する。灰色の細粒子。	B－9 Ⅰ
第55図 図版45 78			－ － －	〃　〃　。	〃　〃　。 〃　〃　。	畳付以外は総釉。 〃　〃　。	B－7 Ⅰ
第55図 図版46 79	碗	Ⅰ	12.0 － －	外面の胴部に錆釉による文様？が見られる。	黄灰白色。	両面に施釉する。両面に細かい貫入。白色の粗粒子。	B－9 表採
第55図 図版46 80			11.8 － －	両面とも文様は確認できない。	淡黄灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	C－8 Ⅰ
第55図 図版46 81			9.4 4.5 4.2	〃　〃　。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	E－13 表採
第55図 図版46 82			11.8 － －	〃　〃　。	淡灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 淡灰白色の細粒子。	5トレ Ⅰ
第55図 図版46 83			－ － 4.4	外面の高台脇に鉄絵による千鳥印が見られる。	淡黄灰白色。	畳付以外は総釉。両面に細かい貫入。白色の粗粒子。	B－8 Ⅰ
第55図 図版46 84			－ － 4.0	両面とも文様は確認できない。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	TP9 Ⅰ
第55図 図版46 85			－ － －	〃　〃　。	淡灰白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 〃　〃　。	不明
第55図 図版46 86		Ⅱ	－ － 4.0	〃　〃　。	淡黄灰白色。	内面のみ釉薬が確認できる。細かい貫入。白色の粗粒子。	4トレ Ⅱ
第55図 図版46 87			－ － 4.4	〃　〃　。	〃　〃　。	両面に施釉する。両面に細かい貫入。白色の粗粒子。	4トレ
第55図 図版46 88	皿		－ － －	〃　〃　。	淡灰白色。	畳付以外は総釉。両面に細かい貫入。淡灰白色の粗粒子。	B－13 表採
第55図 図版46 89			－ － －	内面の見込みに印刻による沈線を３本確認できる。	白色。	〃　〃　。　〃　〃　。 白色の細粒子。	5トレ Ⅰ
第55図 図版46 90	大皿		24.4 3.2 18.2	内面に鉄絵による文様(蜻蛉？)が確認できる。	失透気味。黄灰白色。	〃　〃　。淡灰白色の細粒子。	4トレ Ⅱ
第55図 図版46 91	壺		－ － －	両面とも文様は確認できない。	淡黄灰白色。内面失透気味。	両面に施釉。両面に細かい貫入。白色の粗粒子。	2トレ Ⅱ
第55図 図版46 92			－ － －	〃　〃　。	失透気味。淡黄灰白色。	〃　〃　。白色の粗粒子。	表採 南崖下
第55図 図版46 93	不明		－ － －	外面には鉄絵による千鳥印が見られる。	〃　〃　。 〃　〃　。	〃　〃　。両面に細かい貫入。白色の粗粒子。	C－9 Ⅰ
第55図 図版46 94	急須		6.6 － －	両面とも文様は確認できない。	鮫釉。暗茶褐色。	外面のみ施釉。灰黒色の細粒子。	7トレ Ⅰ
第55図 図版46 95			6.4 － －	〃　〃　。	鮫釉。濃緑灰色。	両面に施釉。灰色の細粒子。	E－15 P4
第56図 図版47 96	皿		－ － －	内面に上絵付けによる文様が表現されている。	淡灰白濁色。	〃　〃　。両面に細かい貫入。淡灰白色の細粒子。	4トレ Ⅱ

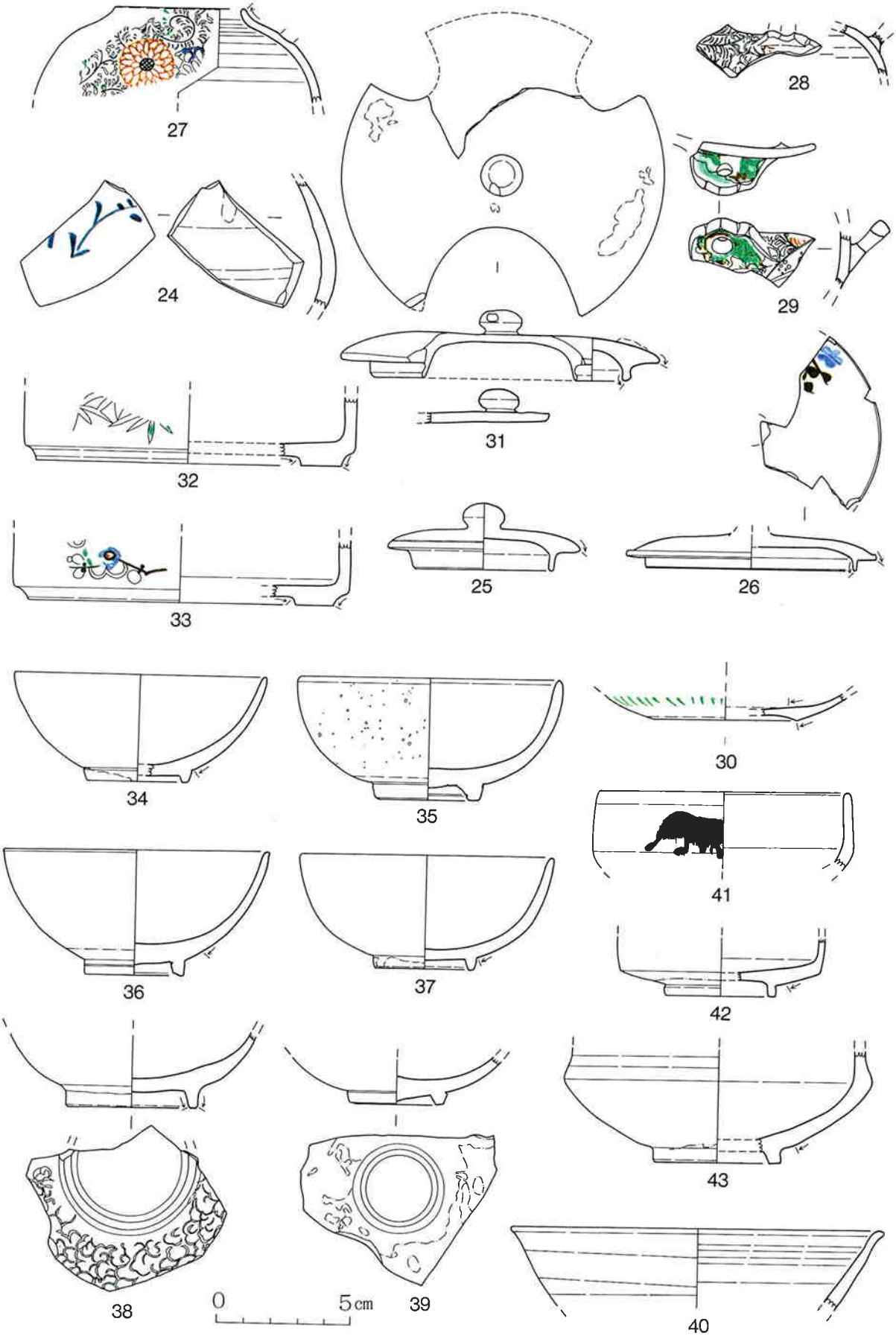
第20表ｅ　本土産染付観察一覧

凡例　トレ＝トレンチ　TP＝テストピット

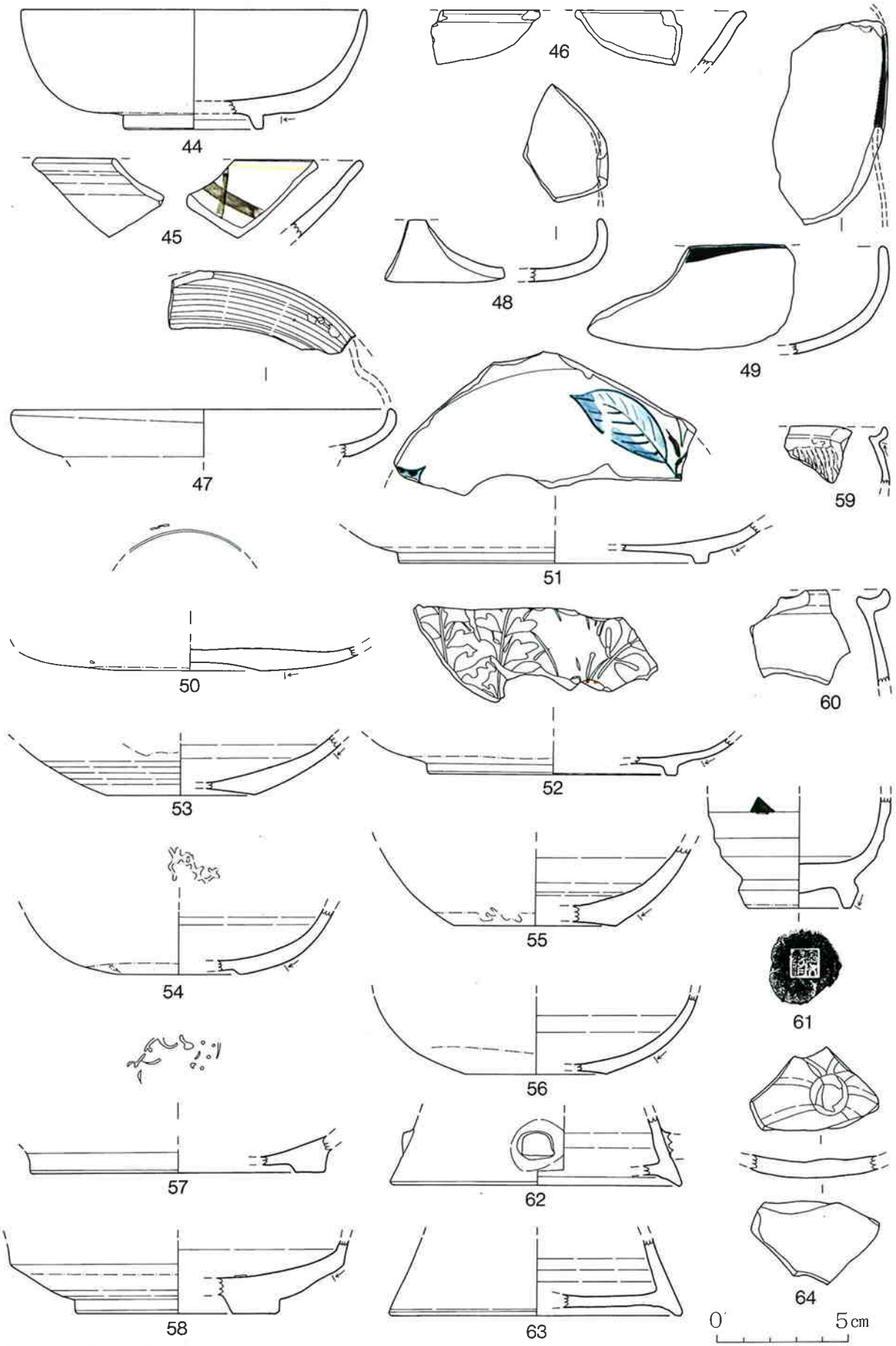
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文様構成	釉色	施釉・素地・貫入	出土地区 ・ 出土層
第56図 図版47 97	皿		－ － －	両面とも文様は確認できない。	灰白濁色。	両面に施釉。両面に細かい貫入。淡灰白色の粗粒子。	表採
第56図 図版47 98			－ － 8.1	〃　〃　。	〃　〃　。 錆釉。	畳付以外総釉。両面に細かい貫入。高台脇と外底面は錆釉。白色の粗粒子。	4トレ Ⅰ
第56図 図版47 99			－ － －	内面に鉄絵による文様が表されている。	〃　〃　。	畳付以外総釉。両面に細かい貫入。	C－9 Ⅰ
第56図 図版47 100			－ － －	内面には上絵付けによる文様が表されている。	〃　〃　。	〃　〃　。　〃　〃　。	4トレ Ⅱ
第56図 図版47 101	猪口		5.8 － －	両面とも文様は確認できない。	〃　〃　。	両面に施釉。両面に細かい貫入。淡灰白色の粗粒子。	4トレ 表採
第56図 図版47 102	急須		7.8 － －	〃　〃　。	淡黄白色。	蓋受け以外は総釉。両面に荒い貫入。淡黄白色の細粒子。	1トレ 表採
第56図 図版47 103	香炉		－ － －	外面に象嵌による文様が表されている。	灰濁色。	外面のみ施釉。桃褐色の粗粒子。	C－8 Ⅰ



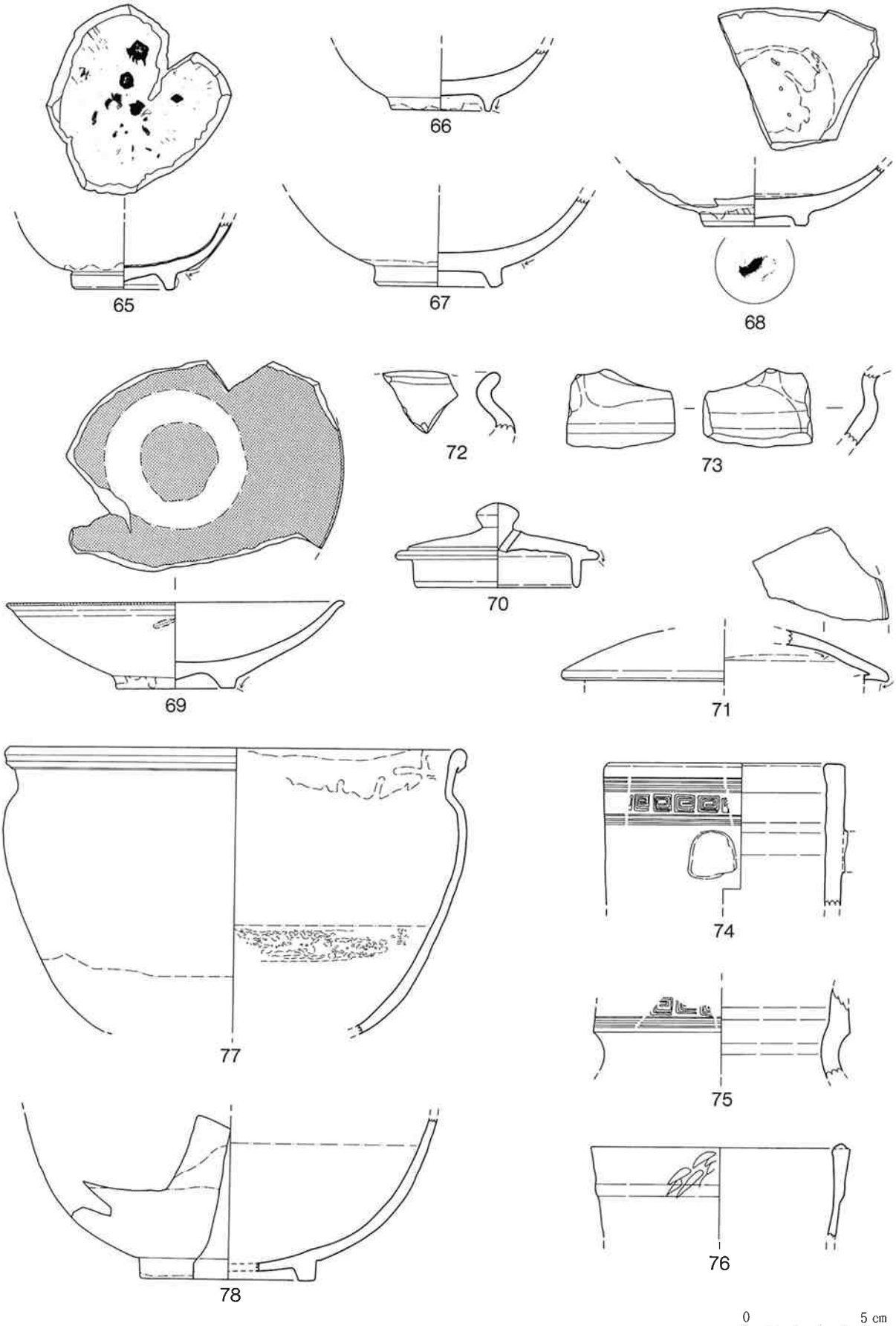
第51図　本土産陶器1　京・信楽　碗(1～10)、皿(11～23)



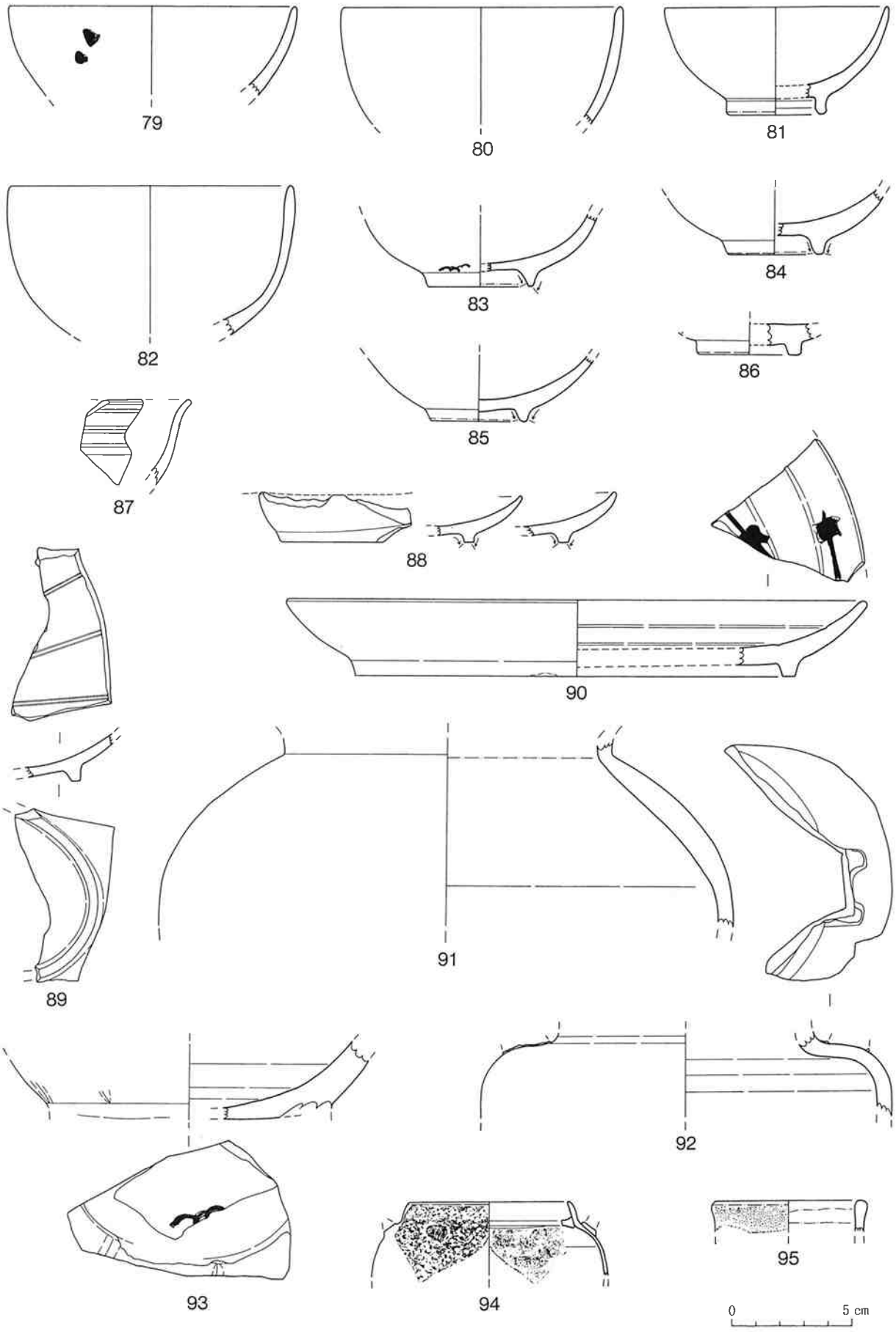
第52図　本土産陶器 2　京・信楽　瓶(24)、土瓶(25～30)、鉢(31～33)、**関西系**　碗(34～43)



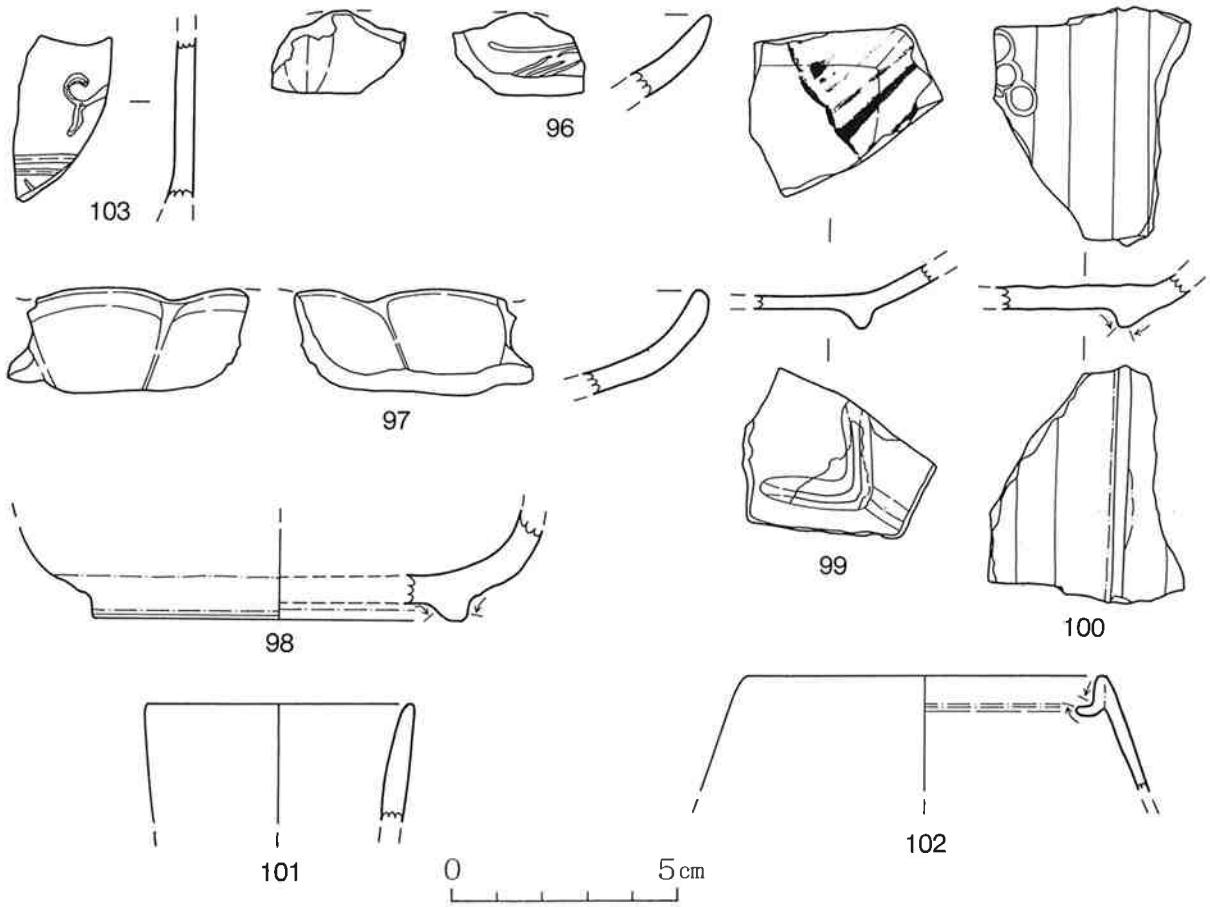
第53図　本土産陶器 3　関西系　皿(44～52)、土瓶(53～56)、鉢(57～58)、行平(59～60)、器種不明(61～64)



第54図　本土産陶器 4　肥前　碗(65～66)、皿(67～69)、蓋(70～71)、香炉(72～76)、水甕(77～78)



第55図　本土産陶器 5　薩摩　碗(79～87)、皿(88～89)、大皿(90)、壺(91～92)、器種不明(93)、急須(94～95)

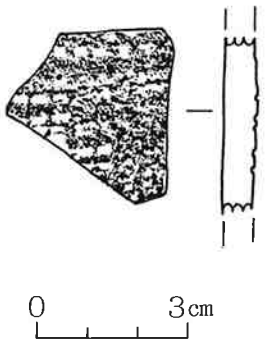


第56図　本土産陶器 6　志野　皿(96～100)、猪口(101)、急須(102)、**八代**　香炉(103)

第18節　南島須恵器

南島須恵器は第57図に示す１点が出土している。胴部の小破片で無文のため器形や器種などの詳細は不明であるが、灰色の器色や素地に含まれる白色の微砂粒、外面に格子状の当て具痕が確認されるなどの諸特徴から、南島須恵器の範疇で捉えられるものとして考えられる。Ｆ－13表採。

首里城内からは今回以外にも、歓会門地区（註１）や御庭跡及び奉神門跡（註２）などで南島須恵器の出土例があるが、いずれも造成層出土の破片資料のため、その性格については不明である。



第57図　南島須恵器

註

註１．當真嗣一・上原静・大城聖子　『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』　沖縄県教育委員会　1988年

註２．大城慧・上原静・長嶺均他　『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－』　沖縄県教育委員会　1998年

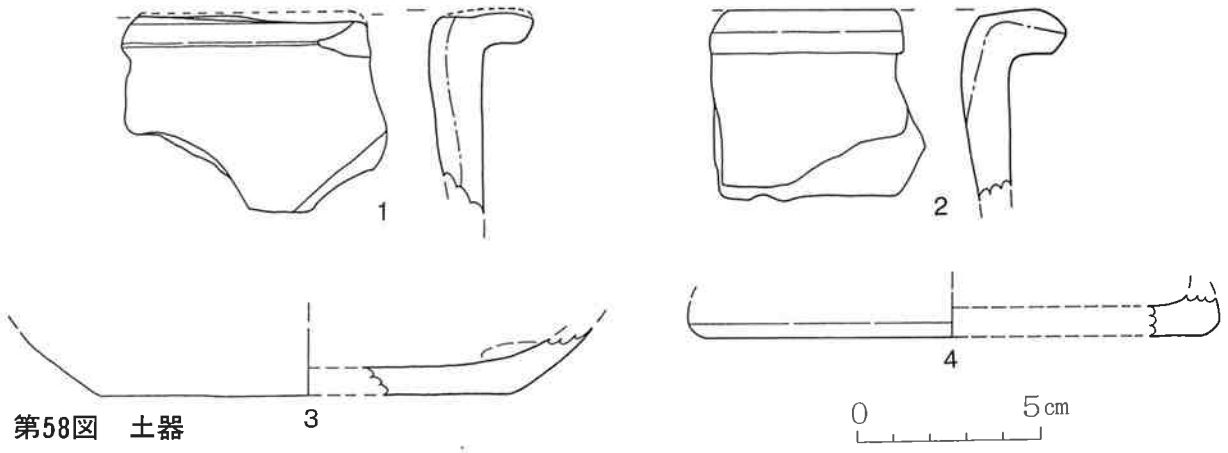
第19節　土　器

土器は第58図に示す４点を図示した。その内訳は口縁部２点、底部２点で、すべてグスク土器と呼ばれるものである。

１と２は鉢形土器の口縁部で、口縁端部を外側に折り曲げ鍔縁を呈する。１は外面頚部に微弱な稜を形成する。内面は刷毛目調整の後にナデ消しが施されるが徹底していない。器色は灰白色を呈し、胎土に雲母や白色粒を含む。焼成は良好で堅緻である。類例が喜屋武グスク（註１）で出土している。４トレンチⅠ層出土。２は外面頚部に稜はみられないものの、器面調整、色調、胎土、焼成などの特徴は１に共通する。ネット外表採。

３は鍋形土器の底部で、底径は推算11.0cmを測る。外底面は篦削りとナデ、内底面は指圧による調整が施される。色調は内面は褐灰色、外面は鈍橙色を呈し、胎土に雲母や赤色粒を含む。焼成は良好で堅緻である。南崖一帯表採。

４は底面からほぼ垂直に立ち上がる器形を呈するもので、底径は推算14.4cmを測る。外底面に篦削り、底部からの立ち上がり部分にはナデによる調整痕がみられる。器色は浅黄橙色を呈し、胎土に石灰質の白色粒を含む。焼成はやや悪く、触ると粉末が付着する。Ｂ－３表採。



第58図　土器

第21表　沖縄産土器出土状況一覧

凡例トレ＝トレンチ　ＴＰ＝テストピット

出土地	表採	5トレ	4・2トレ		12トレ	TP4			TP5	TP6	TP7	TP9	TP10	TP11	TP12	合計
		Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰa	Ⅰ	
口　縁	2		1	2												5
胴　部	32	2		3	1		1	1	1	1	3	1	1	1	3	51
底　部	6	1				1										8
合　計	40	3	1	5	1	1	1	1	1	1	3	1	1	1	3	64

註

註１．大城剛　『喜屋武グスク』　具志川市教育委員会　1988年

第20節　陶質土器

壷屋で「アカムヌー」「カマグヮーヤチ」と呼称される土器群である。鍋や火炉などの火まわりの道具を主体とするため、焼成不良で触ると粉末が付着するものが多い。一般に器色は橙色や鈍橙色を呈し、胎土は精選され轆轤引きにより薄手に仕上げられている。

今回、南側管理用道路地区からは鍋、鉢、火炉、竈、火入、香炉、小皿、急須、蓋、フライパン状製品などの器種が確認されているが、ここでは各器種の分類概念のみを記し、個々の特徴については観察表に呈示する。(第23表)

1．鍋（第59図１～５）

Ⅰ類　口縁部を「く」の字に屈曲させるもので、紐状の把手を口縁外面に貼付する。胴部は球形を呈し丸底の底部に至る。（１、２）

Ⅱ類　口縁部が鍔縁状を呈し内側に蓋受を設ける。胴部は底部から膨らみを持ちながらほぼ垂直に立ち上がる。（３）

2．鉢（第59図６～８、第62図23）

鉢は「ミジクブサー」と称される水鉢、小鉢、大鉢などがある。水鉢は口縁部が断面三角形状に肥厚するもの（６）と舌状のもの（７）とがあり、７は外面に圏線と櫛描きの波状沈線を施す。小鉢（８）は轆轤で成形された無文のもので、焼成は良好である。大鉢（24）は口径が30cmを超える無文の浅鉢で、口唇部を平坦に削る。

3．火炉（第59図９～14）

Ⅰ類　肩部あるいは胴上部で内側に屈曲するもので、直下に方形の把手を１対貼り付ける。底部は平底で高台を持たない。10はやや小振りの火炉で、口縁部外面を断面三角形状に肥厚する。11は口縁部に３ヶ所の火窓の存在が想定されるもので、肩部に圏線が１条巡る。

Ⅱ類　口縁部が直口し器形が円筒状を呈するもので、外面に白化粧土を用いて横線を数条巡らせ文様とする。（９）

Ⅲ類　内湾する口縁部から球形の胴部に至るもので、底部は高台を有する。口縁部外面に火窓を１ヶ所設け、内面には器物を乗せる突起を貼り付ける。胴部中位を除く外面全体に白化粧土を用いた横線を数条巡らす。(12～14)

4．竈（第60図15～19）

竈は様々なバリエーションが存在するため、特徴的な資料を紹介するにとどめる。15は口縁部が玉縁を呈し内面にはL字状の器物受けを持つもので、サイズ的に火炉の可能性もある。16は口縁部が内傾し口縁部直下に円形の孔を８～９個穿つ。17は口縁部が逆「ハ」の字状に開くもので、口唇部を断面三角形に肥厚する。18はほぼ円筒形を呈するもので、口縁部をＴ字状に成形し、外面に火窓を１ヶ所設ける。口縁部内面には方形の器物受けを３つ貼り付ける。19は口唇部内側を水平方向に張り出すもので、18と同じく外面に半円形の火窓を1ヶ所設ける。

5．火入（第60図20）

平底の底部からほぼ垂直に立ち上がる円筒状のもので、外面に圏線と櫛描きの波状沈線を施す。

6．香炉（第60図21・22）

円筒状の器形が想定される蓋形の香炉で、外面全体に透かし彫りを施す。本資料は加飾方法及び素地の特徴等から本土産の可能性が高いと思われる。(21、22)

7．急須（第61図24、25）

24は球状の胴部に短い注口を有する小振りの急須で、口縁部がわずかに外反する。25は円筒状を呈する把手で、同一個体ではないが同様の器種に備わるものと思われる。

8．小皿（第61図26～28）

平底の底部から内湾気味に立ち上がる薄手の小皿で、轆轤成形により丁寧に仕上げられている。灯明皿として使用されたものと思われる。

9．蓋（第61図29～35）

Ⅰ類　急須あるいは土瓶に対応するもので、滑り止めのないもの（29、30）とあるもの（31、32）とに分けられる。29は庇頂部から緩やかにに傾斜するもので、頂部に円筒形の撮を持つ。30は逆に庇頂部を緩やかに窪ませるもので、庇端部を下方に折り曲げる。31と32は庇頂部から緩やかに傾斜するもので、欠損し

ているが宝珠状の撮を有すると思われる。

Ⅱ類　撮を持たず庇上面を平坦に成形するもので、全体的に雑な仕上がりとなる。壷等に対応するものと考えられる。(33、34)

Ⅲ類　庇上部をドーム状に傾斜させるもので、端部を外側に張り出す。庇頂部には撮が欠落した跡が残る。壷等に対応するものと考えられる。(35)

10. フライパン状製品（第60図36～42）

Ⅰ類　平底の底部から内湾気味に垂直に立ち上がる浅鉢状の器形で、今回は未検出だが口縁部外面に板状の把手を１個有する。轆轤成形により丁寧に仕上げられており、焼成も良好である。(38、39)

Ⅱ類　基本的な器形はⅠ類と共通するが腰部に稜が見られ、口縁部も厚手に成形する。口縁部外面に板状の把手を１個持つが、把手は基部に花文と思われる刻文を施すもの（40）と無文のもの（41、42）がある。本資料も先の香炉Ⅰ類と同様に、本土産の可能性が高い資料である。

11. 器種不明（第60図43、44）

43は抉りの浅い高台から内湾気味に立ち上がるもので、器種の特定は困難だが袋物の底部と思われる。44は長方形の箱形を呈するもので、各々の面にそれぞれ正方形と円形の孔（窓か？）を設け、外面全体に木目を意識したと思われる縦方向の線彫りを施す。全体的な印象は木棺を彷彿とさせるが、全形及び用途等については不明である。

参考文献

・ 島弘・玉城安明・内間靖他『壷屋古窯群Ⅰ』那覇市教育委員会　1992年

・ 大城彗・島袋洋・金城亀信他『湧田古窯跡（Ⅰ）』沖縄県教育委員会　1993年

・『沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館　1998年

第22表　沖縄産陶質土器出土状況一覧

出土地＼分類		鍋				鉢		火炉														甕			火入	香炉			急須								鍋又は急須	小皿（灯明皿）				蓋			フライパン状製品									涼		瓶		器種不明						合計
		I類			II類			I類					II類			III類				類不明						I類	II類		a			b			注	底						I	II	III	I類				II類															
出土地		口	把手	底	口	口	胴	口~底	口	胴	把手	底	口	胴	底	口	胴	把手	底	口	把手	口	胴	底	口	口	口	胴	口	胴	把手	口	胴	把手	口		胴	口~底	口	胴	底	類	類	類	口~底	口	把手	底	口~底	口	胴	把手	底	口	胴	口	胴	口	胴	把手	注口	底	不明	
表採		29	6	3		8	1	1	7	2	1	1	6	15	1	33	35	5	28		10	11	1	2	2		2	1	11	10	5		6	1	3	10	58	3	21	3	11	11	17		3	1	1	5	2	3	11		4	1	2				187	2	1	1	1	606
9·8トレ	I																																									1																						1
3·6トレ	I	1		2					2					3		2	7		9			3								1			4			1	21		3			4									1	1		1							19						85
	II																		1																													1		1																3
7·1トレ	I	1							1					1		1	6		1												1						7		2			1	1									2	1							6						32
	I下部													1		1	1				1																4																							1						9
	II													1		2	4		4		1									1							3		1	1	2		2			1				1			1							7						32
5トレ	I	6	2	2		1	1		13		1		4	1		8	19	2	20		5	3			4	2	1	2	9	9	9	2	1	2	4	14	66	5	25	5	2	5	5		8	5		2	2	11	19	3	25		1			2	37	1			4	380
	II		1													2	1																	1			2															1								2	1				11
4·2トレ	I	9	1	1		2			5				1	3		8	17	2	9		1	5								1	2				3	3	17	2	5	2	3	3	5		1			4		1	1	1	1		1	1			42	1			1	165
	I b																	2	1			1														2	3														1		1						1						12
	I黒土	2							1																												1				1										1								2				1		9
	II	3		1	1				1				1	6		7	11	1	8		5	4		1	2				5	1				2	1		15	1	4	1	5	2	9					1		1	5	1	1				1		39	1			1	1	150
	黒土																																				1																												1
11トレ	I	2	1			1			1			1				2	2		5		3									1	1		1	1	1	1	7	2	1		1	4	2							2			1						8			1	1	54
	II	1	1											1																		1					3												1	1	1		2						7						19
	P7	4		1		1								1		1	2		3		1															1	12				3							3												5						38
	P8	2		1		1								1		2	1		1			2								2						2	2	1																					2						20
	P9																					1																	1																										2
	P10																																																										1						1
12トレ	I	5		1												2						1								1			2			1	7		2		1	2																	11						36
	P4	1																																			1																						6						8
TP2	I	1																	1														1			1																													4
TP3	I黒土	2											1			1				1									2	2		1				1	1					1												2		1				9						25
	II								1							1			3																1		3		2	1		2	1					1											8						24
TP4	I													1																											1																								2
	II	3	2	1		5			1					1	1	3	7		8		2	1											2	1	1		11		1			4	2					1				1								32						91
TP5	I																																																									1						1
	II								2													1															3		1																					4						11
TP6	I													1		4			1			1							1					1							1		1									1								3						15
	II	1							1										1																																									7						10
	III													1																							2		2																											5
	IV	1							1							1	1		1																		3		3			2									1								13						27
TP7	II	3	1						1							2	1		1		1									1			1				3					1				1													11						28
TP8	I														1		1	1			1													1			1																						11						13
	II																																		1				1																										2
TP9	I					1						1		1		2			1																													1											5						12
TP10	I	1															2		4		2																1					1	1																10						22
	I b															1																																																1
	II																1																																															1
TP11	I a	1		1												2	5		8		1										2		1		1	2	6		1							1					2	3		2						11						50
	I b	1							1			1				1	1	1	1													1					3	1	1				1	1	1					1	9		3						3						32
TP12	I		1	1												3			2										6	1			1				1					1	1					1												7						26
	P4																																																									3						3
合計		80	16	15	1	20	2	1	39	2	2	4	13	39	3	93	124	14	122	1	34	34	1	3	8	2	3	3	34	31	20	5	20	10	16	39	268	15	77	13	31	45	48	1	13	9	1	20	5	25	58	6	44	1	5	1	1	2	517	6	1	4	8	2079

第23表ａ　陶質土器観察一覧

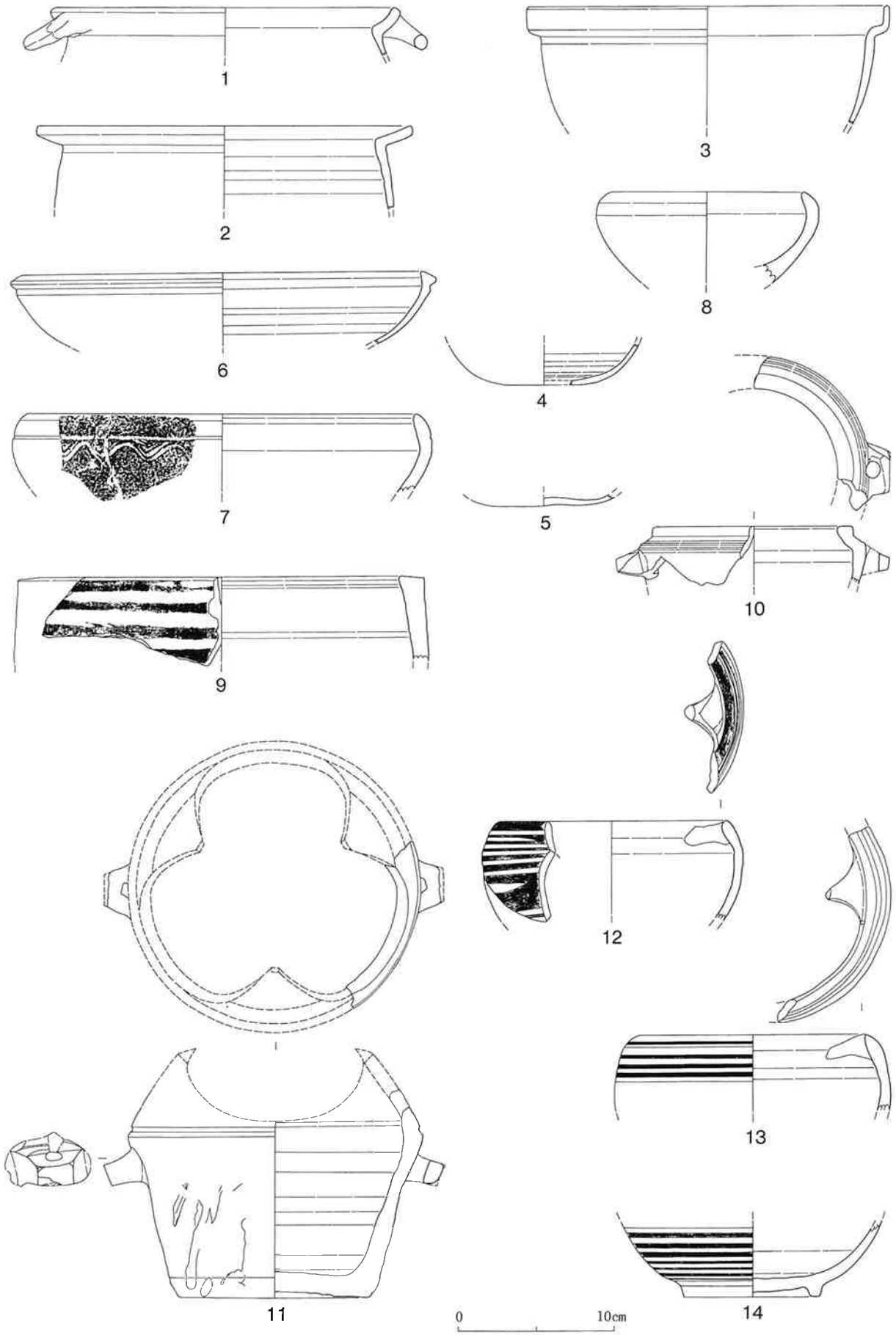
図	番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	素　地	器　色	備　　考	出土地点
第58図（図版48）	1	鍋Ⅰ類	口	20.6 － －	外・鈍黄橙色 中・灰黄褐色 微粒子	鈍黄橙色	素地に雲母、赤色粒が混入。外面口縁部に紐状の把手を貼付。内面に轆轤成形跡が残る。	Ｔ．Ｐ．７ Ⅱ層
	2	鍋Ⅰ類	口	24.2 － －	鈍橙色 微粒子	鈍黄橙色	素地に雲母が混入。両面に轆轤成形跡が残る。	４トレンチ Ⅰ層
	3	鍋Ⅱ類	口～胴	23.6 － －	橙色 微粒子	橙色	素地に白色粒、雲母、赤色粒が混入。内面は轆轤成形跡をナデ消している。	Ｃ－11 Ⅱ層
	4	鍋	底	－ － 5.2	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母が混入。外底面に煤跡が付着。外面に轆轤成形跡が残る。	Ｂ－９ Ⅰ層
	5	鍋	底	－ － 5.2	鈍橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、赤色粒が混入。外底面に煤跡が付着。内底面に轆轤成形跡が残る。	Ｃ－９ Ⅰ層
	6	鉢	口～胴	27.3 － －	外・橙色 中・灰黄色 細粒子	橙色	素地に雲母が混入。外面頸部に削りを入れ稜を形成。両面に轆轤成形跡が残るが、外面はナデ消される。	Ｂ－９ Ⅰ層
	7	鉢	口	25.2 － －	橙色 微粒子	橙色	素地に白色粒、雲母が混入。外面に丸彫りの圏線、４本単位の波状沈線を巡らす。	Ｔ．Ｐ．２ Ⅱ層
	8	鉢	口	12.6 － －	明赤褐色 微粒子	明赤褐色	素地に白色粒、黒色粒が混入。両面に轆轤成形跡が残る。焼成良好。	ネット外 表採
	9	火炉Ⅱ類	口	26.2 － －	鈍橙色 微粒子	外・橙色 内・鈍橙色	素地に雲母、白色粒が混入。外面に白土による横線を数条施文。内面に一部白色の石灰質が付着。	Ｂ－８ Ⅰ層
	10	火炉Ⅰ類	口	12.8 － －	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、赤色粒が混入。外面肩部に丸彫りの圏線を２条、方形の把手を貼付、中央に孔を穿つ。	２トレンチ 表採
	11	火炉Ⅰ類	口～底	(10.1) 15.1 12.2	鈍橙色 細粒子	外・橙色 内・鈍橙色	素地に雲母が混入。口縁は山形に成形し、肩部に丸彫りの圏線、中央に穿孔した方形の把手を貼付。	Ｂ－11 表採
	12	火炉Ⅲ類	口～胴	14.6 － －	外・橙色 中・褐灰色 微粒子	橙色	素地に白色粒、雲母が混入。外面に白土の横線を施すが剝落。内面口縁部に三角形の器物受を貼付。	Ｂ－８ Ⅰ層
	13	火炉Ⅲ類	口	14.6 － －	鈍橙色 微粒子	外・鈍橙色 内・橙色	素地に白色粒が混入。外面に白土の横線を施すがほぼ剝落。内面口縁部に三角形の器物受を貼付。	２トレンチ Ⅱ層
	14	火炉Ⅲ類	底	－ － 8.6	橙色 微粒子	橙色	素地に白色粒、雲母が混入。外面に白土の横線を施すが剝落。内面に轆轤成形跡が残る。	Ｃ－８ Ⅰ層
第59図（図版49）	15	竈	口	15.0 － －	橙色 微粒子	外・橙色 内・灰褐色	素地に白色粒が混入。口縁部直下に陰圏線を１条巡らす。両面に赤色顔料を塗布するが大半が剝落。	表採
	16	竈	口	13.6 － －	灰黄褐色 微粒子	鈍橙色	素地に白色粒が混入。外面口縁部に直径約1.3cmの孔を８～９個穿つ。内面に轆轤成形跡が残る。	５トレンチ Ⅰ層
	17	竈	口	24.2 － －	鈍橙色 微粒子	外・鈍橙色 内・橙色	素地に雲母、白色粒が混入。内面に煤跡が付着。	Ｂ－５ Ⅰ層
	18	竈	口	22.0 － －	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒が混入。内面口縁部に方形の器物受を貼付する。全面に灰白色の石灰質が付着。	Ｅ－13 Ｐ．９
	19	竈	口	37.0 － －	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒が混入。外面口縁部に半円形の火窓を１ヶ所設ける。両面に轆轤成形跡が残る。	Ｃ－８ Ⅰ層
	20	火入	胴～底	－ － 9.9	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒が混入。外面に丸彫りの圏線を２条、その間に８本単位の波状沈線を巡らす。	４トレンチ Ⅱ層
	21	香炉Ⅰ類	胴～底	－ － 15.4	灰白色 微粒子	灰白色	外面に線彫りの格子文を施した後、１つ置きに格子を刳り貫く。素地は精選され混入物を含まない。	Ｂ－８ Ⅰ層
	22	香炉Ⅰ類	胴～底	－ － 15.8	灰白色 微粒子	灰白色	外面に線彫りの格子文を施した後、１つ置きに格子を刳り貫く。素地は精選され混入物を含まない。	Ｃ－８ Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

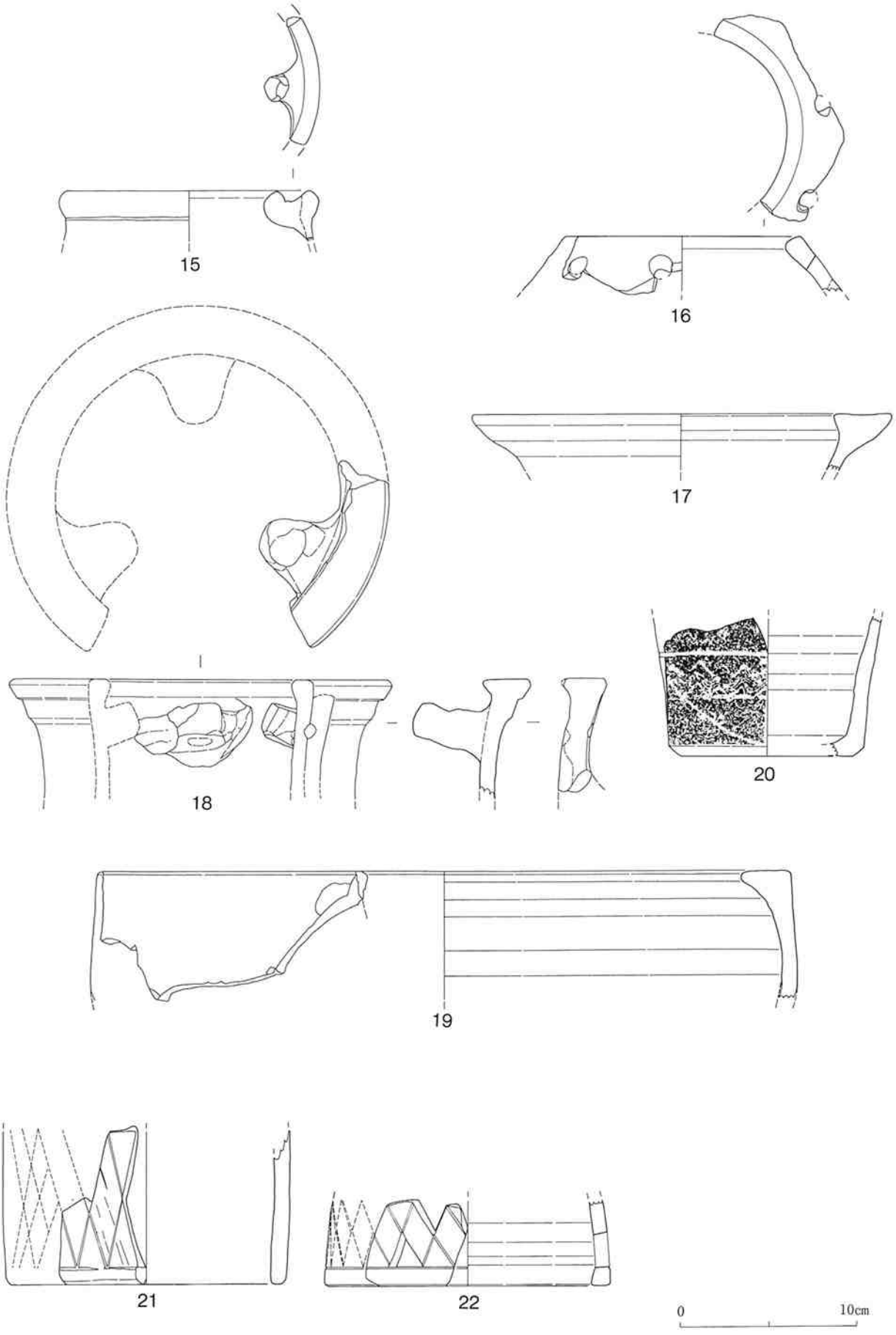
第23表ｂ　陶質土器観察一覧

図	番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	素　地	器　色	備　　考	出土地点
第60図（図版50）	24	鉢	口	34.7 － －	鈍橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、赤色粒が混入。両面に轆轤成形跡が残る。	D－11 Ⅰ層
	25	急須	口～胴	11.5 － －	橙色 微粒子	外・橙色 内・鈍褐色	外面肩部に丈の短い注口を貼付。焼成良好。	C－8 Ⅰ層
	26	急須	把手	－ － －	橙色 微粒子	橙色	外面に赤色顔料を塗布するが剝落が著しい。内面に轆轤成形跡が残る。	C－8 Ⅰ層
	27	小皿	口～底	8.8 1.3 4.0	橙色 微粒子	橙色	素地に白色粒、赤色粒が混入。両面に轆轤成形跡が残る。内底中央に指頭の跡が残る。	T．P．11 Ⅰb
	28	小皿	口～胴	8.6 － －	橙色 微粒子	橙色	素地に白色粒、赤色粒が混入。両面に轆轤跡が残るが内面はナデ消される。	B－9 Ⅰ層
	29	小皿	口～胴	8.6 － －	外・橙色 中・灰色 微粒子	橙色	素地に白色粒、赤色粒が混入。両面に轆轤跡が残るが内面はナデ消される。口縁部に一部煤跡が付着。	C－11 Ⅰ層
	30	蓋Ⅰ類	撮～庇	－ － －	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母が混入。庇中央に円柱状の撮を持つ。両面に轆轤成形跡が残る。滑り止めの有無は不明。	4トレンチ Ⅰ層
	31	蓋Ⅰ類	庇～底	8.6 (1.0) 8.4	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒が混入。庇上部を平坦に成形し、中央へ向け穏やかに凹ませる。	T．P．4 Ⅱ層
	32	蓋Ⅰ類	庇～底	－ － 9.2	鈍橙色 微粒子	鈍橙色	素地に雲母、白色粒が混入。両面に轆轤成形跡が残るが庇上部はナデ消される。	1トレンチ Ⅰ層
	33	蓋Ⅰ類	庇～底	－ － 9.6	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒、赤色粒が混入。両面に轆轤成形跡が残るが、庇上部はナデ消される。	F－13 表採
	34	蓋Ⅱ類	庇～底	14.9 6.0 8.5	橙色 微粒子	橙色	素地に白色粒、赤色粒が混入。庇上面の成形は雑。滑り止め外面の轆轤成形跡はナデ消される。	4トレンチ Ⅱ層
	35	蓋Ⅱ類	庇～底	14.5 3.6 7.6	橙色 細粒子	橙色	素地は雲母、白色粒が混入。庇上面の成形は雑。滑り止め両面に轆轤成形跡が残る。焼成良好。	T．P．10 Ⅰ層
	36	蓋Ⅲ類	庇～底	16.6 － 14.0	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒、赤色粒が混入。撮の形態は不明。両面に轆轤成形跡が残る。	T．P．11 Ⅰb
	37	フライパン状製品 Ⅱ類	口～底	19.6 4.2 16.6	灰白色 微粒子	灰白色	素地に白色粒が混入。外面に煤跡？が付着。両面に轆轤成形跡が残る。焼成良好。	B－8 表採
	38	フライパン状製品 Ⅱ類	口～胴	20.0 － －	外・鈍橙色 中・灰黄褐色 微粒子	鈍橙色	素地に雲母、白色粒、赤色粒が混入。両面に轆轤成形跡が残るが内面はナデ消される。焼成良好。	B－9 Ⅰ層
	39	フライパン状製品 Ⅰ類	口～底	22.0 (3.8) 3.8	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒が混入。外面に赤色顔料？が塗布。両面に轆轤成形跡が残る。	T．P．11 Ⅰb
	40	フライパン状製品 Ⅰ類	口～底	20.8 (4.0) 4.0	鈍黄橙色 微粒子	鈍黄橙色	素地に白色粒が混入。内面に陽圏線を1条施す。外面に轆轤成形跡が残る。	C－9 Ⅰ層
	41	フライパン状製品 Ⅱ類	口･把手	23.4 － －	外・浅黄褐色 中・黄灰色 微粒子	浅黄褐色	素地に雲母が混入。基部上面に印刻による刻花文？を施文。全体に器面調整は丁寧だが下面は雑。	B－8 Ⅰ層
	42	フライパン状製品 Ⅱ類	把手	－ － －	外・浅黄褐色 中・黄灰色 微粒子	浅黄褐色	素地に雲母、白色粒が混入。全体に丁寧な器面調整が施されるが下面は雑。	4トレンチ Ⅱ層
	43	フライパン状製品 Ⅱ類	把手	－ － －	鈍黄橙色 微粒子	鈍黄橙色	素地に白色粒、赤色粒が混入。器面調整は雑で全体に指頭跡が残る。	B－8 Ⅰ層
	44	器種不明	底	－ － 12.5	橙色 微粒子	外・橙色 内・鈍橙色	素地に白色粒、赤色粒が混入。底部は平底の高台を持つ袋物の底部。両面に轆轤成形跡が残る。	フェンス･ネット間 表採
	45	器種不明	－	－ － －	橙色 微粒子	橙色	素地に雲母、白色粒が混入。外面全体に線彫りの縦線を施し、円形の孔と方形の孔を1個ずつ穿つ。	B－8 Ⅰ層

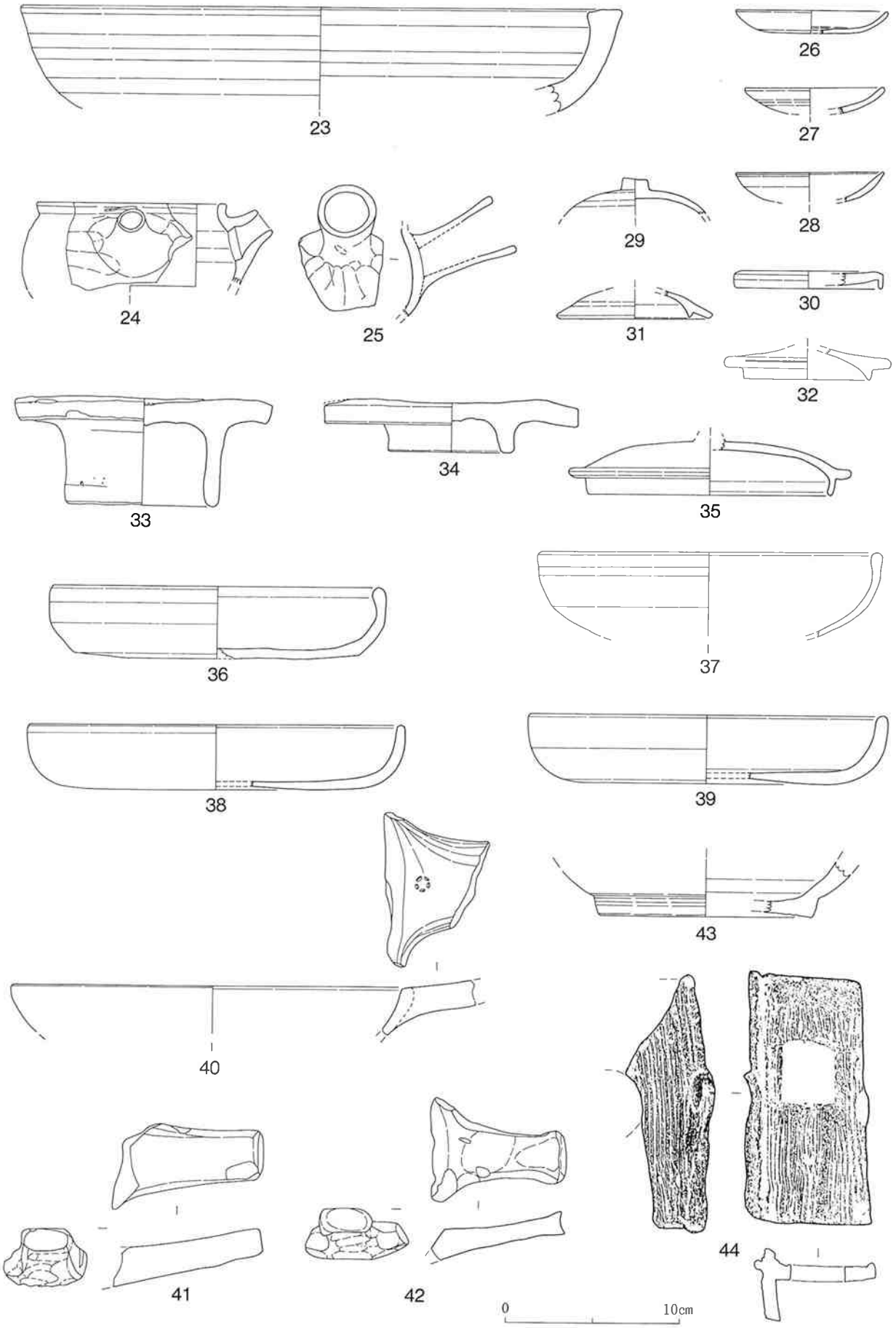
※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。



第59図　陶質土器１　鍋（１～５）、鉢（６～８）、火炉（９～14）



第60図　陶質土器 2　竈（15～19）、火入（20）、香炉（21.22）



第61図　陶質土器３　鉢（23）、急須（24.25）、小皿（26～28）、蓋（29～35）、フライパン状製品（36～42）、器種不明（43.44）

第21節　沖縄産施釉陶器

器の表面に釉薬を施釉するもので、方言で「上焼（ジョウヤチ）」とも称される。碗や皿などの食器類を中心に、灯明具や祭器まで様々な器種が生産されている。釉薬は灰釉・鉄釉・飴釉・黒釉・透明釉などが基本で、それぞれを器に単掛けあるいは内外面で掛け分けている。また呉須などの顔料を用いて文様が施されるものも多い。

本遺跡出土の沖縄産施釉陶器には碗・小碗・猪口・皿・小皿・小鉢・大鉢・鍋・壷・瓶・急須・酒器・火取・灯明具・花生などの器種が確認されている。ここでは各器種毎の分類概念を記し、個々の特徴については観察表に呈示する（第24表）。

1．碗（第62図）

Ⅰ類　高台から斜上方に立ち上がり、直口口縁を呈するもの。（第62図１～６）

Ⅰ類－ａ　灰釉単掛けでフィガキー（高台を持ち器を逆さに釉薬に浸す施釉方法）を施す。内外面ともに無文。（１～３）

〃　－ｂ　灰釉単掛けでフィガキーを施す。外面に鉄絵による文様を施す。（４～６）

Ⅱ類　腰部にやや丸みを持ちながら斜上方に立ち上がり、口縁部が外反するもの。（第62図９～25）

Ⅱ類－ａ　鉄釉単掛けでフィガキーを施す。内面胴部及び内底に鉄絵による文様を施す。（９～11）

〃　－ｂ　鉄釉と灰釉の掛け分けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内面胴部及び内底に鉄絵による文様を施す。（12～15）

〃　－ｃ　白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内外面ともに無文。（７、８）

〃　－ｄ　白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。外面または両面に呉須や飴釉による文様や、赤絵を用いた上絵付の文様が施される。（16～24）

〃　－ｅ　褐色の化粧土を塗布した上に透明釉を施釉するもので、蛇の目状に釉剝ぎされた内底の露胎部には白化粧土を施し、外面には水に溶かした白化粧土による文様を施す。いわゆる「イッチン」の碗。（25）

Ⅲ類　口縁部を外側に折り曲げ、端部を波状に成形するもの。緑釉と白釉（白化粧＋透明釉）の掛け分けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。（第62図26）

2．小碗（第63図27～60）

Ⅰ類　腰部にやや丸みを持ちながら斜上方に立ち上がり、口縁部が外反するもの。（第63図27～38）

Ⅰ類－ａ　灰釉単掛けでフィガキーあるいは内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内外面ともに無文。

〃　－ｂ　鉄釉と灰釉の掛け分けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内外面ともに無文。（31～34）

〃　－ｃ　鉄釉と白釉（白化粧＋透明釉）の掛け分けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。無文。（30）

〃　－ｄ　白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。外面及び内面に鉄釉や灰釉による文様を施すものと無文のものがある。（27～29、35～38）

Ⅱ類　基本的な器形はⅠ類に似るが、外面に六角形の面取りが囲繞するもの。（第63図39～42）

Ⅱ類－ａ　外面胴部に六角形の面取りを施す。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内外面ともに無文。（39、40）

〃　－ｂ　外面胴部と腰部にそれぞれ六角形の面取りを施す。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内外面ともに無文。（41、42）

Ⅲ類　丸みを持つ腰部から内彎気味に立ち上がる器形で、一般に丸碗と呼称されているもの。（第63図43～54）

Ⅲ類－ａ　灰釉単掛けでフィガキーあるいは外面腰部以下のみ露胎となる。内外面ともに無文。（43～45）

〃　－ｂ　藁灰釉単掛けで外面腰部以下のみ露胎となる。内外面ともに無文。（46、47）

〃　－ｃ　白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで、外面に呉須による文様を施すものと無文のものがある。（48、49）

〃　－ｄ　透明釉単掛けで畳付のみ露胎となる。外面に白土または黒土による象嵌を施す。（50～52）

〃　－ｅ　透明釉単掛けで畳付のみ露胎となる。素地は堅緻で磁器のような仕上がりを呈する。内外面ともに無文。（53、54）

Ⅳ類　腰部からほぼ垂直に立ち上がる筒形のもの。（第63図55～60）

Ⅳ類－ａ　腰部に明確な稜を有するもの。灰釉単掛けで外面腰部以下のみ露胎を呈する。内外面ともに無文。（55～57）

〃　－ｂ　腰部に丸みを持たせるもの。灰釉単掛けで内外面ともに無文。（58）

〃 －c　bとほぼ同様の器形を呈する。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで畳付のみ露胎となる。外面に呉須や飴釉による文様を施す。(59、60)

3．小杯（第63図61）

やや丸みを持つ腰部から立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。灰釉単掛けで畳付のみ露胎となる。内外面ともに無文。

4．皿（第64図62～69）

Ⅰ類　口縁部を外反させるもの。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内面に呉須による文様を施すものと無文のものがある。(62、63)

Ⅱ類　内湾気味に立ち上がる直口口縁の皿で、口唇部を波状に形成する。灰釉または白釉（白化粧＋透明釉）の単掛けで内底に蛇の目釉剝ぎを施す。内外面ともに無文。(64、65)

Ⅲ類　器形はⅡ類に似るが口唇部が平坦で、Ⅱ類に比して器厚も薄く大振りになる。灰釉または透明釉の単掛けで畳付のみ露胎となる。外面に呉須で文様を施すものと無文のものがある。(66～69)

5．小皿（第64図70～73）

Ⅰ類　皿Ⅱ類や皿Ⅲ類に近似する直口口縁の器形を呈する。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで畳付のみ露胎となる。内面に呉須による文様を施すものと無文のものがある。(70、71)

Ⅱ類　全体の器形は不明だが、やや内湾気味の直口口縁を呈し、口唇部を輪花状に成形する。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで文様の有無は不明。(72、73)

6．小鉢（第64図74～76）

Ⅰ類　口縁部が朝顔状に開く器形で、口縁端部を内側に折り曲げる。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで、内面に呉須や飴釉による文様を施す。(74、75)

Ⅱ類　口縁部が内傾する内湾器形を呈する。鉄釉と白釉（白化粧＋透明釉）の掛け分けで外面腰部以下を露胎にする。内外面ともに無文。(76)

7．大鉢（第64図77～83）

Ⅰ類　腰部から斜上方に立ち上がり、口縁部をわずかに肥厚させる。灰釉単掛けでフィガキーを施し、外面に鉄絵による文様を施すものと無文のものがある。(77～79)

Ⅱ類　Ⅰ類同様腰部から斜上方に立ち上がるが、口縁端部を外側に折り曲げるもの。(第64図80～83)

Ⅱ類－a　鉄釉単掛けでフィガキーを施す。内面に白土と鉄釉による文様を施す。(83)

〃 －b　鉄釉と灰釉の掛け分けで内底は蛇の目釉剝ぎを施す。内面胴部及び内底に花文を施す。(80)

〃 －c　鉄釉と白釉（白化粧＋透明釉）の掛け分けで内底は蛇の目釉剝ぎを施す。内外面ともに無文。(81)

〃 －d　白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内底は蛇の目釉剝ぎを施す。(82)

8．鍋（第65図84～91）

Ⅰ類　丸底の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部を外側に折り曲げるもの。(第65図84、85)

Ⅰ類－a　鉄釉単掛けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。(84、85)

〃 －b　鉄釉と灰釉の掛け分けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。

〃 －c　鉄釉と白釉（白化粧＋透明釉）の掛け分けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。

Ⅱ類　平底の底部からほぼ垂直に立ち上がるもので、口縁部は内側を窪ませ蓋受部を設ける。(第65図86、87)

Ⅱ類－a　鉄釉単掛けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。(86)

〃 －b　鉄釉と灰釉の掛け分けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。(87)

〃 －c　鉄釉と白釉（白化粧＋透明釉）の掛け分けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。

※鍋の蓋・把手（89～91）

89と90は皿肩の器を伏せた形を呈する鍋の蓋で、鉄釉と灰釉の掛け分けで内外面とも無文である。91は端部を膨らませる筒状の把手で、鉄釉と灰釉が掛け分けられている。

9．壺（第65図92～99）

Ⅰ類　方言で「アンダガーミ」と呼称される広口の四耳壺で、底部に高台を有する。鉄釉単掛けで畳付のみ露胎となる。内外面ともに無文。(92、93)

Ⅱ類　球形の胴部から頚部を垂直に立ち上げるものである。緑釉あるいは黒釉を単掛けで施す。(94～99)

10．瓶（第65図100～104）

100～102は口縁部がラッパ状に開く小形の瓶で、底部に高台を削り出す。黒釉単掛けで内外面ともに無文であ

る。103は最大径を底部付近に持つ茄子形の瓶で、灰釉単掛けで内外面ともに無文となる。104は楕円形の胴部を持つ長頸の瓶で、黒釉を施すが焼成不良のため部分的に釉が剝落する。

11. 急須（第66図105～118）

Ⅰ類　「く」の字状に折れる口縁部を持つもので、肩部に筒状の把手を貼り付ける。鉄釉または飴釉の単掛けで内外面ともに無文。(105)

Ⅱ類　Ⅰ類と同じく器形は球形だが最大径を胴部下位に持ち、肩部に把手を掛ける板状の耳を1対貼り付ける。底部には円錐状の突起を3個貼り付ける。(第66図106～118)

Ⅱ類－a　灰釉単掛けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。(106)

〃　－b　黒釉単掛けで外面腰部以下は露胎となる。内外面ともに無文。(107)

〃　－c　白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで外面腰部以下は露胎となる。外面に呉須や飴釉による文様を施すものと無文のものがある。(108～110)

〃　－d　透明釉単掛けで外面に白土による象嵌を施す。(111、112)

※急須の蓋（115～118）

115はⅠ類に対応すると思われる蓋で、庇上面を平坦に成形し頂部に宝珠状の摘を有する。116～118はⅡ類に対応するもので、宝珠状の摘のある庇頂部から緩やかに傾斜して端部に至り、庇裏面には滑り止めを持つ。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで、庇上面に呉須などによる文様を施すものと無文のものがある。

12. 大形急須（第66図119、120）

Ⅰ類　胴部中位に稜を持つ大形の急須で、いわゆる「湯庫（タークー）」の範疇に収まるものと考えられる。飴釉単掛けで内外面ともに無文。(119)

Ⅱ類　陶製の把手と高台を持つ大形の急須で、方言で「按瓶（アンビン）」と呼称されるものである。黒釉単掛けで内外面ともに無文。(120)

13. 酒器（第66図121、122）

Ⅰ類　横長の球形を呈するもので、口縁部は外反がきつく端部を摘み上げる。藁灰釉単掛けで内外面ともに無文。(121)

Ⅱ類　胴部中位で内側に屈曲し算玉状を呈する。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで外面に呉須や飴釉による文様を施す。(122)

14. 小壺（第66図123～125）

123は灰釉単掛けで外面に鉄釉を流し掛ける小形の壺で、その形態から水滴と考えられる。124は油壺と呼ばれる小壺で、黒釉単掛けで内外面ともに無文である。125も同じく油壺と思われる長頸の小壺で、黒釉単掛けで内外面ともに無文である。

15. 火取（第67図126～134）

Ⅰ類－a　底部からやや内湾気味にに立ち上がり口縁部が内傾するもので、灰釉単掛けで内外面ともに無文。(126)

〃　－b　全体的に内湾器形を呈するもので、鉄釉と灰釉を器の上下で掛け分け、露胎部に飛鉋による文様を施す。(127、128)

Ⅱ類　腰部で稜を持ち垂直に立ち上がるもので、灰釉または鉄釉単掛けで外面に文様（線彫り文様、白土象嵌等）を施すものと無文のものがある。(129～133)

Ⅲ類　器形はⅠ類－bに似るが胴部中位を緩やかに引き締める。鉄釉単掛けで内外面ともに無文。(134)

16. 灯明具（第67図136～139）

Ⅰ類　底部から内湾気味に斜上方に立ち上がる器形を呈する。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで内外面ともに無文。(136)

Ⅱ類－a　内底中央に円筒状の灯心受を持つ脚付の小杯である。黒釉単掛けで無文。(137)

〃　－b　いわゆる燭台で、外底中央に孔を穿った脚部に円筒状を呈する中空の胴部を貼り付ける。胴部上位の器形は不明。黒釉単掛けで内外面ともに無文。(138、139)

17. 蓋（第67図140～142）

140は庇が緩やかに傾斜する蓋で、鉄釉単掛けで内外面ともに無文である。141は壺等の蓋と思われるもので、黒釉を施釉した後に庇上面の釉を蛇の目に剝ぎ取っている。142は大形の壺に対応するもので、灰釉単掛けで庇上面に白土による象嵌を施す。

18. 花生（第67図145、146）

Ⅰ類　全形は不明だが底部と胴部を釉薬で接着させている。黒釉単掛けで外底のみ露胎となる。内外面ともに無文。(145)

Ⅱ類　竹筒を意識して成形された花生である。白釉（白化粧＋透明釉）単掛けで外底のみ露胎となる。内外面ともに無文。(146)

19. 器種不明（第67図135、143、144）

135は小形の袋物と思われるもので、黒釉を全面に施釉している。143と144はともに器の高台に似た形を呈するもので、鉄釉単掛けで内外面ともに無文である。蓋の可能性もあるが詳細は不明である。

参考文献

1．島弘・玉城安明・内間靖他『壺屋古窯群Ⅰ』那覇市教育委員会　1992
2．大城彗・島袋洋・金城亀信他『湧田古窯跡（Ⅰ）』沖縄県教育委員会　1993
3．島袋洋・金城透・仲座久宜他『湧田古窯跡（Ⅳ）』沖縄県教育委員会　1999
4．『沖縄のやきものー南海からの香りー』佐賀県立九州陶磁文化館　1998
5．『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000

第24表ａ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第62図（図版51）	1	碗	Ⅰ類－ａ	口～底	13.2 7.0 6.4	暗黄緑灰色 内面胴部から外面胴部まで施釉	灰白色の微粒子。内底及び畳付に一部砂粒の溶着がみられる。	Ｂ－８ Ⅰ層
	2	碗	Ⅰ類－ａ	口～底	13.4 6.1 6.3	淡黄色 内面胴部から外面胴部まで施釉	浅黄色の微粒子。内底に一部白土の溶着、畳付に一部砂粒の溶着がみられる。	Ｃ－11 Ⅰ層
	3	碗	Ⅰ類－ａ	口～底	14.3 6.4 6.6	淡黄色 内面胴部から外面胴部まで施釉	淡黄色の細粒子。内底中央に灰釉が円形に塗布される。（蛇の目を意識したものか？）	Ｂ－９ Ⅰ層
	4	碗	Ⅰ類－ｂ	口～底	14.6 6.1 8.6	灰白色 内面胴部から外面胴部まで施釉	高台付近は鈍黄橙色、他は灰白色の細粒子。外面に鉄絵に鉄絵による抽象化された草花文、内底に丸文？を施す。	フェンス・ネット間 表採
	5	碗	Ⅰ類－ｂ	口～底	13.2 5.6 6.8	灰白色 内面胴部から外面胴部まで施釉	灰白色の微粒子。外面に鉄絵による抽象化された草花文を施す。内底及び畳付に一部砂粒が溶着する。	Ｂ－８ Ⅰ層
	6	碗	Ⅰ類－ｂ	口～底	13.6 5.7 7.0	灰白色 内面胴部から外面胴部まで施釉	灰白色の微粒子。外面に鉄絵による抽象化された草花文を施す。内底に一部砂粒が溶着する。	Ｂ－９ 表採
	7	碗	Ⅱ類－ｃ	口～底	13.9 6.8 6.6	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	浅黄橙色の細粒子。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着する。両面に細かい貫入がみられる。	Ｅ－13 Ｐ．７
	8	碗	Ⅱ類－ｃ	口～底	13.3 5.9 5.7	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	浅黄橙色の細粒子。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着する。両面に細かい貫入がみられる。	フェンス・ネット間 表採
	9	碗	Ⅱ類－ａ	口～底	12.8 6.2 6.0	暗灰黄色 内面胴部から外面胴部まで施釉	鈍橙色の細粒子。施釉する前に内底に鉄釉を蛇の目状に施す。畳付に白土を塗布する。	４トレンチ Ⅱ層
	10	碗	Ⅱ類－ａ	口～底	12.8 6.4 6.2	黒褐色 内面胴部から外面胴部まで施釉	淡黄色の細粒子。施釉する前に内底に鉄釉を蛇の目状に施す。畳付に白土を塗布する。	Ｅ－13 Ｐ．８
	11	碗	Ⅱ類－ａ	底	－ － 7.1	黒褐色 内面及び外面腰部以下は露胎	淡黄色の微粒子。外底面に「御□□」の墨書を施す。鍋等の蓋の可能性もある。	不明
	12	碗	Ⅱ類－ｂ	口～胴	13.6 － －	灰黄褐色・灰黄色 内外面とも総釉	鈍黄橙色の細粒子。内面胴部に鉄絵による圏線が１条巡る。	４トレンチ Ⅱ層
	13	碗	Ⅱ類－ｂ	口～胴	14.0 － －	暗褐色・黄緑灰色 高台以下は露胎 内底蛇の目釉剝ぎ	浅黄橙色の細粒子。内面胴部に鉄絵による圏線が１条巡る。	フェンス・ネット間 表採
	14	碗	Ⅱ類－ｂ	底	－ － 6.6	暗褐色・灰黄緑色 高台以下は露胎 内底蛇の目釉剝ぎ	鈍黄橙色の細粒子。内面胴部と内底に、それぞれ鉄絵による圏線と丸文が施される。露胎部にアルミナが溶着する。	２トレンチ Ⅱ層
	15	碗	Ⅱ類－ｂ	底	－ － 5.8	黒褐色 白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉	浅黄橙色の細粒子。内底の釉を蛇の目状に剝ぎ取る。露胎部に目跡（アルミナ？）がわずかに溶着する。	３トレンチ Ⅰ層
	16	碗	Ⅱ類－ｄ	口	－ － －	白化粧＋透明釉 内外面とも総釉	淡黄色の細粒子。外面に呉須による巴文を施す。両面に貫入がみられる。	Ｅ－14 Ⅰ層
	17	碗	Ⅱ類－ｄ	口	－ － －	白化粧＋透明釉 内外面とも総釉	淡黄色の細粒子。外面に呉須と飴釉による染花文を施す。	１トレンチⅠ層
	18	碗	Ⅱ類－ｄ	口	－ － －	白化粧＋透明釉 内外面とも総釉	灰白色の微粒子。外面に呉須による丸文を施す。両面に貫入がみられる。	Ｅ－11 Ⅰ層
	19	碗	Ⅱ類－ｄ	胴～底	－ － 6.4	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	灰黄色の細粒子。外面に線彫りによる輪繋文？を施した後、呉須を掛ける。露胎部に目跡が溶着。両面に貫入がみられる。	表採
	20	碗	Ⅱ類－ｄ	口～底	12.2 6.0 5.6	白化粧＋透明釉 内外面とも総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	灰白色の細粒子。外面に呉須による巴文が施される。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着する。両面に貫入がみられる。	１トレンチ Ⅰ層
	21	碗	Ⅱ類～ｄ	口～胴	12.8 － －	白化粧＋透明釉 内外面とも総釉	淡黄色の細粒子。外面に呉須による寿字文・梅花文、内面口縁部に楕円文？を施す。（清朝陶磁の模倣か？）	Ｂ－５ Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

第24表ｂ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第62図（図版51）	22	碗	Ⅱ類－ｄ	口～胴	14.6 － －	白化粧＋透明釉 内底蛇の目釉剝ぎ	明褐灰色の細粒子。外面に巴文を上絵付けで施すが剝落している。両面に貫入がみられる。	Ｔ．Ｐ．４ Ⅱ層
	23	碗	Ⅱ類－ｄ	口～胴	14.2 － －	白化粧＋透明釉 内底蛇の目釉剝ぎ	浅黄橙色の細粒子。外面及び内面口縁部に呉須による菊花文が施される。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着。内面に貫入あり。	１トレンチ 表採
	24	碗	Ⅱ類－ｄ	底	－ － 6.8	白化粧＋透明釉 畳付を除き露胎 内底蛇の目釉剝ぎ	浅黄橙色の細粒子。外面に呉須による菊花文が施される。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着。内面に貫入あり。	Ｆ－13 表採
	25	碗	Ⅱ類－ｅ	口～底	12.8 6.3 5.9	透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	鈍橙色の細粒子。外面に鈍赤褐色の化粧土を掛けた後、外面に白土による菊花文、内底は露胎部に白土を輪状に塗布する。	表採
	26	碗	Ⅲ類	口	17.6 － －	緑釉 白化粧＋透明釉 内外面とも総釉	灰白色の細粒子。	Ｅ－13 Ｐ．８
第63図（図版52）	27	小碗	Ⅰ類－ｄ	口～底	8.5 4.0 4.0	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	褐灰色の細粒子。露胎部に目後（アルミナ）が溶着する。内面に貫入がみられる。	２トレンチ Ⅰ層
	28	小碗	Ⅰ類－ｄ	口～底	7.7 4.2 3.7	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	灰黄色の細粒子。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着する。両面に貫入がみられる。	Ｔ．Ｐ．Ⅱ
	29	小碗	Ⅰ類－ｄ	口～底	8.3 4.2 3.7	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	褐灰色の細粒子。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着する。両面に貫入がみられる。	１トレンチ Ⅱ層
	30	小碗	Ⅰ類－ｃ	口～底	8.4 4.4 3.8	暗赤褐色 白化粧＋透明釉 高台以下は露胎	灰白色の微粒子。内底は蛇の目状に釉を剝ぎ取り、露胎部に目跡（アルミナ）が溶着する。内面に貫入がみられる。	１トレンチ Ⅱ層
	31	小碗	Ⅰ類－ｂ	口～底	10.0 4.7 4.4	黒褐色 黄緑灰色 高台以下は露胎	灰色の微粒子。内底は蛇の目状に釉を剝ぎ取る。露胎部に一部砂粒が溶着する。	南崖下 表採
	32	小碗	Ⅰ類－ｂ	口～底	9.6 4.9 4.2	黒褐色 灰黄緑色 高台以下は露胎	浅黄色の細粒子。内底は蛇の目状に釉を剝ぎ取る。内面に貫入がみられる。	Ｃ－８ 表採
	33	小碗	Ⅰ類－ｂ	口～底	10.0 4.5 4.6	暗赤褐色 灰黄緑色 畳付を除き総釉	灰白色の微粒子。内底は蛇の目状に釉を剝ぎ取り、露胎部に目跡が溶着する。内面に貫入がみられる。	４トレンチ Ⅱ層
	34	小碗	Ⅰ類－ｂ	口～底	10.6 4.7 4.6	暗赤褐色 灰黄緑色 畳付を除き総釉	灰白色の微粒子。内底は蛇の目状に釉を剝ぎ取る。内面に貫入がみられる。	Ｃ－８ Ⅰ層
	35	小碗	Ⅰ類－ｄ	口	8.0 － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	鈍黄褐色の微粒子。口唇部に鉄釉を塗布し、外面胴部に鉄釉による圏線を施す。	Ｃ－９ Ⅰ層
	36	小碗	Ⅰ類－ｄ	底	－ － 4.2	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	鈍黄褐色の微粒子。外面胴部に鉄釉による圏線を施す。露胎部に目跡（アルミナ）が溶着する。	フェンス・ネット間 表採
	37	小碗	Ⅰ類－ｄ	底	－ － 3.7	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	灰白色の細粒子。外面に緑釉による鎬文を施す。露胎部にアルミナが溶着する。両面に貫入がみられる。	Ｅ－13 表採
	38	小碗	Ⅰ類－ｄ	底	－ － 4.0	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉	灰白色の細粒子。内底に線彫りによる巴文を施した後、緑釉を掛ける。両面に貫入がみられる。	２トレン Ⅰ層
	39	小碗	Ⅱ類－ａ	口～底	8.1 4.4 4.1	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	淡黄色の細粒子。外面胴部に縦長の六角形の面取りが囲繞する。露胎部に目跡（アルミナ？）が溶着する。両面に貫入あり。	Ｅ－11 Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

第24表ｃ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第63図（図版52）	40	小碗	Ⅱ類－a	口～底	9.0 4.4 4.1	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	淡黄色の細粒子。外面胴部に縦長の六角形の面取りが囲繞する。内底に釉及び砂粒が付着する。両面に貫入あり。	1トレンチ Ⅰ層
	41	小碗	Ⅱ類－b	口～胴	9.8 － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	灰白色の細粒子。外面胴部に六角形の面取り、腰部に一回り小さい六角形の面取りがそれぞれ囲繞する。両面に貫入あり。	B－8 表採
	42	小碗	Ⅱ類－b	底	－ － 3.6	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉	淡黄色の細粒子。外面胴部に六角形の面取り、腰部に一回り小さい六角形の面取りがそれぞれ囲繞する。両面に貫入あり。	4トレンチ Ⅱ層
	43	小碗	Ⅲ類－a	口～底	8.8 3.7 3.4	灰白色 内面胴部から外面胴部まで施釉	灰白色の微粒子。口唇部に鉄釉？が塗布される。	B－18 Ⅰ層
	44	小碗	Ⅲ類－a	口～胴	8.0 － －	灰白色 内面、外面とも総釉	灰白色の微粒子。	B－8 Ⅰ層
	45	小碗	Ⅲ類－a	底	－ － 3.4	灰白色 外面腰部以下は露胎	浅黄橙色の細粒子。	B－9 Ⅰ層
	46	小碗	Ⅲ類－b	口～胴	10.8 － －	明青灰色 内面、外面とも総釉	灰白色の細粒子。両面に貫入がみられる。	C－11 Ⅰ層
	47	小碗	Ⅲ類－b	底	－ － 3.5	明青灰色 外面腰部以下は露胎	灰色の微粒子。両面に細かい貫入がみられる。	B－11 Ⅰ層
	48	小碗	Ⅲ類－c	口～胴	8.0 － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	灰白色の微粒子。両面に細かい貫入がみられる。	B－15 表採
	49	小碗	Ⅲ類－c	口～胴	8.5 － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	外面に線彫りによる巴文を施した後、呉須を掛ける。両面に貫入がみられる。	南崖下 表採
	50	小碗	Ⅲ類－d	口～底	10.3 4.6 3.8	灰白色 畳付を除き総釉	灰白色の細粒子。外面に線彫りによる圏線・3本単位の縦位沈線を施した後、文様部を黒土で象嵌する。	C－11 Ⅰ層
	51	小碗	Ⅲ類－d	口～胴	10.4 － －	黄緑褐色 内面、外面とも総釉	灰色の微粒子。外面に線彫りによる圏線・巴文・3本単位の縦位沈線を施した後、文様部を白土で象嵌する。	B－9 表採
	52	小碗	Ⅲ類－d	底	－ － 4.0	灰黄緑色 高台以下は露胎	灰白色の微粒子。外面に線彫りによる圏線・2本単位の縦位沈線を施した後、文様部を白土で象嵌する。	B－11 Ⅰ層
	53	小碗	Ⅲ類－e	口～底	11.1 5.5 3.8	透明釉 畳付を除き総釉	白色の微粒子で堅緻。両面に細かい貫入がみられる。（白薩摩の可能性あり）	E－6 表採
	54	小碗	Ⅲ類－e	口～底	9.0 4.5 4.0	透明釉 畳付を除き総釉	灰白色の微粒子で堅緻。両面に細かい貫入がみられる。（白薩摩の可能性あり）	B－15 表採
	55	小碗	Ⅳ類－a	口～胴	7.0 － －	灰黄緑色 外面腰部以下は露胎	灰白色の微粒子。	南崖下 表採
	56	小碗	Ⅳ類－a	胴～底	－ － 4.4	灰黄緑色 外面腰部以下は露胎	灰白色の微粒子。外底面に砂粒の溶着がみられる。	C－18 Ⅰ層
	57	小碗	Ⅳ類－a	底	－ － 4.4	浅黄色 外面腰部以下は露胎	淡黄色の微粒子。	T．P．4 Ⅱ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

第24表ｄ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第63図（図版52）	58	小碗	Ⅳ類－ｂ	口～胴	9.6 － －	灰黄緑色 内面、外面とも総釉	灰白色の微粒子。両面に貫入がみられる。	Ｂ－８ Ⅰ層
	59	小碗	Ⅳ類－ｃ	口	－ － －	白化粧＋透明釉 口唇部を除き総釉	浅黄色の細粒子。外面に線彫りによる圏線・斜沈線を施した後、呉須と飴釉を流し掛ける。外面に貫入がみられる。	Ｄ－５ Ⅰ層
	60	小碗	Ⅳ類－ｃ	胴～底	－ － 4.5	白化粧＋灰釉 畳付を除き総釉	黄灰色の微粒子。外面に飴釉による丸文を施し、その間に緑釉による丸文を施す。内面に貫入がみられる。	表採
	61	小杯	－	口～底	3.6 2.0 1.5	灰白色 高台以下は露胎	灰白色の微粒子。両面にわずかに貫入がみられる。	Ｅ－15 Ｐ．４
第64図（図版53）	62	Ⅲ	Ⅰ類	口～底	13.8 3.9 6.8	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	淡黄色の細粒子。内底露胎部に素地土（アルミナ？）の溶着がみられる。	Ｂ－５ Ⅰ層
	63	Ⅲ	Ⅰ類	口～底	14.2 4.3 6.6	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目剝ぎ	淡黄色の細粒子。内面胴部に呉須による草花文を施す。内底露胎部に素地土（アルミナ？）の溶着がみられる。	Ｔ．Ｐ．４ Ⅱ層
	64	Ⅲ	Ⅱ類	口	14.0 － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	淡黄色の細粒子。口唇部に鉄釉を施す。	Ｔ．Ｐ．４ Ⅱ層
	65	Ⅲ	Ⅱ類	口～底	13.3 4.4 6.6	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目剝ぎ	淡黄色の細粒子。内面腰部と内底中央にそれぞれ二重圏線を施す。口唇部に鉄釉を施す。	Ｅ－13 Ｐ．９
	66	Ⅲ	Ⅲ類	口～胴	19.0 － －	浅黄色 外面腰部以下は露胎	灰白色の細粒子。両面に貫入がみられる。	４トレンチ Ⅱ層
	67	Ⅲ	Ⅲ類	底	－ － 5.4	黄緑灰色 高台以下は露胎	灰白色の微粒子。	不明
	68	Ⅲ	Ⅲ類	口～胴	16.4 － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	灰白色の細粒子。外面に呉須による圏線を２条・龍文、内面に呉須による圏線２条を施す。	５トレンチ 表採
	69	Ⅲ	Ⅲ類	底	－ － 10.4	透明釉 全面施釉後、外底面蛇の目釉剝ぎ	灰白色の微粒子。外面に線彫りの唐草文、内面に点綴文・圏線・斜沈線・菊花文・巴文を施した後、呉須を掛ける。	Ｅ－13 Ⅰ層
	70	小皿	Ⅰ類	口～底	9.2 2.5 4.5	白化粧＋透明釉 畳付を除き総釉 内底蛇の目釉剝ぎ	浅黄色の細粒子。内面口縁部に呉須による下向きの花弁文帯・圏線、内底に丸文を施す。畳付に白土を塗布する。	Ｔ．Ｐ．Ⅱ層
	71	小皿	Ⅰ類	口	7.8 － －	黄緑灰色 内面、外面とも総釉	灰色の微粒子。	Ｂ－11 Ⅰ層
	72	小皿	Ⅱ類	口	－ － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	灰黄色の細粒子。両面に貫入がみられる。	Ｂ－15 表採
	73	小皿	Ⅱ類	口	－ － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	灰白色の微粒子。両面に貫入がみられる。	崖下 表採
	74	小鉢	Ⅰ類	口	－ － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	浅黄橙色の細粒子。内面に線彫りによる圏線・刻花文・格子文を施した後、呉須と飴釉を掛ける。両面に貫入がみられる。	Ｔ．Ｐ．５ Ⅱ層
	75	小鉢	Ⅰ類	口	－ － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	鈍黄橙色の細粒子。内面に呉須による圏線・格子文・区画文を施した後、格子の間に飴釉で丸文を施す。両面に貫入あり。	Ｂ－13 Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

第24表ｅ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第64図（図版53）	76	小鉢	Ⅱ類	口～底	10.8 5.0 6.4	黒褐色・鈍黄色 外面腰部以下は露胎	灰白色の微粒子。内面に貫入がみられる。	B－8 Ⅰ層
	77	大鉢	Ⅰ類	口～底	27.8 13.3 11.6	灰黄緑色 内面胴部から外面腰部まで施釉	口縁部は灰白色、他は鈍黄橙色で細粒子。外面に鉄絵による抽象化され草花文を施す。	B－8 Ⅰ層
	78	大鉢	Ⅰ類	口～底	28.1 14.0 5.0	灰黄緑色 内面胴部から外面腰部まで施釉	灰黄色の微粒子。外面胴部に鉄絵による丸文と弧線を組み合わせた文様、外底面に「新（城または場？）」の墨書を施す。	B－8 Ⅰ層
	79	大鉢	Ⅰ類	口～底	23.2 13.3 9.6	灰黄緑色 内面胴部から外面腰部まで施釉	灰黄色の細粒子。内底中央部に灰釉を円形に塗布し、蛇の目状を呈する。	B－8 Ⅰ層
	80	大鉢	Ⅱ類－b	口～底	24.0 11.4 9.4	黒褐色・灰黄緑色 高台以下は露胎 内底蛇の目釉剝ぎ	灰白色の微粒子。露胎部に目跡が溶着する。内面胴部及び内底に花文を施す。高台に直径約5mmの孔を1個穿つ。	フェンス・ネット間 表採
	81	大鉢	Ⅱ類－c	口～底	30.0 13.7 10.9	暗褐色 白化粧＋透明釉 高台と畳付は露胎	灰白色の細粒子。内面に貫入がみられる。内底は蛇の目状に釉が剝ぎ取られ、露胎部に目跡が溶着する。	C－8 Ⅰ層
	82	大鉢	Ⅱ類－d	口～胴	23.8 － －	白化粧＋透明釉 内面、外面とも総釉	鈍黄橙色の細粒子。内底は蛇の目状に釉が剝ぎ取られる。内面胴部に呉須と飴釉による3本単位の波状文を1対施す。	E－13 P．7
	83	大鉢	Ⅱ類	口	21.2 － －	灰黄褐色 内面、外面とも総釉	鈍黄褐色の細粒子。外面胴部に丸彫りの圏線を1条巡らし、内面胴部に白土と鉄釉による点綴文を施す。	崖下 表採
第65図（図版54）	84	鍋	Ⅰ類－a	口	17.8 － －	暗褐色 外面のみ施釉	灰白色の微粒子。外面口縁部に紐状の把手を貼付する。	T．P．6 Ⅳ層
	85	鍋	Ⅰ類－a	口	18.4 － －	黄褐色 口唇部のみ露胎	浅黄橙色の細粒子。外面口縁部に紐状の把手を貼付する。	E－12 P．7
	86	鍋	Ⅱ類－a	口～胴	22.2 － －	褐灰色 外面胴部以下は露胎	灰白色の微粒子。口縁端部に紐状の把手を貼付する。	南崖下 表採
	87	鍋	Ⅱ類－b	口～胴	19.0 － －	黒褐色・灰黄緑色 口唇部（蓋受部）のみ露胎	灰白色の微粒子。	4トレンチ Ⅰ層
	88	鍋	Ⅰ類？	底	－ － －	黄褐色 外面腰部以下のみ露胎	灰白色の細粒子。外底面に一部釉の溶着がみられる。	B－9 Ⅰ層
	89	蓋	－	撮～底	5.4 2.8 11.2	黒褐色 庇上面中位から内面中位まで施釉	庇端部は黄灰色、他は淡黄色の細粒子。	E－13 P．7
	90	蓋	－	撮～底	7.1 5.0 15.6	暗赤褐色 庇上面中位から内面中位まで施釉	淡赤褐色の細粒子で、素地に白色の粒子を含む。	E－14 Ⅰ層
	91	把手	－	－	－ － －	黒褐色・灰黄緑色 把手内面を除き総釉	外側は黄灰色、内側は鈍橙色の微粒子。	2トレンチ Ⅰ層
	92	壺	Ⅰ類	口～底	12.0 23.2 11.9	黒色 口唇部と畳付のみ露胎	灰白色の微粒子。外面胴部に砂粒が部分的に付着する。外底面は篦状の工具により雑に施釉される。	2トレンチ Ⅱ層
	93	壺	Ⅰ類	口～胴	10.1 － －	黒色＋透明釉 口唇部のみ露胎	灰白色の微粒子。口唇部に灰白色の素地土の溶着がみられる。	4トレンチ Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

第24表ｆ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第65図（図版54）	94	壺	Ⅰ類	口	9.7 － －	黒色 内面、外面とも総釉	鈍赤褐色の細粒子。	T．P．3 Ⅰ層
	95	壺	Ⅰ類	口	11.9 － －	黄緑灰色 内面口縁部以下と口唇部は露胎	褐灰色の微粒子。口唇部の釉を掻き取った後、白土を塗布する。	E－13 P．7
	96	壺	Ⅰ類	口	12.0 － －	黒褐色 内面口縁部以下と口唇部は露胎	灰褐色の微粒子。	1トレンチ Ⅰ層下部
	97	壺	Ⅰ類	底	－ － 10.0	灰白色 内面及び外底面は露胎	灰黄色の微粒子。内底に部分的に釉の溶着（塗布？）がみられる。	E－13 P．8
	98	壺	Ⅱ類	口～胴	15.7 － －	灰黄緑色・黒褐色 口唇部のみ露胎	灰白色の細粒子。外面胴部に突帯を2条巡らせる。	C－9 Ⅱ層
	99	壺	Ⅱ類	底	－ － 15.5	黒褐色＋透明釉 内面及び外底面は露胎	灰白色の微粒子。外面腰部に圏線を数条巡らせ、その上に鉄釉による丸文（鉄斑？）を施す。	B－8 Ⅰ層
	100	瓶	－	口	8.4 － －	黒褐色 内面、外面とも総釉	灰白色の微粒子。	1トレンチ Ⅰ層
	101	瓶	－	底	－ － 6.2	黒褐色 内面及び外底面は露胎	灰色の微粒子。	2トレンチ Ⅰ層
	102	瓶	－	底	－ － 7.0	暗褐色 内面及び外底面は露胎	鈍橙色の細粒子で、素地に白色の鉱物を含む。	B－9 表採
	103	瓶	－	口～底	3.6 11.7 9.1	黄緑灰色 内面口縁部から外面腰部まで施釉	灰色の細粒子で、素地に白色の鉱物を少量含む。外面胴部に一部灰色の素地土が溶着する。底部の成形は雑。	表採
	104	瓶	－	口～底	3.8 11.6 5.7	青黒色 内面口縁部から高台外面まで施釉	橙色の細粒子で軟質。素地に白色の鉱物を含む。頸部に直径約9mmの円盤を1対貼付する。釉は部分的に剝落する。	T．P．5 Ⅰ層
第66図（図版55）	105	急須	Ⅰ類	口～胴	11.4 － －	暗褐色 内面口縁部を除いて総釉	暗灰黄色の細粒子で、全体に気泡が目立つ。内面口縁部に灰黄色の素地土の溶着がみられる。	2トレンチ Ⅱ層
	106	急須	Ⅱ類－a	口～胴	6.4 － －	淡緑灰色 内面口縁部の一部と外面に施釉	灰白色の微粒子。外面にわずかに貫入がみられる。	C－8 Ⅰ層
	107	急須	Ⅱ類－a	口～底	5.4 9.0 6.4	黒褐色 内面と外底面は露胎	灰白色の微粒子。三角形の把手に直径約7mmの孔を穿ち、その周囲に線彫りによる曲線文を1条施す。	B－9 Ⅱ層
	108	急須	Ⅱ類－b	口～胴	6.8 － －	白化粧＋透明釉 口唇部を除く外面に施釉	灰色の細粒子。外面に線彫りによる圏線・斜沈線・丸文・縦位沈線を施した後、飴釉と緑釉を流し掛ける。	E－13 表採
	109	急須	Ⅱ類－b	口～胴	5.2 － －	白化粧＋透明釉 口唇部を除く外面に施釉	灰色の細粒子。外面に線彫りによる圏線・斜沈線・縦位沈線を施した後、呉須と飴釉と緑釉を流し掛ける。	5トレンチ Ⅰ層
	110	急須	Ⅱ類－b	注口	－ － －	白化粧＋透明釉 外面のみ施釉	淡黄色の細粒子。注口の根元に緑釉を流し掛ける。	B－9 Ⅰ層
	111	急須	Ⅱ類－c	口～胴	5.4 － －	淡黄灰色 口唇部を除く全面に施釉	灰色の微粒子。外面に線彫りによる圏線・菊花文・斜沈線・縦位沈線などを施した後、文様部を白土で象嵌する。	B－8 Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

第24表 g　沖縄産施釉陶器観察一覧

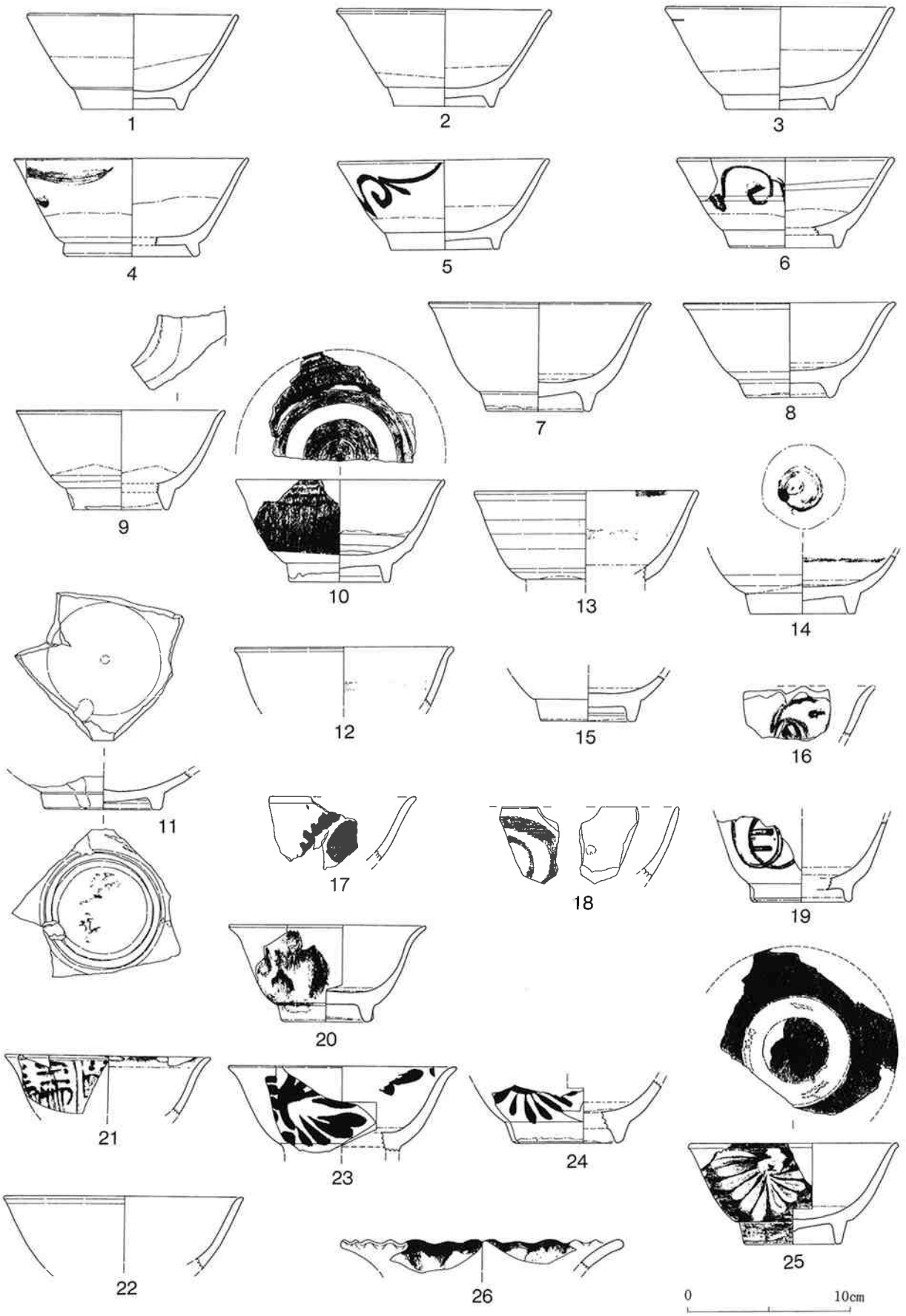
図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第66図（図版55）	112	急須	Ⅱ類－c	胴	－ － －	灰黄緑色 外面のみ施釉	灰色の微粒子。外面に線彫りによる圏線と飛鉋による刻文を施した後、文様部に白土で象嵌する。把手には象嵌しない。	南崖下 表採
	113	急須	Ⅱ類？	口～底	6.2 8.7 7.0	明緑灰色 内面及び外面腰部以下は露胎	灰白色の微粒子。三角形の把手に直径約6mmの孔を穿ち、その周囲に線彫りによる曲線文を7条施す。	5トレンチ 表採
	114	急須	Ⅱ類？	口～底	8.1 11.6 －	黒褐色 内面口縁部・外面腰部以下は露胎	灰白色の微粒子。三角形の把手に直径約7mmの孔が穿たれる。	4トレンチ Ⅱ層
	115	蓋	－	撮～底	6.0 2.1 5.0	－	褐灰色の微粒子。	4トレンチ Ⅰ層
	116	蓋	－	撮～底	6.2 2.3 4.7	暗赤褐色 庇上面のみ施釉	灰白色の微粒子。撮の根元付近に直径約4mmの孔を1個穿つ。	B－15Ⅰ層
	117	蓋	－	撮～底	7.5 2.9 5.3	暗黄緑色 庇上面のみ施釉	灰色の微粒子。庇上面端部に圏線を1条巡らす。撮の根元付近に直径約3.5mmの孔を1個穿つ。	南崖下 表採
	118	蓋	－	撮～底	6.7 3.0 4.8	白化粧＋透明釉 庇上面のみ施釉	淡橙色の細粒子。庇上面に線彫りによる圏線・斜沈線を施した後、呉須と飴釉を施釉する。撮の根元に孔を1個穿つ。	E－13 P．7
	119	大形 急須	Ⅰ類	胴	－ － －	褐色 内面・外面とも総釉	灰白色の細粒子で、素地に白色の鉱物が含まれる。	フェンス・ネット間 表採
	120	大形 急須	Ⅱ類	胴～底	－ － 10.7	黒色 内底中央及び外底は露胎	鈍黄橙色及び黄灰色の細粒子。外底面は箆状の工具により雑に施釉される。	1トレンチ Ⅰ層下部
	121	酒器	Ⅰ類	口・底	3.8 (8.0) 7.8	浅黄色 内面口縁部から外面腰部まで施釉	灰白色の微粒子。	フェンス・ネット間 表採
	122	酒器	Ⅱ類	胴	－ － －	白化粧＋透明釉 外面のみ施釉	淡黄色の細粒子。外面に線彫りによる圏線・曲線文・縦位沈線・斜沈線を施した後、呉須と飴釉と緑釉を流し掛ける。	E－13 P．7
	123	小壺	－	胴～底	－ － 4.4	暗灰緑色・黒褐色 内面、外面とも施釉	浅黄色及び灰黄色の細粒子。外面胴部に鉄釉を少量流し掛ける。外底面中央付近には灰釉が塗布される。	南崖下 表採
	124	小壺	－	口～胴	3.0 － －	黒色 内面口縁部以下は露胎	灰白色の微粒子。	B－8 Ⅰ層
	125	小壺	－	口～胴	2.5 － －	灰黄褐色 内面口縁部以下は露胎	鈍黄橙色の細粒子。	T．P．8 Ⅰ層
第67図（図版56）	126	火取	Ⅰ類－a	口～底	9.2 8.1 7.3	暗黄緑色 内面口縁部から外面腰部まで施釉	口縁部から腰部までは灰色、高台付近は浅黄橙色で細粒子。	南崖下 表採
	127	火取	Ⅰ類－b	口～胴	10.9 － －	黒色・灰白色 胴部を除く外面全体に補釉	灰白色で微粒子。外面胴部中位に飛鉋による交差沈線、その下に圏線を施す。	4トレンチ Ⅱ層
	128	火取	Ⅰ類－b	口～底	9.8 9.0 5.9	暗褐色・黄緑灰色 胴部を除く外面全体に施釉	灰色で微粒子。外面胴部中位に飛鉋による交差沈線を施し、上下を圏線で囲む。内底に白土、外底に砂の溶着がみられる。	B－8 Ⅰ層
	129	火取	Ⅱ類	口～底	9.4 8.5 6.6	黒褐色 内面口縁部から外面腰部まで施釉	灰白色で微粒子。内底に砂の溶着がみられる。	C－8 Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

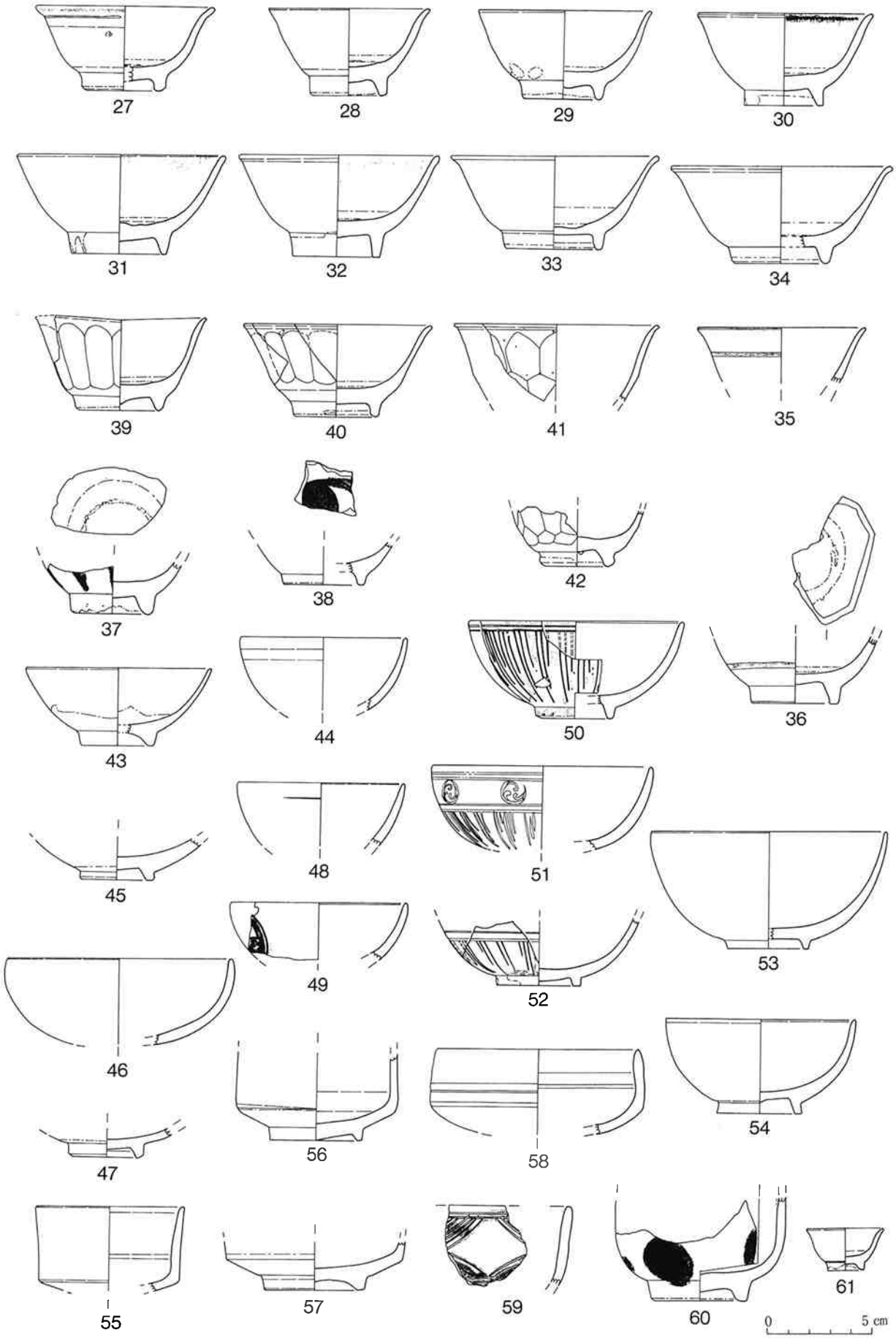
第24表ｈ　沖縄産施釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第67図（図版56）	130	火取	Ⅱ類	口～底	10.9 7.8 7.7	黒色 内面口縁部から外面胴部まで施釉	鈍赤褐色の細粒子。内底に砂の溶着がみられる。	表採
	131	火取	Ⅱ類	口	12.7 － －	暗赤褐色 両面に施釉	灰白色の細粒子。外面に丸彫りの圏線を２条巡らし、その下に斜沈線を施す。肩部に獣面（獅子面）の把手を貼付する。	Ｂ－５ Ⅰ層
	132	火取	Ⅱ類	胴～底	－ － 7.8	暗緑灰色 内面及び高台脇以下は露胎	灰黄色の粗粒子。外面に線彫りによる２本単位の縦位沈線と圏線を施した後、文様部を白土で象嵌する。	５トレンチ Ⅰ層
	133	火取	Ⅱ類	底	－ － 7.2	明緑色 内面及び外面腰部以下は露胎	灰白色の微粒子。畳付の一部に釉薬と砂の溶着がみられる。	Ｔ．Ｐ．６ Ⅲ層
	134	火取	Ⅲ類	口～底	9.8 8.6 6.7	暗黄褐色 内面口縁部から外面腰部まで施釉	浅黄橙色の細粒子。胴部中位に丸彫りによる圏線を３条巡らす。	Ｂ－８ Ⅰ層
	135	器種不明	－	胴～底	－ － 2.0	黒色 内面・外面とも総釉	暗赤褐色の微粒子。	フェンス・ネット間 表採
	136	灯明具	Ⅰ類	口	－ － －	白化粧＋透明釉 外面口縁部以下は露胎	灰白色の細粒子。両面に貫入がみられる。	Ｔ．Ｐ．10 Ⅰ層
	137	灯明具	Ⅱ類－ａ	口～底	4.8 4.2 4.0	黒褐色 外面腰部以下は露胎	灰白色の細粒子。外底面に糸切り跡が残り、中央には直径約５mmの釘穴が穿たれる。	Ｃ－８ Ⅰ層
	138	灯明具	Ⅱ類－ｂ	底	－ － 5.5	黒褐色 外底面を除き総釉	淡黄色の細粒子。外底面中央に直径約２mmの孔が穿たれる。	１トレンチ 表採
	139	灯明具	Ⅱ類－ｂ	底	－ － 6.8	灰黒色 高台と畳付を除き総釉	淡黄橙色の細粒子。外底面中央に直径約２cmの孔が穿たれる。	７トレンチ 表採
	140	蓋	－	庇～底	7.7 － 5.6	灰褐色 庇上面にのみ施釉	灰色の微粒子で、素地に黒色の鉱物を多く含む。撮の形態は不明。	Ｂ－９ Ⅰ層
	141	蓋	－	撮～底	12.4 3.8 7.8	黒褐色 庇上面に施釉後、蛇の目釉剝ぎ	灰黒色の微粒子。庇上面の露胎部には黒色の素地土の溶着がみられる。	４トレンチ Ⅰ層
	142	蓋	－	庇	24.8 － －	灰黄緑色 庇上面及び滑り止め外面のみ施釉	内面付近は浅黄橙色、他は灰色の細粒子。庇上面及び端部に線彫りの花文・圏線を施した後、文様部を白土で象嵌する。	５トレンチ 表採
	143	器種不明	－	－	－ － 7.6	暗褐色 外面のみ施釉。上面は部分的に剝落	橙色の細粒子で軟質。素地に雲母を含む。外面に直径約４mmの孔が１個穿たれる。	フェンス・ネット間 表採
	144	器種不明	－	－	－ － 6.7	暗褐色 外面のみ施釉。上面は部分的に剝落	橙色の細粒子で軟質。素地に雲母を含む。外面に直径約４mmの孔が１個穿たれる。	Ｔ．Ｐ．４ Ⅱ層
	145	花生	Ⅰ類	底	－ － 25.4	暗赤褐色・黒色 内面及び外底面は露胎	浅黄色の細粒子。	南崖下 表採
	146	花生	Ⅱ類	底	－ － 15.0	白化粧＋透明釉 外底面を除き総釉	淡黄色の細粒子。両面に貫入がみられる。	Ｔ．Ｐ．４ Ⅱ層

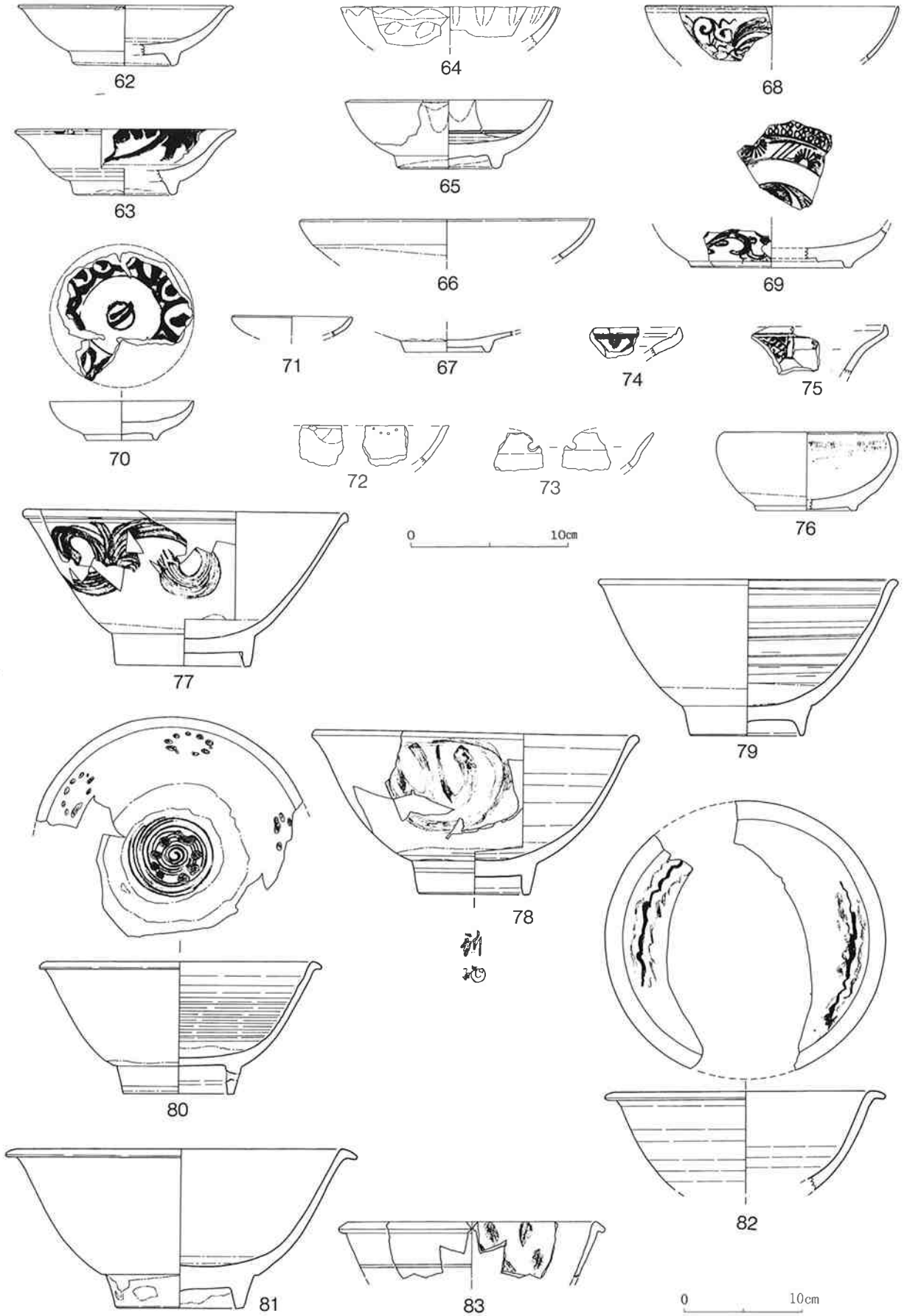
※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。



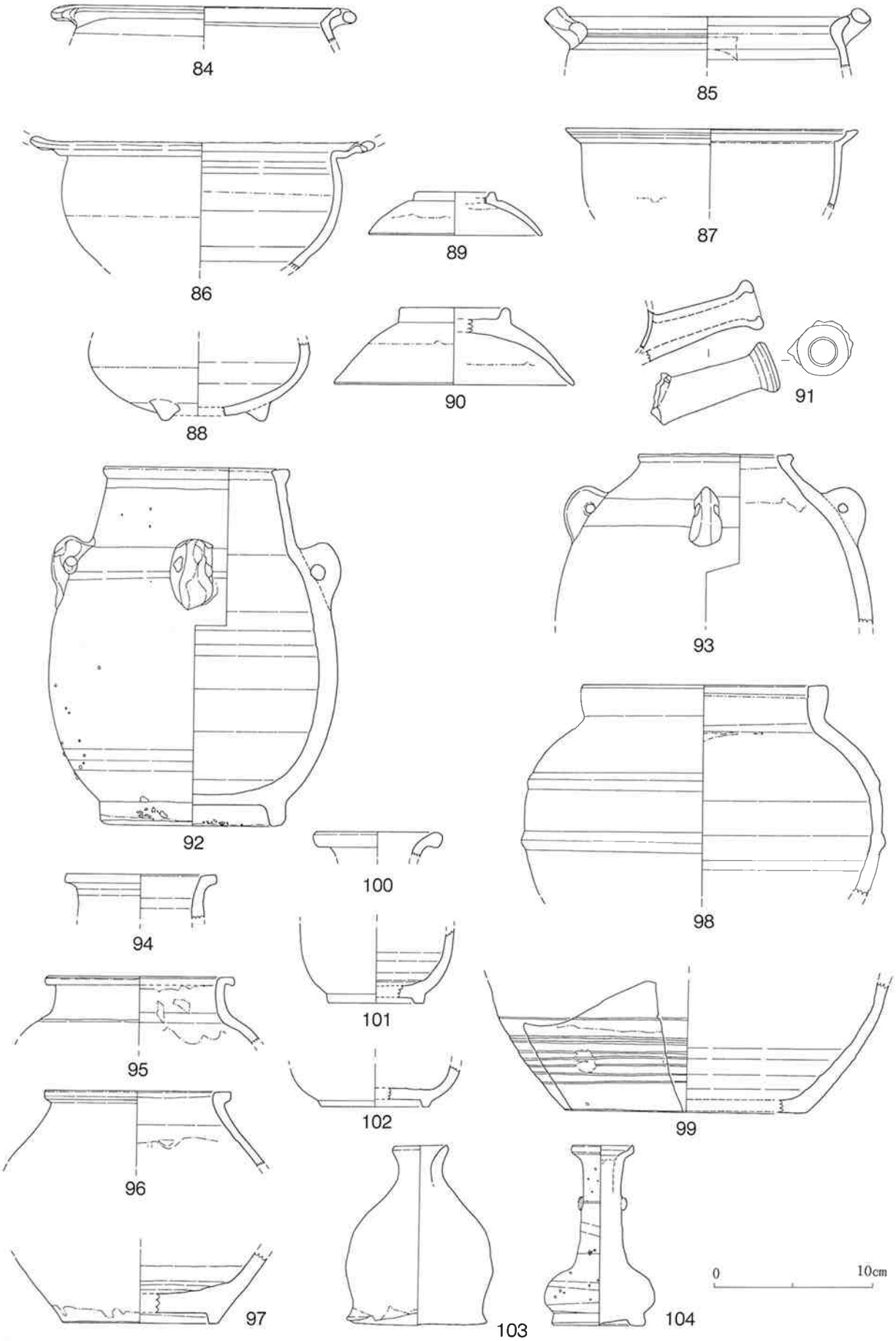
第62図　沖縄産施釉陶器 1　碗



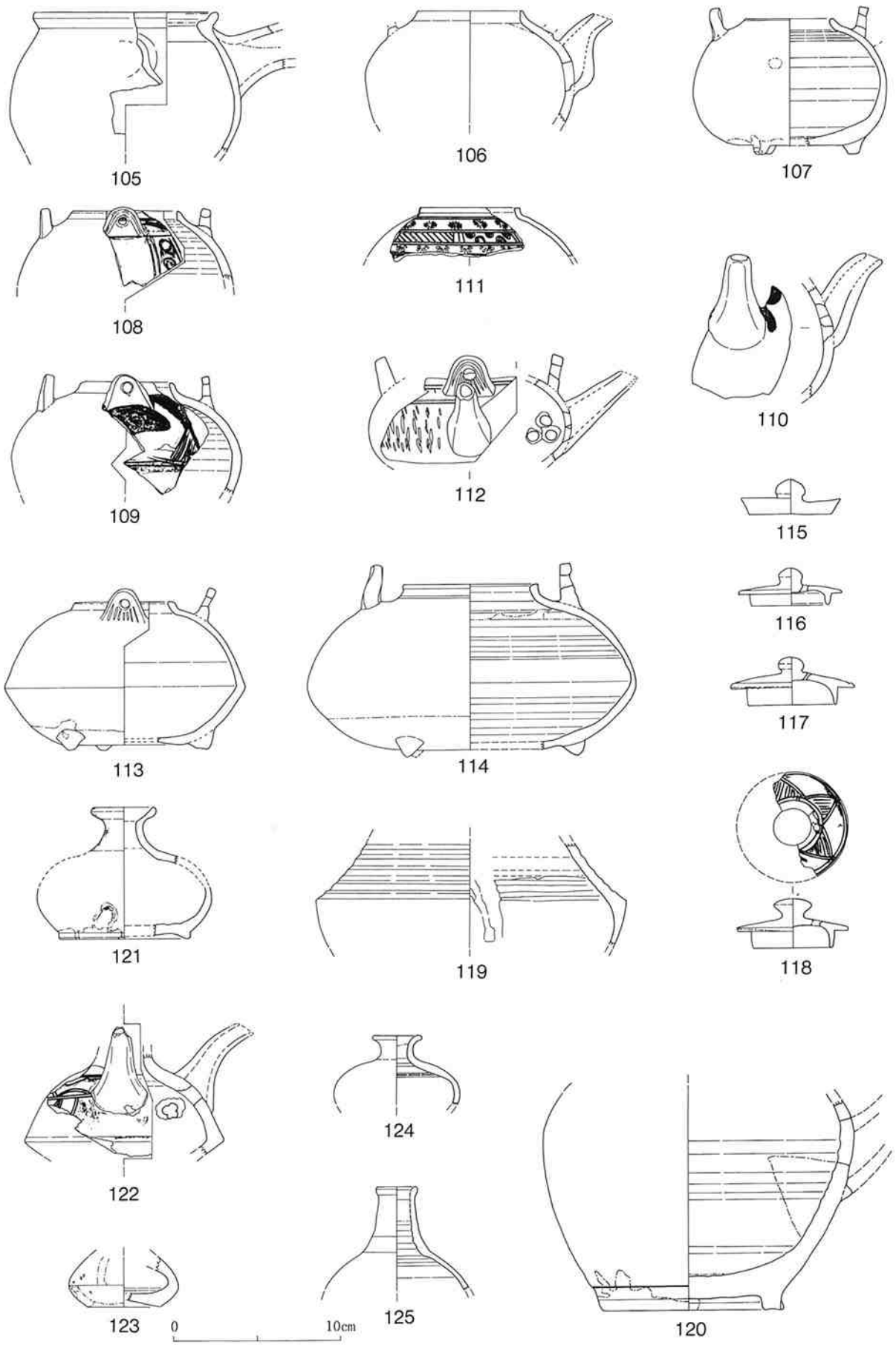
第63図　沖縄産施釉陶器 2　小碗（27～60）、小杯（61）



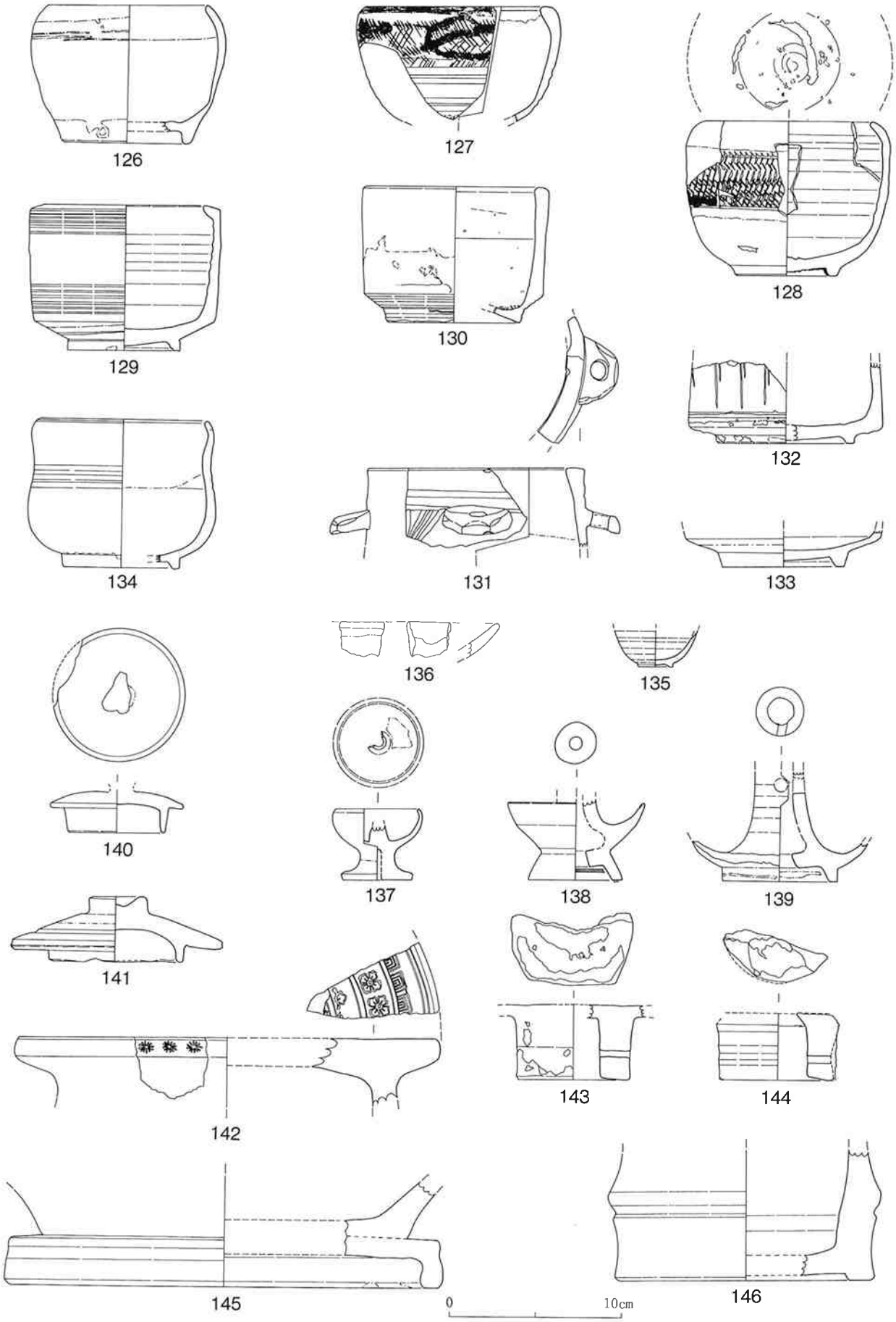
第64図　沖縄産施釉陶器 3　皿（62～69）、小皿（70～73）、小鉢（74～76）、大鉢（77～83）



第65図　沖縄産施釉陶器 4　鍋（84～91）、壺（92～99）、瓶（100～104）



第66図　沖縄産施釉陶器 5　急須(105～118)、大形急須(119.120)、酒器(121.122)、小壺(123～125)



第67図　沖縄産施釉陶器 6　火取(126～134)、灯明具(136～139)、蓋(140～142)、花生(145.146)、器種不明(135.143.144)

第22節　沖縄産無釉陶器

高火度で焼成された焼き締め陶器で、方言で「荒焼（アラヤチ）」とも称される。基本的に無釉だが、マンガン釉や泥釉が施釉されたものもみられる。器種は沖縄産施釉陶器と同じく様々な製品があるが、主に壷や甕などの大型の貯蔵器で占められる。

今回確認された沖縄産無釉陶器の器種は碗・皿・火炉・水鉢・鉢・擂鉢・壷・甕・徳利などがある。以下に器種毎の分類概念を記し、個々の特徴などは観察表に呈示する。（第25表）

1．碗（第68図１～３）

Ⅰ類　高台から斜上方に立ち上がる器形を呈する。高台は内面を削り取らず、中心部へ浅く抉り成形が施される。口縁部の形態は不明だが、沖縄産施釉陶器の灰釉碗を模したものと思われる。（１）

Ⅱ類　腰部に幾分丸みを持ちながら斜上方に立ち上がるもので、外底面を浅く削り取り断面方形状の高台を成形する。無文の資料が多いが、高台内面に「川」の記号を記した判がみられるもの（３）もある。

2．皿（第68図４～６）

Ⅰ類　高台から「ハ」の字状に開く大振りの浅皿である。本資料は鍋等の蓋の可能性も考慮されるが、類例が少ないため今回は皿として報告する。（４）

Ⅱ類　灯明皿として使用されたと考えられる小皿で、平底の底部から内湾気味に立ち上がる器形を呈する。口唇部に三角形の灯心受を１つ貼り付けるが欠落している。基本的に無文だが、外面に横位の沈線を数条巡らすもの（６）もある。

3．火炉（第68図７、８）

底部からほぼ垂直に立ち上がる円筒状の器形を呈するもので、肩部あるいは胴上部で内側に屈曲する。屈曲部の直下に方形の把手を１対貼り付けるもの（７）と、口縁部に円形の孔を10～12個穿つもの（８）がある。

4．水鉢（第68図９、10）

方言で「ミジクブサー」と称される内湾器形の平底鉢で、口縁部を断面三角形状に肥厚する。外面に櫛描きの波状沈線を施す。

5．鉢（第68図11、12、第69図13～26）

Ⅰ類　平底の底部からほぼ垂直に立ち上がる円筒状の器形で、口唇部の内外面両端をわずかに水平方向に張り出し断面形態がＴ字状を呈する。11は外面口縁部に縄目状の突帯と断面半円形の突帯を１条ずつ巡らし、その下に唐草文（牡丹か？）を貼り付ける。12は外面口縁部に突帯を２条巡らし、その間に櫛描きによる波状沈線を施す。

Ⅱ類－ａ　底部からやや内湾気味に立ち上がるもので、口縁部を外側に折り曲げる。底部は基本的に平底だが、20のように台形状の円盤を３個貼り付けるものもある。文様は無文のもの（13～20）と、外面胴部に線彫りの花文を施すもの（21）、牡丹唐草文を貼り付けるもの（22～24）、横位の圏線と波状沈線を組み合わせるもの（25、26）などがある。

〃　－ｂ　器形の全体的な特徴はａと共通するが、口唇部内側の端部を水平方向に張り出し、断面形態をＴ字状に成形する。文様は鍔上面に縄目状の突帯と断面三角形の突帯を２条ずつと唐草文、口唇部の外側と内側端部にそれぞれ縄目状の突帯を１条巡らす。（27）

6．擂鉢（第70図）

Ⅰ類　器形は底部から斜上方に立ち上がるもので、口縁端部を外側に折り曲げる。口縁部直下は篦で削られ稜を持つ。底部は高台を持たない平底のもの（28～30、33）が多いが、高台脇に孔を穿つ脚部をもつもの（34、35）もある。擂目は内面全体にほぼ隙間なく施されるが、口縁部のみ篦削りで消去される。安里進氏他の擂鉢編年（註１）のⅢ式に相当すると思われる。

Ⅱ類　平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部を外側に折り曲げる。Ⅰ類同様口縁部直下を篦で削り頚部に稜を持つもの（38）もあるが、稜を持たないもの（36、37）もある。擂目は内面全体に重複して施されるが、口縁部のみ篦削りで消去される。安里進氏他の擂鉢編年（註１）のⅣ式に相当するものである。

7．壺（第71図44～49）

Ⅰ類－ａ　方言で「ジンガーミ」と称されるもので、砲弾状に近い器形を呈する。口縁部を玉縁に肥厚し、肩部に紐状の横耳を３個貼り付ける。44は肩部に墨書で「新」の字が記されている。

Ⅰ類－b　平底の底部から斜上方に立ち上がる大形の壷である。口縁部が未検出のため全形は不明だが、Ⅰ類－aと同様の口縁形態の三耳壷になるものと思われる。(46)

Ⅱ類　方言で「マースガーミ」と称されるもので、卵形の胴部から頚部を垂直に立ち上げる。口縁部の形態は方形に肥厚するもの（47）と口折を呈するもの（48）がある。また、肩部に縦耳を2対貼り付けるもの（49）もみられる。

8．蓋（第71図50）

撮を持たず庇上面を平坦に成形するもので、全体的に雑に仕上げられる。壷等に対応する蓋と考えられる。

9．瓶（第71図51）

口縁部を欠いた小形の瓶で、胴部中位に沈線を2条巡らす。

10．徳利（第71図52、53）

Ⅰ類　方言で「チュワカサー」または「ヒラチビ」と称されるもので、『壷屋古窯群Ⅰ』（註2）のⅡ型に相当する。器形は最大径を底部近くに持ち、外面肩部に横位の圏線と波状沈線を施す。(52)

Ⅱ類　口縁部が欠落しているため全形は不明だが、Ⅰ類に比してやや胴が長い。『壷屋古窯群Ⅰ』（註2）のⅢ型に相当するものと思われる。(53)

11．甕（第71図54、55）

平底の底部からほぼ垂直に立ち上がるもので、肩部に最大形を持ち頚部をすぼめ口縁部を外側に折り曲げる。頚部に圏線を施すもの（54）と突帯を巡らすもの（55）がある。

註

註1．安里進・上原政昌・家田淳一　「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじまぁ』3　名護博物館　1987年

註2．島弘・玉城安明・内間靖他　『壷屋古窯群Ⅰ』　那覇市教育委員会　1992年

第25表ａ　沖縄産無釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	素地・器色	調整・文様等の特徴	出土地点
第68図（図版57）	1	碗	Ⅰ類	底	－ － 5.7	素地…鈍赤褐色 器色…明赤褐色	外面に轆轤成形跡、外底面に篦状の工具による器面調整の跡が残る。	C－9 Ⅰ層
	2	碗	Ⅱ類	口～底	13.4 6.0 5.8	素地…橙色 器色…橙色	素地に白色の砂粒を含む。外面に轆轤成形跡が残る。内面に 一部白色の石灰質が付着する。	B－8 Ⅰ層
	3	碗	Ⅱ類	口～底	13.6 6.2 5.4	素地…橙色 器色…橙色	外面腰部及び内面腰部に一部白色の石灰質が付着。外底面に「川」の記号を記した判を施す。	T．P．11 Ⅰb
	4	皿	Ⅰ類	口～底	21.4 5.1 10.0	素地…鈍赤褐色 器色…赤褐色	素地に白色の砂粒を含む。内面に灰黄色の石灰質が付着する。内底に陰圏線が１条巡る。鍋等の蓋の可能性もある。	T．P．11 Ⅰa
	5	皿	Ⅱ類	口～底	10.5 2.7 4.8	素地…鈍赤褐色 器色…鈍橙色	外底は上げ底状を呈する。口唇部に煤が付着する。外面に一部白色の石灰質が付着する。	南崖下 表採
	6	皿	Ⅱ類	口～底	12.4 2.6 5.2	素地…鈍赤褐色 器色…赤灰色	外底は上げ底状を呈する。外面に線彫りによる圏線？を３～４条施す。	E－14 表採
	7	火炉	－	口	13.4 － －	素地…鈍赤褐色 器色…鈍赤褐色	外面口縁部に丸彫りによる圏線を２条巡らせる。外面肩部に板状の把手を貼付し、中央に直径約１cmの孔を穿つ。	4トレンチ Ⅱ層
	8	火炉	－	口	14.0 － －	素地…鈍赤褐色 器色…赤灰色	外面口縁部に線彫りによる圏線を２条巡らし、その間に直径約８mmの孔を10～12個穿つ。	T．P．6 Ⅰ層
	9	水鉢	－	口	20.8 － －	素地…橙色 器色…外・灰褐色 内・橙色	素地に鈍橙色の鉱物を含む。外面肩部に３条単位の波状沈線を巡らす。内面に轆轤成形跡が残る。	B－11 Ⅰ層
	10	水鉢	－	口	23.8 － －	素地…橙色 器色…外・明褐灰色 内・橙色	外面肩部に５～６条単位の波状沈線を巡らす。外面及び内面に轆轤成形跡が残る。	4トレンチ Ⅱ層
	11	鉢	Ⅰ類	口	40.0 － －	素地…橙色 器色…外・灰赤色 内・橙色	外面口縁部に縄目状突帯、丸文、断面半円形の突帯、胴部に唐草文（牡丹？）を貼付する。内面に轆轤成形跡が残る。	F－12 表採
	12	鉢	Ⅰ類	口	39.5 － －	素地…橙色 器色…橙色	外面口縁部に断面半円形の突帯を巡らし、その間に数条の波状沈線を巡らす。内面に轆轤成形跡が残る。焼成不良。	T．P．4 Ⅱ層
第69図（図版58）	13	鉢	Ⅱ類－a	口～底	29.1 13.7 11.8	素地…橙色 器面…外・橙色 内・鈍橙色	鍔上面及び外底面に線彫りの凹線を施す。両面に轆轤成形跡が残る。	フェンス・ネット間 表採
	14	鉢	Ⅱ類－a	口～胴	35.7 － －	素地…橙色 器面…外・鈍赤褐色 内・橙色	鍔上面に綿彫りの凹線を施し、鍔直下に微弱な稜を形成する。内面に轆轤成形跡が残る。	フェンス・ネット間 表採
	15	鉢	Ⅱ類－a	口～底	35.5 12.2 13.4	素地…明赤褐色 器面…明赤褐色	鍔上面から外面頚部までマンガン釉？を施し。両面に轆轤成形跡が残る。	T．P．11 Ⅰb
	16	鉢	Ⅱ類－a	口	26.6 － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・明赤褐色 内・鈍赤褐色	鍔直下に稜を形成する。内面に灰白色の石灰質が付着する。内面に轆轤成形跡が残る。	南崖下 表採
	17	鉢	Ⅱ類－a	口～胴	29.0 － －	素地…鈍橙色 器色…橙色	鍔内側端部に削りを入れ、上面に線彫りの凹線を施す。両面に轆轤成形跡が残る。	C－8 Ⅰ層
	18	鉢	Ⅱ類－a	底	－ － 15.6	素地…橙色 器色…外・明赤褐色 内・橙色	外底面を除き泥釉。両面に轆轤成形跡が残り、外面腰部には篦状工具による器面調整が施される。	C－8 Ⅰ層
	19	鉢	Ⅱ類－a	口～胴	42.6 － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・鈍赤褐色 内・橙色	鍔上面に線彫りの凹線、直下に稜を形成する。外面頸部に丸彫りの圏線を３条巡らす。内面に轆轤成形跡が残る。	B－8 Ⅰ層

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

第25表ｂ　沖縄産無釉陶器観察一覧

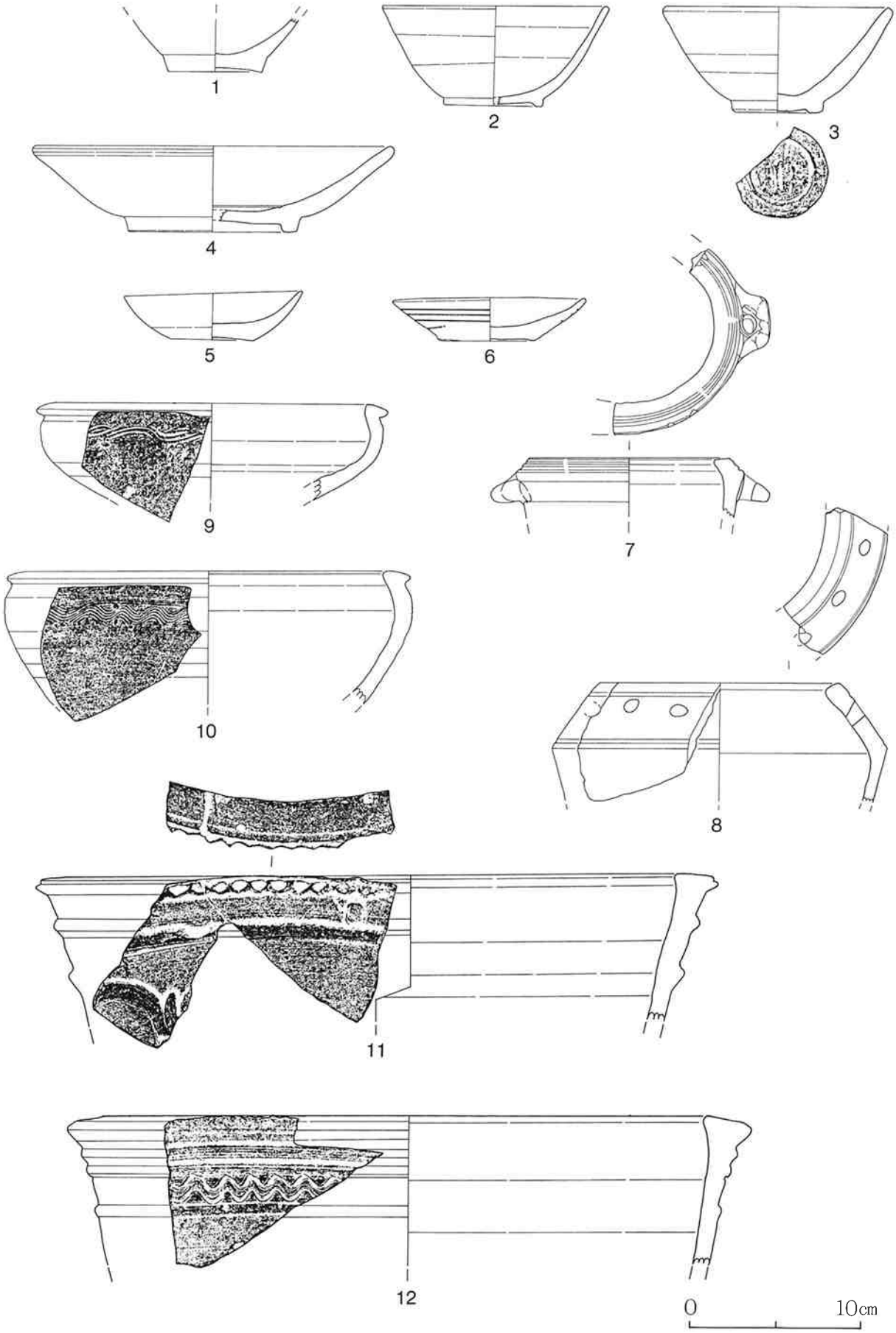
図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第69図（図版58）	20	鉢	Ⅱ類－a	底	－ － 24.8	素地…橙色 器色…橙色	素地に白色の石灰質（貝殻片・）を含む。外底面に円盤状の脚を貼付する。両面に轆轤成形跡が残る。	南崖下 表採
	21	鉢	Ⅱ類－a	口	－ － －	素地…橙色 器色…外・鈍赤褐色 内・橙色	鍔端部に縄目状の突帯を巡らし、胴部に線彫りによる草花文（唐草文？）を施す。内面に轆轤成形跡が残る。	2トレンチ Ⅱ層
	22	鉢	Ⅱ類－a	口	－ － －	素地…鈍赤褐色 器色…鈍橙色	鍔端部に丸彫りの圏線を2条巡らし、胴部に貼付の唐草文（牡丹？）を施す。内面口縁部に丸彫りの圏線を巡らせる。	B－8 Ⅰ層
	23	鉢	Ⅱ類－a	胴	－ － －	素地…灰赤色 器色…灰赤色	外面に貼付の牡丹文を施す。内面に轆轤成形跡が残る。	C－8 Ⅰ層
	24	鉢	Ⅱ類－a	胴	－ － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・鈍橙色 内・灰黄色	外面に貼付の牡丹文（宝相華文？）を施す。内面に轆轤成形跡が残る。	B－13 Ⅱ層
	25	鉢	Ⅱ類－a	口	48.4 － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・鈍赤褐色 内・灰黄褐色	鍔上面に線彫りの凹線、外面頸部に丸彫りの圏線を2条、その間に1条の波状沈線を施す。内面に轆轤成形跡が残る。	B－8 Ⅰ層
	26	鉢	Ⅱ類－a	口	47.0 － －	素地…橙色 器色…橙色	鍔上面に線彫りの凹線、外面頸部に3条単位の波状沈線と丸彫りの圏線を2条巡らす。内面に轆轤成形跡が残る。	不明
	27	鉢	Ⅱ類－b	口	－ － －	素地…褐灰色 器色…橙色	素地に白色の細粒を多く含む。鍔上面に陽刻による圏線・波状文・唐草文を施し、鍔端部に陽刻の縄目文を2条巡らす。	表採
第70図（図版59）	28	擂鉢	Ⅰ類	口～底	34.3 15.5 9.6	素地…橙色 器色…外・橙色 内・明赤褐色	口縁部に泥釉を施釉。内面全体に10本単位の櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。両面に轆轤成形跡あり。	4トレンチ Ⅱ層
	29	擂鉢	Ⅰ類	口～底	36.9 15.5 9.6	素地…明赤褐色 器色…明赤褐色	口縁部に泥釉を施釉。内面全体に12本単位の櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。両面に轆轤成形跡あり。	B－8 表採
	30	擂鉢	Ⅰ類	口～底	32.9 14.4 9.6	素地…橙色 器色…外・橙色 内・明赤褐色	口縁部に泥釉を施釉。内面全体に8本単位の櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。両面に轆轤成形跡あり。	B－9 表採
	31	擂鉢	Ⅰ類	口	35.9 － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・鈍黄橙色 内・鈍赤褐色	鍔上面に丸彫りの凹線、内面全体に12本単位の櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。両面に轆轤成形跡あり。	B－8 Ⅰ層
	32	擂鉢	Ⅰ類	口	31.5 － －	素地…鈍赤褐色 器色…橙色	鍔端部に篦を入れ削る。内面全体に11本単位の櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。両面に轆轤成形跡あり。	B－8 Ⅰ層
	33	擂鉢	Ⅰ類	底	－ － 9.0	素地…橙色 器色…橙色	内面全体に13本単位の櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。両面に轆轤成形跡が残る。	B－8 Ⅰ層
	34	擂鉢	Ⅰ類	底	－ － 13.8	素地…橙色 器色…外・橙色 内・灰褐色	高台脇に削りを入れ稜を2ヶ所所有する。内面全体に櫛目を密に施す。両面に轆轤成形跡あり。	南崖下 表採
	35	擂鉢	Ⅰ類	底	－ － 10.4	素地…鈍橙色 器色…外・鈍橙色 内・鈍褐色	素地に籾殻を含む。内面全体に櫛目を密に施し、高台に推定径1cmの孔を1個穿つ。両面に轆轤成形跡あり。	T．P．4 Ⅱ層
	36	擂鉢	Ⅱ類	口	28.7 － －	素地…鈍赤褐色 器色…鈍赤褐色	外面に泥釉を施釉。鍔上面に丸彫りの凹線、内面全体に10本単位の櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。	南崖下 表採
	37	擂鉢	Ⅱ類	口	25.7 － －	素地…橙色 器色…橙色	鍔上面に丸彫りの凹線、内面全体に櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。両面に轆轤成形跡あり。	5トレンチ 表採

※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。

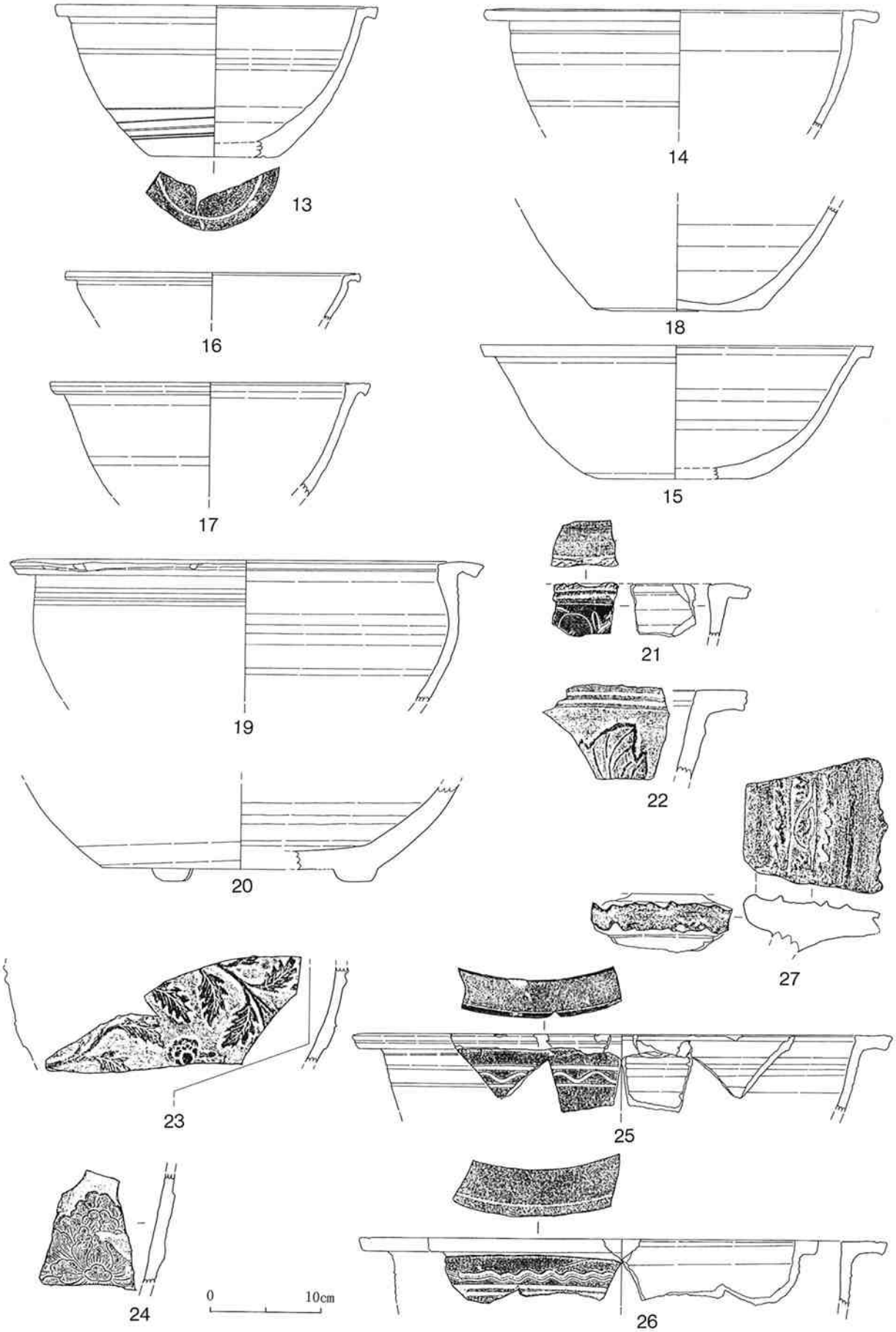
第25表 c　沖縄産無釉陶器観察一覧

図	番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	釉色・施釉範囲	素地・文様等の特徴	出土地点
第70図（図版59）	38	擂鉢	Ⅱ類	口	30.7 － －	素地…橙色 器色…外・鈍黄橙色 内・橙色	鍔上面に丸彫りの凹線、外面頸部に稜を形成する。内面全体に櫛目を密に施し、口縁部上端のみナデ消す。	T．P．5～6周辺 表採
	39	擂鉢	Ⅱ類	底	－ － 11.6	素地…明赤褐色 器面…外・鈍橙色 内・明赤褐色	外面胴部に丸彫りによる圏線を１条巡らす。内面全体に櫛目を密に施す。外面に轆轤成形跡が残る。	T．P．11 Ⅰa
	40	擂鉢	Ⅱ類	底	－ － 11.6	素地…橙色 器色…橙色	内面全体に櫛目を密に施す。内面に一部灰白色の石灰質が付着する。外面に轆轤成形跡が残る。	南崖下 表採
	41	擂鉢	Ⅱ類	底	－ － 10.2	素地…橙色 器色…橙色	内面全体に櫛目を密に施す。外面に轆轤成形跡が残る。	南崖下 表採
	42	擂鉢	Ⅱ類	底	－ － 9.0	素地…橙色 器色…橙色	内面全体に16本単位の櫛目を密に施す。外面に轆轤成形跡が残る。やや軟質。	T．P．4 Ⅱ層
	43	擂鉢	Ⅱ類	底	－ － 11.0	素地…橙色 器色…橙色	内面全体に櫛目を密に施す。外面に轆轤成形跡が残る。	B－8 Ⅰ層
第71図（図版60）	44	壺	Ⅰ類－a	口	15.4 － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・鈍橙色 内・鈍赤褐色	外面頸部に紐状の把手を貼付し、「新」の墨書を施す。肩部に圏線を２条巡らす。内面に輪積み成形の跡が残る。	B－8 Ⅰ層
	45	壺	Ⅰ類－a	底	－ － 19.5	素地…鈍赤褐色 器色…外・鈍褐色 内・橙色	外面に自然釉が掛かる。外面腰部に篦削りが施される。内面に輪積み成形の跡が残る。	4トレンチ Ⅱ層
	46	壺	Ⅰ類－b	底	－ － 27.4	素地…橙色 器色…外・鈍黄褐色 内・褐灰色	外面に黄釉を施釉。内面に輪積み成形の跡が残る。	E－13 P．7
	47	壺	Ⅱ類	口	13.6 － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・褐灰色 内・橙色	外面にマンガン釉？を施釉。内面に轆轤成形の跡が残る。	C－8 Ⅰ層
	48	壺	Ⅱ類	口	16.4 － －	素地…鈍赤褐色 器色…外・褐灰色 内・橙色	素地に白色の細粒を含む。外面にマンガン釉？を施釉。内面に轆轤成形の跡が残る。	フェンス・ネット間 表採
	49	壺	Ⅱ類	胴～底	－ － 13.0	素地…鈍橙色 器色…外・鈍赤褐色 内・明赤褐色	素地に白色の細粒を含む。外面に直径約１cmの孔を穿った縦耳を貼付し、その孔を通るように丸彫りの圏線を巡らす。	5トレンチ Ⅰ層
	50	蓋	－	庇～底	13.3 4.9 7.3	素地…鈍赤褐色 器色…灰赤色	全面にマンガン釉を施釉。庇上面に灰白色の石灰質が付着する。	不明
	51	瓶	－	胴～底	－ － 6.6	素地…鈍赤褐色 器色…褐灰色	外面胴部に丸彫りの圏線を２条巡らす。内面に成形の跡が残る。	T．P．4 Ⅱ層
	52	徳利	Ⅰ類	口～胴	5.6 － －	素地…灰色 器色…外・鈍橙色 内・橙色	口縁部に注口を設ける。外面肩部に丸彫りの圏線を２条巡らし、その間に波状沈線を施す。内面に轆轤成形跡あり。	C－8 Ⅰ層
	53	徳利	Ⅱ類	胴～底	－ － 8.8	素地…鈍赤褐色 器色…外・鈍赤褐色 内・灰色	両面に轆轤成形の跡が残る。	不明
	54	甕	－	口	66.7 － －	素地…鈍赤褐色 器色…鈍赤褐色	素地に白色の細粒を多く含む。外面頸部に圏線を３～４条巡らす。	表採
	55	甕	－	口	64.5 － －	素地…橙色 器色…外・浅黄色 内・灰褐色	素地に白色の細粒を含む。外面に黄釉を施釉。鍔上面に丸彫りの凹線を施し、外面頸部に突帯を巡らす。	B－11 表採

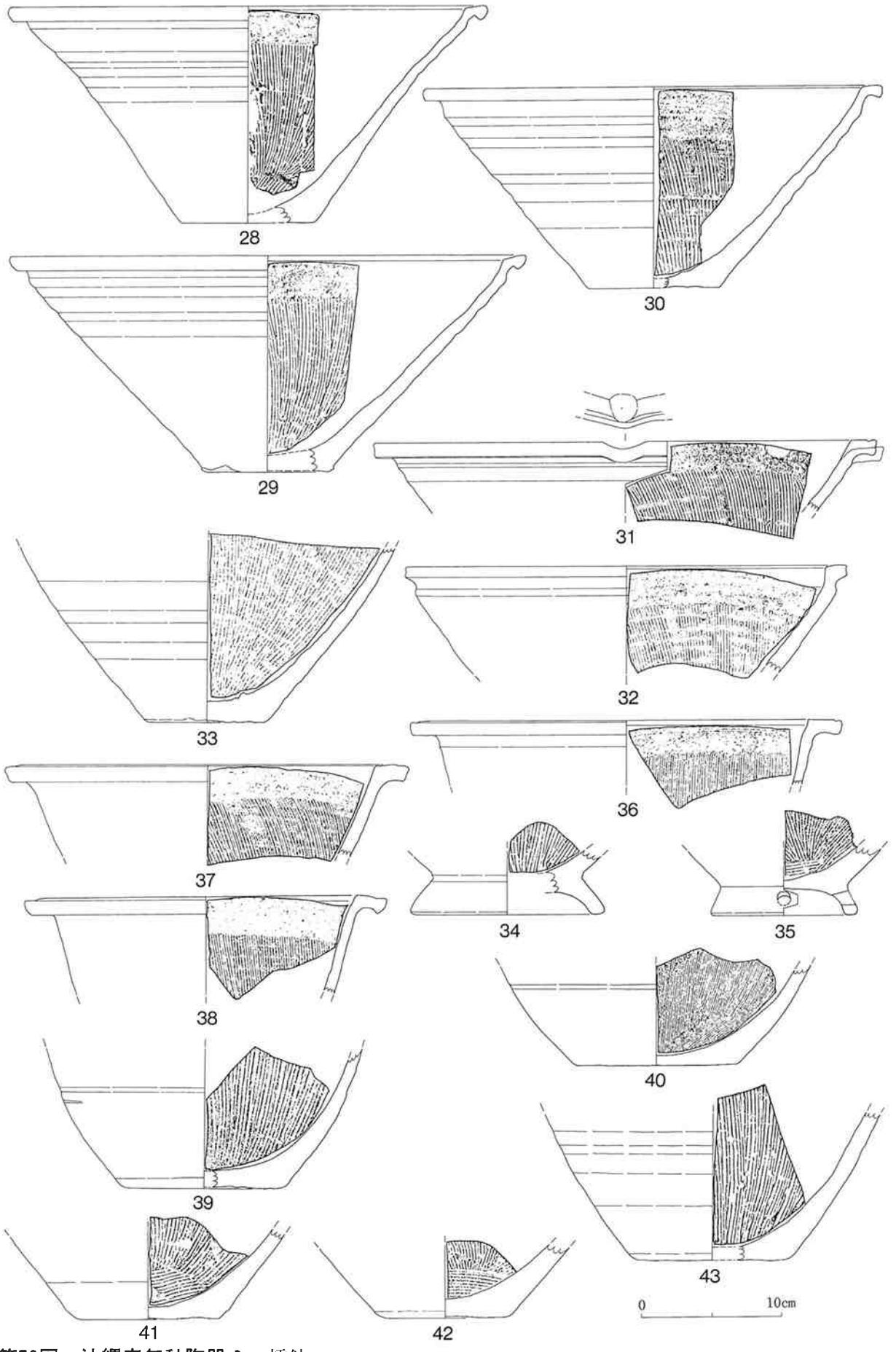
※口径・器高・底径の単位はcmで、（　）は推定値を表す。



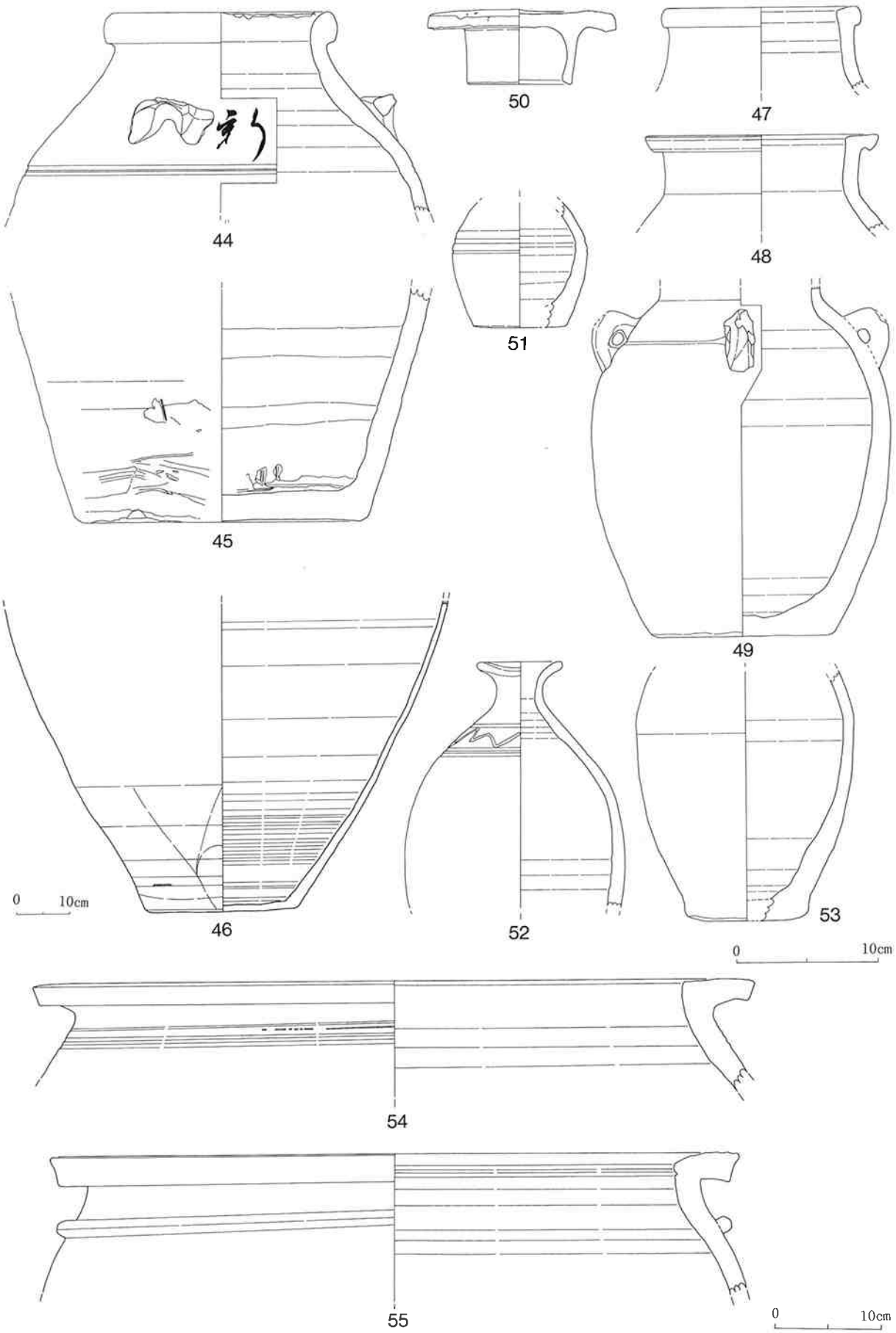
第68図　沖縄産無釉陶器 1　碗(１～３)、皿(４～６)、火炉(７．８)、水鉢(9.10)、鉢(11.12)



第69図　沖縄産無釉陶器 2　鉢



第70図　沖縄産無釉陶器 3　擂鉢



第71図　沖縄産無釉陶器４　壺(44～49)、蓋(50)、瓶(51)、徳利(52.53)、甕(54.55)

第23節　塼

塼は総数208点余に出土した。但し完全形は僅かで殆どのものが破片からなる。残存する形から、平面形で長方形、正方形、三角形があり、それぞれ抉りや下駄状の鍔が付されるものがあり、形態にバリエイションがみられる。分類の基準を歓会門・久慶門出土資料（註１）に準じると、今回の新タイプを１つ加え９タイプである。

第72図１は平面形が長方形を呈する塼で、長辺の一端を大きく欠いている。一面には約1.7㎝の太い粘土紐で細工された雲形文がみられる。使用方法との関係が考えられるが、文様は構図からすると面の中央にはなく、やや片側に寄りバランスが悪い。これも使用されていた状況に関連すると思われるが器面全体に漆喰の付着痕がみられる。焼成は還元焼成炎で、薄い褐色をおびた灰色を呈する。残存長は約23㎝、幅は約22.1㎝、厚さは4.3㎝、現存重量は4.0㎏である。

同図２は下駄状の鍔がついた塼で、大きく破損しているため全体の形状は不明である。焼成は還元焼成炎の灰色瓦である。鍔付きの塼はこれまでの首里城跡歓会門・久慶門内郭調査出土資料にもあるが、本資料はいずれも該当しない新しいタイプである。なお下駄状と仮称した端部は斜めに整形されているため、いわゆる下駄のように水平には成っていない。器厚は3.2～3.5㎝である。

註

註１　当眞嗣一、上原静、大城聖子　『首里城跡－歓会門・久慶門内郭地域復元整備事業にかかる遺構調査－』　沖縄県教育委員会　1980年

第26表　塼・瓦器法量一覧

図・図版	種類	長さ(㎝)	幅（㎝）	厚さ(㎝)	重さ(ｇ)	調　査　区	備　考
第72図１図版68	塼	22.1	(23.0)	4.3	4000	表面採集	
第72図２図版68	塼	(17.0)	(13.0)	3.2～3.5	1920	B-11グリット表土層	
第72図３図版68	瓦器	(4.0)	(5.4)	0.5	48	D－５グリットⅠ層	香炉？
第72図４図版68	瓦器	(6.1)	9.5	3.0	222	C－８グリットⅠ層	火鉢？
第72図５図版68	瓦器	(2.8)	(7.1)	3.4	40	１トレンチⅡ層	

第24節　瓦　器

瓦器は表面が灰色を呈する軟質の土器で、僅か３点の出土である。

第72図３は器の飾りを成していた獅子頭部分の破損資料である。獅子の顔は前歯の一部をみせるが口を締めている。内面は丁寧に整形され湾曲し、器の一部であることが確認できる。色調は素地が灰色で、現段階では彩色及び釉は認められない。大きさは縦４㎝、幅5.4㎝ 、高さが約2.5㎝、器厚は0.5㎝である。

同図４は明褐色を帯びた口縁部の破片である。口縁の上面観が直線を構成することから箱形が想定される。口縁部は水平方向に外反し、内面側が引っ張られる形で曲面する。また、口唇部は平坦に整形してある。現存する表面はかなり風化が進んでいるが、全体に薄く白い化粧がみられ、その上に黄色、緑色、桃色等の色を使った格子文様とその中に花文を施している。胎土は精錬され不純物はみられない。厚さ約３㎝である。同図５も同一固体の胴部と思われるもので、色調、胎土、彩色等が共通している。外面に横位の凸帯文を巡らしている。凸帯文の幅は約１㎝を計測する。本器の用途は火鉢であろう。

第25節　屋　瓦

総破片数が3,789点の屋瓦である。グスク時代から近代にわたる各時代の屋根瓦が出土した。造瓦技術から分類すると朝鮮、日本、中国の三か国に系譜をもつ瓦からなる。朝鮮に系譜をもつ瓦は高麗系瓦と称し、還元焼成の灰色瓦である。日本に系譜を有する瓦は日本本土の中世における造瓦技術で作成された還元焼成瓦の大和系瓦と、近世以降に属する燻し瓦の２種の日本瓦である。また、中国に系譜をもつ瓦は明朝期の造瓦技術で作成された瓦を示し、還元焼成の灰色と酸化焼成の赤色瓦の２種類がある。

本地区の種類別出土量は登場時期の早い高麗系瓦が16点、大和系瓦が20点と僅少で、後代の明朝系が3,738点と圧倒的に多い。さらに、近世以降の日本瓦も微量であるが12点出土している。層位的な状況については冒頭でも記したとおりすべて近年における造成工事のため破壊が著しく、遺構及び層位的な関係はつかめていない。以下、種類ごとに残存状態の良好な資料を図化し報告する。

第27表　各種瓦の地区別出土状況

凡例：トレ＝トレンチ　ＴＰ＝テストピット

種類＼調査区			表採	9・8トレ	3・6トレ		7・1トレ				5トレ		4・2トレ			11トレ							12トレ		TP1	TP2
				Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ下部	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰb	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ下部	P7	P8	P9	P10	Ⅰ	P4	Ⅰ	Ⅰ
朝鮮系瓦	高麗系瓦	軒丸瓦																								
		軒平瓦																								
		丸　瓦																								
		平　瓦	7				1		1		1				3											
		有段瓦																								
日本系瓦	大和系瓦	軒丸瓦	1																							
		軒平瓦	1																							
		丸　瓦	3								1															
		平　瓦	7		1		1						2							1						
		雁振瓦											1													
中国系瓦	明朝系瓦	軒丸瓦	135		19		11	4	3		96	4	34	1	22	1	1		1	3	1		1	1		2
		軒平瓦	78		15		2	2	3	1	40	2	15		19	3		1	1			1	1	1		
		丸　瓦	390		14	5	12	2	9		58	2	52	1	71	12	5		10	49	27	3		19	1	3
		平　瓦	1057	4	55	6	35		20	1	150	5	84	51	214	32	19		23	115	37	31	12	83	10	8
		飾り瓦																								
日本瓦	大和瓦	軒丸瓦																								
		軒平瓦																								
		丸　瓦	1																							
		平　瓦	7																							

種類＼調査区			TP3			TP4			TP5		TP6			TP7	TP8		TP9		TP10			TP11			TP12	合計
			Ⅰ	Ⅰ黒土	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰb	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰ	
朝鮮系瓦	高麗系瓦	軒丸瓦																								0
		軒平瓦																								0
		丸　瓦																								0
		平　瓦								1									1				1			16
		有段瓦																								0
日本系瓦	大和系瓦	軒丸瓦																								1
		軒平瓦																								1
		丸　瓦																								4
		平　瓦			1																					13
		雁振瓦																								1
中国系瓦	明朝系瓦	軒丸瓦	1	2	2	2	6				4			1			3	1	3	6		2	3	3	2	381
		軒平瓦		1		1	3							2	2	1			1	1	1	1	1	1	3	204
		丸　瓦		12	5	3	15		2	8	4	1	9	4	1		6						2	4	4	825
		平　瓦		33	29	13	78	1	1	3	4	5	2	12	1	7	17			22	1		11		36	2328
		飾り瓦																								1
日本瓦	大和瓦	軒丸瓦																								0
		軒平瓦																								0
		丸　瓦																								1
		平　瓦																					3		1	11

1．朝鮮系瓦

高麗系瓦は平瓦のみ得られ、細片化が著しいものであった。僅かに図示しえたのは以下の５点である。

いずれも平瓦の凸面には羽状の打捺文様がみられ、羽状文の太さ、数、方向、打捺銘等に注意し観察した。第73図１は凸面の羽状目が比較的細かく、斜位方向と横位方向の打捺目が認められる資料である。色調は全体に赤褐色を呈し、いわゆる窯変したものと考えられ。凹面には布目痕と糸切り痕が明瞭に残っている。同図２の羽状文は打捺板が右から左に行われていることが分かる資料である。色調は灰色で、厚さは前資料の１と同じ２㎝である。同図５も前資料と同じく細片であるが、表裏面が褐色、内面が灰色をおびる厚さが1.8㎝とやや薄い資料である。打捺銘のみられる資料は２点である。その内の３は約三 分の一程の打捺板の重なりがあり、見ずらいが明らかに「大天」銘のある平瓦片である。凹面には糸切り痕と布目痕が明瞭に残る。色調は灰色で、厚さは２㎝である。同図４は格子文と無文の枠を有する平瓦の破片である。色調は表裏面ともに褐色を呈する。厚さは1.6㎝と薄手である。

2．日本系瓦

2-1　大和系瓦（中世瓦）

日本本土の造瓦技術で作成された沖縄産の瓦で、軒丸瓦、軒平瓦、雁振瓦、丸瓦、役瓦の５種類を確認できる。掲載した６点は代表的な資料である。

第73図６は瓦当を大きく欠損した軒丸瓦資料である。瓦当文様は巴文で、頭部分はみられないが足の長い巴文様である。丸瓦と瓦当との接合は丸瓦の端部に刻み痕が認められるなど、印籠継ぎ技法を用いている。器面の風化は著しいが、凹面には格子状の細い紐圧痕が残る。丸瓦の凸面は摩滅が著しく、叩き目をみることが難しい。色調は灰色で、焼成は悪い。

同図７は軒平瓦の瓦当部の小破片で顎は段顎に整形されている。瓦当の文様は中心飾の花文と両側に唐草文で構成されている。なお、中心飾りの花文は５枚で、簡略された描きになっている。色調は褐色を帯びる。

同図11は丸瓦の両平瓦部が欠落し、中央の丸瓦部分のみを残した雁振瓦の破片資料である。丸瓦部分は端部側が残り、端部から11.5㎝の箇所に口径1.7㎝の釘穴をみることができる。凹面側の端部面取りの幅は５～６㎝と広くなされている。器壁の厚さは2.6㎝である。丸瓦部の凹面には縦位の溝状の整形痕が残されている。色調は灰色を帯びる。

同図８、９は丸瓦の資料である。前者は玉縁部で欠損している資料で、凸面に羽状の打捺文が認められる。後者は玉縁の形状をみることができる資料で、凸面側に縄目状打捺文がみられる。凸面側の整形時に、叩き板を使用後、叩き面は撫で調整で消されるが、端部側に残る良好な事例である。

同図10は破損した一面を除くその他の面が丁寧に整形された役瓦の破片である。側面はいずれも曲面をつくる。裏面は撫で整形された面をしている。表面の文様はヘラ状工具で段状に片彫りを重ねたもので、段部分を詳細に観察すると段の溝に細い細沈線が認められる。なお、大きく破損しているため今後の資料をまたねばならないが、恐らく、鬼瓦か雲瓦のような彫像瓦になるものと推測される。色調は灰色で、厚さは約3.5㎝である。

2-2　大和瓦（近世瓦）

近世以降の日本本土で生産され瓦で、沖縄に移入された瓦である。第73図12の一点である。器表面は燻された黒灰色をおび、視る角度により銀粒が光沢を放つ。凹面は丁寧な撫でが行われ平滑な面を呈するが、対する凸面は整形時の擦痕などがめにつくやや粗い平面を呈している。側面は二段に分けて面取りがおこなわれている。但し、面の角には陵がみられない。使用の痕跡として凹面の側面には漆喰の付着した痕がある。厚さは約1.7㎝である。

3．中国系瓦

本調査区で最も多く得られた瓦で、いわゆる明朝系瓦と称する瓦群である。種類は軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、役瓦の５種である。明朝系瓦は焼成技法、文様、整形技法の違い等から２種類に大別できる。基本的にはⅠ群は還元焼成の灰色瓦で、Ⅱ群は還元焼成の灰色瓦と酸化焼成の赤色瓦からなる。基準については以下に概略する。

Ⅰ群　還元焼成炎で焼かれた灰色瓦で、焼成がやや弱く泥胎質を呈するものが多く、金属等の堅いもので容易に傷が付きやすい。色調は基本的には灰色であるが、まれに褐色をおびるものもある。ただし、褐色系瓦の多くが胎土中央については灰色～黒色をおびている。軒瓦の瓦当文様は具象的な花文や著しく簡略

化した花文がみられる。花文の珠文は比較的小さく数が多い。軒瓦の整形技法についてみると、軒丸瓦の瓦当と丸瓦部との接合はやや丸瓦の端部を下げて瓦当裏にほぼ90度の角度で行われている。軒平瓦の瓦当と平瓦部の接合角度は100～115度の傾斜がつき、接合した瓦当裏面は粘土を大量に使用し、結果として厚く仕上げてある。また、平瓦の凹面にみられる制作時の桶絞圧痕などの窪みなどもそのまま未整形になっているものが多い。本報告では色調の違いで以下の２種類に分けた。

Ⅰａ類　灰色瓦で、表裏及び胎土中央まで灰色を呈しているもの。
Ⅰｂ類　褐色瓦で、胎土中央が灰色を呈しているもの。なお、まれに全体が褐色をおびるものもある。

Ⅱ群　Ⅰ群に比較すると明らかに焼成が良い瓦質の瓦群である。焼成は還元炎焼成の灰色瓦と酸化炎の赤色系瓦が認められる。前者は前述のⅠ群と異なるところは、焼成を比較すると良好で、胎土中央まで灰色を呈し、全体に薄手に整形されている。後者の赤色瓦は赤～明褐色の瓦質タイプと陶器質に焼きしめられ暗褐色を帯び自然釉がかかるものがある。Ⅱ群の文様はⅠ群に比較すると花文は抽象化がかなり進行したものが多数を占めている。軒丸瓦の花文を巡る珠文は大きさが大きく、その数も少ない傾向にある。整形技法については、軒丸瓦は瓦当面と丸瓦との接合は段差がない状態になり、その角度も105度と軒平瓦と同じ傾斜を持たせるようになる。軒丸瓦の場合は特に平瓦との接合面に粘土の利用が少なく押さえられ接合されている。したがって瓦当の厚さは薄い印象をもつ。平瓦部の凹面にみられた桶絞圧痕の凹も調整され粘土で埋めているものが多い。本類は焼成技術面から３種類に区別される。

Ⅱａ類　灰色瓦
Ⅱｂ類　赤～明褐色瓦
Ⅱｃ類　暗褐色瓦

3-1　Ⅰ群瓦

本類に属する瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の４種類で、出土量は後述の２群に比べると少ない。

1）軒丸瓦

Ⅰａ類は第74図１の瓦当の形を残す灰色瓦である。瓦当径14.3cm、丸瓦部の厚さ1.4cm、瓦当の厚さ1.2cmである。珠文は大きさが約４mm、間隔が約1.5cmと狭く、その数は20点と多い。中央の花は花弁が対になるように一枚で包むように簡略して誇張され、その内部の花芯は３本の棒状に表現されている。その下には小さい葉や茎状のものがみられる。花の種類は特定できないが、牡丹文様の変化したものと思われる。花は側視形の花文である。瓦当裏面は撫で調整され、瓦当顎近くはかなり薄く整形されている。瓦当と丸瓦の接合方法として、瓦当裏面の縁よりは幾分丸瓦端部を下げた位置で接合している。そのため接合部に段が形成されている。また、瓦当面と丸瓦部の接合角度は直角かそれに近い穏やかな傾斜が付されている。花文の彫刻肉は全体に厚みがあり、外周縁より外面にせり出す形でみられる。

Ⅰｂ類は同図２に示した瓦当面を大きく欠落した資料である。表裏面とも褐色をおび、胎土中央は灰色を呈する。瓦当文様は側視形の花文で、花弁や葉が左右対に配されている。花芯は無文の半丸状を呈し、その中央には上方へ延びる雄しべ状の蔓が表現されている。花弁の先端は二叉状を呈する。珠文は約４mmと小さく、その間隔も1.8cmとせまい。外縁幅は1.1cmである。

2）軒平瓦

本類は第75図１～５の花文の表現が異なる５点である。いずれも破損し、完全形のものはない。１は丸い花芯で表面に格子の刻みを施している。また、花芯を包む両側の花弁は弁先が三叉状になり広がりをみせている。葉は中心の葉脈のみ凸線で描き外側に広がるように表現されている。平瓦部との接合角度は95度と傾斜している。平瓦の凹面側には桶絞圧痕がそのまま窪みとして残され、接合時にさらに丁寧な整形はみられない。また、瓦当裏の接合部位はかなり粘土が使われ肥厚している。２も１同様の側視形の花文であるが、表現がやや異なり、花芯は丸くするのみで、花弁も先端が大きく二叉状を呈している。また、側面に付く葉はやや曲線状に描き表現されている。以上の両資料とも表面が褐色で胎土中央が灰黒色をおびている。３、４はさらに細破片で、文様が前記の花文 と同じく花芯が丸く、花弁が囲むタイプである。後者は１のバリエイションのひとつとみられるタイ

プである。瓦当裏の平瓦との接合部分は充分に粘土が厚くなっている。前記の瓦当文様が花、葉、茎など部位がやや具象的であったのに対し、５は抽象化した花文のタイプである。

3-2　Ⅱ群瓦

本類の瓦の種類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、役瓦の５種類である。さらに軒丸瓦は瓦当の大きさにもバリエイションが認められるため、小型、中型（標準）、大型の三種に細分した、以上のようにⅡ群瓦は種類、出土量とも本地区の主体となる瓦である。

1）軒丸瓦

Ⅱａ類は第74図５、６に示した２点の灰色瓦である。５は瓦当と丸瓦の形を良く残した資料である。瓦当面と丸瓦部の接合角度は104度である。また、瓦当裏との接合部に段差はない。色調は表裏及び内面とも灰色を呈する。瓦当文様は側視形の花文で、弁先が二叉状に表現されている。珠文は大きさが約0.4cmで、その間隔は2.3～2.7cmである。花文の肉厚は薄く外周の縁より低く表現されている。当径約14.7cm。丸瓦の長さ29cm、玉縁の長さ６cmである。丸瓦の凸面には漆喰の付着がある。

同図６は５とほぼ同じ文様と調整をするもので、丸瓦部との接合において段差はなく、接合角度は95度と傾斜角が付いている。瓦当径は14.2cmである。

Ⅱｂ類は３、４、７～９の赤～明褐色系瓦である。軒丸瓦の瓦当の大きさは３種類認められる。

①．小型瓦当

第74図３、４の２点である。３は前述の５、６と同様の牡丹文様を表現したもので、瓦当が小さいためか、大分花文が線状に表現されている。花文様は肉厚が薄く、ほぼ平坦である。４は瓦当径が10cmを計測する。大きさの割には厚さは約２cmで比較的厚手である。瓦当の花文は斜上から視た様な花で、中央には柿の種状の花芯があり、その上下側で包み込むような花弁が広がっている。

②．中型瓦当

この大きさは径が14.2cmから14.8cm大のものをいう。要するに最も多く出土する軒丸瓦である。図７は側視形の花文様で、花弁の肉付きは薄く平坦である。大きさは推定13cmである。図８は俯瞰した形の花である。珠文は９を巡らしその数は極端に少ない。

③．大型瓦当

第74図９は内区の華文の肉付けが著しく行われ、外周高より前面に張り出した形になる。花文の形状は正視形と側視形の中間にあたる俯瞰した形で表現されている。丸瓦部分の接合から破損がおよんでいるが、推定瓦当径は約16cmである。

2）軒平瓦

Ⅱａ類は６～10の５点の灰色瓦である。瓦当文様は花と葉をモチーフに描かれている。中央の花芯に５枚の丸い花弁を配するのが基本形とみられるが、花弁の５枚の１つが変形し、もう一つの花芯のようになるものがある。それとともに葉も変容しており、花文の簡略化の推移とバリエイションをみることができる。具体的には５の花芯は丸く饅頭のようなものが、６、９で花芯の表面に格子状の刻みが入る。さらに７、８、10では花芯の平面形を四角に表現している。花の両側に配置されている葉についてみると、葉脈が５本程度のは花の表現も基本形近いものであるが、葉脈の数が10本と数が多いものは、葉の外周にまで針のように飛び出すように表現されている。

製作技術の面からみると、瓦当と平瓦との接合部分にあたる裏面にはⅠ類に比べると格段に粘土の厚さが薄くなっている。さらに接合した平瓦の凹面にある紐圧痕も埋められたものが多く、文様の簡略化とは異なり整形は丁寧である。

Ⅱｂ類は11～17の７点である。瓦当文様の類例として、色調の相違点を除くと11、13、15がかなり近い笵を用

いて製作したものと考えられる。その点で12、17、16は現段階ではⅡb類にはみられない花文様である。さらに花文が抽象化され、正視形と側視形の中間的な視点で描かれた花文に思える。

3）丸瓦

第76図1はⅡ群a類に属する玉縁の付く丸瓦である。端部側が大きく破損しているが、模骨巻の二分割により製作された資料である。凸面は撫で調整がおこなわれているが、玉縁段部の上縁はとくに横方向の強いなでがあり、波状の段を整形している。また、表面には白色の漆喰が付着し明らかに使用された瓦である。凹面には布目圧痕が覆い、僅かに斜め縦位の紐圧痕がみられる。糸切り痕は観察されない。色調は灰色を帯びる。厚さは1.4～1.6cmである。玉縁の長さ約5.8cmである。

玉縁の表面に刻み傷の特徴的なものを2点を取り上げる。同図2は凸面側の表面に先の鋭い道具により×状の刻みを付けている。さらに凹面側にも×状の紐圧痕が認められるが、斜格子状の紐圧痕になるのか注目したい。色調は灰色である。同図3も同じく玉縁部分の表面に刻みがなされるものであるが、文字としては「鬼」の漢字にみられる。ただし、部主の田は日になっているところから字の間違いかと思われる。玉縁の端部はやや斜めに撫で整形され平面ではない。玉縁の長さは約5.3cmで、色調は灰色である。

4）平瓦

第76図6は長軸に沿って大きく割れた平瓦の破片である。凸面には両端部側に横位の撫で調整が明瞭に残っている。凹面には布目痕が残り、糸切り痕をみることが難しい。凹面にはさらに桶に使われていた紐圧痕が認められる。さらに、側面には分割目安になった縦の棒圧痕がみられる。分割面は割面のみで整形は行われていない。両端面には撫で痕がみられるが、特に上端部には細かい傷やかすり傷が多くみられる。長軸の長さ25cmである。

同図4は平瓦の表面に花の葉状の線刻をした破片である。5も同様に刻み文様を描くが破片資料のため、線刻の表現した意味は不明である。

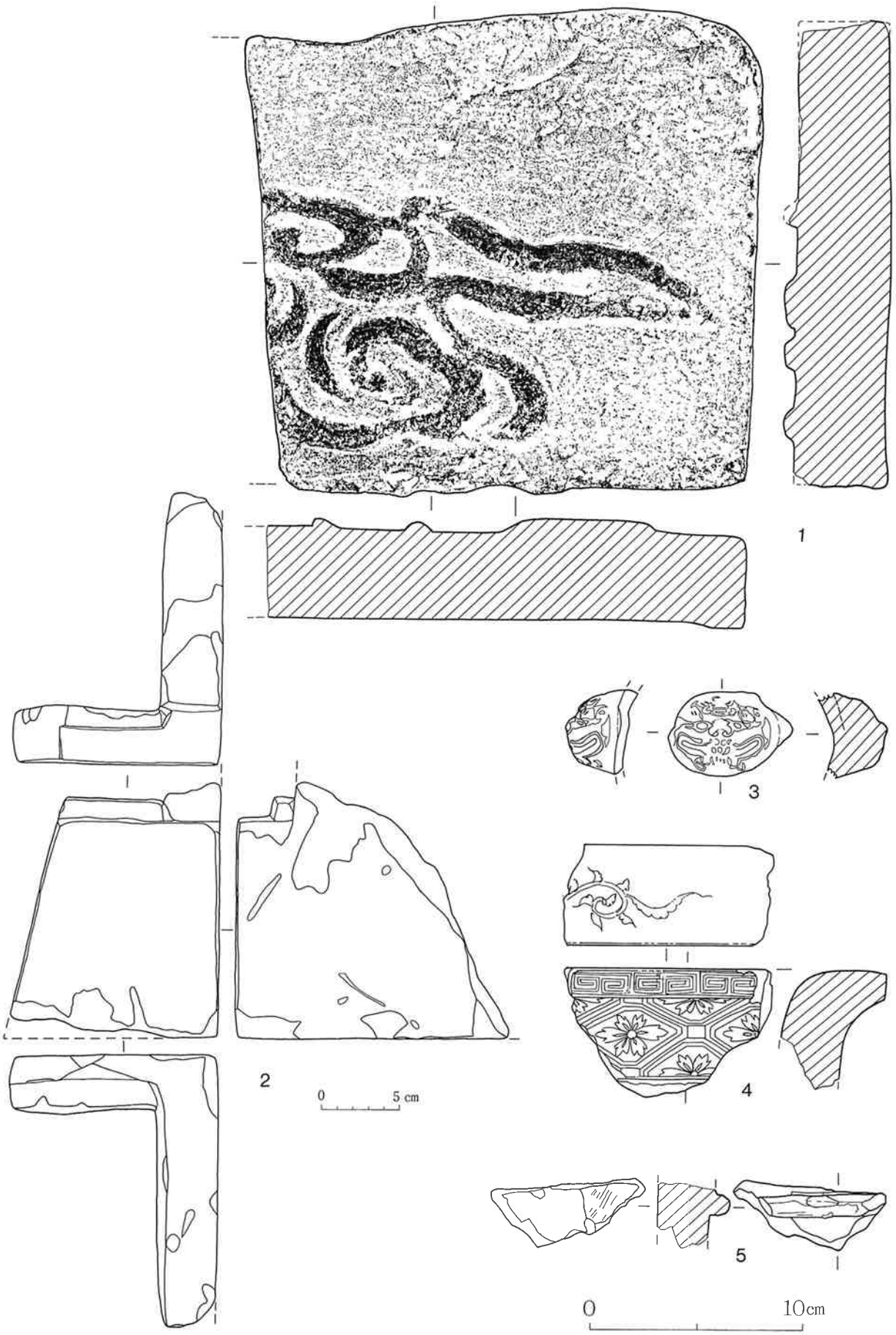
5）役瓦

いわゆる鬼瓦や獅子の巻き毛の破片とみられる資料で、2点出土している。第76図11、12は胎土が精錬され細かく、色調が肌色をおびた瓦である。前者は渦が左巻をで、表面の渦筋の部分には光沢のある緑色釉が残っている。裏面は明らかな剝離を面呈している。後者は同質の胎土で、当資料にはやや鉄釉に近い薄い黒釉が塗布されている。

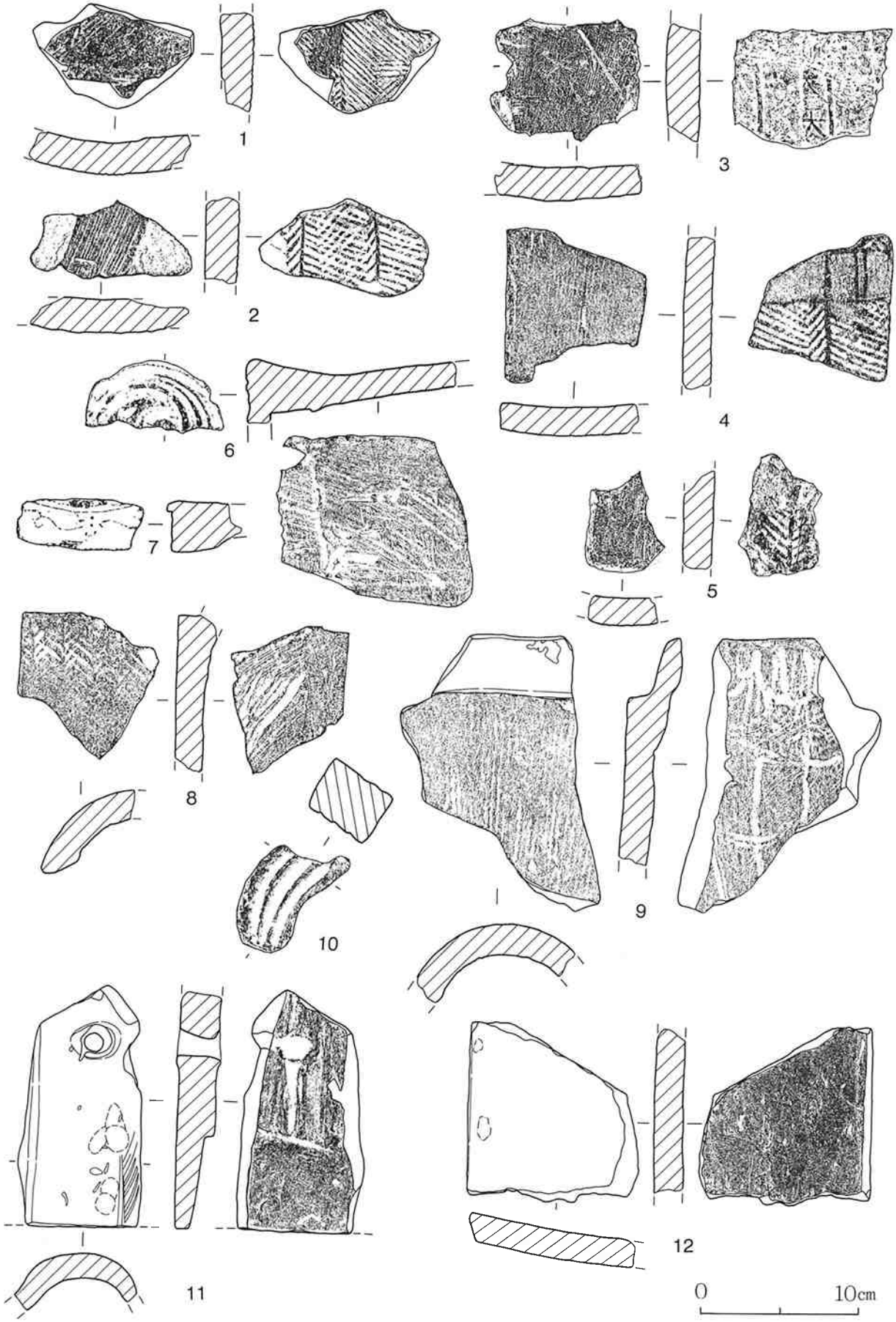
第76図10は雲形の飾り瓦で、正殿にみる大棟の側面に施されている同種のものと考えられる。酸化焼成炎の赤瓦である。表面には雲状のひだが施されている。瓦の厚さは3.2～3.5cmである。

註

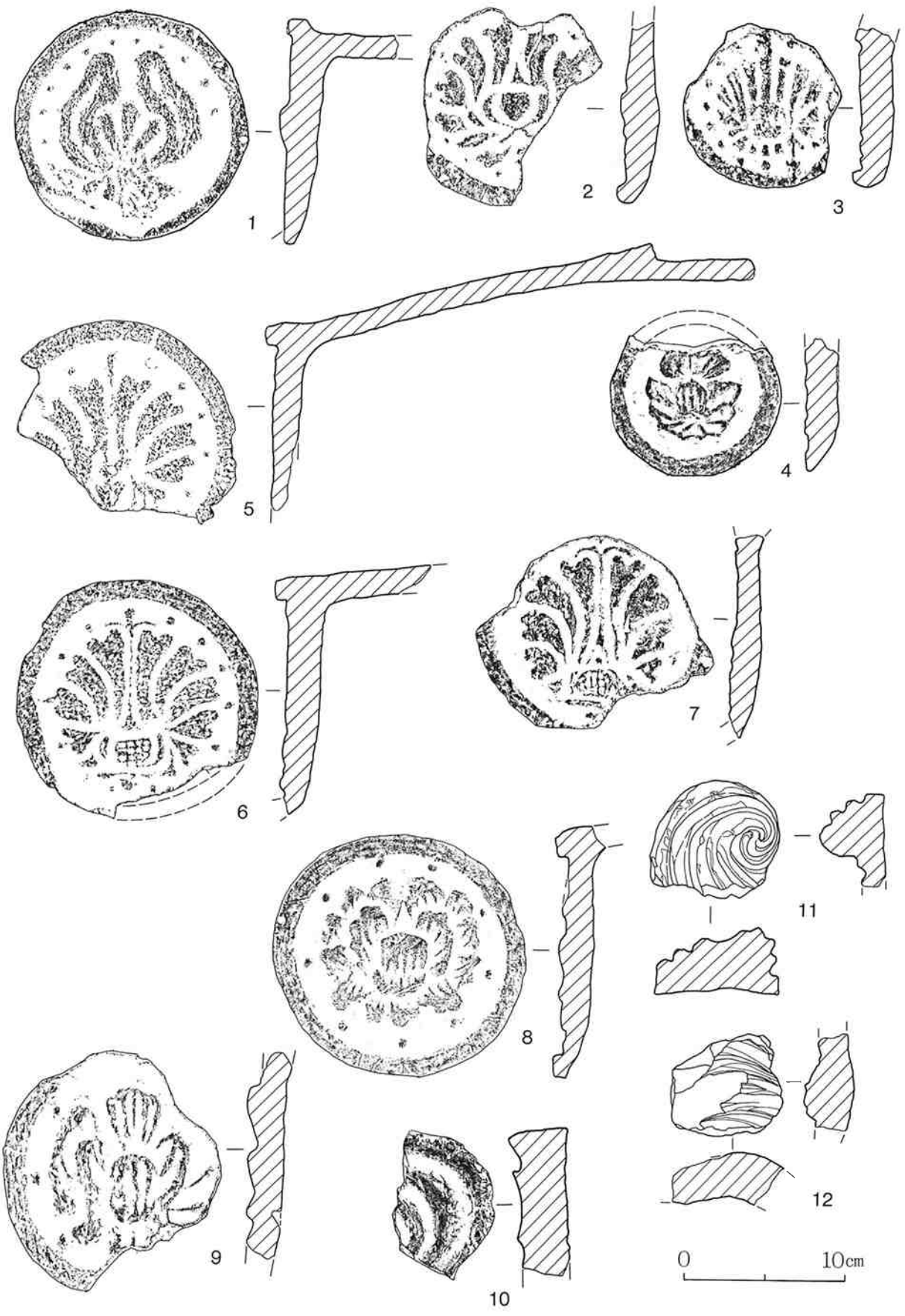
註1　金城亀信一、上原静、城間肇、他『首里城跡－京の内発掘調査報告書(1)』　沖縄県教育委員会　1998年



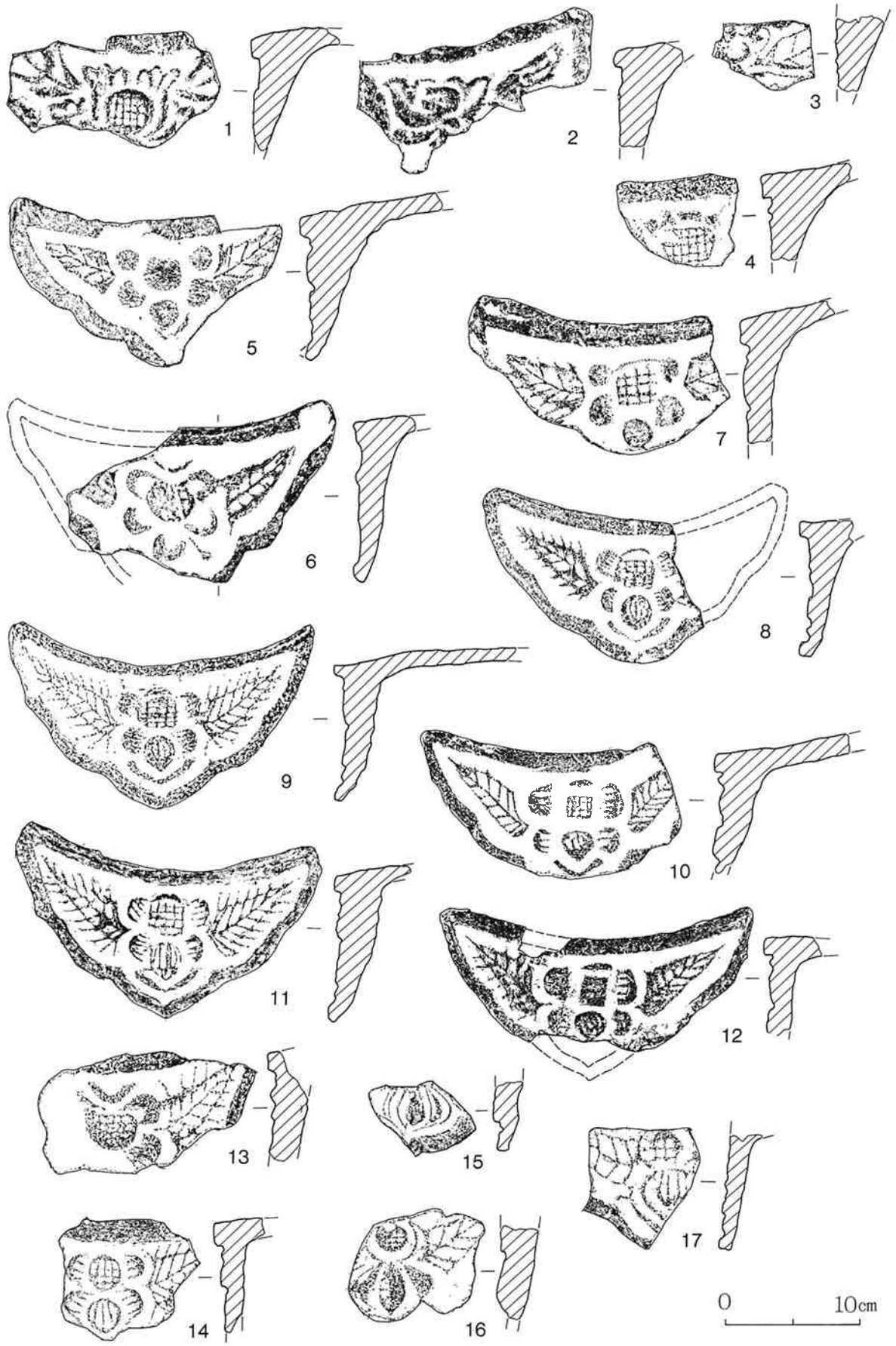
第72図　塼：1・2、瓦器：3～5



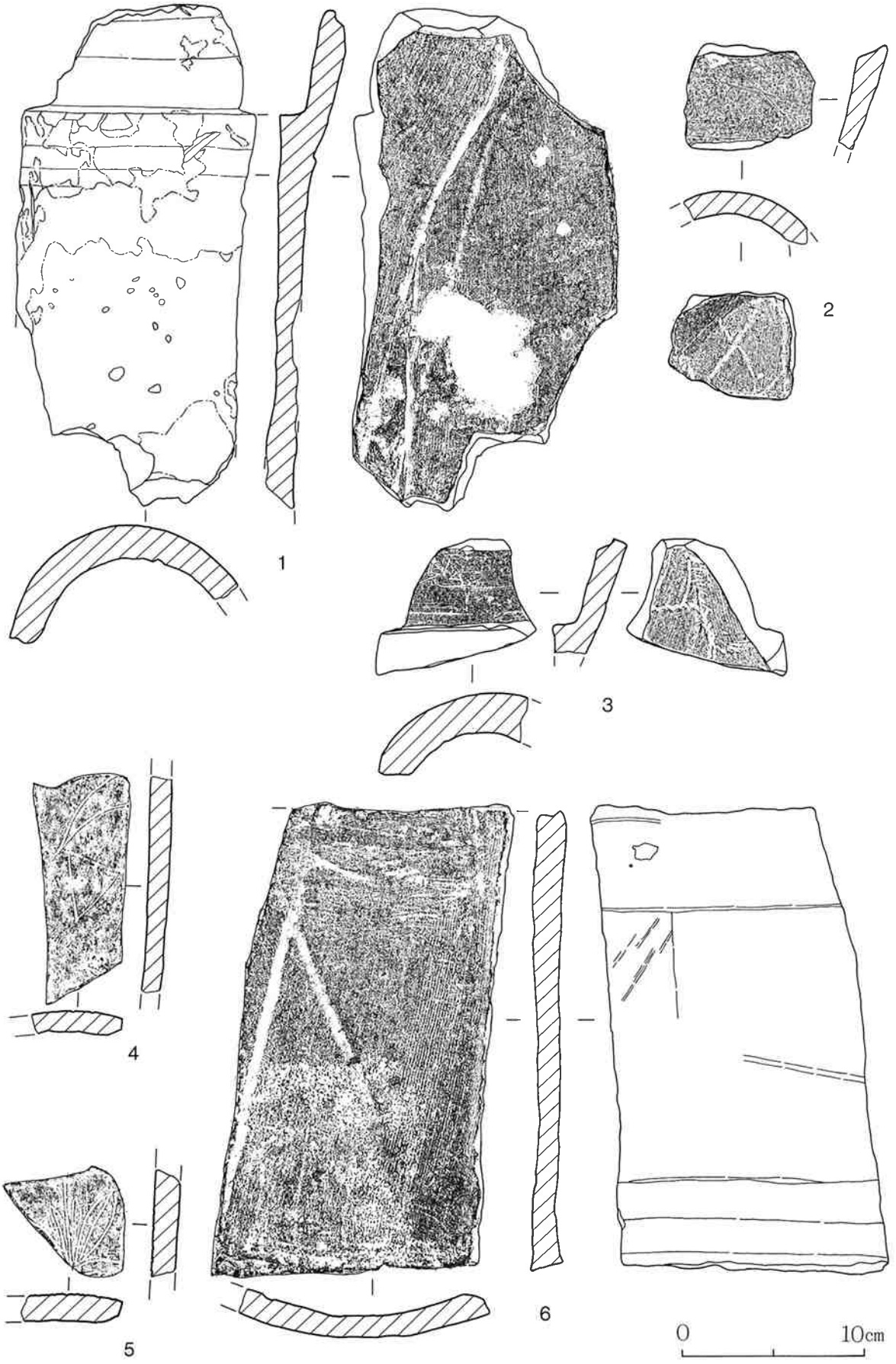
第73図　高麗系瓦：平瓦1～5、**大和系瓦**：軒平瓦7、丸瓦8・9、役瓦10、雁振瓦11、**近世大和瓦**：平瓦12



第74図　明朝系瓦：軒丸瓦



第75図　明朝系瓦：軒平瓦



第76図　明朝系瓦：丸瓦1～3、平瓦4～6

第26節　円盤状製品

本製品は日常生活において使用したものを、円形に打割調整した二次利用品である。

首里城管理用道路地区において358点出土した。うち、完形率は9.5％であり、完形品の直径を表したものが、表０である。

素材については、首里城ということから、種類が11種と非常に豊富である。他の遺跡に比べ素材となる瓦の種類が多い。破損品ではあるが、格子文を有する灰色瓦を利用する資料が得られた。なお、素材が白磁のものは、第０節で白磁碗底部で扱った。

図０－16のように沖縄産施釉陶器の甕の肩部に貼付される円形の凸帯文を利用した資料が出土しており、表面の文様についても、素材と同様に選択の基準になると思われる。また、図０－13の資料は緑色変岩製であり、石器か建築部材の二次利用品と思われるため、円盤状製品として扱った。

ここでは、特徴的なものを図示した。

註

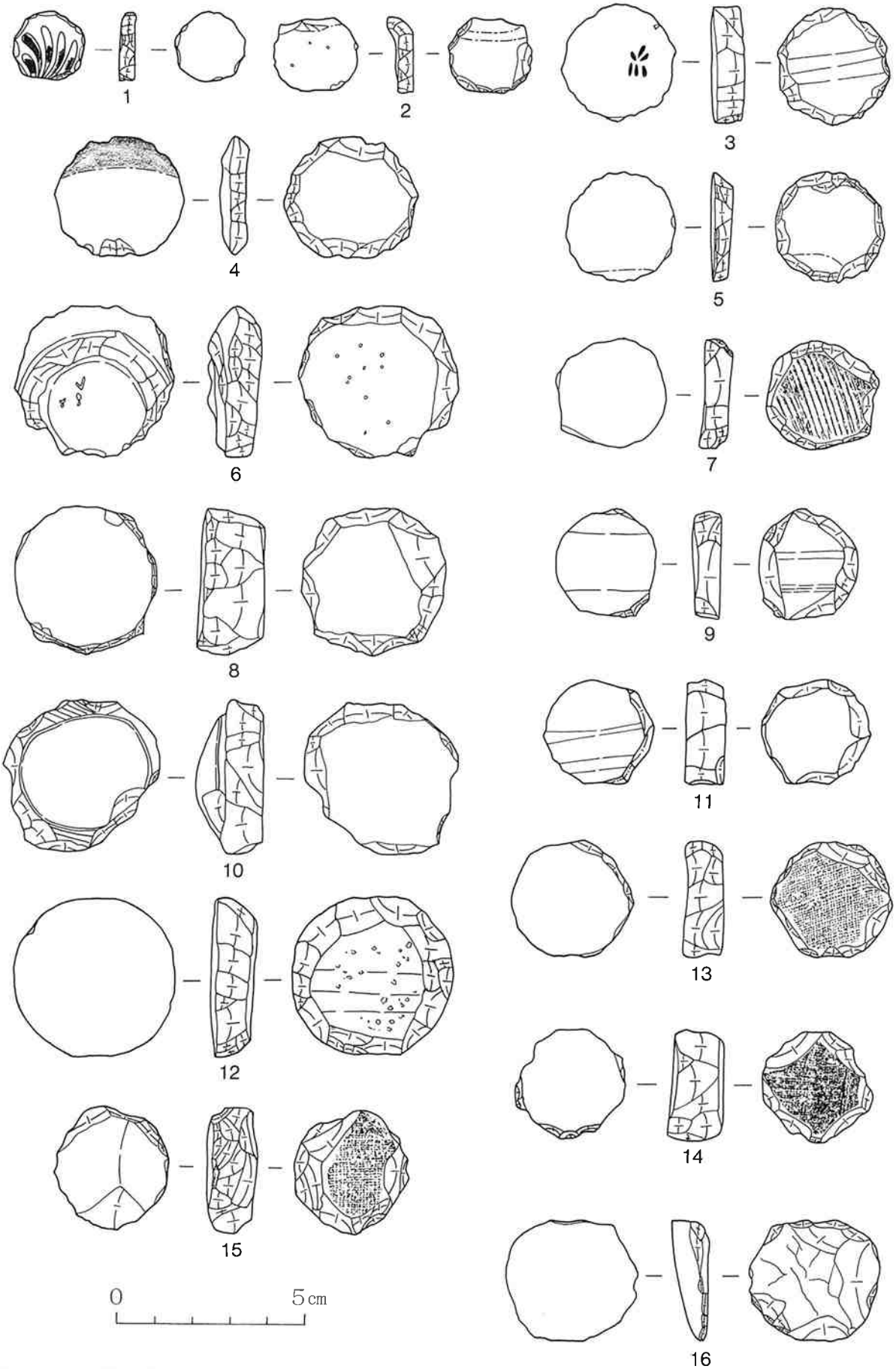
上原　静　「県内出土の円盤状製品について」『読谷村歴史民俗博物館紀要第10号』1986年

島袋洋・金城亀信・豊見山禎他　『湧田古窯跡（Ⅱ）－県庁舎議会棟建設に係る発掘調査－』　沖縄県教育委員会　1995年

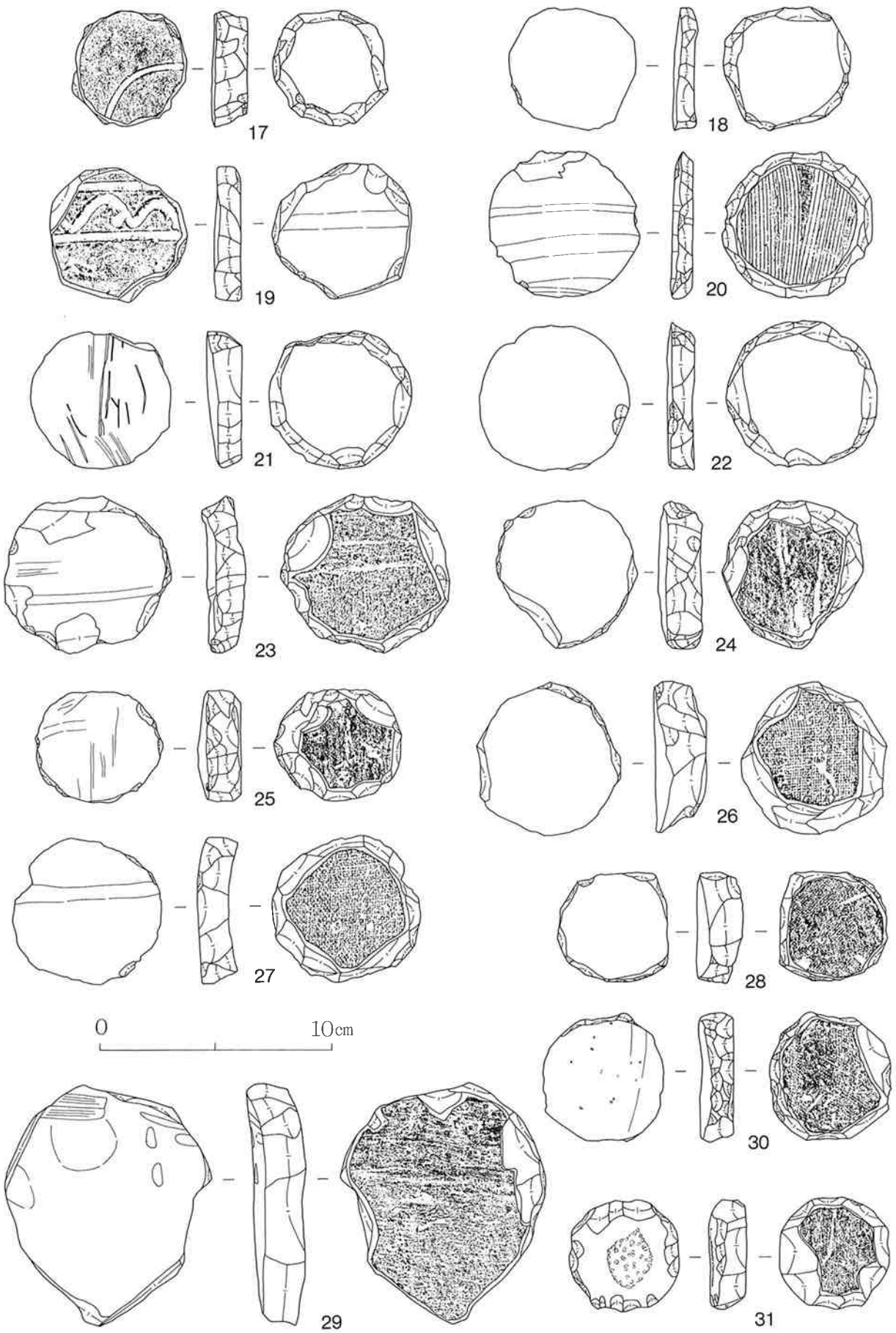
第28表　円盤状製品　観察一覧

凡例トレ＝トレンチ　ＴＰ＝テストピット

図版76･77	素材	長径（mm）	重量（g）	厚さ（mm）	出　土　地	備　考
1	現･磁	1.9	2.9	0.4	不　明	
2	施釉	2.15	3.1	0.5	E－12表採	
3	色絵	3.1	10.6	0.8	4トレⅠ	
4	施釉	3.3	8.2	0.5	TP４　Ⅱ	
5	施釉	2.9	5.5	0.45	4トレⅡ	
6	施釉	4,05	19.2	0.9	TP３　Ⅰ　黒土	高台を削り取る
7	無釉	2.9	9.1	0.7	TP７　Ⅱ	
8	無釉	3.85	35.4	1.7	E－12表採	
9	無釉	2.95	7.6	0.7	表　採	
10	無釉	4	32.4	1.6	TP７	ボタン状凸帯を利用
11	無釉	2.8	11.2	1.1	E－12表採	
12	無釉	4.2	23.9	1.15	4トレⅡ	
13	瓦	3.2	15.8	1.1	4トレⅡ	赤色瓦
14	瓦	2.9	14.4	1.45	4トレⅡ	赤色瓦
15	瓦	3.25	13.3	1.4	TP４　Ⅱ	灰色瓦
16	石	3.5	12.5	0.9	D－１表採	緑色変岩
17	無釉	5	45.3	1.4	E－13 P８	
18	無釉	5.25	35.3	0.9	B－８　Ⅰ	
19	無釉	5.8	53.1	1.05	表　採	
20	無釉	6.3	45.7	0.4	TP４　Ⅱ	
21	無釉	6.35	61.4	1.3	E－12 P７	
22	無釉	6.3	61.9	1.05	TP５　Ⅱ	
23	瓦	6.7	66.4	1.2	1トレ表採	灰色瓦
24	瓦	6.3	80.5	1.6	TP４　Ⅱ	灰色瓦　硬質
25	瓦	4.75	49.8	1.65	4トレⅡ	灰色瓦
26	瓦	6.5	76.7	1.7	E－12 P７	灰色瓦
27	瓦	6.3	75.5	1.3	B－９表採	灰色瓦　硬質
28	瓦	4.8	43.7	1.6	TP３　Ⅰ　黒土	灰色瓦
29	瓦	10.3	163.7	1.5	2トレⅠ	灰色瓦
30	瓦	5.55	45.3	1.4	1トレⅡ	灰色瓦
31	瓦	4.7	36.8	1.6	E－13 P７	表面中央部に敲打痕



第77図　円盤状製品 1



第78図　円盤状製品 2

第27節　石製品及び石造製品（第29表、第79図）

石製品には硯、砥石、石造製品には親柱の小片？、羽目石片？がある。

硯は９点（１点は判然としない）あるが（1～11）、完形品は１点のみで、他は全て破損品である。形態としては、全て細長型で、自然石を利用したタイプは１点も含まれない。

１は完形品で、長さ、幅が窺える唯一の資料である。長さ11.1cm、幅6.3cmを測ることから、３寸規格の製品となる。他の全ての製品の背面は整形時の平坦面のままであるが、標品のみは硯を軽くするために縁部背面のみを残し、他部は方形状に抉り取って、脚状に整形している。

全般的に硯の使用頻度がさほど高くなかったのか、あるいは陸部を平均的に使用したためかは判然としないが、1・6の陸部中央付近において極めて浅い凹みが認められるものの、他のほとんどの陸部は平坦を呈している。

なお、手塚直樹氏のご教示によると、1～3は山口県下関産の赤間石のようである。

砥石は３点（1点は判然としない）があるが（12～14）、いずれも破損品である。

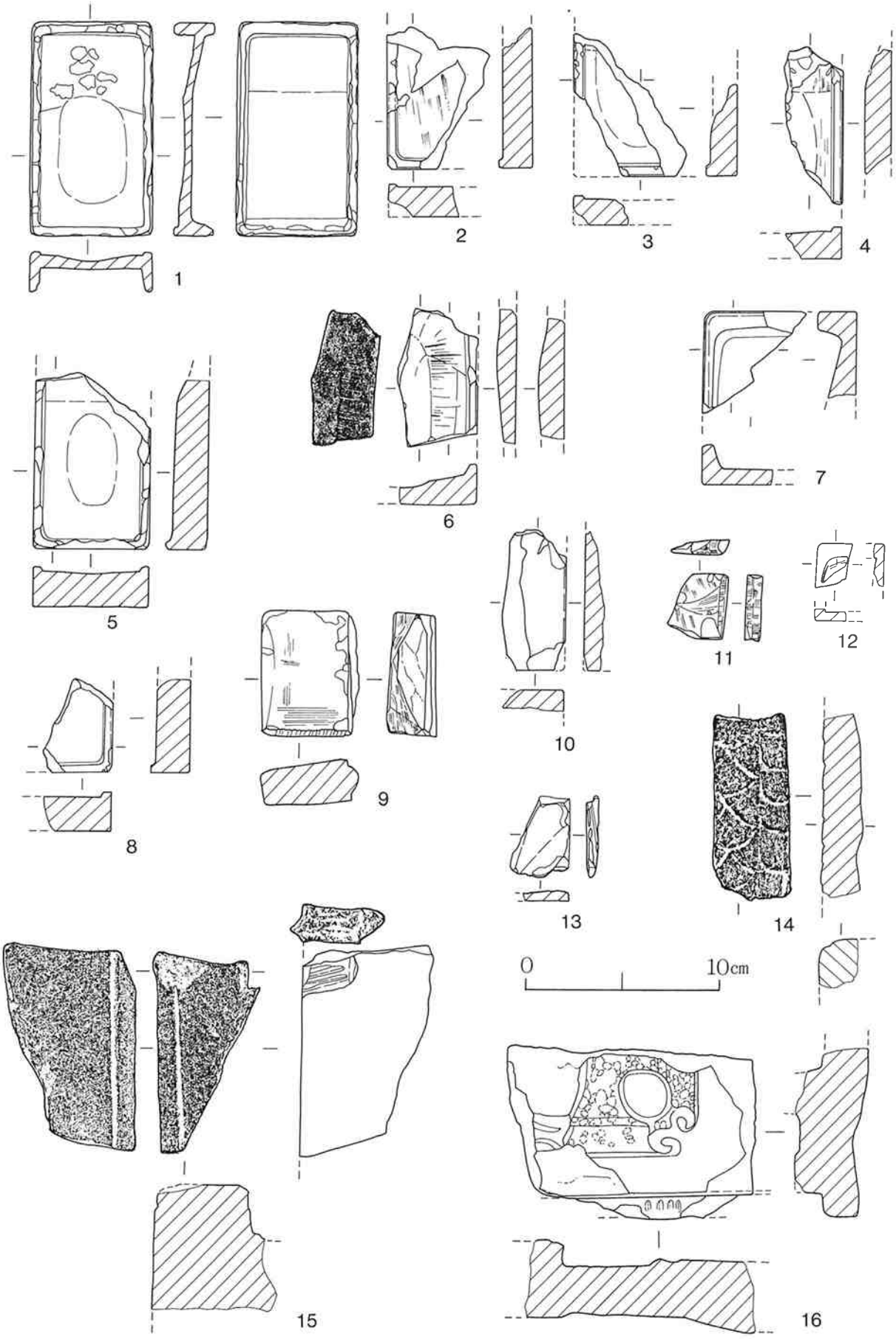
その形状や法量等からして、これらはいずれも据え置いて使用するタイプのものではなく、携帯用砥石に属するものであろう。12は、使用面下端部と左端部寄りに使用痕様の条線が縦横に観察される。

15・16は、建物に付随する石造製品の破片で、両者とも欄干の部材の一部であろう。15は、欄干の親柱？の砕片と見られ、器表面には線彫りにより、龍？の鱗状の模様が施されている。使用素材は砂岩質で、微粒砂岩（俗称：ニービヌフニ）のようである。

16は、欄干の羽目板の砕片と見られ、器表面にはレリーフにより、文様が施されているが、全体構成については判然としない。残存部より推すると、中央部に見られる円形状の凹部と、その右斜位下方部に見られる上及び左方からの鉤手状の文様からして、当該部が全体のコーナー部に属するであろうと思われる。なお、標品の素材も砂岩質で、15と同様、微粒砂岩（俗称：ニービヌフニ）のようである。

第29表　石製品及び石造製品一覧

挿図番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	出土地	石質	備考
第79図1	硯	11.10	6.30	2.00	67.10	TP5・Ⅰ	凝灰岩	
〃 2	硯	(7.4)	(5.3)	1.70	(87.1)	TP3・Ⅰ黒土	赤色頁岩	北九州～中国（下関・赤間石）
〃 3	硯	(7.4)	(5.9)	1.60	(60.2)	E-13･P－10	赤色頁岩	
〃 4	硯	(7.3)	(3)	1.60	(52.9)	4トレ表採	赤色頁岩	
〃 5	硯	(9.2)	6.00	2.10	(180)	4トレ・Ⅰ	凝灰石	
〃 6	硯	(7.2)	(4.1)	2.00	(36.3)	B－9・Ⅰ	凝灰岩	
〃 7	硯	(5.3)	(5.3)	2.10	(44.8)	表採	凝灰 岩	
〃 8	硯	(4.8)	(3.5)	2.00	(42.8)	表採	不明	
〃 9	硯	(6.55)	(5.1)	(2.4)	(146)	B－5・Ⅰ	頁岩	
〃 10	硯	(7.2)	(3.3)	(1.1)	36.30	B－9・Ⅰ	粘板岩	
〃 11	硯	(3.4)	(2.9)	－	(9.7)	E－6・表採	頁岩	
〃 12	砥石	2.30	1.90	0.60	4.00	TP6・Ⅲ	頁岩	
〃 13	砥石	4.20	3.00	0.50	9.70	B－15・表採	不明	
〃 14	石柱	(9.6)	(2.5)	(2.1)	(82)	表採	微粒砂岩(ニービ)	
〃 15	石柱	(11)	(6.6)	(6.6)	(540)	B－8・表採	微粒砂岩(ニービ)	
〃 16	羽目板	(9.2)	(12.8)	4.00	(620)	TP11・Ⅰa	微粒砂岩(ニービ)	



第79図　石製品(1～13)及び石造製品(14～16)

第28節　古　銭（第30～31表、第80図）

完形品17点、破損品22点の計39点が得られている。

これらは銘等により、製造地が判然としている資料が32点、不明資料が７点ある。判然としている資料は中国銭・10点と、大和銭・22点に二大別される。

中国銭では、初鋳年が最も古いのは、唐代の621年に鋳造された「開元通寶」がある。これに後続するものとしては、北宋代・1004年の「景徳通寶」、同代・1031年の「景祐通寶」、1068年の「熙寧通寶」、1111年の「政和通寶」がある。これらの北宋銭に次ぐものは、明代・1368年初鋳の「洪武通寶」、さらに清代・1821年初鋳の「道光通寶」がある。このうち、「熙寧通寶」、「洪武通寶」のうちの一点は模鋳銭のようである。

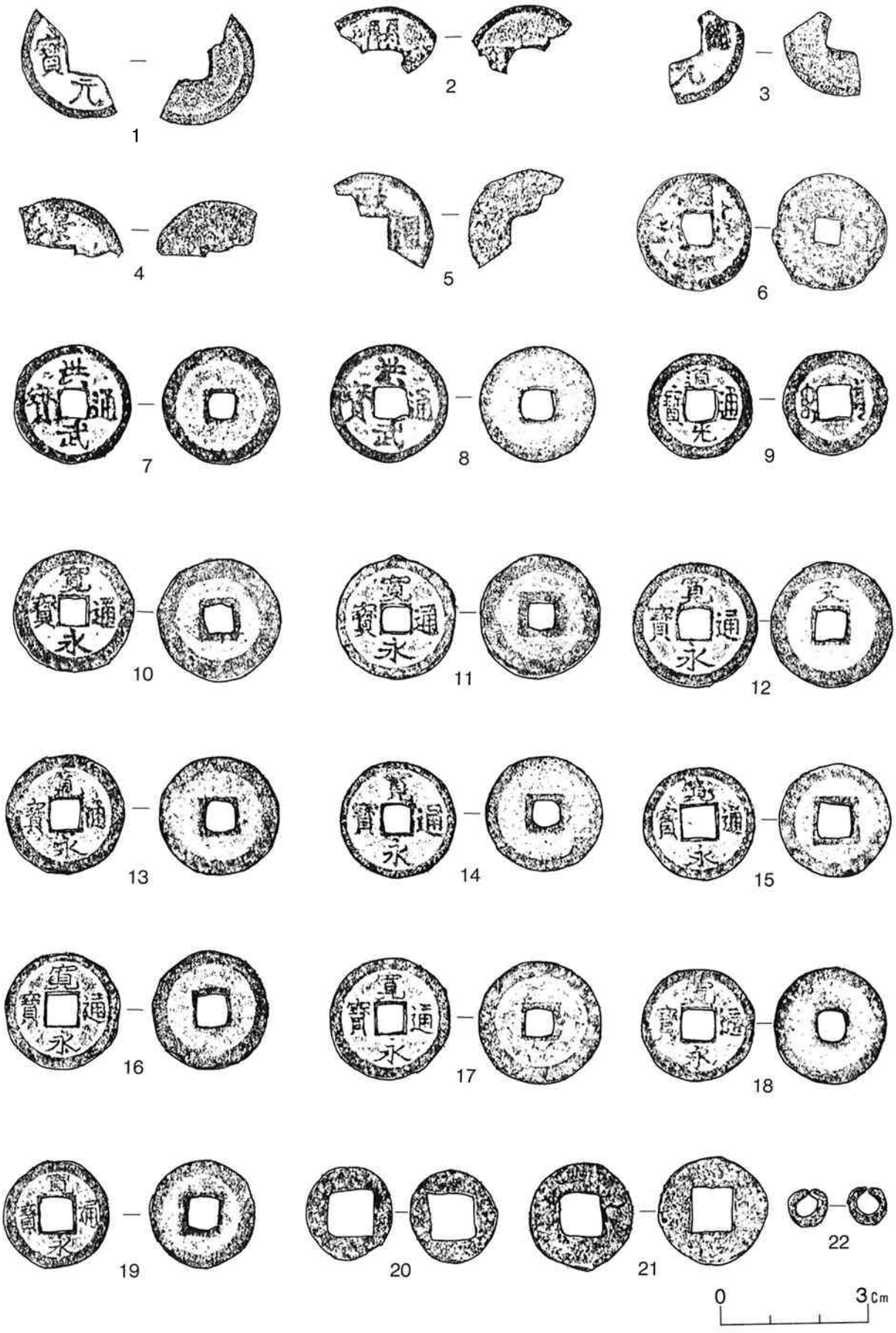
大和銭はその全てが江戸初期の1636～1697年間に初鋳されたもので、「寛永通寶」が15点と圧倒的主体を占めている。他はほぼ同年代に初鋳された「無文銭」６点と、「輪銭」１点がある。そして「寛永通寶」にはⅠ期の本銭が２点、Ⅲ期の本銭が６点、模鋳銭が１点含まれている。

第30表　古銭観察一覧

挿図番号	古銭名	時代	初鋳造	銭径／mm		内径／mm		厚み／mm		重量／g	出土地点	観察事項
				a	b	c	d	最大厚	最小厚			
第80図 1	開元通寶	—	621	—	—	—	—	1.44	0.8	1.5	4トレⅡ	
〃 2	開元通寶	唐	621	—	—	—	—	1.39	0.67	1	TP9・Ⅰb	
〃 3	景徳元寶	北宋	1004	—	—	—	—	1.29	0.63	1.1	TP9・Ⅰb	
〃 4	景祐元寶	北宋	1034	—	—	—	—	1.95	1.03	1.2	表採	
〃 5	政和通寶	北宋	1111	—	—	—	—	1.3	0.85	1.3	TP11・Ⅱ	
〃 6	熙寧元寶	北宋	1068	23	23	5.5	6	1.9	0.8	4	TP11・Ⅰb	完形品　模鋳銭
〃 7	洪武通寶	明	1368	24	24	5.5	5.5	1.85	0.8	4.4	TP11・Ⅱ	完形品
〃 8	洪武通寶	明	1368	24	23	7	7	1.27	0.7	2.3	B-5・Ⅰ	完形品　模鋳銭
〃 9	道光通寶	清	1821	22	21.5	6.5	6	1.38	0.6	2.9	表採	完形品
〃 10	寛永通寶	江戸	1636	25	24	5.5	6	1.14	0.6	2.7	B-11・Ⅰ	完形品　Ⅰ期　本銭
〃 11	寛永通寶	江戸	1636	24	24	5.5	5.5	1.09	0.6	2.9	E-14・表採	完形品　Ⅰ期　本銭
〃 12	寛永通寶	江戸	1668	25	25	6.5	5.5	1.28	0.5	3.6	B-5・Ⅰ	完形品
〃 13	寛永通寶	江戸	1697	24	24	6	6	1.12	0.5	2.8	B-8・Ⅰ	完形品　Ⅲ期　本銭
〃 14	寛永通寶	江戸	1697	23	23	5	5.5	1.31	0.7	2.7	D-5・表採	完形品　Ⅲ期　本銭
〃 15	寛永通寶	江戸	1697	23	23	7	7	1.28	0.8	2.8	TP11・Ⅰ	完形品　Ⅲ期　本銭
〃 16	寛永通寶	江戸	1697	24	23.5	6.5	6.5	0.9	0.3	2	B-9・Ⅰ	完形品　Ⅲ期　本銭
〃 17	寛永通寶	江戸	1697	25	24	5.5	5.5	1.4	0.6	3.8	TP11・Ⅰ	完形品　Ⅲ期　本銭
〃 18	寛永通寶	江戸	1697	23	23	6	6	1.11	0.6	2.6	表採	完形品　Ⅲ期　本銭
〃 19	寛永通寶	江戸	1697	22	22	6.5	6.5	1.01	0.6	1.9	表採(南崖下)	完形品　模鋳銭
〃 20	無文銭	—	1657	18	18	9	9	1.38	1.03	1.2	B-9・Ⅰ	完形品
〃 21	無文銭	—	1657	21	21	8.5	9	0.99	0.8	1.7	表採	完形品
〃 22	輪銭	江戸	—	(7)	(7)	(5)	(5)	(1.15)	(0.74)	0	4トレⅡ	完形品

第31表　古銭出土状況一覧

出土地／古銭名	表採	3・6トレ	5トレ	4・2トレ	TP4	TP9	TP11	合計			Ⅰ
		Ⅰ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰb	Ⅰ	Ⅰb	Ⅱ	
景徳通寶							1				1
政和通寶										1	1
景祐通寶	1								1		2
熙寧通寶											0
洪武通寶	1	1								1	3
道光通寶	1										1
開元通寶					1		1				2
寛永通寶	6	1	3	2	1			2			15
無文銭	2		1		1	2					6
輪銭					1						1
不明	5					1				1	7
合計	16	2	4	2	4	3	2	2	1	3	39



第80図　古銭

第29節　鉄製品及び銅製品（第32表、第81図）

鏃、釘、不明製品などが、総計19点得られている。

鏃は４点があるが（１～４）、２のみが完形品で、１・３・４は茎の中間部付近、先端部、あるいは付け根部付近より欠失したものである。

平面形状は、いずれも幅広の先端から中間部付近で緩やかに窄まり、茎との境目付近に向けて再び幅広をなすタイプである。断面形状は、先端部では扁平状を呈するものの、茎部に行くに従って方形若しくは隅丸方形状をなす。

釘は13点得られているが（５～11）、いずれも断面形状が方形状を呈する角釘である。先端部や先部の約三分の一程を欠失するものもあるが、完形品のみを見ると、その法量等から５・６・15のように長さ３～６㎝、厚さ0.3～0.4㎝の小型の一群、11・12のように長さ７～10㎝、厚さ0.5～0.7㎝中型の一群、10・17の長さ10～12㎝、厚さ0.8～1.0㎝の大型の一群に大別される。

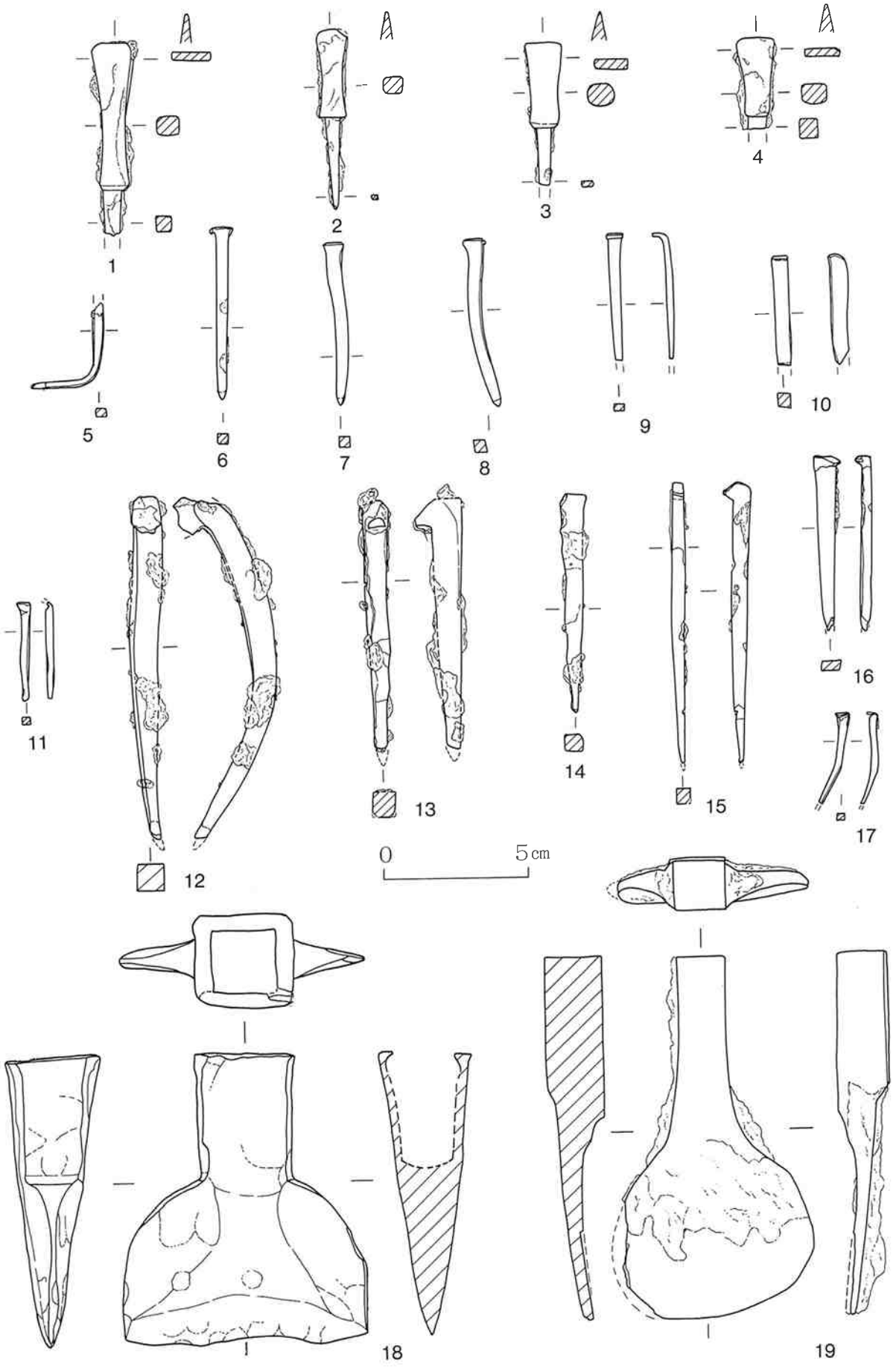
18は、半月状の片刃の刃部に柄部を差し込む袋状のソケットが付された製品である。形態等からして、手斧の刃部かと推するが、詳細については判然としない。

19は、平面形状がシャモジ状を呈した製品である。断面形状からする限り、その製作は柱状の素材の中間部付近以下の部分を敲打によって板状に整形した後、角部を研磨し、当該形状に仕上げたようである。その用途、機能については判然としない。

第32表　鉄及び銅製品一覧

（単位：m）

第81図	器　種	素　材	長（㎝）	厚さ（㎝）	重（ｇ）	出土地点	備　　考
1	鏃	鉄	6.7	1.4	17.5	４トレ：Ⅱ	
2	〃	〃	6.3	1.1	9.1	TP12：Ⅰ	
3	〃	〃	5.0	1.35	9.1	TP10：Ⅰ	
4	〃	〃	3.2	1.4	8.9	１トレ：Ⅱ（下部）	
5	釘	銅	(5.3)	0.4	1.8	TP11：Ⅰb	
6	〃	〃	5.7	0.4	7.9	F-12：表採	
7	〃	〃	5.7	0.4	9.3	TP3：Ⅰ　黒土	
8	〃	〃	5.9	0.4	8.9	E-12：Ⅰ	
9	〃	〃	4.5	0.5	3.5	表採（フェンスネット）	
10	〃	〃	(3.8)	0.3	7.9	８トレ：表採	
11	〃	鉄	3.4	1.0×0.9	1.4	TP10：Ⅰ	
12	〃	〃	11.9	0.8	42.8	B-13：Ⅰ	
13	〃	〃	9.2	0.5	23.2	表採（南崖下）	
14	〃	〃	7.6	0.5	11.3	E-6：表採	
15	〃	〃	9.8	0.7	11.2	２トレ：Ⅱ	
16	〃	〃	(6.0)6.1	0.3	6.3	TP10	
17	〃	〃	3.4	1.0/0.9	1.0	TP11：Ⅰ a	
18	不明製品	〃	10.2	8.5/3.5	365	表採（ネット外）	
19	〃	〃	12.8	(6.65)1.9	245	４トレ：表採	



第81図　鉄製品(1～4、11～19)及び銅製品(5～10)

第30節　玉・簪・器種不明の金属製品

玉（第33表、第82図１・２）

１は石製で、表面は風化して滑面を呈さず、ザラつくとともに、濁った乳白色を呈する。２は巻きガラス製で、器色は淡青色を呈す。

第33表　玉製品一覧

（単位:cm）

第82図	直　径	長	幅	厚さ	重さ(g)	出土地点	備　　考
1	1.4	－	－	－	3.3	TP6・Ⅲ	石製
2	0.75 × 0.9	－	－	－	0.4	表採	ガラス製

簪（第34表、第82図３～８）

計６点が得られている。そのほとんどが銅製であるが、３のみは銀製である。

これらは、その形態からして、下記のように二大別される。

A＝頭部に花弁状（梅花と桔梗花）の平板を冠する。軸部は頚部が捻ったような螺旋の筋を施している。先端はさほど尖らず、軸の断面形状は四角形を呈し、頚部が略円形を呈する（３・４）。

４は本来、直状のものであるが、何らかの要因で曲がっている。

B＝頭部が匙状を呈する。５・６のように平面形が細長い楕円の窪みが浅いものと、８のように断面形が丸みの強い楕円で、窪みが深いものがある。

軸部は頭部から細まり、匙部をなす頚部より徐々に膨らみ、中央部付近で最大となり、先端に向かって行くに従って細まり、先端は尖る。

軸部の断面形状は全体形が六角形をなし、頚部は略円形をなす。７は頭部を欠くが、５・６と同じタイプに属するものと思われる。

第34表　簪一覧表

（単位:cm）

第82図	直径	長	幅	厚さ	重さ(g)	出土地点	備　　考
3	－	6.8	0.3	0.3	7.5	C-8：Ⅰ	銀　製？
4	－	10.5	0.4	0.4	14.7	D-5：Ⅱ	銅　製
5	－	10.4	0.3	0.3	5.5	TP4：Ⅱ8/9	〃
6	－	13.3	0.3	0.3	3.1	B-9：Ⅰ	〃
7	－	9.0	0.3	0.3	4.9	B-9：Ⅰ	〃
8	－	12.9	0.5	0.4	14.0	E-13・P10	〃

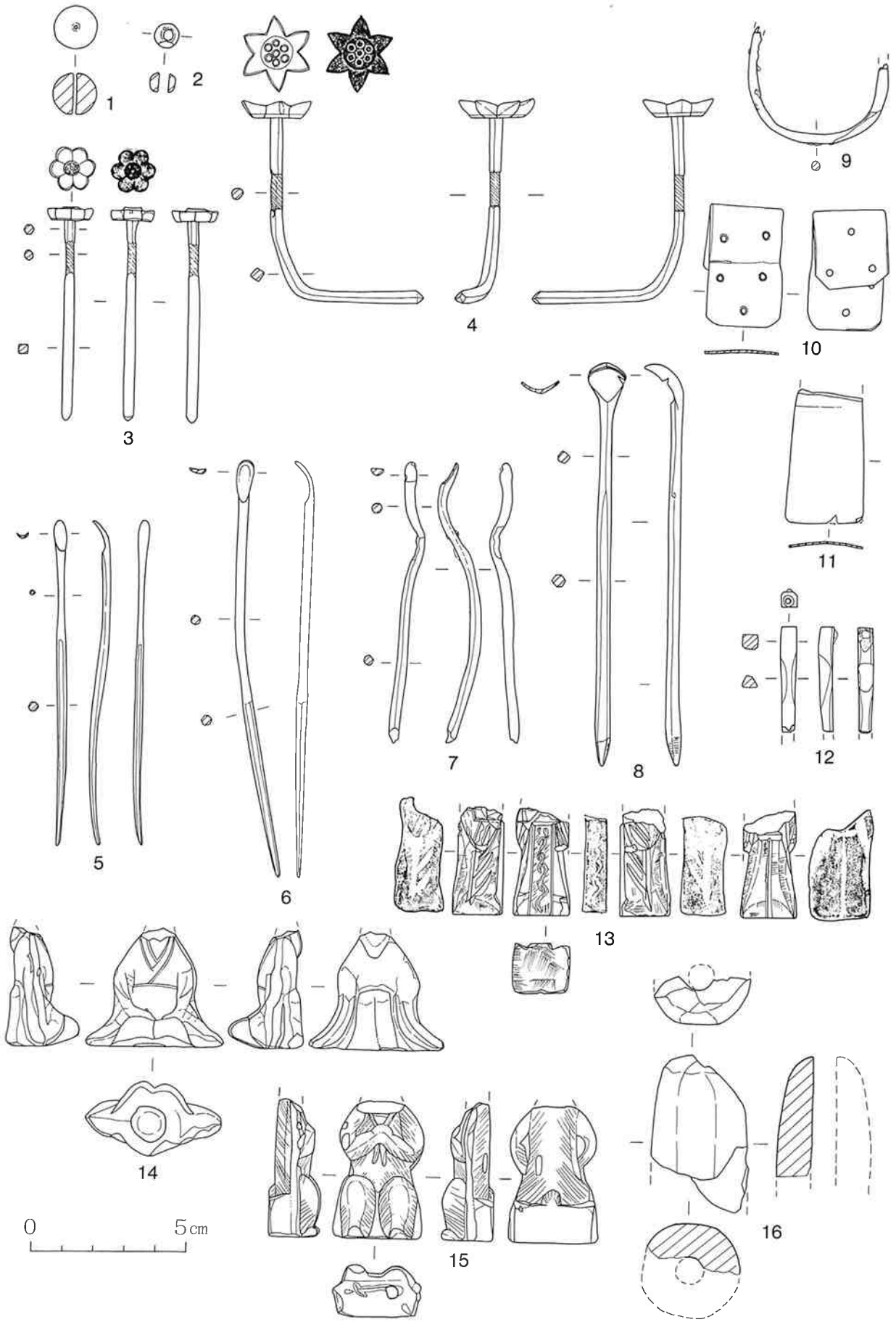
器種不明の金属製品（第35表、第82図９～11）

９～11は、何らかの金具類の一部、あるいは製品であろうと思われるが、詳細については判然としないものである。９は銅線をリング状に曲げたものと思われるが、先端部が破損しているため元来の形状は不明である。10・11は0.1cm程の厚さの板状に伸ばした製品で、角を丸く整えた方形をなす。10は小孔を縁に沿って８個穿っている。

第35表　器種不明金属製品一覧

（単位:cm）

第82図	器　種	長	幅	厚さ	重さ(g)	出土地点	備　　考
9	金具類	9.7	0.4	0.4	9.7	B-8・Ⅰ	銅製
10	板状金具	8.1	2.4	0.1	8.1	表採	〃
11	板状金具	4.2	2.4	0.1	2.6	表採	〃
12	器種不明	3.4	0.5	0.4	3.9	F-13表採	素材不明



第82図　玉(1・2)、簪(3～8)、器種不明の金属製品(9～12)、人形(13～15)、土錘(16)

第31節　人形・土錘

人形（第36表、第82図13～15）

石製、陶製含めて３点が得られている。13は石製（蝋石製）の中国の武人像、14・15は無釉の陶製の人形である。陶製の人形像は14が僧侶像、15は猿像と思われる。

いずれも頭部を欠損するものであり、頭部片が一点も発見されていないという共通した特徴を鑑みると、意図的な破損の可能性も考えられるが、詳細については判然としない。

土錘（第36表、第82図16）

管状土錘が１点得られている。器表面の各所に指頭痕のような綾が観察される。端部は丸みを有し、断面形状は円環状を呈す。

第36表　人形・土錘一覧　（単位:cm）

第82図	器　種	長	幅	厚さ	重さg	出土地点	備　　考
13	人　形	(3.4)	1.8	1.6	15.4	表採	印材・蝋石
14	〃	(3.8)	4.3	2.3	14.0	C-8：Ⅰ	陶製（型づくり）
15	〃	(4.4)	2.9	1.5	17.6	C-8：Ⅰ	陶製（型づくり）
16	土　錘	(5.0)	3.1	—	17.4	F-12：表採	土製

第32節　煙管（第37表、第83図）

陶製8点、青銅製６点の計14点が得られている。

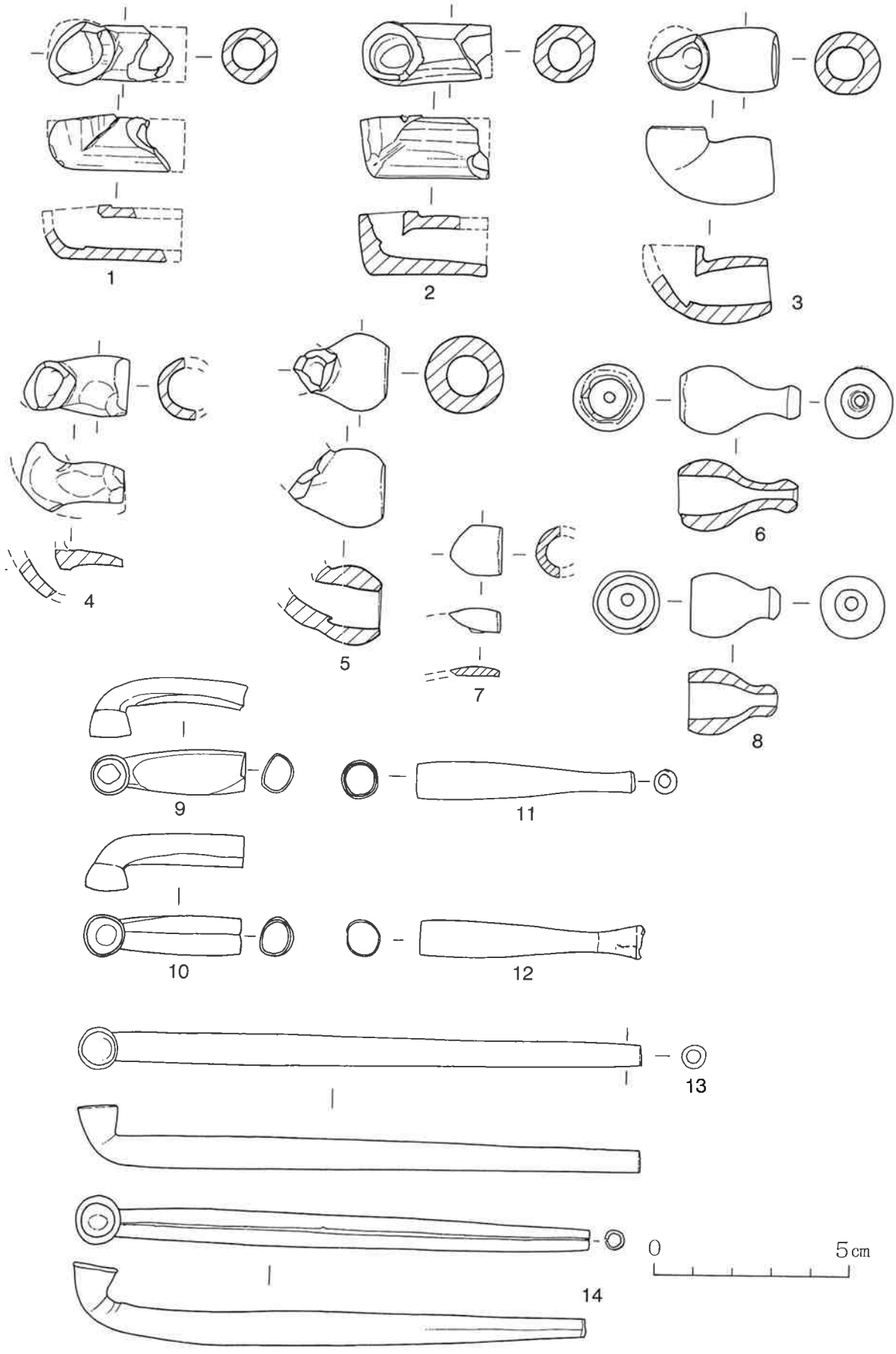
陶製は雁首７点（1～６）、吸口２点（７～８）がある。雁首は無釉焼き締めで、側面を多面形状に面取りして仕上げるタイプ（1～２）と、施釉し滑らかな曲面に仕上げるタイプ（３～６）がある。４は入念な仕上げが行われておらず、各所に指頭痕を残す。

吸口は、２点とも釣鐘状を呈す形態をなし、緑釉が施釉されている。

青銅製は雁首が２点（９・10）、吸口が２点（11・12）、雁首と羅宇が一体となったものが２点（13・14）の三種に細別される。雁首と羅宇が一体となったものは、羅宇の先端に向けて漸次細くなっていくことから、吸口部まで含むものか、否かは判然としない。14は、火皿から羅宇先端までの上面に接合面が直線状に残っていることから、板状の青銅を棒状のものに巻きつけて製作したことが窺える。

第37表　煙管製品一覧　（単位：cm）

第83図	全長	接続部径	重量:g	部　位	出土地点	備　　考
1	(3.3)	1.4	(3.8)	雁首	F－6・7	陶製
2	3.3	1.4	(8.1)	〃	表採	〃
3	(3.4)	1.1	(8.0)	〃	1トレ表採	〃
4	(2.7)	(1.6)	(3.8)	〃	TP５：Ⅱ10/11	〃
5	(2.5)	1.3	(7.3)	〃	C－５：Ⅰ	〃
6	—	(1.4)	(0.8)	〃	4トレ:Ⅱ	〃（緑釉）
7	3.1	1.1	0.8	吸口	4トレ:Ⅱ	〃
8	2.3	1.4	0.8	〃	B－８：Ⅰ	〃（緑釉）
9	4.0	1.1	4.4	雁首	4トレ:Ⅰ	青銅製
10	4.0	1.0	4.1	〃	〃　〃	〃
11	5.1	1.0	4.1	吸口	〃　〃	〃
12	(5.6)	1.0	(3.9)	〃	C－９：Ⅰ	〃
13	14.4	1.0	26.9	—	6トレ	〃
14	13.1	1.1	32.1	—	TP３：Ⅱ	〃



第83図　煙管

第33節　骨製品等（第38表、第84図）

ハブラシ様製品が3点得られている。

いずれも柄部のみの欠損品である。1は、毛孔部との境目付近から折損した製品である。全体形状は、折損箇所の毛孔部との境目付近から柄尻部にかけて緩やかに傾きながら直線状をなし、柄尻は舌状を呈する。断面状は、柄尻部は表裏面とも平坦に仕上げているため、略台形状を呈するものの、毛孔部に行くに従って中央部が膨らんだカマボコ状をなす。柄尻のほぼ中央部付近には、径2.5㎜の小孔を穿っている。

2・3は、柄尻付近のみの製品である。両者とも柄尻先端部が三角形状に尖る形状をなす。2は柄尻先端部が尖り、表面に僅かな突起面を作出する以外は、1とほぼ類似する。なお、標品の表面突起面には商標と思われるＭＡ□□と彫刻された文字が見られる。3は側面部に鍔状の凸帯を廻らすとともに、表面側縁部には細線を施すなどの装飾が見られる。両者とも1と同様、柄尻の中央部付近に径2㎜前後の小孔を穿っている。

第38表　ハブラシ様製品一覧　（単位：cm）

第84図	全　長	残存幅		残存厚		出土地点
		頚　部	柄　部	頚　部	柄　部	
1	(8.4)	(0.7)	(1.4)	0.75	0.8	TP10：Ⅰ
2	(4.5)	－	1.35	－	0.7	B－8：Ⅰ
3	(3.1)	－	1.35	－	0.75	表採（南崖下）

未製品

第84図4は、ジュゴンの肋骨を利用した未製品である。素材である肋骨を8.7cmの長さに切断した後、側周を削り出しによって、断面四角形状に面取りしている。この面取りした部分を施した側の長端部は研磨し、整えているなど、部分的に加工の度合いに違いが見られることから、作出される製品は素材全体を一つの製品として製作するものと推するより、むしろ先端から立方体を金太郎アメ状に切り出し、製作するものを想定したほうが妥当かと推する。意図した製品は判然としないが、あえて推するならば、サイコロ状製品等が考えられるであろう。

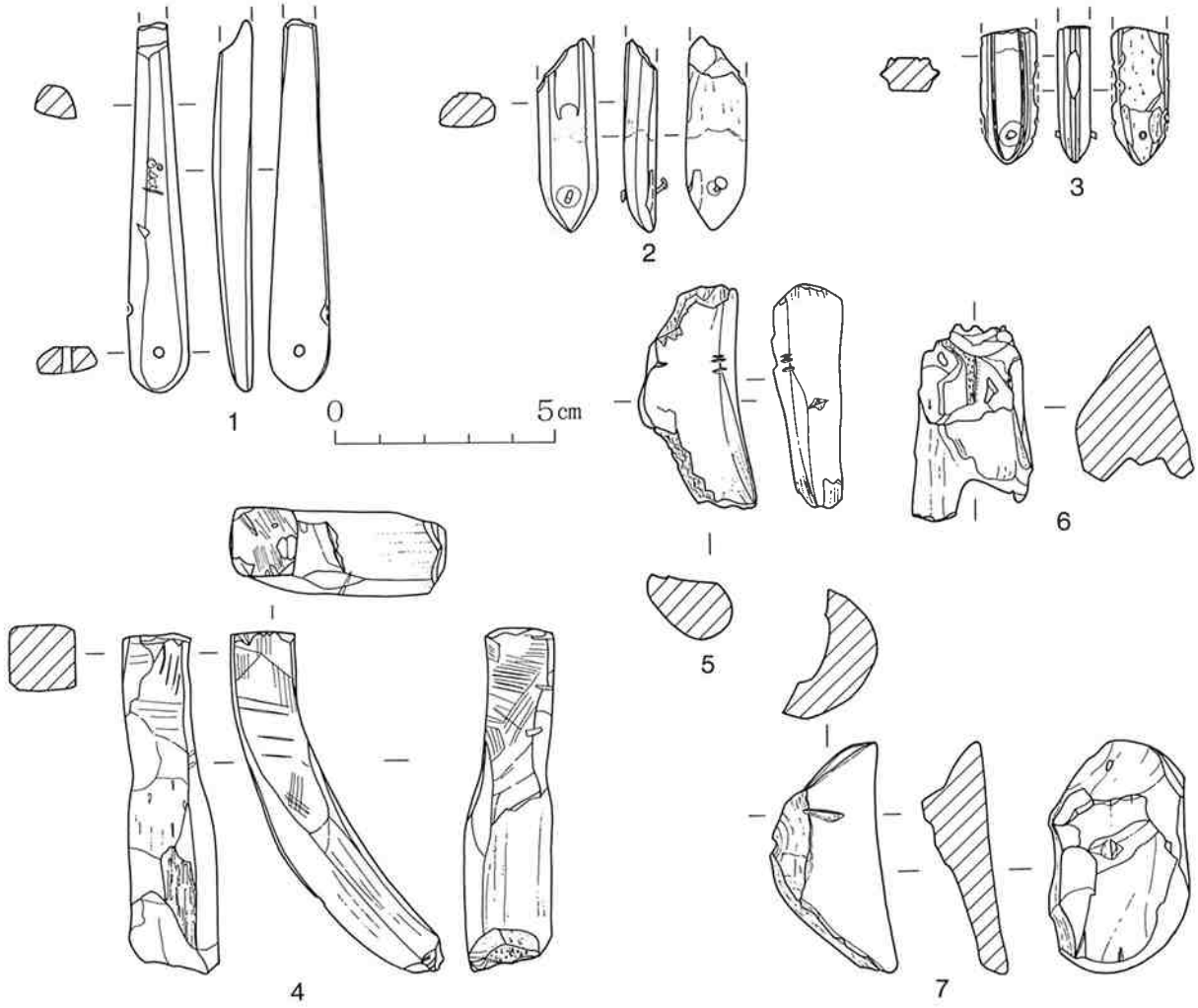
長さ7.8cm、幅1.5cm、厚さ1.5cmを測る。Ｂ－12：Ⅰ層出土。

刃物痕の認められる骨片

第84図5～7は削り出し面を主とした刃物痕が観察されるものであるが、なかには溝状の刃物痕が認められるものもある。何らかの骨製品の製作途上にある未製品、あるいは食料として調理中についた刃物痕なのか、判然としない。このようなことから、これらの未製品とは区別して、刃物痕が認められる骨片として取り扱った。5はイノシシの寛骨を、6はウシの歯骨を、7はイノシシの上腕骨を素材としている。

各々の出土地点、法量等は下記の通りである。

5　Ｅ－１３　　長さ＝5.1cm　幅＝2.3cm　厚さ＝1.5cm
6　ＴＰ４Ⅱ－5/6　長さ＝4.4cm　幅＝2.5cm　厚さ＝2.4cm
7　Ⅰトレ　　長さ＝5.3cm　幅＝3.1cm　厚さ＝1.5cm



第84図　骨製品

第34節　貝類遺存体

首里城管理用道路地区で出土した貝類遺存は軟体動物門・a単板網3科4種、b腹足網15科50種、c斧足網14科32種が検出されている。以下に貝類遺存体リストを示した。

第39表　貝類遺存体一覧

軟体動物門　MOLLUSCA

a．単板綱　MONOPLACOPHORA

ツタノハガイ科　Patellidae
1.オオベッコウガサガイ　*Cellana testudinaria* (LINNÉ)
ユキノアサガイ科
2.リュウキュウウノアシガイ　*Patelloida(Collisellina)saccharina* (LINNÉ)
ミミガイ科　Haliotidae
3.フクトコブシ　*Sulculus diversicolor diversicolor* (Reeve)
4.イボアナゴウ　*Haliotis (Sanhaliotis) Varia* (LINAEUS)

b.腹足綱 POLYPLACOPHORA
ニシキウズガイ科　Trochidae
5.オキナワイシダタミ　*Monodonta labio labio* (Linnaeus)
6.ニシキウズガイ　*Trochus maculatus* (LINNÉ)
7.ギンタカハマ　*Tectus pyramis* (BORN)
8.サラサバテイラ　*Tectus (Rochia) maximus* (PHILIPPI)
リュウテンサザエ科　Turbinidae
9.ヤコウガイ　*Lunatica marmorata* (LINNÉ)
10.ヤコウガイの蓋　*Lunatica marmorata* (LINNÉ)
11.チョウセンサザエ　*Marmarostoma argyrostoma* (LINNÉ)
12.チョウセンサザエの蓋　*Marmarostoma argyrostoma* (LINNÉ)
13.カンギク　*Lunella coronata granulata* (GMELIN)
アマオブネ科　Neritidae
14.アマオブネガイ　*Theliostyla albicilla* (LINNÉ)
ヤマタニシ科　Family Cxclophoridae
15.オキナワヤマタニシ　*Cyclophorus turgidus* PFEIFFER
トウガタカワニナ科　Family THLARIDAE
16.トウガタカワニナ　*Thiara (Plotiopsis) scabra* (Muller)
オニノツノガイ科　Cerithiidae
17.オニノツノガイ　*Cerithium nodulosum* (BRUGUIERE)
18.ウミニナカニモリ　*Clypeomorus batillariaeformis* HARE et KOSUGE
19.クワノミカニモリ　*Clypeomorus chemnitzianus* (PILSBRY)
20.ナガタケノコカニモリ　*Rhinoclavis fasciatus* (BRUGUIERE)
ウミニナ科 Potamididae
21.カワアイガイ　*Cerithideopsilla diadjariensis* (Martin)
22.センニンガイ　*Telescopium telescopium* (LINNAEUS)
23.イボウミニナガイ　*Batillaria zonalis* (BRUGUIERE)
スイショウガイ科
24.マガキガイ　*Conomurex luchnanus* (LINNÉ)
25.クモガイ　*Lambis lambis* (LINNÉ)
26.オハグロガイ　*Canarium urceum* (LINNAEUS)
27.種不明
タカラガイ科　Cypraeidae
28.ホソヤクジマダカラ　*Arabica elegantina couturieri* (VAYSSIERE)
29.ハナマルユキ　*Ravitrona caputserpentis* (LINNÉ)
30.キイロダカラ　*Monetaria moneta* (LINNÉ)
31.ハナビラタカラ　*Monetaria(ornamentaria)annulus* (LINNÉ)
32.ホシダカラ　*Cypraea tigris* (LINNÉ)
フジツガイ科　Cymatlldae
33.種不明
アクキガイ科　Mvricidae
34.アカイガレイシガイ　*Drupa spathulifera* (BLAINVILLE)
35.ツノレイシガイ　*Menathais tuberosa* (RÖDING)
36.シラクモガイガイ　*Mancinella armigera* (LINK)
イトマキボラ科　Fasciolariidae
37.イトマキボラ　*Pleuroploca trapezium trapezium* (LINNAEUS)

オニコブシ科 Vasidae
38.コオニコブシガイ *Vasum turbinellum* (LINNÉ)
イモガイ科 Conidae
39.クロミナシガイ *Conus marmoreus* (LINNÉ)
40.マダライモガイ *Virroconus ebraeus* (LINNÉ)
41.アカシマミナシガイ *Leptoconus generalis* (LINNÉ)
42.ヤナギシボリイモガイ *Rhizoconus miles* (LINNAEUS)
43.サラサミナシモドキガイ *Dauciconus vitulinus* (HWASS)
44.イボシマイモガイ *Virgiconus lividus* (HWASS)
45.ゴマフイモガイ *Puncticulis pulicarius* (HWASS)
46.アジロイモガイ *Darioconus pennaceus* (BORN)
47.キヌカツギイモ *Virgiconus flavidus* (LAMARCK)
48.シロマダライモ *Hermes nussalla* (LINNÉ)
49.種不明
タケノコガイ科 Terebridae
50.ベニタケガイ *Subula dimidata* (LINNÉ)

C.斧足綱 PELECYPODA
フネガイ科
1.ベニエガイ *Barbatia(Ustularca)bicolorata* (DILLWYN)
2.ハイガイ *Tegillarca granosa* (LINNAEUS)
タマキガイ科 Glycymeridae
3.ソメワケグリ *Glycymeris (Veletuceta) reevei* (MAYER)

イガイ科 Mytilidae
4.リュウキュウヒバリ *Modiolus (modiolus) auriculatus* (KRAUS)
イタヤガイ科 Pectinidae
5.ヒナギンチャク
6.イタヤガイ *Pecten (Notovola) albicans* (Schroter)
7.種不明
ウミギクガイ科 Spondylidae
8.メンガイ
9.メンガイの一種 *Spondylus squamosu* SCHREIBERS
ツキガイ科 Lucinidae
10.ウラキツキガイ *Codakia paylenorum* (IREDALE)
キクザルガイ科 Chamidae
11.ヒレインコガイ *Chama lazarus* (LINNÉ)
12.シロザル *Chama brrasica Reeve*
13.種不明
ザルガイ科 Cardiidae
14.リュウキュウザルガイ *Vasticardium (Regozara) flavum* (LINNÉ)
15.カワラガイ *Fragum unedo* (LINNÉ)
シャコガイ科 Tridacnidae
16.シラナミガイ *Tridacna (vulgodacna) maxima* (RÖDING)
17.ヒメジャコ *Tridacna (Chametrachea) crocea* LAMARCK
チドリマスオガイ科 Mesodesmatidae
18.イソハマグリ *Atactodea striata* (GMELIN)
ニッコウガイ科 Tellinidae
19.ニッコウガイ *Tellinella virgata*
20.リュウキュウシラトリガイ *Quidnipagus palatum* IREDALE
21.サメザラガイ *Scutarcopagia scobinata* (LINNÉ)
シオサザナミ科 Asaphidae
22.リュウキュウマスオガイ *Asaphis dichotoma* (ANTON)
シジミガイ科 Corbiculidae
23.タイワンシジミ *Corbicula cf.fluminea*
マルスダレガイ科 Veneridae
24.ヌノメガイ *Periglypta puerpera* (LINNÉ)
25.ホソスジイナミガイ *Gafrarium pectinatum* (LINNÉ)
26.アラスジケマンガイ *Gafrarium tumidum* (RÖDIG)
27.ハマグリ *Meretrix lusoria* (RÖDIG)
28.ユウカゲハマグリ *Pitar striatum* (Gray)
29.オキシジミ *Cyclina sinensis* (Gmelin)
30.オイノカガミ *Bonartemis histrio* (Gmelin)
31.アサリ *Tapes philippinarum* (Adams&Reeve)
32.スダレハマグリ *Katelysia (Hemitapes) japonica* (Gmelin)

第40表　貝類出土表（単板綱・腹足綱）

巻貝 ＼ 出土地 層序				表採			Ⅰ層			Ⅰ層 a			Ⅰ層 b			Ⅱ層			Ⅲ層		Ⅳ層	
番号	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	破片	殻頂	破片
1	**ツタノハガイ科**	**オオベッコウガサガイ**	潮間帯・岩礁				1															
2	ユキノアサガイ科	リュウキュウウノアシガ	〃	1										1	1							
3	ミミガイ科	**オクトコブシ**	〃						3													
4		イボアナゴウ	〃			1							1									
5	ニシキウズ科	オキナワイシダタミ	潮間帯・内湾転石岩礁				1															
6		**ニシキウズガイ**	潮間帯・岩礁			3	1															
7		ギンタカハマ	潮間帯付近・岩礁	8	5	1	23	8			1		5			4	4					
8		**サラサバテイラ**	潮下部・岩礁	19	15	11	33	12	7				2	1	1	8	13	3				
9	リュウテン科	**ヤコウガイ**	浅海の岩礁	1	40	105	1	38	81			2		1	5		17	47		1		
10		ヤコウガイの蓋	〃	17	65	62	6	37	61		1	4		1	5	3	8	23				
11		チョウセンサザエ	潮間帯下・岩礁	102	71	6	153	64	7	1	6		15	2	3	30	42	7				
12		チョウセンサザエの蓋	〃	19	3	4	13						1		1	9	1					
13		カンギク	潮間帯～5ｍ岩礁底	19	3		5	2	1							1						
14	**アマオブネ科**	**アマオブネガイ**	潮間帯～岩礁底	2																		
15	ヤマタニシ科	**オキナワヤマタニシ**	陸産			1	1									2						
16	**トウガタカワニナ**	トウガタカワニナ	淡水産・汽水産				1															
17	腑ニノツガイ科	オニノツノガイ	潮間帯下岩礁	1	2	1		2								1	1					
18		ウミニナカニモリ	中～低潮線・岩礁地	29	4		1	2														
19		**クワノミカニモリ**	潮間帯の砂や小石		2								1				1					
20		**ナガタケノコカニモリガ**	浅海の砂底														1					
21	ウミニナ科	**カワアイガイ**	淡水の混じる砂泥		2																	
22		**センニンガイ**	〃	15	13	1	27	3		1						10	3					
23		**イボウミニナガイ**	潮間帯下部の泥底		1																	
24	スイショウガイ科	**マガキガイ**	潮間帯水深20ｍ砂礫	131	82		236	133	1	5	5		20	3		47	56		1			
25		**クモガイ**	潮間帯20ｍ岩礁	1	1																	
26		**オハグロガイ**	砂地	3	1		2						1			4					1	
27		種不明			1																	
28	タカラガイ科	ホソヤクジマダカラ	潮下部～20ｍ岩礁	1		1																
29		ハナマルユキ	潮間帯・岩礁地	1	1		1	2	1		1							1			1	
30		キイロダカラ	潮間帯～20ｍ岩礁	1																		
31		ハナビラダカラ	潮間帯の砂礫地	1	3		1	1														
32		ホシダカラ	潮間帯下岩礁						1													
33	**フジツガイ科**	種不明				2											1					
34	アクキガイ科	アカイガレイシガイ	潮間帯～10ｍ岩礁	1																		
35		ツノレイシガイ	潮間帯岩礁	1	1																	
36		シラクモガイ	〃	1																		
37	**イトマキボラ科**	**イトマキボラ**	潮間帯～30ｍ岩礁	52	22	25	114	42	17	4		1	5	4	2	18	12	7		1		1
38	オニコブシガイ科	コオニコブシガイ	潮間帯岩礁				1															
39	イモガイ科	クロミナシガイ	潮間帯岩礁	1			1															
40		マダライモガイ	潮間帯付近岩礁	4			1	2														
41		アカシマミナシガイ	潮間帯～水深20ｍの砂底		1																	
42		ヤナギシボリイモガイ	潮間帯下岩礁				1															
43		サラサミナシモドキガイ	潮間帯付近岩礁				1															
44		**イボシマイモガイ**	潮間帯下岩礁										1									
45		ゴマフイモガイ	潮間帯岩礁														1					
46		アジロイモガイ	潮間帯～20ｍ砂底																			
47		キヌカツギイモ	潮間帯下岩礁	2																		
48		シロマダライモ	浅海、砂底	2			1	1														
49	**タケノコガイ科**	**ベニタケガイ**	浅海、砂底	1			1															
合計				437	340	224	627	350	180	11	14	7	52	13	18	137	161	88	1	2	2	1

巻貝 ＼ 出土地 層序				2トレP4	3トレ黒土	11トレ・P7		11トレ・P8		11トレ・P9			12トレ・P4			不明			合計		
番号	科名	貝種名	生息地	破片	破片	殻頂	破片	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
1	**ツタノハガイ科**	オオベッコウガサガイ	潮間帯・岩礁																0	1	0
2	**ユキノアサガイ科**	**リュウキュウウノアシガ**	〃																1	1	1
3	ミミガイ科	**オクトコブシ**	〃																0	0	3
4		イボアナゴウ	〃																1	0	1
5	ニシキウズ科	**オキナワイシダタミ**	潮間帯・内湾転石岩礁																1	0	0
6		**ニシキウズガイ**	潮間帯・岩礁																1	0	3
7		ギンタカハマ	潮間帯付近・岩礁			1	1									2	2		42	21	2
8		サラサバテイラ	潮下部・岩礁			1										2		4	64	42	26
9	リュウテン科	**ヤコウガイ**	浅海の岩礁	1	1		7		1			1		1	5		1	7	2	98	264
10		ヤコウガイの蓋	〃		1		3											4	27	112	163
11		チョウセンサザエ	潮間帯下・岩礁				2									5	4	1	306	189	26
12		**チョウセンサザエの蓋**	〃													1			43	4	5
13		**カンギク**	潮間帯～5ｍ岩礁底																25	5	1
14	アマオブネ科	アマオブネガイ	潮間帯・岩礁底																2	0	0
15	**ヤマタニシ科**	オキナワヤマタニシ	陸産																3	0	1
16	**トウガタカワニナ**	**トウガタカワニナ**	淡水産・汽水産																1	0	0
17	腑ニノツノガイ科	**オニノツノガイ**	潮間帯下岩礁																2	5	1
18		ウミニナカニモリ	中～低潮線・岩礁地																30	6	0
19		クワノミカニモリ	潮間帯の砂や小石														1	1	1	1	1
20		ナガタケノコカニモリガ	浅海の砂底																0	1	0
21	ウミニナ科	**カワアイガイ**	淡水の混じる砂泥																0	2	0
22		**センニンガイ**	〃			2	1	1		1						1	1		55	23	2
23		**イボウミニナガイ**	潮間帯下部の泥底																0	1	0
24	スイショウガイ科	マガキガイ	潮間帯水深20ｍ砂礫								1					7	10		447	290	1
25		クモガイ	潮間帯20ｍ岩礁																1	1	0
26		**オハグロガイ**	砂地													1			11	2	0
27		種不明																	0	1	0
28	タカラガイ科	**ホソヤクジマダカラ**	潮下部～20ｍ岩礁																1	0	1
29		**ハナマルユキ**	潮間帯・岩礁地															1	2	5	3
30		キイロダカラ	潮間帯～20ｍ岩礁																1	0	0
31		ハナビラダカラ	潮間帯の砂礫地																2	4	0
32		**ホシダカラ**	潮間帯下岩礁																0	0	1
33	**フジツガイ科**	種不明																	0	1	2
34	アクキガイ科	アカイガレイシガイ	潮間帯～10ｍ岩礁																1	0	0
35		ツノレイシガイ	潮間帯岩礁																1	1	0
36		シラクモガイ	〃																1	0	0
37	**イトマキボラ科**	イトマキボラ	潮間帯～30ｍ岩礁			2	2									2	1		195	83	56
38	**オニコブシガイ科**	**コオニコブシガイ**	潮間帯岩礁																1	0	0
39	イモガイ科	**クロミナシガイ**	潮間帯岩礁																2	0	0
40		マダライモガイ	潮間帯付近岩礁																5	2	0
41		アカシマミナシガイ	潮間帯～水深20ｍの砂底																0	1	0
42		ヤナギシボリイモガイ	潮間帯下岩礁																1	0	0
43		サラサミナシモドキガイ	潮間帯付近岩礁																1	0	0
44		イボシマイモガイ	潮間帯下岩礁																1	0	0
45		**ゴマフイモガイ**	潮間帯岩礁																0	1	0
46		アジロイモガイ	潮間帯～20ｍ砂底																2	0	0
47		キヌカツギイモ	潮間帯下岩礁																3	2	0
48		**シロマダライモ**	浅海、砂底																1	0	0
49	**タケノコガイ科**	**ベニテケガイ**	浅海、砂底																1	0	0
合計				1	2	6	16	1	1	1	1	1	1	1	5	21	20	18	1288	909	564

第41表　貝類出土状況（二枚貝）

二枚貝 ＼ 出土地 層序				表採						Ⅰ層						Ⅰ層										
																a					b					
				完形			穀頂		破片	完形			穀頂		破片	完形		穀頂		破片	完形			穀頂		破片
番号	科名	貝類名	生息地	L	R	不	L	R		L	R	不	L	R		L	R	L	R		L	R	不	L	R	
1	フネガイ科	ベニユガイ	潮間帯・岩礫地		1																					
2		ハクガイ	汽水域・泥地	1			1		1	1																
3	タマキガイ科	ソメワケグリ	浅海の砂底	2																						
4	イガイ科	リュウキュウヒバリ	潮間帯～20m岩礁に付着																			1				
5	イタヤガイ科	ヒナギンチャク	底潮線～5m			1						1											1			
6		イタヤガイ	水深20m～50m細砂地		1				2						2									1	1	2
7		種不明							1						1											
8	ウミギク科	メンガイ	潮間帯岩礁珊瑚礁に付着								1															
9		メンガイの一種				1																				
10	ツキガイ科	ウラツキガイ	潮間帯20m砂底	20	17		1	4		23	19		5	1							44	50		2	1	1
11	ザルガイ科	ヒレインコガイ	深い岩礁に付着									1														
12		シロザル	浅い岩礁に付着							1																
13		種不明							1																	
14	ザルガイ科	リュウキュウザルガイ	浅海、砂底	3	1		2				3		1								3	2				
15		カワラガイ	浅海、砂底	25	28		15	21	2	55	82		22	19	3	1		1	2	1	17	29		8	13	3
16	シャコガイ科	シラナミ	潮間帯珊瑚礁	1	1			3	4		1			1	2											
17		ヒメジャコ	潮間帯20m珊瑚礁	2			1	7	21		1			3	28											4
18	チドリマスオガイ科	イソハマグリ	潮間帯上部砂地	6	3			1		11	6		2				1					1				
19	ニッコウガイ科	ニッコウガイ	浅海、砂地																			1				
20		リュウキュウシラトリ	浅海、砂礫地																		1	1				
21		サメザラ	浅海、砂地		1																					
22	シオサザナミ科	リュウキュウマスオガイ	潮間帯砂礫海底											1												
23	シジミガイ科	タイワンシジミ	淡水、汽水域										2	1												
24	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	浅海、砂底	1	2		1			2	2		2	1	3											
25		ホソスジイナミガイ	浅海、砂底	3	6					5	3			2								1				
26		アラスジケマンガイ	浅海、砂底	75	76		14	15	1	39	36		8	8		1	2				18	16		3	1	
27		ハマグリ	汽水域、砂泥地	17	15		18	20	3	35	40		40	37	11	1	1	2		1	8	7		11	2	1
28		ユウカゲハマグリ	浅海、砂底		1																	2				
29		オキシジミ	汽水域、泥地	39	30		10	16	4	61	70		23	23	7	2	1	1	2	1	23	27		3	12	3
30		オイノカガミ	潮間帯、砂泥地		1						1															
31		アサリ	浅海、砂泥礫地	2	2																					
32		スダレハマグリ	浅海、砂地	2	2					1	3															
合計				199	188	2	63	87	40	233	268	2	105	97	57	5	5	4	4	3	114	138	1	28	30	14

二枚貝 ＼ 出土地 層序				Ⅱ層						Ⅲ層		2トレP	3トレ黒土		11トレ・P7			12トレ	不明				合計				
				完形			穀頂		破片	完	破片	破片	完形		完	穀	破片	破片	完形		穀頂		破片	完形		穀頂		破片
番号	科名	貝類名	生息地	L	R	不	L	R		R			L	R	R	L			L	R	L	R		L	R	不明	L	R	
1	フネガイ科	ベニユガイ	潮間帯・岩礫地																					0	1	0	0	0	0
2		ハイガイ	汽水域・泥地																					1	0	0	1	0	1
3	タマキガイ科	ソメワケグリ	浅海の砂底																					2	0	0	0	0	0
4	イガイ科	リュウキュウヒバリ	潮間帯～20m岩礁に付着																					0	1	0	0	0	0
5		ヒナギンチャク	底潮線～5m			2																		0	0	5	0	0	0
6		イタヤガイ	水深20m～50m細砂地						1		1													0	1	0	1	1	8
7		種不明																						0	0	0	0	0	2
8	ウミギク科	メンガイ	潮間帯岩礁珊瑚礁に付着																					0	1	0	0	0	0
9		メンガイの一種		1																				1	0	1	0	0	0
10	ツキガイ科	ウラツキガイ	潮間帯20m砂底	10	6		2			1				1						2	1			97	96	0	11	6	1
11		ヒレインコガイ	深い岩礁に付着																					0	0	1	0	0	0
12		シロザル	浅い岩礁に付着																					1	0	0	0	0	0
13		種不明																						0	0	0	0	0	1
14	ザルガイ科	リュウキュウザルガイ	浅海、砂底																					6	6	0	3	0	0
15		カワラガイ	浅海、砂底	5	2		3	5	3				1							3		1		104	144	0	49	61	12
16	シャコガイ科	シラナミ	潮間帯珊瑚礁									1				1	1	1						1	2	0	1	4	9
17		ヒメジャコ	潮間帯20m珊瑚礁				2	3	13								1						1	2	1	0	3	13	68
18	チドリマスオガイ科	イソハマグリ	潮間帯上部砂地	1											1				1					19	12	0	2	1	0
19	ニッコウガイ科	ニッコウガイ	浅海、砂地																					0	1	0	0	0	0
20		リュウキュウシラトリ	浅海、砂礫地																					1	1	0	0	0	0
21		サメザラ	浅海、砂地																					0	1	0	0	0	0
22	シオサザナミ科	リュウキュウマスオガイ	潮間帯砂礫海底	1	1			1																1	1	0	0	2	0
23	シジミガイ科	タイワンシジミ	淡水、汽水域	1																				1	0	0	2	1	0
24	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	浅海、砂底		2																			3	6	0	3	1	3
25		ホソスジイナミガイ	浅海、砂底		1																			8	11	0	0	2	0
26		アラスジケマンガイ	浅海、砂底	8	8		3	2											1	1				142	139	0	28	26	1
27		ハマグリ	汽水域、砂泥地	1	1		6	6	1										1	1		1		63	65	0	77	66	17
28		ユウカゲハマグリ	浅海、砂底					1																0	3	0	0	1	0
29		オキシジミ	汽水域、泥地	8	11		10	7	1						1					2	4		1	133	142	0	51	60	17
30		オイノカガミ	潮間帯、砂泥地																					0	2	0	0	0	0
31		アサリ	浅海、砂泥礫地																					2	2	0	0	0	0
32		スダレハマグリ	浅海、砂地					1																3	5	0	0	1	0
合計				36	32	2	26	26	19	1	1	1	1	1	2	1	2	1	3	9	5	2	2	591	644	7	232	246	140

第35節　節足･脊椎動物遺存体

本地区で出土した節足・脊椎動物遺存体は節足動物門、Ⅰ甲殻綱・十足目１科１種、と脊椎動物門・Ⅰ軟骨漁綱１目１種、Ⅱ硬骨魚綱５科６種、Ⅲ爬虫綱１科１種、Ⅳ鳥類綱１科１種、Ⅴ哺乳綱、８科９種が検出されている。以下に出土遺存体の種名リストを示した。

第42表　節足･脊椎動物依存体種名一覧

A．節足動物門	*A.Phylum VERTRBRATA*
Ⅰ．甲殻綱	*Ⅰ.Class Crustacea*
Ⅰ．十脚目	*1.Decapoda*
ａワタリガニ科	*a.Family portunidae*
ノコギリガサミ	*Scyily serrata*
B脊椎動物門	*B.Phylum VERTRBRATA*
Ⅰ．軟骨漁網	*Ⅰ.Class Chondrichthyes*
サメ目	*Order Lamniformes*
属・種不明	*Gen.et sp.Indet*
Ⅱ．硬骨漁網	*Ⅱ.Class Osteichthyes*
１．スズキ目	*Order Perciformes*
ａ．ハタ科	*a.Family Serranidae*
属・種不明	*Gen.et sp.Indet*
ｂ．タイ科	*b.Family Sparidae*
クロダイ	*Acanthopagrus Schlegeli (Bleeker)*
ｃ．フエフキダイ科	*c.Family Ltjanidae*
ハマフエフキ	*Lethrinus Choerorhynchus*
ヨコシマクロダイ	*Monotaxi grandoculis (Forsskal)*
ｄ．ベラ科	*d.Family Laridae*
コブダイ	*Semicossyphus reliculatus*
ｅ．ブダイ科	*e.Family Scariddae*
属・種不明	*Gen.et sp.Indet*
Ⅲ．爬虫網	*Ⅲ.Class Reptilia*
１．カメ目	*1.Order Chelania*
ウミガメ科	*Family Chelonidac*
属・種不明	*Gen.et sp.Indet*
Ⅳ．鳥類網	*Ⅳ.Class Aves*
１．キジ目	*1.Order Calliformes*
キジ科	*Family Phasianidae*
ニワトリ	*Gallus gallus*
属・種不明	*Gen.et sp.Indet*
Ⅴ．哺乳網	*Ⅴ.Class Mammalia*
１．齧歯目	*1.Order Rodentia*
ネズミ科	*Family Murida*
属・種不明	*Gen.et sp.Indet*
２．食肉目	*2.Order Canivora*
イヌ科	*Family Canidae*
イヌ	*Canis familiaris*
ネコ科	*Family Felidae*
ネコ	*Felis catus*
３．奇蹄目	*3.Order Perissosactyla*
ウマ科	*Family Equidae*
ウマ	*Equus caballus*
４．偶蹄目	*4.Order Artiodactyla*
イノシシ科	*Family Suidae*
リュウキュウイノシシ	*Sus riukiuanus*
ブタ	*Sus domesticus*
シカ科	*Ceruidae*
ニホンジカ	*Cervus nippon*
ウシ科	*Family Bovidae*
ヤギ	*Capra aegagrus*
ウシ	*Bas taurus*
目・科目不明	*Macaca fuscata yakui*
ヤクシマサル	

第43表　魚類出土表

部位等＼出土層位等						表採		Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅲ層		合計	
サメ目	科不明	サメ	椎体			3		2		1				6	
スズキ目	ハタ科	種不明	顎骨	R	L			2	5					2	5
							3	4	7	2	1			6	11
			鋤骨						1						1
			角骨						1						1
			破片				1		3		1				5
	フエダイ科	種不明	顎骨												
								1						1	
	タイ科	クロダイ	顎骨	R	L				1						1
										1				1	
	フエフキダイ科	ハマフエフキ	顎骨	R	L	1	2	16	9		2			17	13
							2	10	11	1				11	13
			副楔骨						15		1				16
			主上顎骨	R	L		1	6	3	1	1			7	5
			口蓋	R	L			3	6					3	6
			方骨	R	L		2	2	3					2	5
			舌骨	R	L			2	12					2	12
			前鰓蓋骨	R	L			6	4					6	4
			主鰓蓋骨	RL不明					5						5
			角骨	R	L			1	4					1	4
		ヨコシマクロダイ	顎骨	R	L				1						1
									1						1
	ベラ科	コブダイ	顎骨	R	L			1	2					1	2
								4		1				5	
			咽頭骨	R	L										
						1									1
	ブダイ科	種不明	顎骨	R	L	1		2	3					3	3
								2	1					2	1
種不明		脊椎				5		91		5		1		102	
		鋤骨							1						1
		主上顎骨	A	R	L	1		5	8					6	8
			B	RL不明						1					1
		前鰓蓋骨		R	L	1		5	5					6	5
		舌骨		R	L				3						3
				RL不明		1		7		1				9	
		魚骨		RL不明				4		1				5	
		臀鰭血管間棘				1		6		1				8	
		背鰭棘				1		8						9	
		下尾軸骨				1		4						5	

凡例：上顎骨 / 歯骨　　右前上顎骨　左前上顎骨 / 右歯骨　左歯骨　　右上咽頭骨　左上咽頭骨 / 下咽頭骨

第44表　ノコギリガサミ出土一覧

出土地	部位	個数
Ⅱ層	背甲板	1

第45表　カメ出土一覧

出土地	部位	個数
Ⅰ層	可動指	2
Ⅰ層	不動指	2

第46表　ニワトリ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			Ⅱ層			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
脊椎骨	頸椎						1				0	0	1
	胸椎　第2～5						1				0	0	1
	椎体						2				0	0	2
烏口骨	完形		1		1	3					1	4	0
	近位端～遠位部				2	3			1		2	4	0
	近位端					3					0	3	0
	近位端～骨体					3					0	3	0
	近位部～遠位部				1						1	0	0
	近位部～骨体				2						2	0	0
	骨体					1					0	1	0
	骨体～遠位端				2						2	0	0
肩甲骨	骨体～遠位端					1					0	1	0
上腕骨	近位端	1			2	3					3	3	0
	近位端～骨体				1	1					1	1	0
	近位部				1	3					1	3	0
	近位部～遠位端					2					0	2	0
	近位部～遠位部				2						2	0	0
	近位部～骨体					3					0	3	0
	骨体～遠位端		1		5	3		1	1		6	5	0
	骨体～遠位部					3					0	3	0
	骨体	1			1	7※2					2	7※2	0
	遠位端				3	1			1		3	2	0
	遠位部				3	4					3	4	0
尺骨	**近位端～骨体**				3	5		1			4	5	0
	近位部～遠位端				2						2	0	0
	骨体				5	2	9				5	2	9
	骨体～遠位端				4	5					4	5	0
中手骨	骨体～遠位端				1						1	0	0
大腿骨	完形				2						2	0	0
	近位端	1	1		4	3					5	4	0
	近位端～遠位部					2					0	2	0
	近位端～骨体				4	3		1			5	3	0
	近位部～遠位部				2						2	0	0
	骨体		5		9	14		1			10	19	0
	骨体～遠位端		1		3	3					3	4	0
	骨体～遠位部					2					0	2	0
	遠位端					1					0	1	0
	遠位部				1						1	0	0
脛骨	完形					1					0	1	0
	近位端～骨体	1	4		2	1					3	5	0
	近位部～遠位部					1					0	1	0
	骨体	2	4		41	21①	1	2	4	1	45	29①	2
	骨体～遠位端		1		13	5		1			14	6	0
	骨体～遠位部					2					0	2	0
中足骨	近位端				2	1					2	1	0
	骨体		1			1			1	1	0	3	1
	骨体～遠位端				1						1	0	0
	骨体～遠位部				1						1	0	0
合計		6	19	0	126	117①※2	14	7	8	2	139	144①※2	16

凡例：○破片　※上腕骨（骨体２）ニワトリ？

第47表　ネズミ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
下顎骨					1	1		1	1	0
上腕骨	完形				1			1	0	0
尺骨						1		0	1	0
寛骨						1		0	1	0
大腿骨	完形				1			1	0	0
脛骨	完形				1			1	0	0
指骨	基節骨			1				0	0	1
合計		0	0	1	4	3	0	4	3	1

第48表　イヌ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
下顎骨			1											0	1	0
上腕骨	近位部～骨体											1		0	1	0
	近位部～遠位端					1								0	1	0
	骨体～遠位端	1												1	0	0
橈骨	近位端～骨体					1								0	1	0
中手骨	骨体～遠位端		1											0	1	0
寛骨	臼部坐骨					1		1	1					1	2	0
大腿骨	近位部～骨体							1						1	0	0
	骨体		1											0	1	0
脛骨	近位端～骨体							1	1					1	1	0
	骨体	1												1	0	0
	遠位端	1												1	0	0
合計		3	3	0	0	3	0	3	2	0	0	1	0	6	9	0

第49表　ヤクシマザル骨(雌)出土表

部位＼出土地		表採		
		右	左	不明
脊椎骨	胸椎			4
	腰椎			2
	仙骨・第1仙椎			1
肋骨	破片			14
上腕骨	近位部～骨体	1		
	近位部～遠位端		1	
橈骨	近位部～遠位部		1	
	近位部～遠位端	1		
尺骨	近位端～遠位部	1	1	
大腿骨	完存	1	1	
脛骨	近位端～遠位部		1	
腓骨	近位部～遠位端	1		
	近位部～遠位部	1	1	
合計		6	6	21

第50表　ヤクシマザル骨(雄)出土一覧

部位＼出土地		Ⅰ層	
		右	左
尺骨	近位部	1	1

第51表　ブタ骨出土一覧

部位	出土地	Ⅱ層
寛骨・R	腸骨翼基部	1

第52表　シカ骨出土一覧

部位	出土地	Ⅱ層
肩甲骨・L	遠位端	1

第53表　鳥類骨出土一覧

部位＼出土地		Ⅰ	Ⅱ	
		右	右	左
肋骨	骨体～遠位端		1	
大腿骨	近位部	1		1

第54表　種・部位不明出土表

種・部位不明	出土地
a	Ⅱ層
b	表採
c	表採
d	Ⅰ層
e	Ⅱ層
f	TP4・Ⅰ
g	Ⅱ層
h	表採

第55表　ヤクシマザル歯牙出土一覧

出土地＼部位	上顎骨右					下顎骨右		下顎骨左		
	C	P2	P3	P4	M1	P4	M1	M1	M2	M3
表採	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

第56表　ウシ歯・牙出土量

部位 出土地		右 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	左 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	合計
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								
上顎骨	表採												1	1																2
																														0
	Ⅰ層									3																	1	1		5
																														0
	Ⅱ層											2																1		3
																														0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	10
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
下顎骨	表採	1											1	1									1	1	3	2	1			11
																														0
	Ⅰ層												1				1										1	1	2	6
																														0
	Ⅱ層																											1	1	2
																														0
	不明												1																	1
																														0
合計		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	4	3	4	20
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第57表　ウマ歯・牙出土量

部位 出土地		右 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	左 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	合計
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								
上顎骨	表採									1			1											1			2			5
																														0
	Ⅰ層														1												1			2
																														0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	7
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
下顎骨	表採		1													1													1	3
																														0
	Ⅲ層																													0
																														0
合計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第58表　イノシシ歯・牙出土量

部位 出土地		右 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	左 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	合計
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								
上顎骨	表採		1																								1	2	1	5
																														0
	Ⅰ層																													0
																														0
	Ⅱ層																								1	1	2	1		5
																														0
	Ⅲ層																											1		1
																														0
合計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	4	3	0	11
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
下顎骨	表採											1	2	2																5
																														0
	Ⅰ層			1♂													2		1♂								1			3♂2
																														0
	Ⅱ層											1	2	1	⟨1⟩													1		5 ⟨1⟩
																														0
合計		0	0	0	1♂	0	0	0	0	0	0	2	4	3	⟨1⟩	0	2	0	1♂	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	13♂2⟨1⟩
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

凡例：〈 〉未萌出　♂雄

第59表　ヤギ歯・牙出土量

部位 出土地		右 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	左 I1	I2	I3	C				P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	合計
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								i1	i2	i3	c	m2	m3	m4								
上顎骨	Ⅰ層												1																1	2
																														0
	Ⅱ層																										1	1	1	3
																														0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	5
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
下顎骨	Ⅰ層																								1	1	1			3
																														0
	Ⅱ層										1	1	3	3	3												1			12
																					1	1								2
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	15
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2

第60表　イヌ歯・牙出土一覧

部位	出土地
L上顎骨　M3	TP・11

第61表　ウシ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			TP7・Ⅰ			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
	下顎骨	1	1				①		1	①							1	2	②
	筋突起	1															1	0	0
脊椎骨	頸椎			1													0	0	1
	軸椎			1													0	0	1
	胸椎						1										0	0	1
	腰椎						2										0	0	2
肋骨	破片			③						①							0	0	④
肩甲骨	臼部							①									①	0	0
	骨体		1		1	2											1	3	0
上腕骨	遠位部	1			1	2											2	2	0
	破片（骨端片）	①	②			①											①	③	0
橈骨	近位部							1									1	0	0
	骨体～遠位端	1															1	0	0
	骨体				①			1									1①	0	0
尺骨	近位部～遠位部				1												1	0	0
	骨体	1						1									2	0	0
中手骨	骨体	①	1						1								①	2	0
寛骨	臼部	1	1		1												2	1	0
	恥骨	1	1														1	1	0
大腿骨	近位部～遠位部		1														0	1	0
	骨体				1												1	0	0
	遠位端						①										0	0	①
脛骨	近位端	1①															1①	0	0
	近位部							1①									1①	0	0
	骨体	1						1						1	1		3	1	0
	破片（骨端片）		①						①								0	②	0
距骨		2															2	0	0
踵骨		1	1					①	1								1①	2	0
中足骨	近位端～骨体								1								0	1	0
	近位部～遠位部		1														0	1	0
	骨体～遠位端	1															1	0	0
	破片	①	①										①				①	①	①
指骨	基節骨	1	1				①	1									2	1	①
	中節骨				1			①	1								1①	1	0
合計		14④	9④	2③	6①	4①	3③	6④	5①	②	0	0	①	1	1	0	27⑨	19⑥	5⑨

凡例：○破片

第62表　ウマ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			Ⅱ層			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
肩甲骨	破片				1						1	0	0
寛骨	坐骨部		1								0	1	0
大腿骨	遠位部				1						1	0	0
中足骨	骨体								1		0	1	0
指骨	基節骨			1						1	0	0	2
合計		0	1	1	2	0	0	0	1	1	2	2	2

※肩甲骨（破片）ウマ？

第63表　イノシシ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			TP4・Ⅰ			TP7・Ⅰ			不明			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭蓋骨							③																0	0	③
	頭頂骨							1															1	0	0
	側頭骨頬骨突起				1																		1	0	0
下顎	破片					1	1																0	1	1
脊椎	腰椎						1																0	0	1
肋骨	破片	2	5		3	12		3	1						1								8	19	0
肩甲骨	骨体	1	1			1		1															2	2	0
	骨体～遠位端														1								0	1	0
	遠位端		1		3	1		1															4	2	0
	破片			1				1															1	0	1
上腕骨	完形								1														0	1	0
	近位部	1																					1	0	0
	骨体	1						1	1														2	1	0
	骨体～遠位部		4			1			1														0	6	0
	遠位部				3			1													1		4	1	0
	破片				1			1															2	0	0
橈骨	完形																			1			1	0	0
	近位端～骨体		1			1		1															1	2	0
	骨体	1	1		1	3						1											2	4	1
	骨体～遠位部					3																	0	3	0
	破片				1																		1	0	0
橈側手根骨																				1			1	0	0
尺骨	近位部～遠位部	1																					1	0	0
	近位部～骨体					2(1)		2															2	2(1)	0
	骨体		2			1		2												1			3	3	0
中手骨	近位部～遠位部 Ⅱ				1																		1	0	0
	完形 Ⅲ					1		1															1	1	0
	近位端～骨体 Ⅲ				1																		1	0	0
寛骨	臼部		1		1	1																	1	2	0
大腿骨	近位部		1		3			1															4	1	0
	近位部～骨体								1														0	1	0
	骨体	4	4		2	1		3①	2		1						(1)			①			10②(1)	7	0
	遠位骨端のみ				①	1																	①	1	0
	破片		2																				0	2	0
脛骨	近位部					1																	0	1	0
	近位部～遠位端		1			2																	0	3	0
	近位部～遠位部																			1			1	0	0
	近位部～骨体		2																				0	2	0
	骨体～遠位端																						2	0	0
	骨体～遠位部	1			1			1															2	0	0
	骨体	4	2		1																		5	3(1)	0
	破片					1		1	(1)														0	1	0
腓骨						1																	3	1	0
腓骨						1		2															2①	1	0
中足骨	完形 Ⅲ				1①																		0	1	0
	近位部～遠位部 Ⅱ					1																	0	1	0
	完形 Ⅳ	1				1																	1	0	0
	近位端～遠位部 Ⅳ																						1	0	0
	近位部～骨体 Ⅳ		1					1															1	1	0
中間手根骨								1															1	0	0
腓骨					1																		1	0	0
合計		19	30	1	25②	38(1)	2③	26①	7(1)	0	1	0	1	0	2	0	(1)	0	0	5①	1	0	76④(1)	78(2)	4③

凡例：○破片（　）幼

第64表　ネコ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			Ⅱ層			Ⅲ層			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
下顎骨												1		0	1	0
脊椎骨	胸椎			2										0	0	2
上腕骨	近位端～骨体							1						1	0	0
	近位部～遠位端	1												1	0	0
	遠位部				1									1	0	0
橈骨	近位端～骨体							1						1	0	0
脛骨	近位端	1												1	0	0
	遠位端		1											0	1	0
距骨		1												1	0	0
踵骨		1												1	0	0
中足骨	Ⅳ　近位端				1									1	0	0
合計		4	1	2	2	0	0	2	0	0	0	1	0	8	2	2

第65表　ヤギ出土表

部位＼出土地		表採			Ⅰ層			Ⅲ層			合計		
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
椎体	胸椎						2				0	0	2
上腕骨	骨体～遠位端					2					0	2	0
橈骨	近位端～骨体		1			2					0	3	0
中手骨	近位端～骨体	2									2	0	0
	骨体						1				0	0	1
中足骨	骨体						1			1	0	0	2
合計		2	1	0	0	4	4	0	0	1	2	5	5

※中足骨（骨体）2個ヤギ？

第Ⅶ章　結　語

以上、前章までにて調査の内容等について述べてきた。ここでは、調査によって明らかになったことなどについて延べ、結語としたい。

すでに述べたように、調査は首里城内郭地区への緊急及び管理用車輌のためのアクセス道路敷設に伴った事前調査であった。調査地区は、その大半が40～60度程の傾斜地形を呈するとともに、琉球石灰岩の岩盤が基盤をなした凹凸の著しい地形であったことから、遺物包含層は主にその凹部に堆積していた。堆積状況等から、この傾斜部での堆積はプライマリーなではなく、上方（北方）の内郭地区からの投棄あるいは流入したものであろうと解した。一方、傾斜部の裾部からはほぼ平坦地形をなして南側の民家の広がる部分に延びていくが、この平坦面で唯一の遺構が検出された。

遺構の検出された平坦面は、北側の傾斜部と南側の民家に接した限定された範囲であったうえ、旧琉球大学のサークル棟が建っていた場所に隣接していたこともあって、そのフーチングやゴミ捨て穴等が掘り込まれ、全貌については判然としなかったが、拳大程の石灰岩礫を密に充填して敷き均されていることや、遺構内からは柱穴等のピット様なども検出されていない状況等からして、かかる遺構は古道であろうと推測した。

遺構内部や周辺等からの遺物が僅少であったことや砕片がほとんどであったことから、遺構の構築年代等については判然としない部分が多いが、限られた遺物等からして近世、分けても18Ｃ以降であろうと思われる。

出土遺物は、従前の内郭及び周辺地区などと同様、中国産を主とし、タイ、ベトナム、本土、沖縄産等の陶磁器をはじめ、瓦器、屋瓦、円盤状製品、石製品及び石造製品、古銭、鉄製品及び銅製品、玉、簪、金属製品、人形、土錘、煙管、骨製品、貝類及び獣類遺存体等の種々の遺物が検出されている。

紙幅などの関係もあり、個々の遺物についての所見は述べられないが、その中で特徴的な中国産及び本土産陶磁器とサル骨について、若干コメントしたい。

中国産陶磁器は青磁、白磁、青花（染付）、釉裏紅、色絵などの磁器類と、黒釉陶器（天目）、華南彩陶に属すると考えられる陶器類がある。これらの生産年代は、15～17Ｃにかけてのものが主体をなす。中国産陶磁器で最も多い青磁は、龍泉窯系が主体をなし、生産年代は概ね15～16Ｃ前後である。代表的な遺物としては、第６図10、第７図１、第８図９の碗などがあげられる。白磁は、主体となる時期は15～16Ｃである。

青花（染付）は景徳鎮系を主体とするが、福建・広東系と称されているタイプも比較的多く見られた。若干ではあるが漳州窯系のものも見られた。時期的には、16～17Ｃにかけてのものが主体をなしている。代表的な遺物として、第19図13～15の碗があげられる。なお、華南彩釉陶（三彩・法花・翡翠等）に属する思われる銅緑釉の一群がまとまったかたちで確認されたのは注目される。代表的なものには、壺（酒会壺等）がある。その他には、香炉や鉢あるいは器種不明の資料なども含まれる。

本土産陶磁器は、磁器と陶器に二大別され、磁器としては染付、色絵、印判の３種がある。染付には有田、鍋島、波佐見、肥前（産地不明）、瀬戸、美濃が確認されている。なかでも注目されるのは、従来県内にてその出土が知られていない柿右衛門（南川原系）の皿や鍋島藩の御用窯にて製作された変形皿がある。色絵には、有田と肥前系があり、柿右衛門（南川原系）の皿と富士山型の変形皿の出土は、今後の肥前磁器研究に寄与するものであろう。陶器は、九州産と関西産があり、関西系としては、京焼、信楽焼が大半を占める。色絵を施したものとそうでないものがある。これらの器種としては、皿が半数以上を占める。九州産では、比較的ポピュラーなものとして肥前の内野山、武雄産などがある。なお、特記すべきものとして、薩摩産の白薩摩があげられる。他に、呉須や鉄絵により千鳥印を施すものもある。

出土遺物で特に注目されるものとして、沖縄では初めて出土したサル骨がある。サル骨は、九州島以北では縄文時代以降にその出土が知られるが、天然分布の南限である屋久島以南の島々では未見であった。

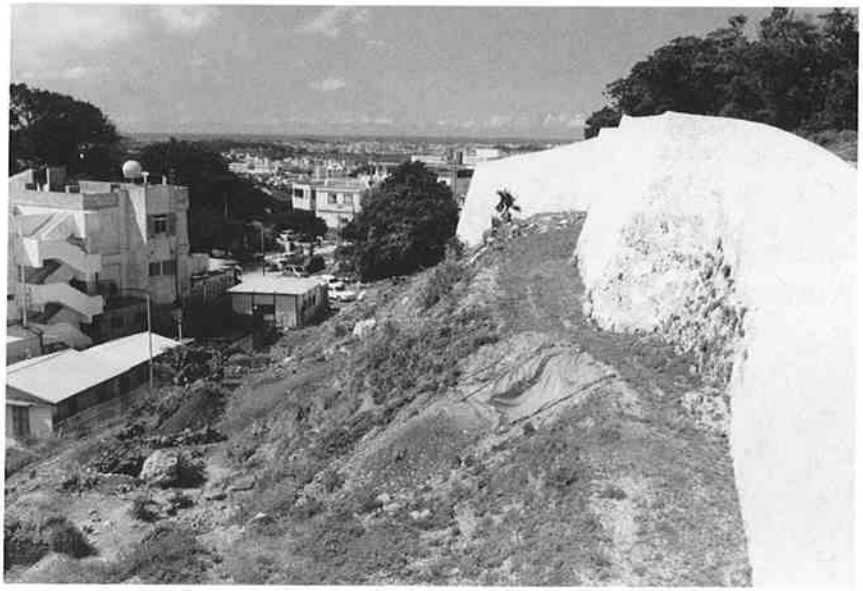
出土獣骨を整理、精査している過程で名古屋大学文学部考古学研究室の渡辺誠教授によりサル骨の可能性が指摘され、先生の紹介で京都大学霊長類研究所の毛利俊雄先生に依頼し、研究していただいた結果、附編に述べられているようにヤクザルであることが判明した。さらに当該サル骨に関し、毛利先生方の研究チームによるミトコンドリア分析による研究成果の玉稿をいただき、附編として掲載した。

当該サルについて、単純に考えれば1609年の薩摩の侵攻以後、来琉した薩摩役人等の関係者によってもたらされたであろうと推測するが、首里王府内でどのような目的でサルを入手したのか、その時期的な問題とも併せて、興味深いところである。

図　　版

調査前の状況（西より）

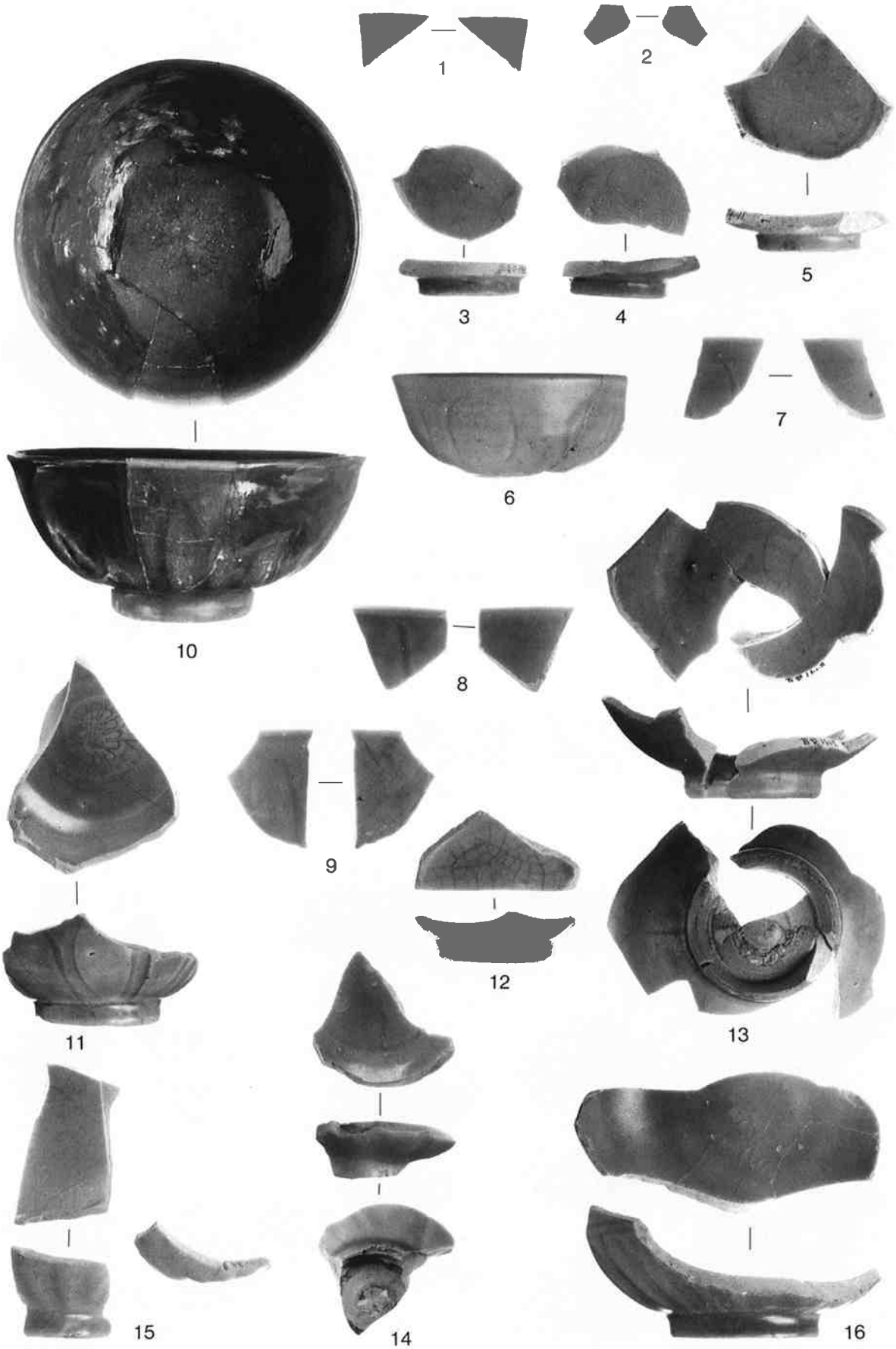
調査地区近景（北東より）



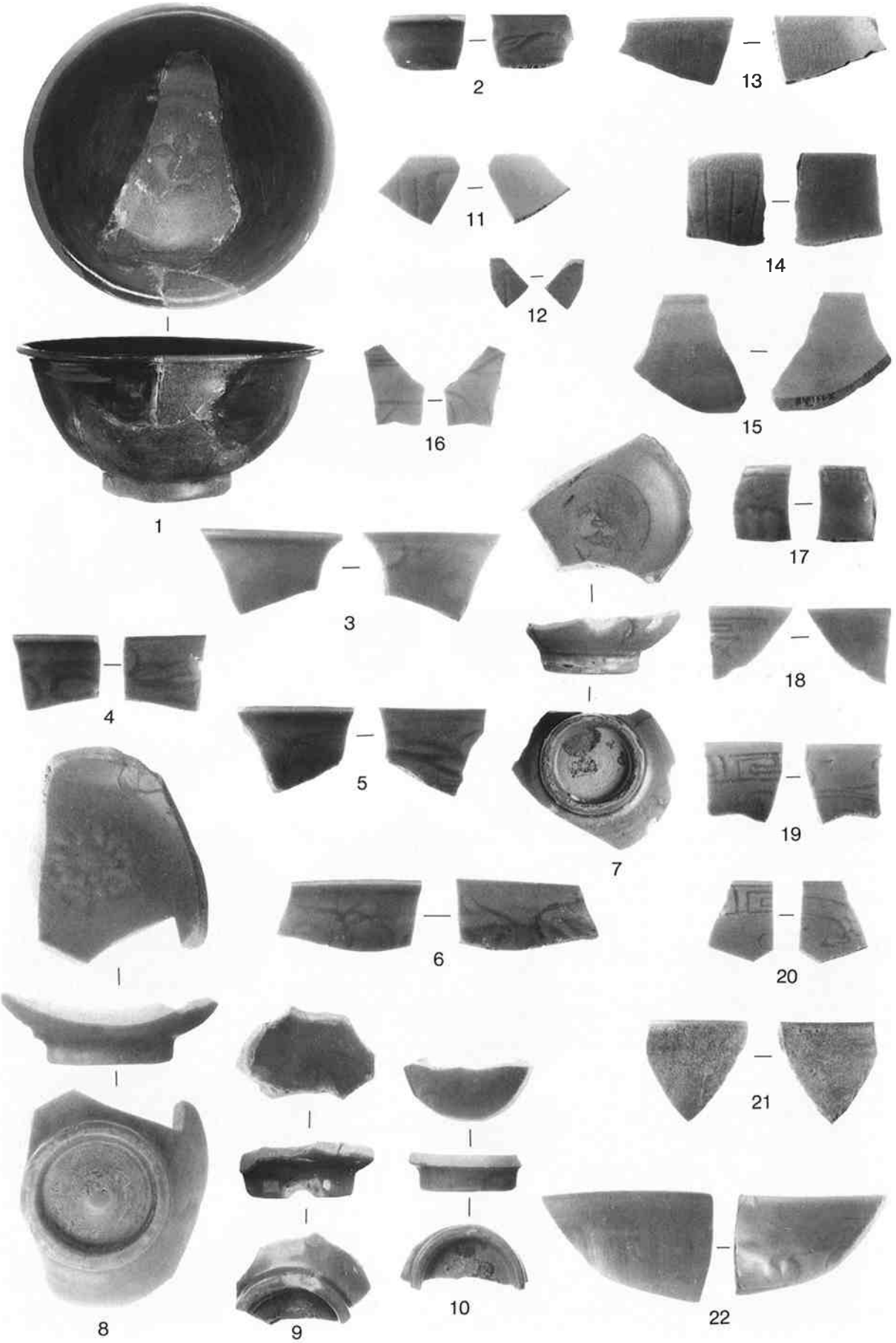
調査光景

検出された石敷き遺構（南より）

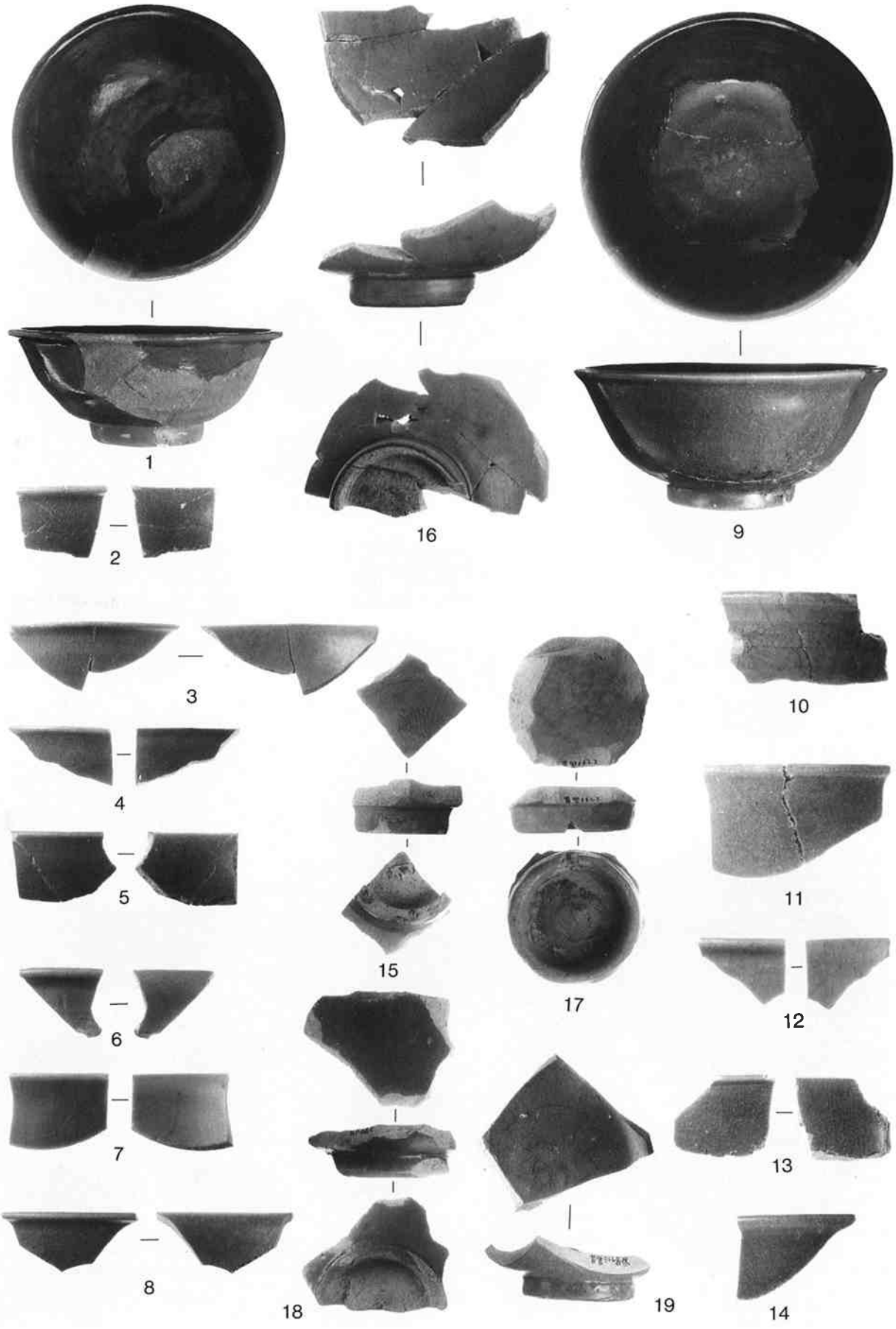
検出された石敷き遺構（東より）



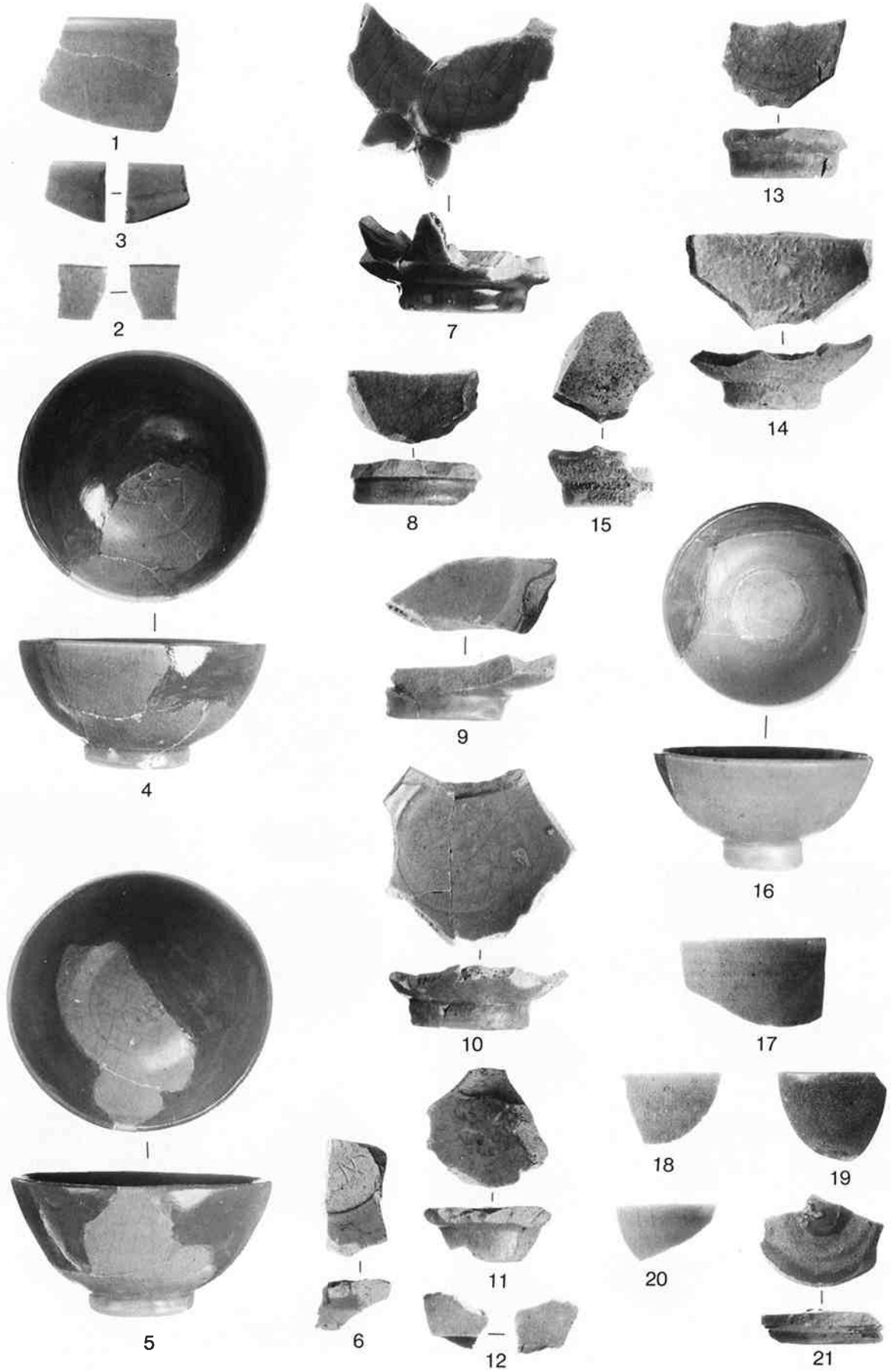
図版 3　青磁 1 （碗）



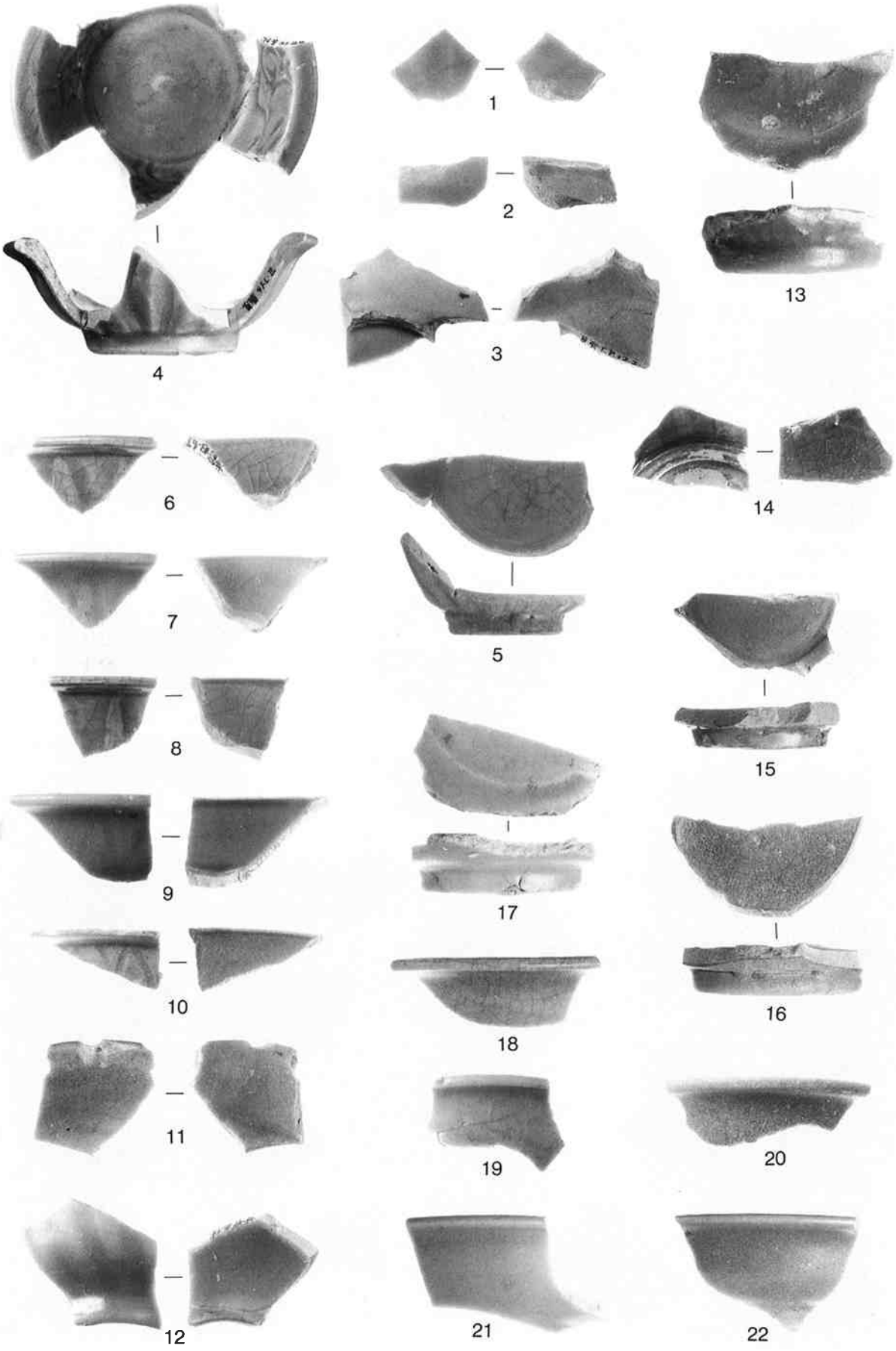
図版 4　青磁 2 （碗）



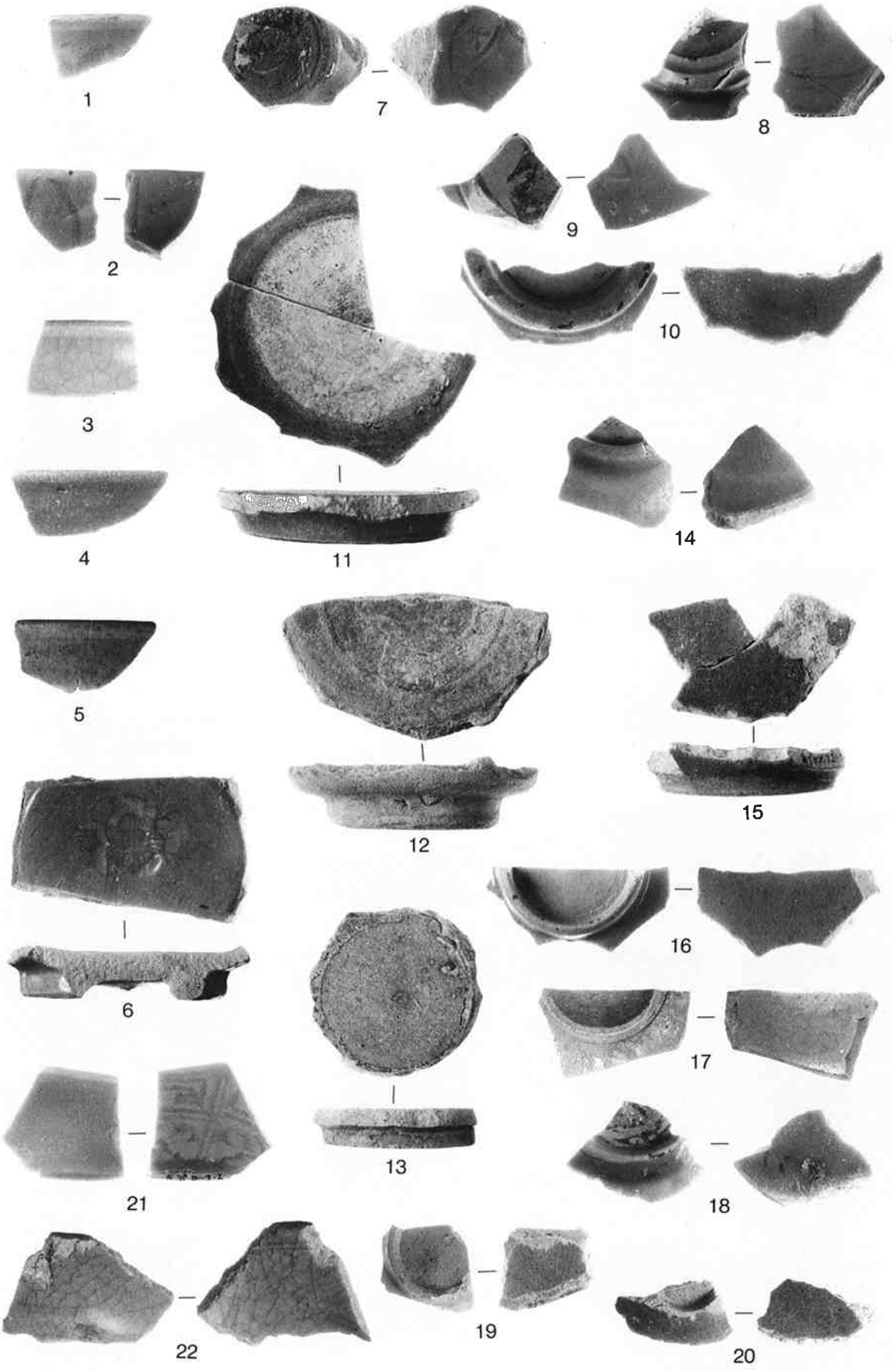
図版 5　青磁 3 （碗）



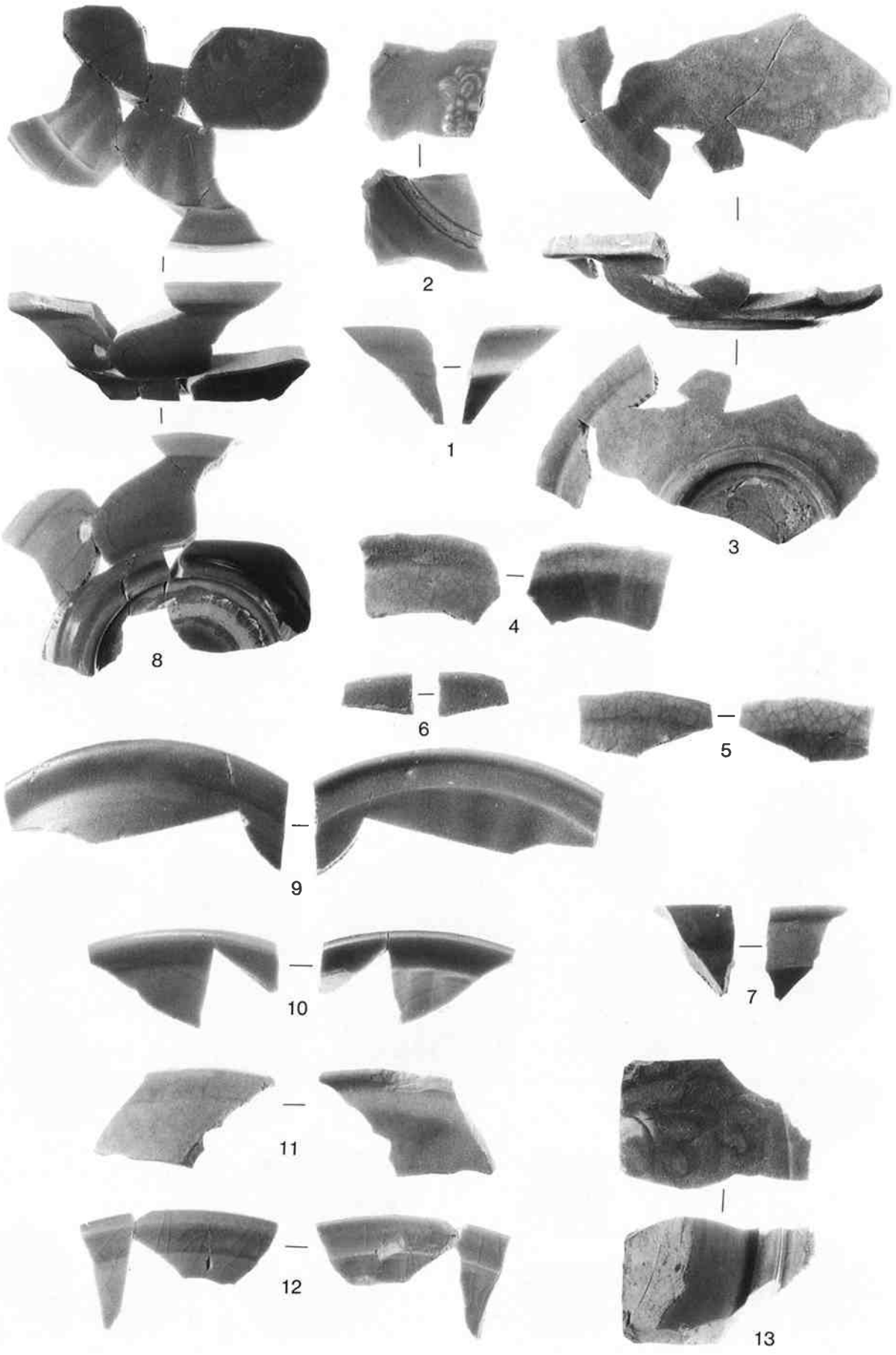
図版 6　青磁 4 （碗）



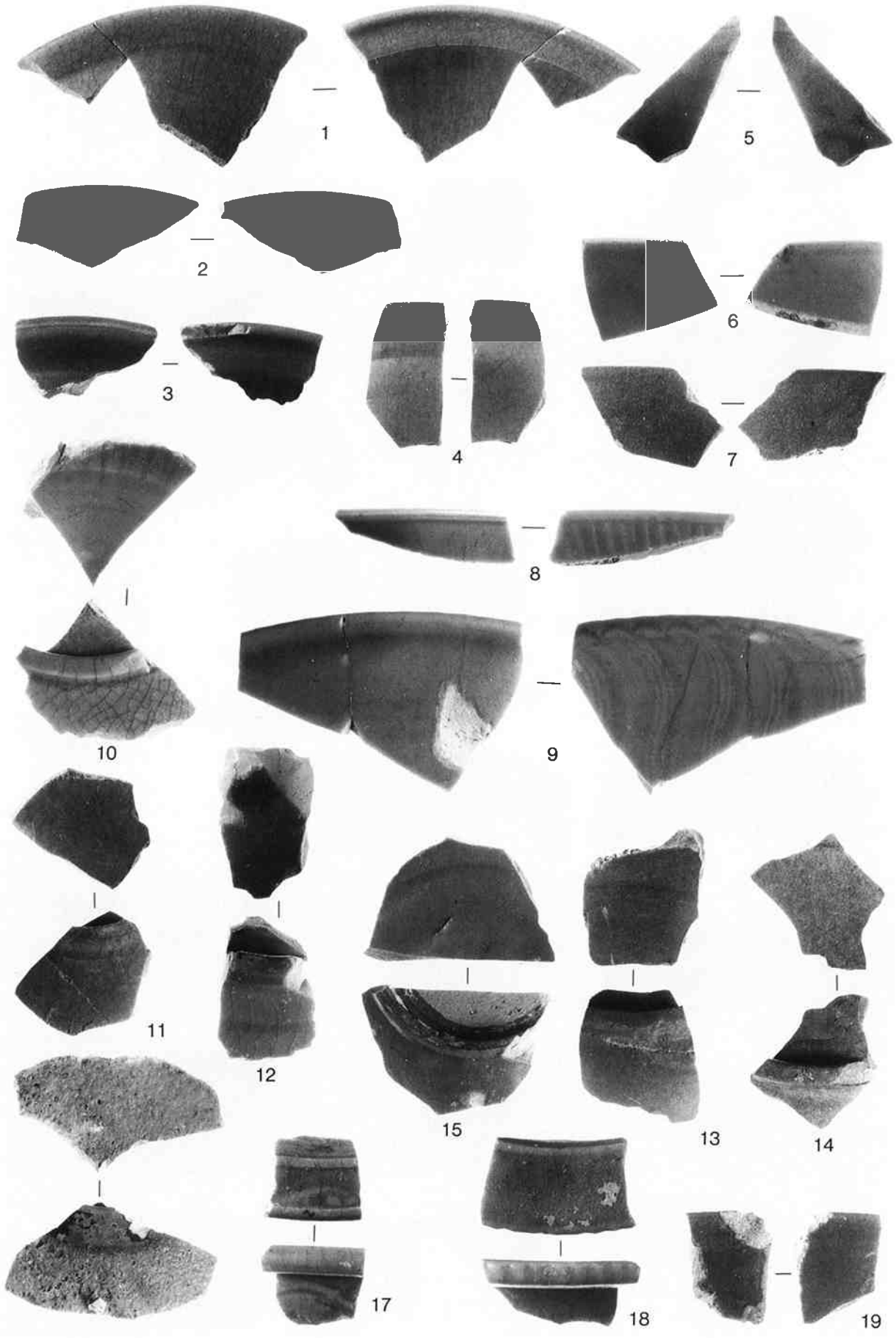
図版 7　青磁 5 （皿）



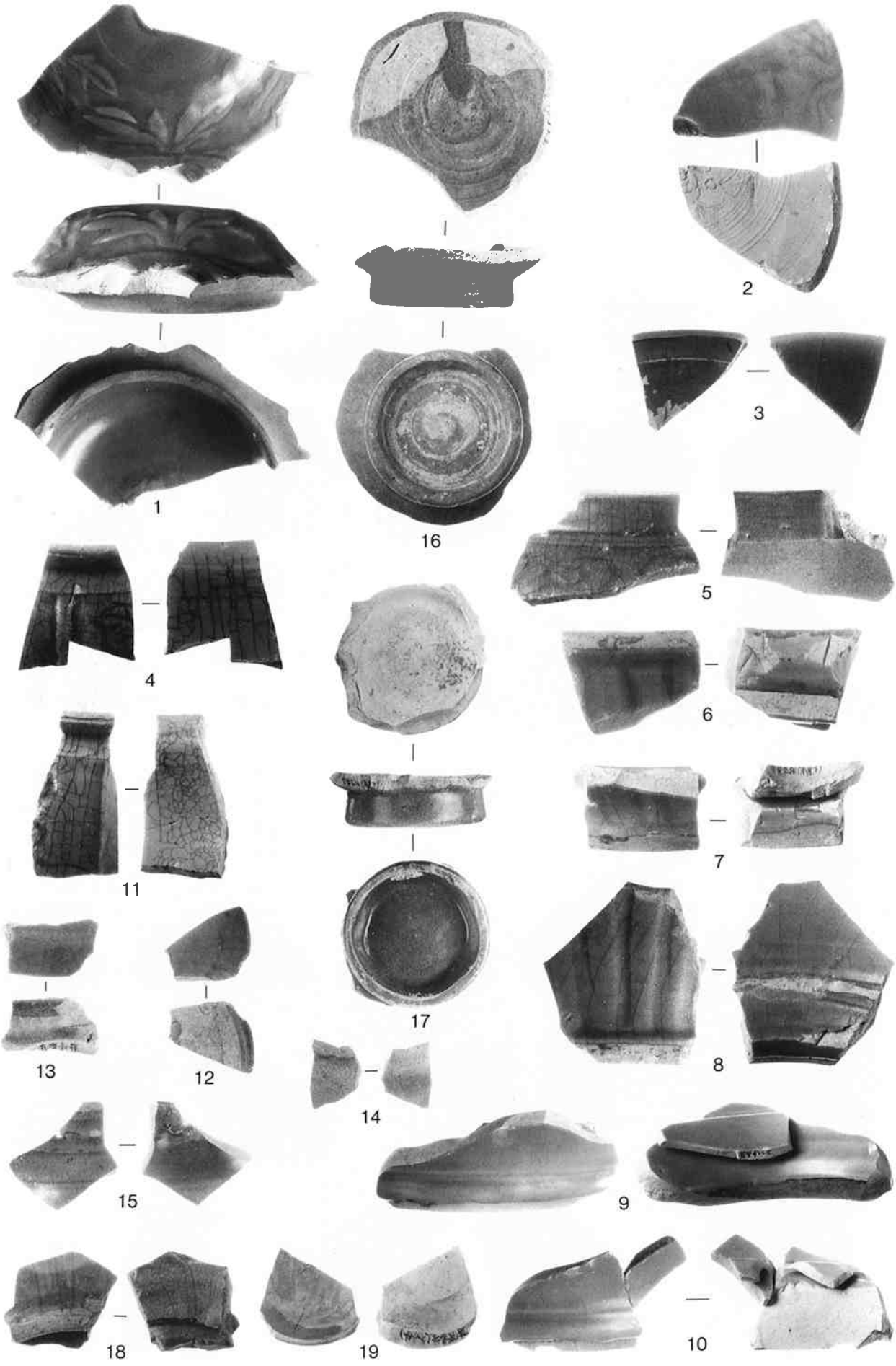
図版 8　青磁 6 （Ⅲ）



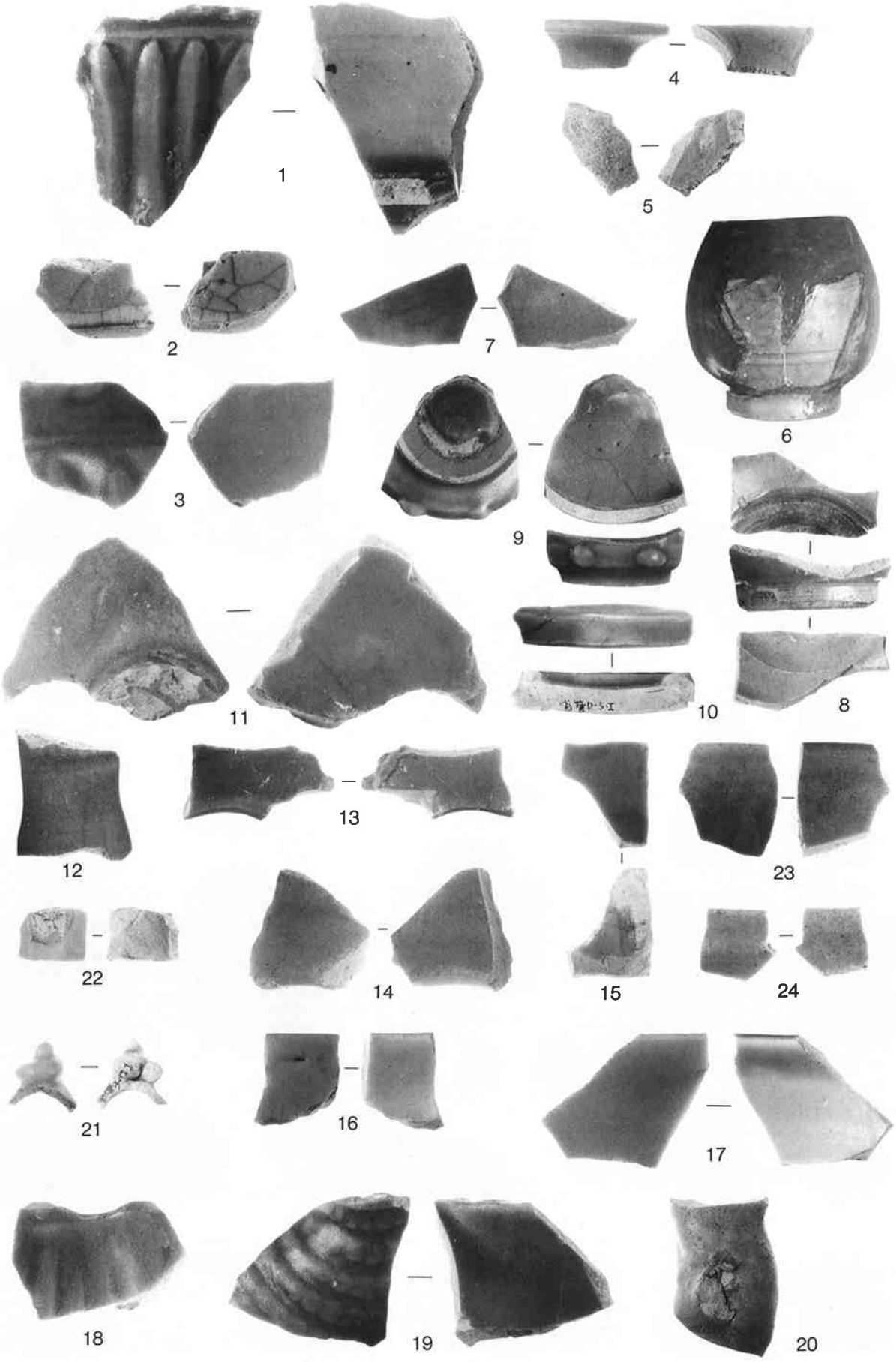
図版 9　青磁 7 （盤）



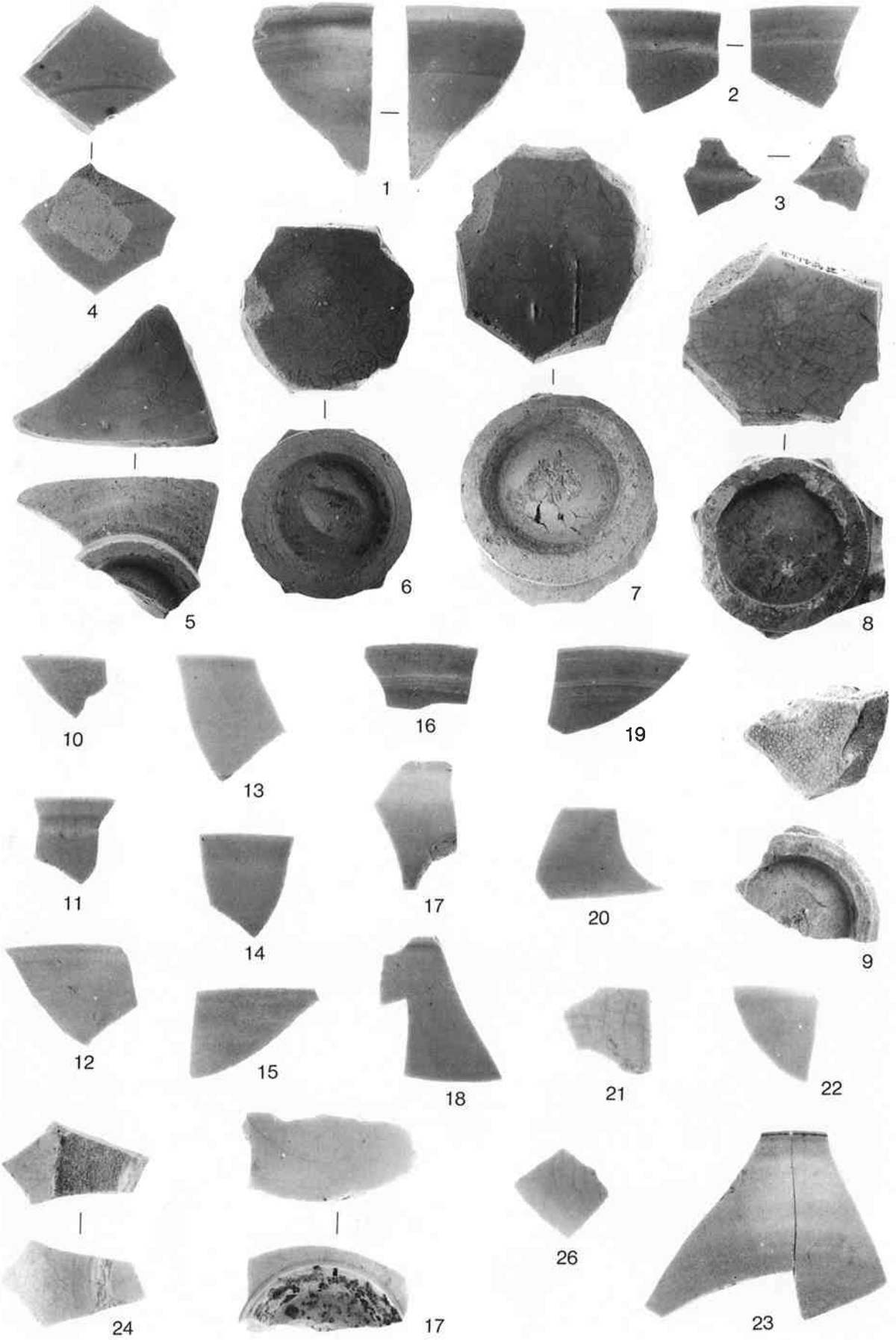
図版10　青磁 8 （盤・鉢）



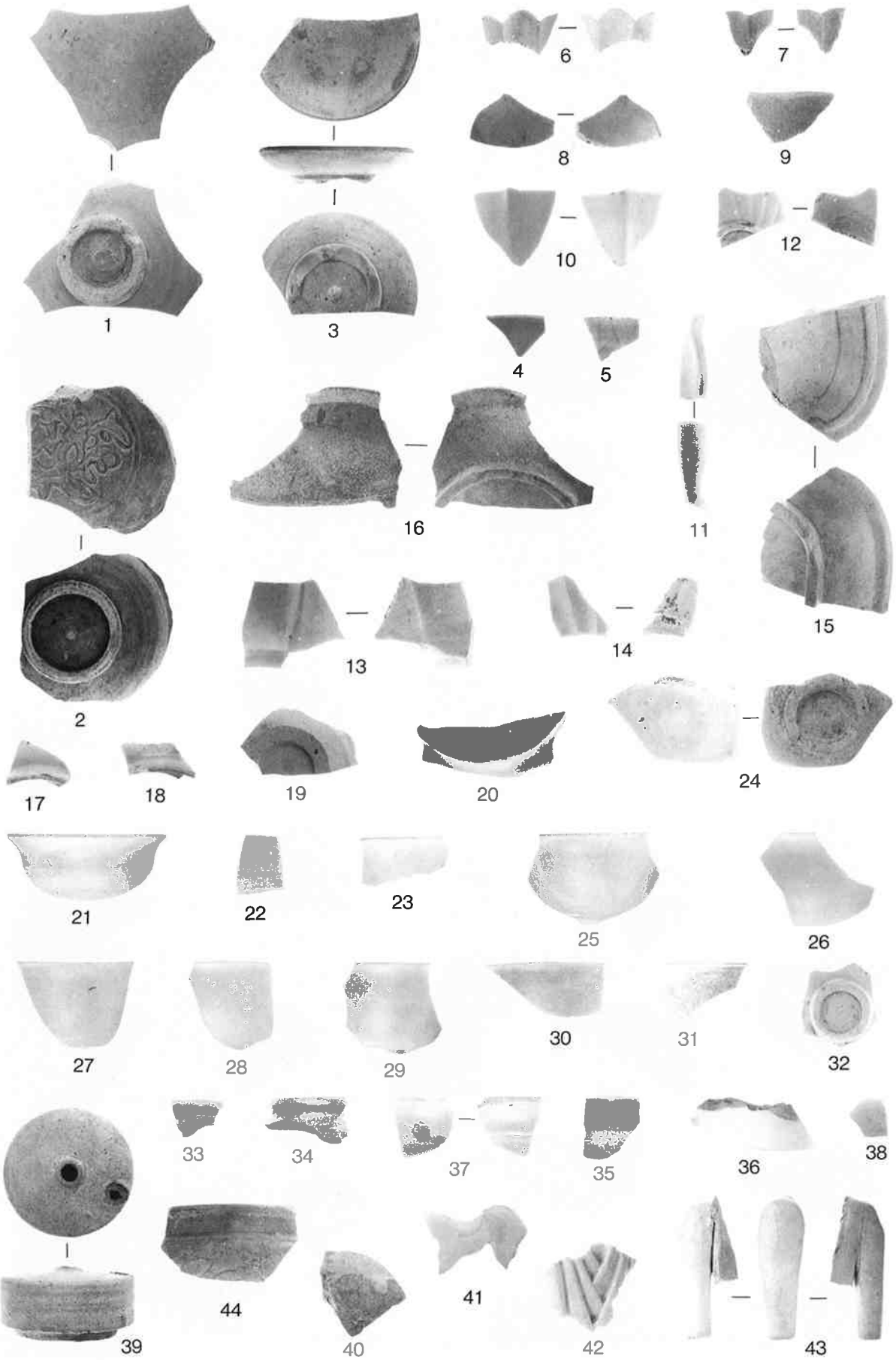
図版11　青磁 9 （酒会壺・蓋・小壺）



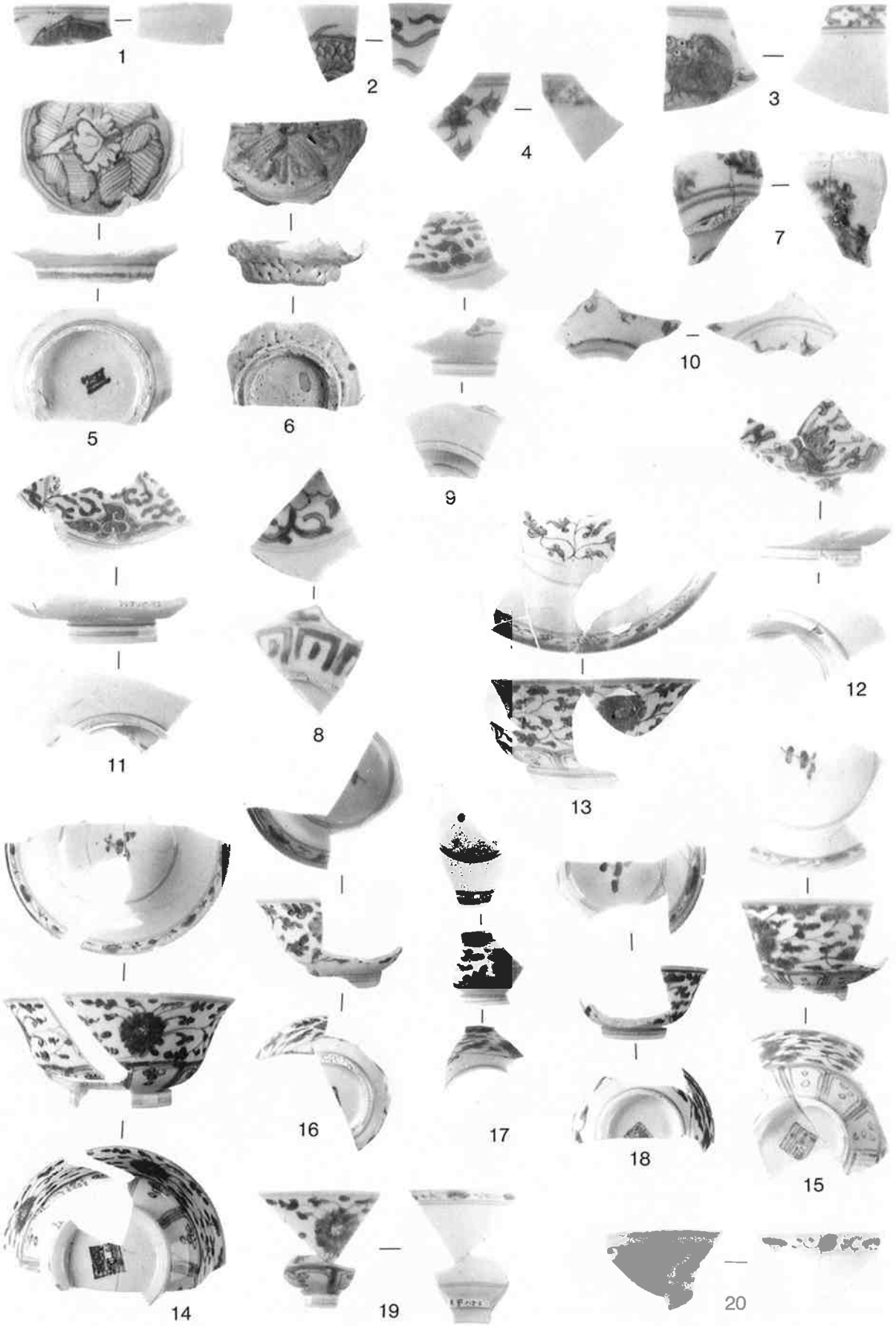
図版12　青磁10（瓶・その他）



図版13　白磁１（碗）



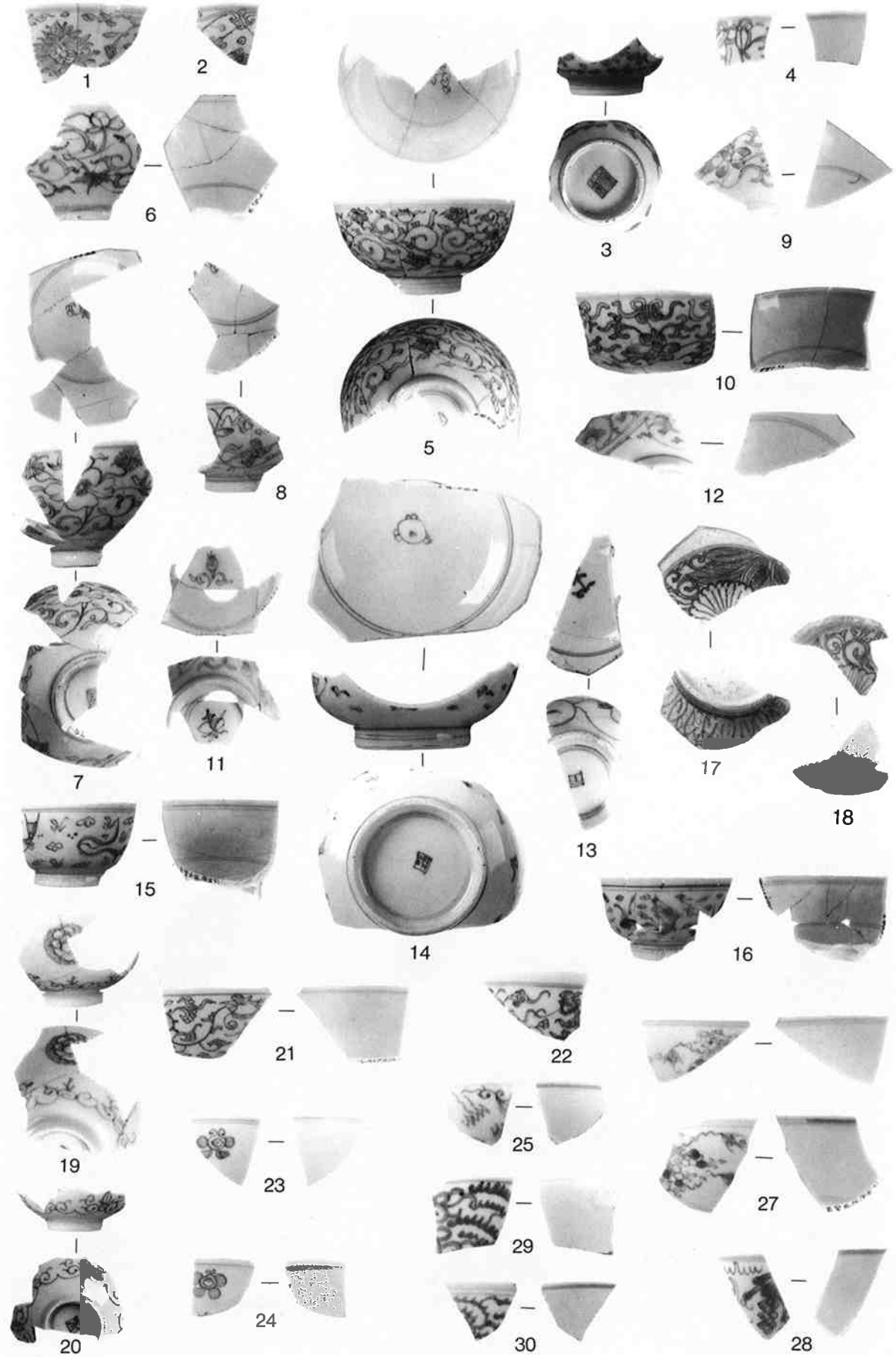
図版14　白磁 2（皿・杯・壷・香炉・水滴・形象物・蓋物）



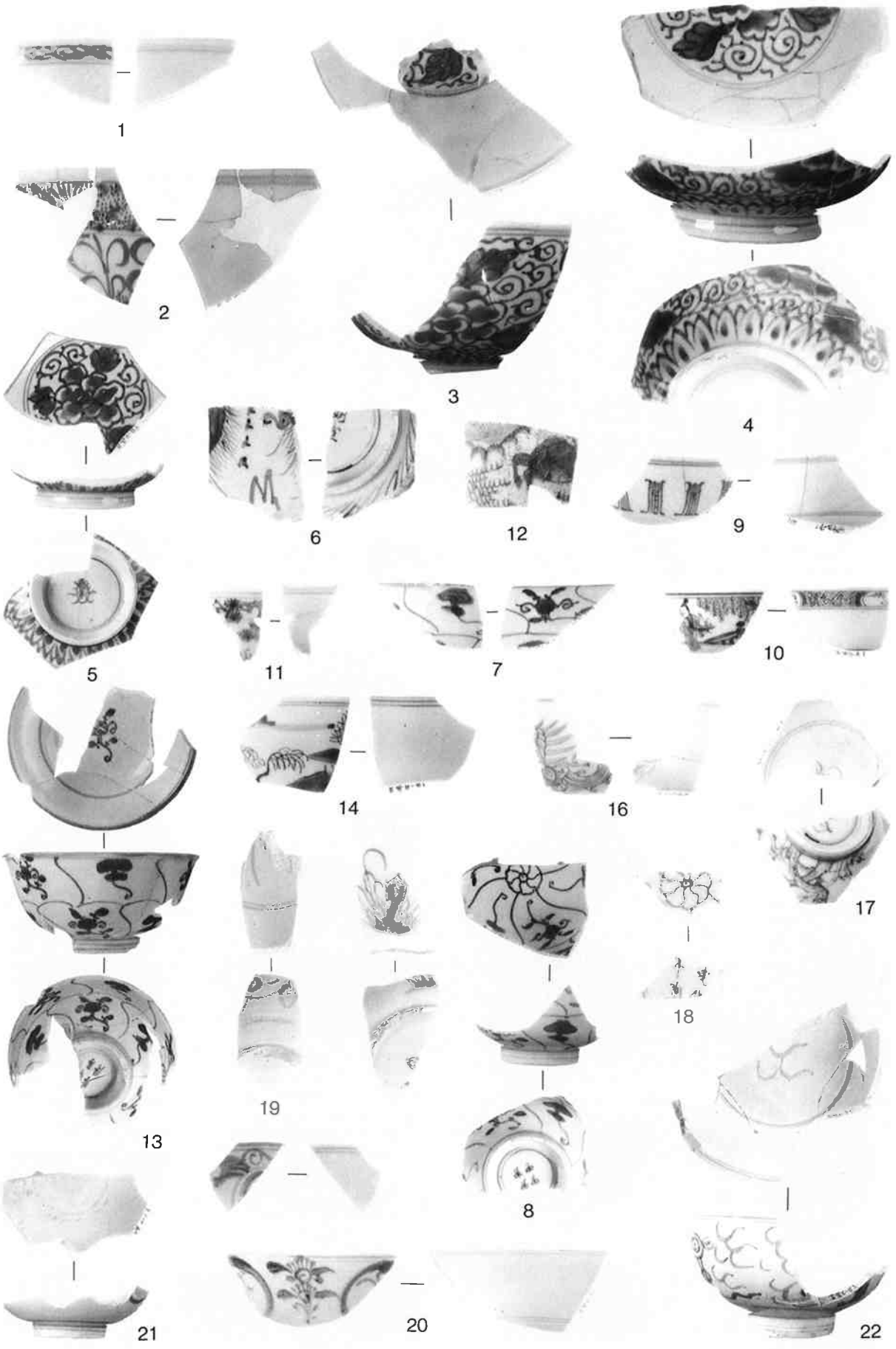
図版15　染付1（碗）

図版16　染付２（碗）

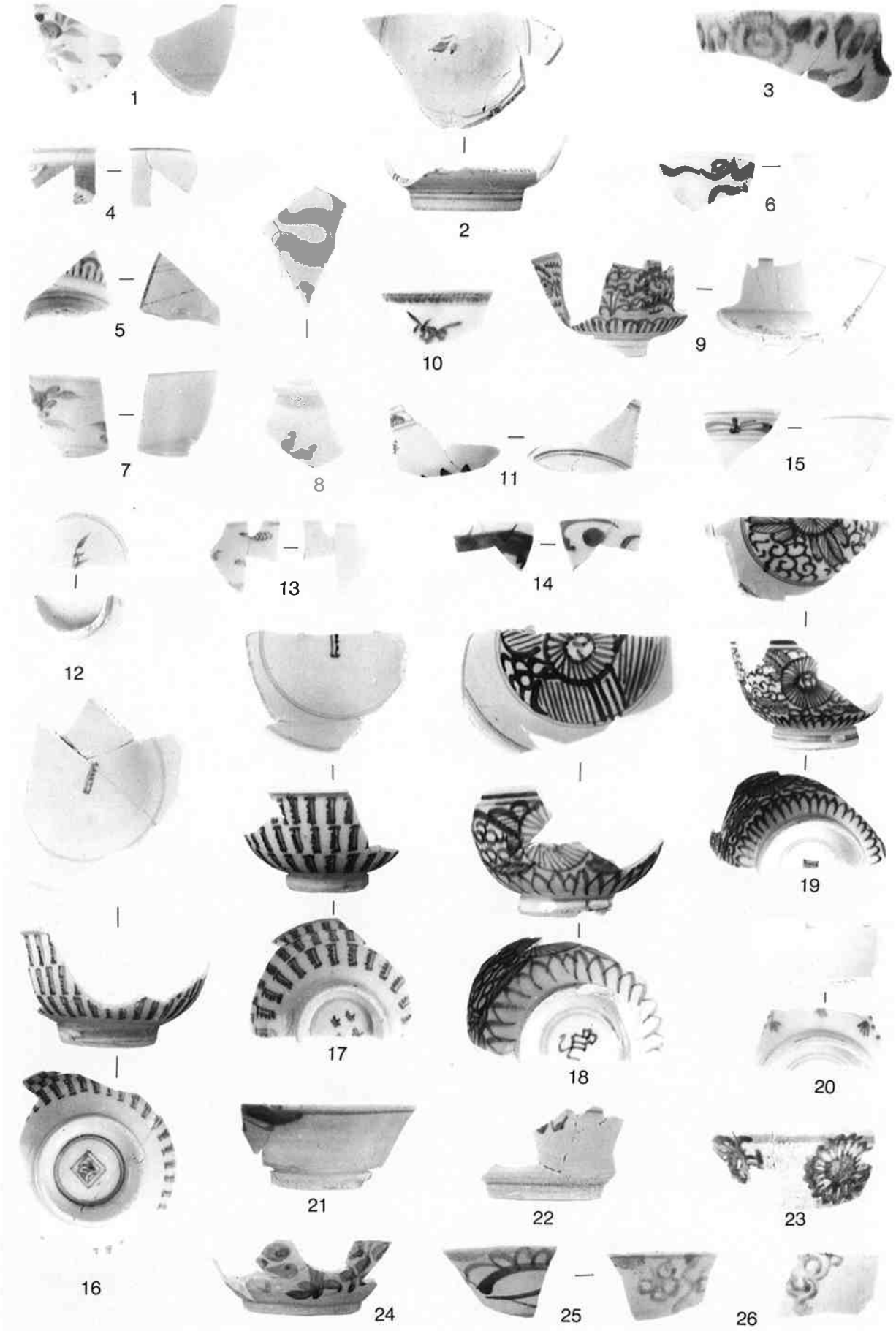
図版17　染付３（碗）



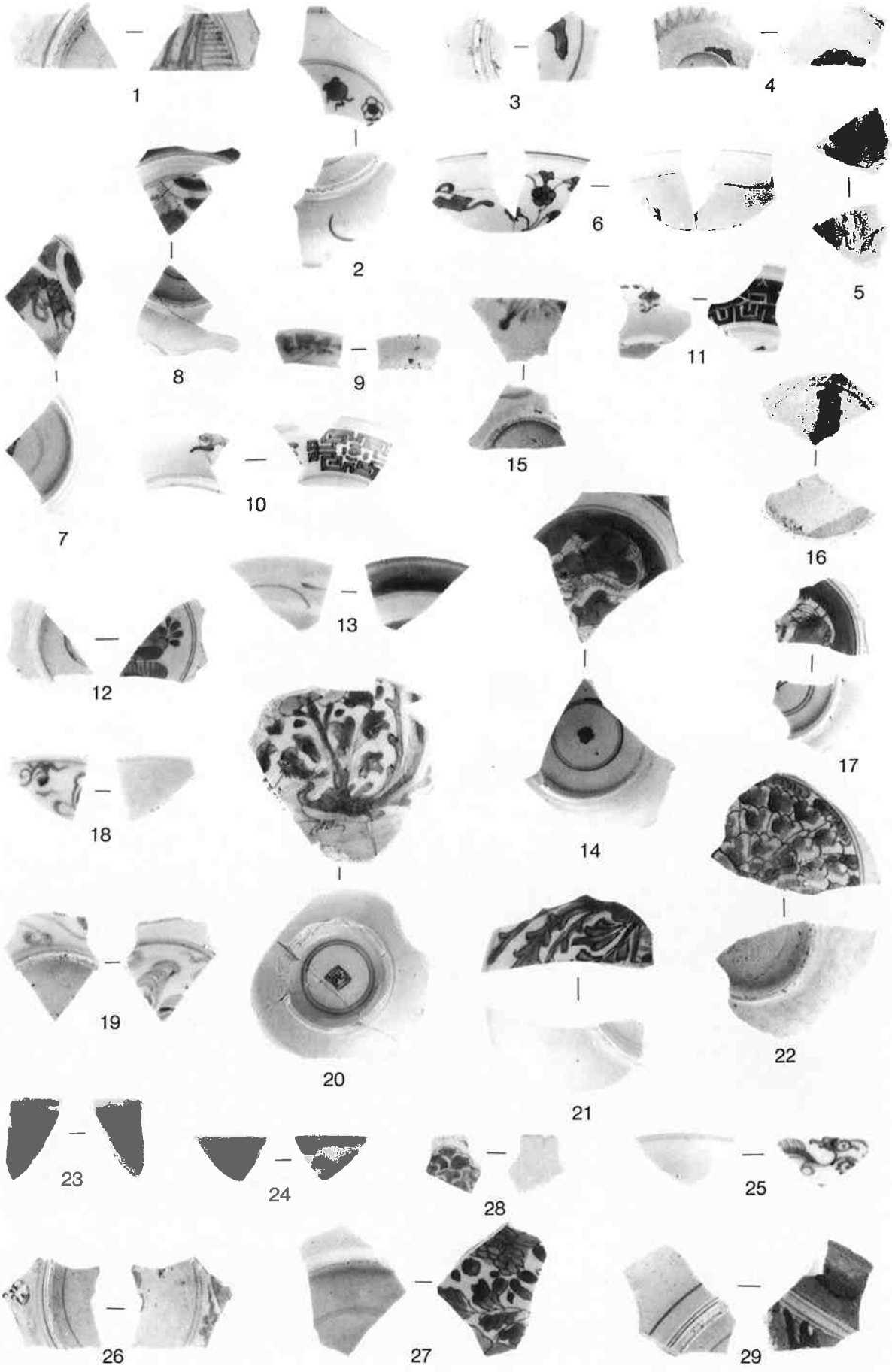
図版18　染付４（碗）



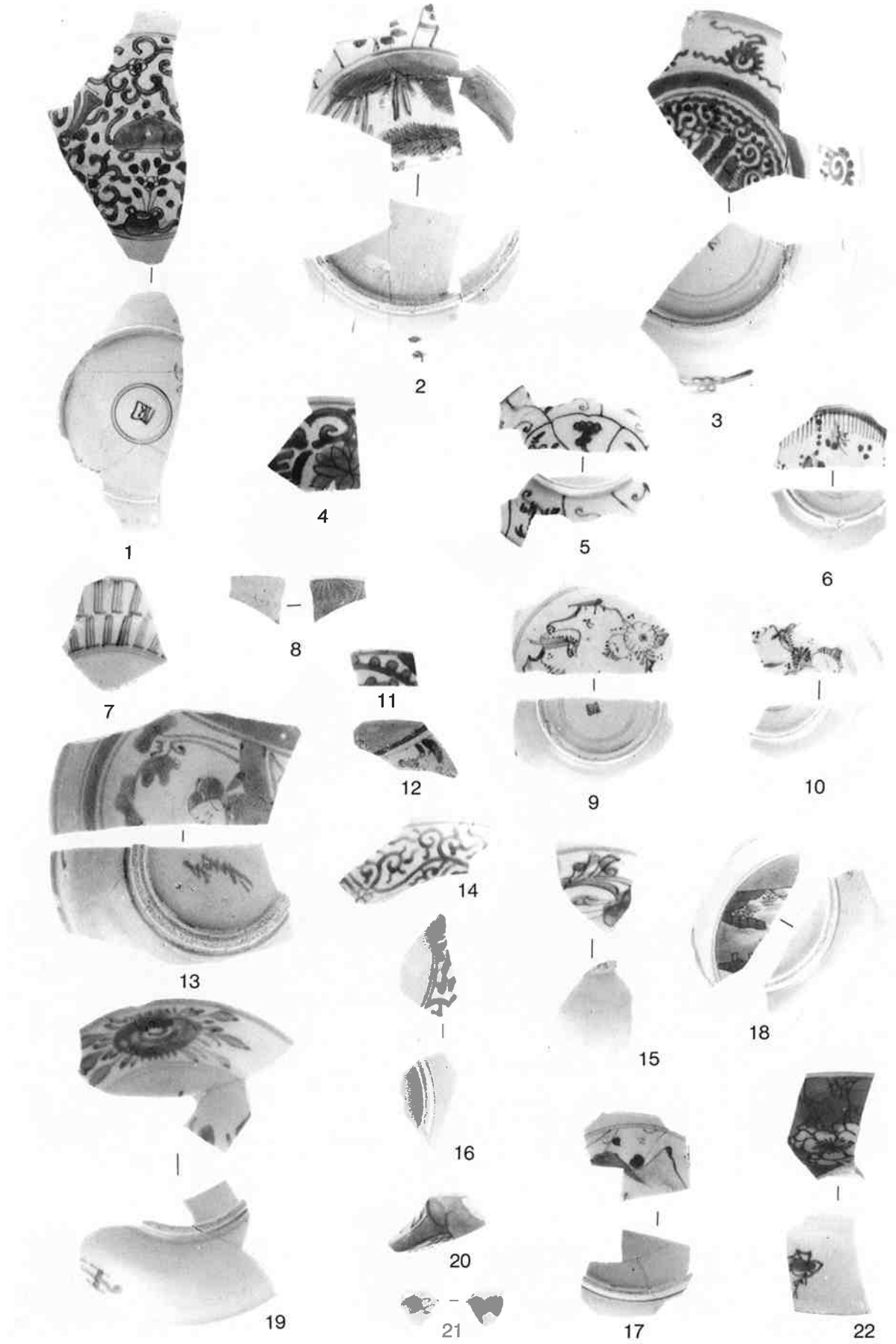
図版19　染付5（碗）



図版20　染付 6 （碗）



図版21　染付７（Ⅲ）

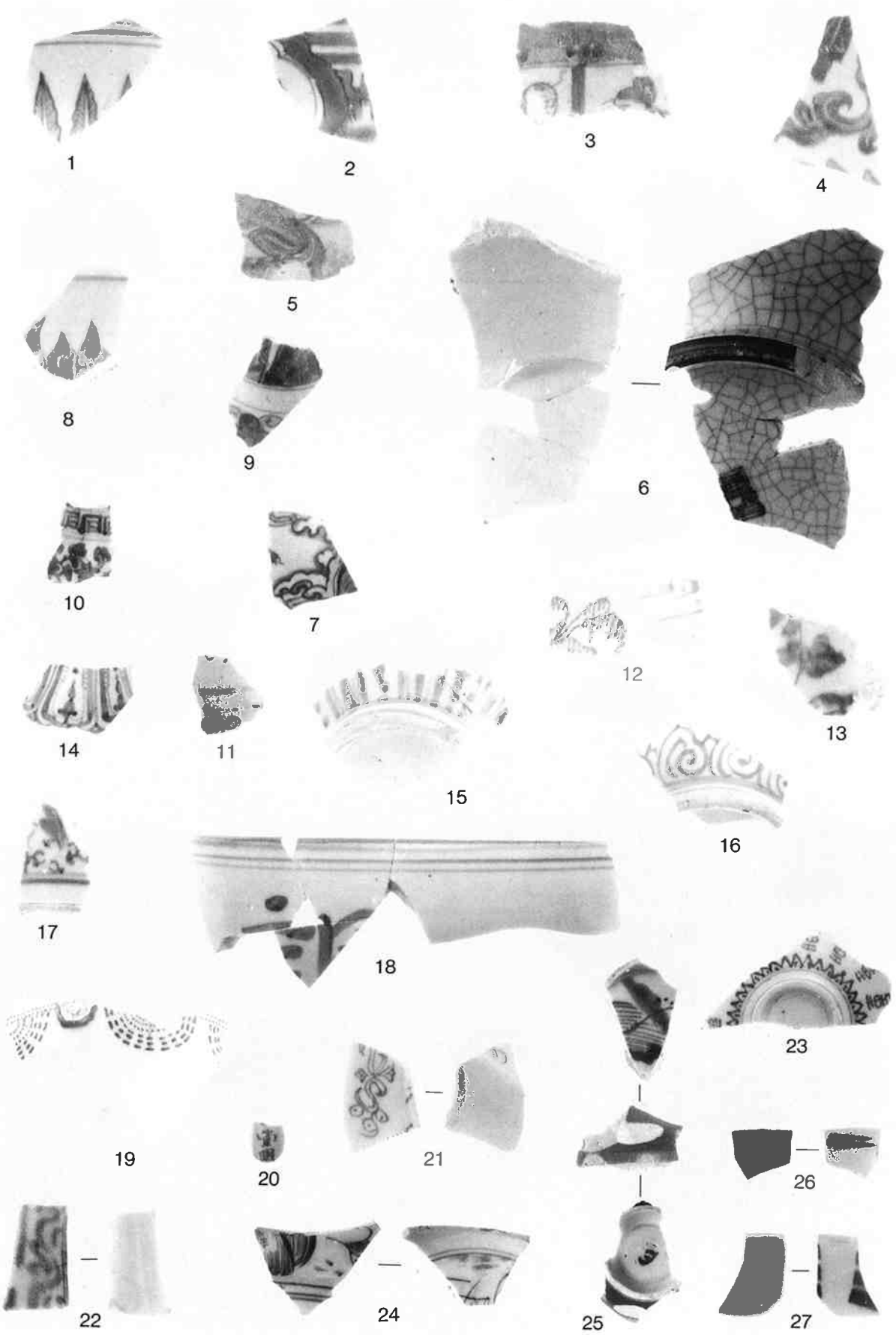


図版22　染付 8 （Ⅲ）

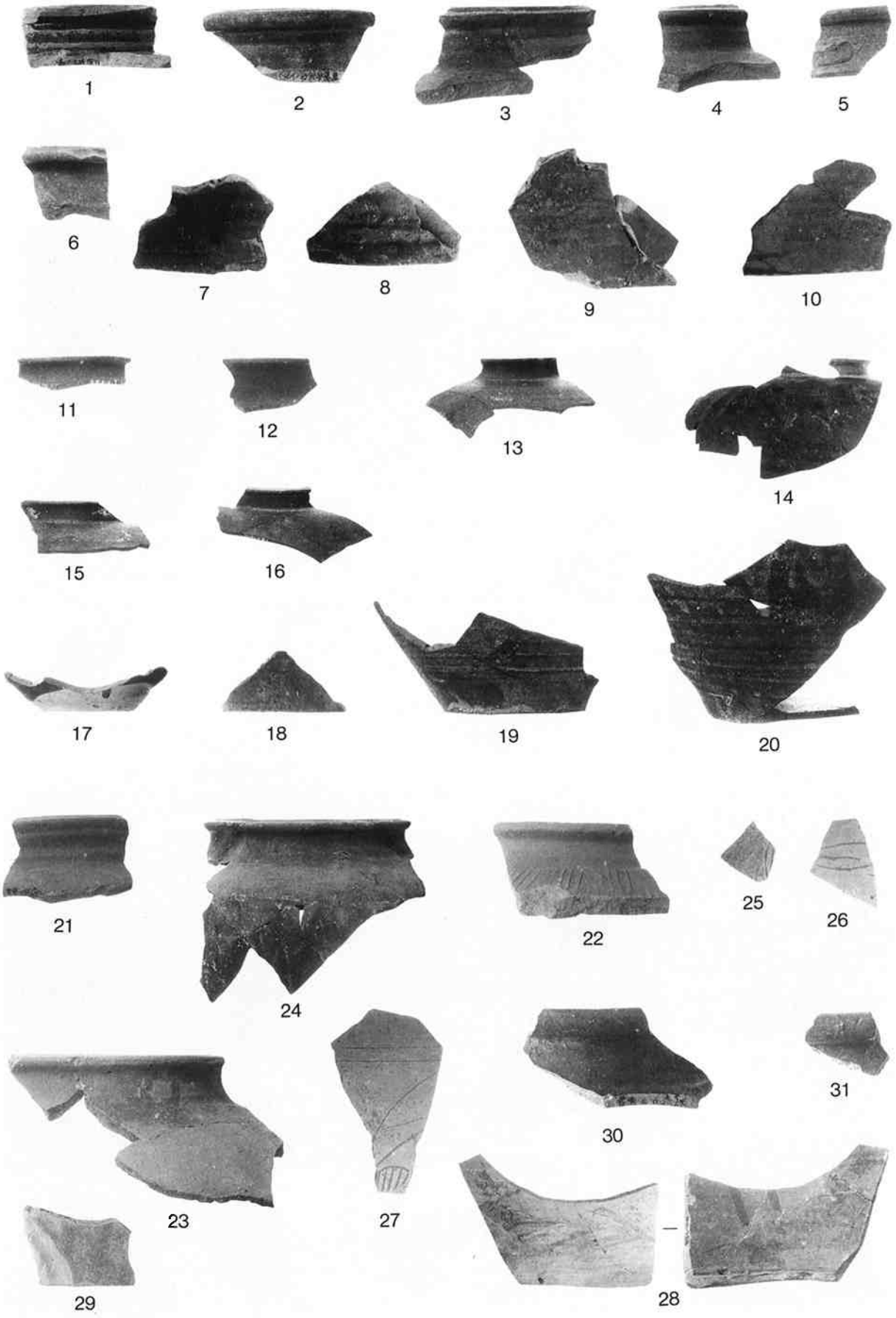
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

図版23　染付 9 （皿・杯・鉢）

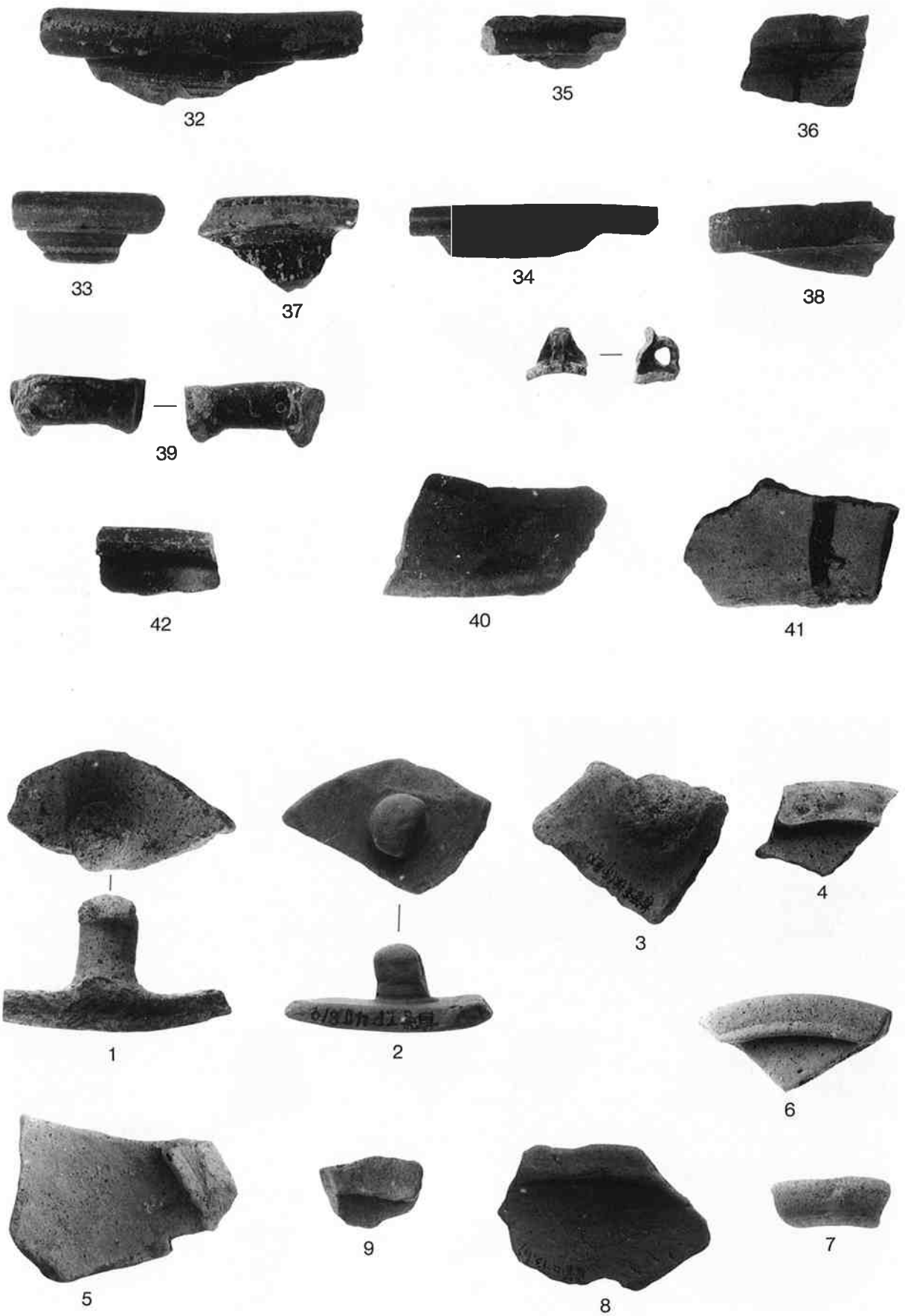
図版24　染付10（大鉢）



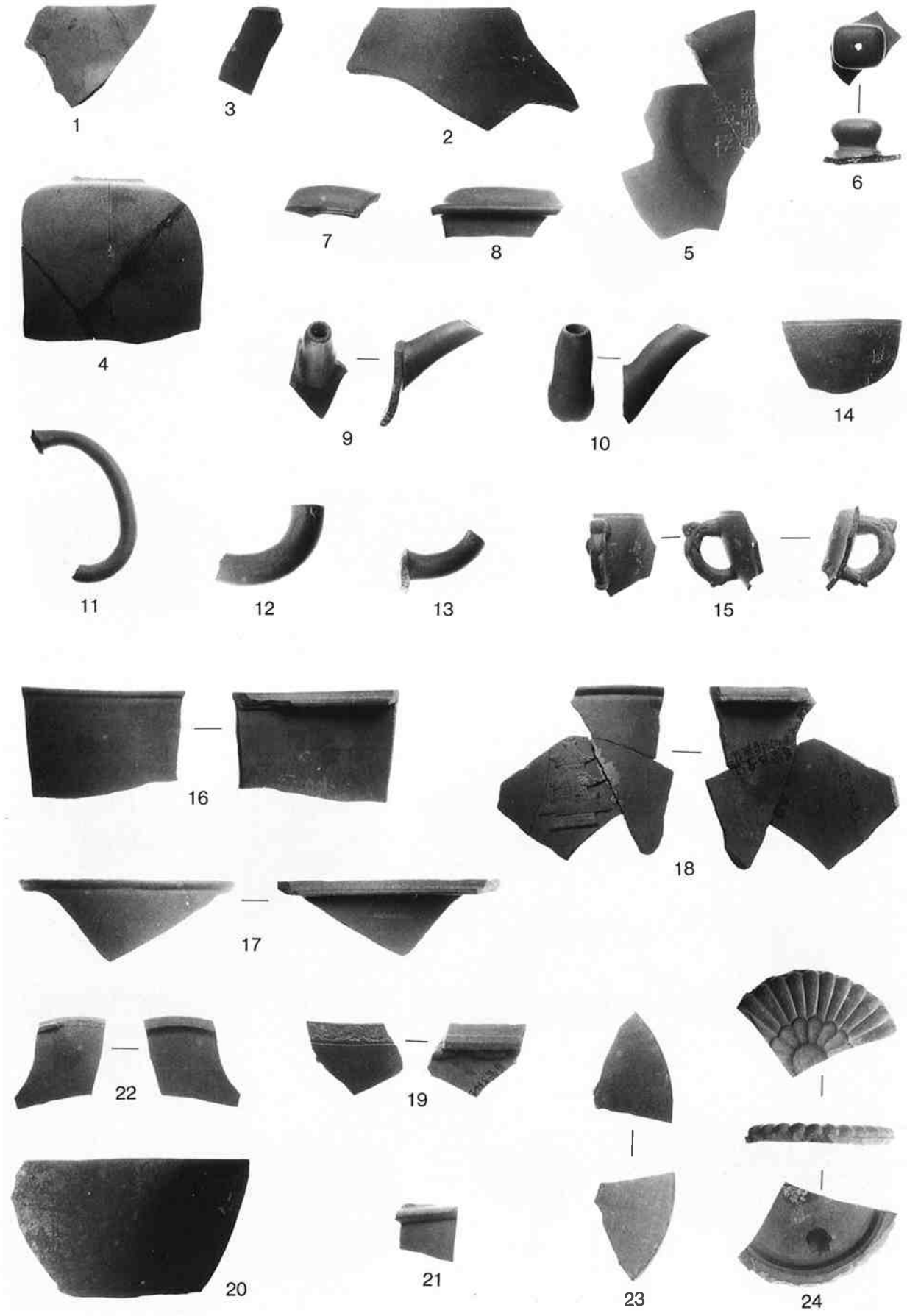
図版25　染付11（壺・その他）釉裏紅・鉄釉・青磁染付


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
25
26
24
31
30
23
27
29
28

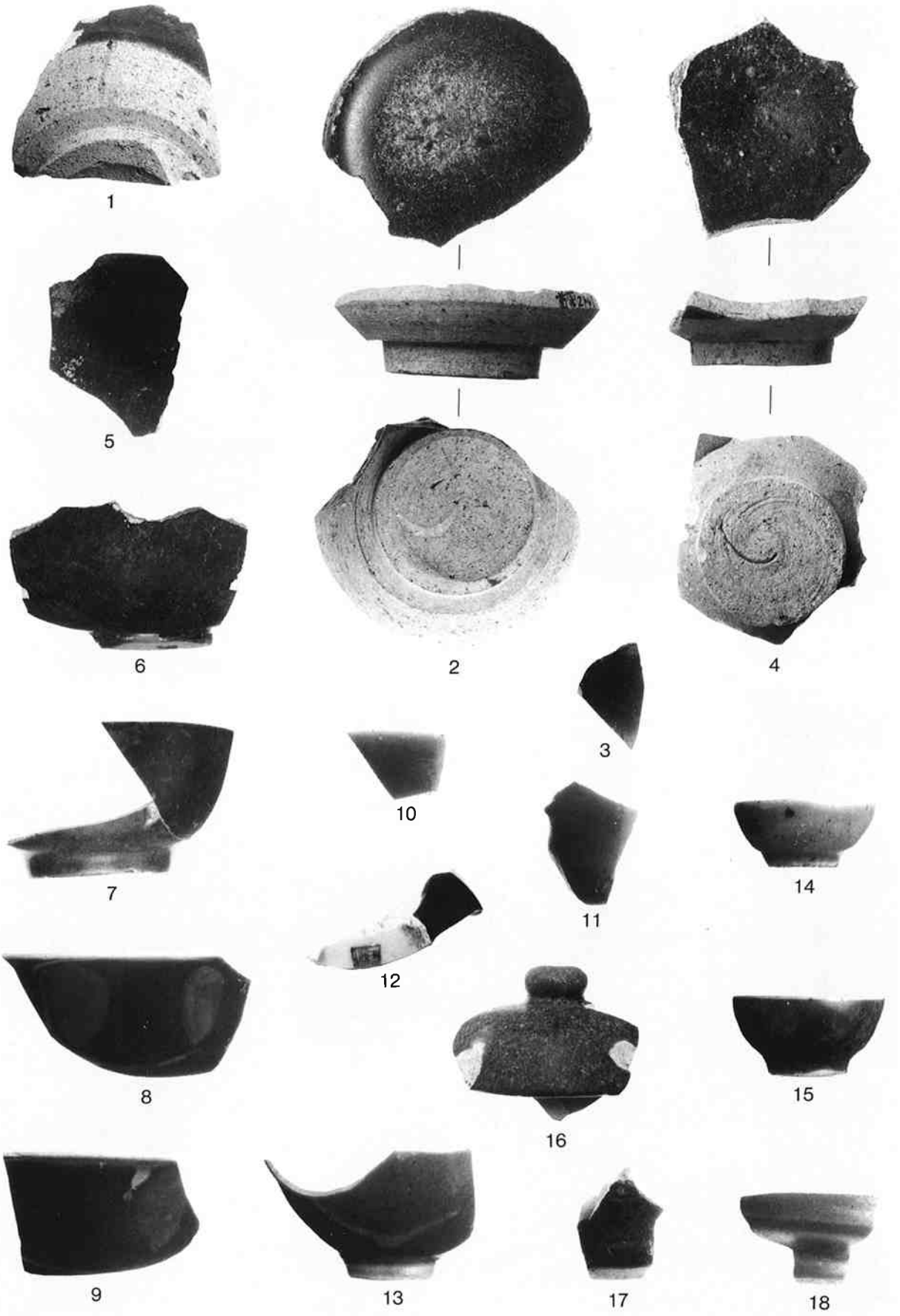
図版26　褐釉陶器 1



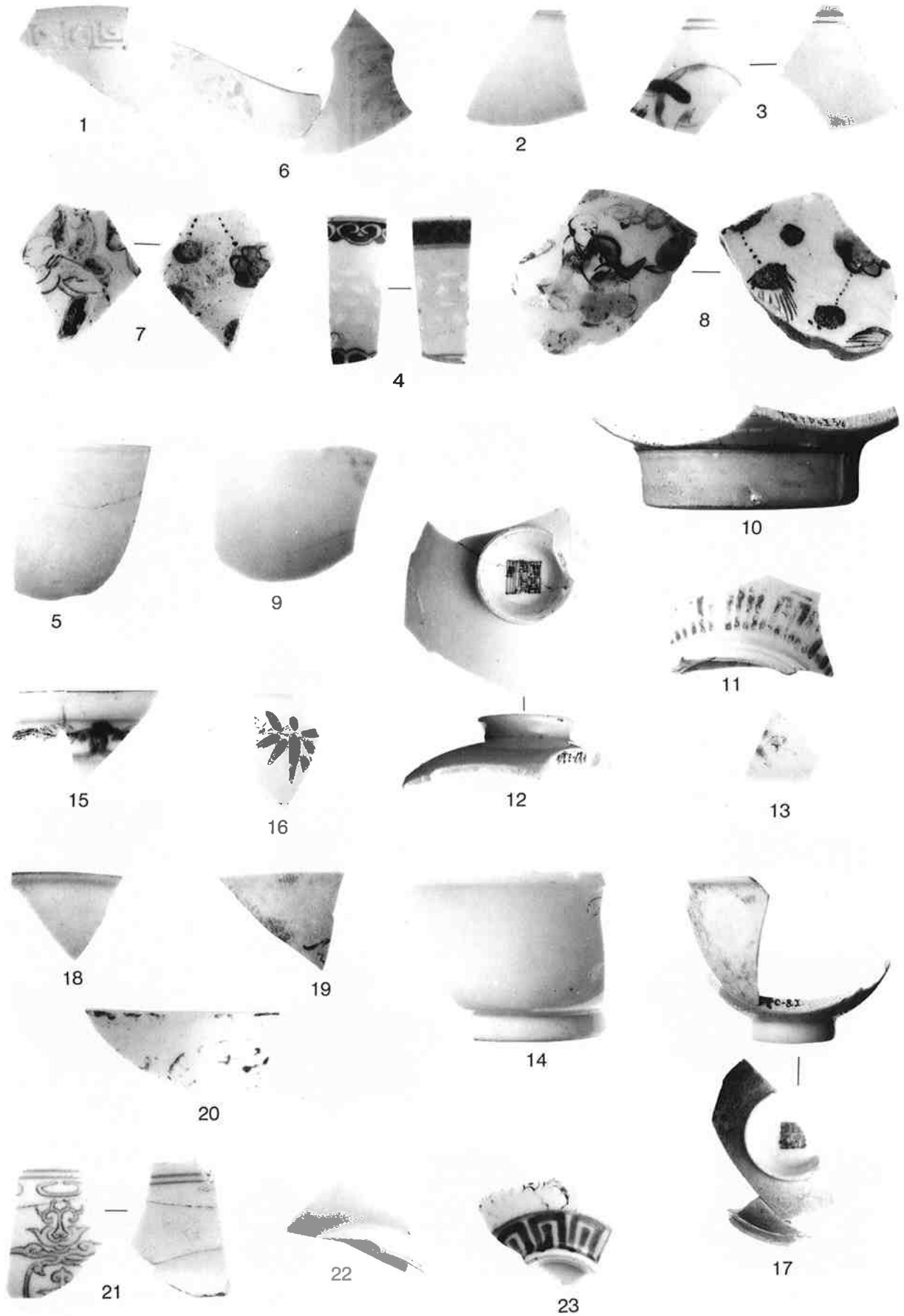
図版27　上：褐釉陶器２　下：タイ産半練



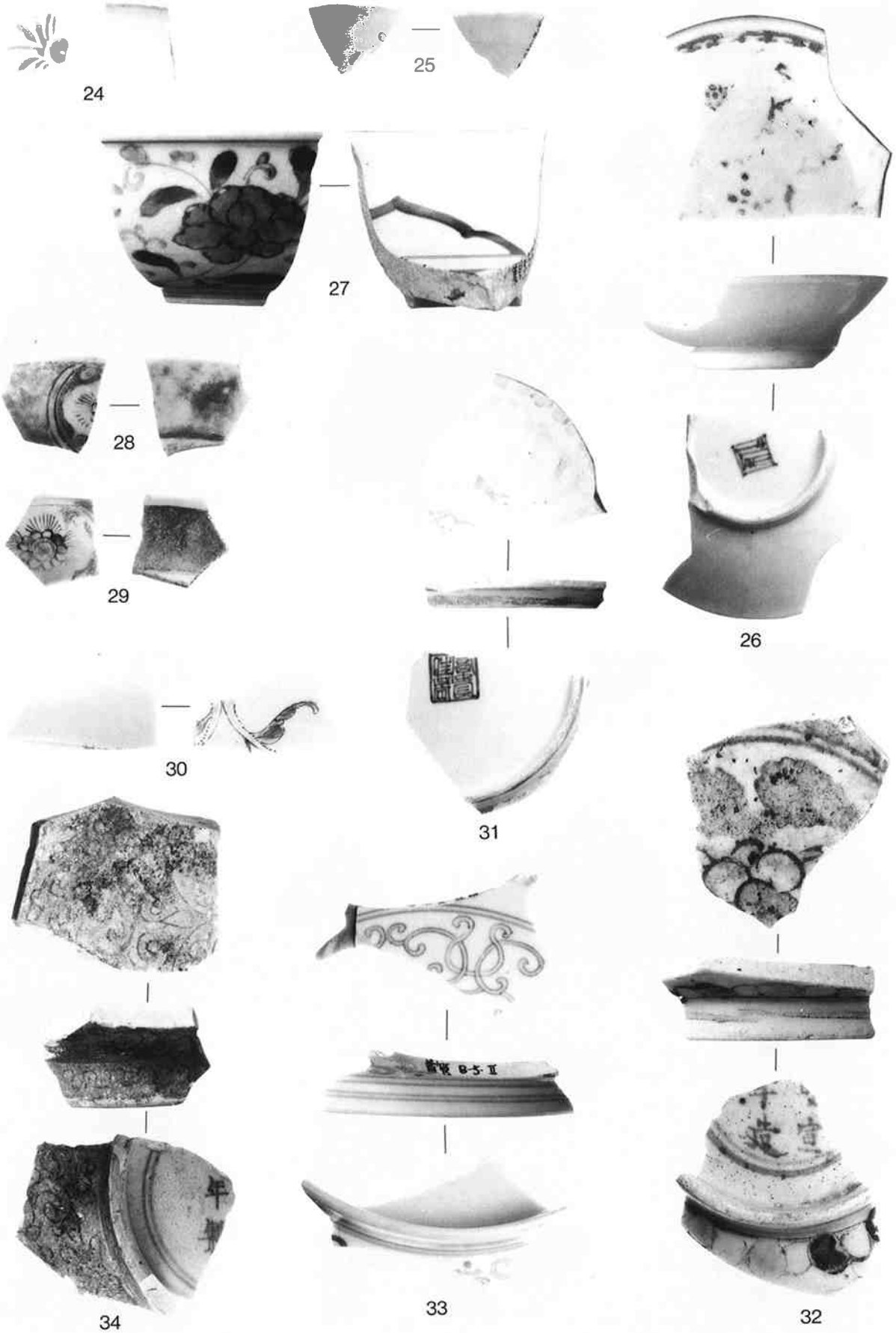
図版28　中国産無釉陶器



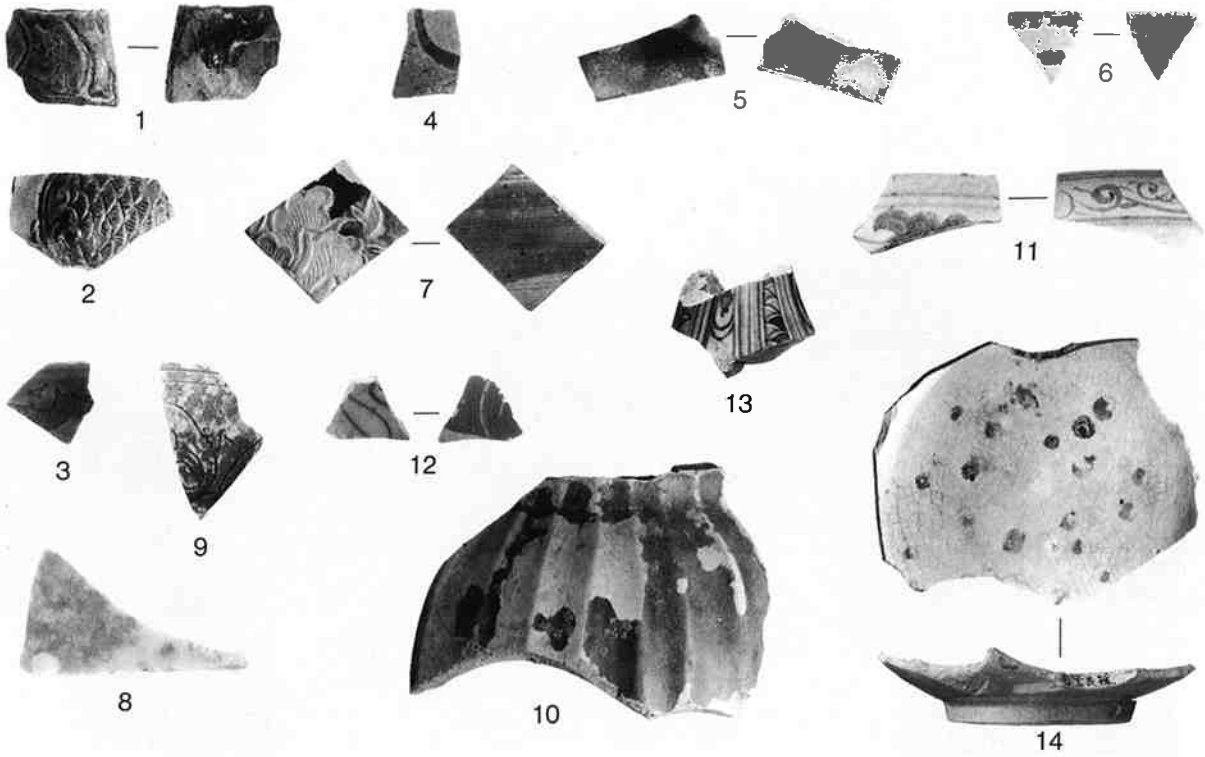
図版29　黒釉陶器・瑠璃釉

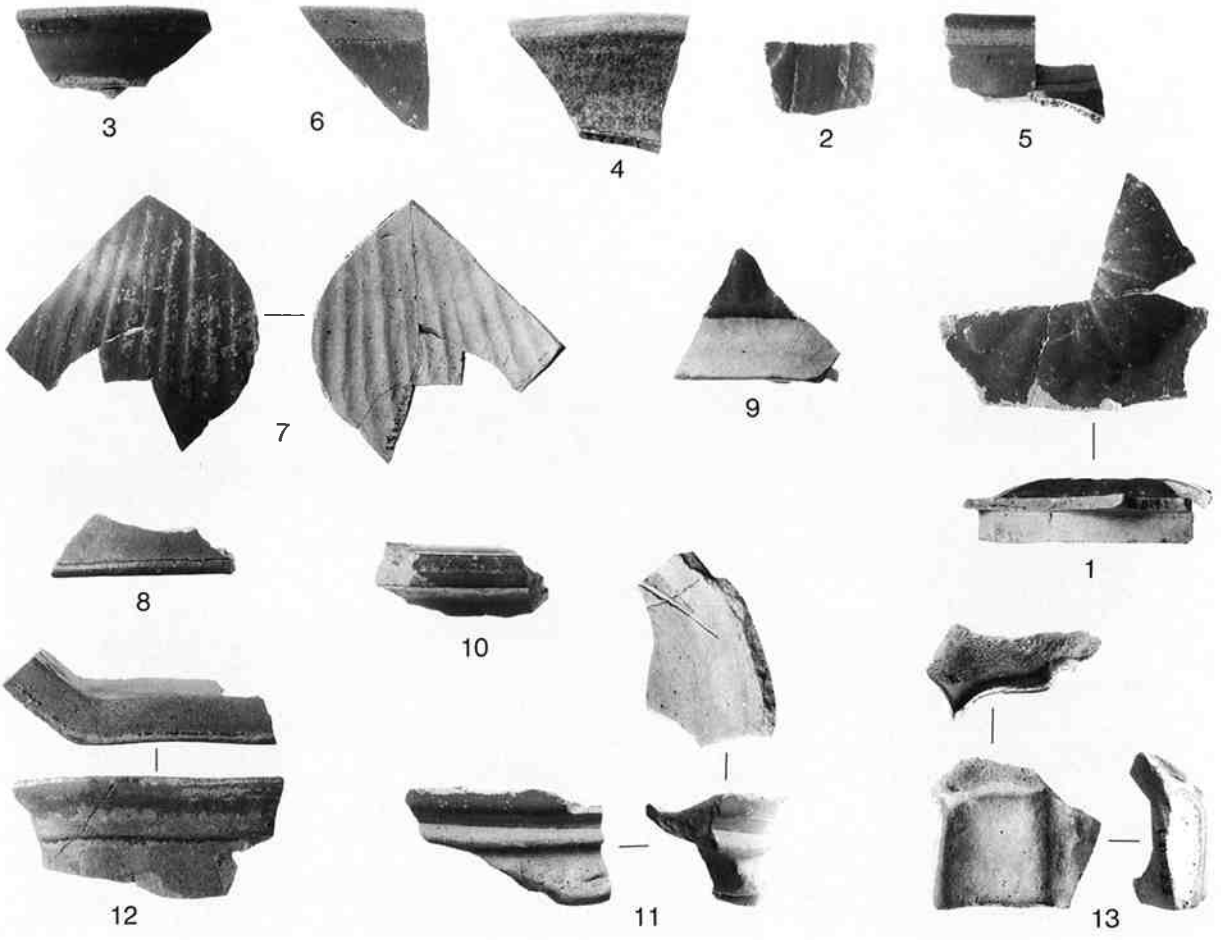


図版30　中国産色絵 1

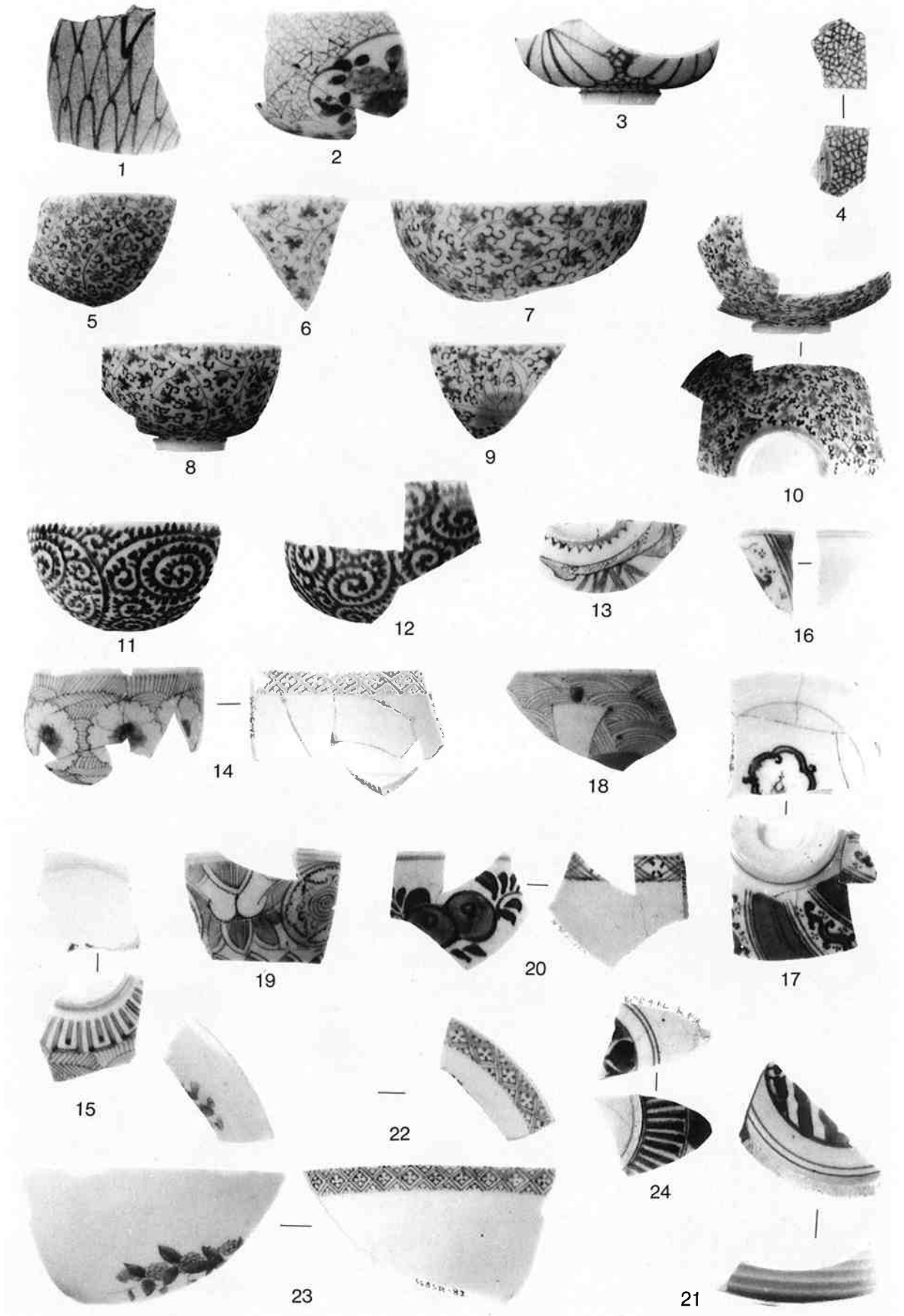


図版31　中国産色絵 2



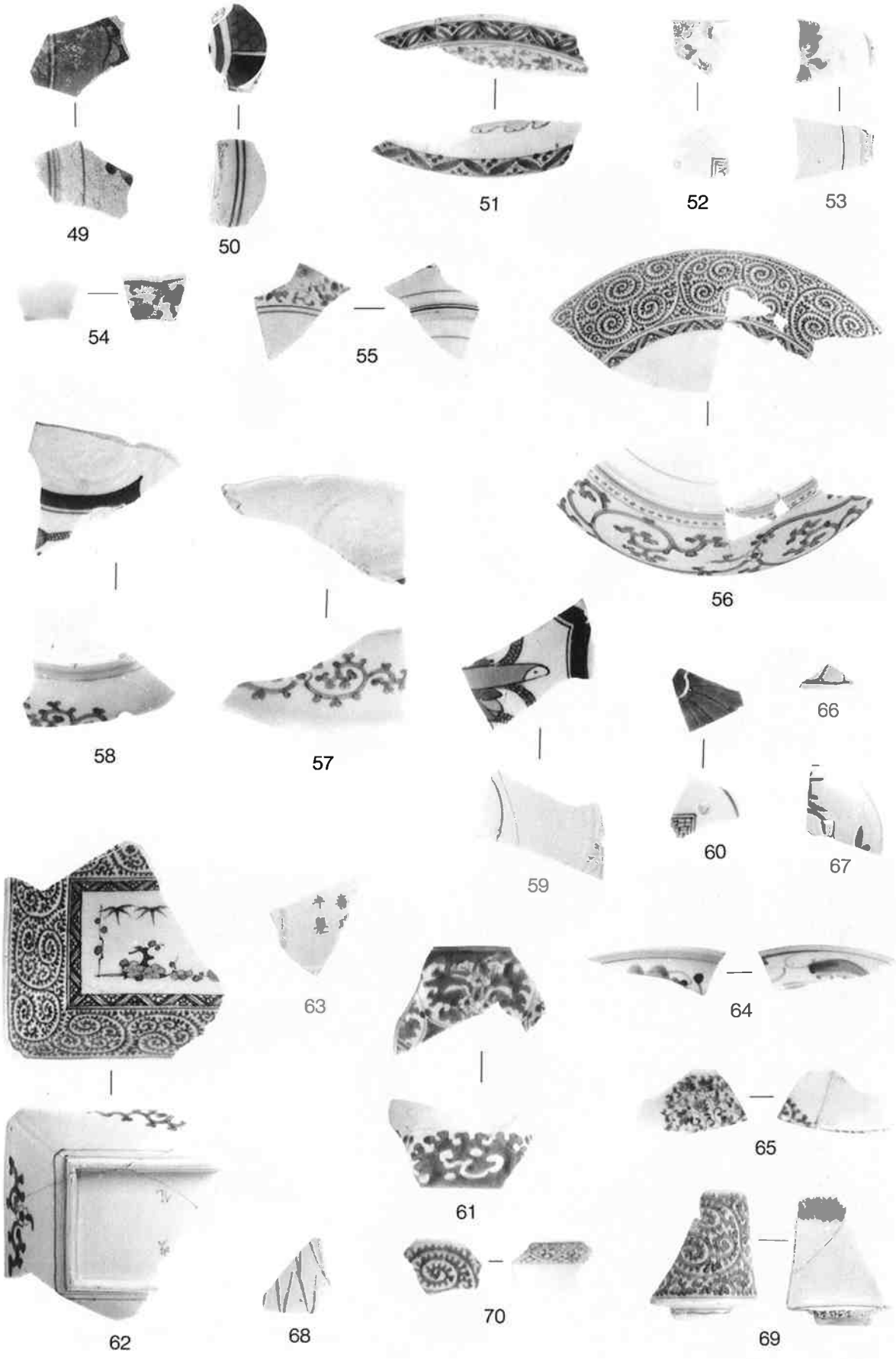


図版32　上：彩釉陶・ベトナム産磁器：銅緑釉

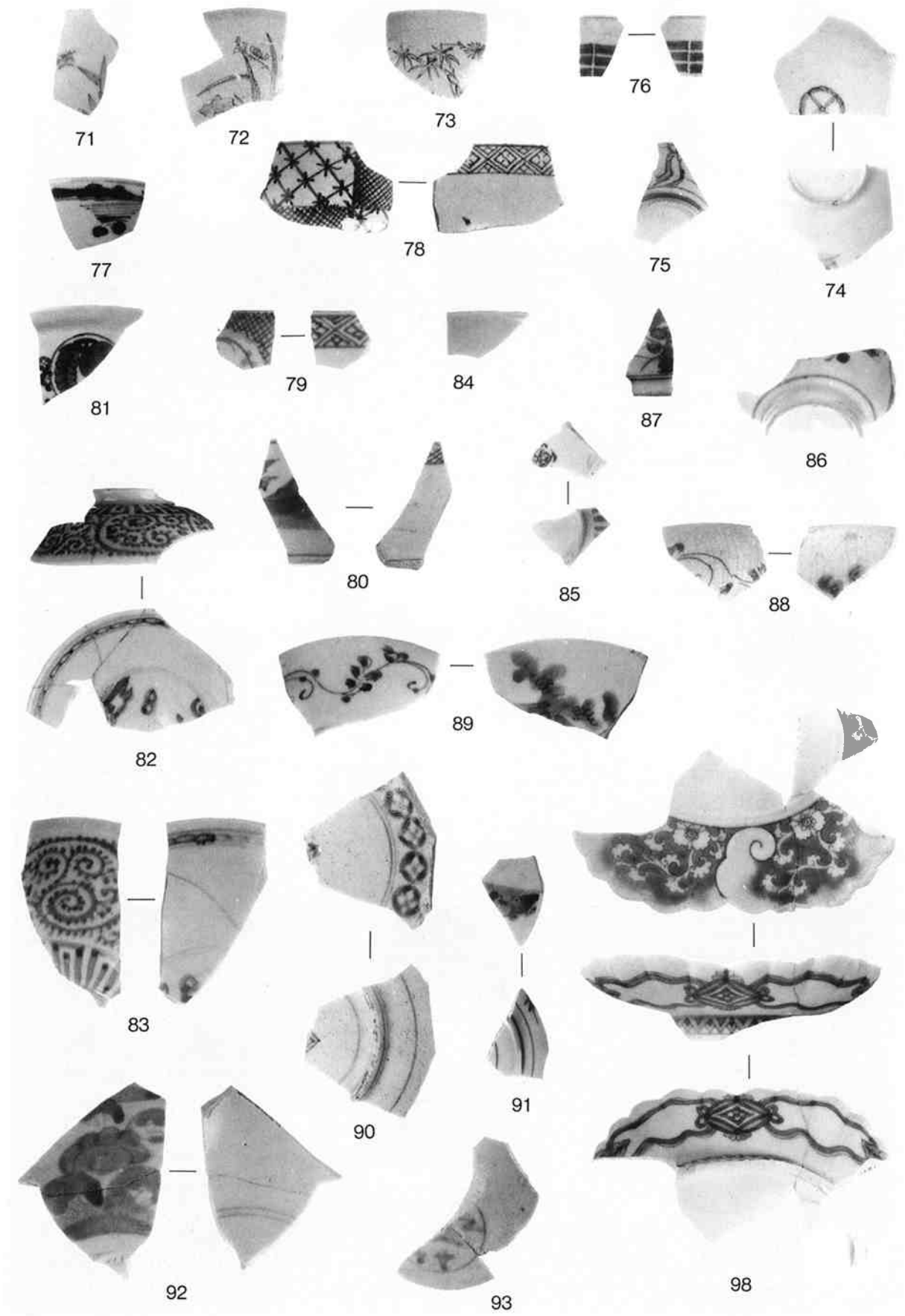


図版33　本土産染付1

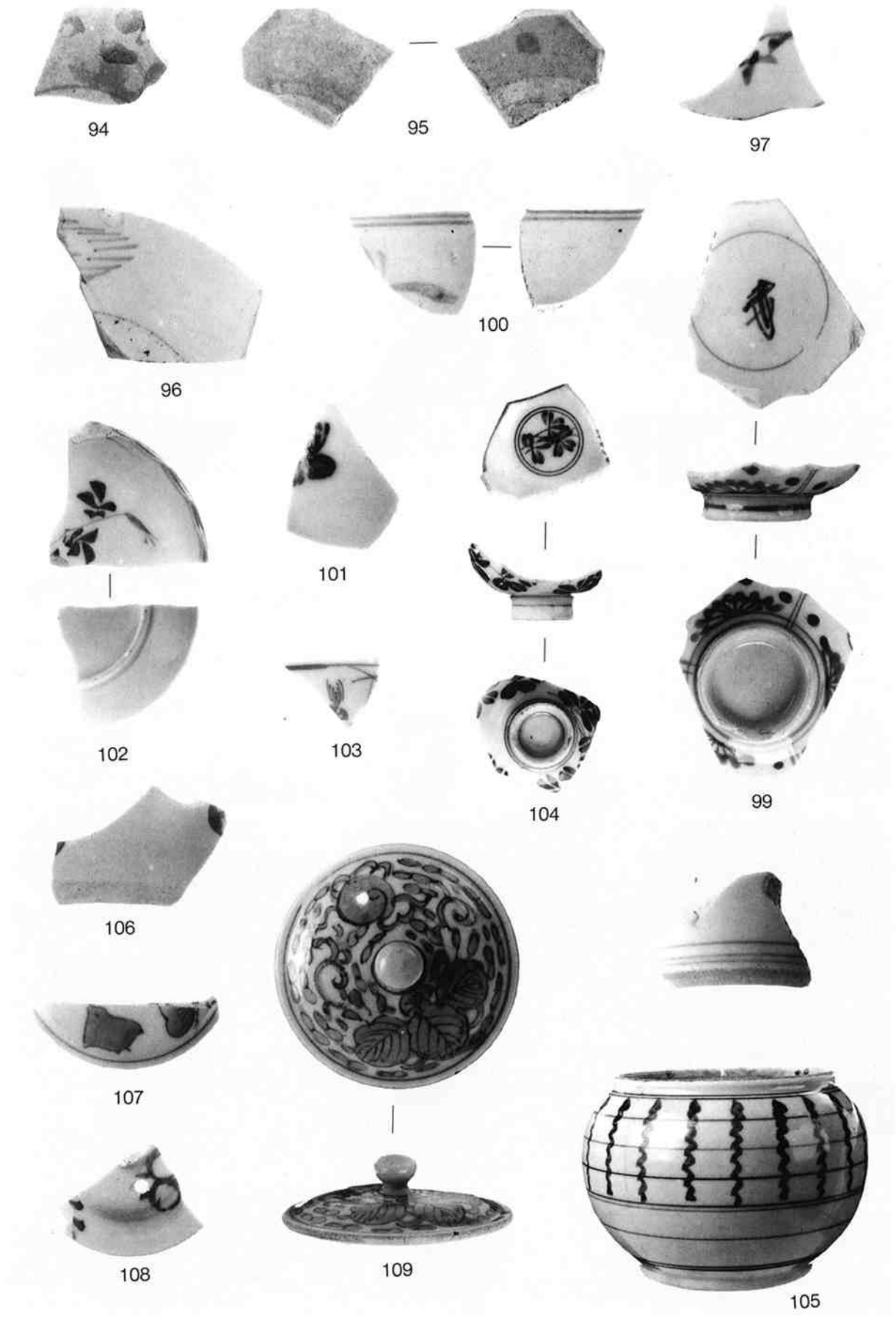
図版34　本土産染付 2



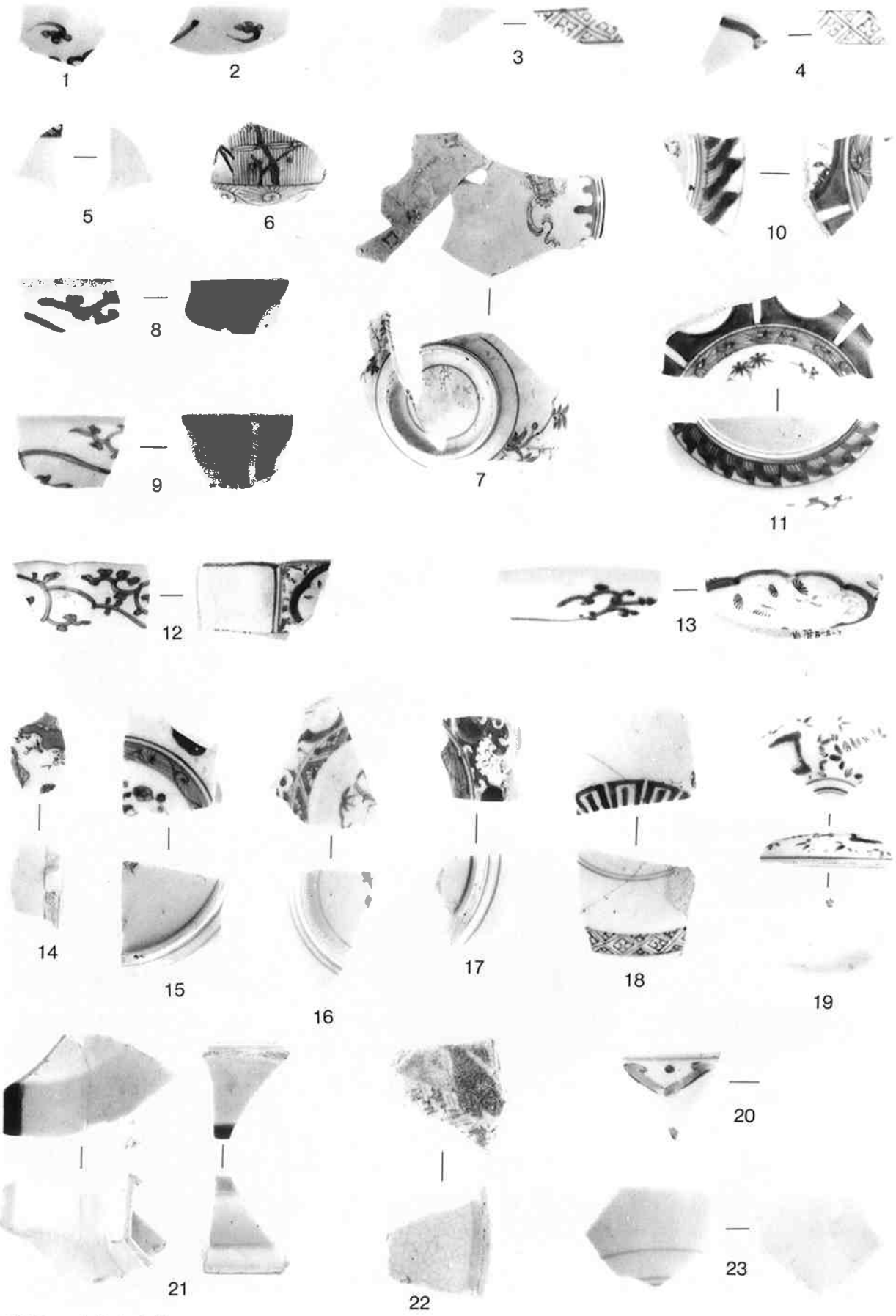
図版35　本土産染付 3



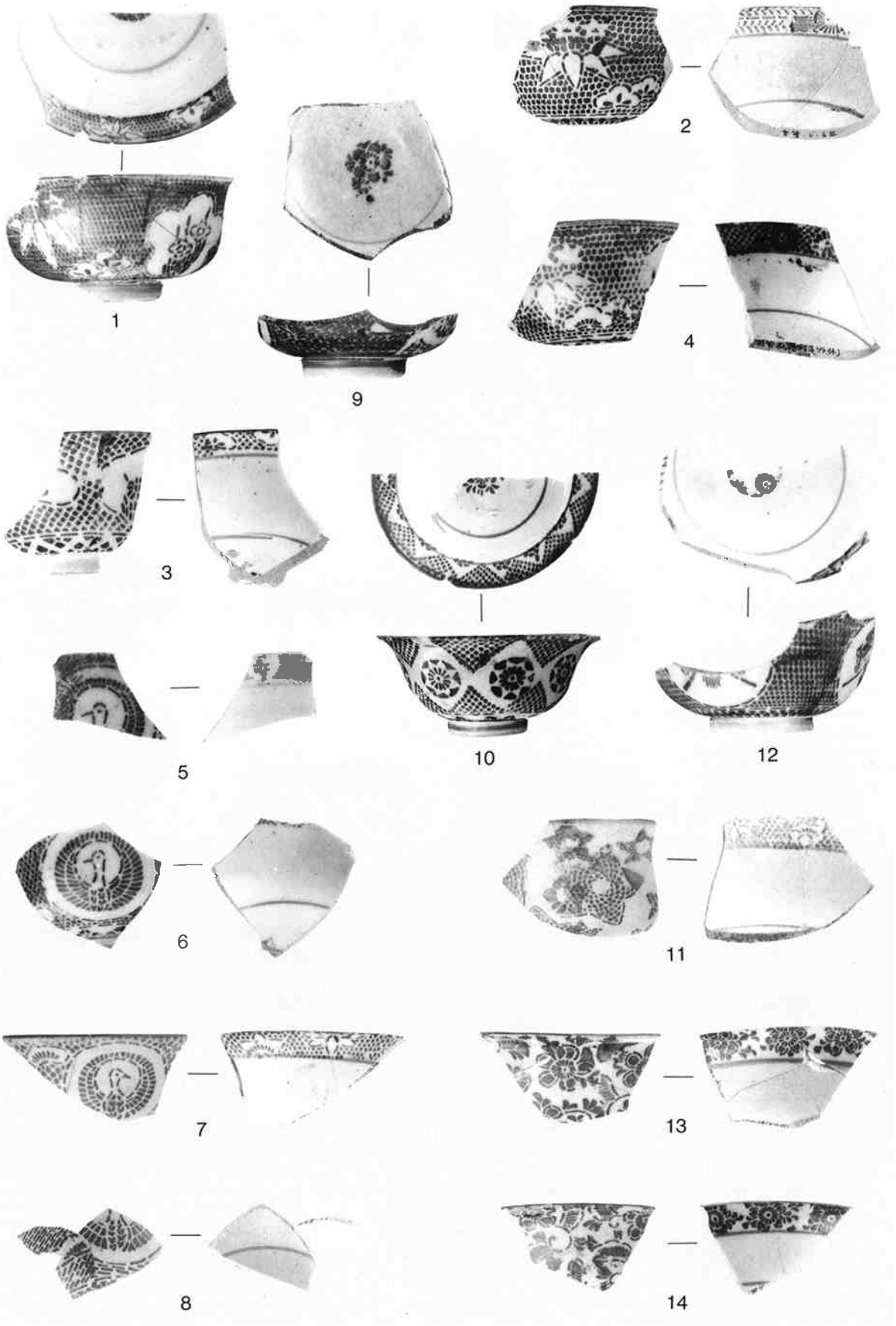
図版36　本土産染付 4



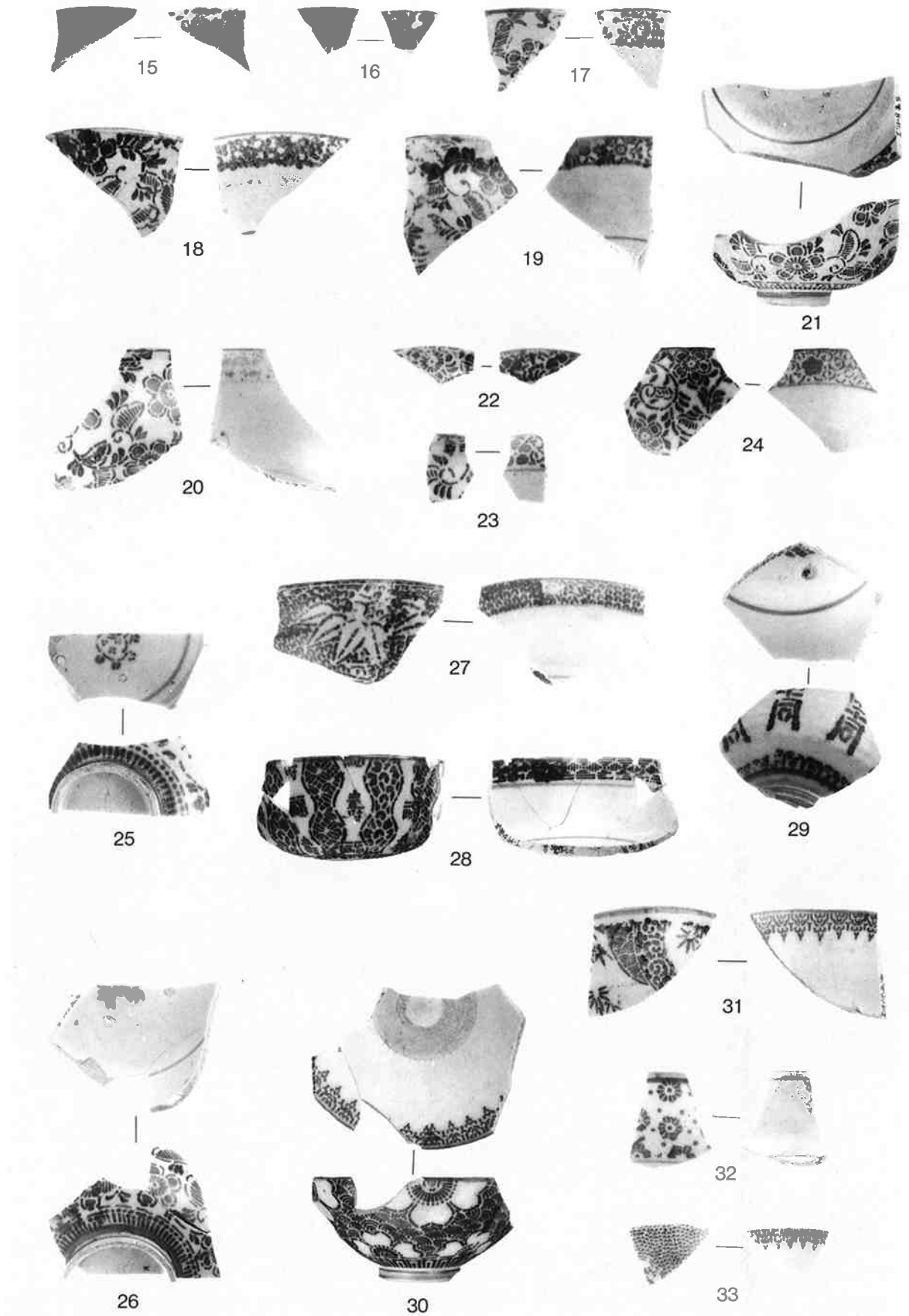
図版37　本土産染付 5



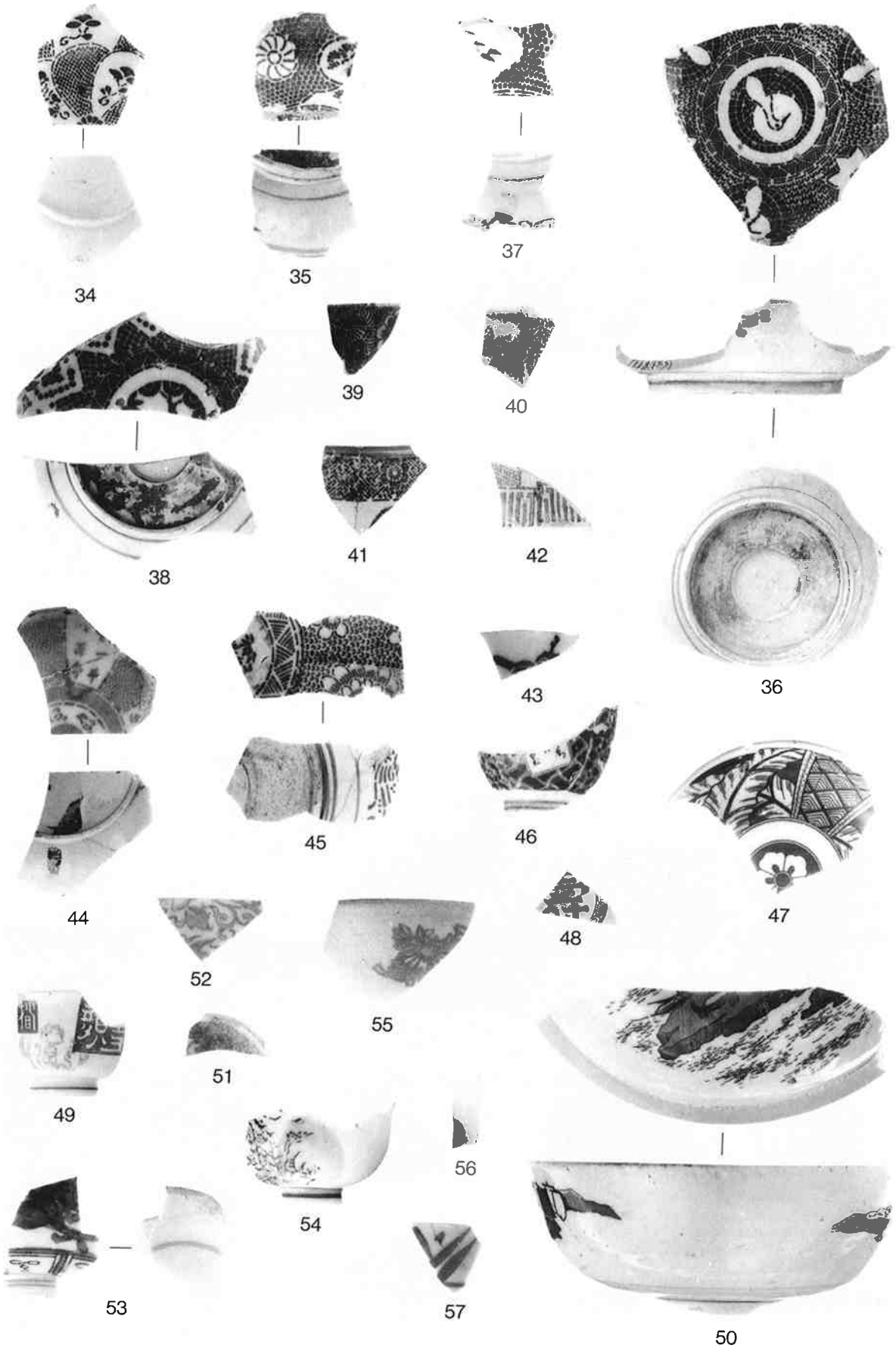
図版38　本土産色絵 1



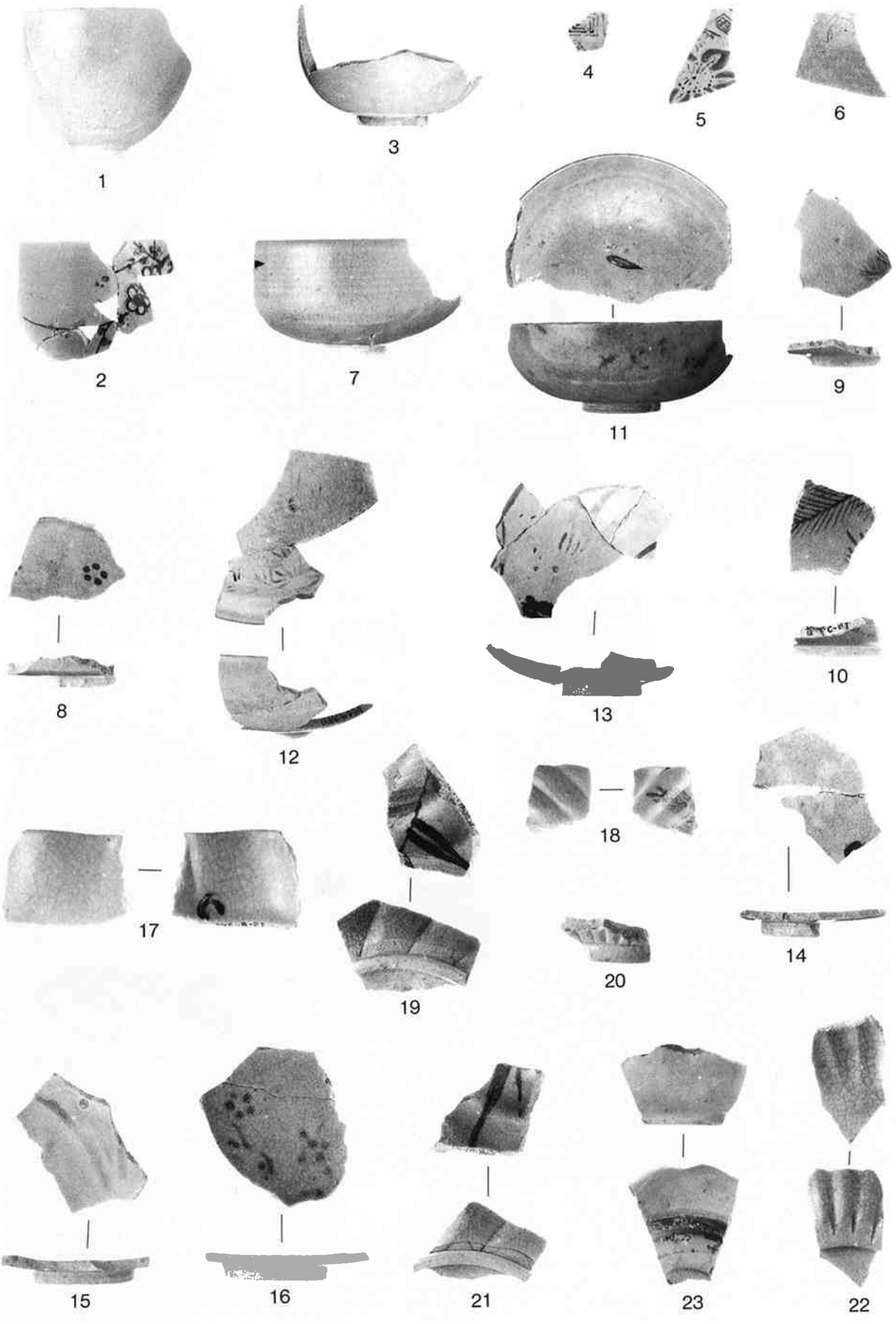
図版39　本土産印判手 1



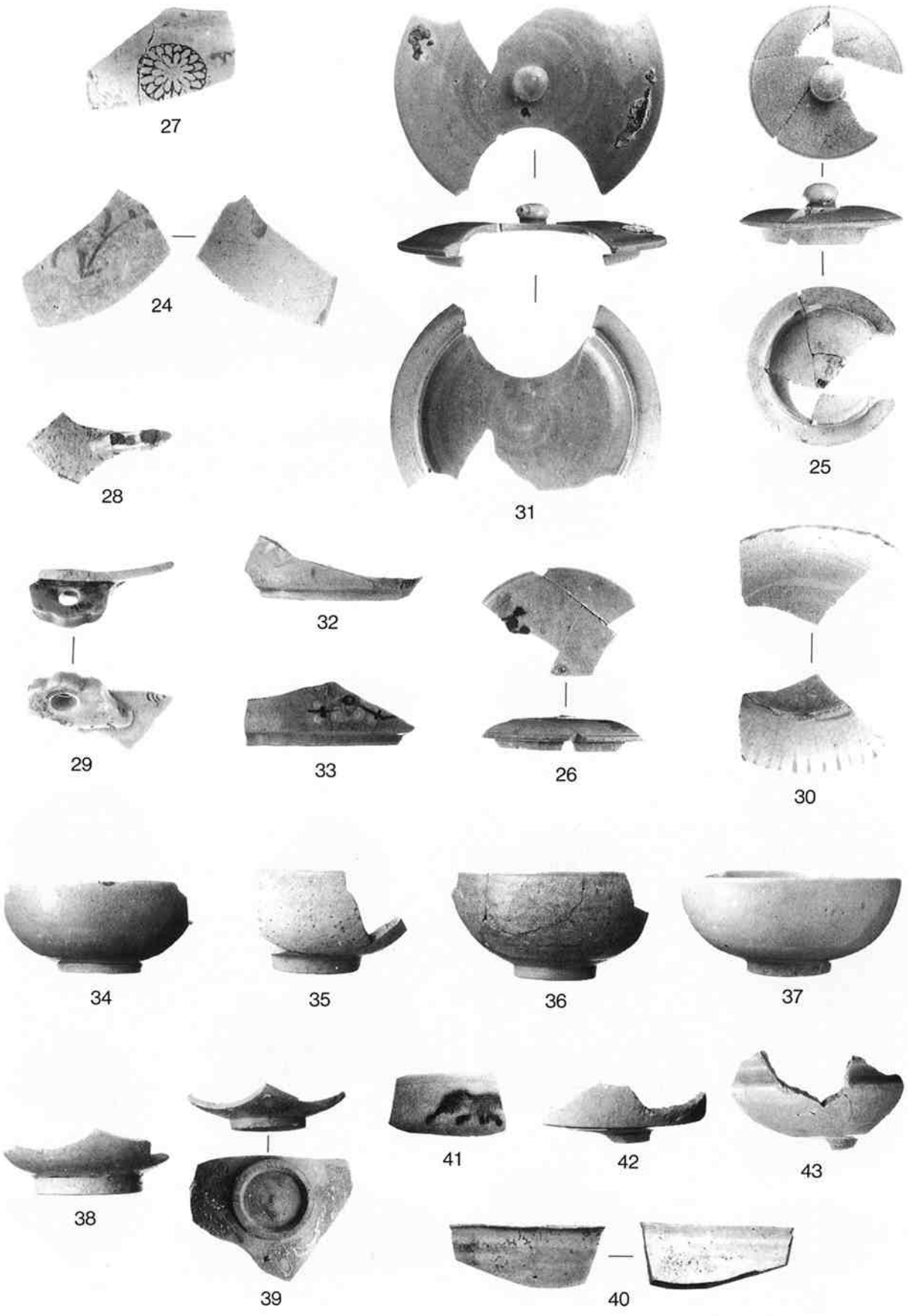
図版40　本土産印判手 2



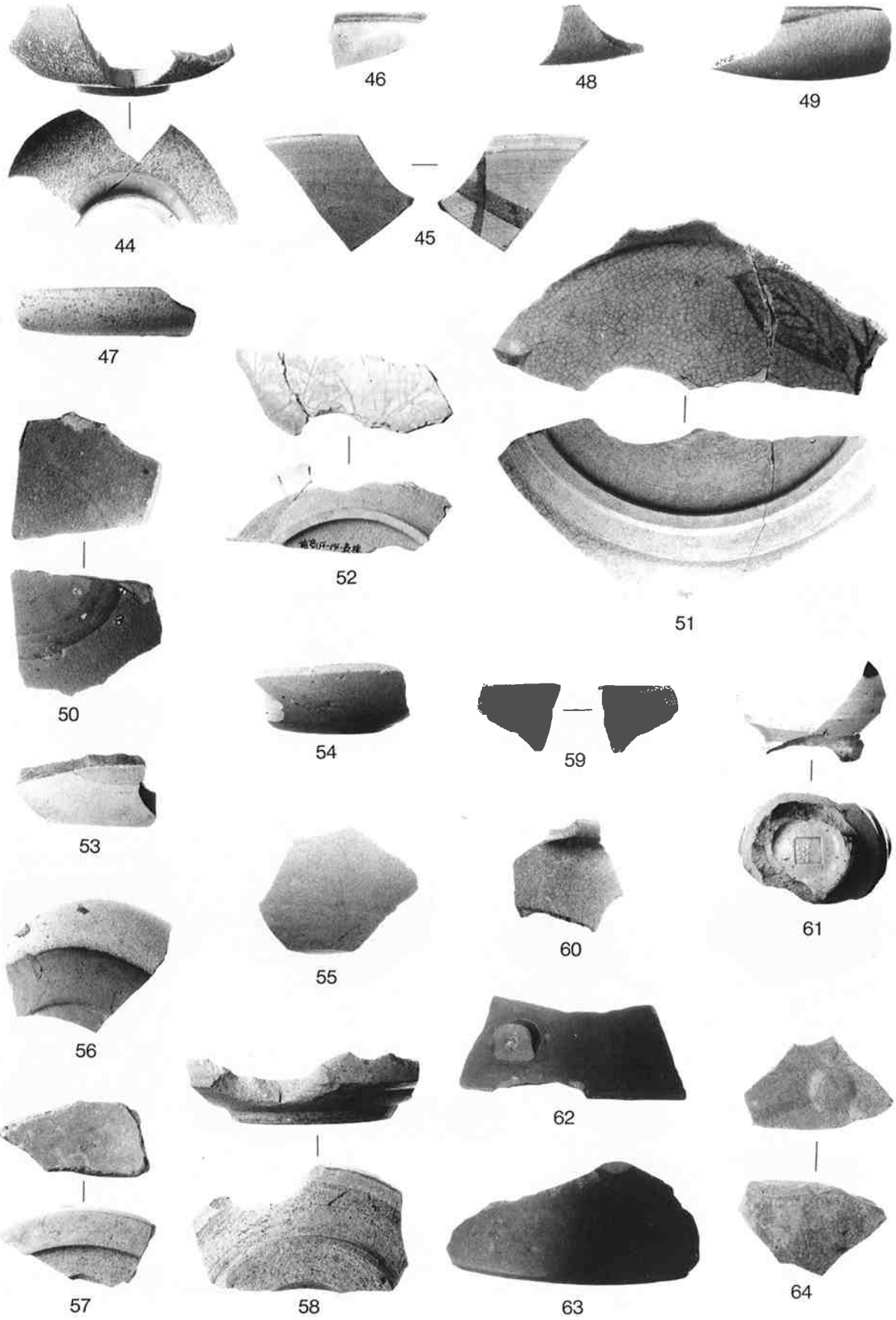
図版41　本土産印判手 3



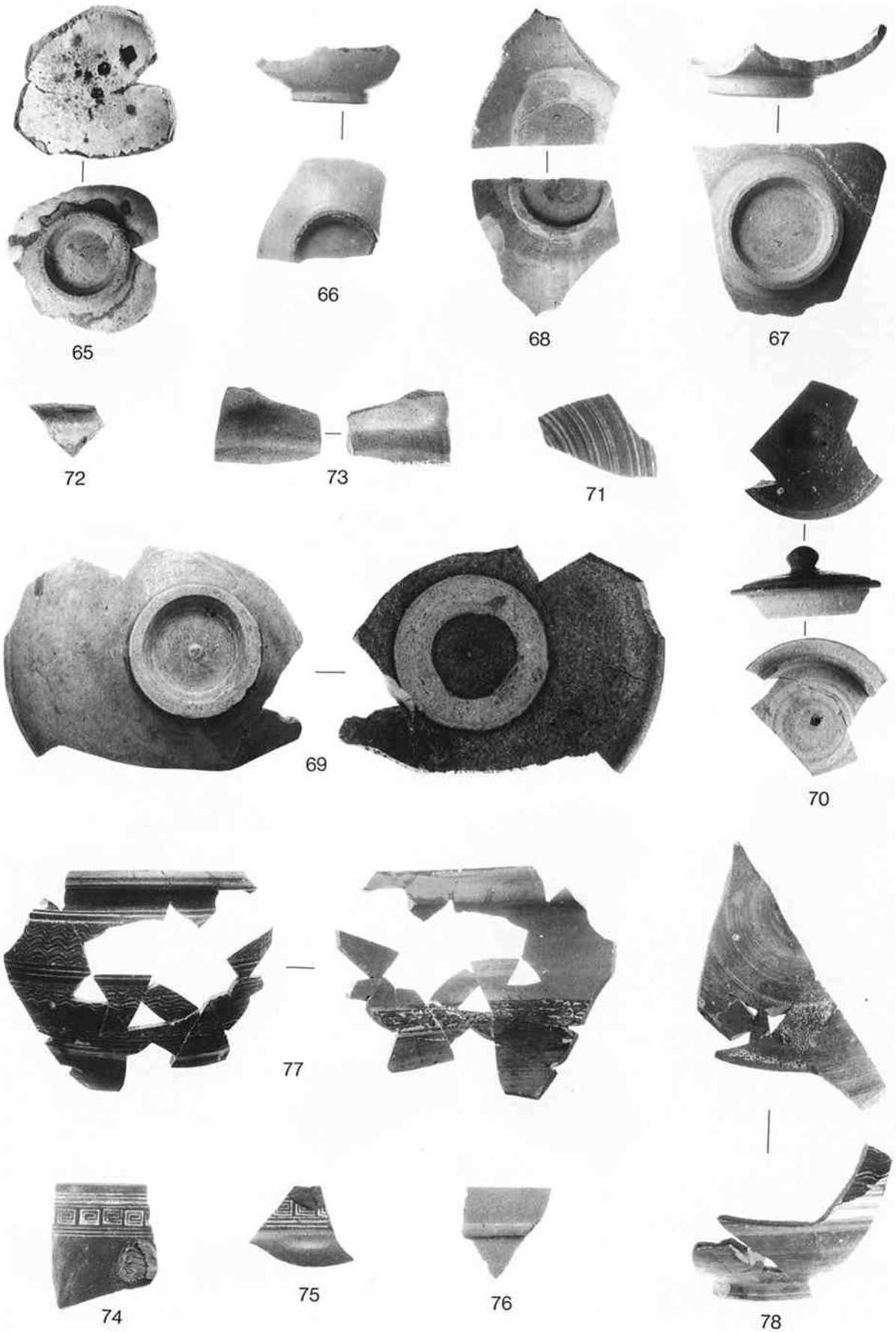
図版42　本土産陶器 1



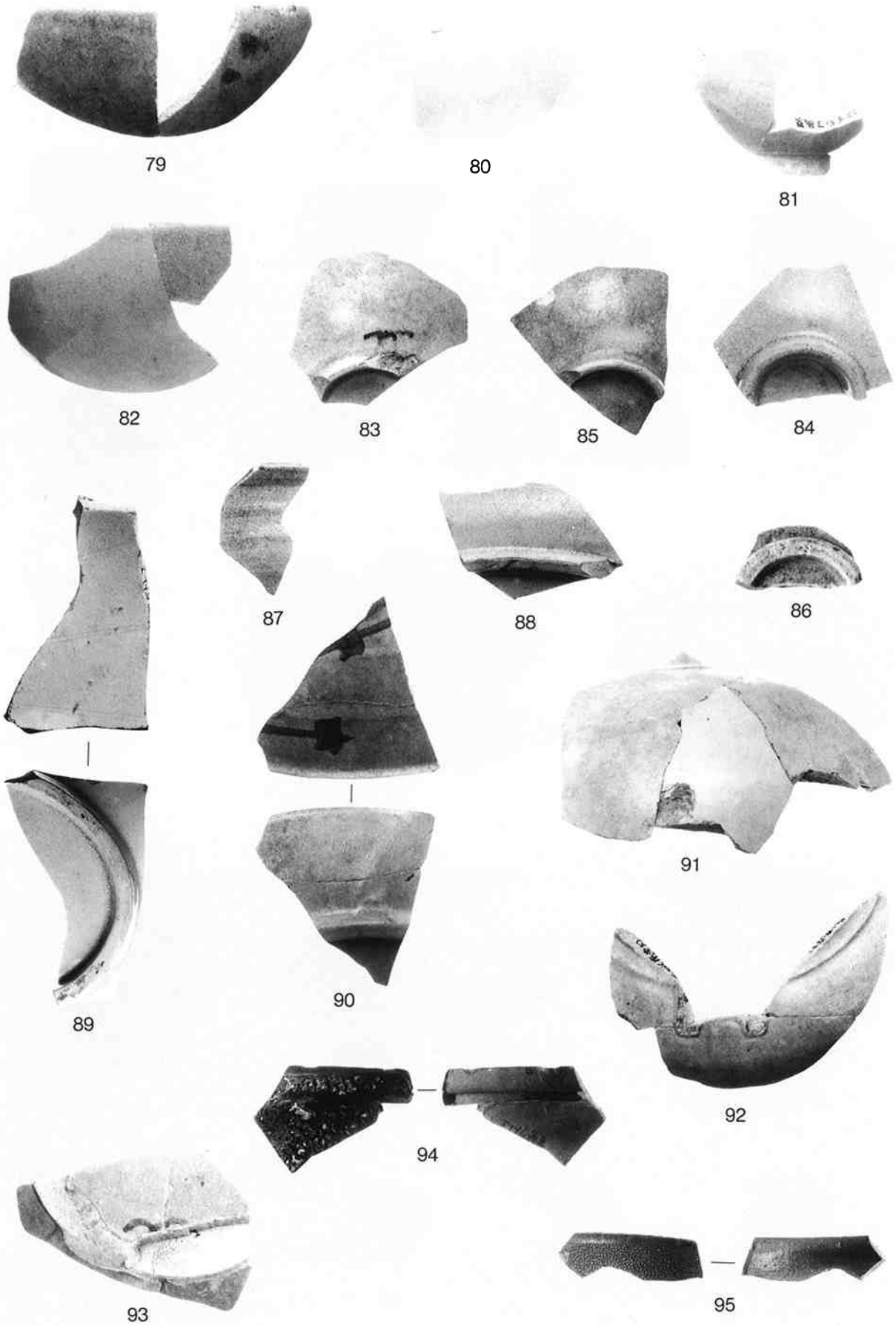
図版43　本土産陶器 2



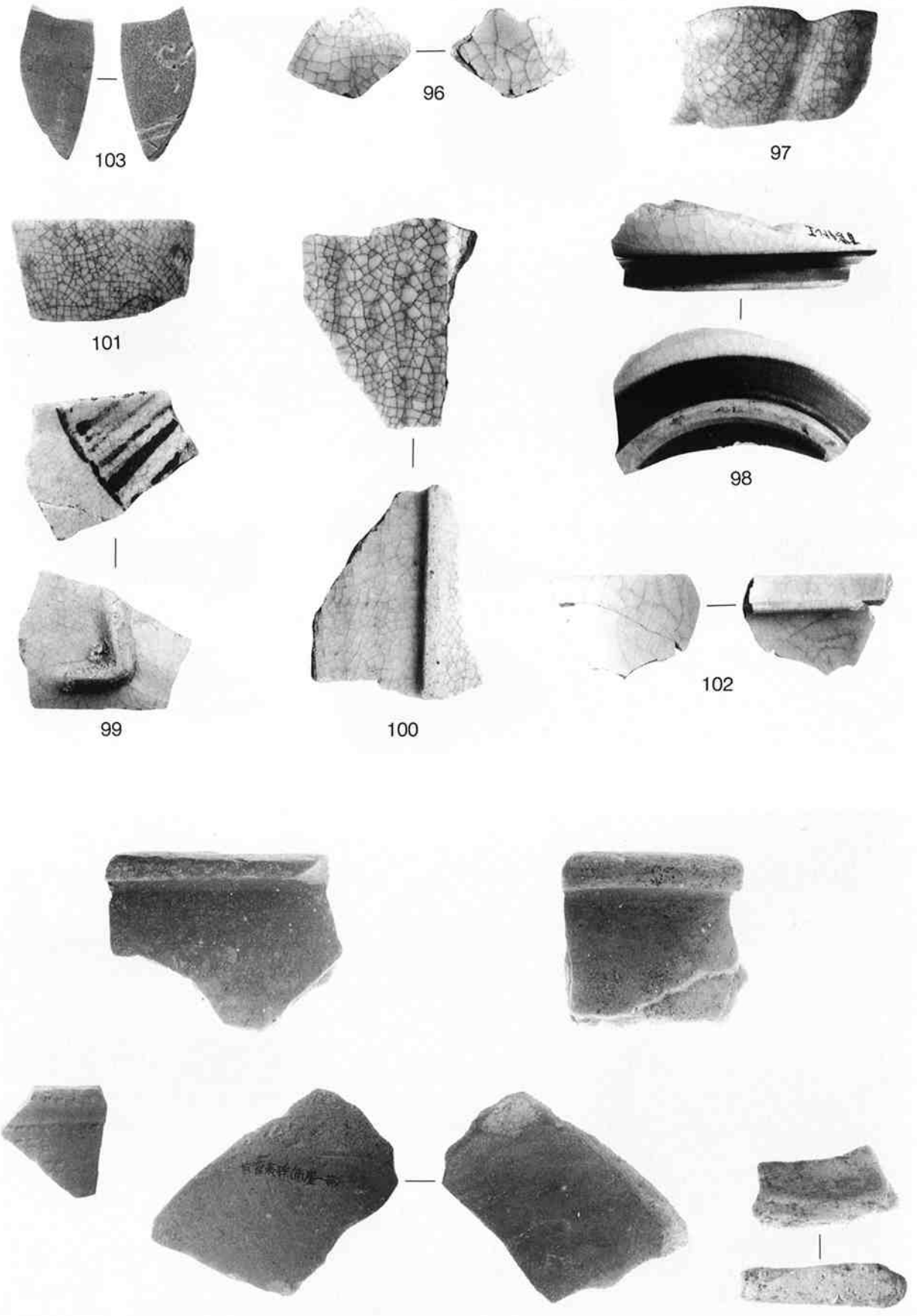
図版44　本土産陶器 3



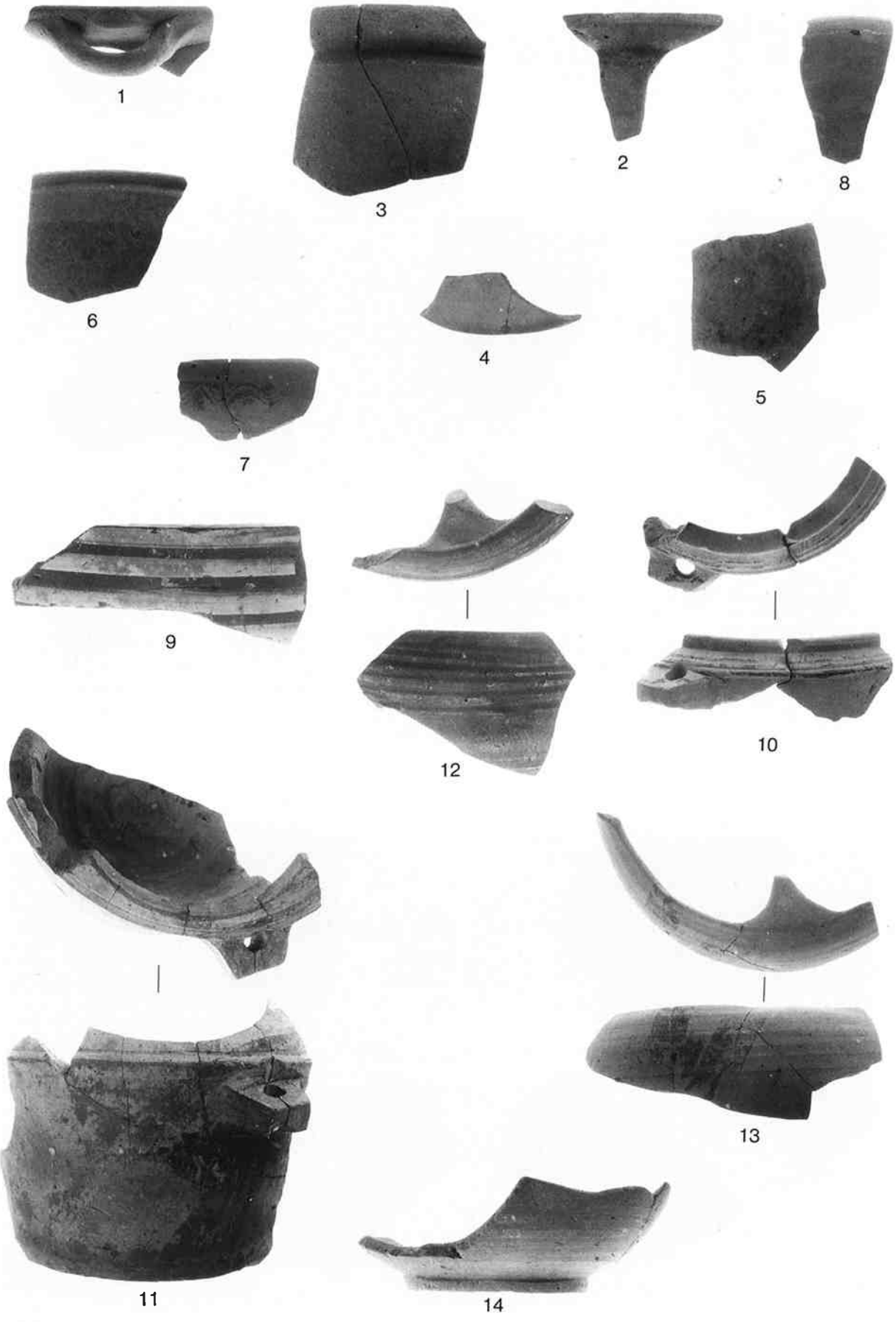
図版45　本土産陶器 4



図版46　本土産陶器 5



図版47　上：本土産陶器 6　　下：南島須恵器・土器



図版48　陶質土器 1

15

16

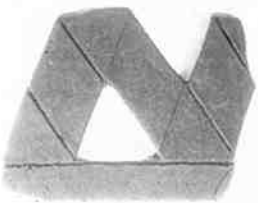
17

18

20

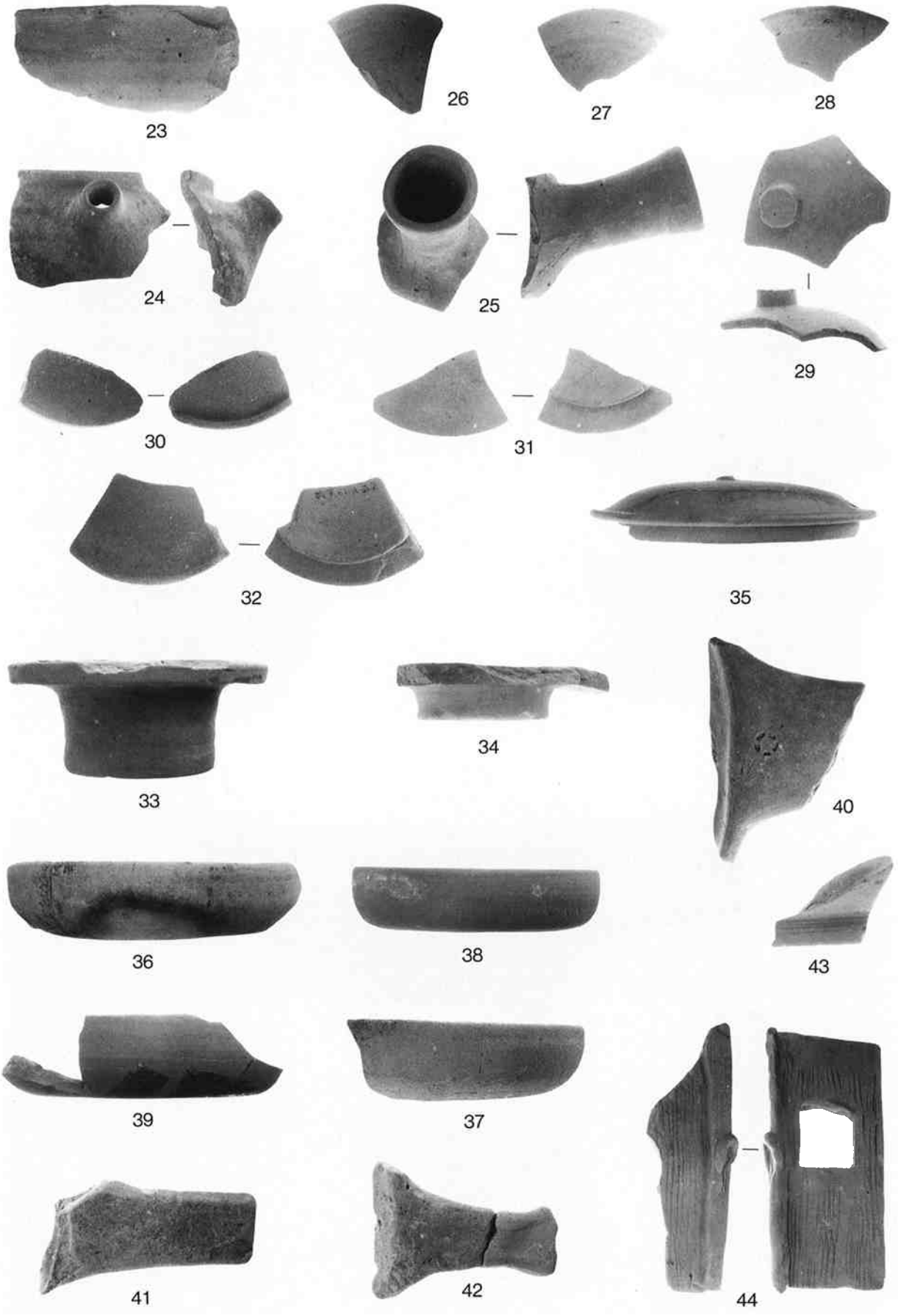
19

21

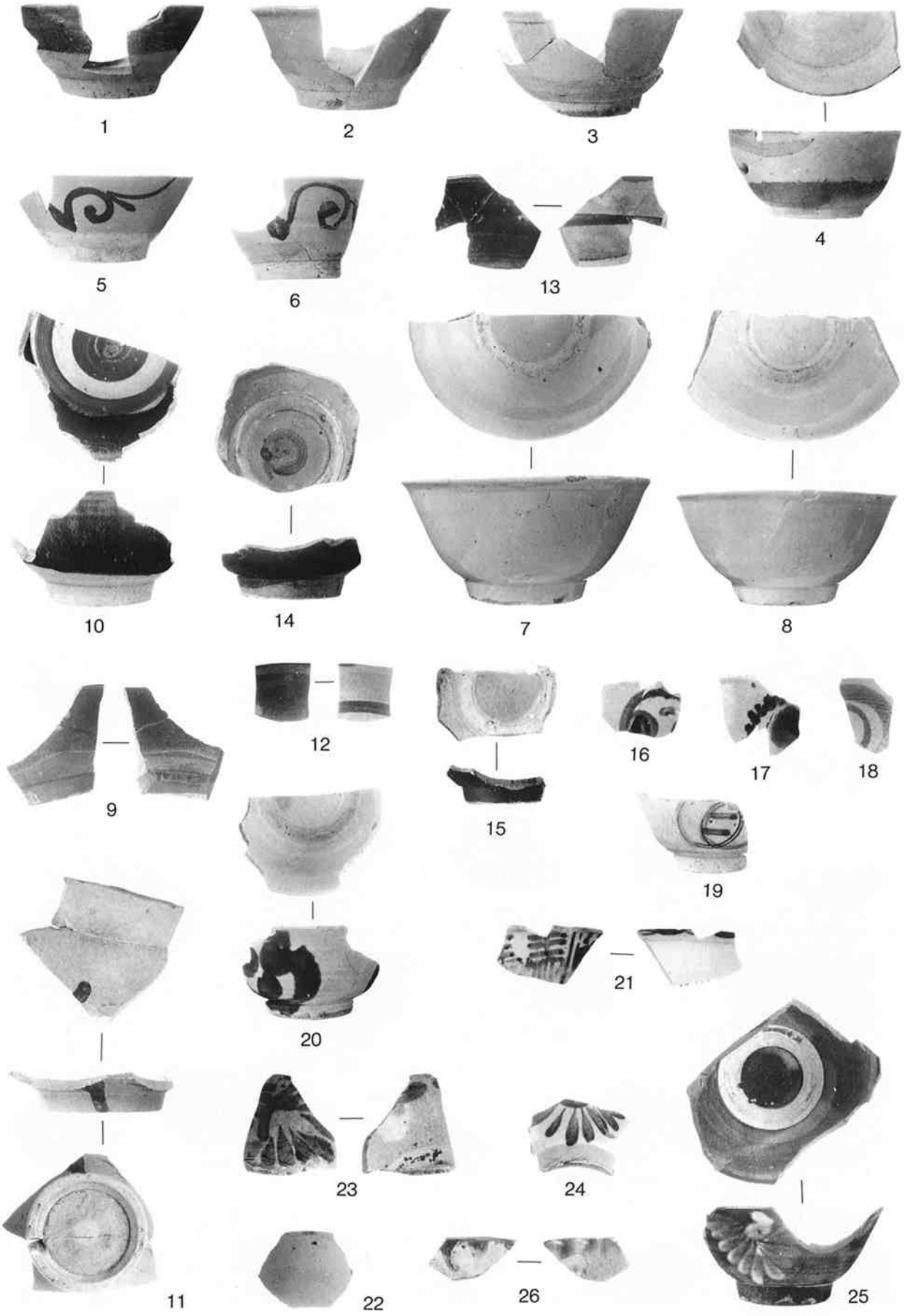


22

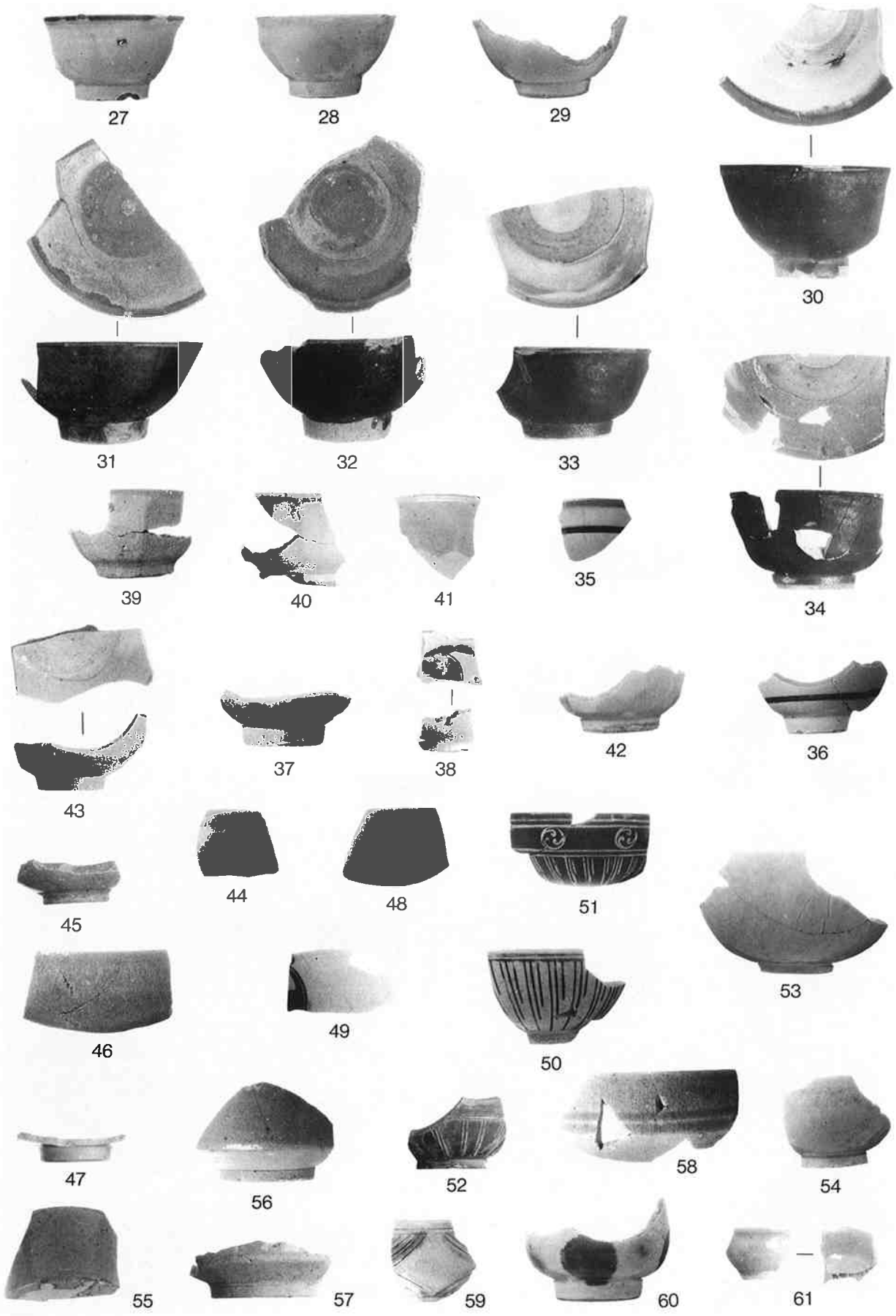
図版49　陶質土器 2



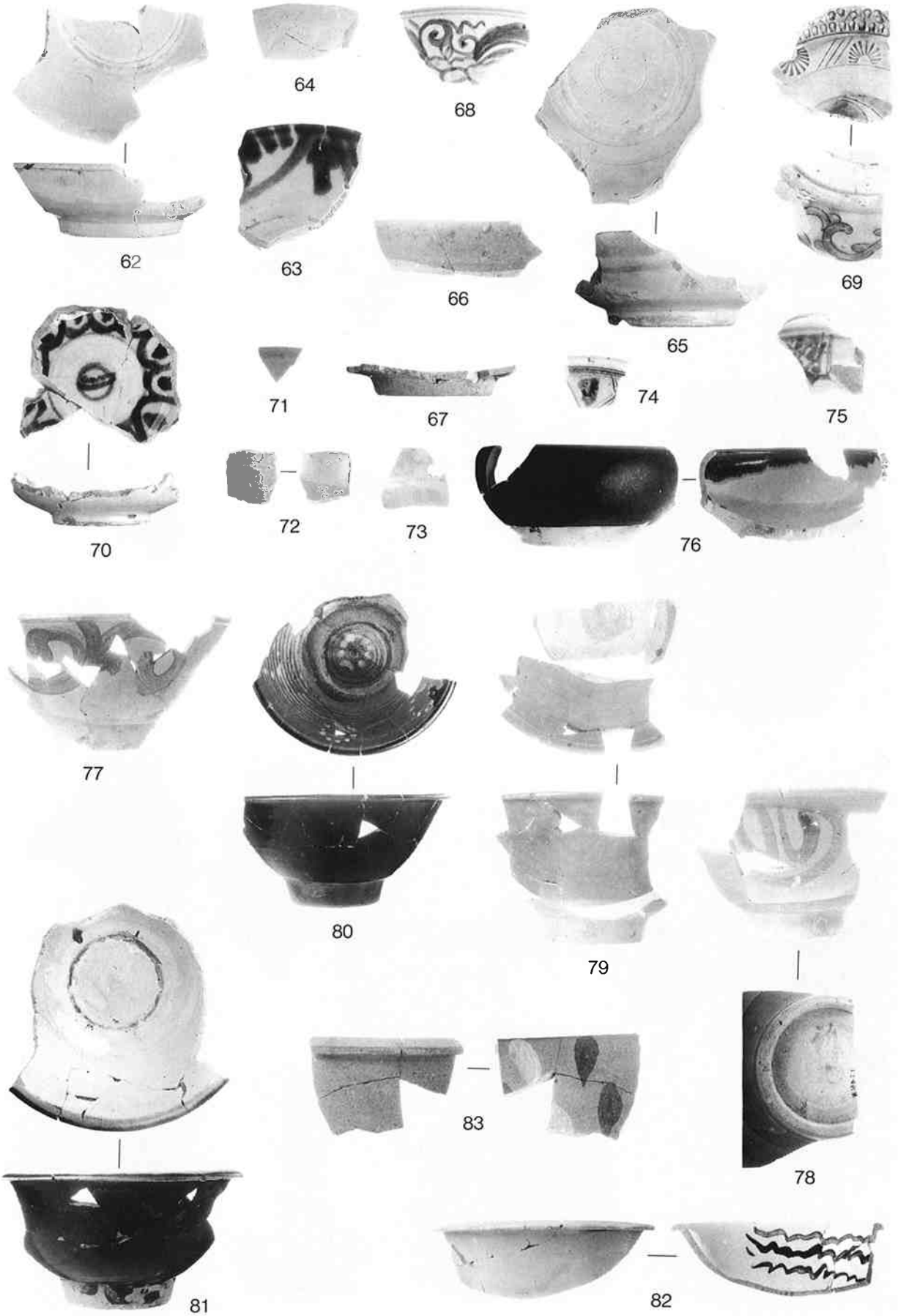
図版50　陶質土器 3



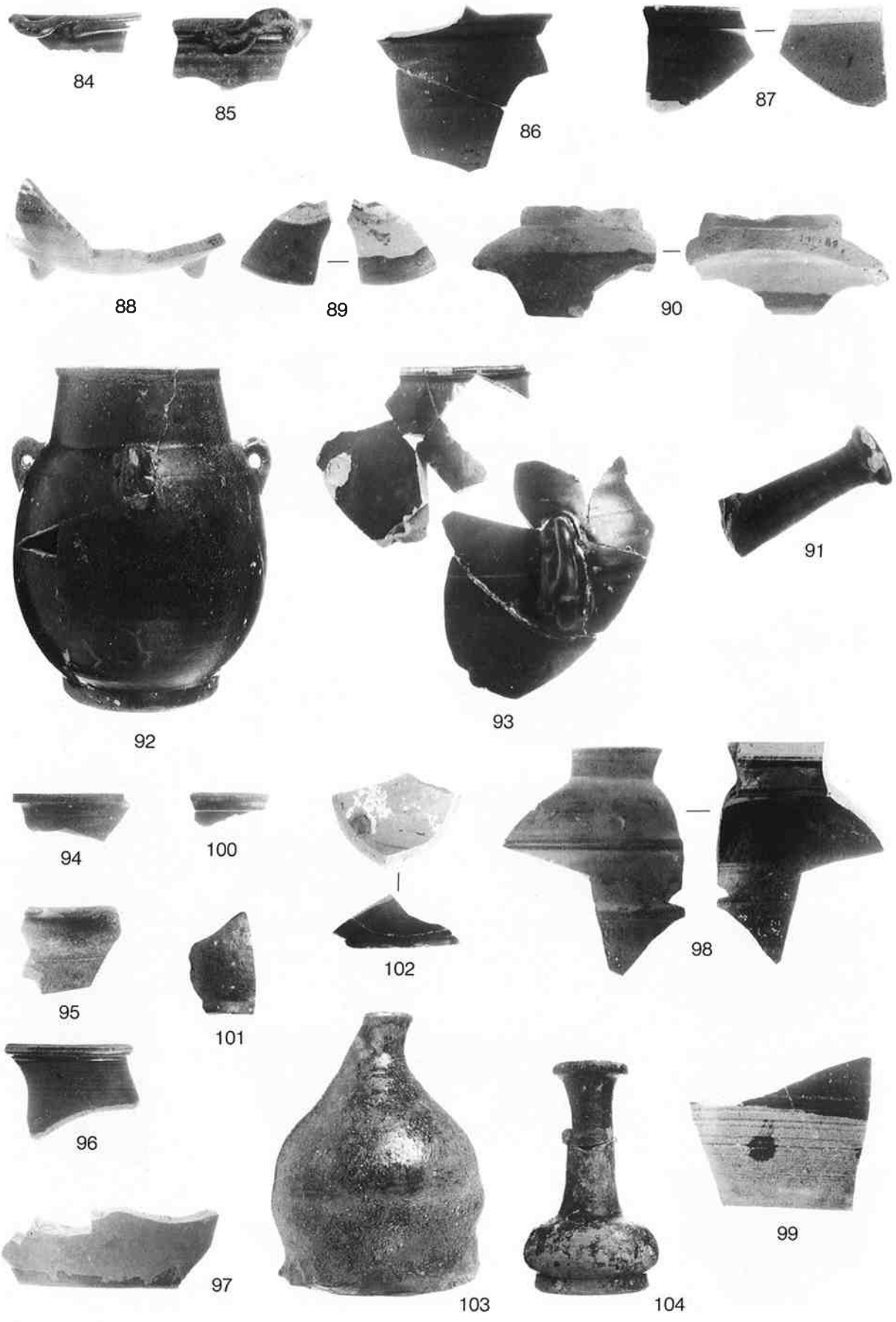
図版51　沖縄産施釉陶器 1



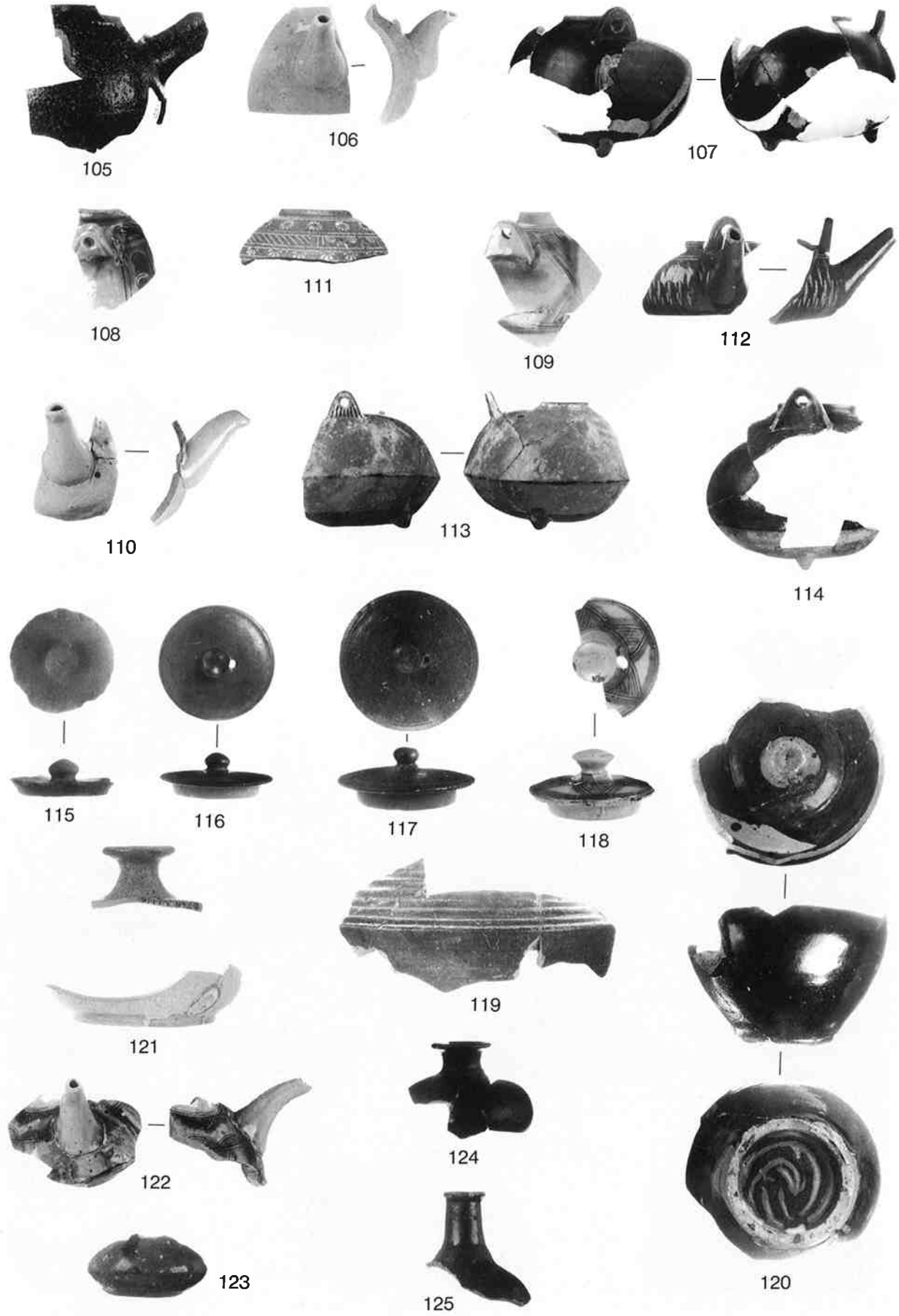
図版52　沖縄産施釉陶器 2



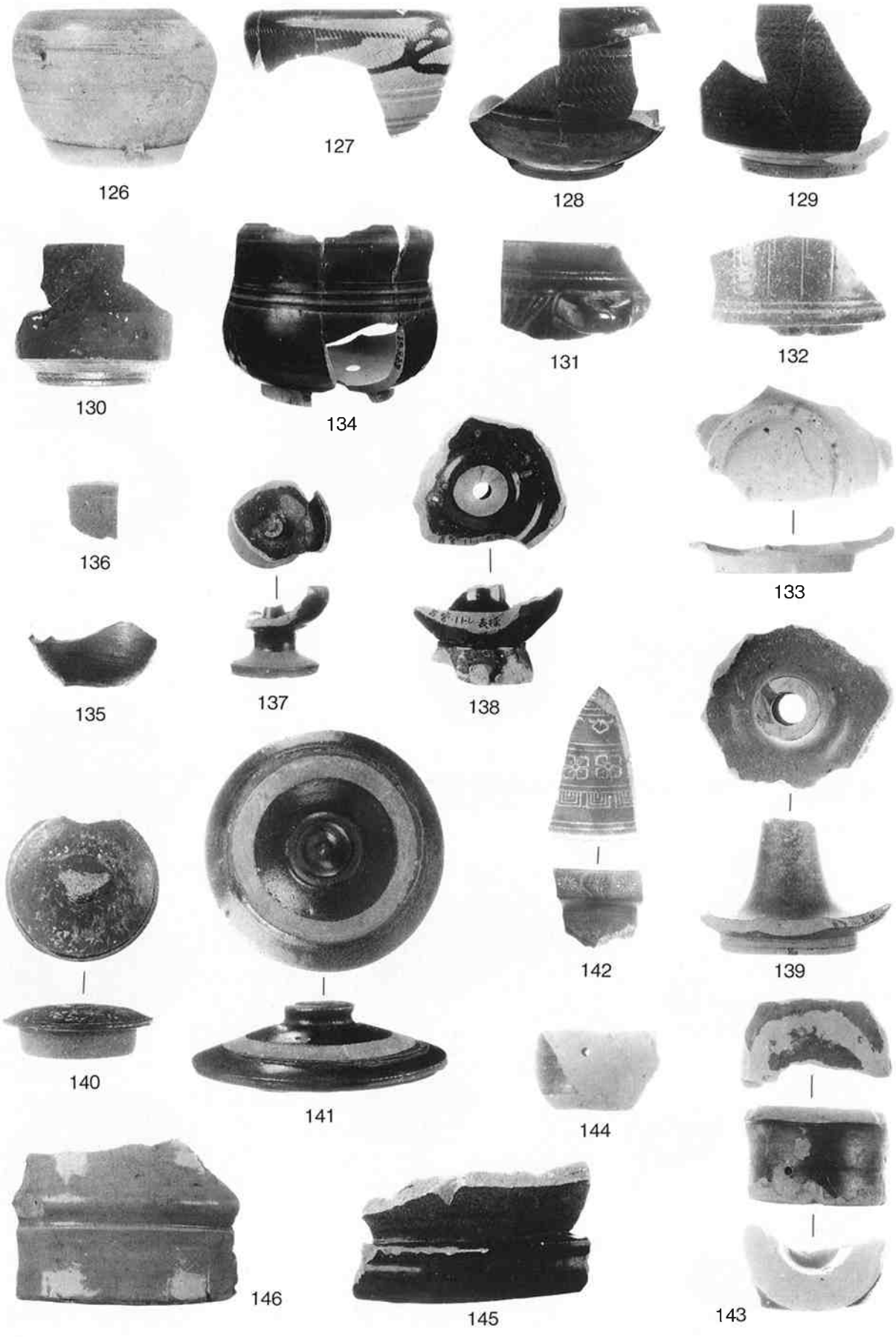
図版53　沖縄産施釉陶器 3



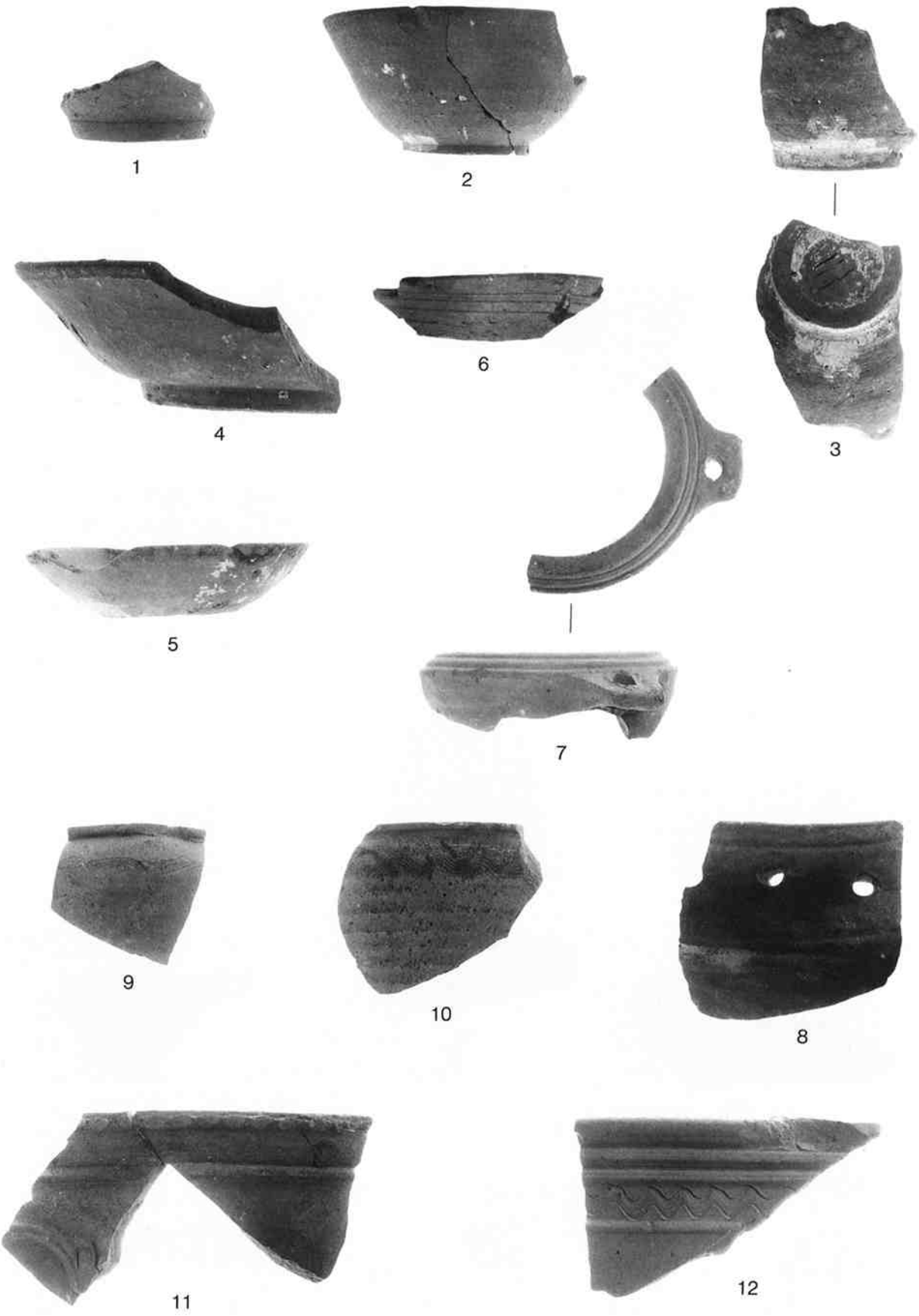
図版54　沖縄産施釉陶器 4



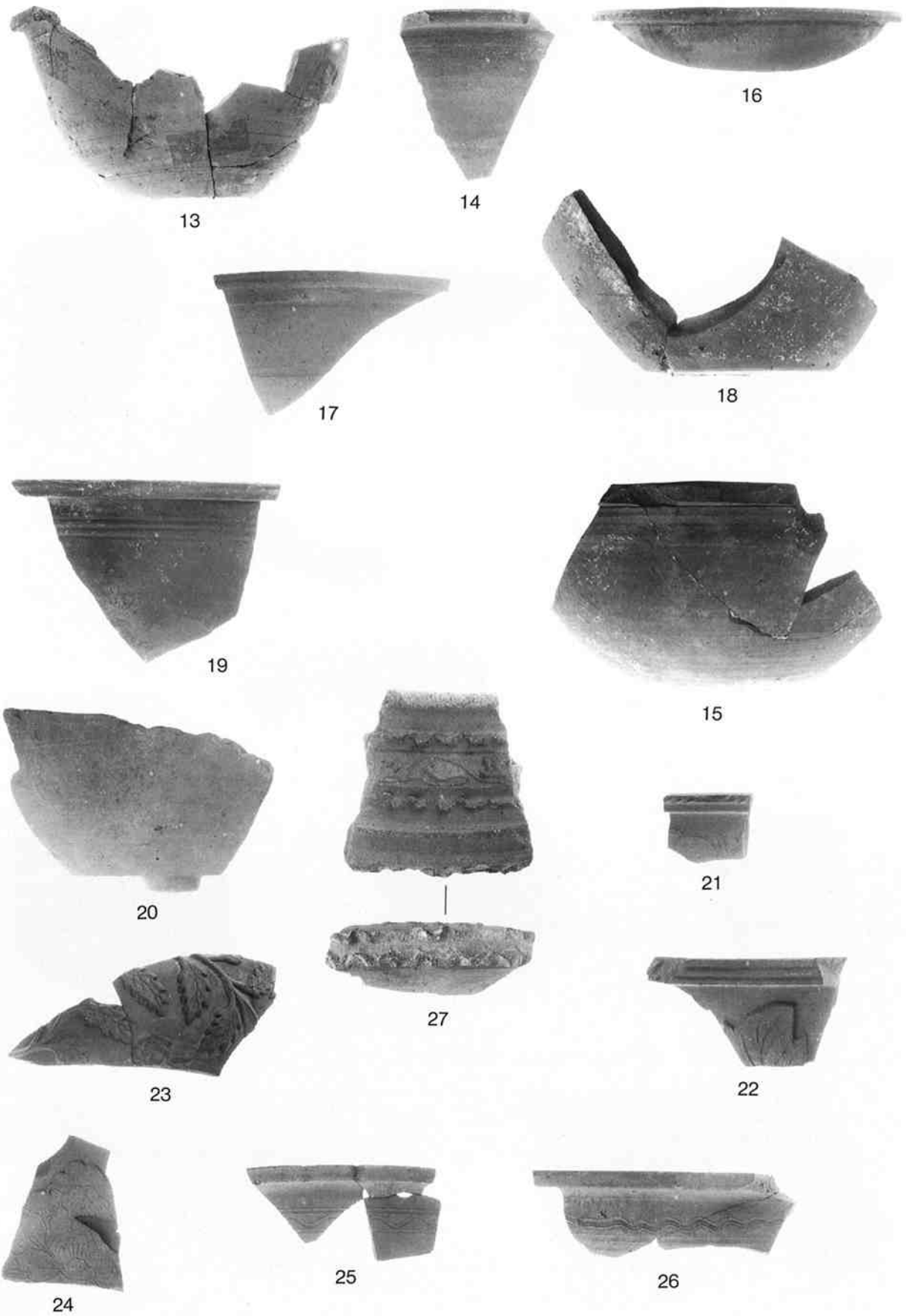
図版55　沖縄産施釉陶器 5



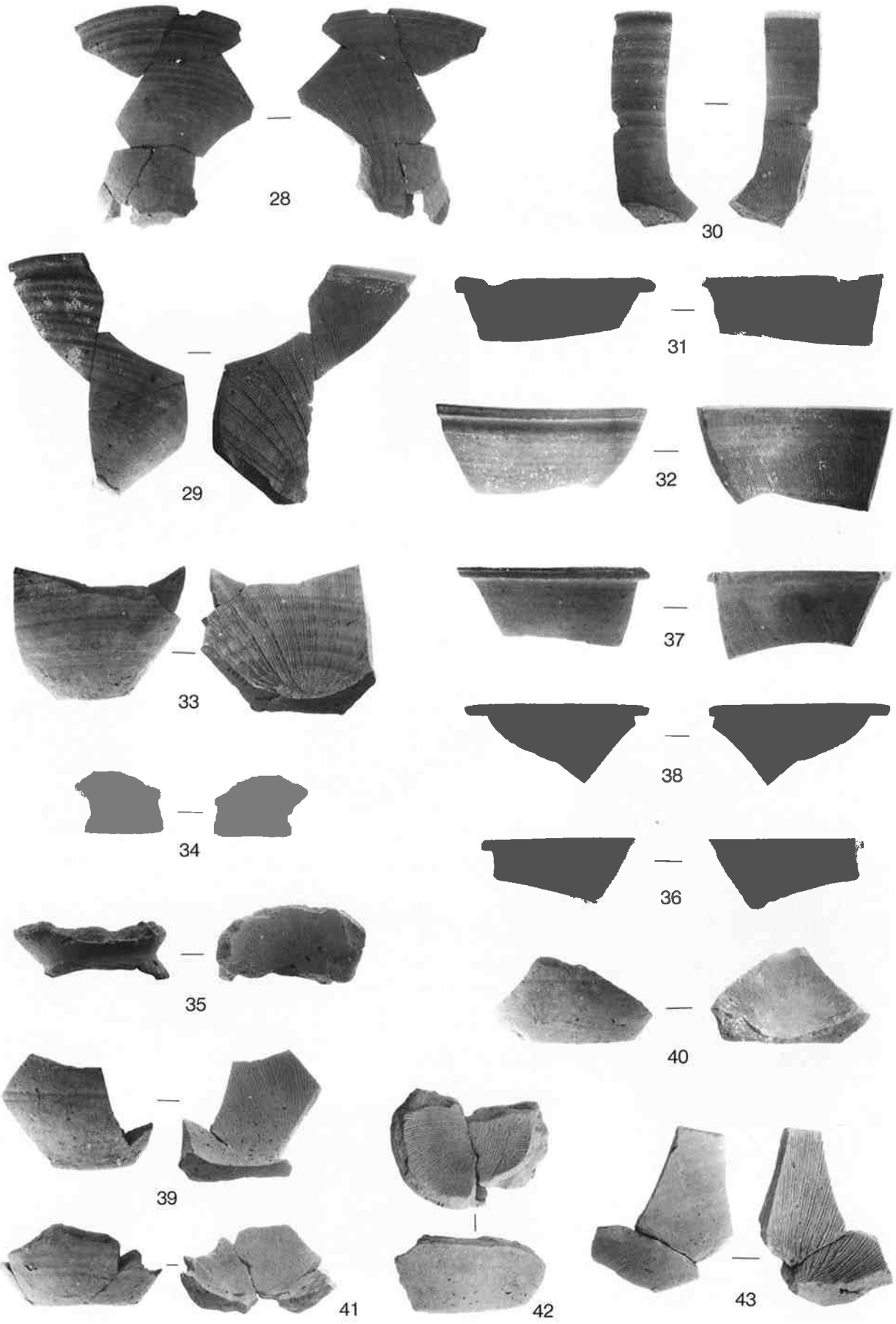
図版56　沖縄産施釉陶器 6



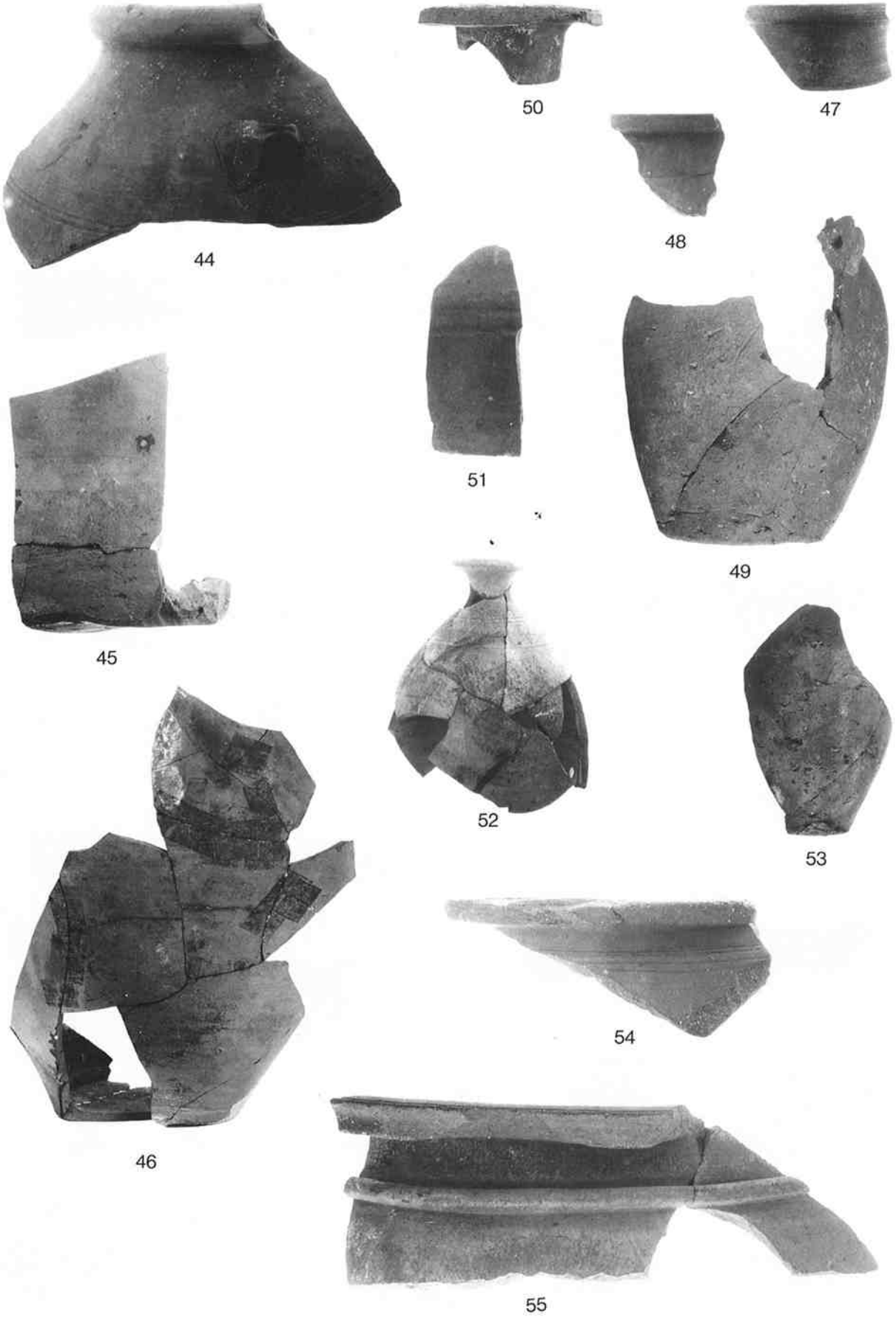
図版57　沖縄産無釉陶器 1



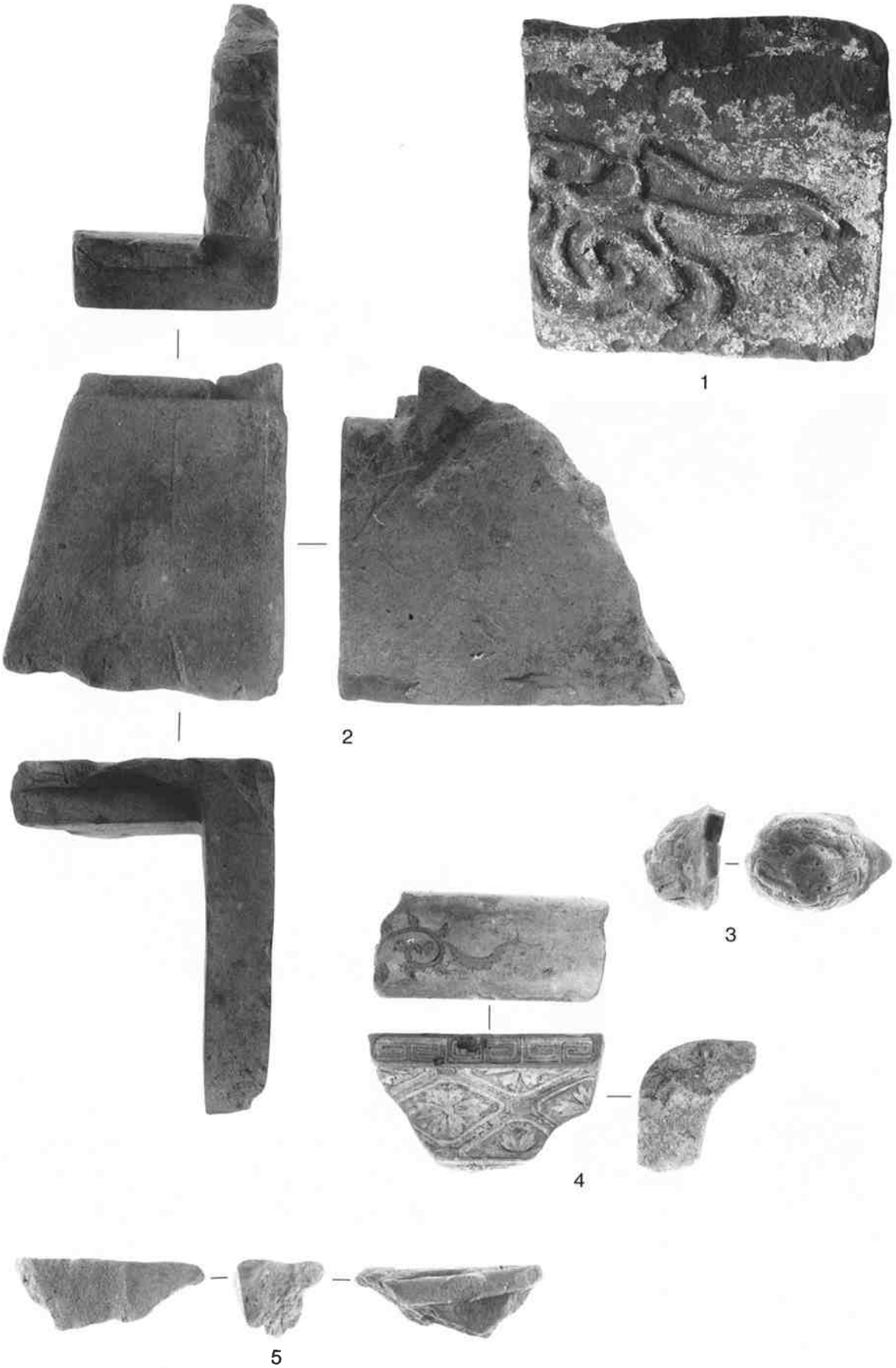
図版58　沖縄産無釉陶器 2



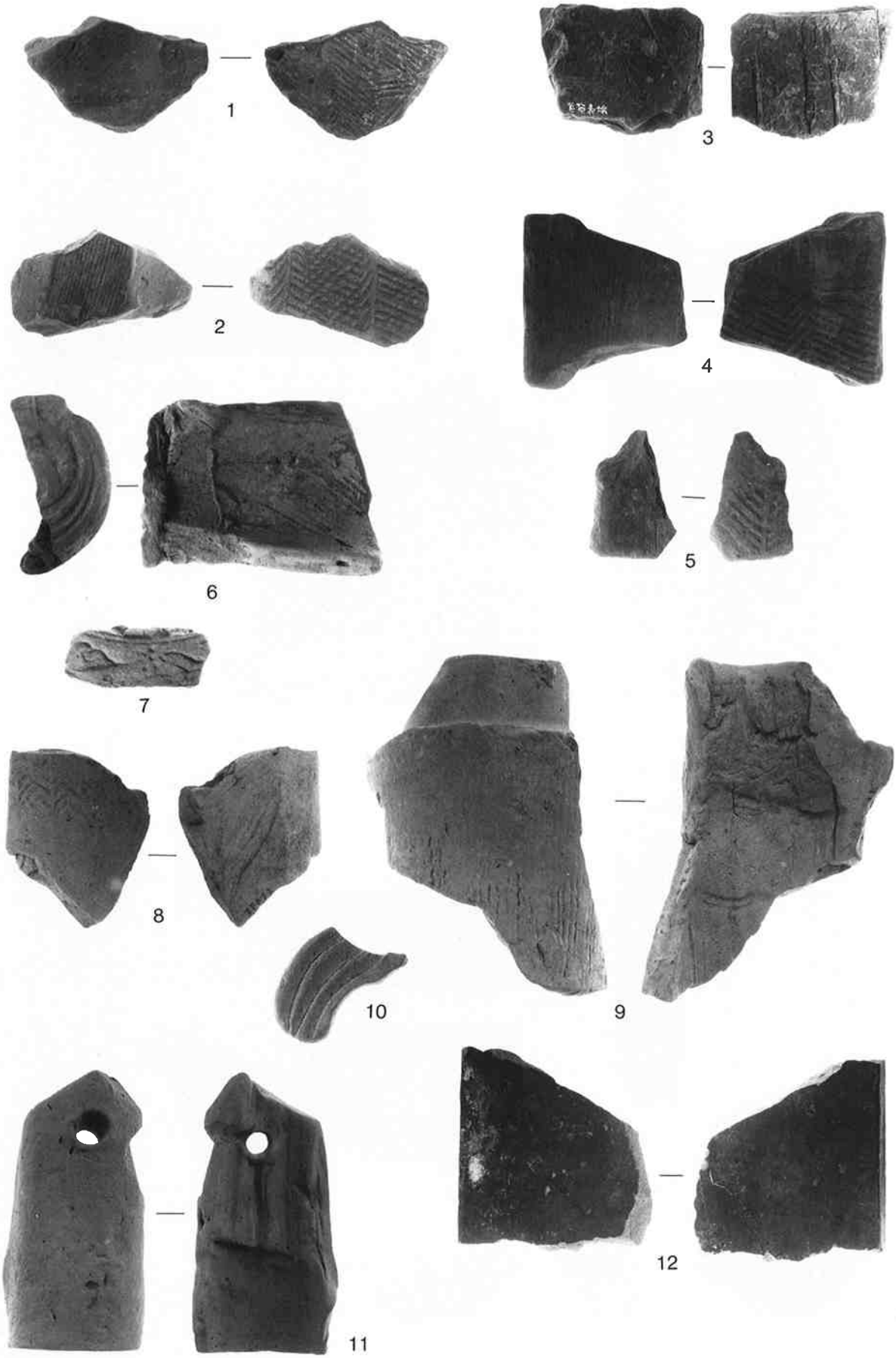
図版59　沖縄産無釉陶器 3



図版60　沖縄産無釉陶器 4

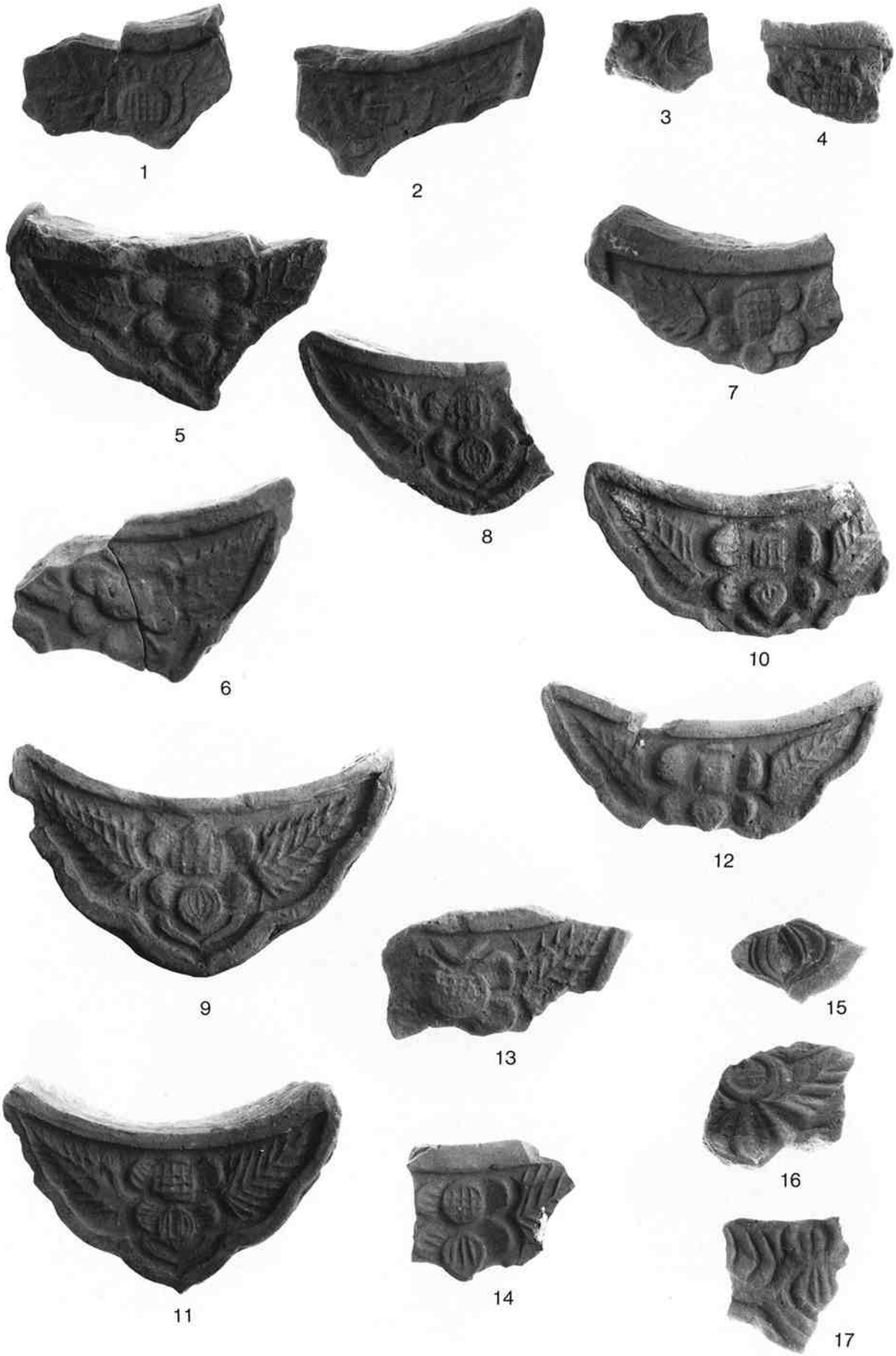


図版61　塼1～2、瓦器3～5

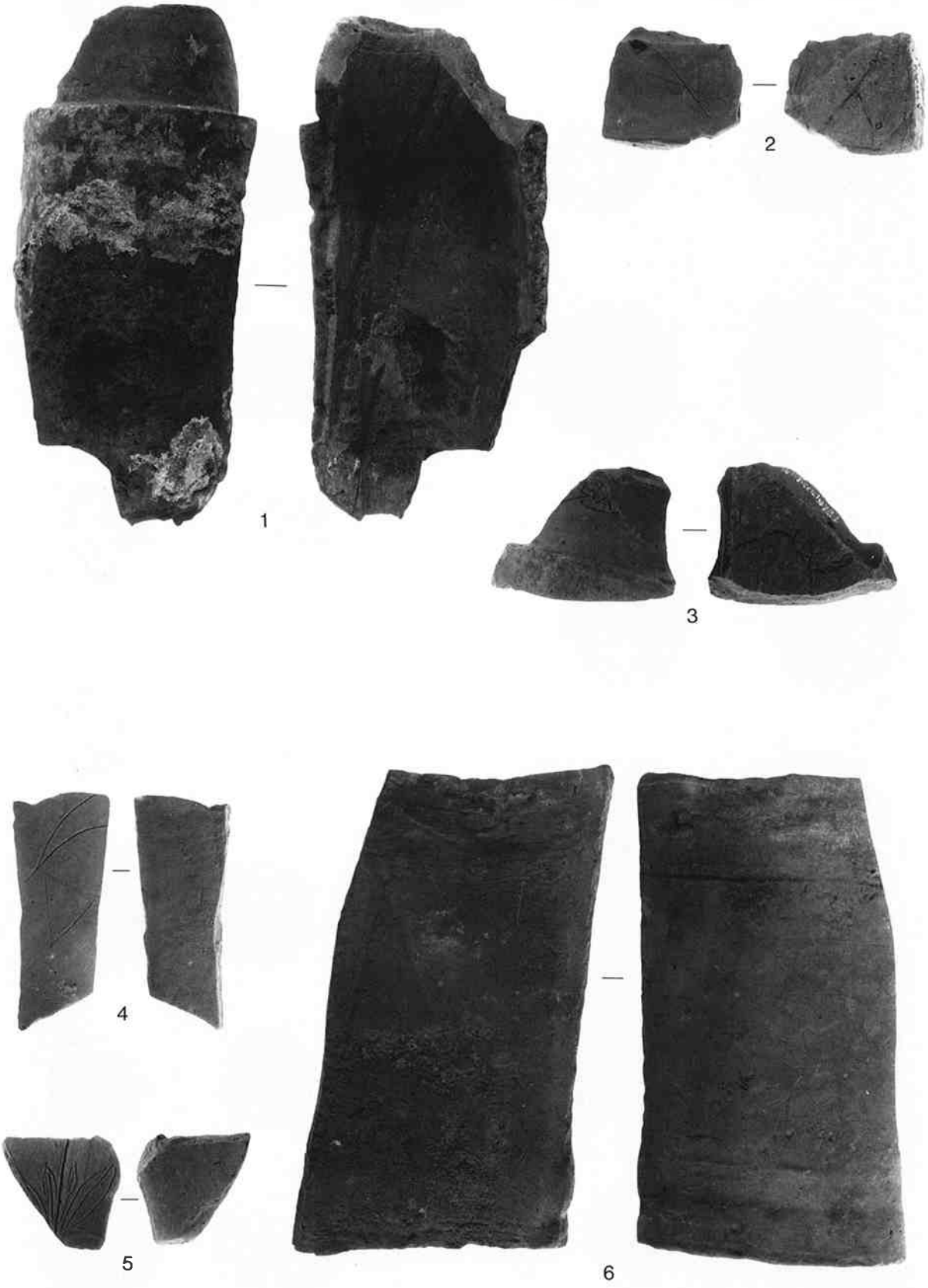


図版62　高麗系瓦：平瓦1～5、**大和系瓦**：軒平瓦7・丸平8・9、役瓦10、雁振瓦11、**近世大和瓦**：平瓦12

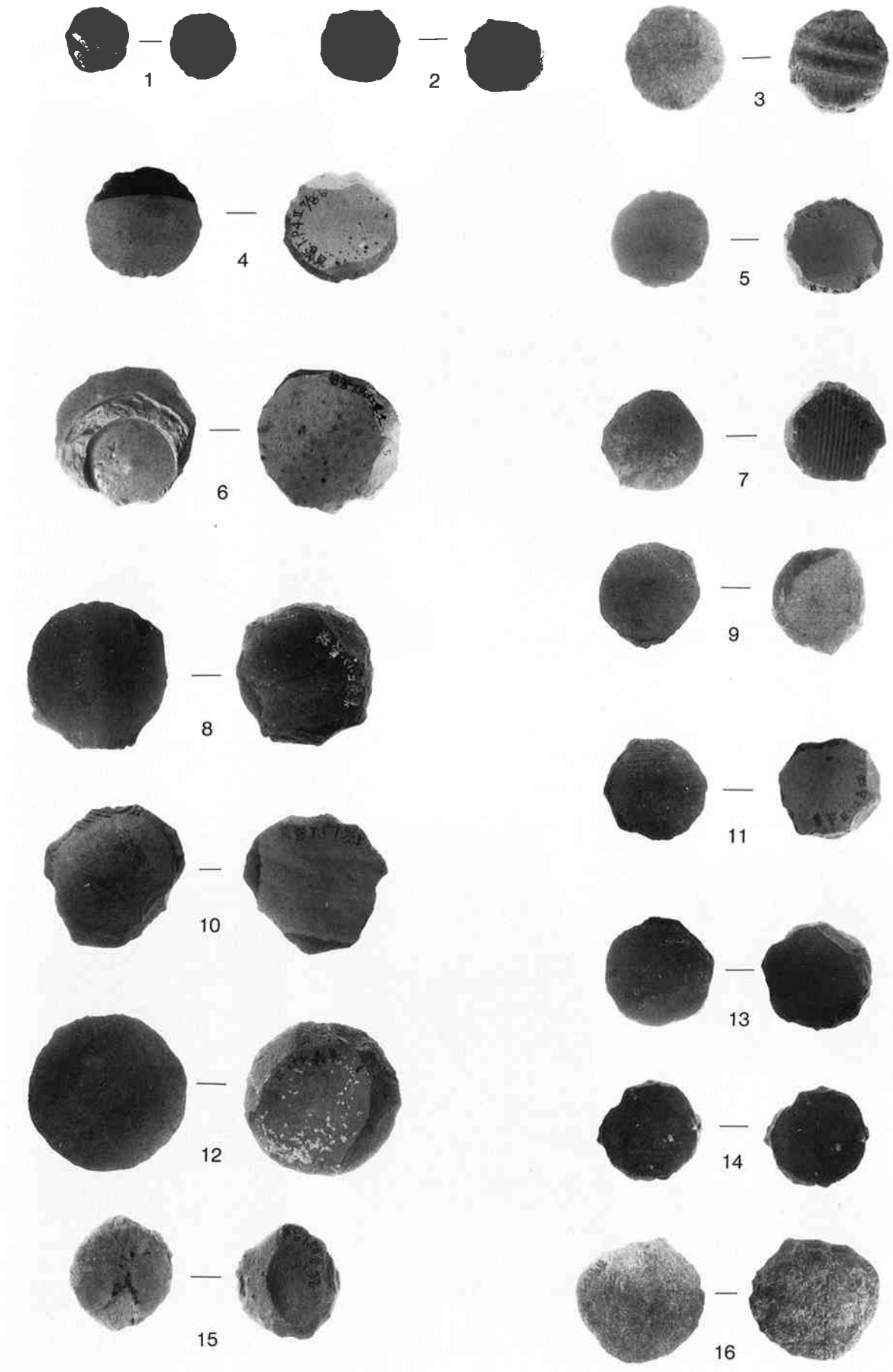
図版63　明朝系：軒丸瓦



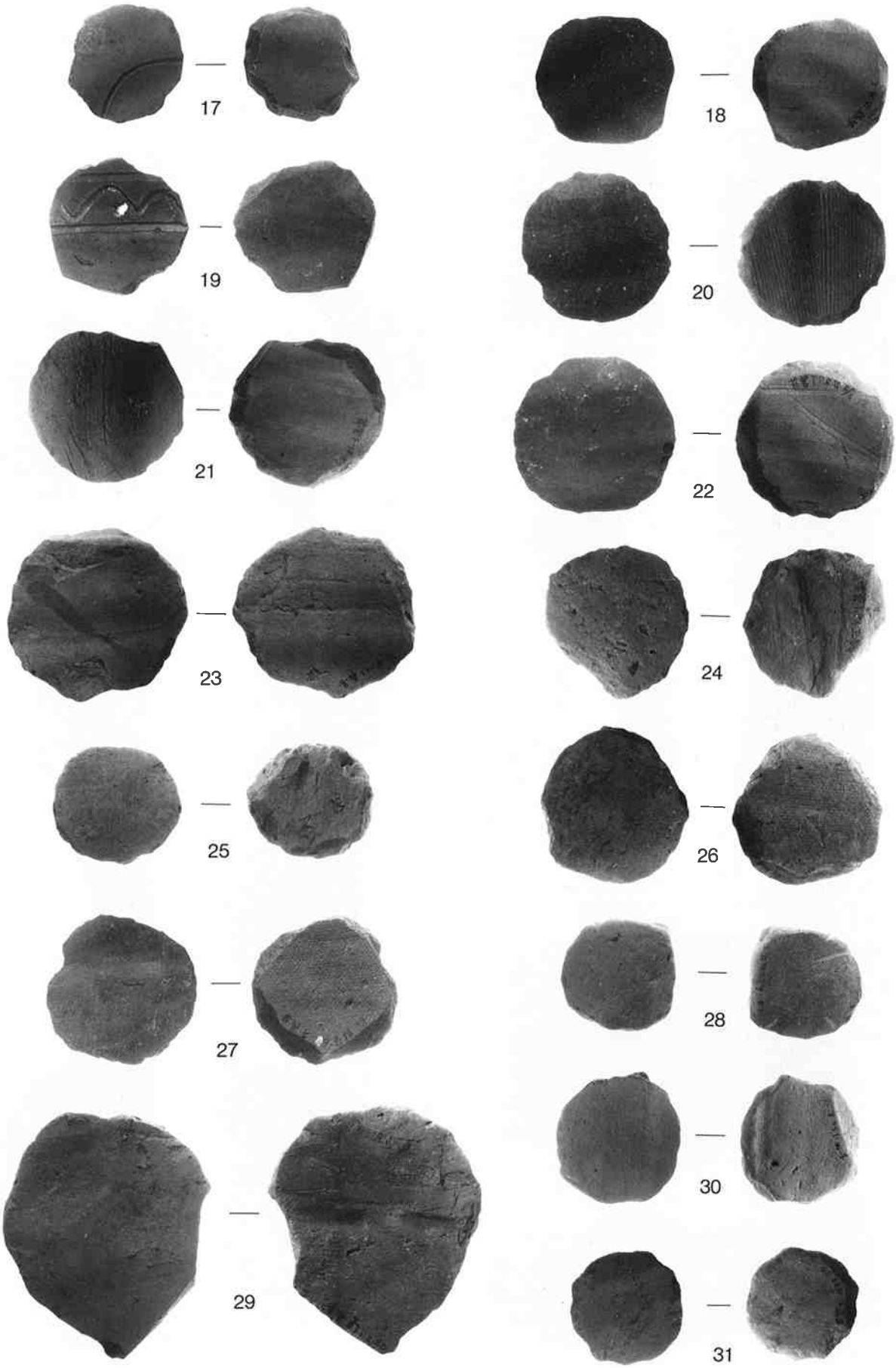
図版64　明朝系瓦：軒平瓦



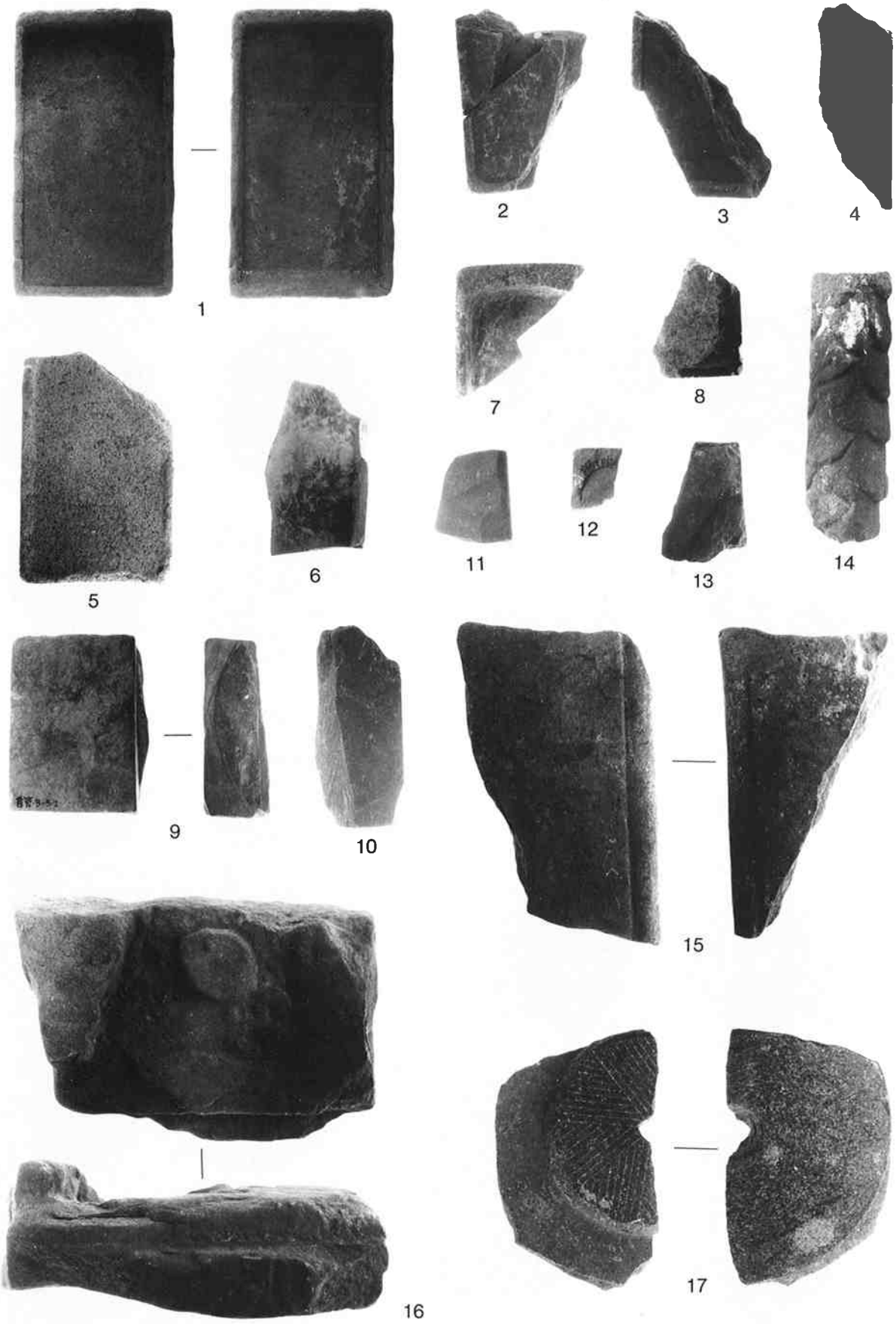
図版65　明朝系瓦：丸瓦1～3、平瓦4～6



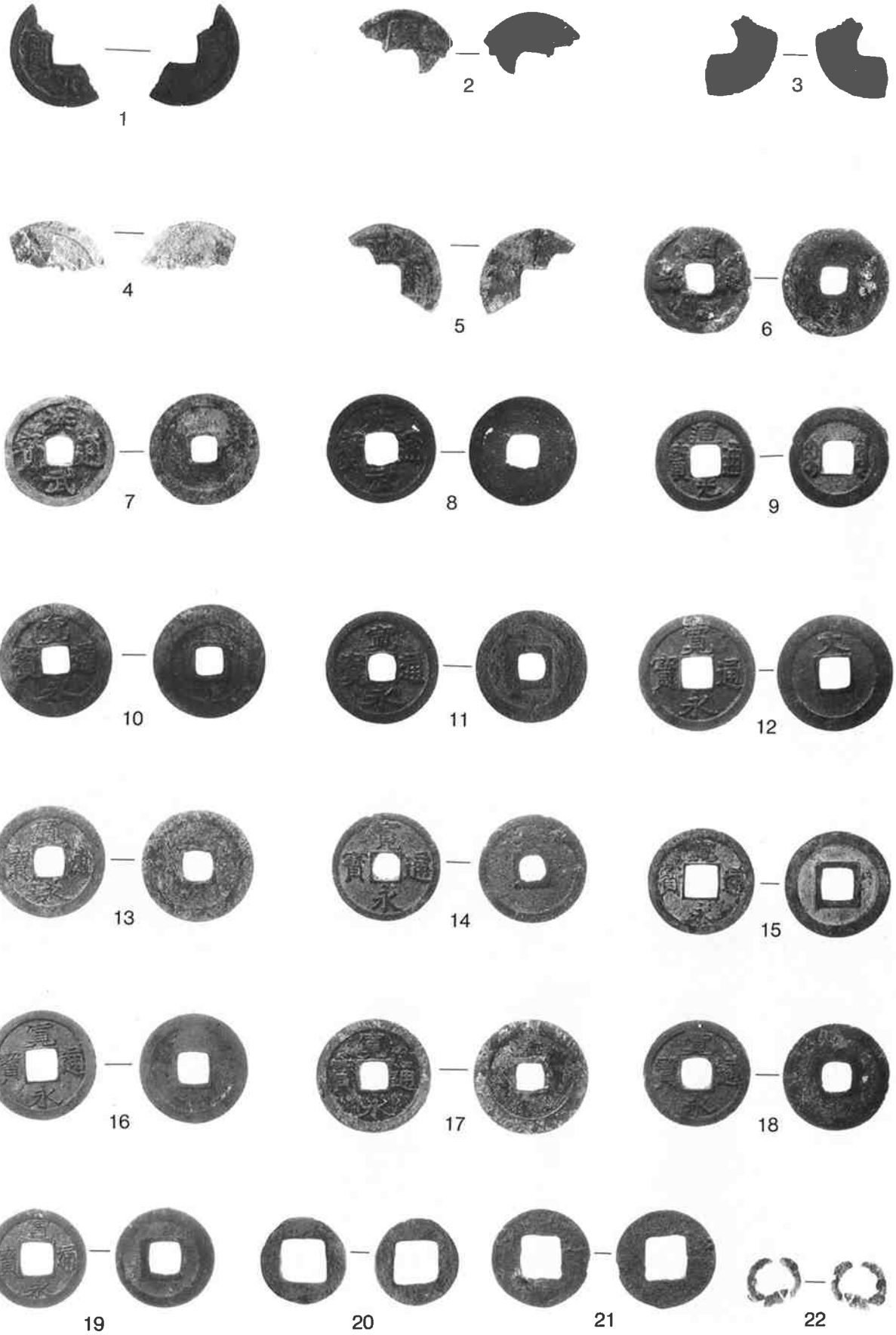
図版66　円盤状製品 1



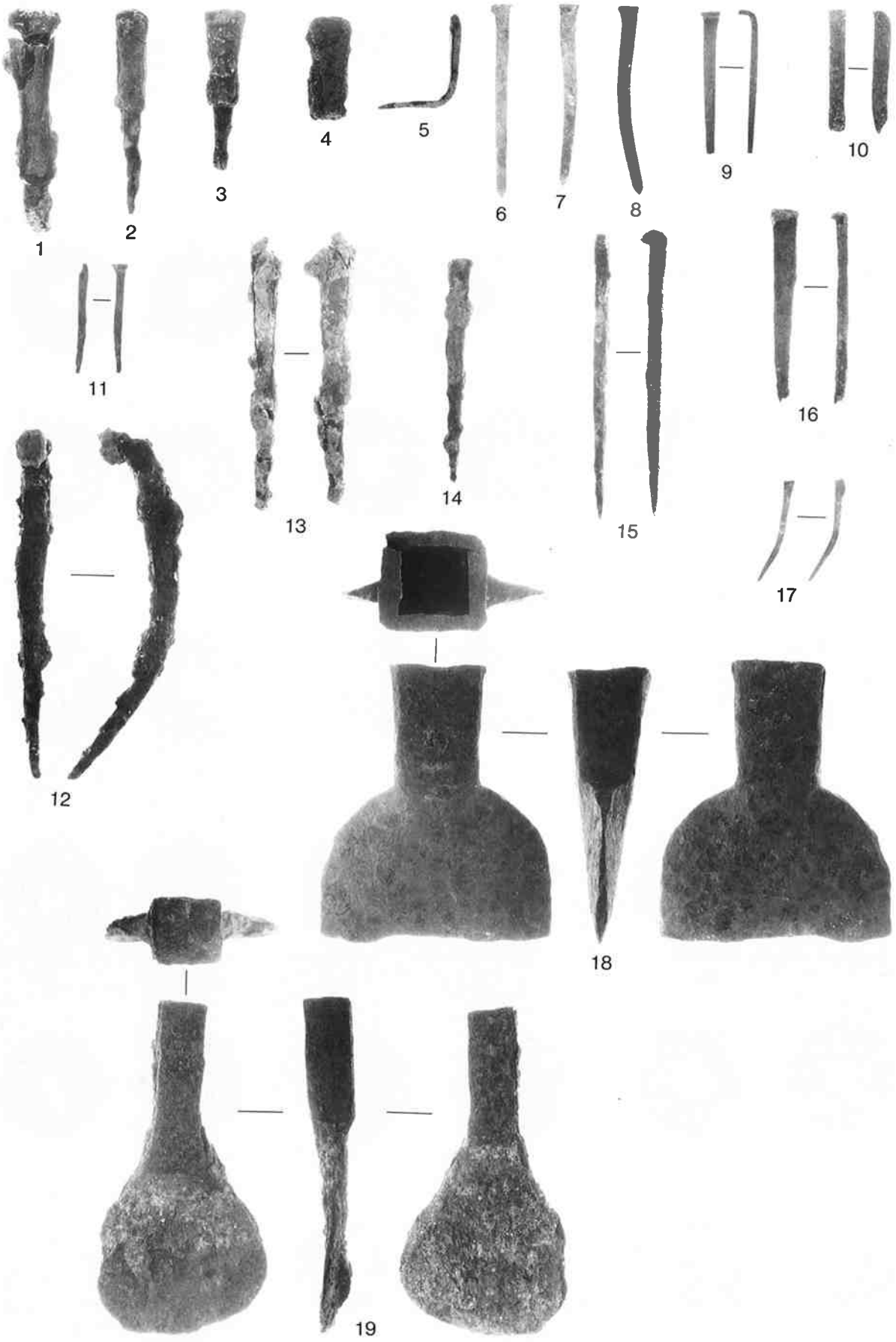
図版67　円盤状製品 2



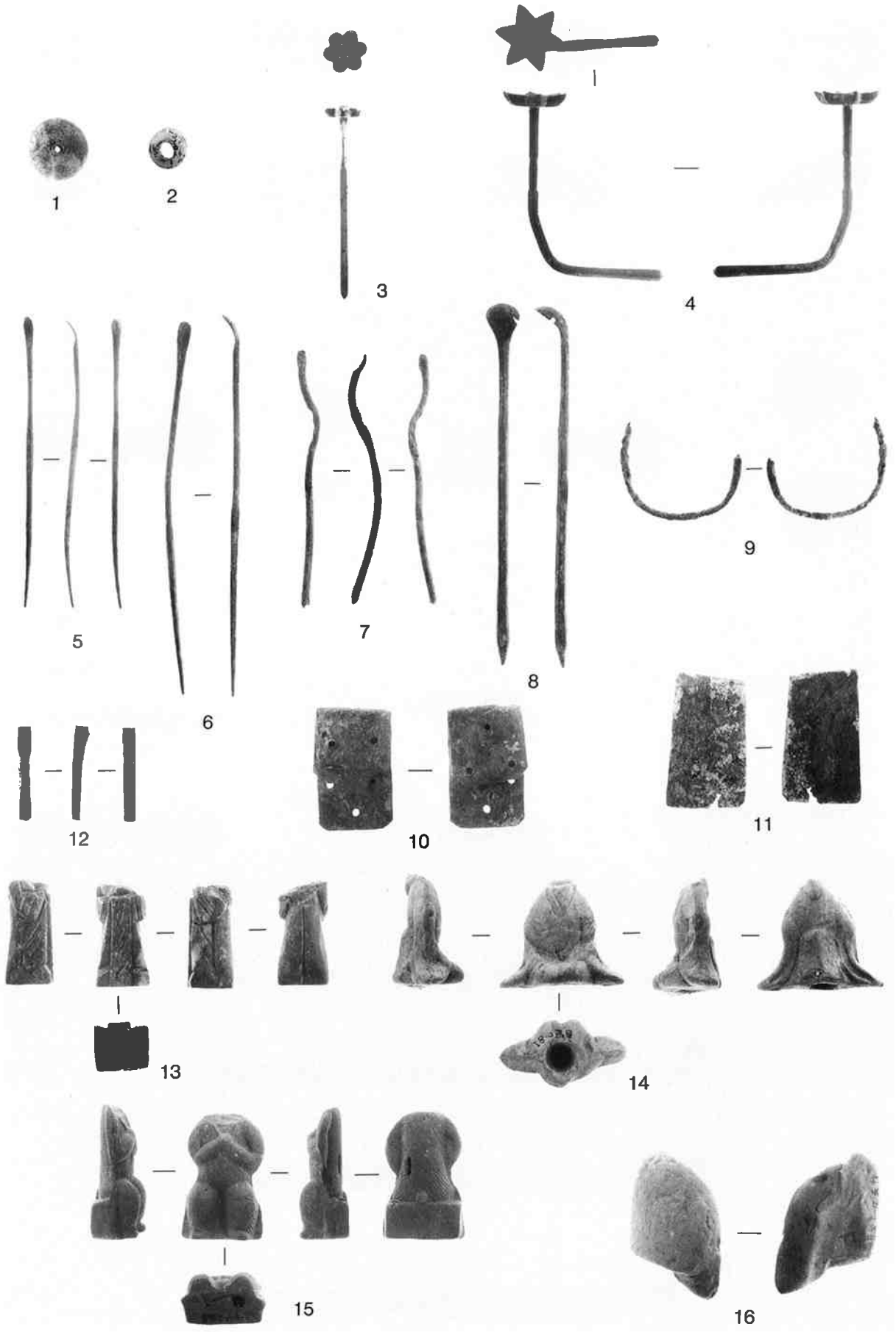
図版68　石製品及び石造製品



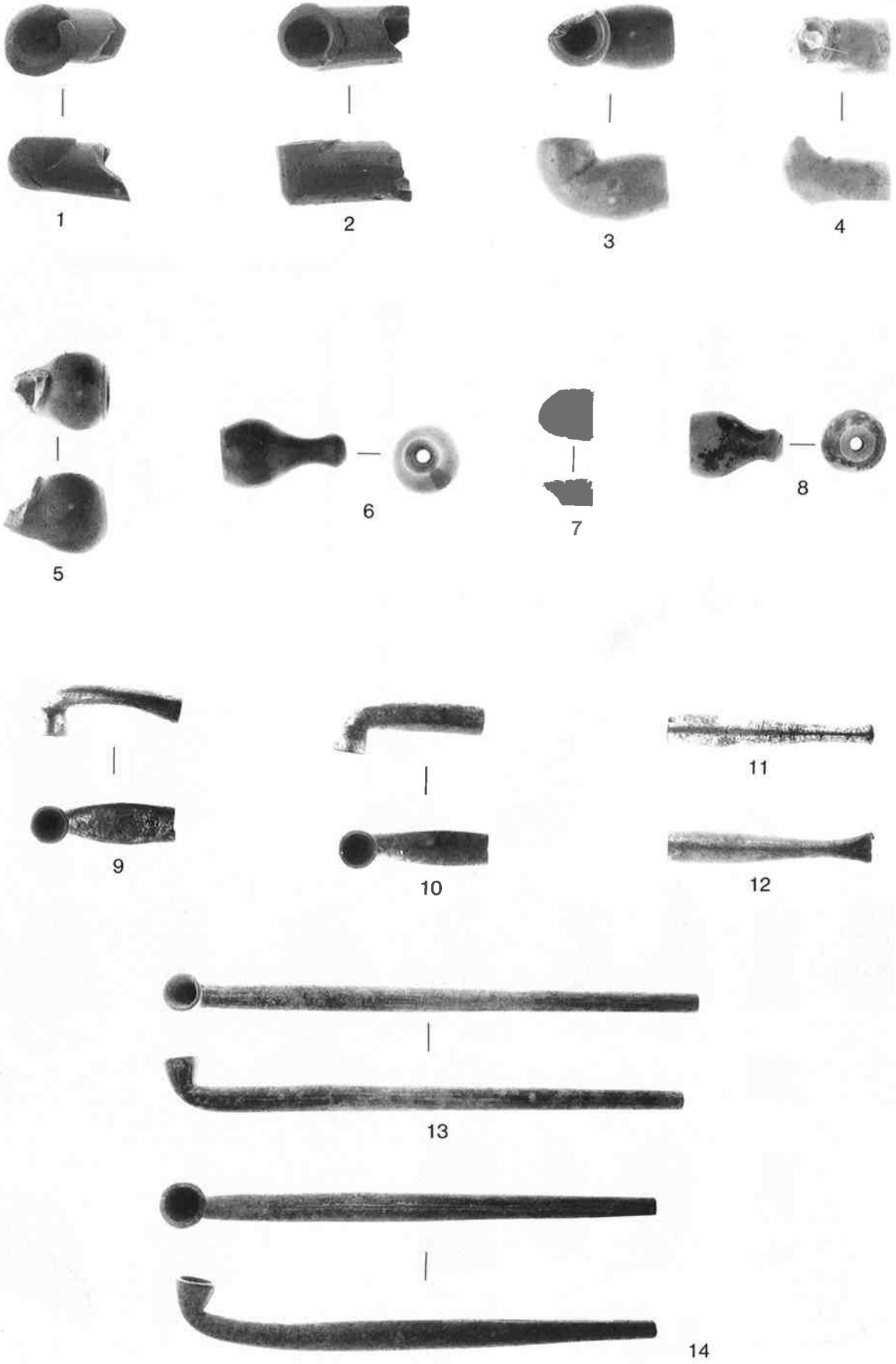
図版69　古銭



図版70　鉄製品及び銅製品

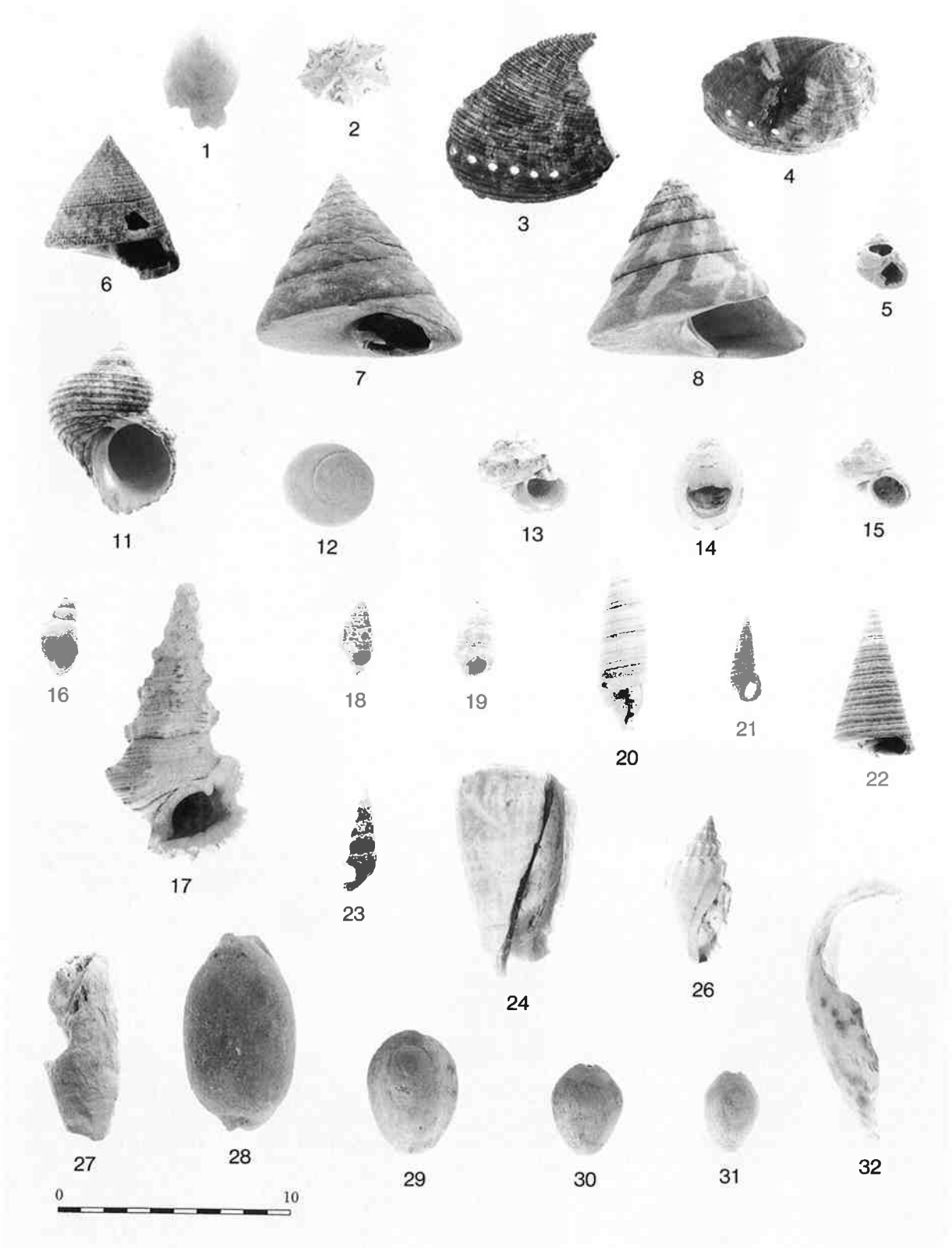


図版71　玉・簪・器種不明の金属製品・人形・土錘



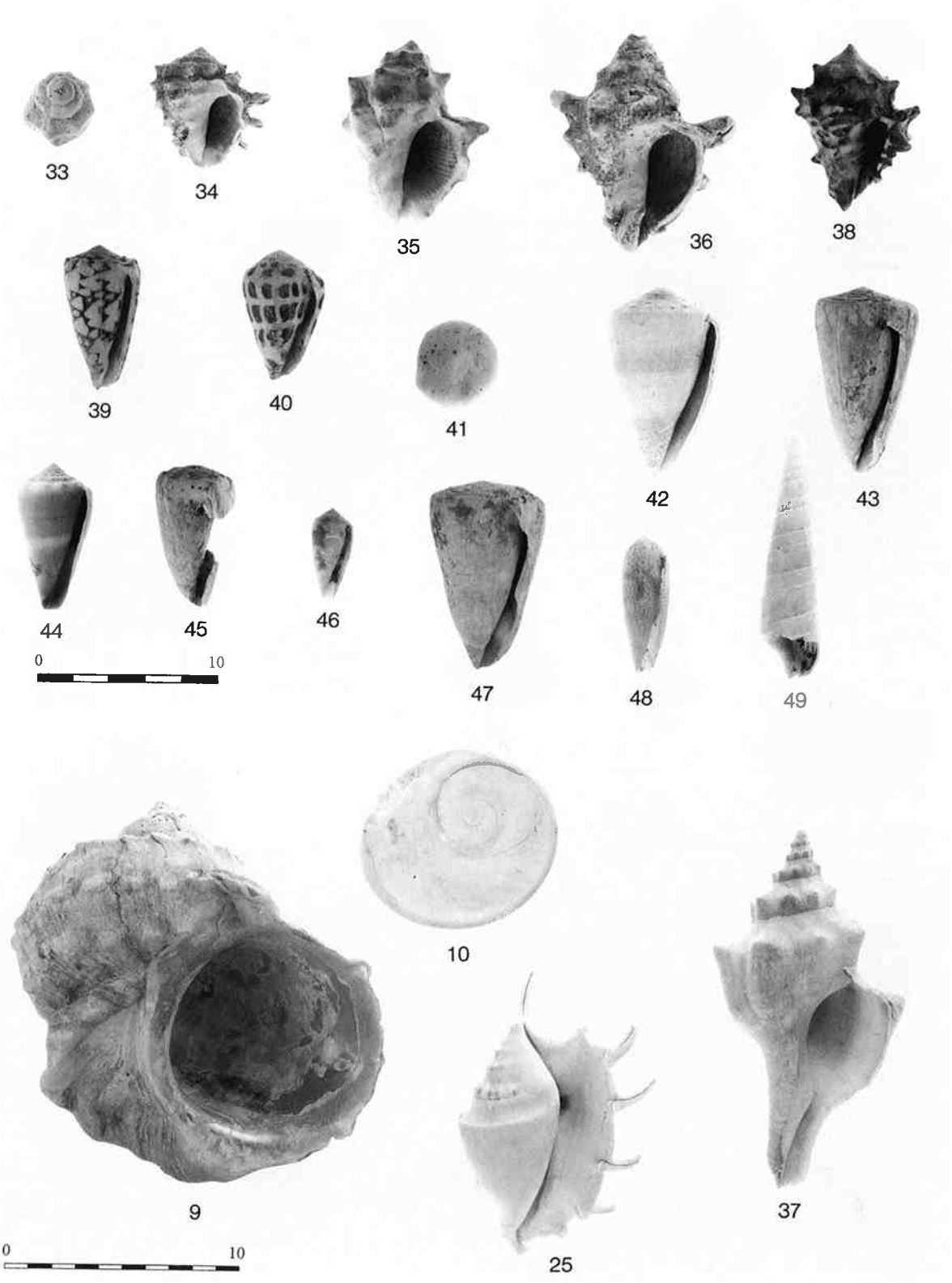
図版72　煙管

図版73　骨製品



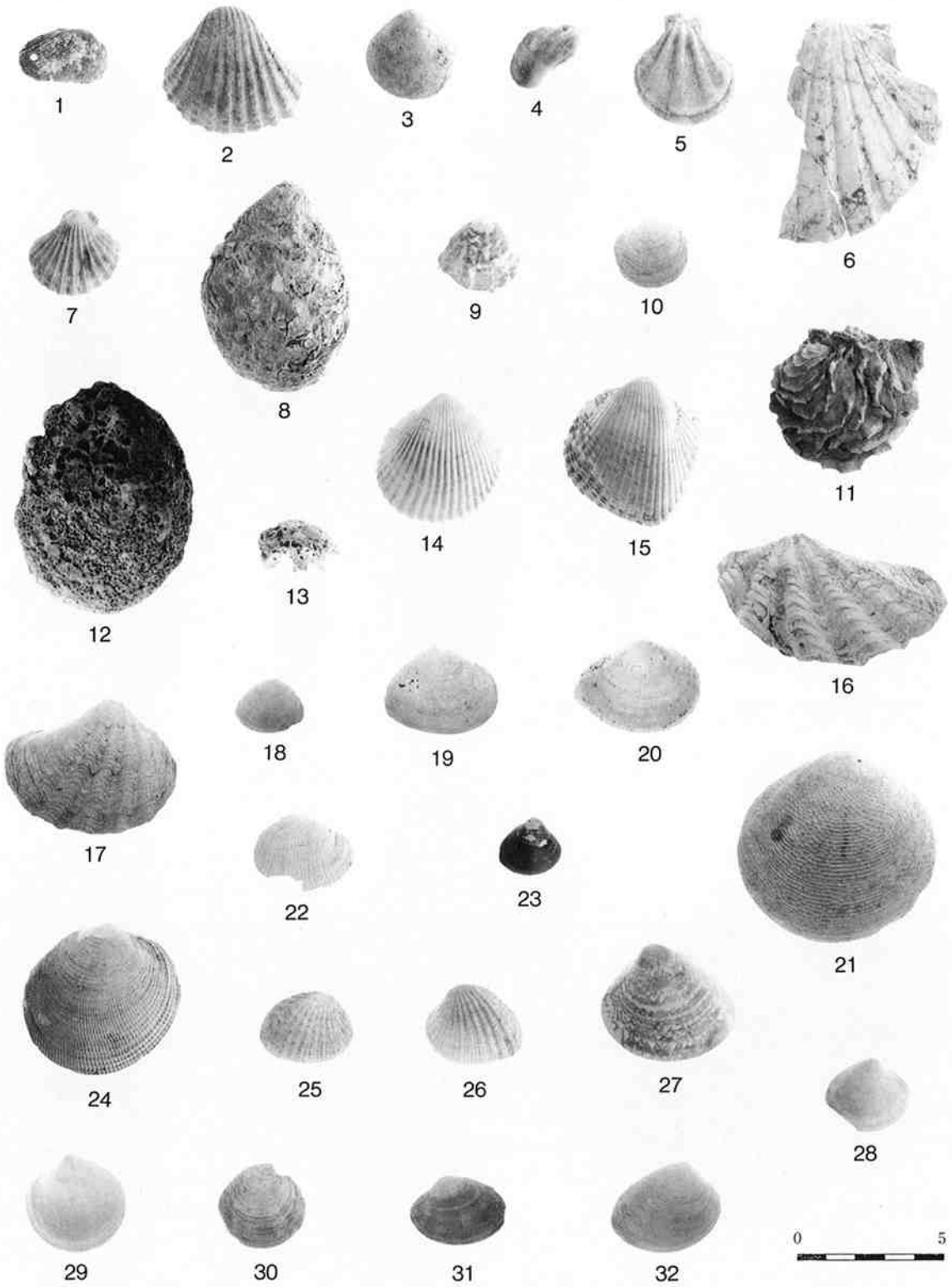
1. オオベッコウガサガイ　2. リュウキュウウノアシガイ　3. フクトコブシ　4. イボアナゴウ　5. オキナワイシダタミ　6. ニシキウズガイ
7. ギンタカハマ　8. サラサバテイラ　11. チョウセンサザエ　12. チョウセンサザエの蓋　13. カンギク　14. アマオブネガイ
15. オキナワヤマタニシ　16. トウガタカワニナ　17. オニノツノガイ　18. ウミニナカニモリ　19. クワノミカニモリ
20. ナガタケノコカニモリガイ　21. カワアイガイ　22. センニンガイ　23. イボウミニナガイ　24. マガキガイ　26. オハグロガイ
27. 種不明　28. ホソヤクジマダカラ　29. ハナマルユキ　30. キイロダカラ　31. ハナビラダカラ　32. ホシダカラ

図版74　貝類遺存体(巻貝１)



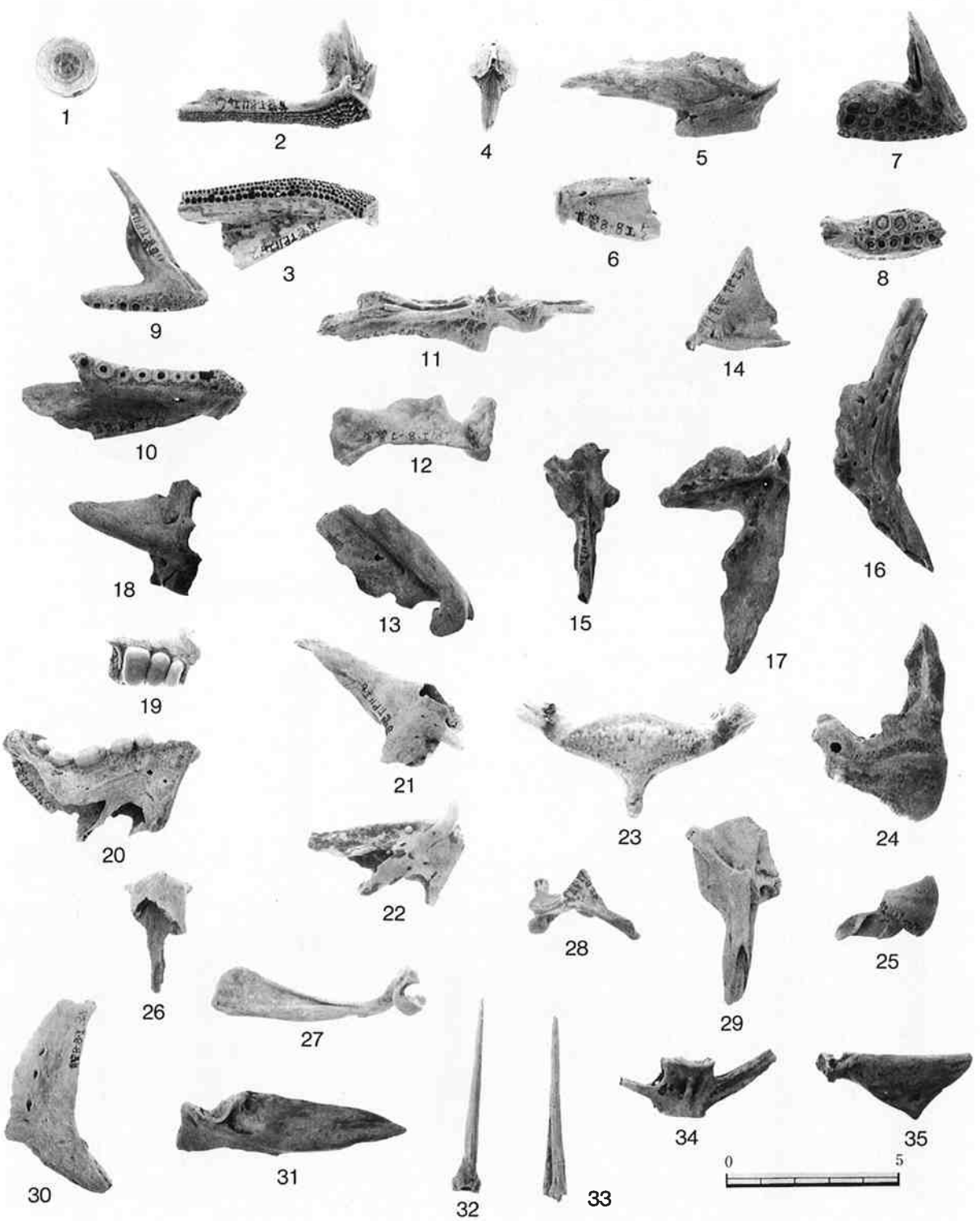
33. 種不明　34. アカイガレイシガイ　35. ツノレイシガイ　36. シラクモガイ　38. コオニコブシガイ　39.クロミナシガイ
40. マダライモガイ　41. アカシマミナシガイ　42. ヤナギシボリイモガイ　43. サラサミナシモドキガイ　44. イボシマイモガイ
45. ゴマフィモガイ　46. アジロイモガイ　47. キヌカツギイモ　48. シロマダライモ　49. ベニタケガイ　9. ヤコウガイ
10. ヤコウガイの蓋　25. クモガイ　37. イトマキボラ

図版75　貝類遺存体(巻貝２)



1. ベニエガイ　2. ハイガイ　3. ソメワケグリ　4. リュウキュウヒバリ　5. ヒナギンチャク　6. イタヤガイ　7. 種不明
8. メンガイ　9. メンガイの一種　10. ウラツキガイ　11. ヒレインコガイ　12. シロザル　13. 種不明　14. リュウキュウザルガイ
15. カワラガイ　16. シラナミ　17. ヒメジャコ　18. イソハマグリ　19. ニッコウガイ　20. リュウキュウシラトリ　21. サメザラ
22. リュウキュウマスオガイ　23. タイワンシジミ　24. ヌノメガイ　25. ホソスジイナミガイ　26. アラスジケマンガイ
27. ガマグリ　28. ユウカゲハマグリ　29. オキシジミ　30. オイノカガミ　31. アサリ　32. スダレハマグリ

図版76　貝類遺存体(二枚貝)



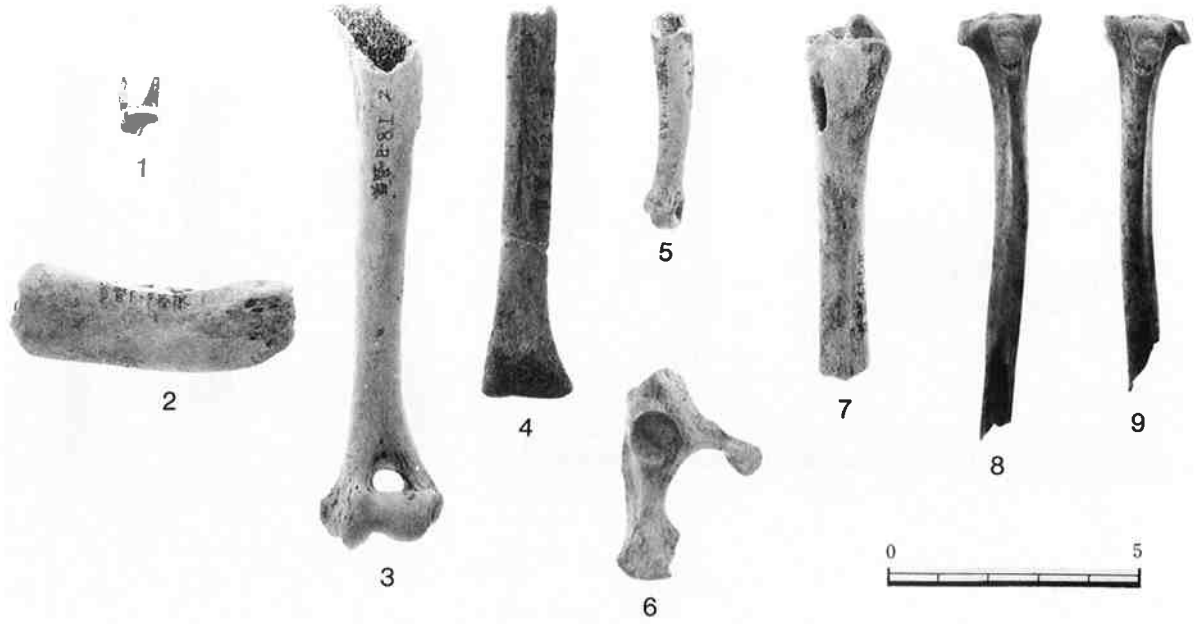
1. サメ　椎体　2. ハタ科(左)前上顎骨　3. ハタ科(左)歯骨　4. ハタ科(種不明)鋤骨　5. ハタ科　角骨　6. フエダイ科(右)歯骨
7. クロダ(左)前上顎骨　8. クロダイ(右)歯骨　9. ハマフエフキ(左)前上顎骨　10. ハマフエフキ(左)歯骨
11. ハマフエフキ　副楔骨　12. ハマフエフキ(右)主上顎骨　13. ハマフエフキ(右)口蓋　14. ハマフエフキ(左)方骨
15. ハマフエフキ種不明(左)舌顎骨　16. ハマフエフキ(右)前鰓蓋骨　17. ハマフエフキ鰓蓋骨　18. ハマフエフキ(右)角骨
19. ヨコシマクロダイ(左)前上顎骨　20. ヨコシマクロダイ(左)歯骨　21. コブダイ(右)前上顎骨　22. コブダイ(右)歯骨
23. コブダイ　下咽頭骨　24. ブダイ科　種不明(右)前上顎骨　25. ブダイ科　種不明(右)歯骨　26. 種不明　鋤骨
27. 種不明A(左)主上顎骨　28. 種不明B(右)主上顎骨　29. 種不明(右)舌顎骨　30. 種不明(右)前鰓蓋骨　31. 種不明　角骨
32. 種不明　背鰭棘　33. 種不明　臀鰭血管間棘　34. 椎体　35. 種不明　下尾軸骨

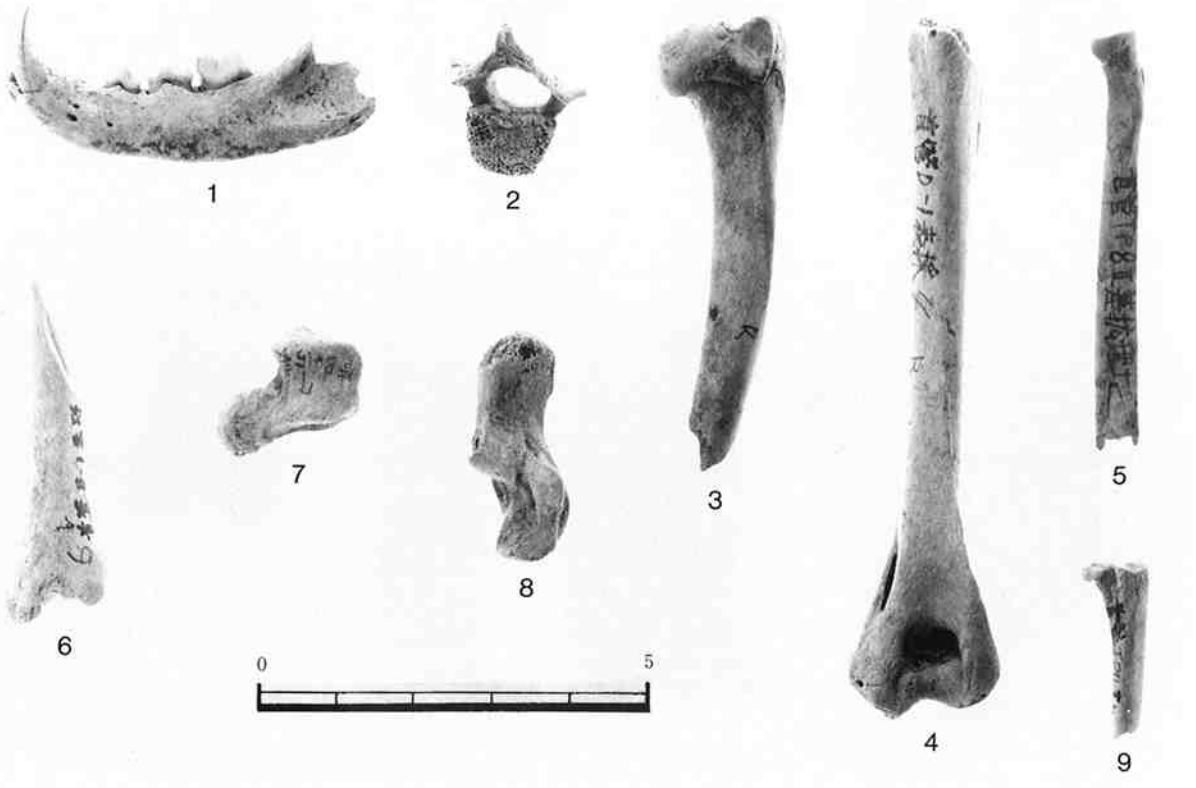
図版77　獣類遺存体(魚骨)

上段　カ　メ　背甲板
鳥　類　1. 左大腿骨近位部(大)　2. 右大腿骨近部位(小)　3. 右肋骨
ノコギリガサミ　1. 不動指　2. 可動指

下段　ニワトリ　1. 胸椎　第2～5　2. 頸椎　3. 烏口骨(左)完形　4. 烏口骨(右)完形　5. 肩甲骨(左)骨体～遠位端　6. 上腕骨(左)近位部～遠位端　7. 上腕骨(左)近位端～骨体　8. 尺骨(右)近位部～遠位端　9. 大腿骨(右)完形　10. 脛骨(左)完形　11. 中手骨(右)骨体～遠位端　12. 中足骨(左)近位端　13. 中足骨(右)骨体～遠位端　14. 中足骨(右)骨体～遠位部

図版78　獣類遺存体(上：カメ・鳥類・ノコギリガサミ・下：ニワトリ)

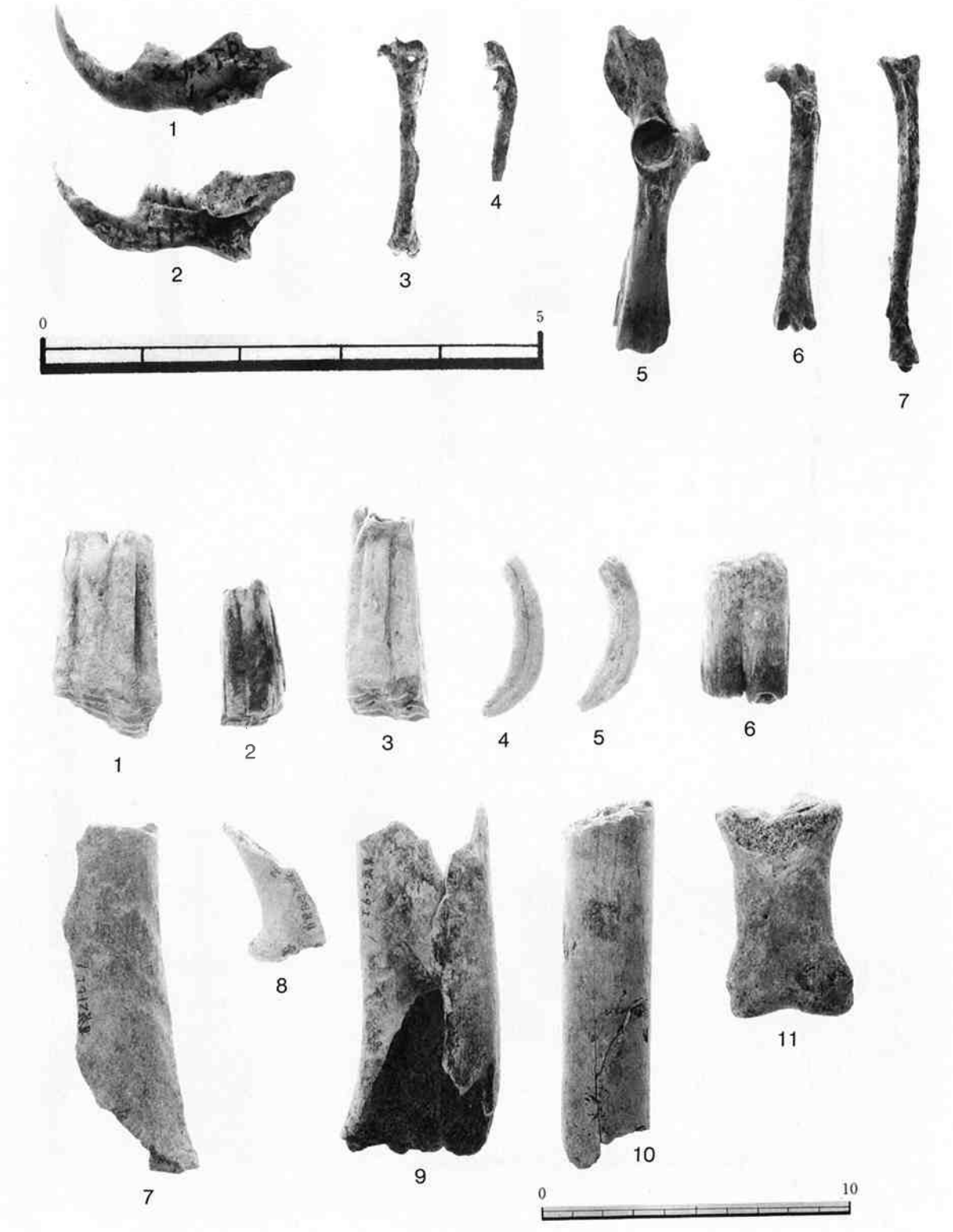




上段　イ　ヌ　1. 上顎骨(左)M^3　2. 下顎骨(左)　3. 上腕骨(左)近位部～遠位端　4. 橈骨(左)近位端～骨体
5. 中手骨(左)骨体～遠位端　6. 寛骨(右)　7. 大腿骨(右)近位部～骨体　8. 脛骨(右)近位端～骨体　9. 脛骨(左)近位端～骨体

下段　ネ　コ　1. 下顎骨(左)　2. 胸椎　3. 上腕骨(右)近位部～骨端　4. 上腕骨(右)近位部～遠位端　5. 橈骨(右)近位部～骨体
6. 脛骨(左)遠位端　7. 距骨(右)　8. 踵骨(右)　9. 中足骨(?)(右)近位端

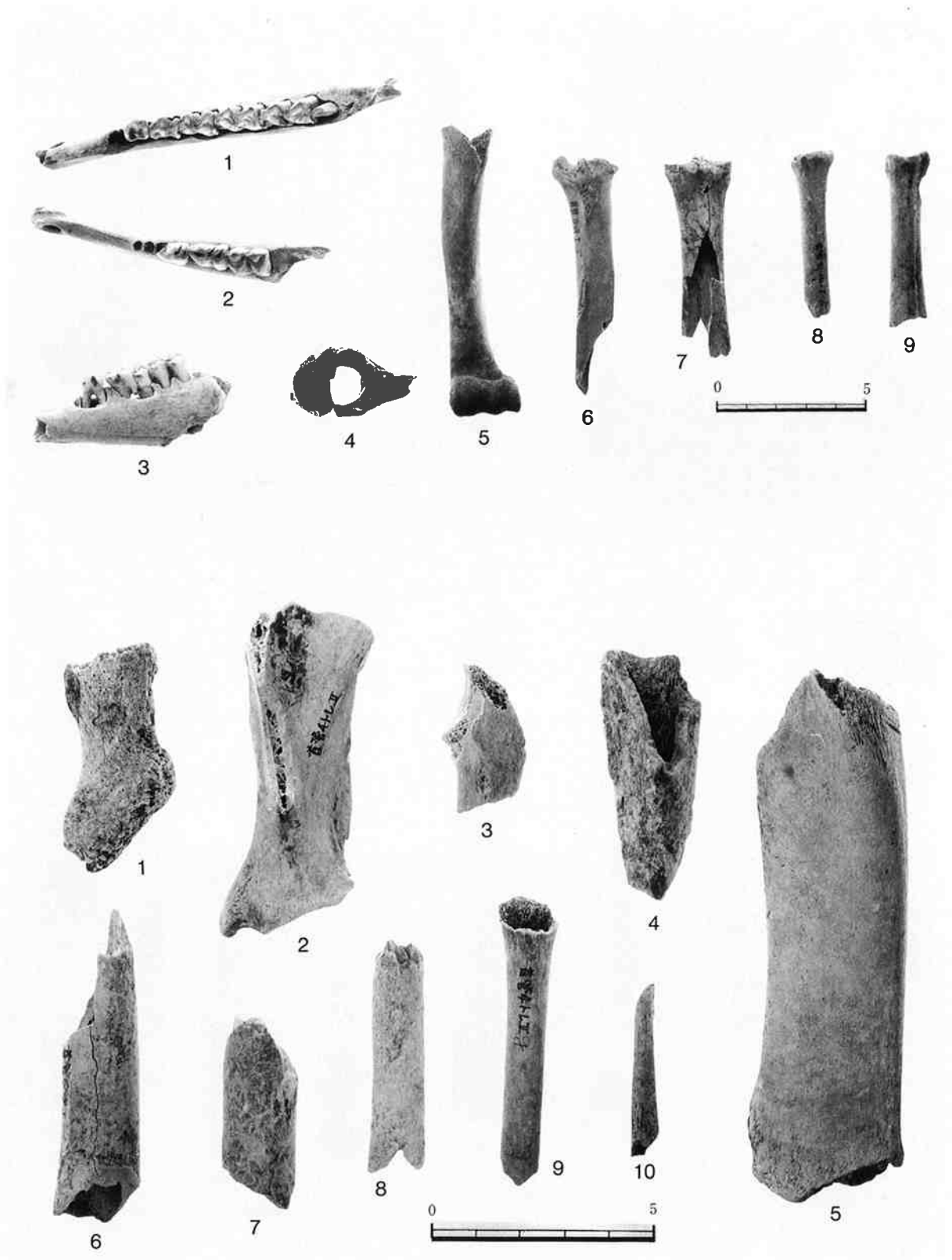
図版79　獣類遺存体(上：イヌ・下：ネコ)



上段　ネズミ　1. 下顎骨(右)　2. 下顎骨(左)　3. 上腕骨(右)　4. 尺骨(左)　5. 寛骨(左)　6. 大腿骨(右)　7. 脛骨(右)

下段　ウ　マ　1. 上顎骨(右)P^2　2. 上顎骨(左)P^3　3. 上顎骨(右)M^1　4. 下顎骨(左)I_1　5. 下顎骨(右)I_2　6. 下顎骨（左）M_3　7. 肩甲骨(右)破片　8. 寛骨(左)坐骨部　9. 大腿骨(右)遠位部　10. 中足骨(左)　11. 基節骨

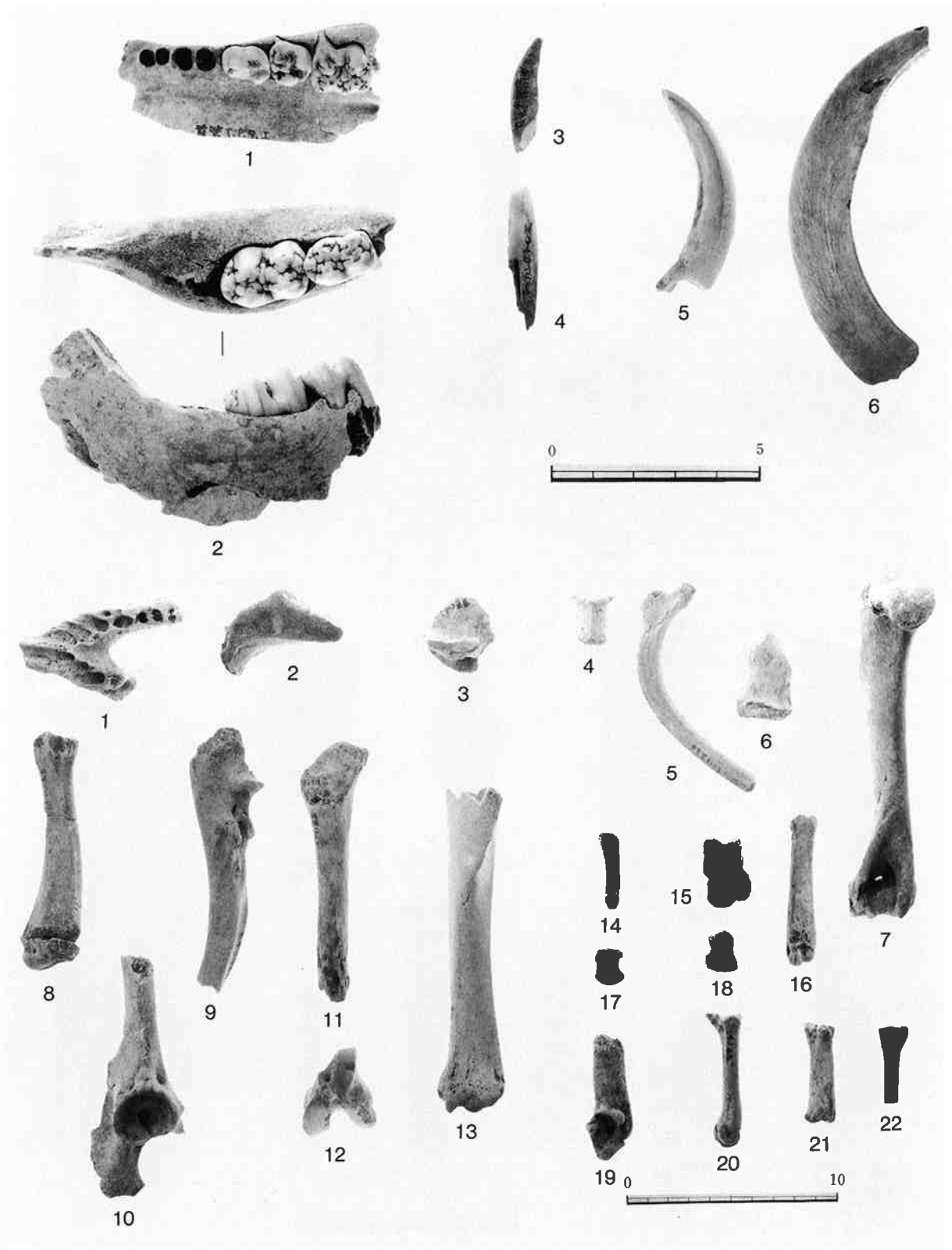
図版80　獣類遺存体(上：ネズミ・下：ウマ)



上段　ヤギ　1. 下顎骨(右)$P_{3\cdot4}M_{1\cdot2\cdot3}$　2. 下顎骨(左)$P_{3\cdot4}M_{1}$　3. 下顎骨(左)$dm_{3\cdot4}M_{1}$
5. 上腕骨(左)骨体～遠位端　6. 橈骨(左)近位端～骨体　7. 中手骨(右)近位端～骨体
8. 中足骨(ヤギ？)　9. 中足骨(ヤギ？)

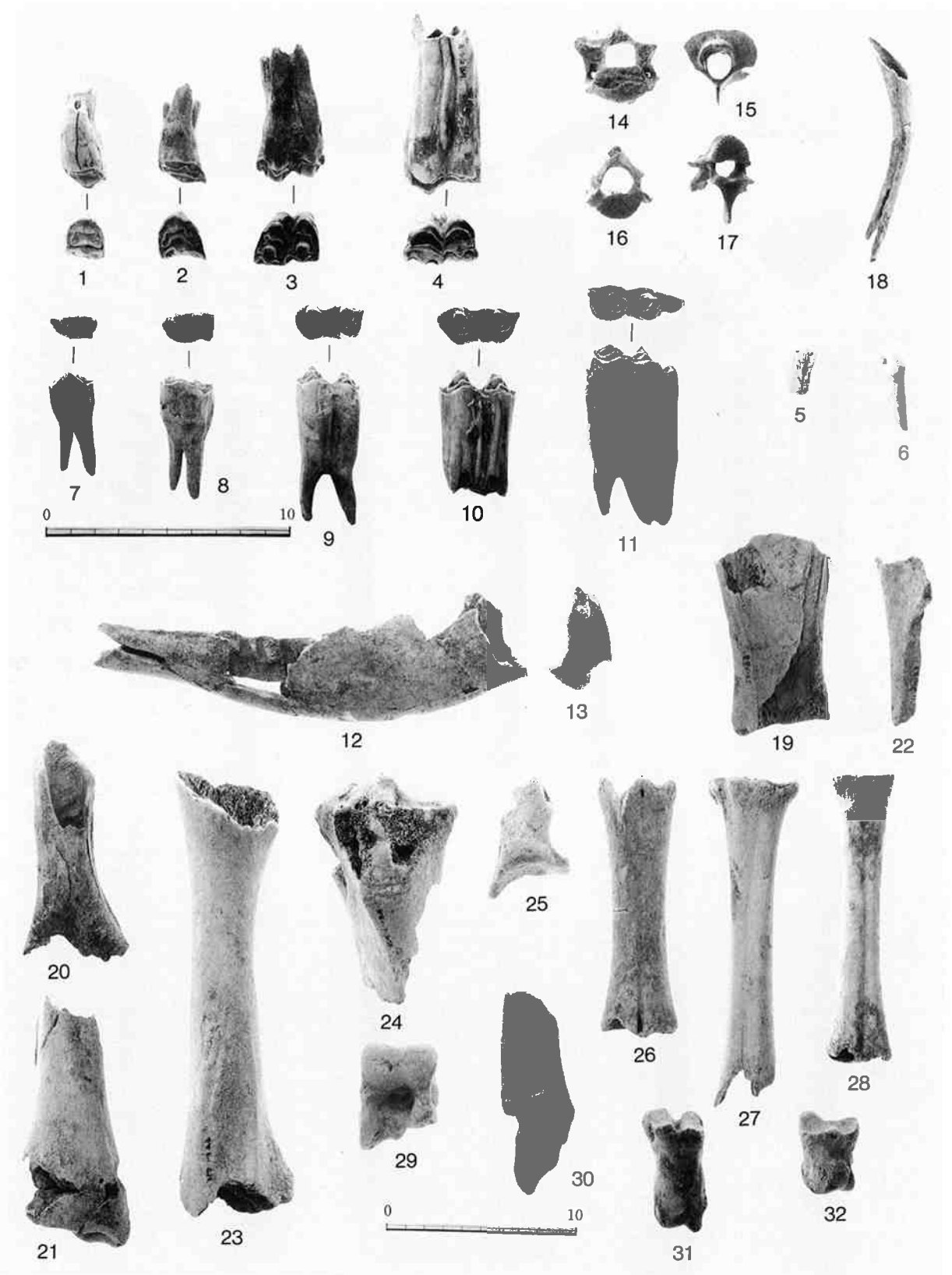
下段　ブタ・シカ・種不明　1. ブタ　右腸骨翼基部　2. シカ　左肩甲骨　3. ～10. 種不明

図版81　獣類遺存体(上：ヤギ・下：ブタ・シカ・種不明)



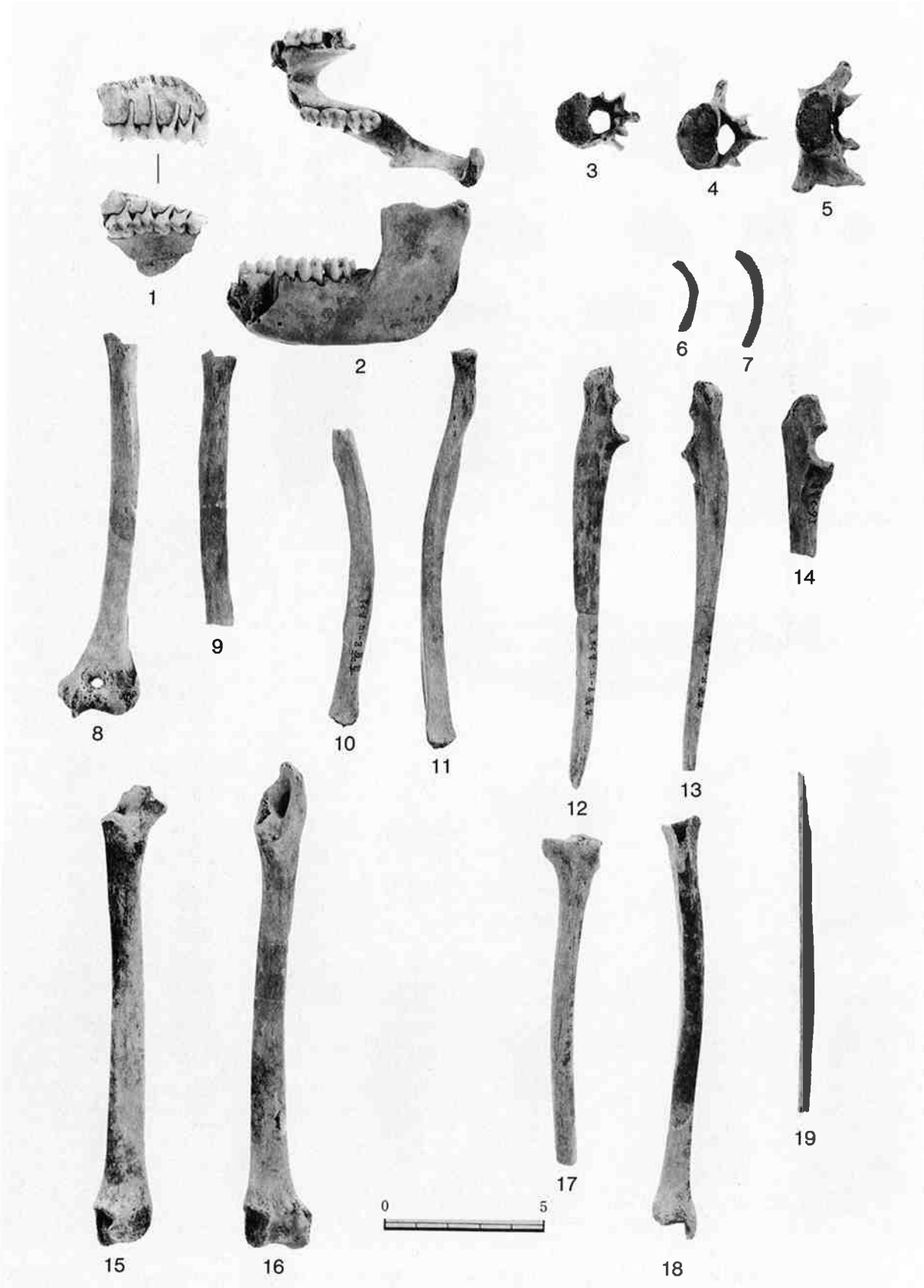
上段　イノシシ（歯） 1. 上顎骨(左)$P^{3\cdot4}\cdot M^{1}$　2. 下顎骨(右)$M_{1\cdot2}$<3>　3. 上顎骨(右)I^{2}　4. 下顎骨(左)I_{2}　5. 下顎骨(左)犬歯♂
6. 下顎骨(右)犬歯♂
下段　イノシイ　1. 下顎　2. 頭頂骨(右)　3. 側頭骨頬骨突起(右)　4. 腰椎片　5. 肋骨(左)　6. 肩甲骨(左)骨体～遠位端
7. 上腕骨(左)完形　8. 橈骨(右)完形　9. 尺骨(右)近位部～遠位部　10. 寛骨(右)臼部　11. 大腿骨(左)近位部～骨体
12. 大腿骨(右)遠位骨端のみ　13. 頸骨(左)近位部～遠位端　14. 中手骨Ⅱ(右)近位部～遠位部　15. 距骨(右)　16. 中手骨Ⅲ(右)完形
17. 橈側手根骨(右)　18. 中間手根骨(右)　19. 踵骨(右)　20. 中足骨Ⅲ(欠)(左)完形　21. 中足骨Ⅳ(右)近位端～遠位部　22. 腓骨(右)遠位部

図版82　獣類遺存体（イノシシ歯・下：イノシシ）



1. 上顎骨(右)P^2　2. 上顎骨(右)P^4　3. 上顎骨(左)M^1　4. 上顎骨(左)M^2　5. 下顎骨(右)I　6. 下顎骨(左)I_2　7. 下顎骨(左)P_3　8. 下顎骨(左)P_4
9. 下顎骨(左)M_1　10. 下顎骨(右)M_2　11. 下顎骨(左)M_3　12. 下顎骨(左)　13. 筋突起(右)　14. 頚椎　15. 軸椎　16. 胸椎　17. 腰椎
18. 肋骨　破片　19. 肩甲骨(右)骨体　20. 上腕骨(左)遠位部　21. 橈骨(右)骨体～遠位端　22. 尺骨(右)骨体　23. 大腿骨(左)近位部～遠位部
24. 脛骨(右)近位端　25. 寛骨恥骨(右)　26. 中手骨(左)骨体　27. 中足骨(右)遠位端～骨体　28. 中足骨(左)近位部～遠位部　29. 距骨(右)
30. 踵骨(右)　31. 基節骨(左)　32. 中節骨

図版83　獣類遺存体(ウシ)



1. 上顎骨(右)♀　2. 下顎骨♀　3. 胸椎♀　4. 腰椎♀　5. 仙骨♀　6. 肋骨　7. 肋骨
8. 上腕骨♀　9. 上腕骨♀　10. 撓骨♀　11. 撓骨♀　12. 尺骨♀　13. 尺骨♀
14. 尺骨　近位部♂　15. 大腿骨♀　16. 大腿骨　17. 脛骨♀　18. 脛骨♀　19. 腓骨♀

図版84　獣類遺存体(ヤクシマザル)

付　　編

付　編

首里城跡管理用道路地区出土の獣類遺体について

京都大学霊長類研究所　毛利　俊雄

経　緯

首里城跡南斜面部発掘調査によって出土したサル骨の同定・観察所見の執筆について、名古屋大学渡辺誠教授のご仲介をえて、沖縄県教育庁文化課盛本勲氏よりご依頼をうけた。その結果を報告する。

観察した骨は中ぐらいの大きさの菓子箱に入った59片（うち２片が接着できたので、現状は58片）の動物骨である。ほとんどはクリーム色を呈し、焼かれた形跡や顕著なカットマーク、切削痕などは観察されない。残っている骨はしっかりしているが、いずれも破片か、または欠けたところがある骨で、完全な骨は含まれていない。

イヌ、ウマ、ブタ、ニホンジカ、ヤギ、鳥類（２種？）など多様な動物の骨にまじって、２個体のサルに由来する骨、合計37片が検出された。これらのサル骨は、高知医大吾妻健教授によるミトコンドリアDNAの増幅・分析により、ヤクシマザル*Macaca fuscata yakui*であると同定された。

ヤクシマザル*Macaca fuscata yakui*の出土部位

10歳前後の成体メス１個体（個体Ａ）に由来するとおもわれる骨は胸椎４片、腰椎２片、仙骨（第１仙椎の頭側半）、肋骨14片（すべて長さ３センチ未満の破片）、右上顎骨、下顎骨、（以下、左右のそろった）上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨の合計35片である。歯は、右上顎骨の破片に植立する犬歯から第２大臼歯までの５本、下顎骨に植立する左側大臼歯３本と右側第４小臼歯・第１大臼歯の上下顎合計10本と下顎右第２大臼歯の近心歯根が残っている。

個体Ａの歯の萌出時期と咬耗の関係をみると、野生ザルより飼育ザルのものに類似している。したがって年齢推定は、飼育ザルの歯の咬耗との比較によっておこなった。

個体Ａとは別の個体（個体Ｂ）に由来する左右の尺骨がある。左右とも近位端をふくむ長さ５センチ程度の破片である。肘頭の骨端が未癒合なので、未成熟個体由来であるが、個体Ａの尺骨くらべると、すでにやや大きい。個体Ｂもやはりヤクシマザルであるとすれば、５～６歳のオスである。

個体Ａの残存部位は全身にわたっているので、埋葬され、その後攪乱をうけたものと解釈することも可能である。ただし、かなり細かな肋骨の破片が出土しているのに、手・足・尾の骨がまったく出土していないのは多少不自然な印象である。

個体Ｂは、フック状の特異な形態をしめす尺骨近位部が、左右そろって、ほぼ同じ大きさの破片として、しかも他の部位をまったく伴わずに残っていることに強い選択性、意図を感じさせられるが、いっぽうで、割れ目は左右とも、白骨化の後に折れた状態で、とくに人為を示唆していない。

伴出した骨

イヌ*Canis familiaris*。未成熟個体の左上腕骨の骨幹、近位3/4程度。残存長は82ミリ。三角筋付着部の発達が微弱であるのが気になる。あるいは動物種、部位を誤認しているのかもしれない。

ウマ*Equus caballus*。左中足骨の骨幹、残存長194ミリ。小型のウマのようである。

ブタ*Sus domesticus*。右の腸骨翼基部（腸骨の、寛骨臼に近い狭窄部）、残存長52ミリ。

ニホンジカ*Cervus nippon*（亜種不明）。左肩甲骨、残存長73ミリ。関節窩の背側1/3、烏口突起などをふくむ破片である。

ヤギ*Capra aegagrus*。中位の胸椎２個。１個は棘突起の大半などを欠くほかは、ほぼ完全である。もう１個は棘突起の過半、椎体尾側骨端などを欠く。これらは同一個体の連続する胸椎のようである。中足骨２個。ともに遠位端を欠く。

鳥類。残存部の長さ４センチ前後の大腿骨近位部２片と肋骨１本。種の同定はできない。大腿骨近位部２片は大きさがことなり、大きいほうは左側で、近位端の横径27ミリ、前後径17ミリ。小さいほうは右側で、近位端の横径21ミリ、前後径不明である。ちなみに市販ブロイラー（ニワトリ*Gallus gallus*の若鳥）の大腿骨近位端は横径23ミリ、前後径16ミリ程度である。骨化の程度は、より小さな右大腿骨のほうがむしろすすんでいて、完成に近づいている。いっぽう、大きいほうの左大腿骨では、まだ市販ブロイラー程度の状態にとどまっている。

肋骨は右側で、椎骨にちかい部位で折れている。遠位端は破損していない。残存長45ミリ。市販ブロイラーの肋骨よりやや細い。上記の右大腿骨と同程度の大きさの鳥に由来するものとおもわれる。この肋骨は他の出土骨にくらべ、目立って色が暗い。

動物種不明の肋骨。ニホンジカ大の動物の肋骨、左右１片づつ計２片。残存長はそれぞれ約６センチと約５センチ。太さも同程度で、一方の破断面にむかって急に幅が広くなるという特徴を共有しているので同一種の動物に由来するもののようである。

動物種も部位も不明の骨。以下の８片については動物種も部位も同定することができなかった。仮にａ～ｈとして記述する。

ａは残存長32ミリで、関節面をもつ破片。いくつかの哺乳類の寛骨臼、踵骨載距突起、尺骨近位部、椎骨弓、指の末節骨などと比較したが、該当する部位をみいだすことはできなかった。

ｂはヒトの脛骨ぐらいの太さの長管骨骨幹の破片で、残存長は102ミリ。横断面は三角形をなし、長軸にそって強く湾曲する。かなり際立った特徴をもっているが、同定できなかった。

ｃ～ｈは、すべて残存長５センチ前後の長管骨骨幹の破片である。

ｃはヒトの太めの尺骨の骨幹近位部に形状、大きさが類似するが、一致しない。

ｄは横断面がややＤ字形に似ている。横断面の長径は17ミリ、短径は13ミリ。

ｅは横断面が不正四角形（僧帽形）を呈し、稜は４本ともきわめて鈍い。横断面の長径は17ミリ。

ｆは横断面が、楕円形を少しばかりカマボコ形に近づけた形である。横断面の長径は12ミリ、短径は９ミリである。

ｇは一端に未癒合の骨端面を残しているので、未成熟個体に由来するものである。大きさ、形状はヒト成人の尺骨遠位部にやや類似する。

ｈは横断面が円をやや不正三角形に近づけた形である。横断面の直径は５～６ミリである。一方の破断面では緻密質の厚さが１ミリ弱と薄い。

貴重な骨を観察する機会をあたえてくださった盛本勲、渡辺誠の両氏、同定にあたって親切な助言をたまわった吾妻健、茂原信生、相見満、本郷一美、国松豊、中井將嗣の諸氏に深く感謝いたします。

ミトコンドリアDNA変異を用いた種判別：沖縄県首里城出土マカク古骨と現生種の比較

毛利　俊雄[1)]　　吾妻　健[2)]
石神　盛敏[3)]　　川本　芳[4)]

はじめに

近年、人類学を中心に考古学の分析に遺伝子解析の技法を導入した研究が展開されるようになった(例えば、Paabo *et al*.,1988; Horai *et al*.,1991; Oota *et al*., 1995; Krings *et al*.,1997)。

こうした研究では、可変性の高いミトコンドリアDNAの特定領域の塩基配列比較がおこなわれることが多く、現存する遺伝子との比較により、系統や起源の問題が議論されている。ヒト以外の霊長類を対象にした研究では、現存する種内や近縁種間にみられる遺伝子変異の研究も十分におこなわれていないために、分子考古学的解析は進んでいないのが現状である。

今回、われわれは沖縄県首里城跡から出土したマカク古骨について、ミトコンドリアDNA変異を用いて種判別を試みた。先史、歴史時代をつうじてヒト以外の霊長類の生息が知られていない沖縄県から出土したサルの骨格がミトコンドリアDNAの抽出･分析によってヤクシマザル *Macaca fuscata yakui* と同定できたので報告する。

出土骨の概要

骨は1998年に沖縄県教育庁文化課によって実施された首里城跡南測斜面部発掘調査において、管理用道路地区から出土した。年代は、調査地点が琉球大学跡地で攪乱をうけているため明確ではないが、共伴する陶磁器類から16世紀～17世紀前後と捉えられている。

出土骨はほとんどクリーム色を呈し、焼かれた形跡や顕著なカットマーク、切削痕などは観察されない。残っている骨はしっかりとしているが、いずれも破片か、または欠けたところがある骨で、完全な骨は含まれていない。サルのほかにイヌ *Canis familiaris*, ウマ *Equus caballus*, ブタ *Sus domesticus*, ニホンジカ *Cervus nippon*, ヤギ *Capra aegagrus*, 鳥類（ニワトリ *Gallus gallus* 程度の大きさ）などが出土している。

サルの骨は２個体に由来すると推定されている。

10歳前後の成体メス（個体 A）に由来するとおもわれる骨は胸椎４片、腰椎２片、仙骨（第１仙椎の頭側半)、助骨14片（すべて長さ３センチ未満の破片)、右上顎骨、下顎骨、(以下、すべて左右）上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨、の合計35片である。歯は、右上顎骨の破片に植立する犬歯から第２大臼歯までの５本、下顎骨に植立する左側大臼歯３本と右側第４小臼歯・第１大臼歯の５本と、合計10本と下顎右第２大臼歯の近心歯根が残っている。

別の個体（個体 B）に由来する左右の尺骨がある。左右とも近位端をふくむ長さ５センチ程度の破片である。肘頭の骨端が未癒合なので、未成熟個体由来であるが、個体Ａの尺骨よりやや大きい。個体Ｂが個体Ａと同一種であるとすれば、５～６歳のオスと推定される。

個体Ａの歯の萌出時期と咬耗の関係をみると、野生ザルより飼育ザルのものに類似している。そこで年齢推定は、飼育ザルの歯の咬耗との比較によっておこなった。

個体Ａの残存部位は全身にわたっているので、埋葬され、その後攪乱をうけたものと解釈することも可能である。ただし、かなりの細かな助骨の破片が出土しているのに、手・足・尾の骨がまったく出土していないのは多少不自然な印象である。

個体Ｂは、フック状の特異な形態をしめす尺骨近位部が、左右にそろって、ほぼ同じ大きさの破片として、しかも他の部位をまったく伴わずに残っていることに強い人為を感じさせられるが、いっぽうで、割れ目は左右とも、白骨化の後に折れた状態で、特に人為を示唆していない。

形態から確実に種を同定することはかなり困難である。大臼歯のバイロフォドンティ（二稜歯性）からオナガザル科（旧世界ザル）であることがわかる。また、大臼歯の咬頭が高くないのでコロブス亜科は排除され、オナガザル亜科である。地理的に遠いアフリカのオナガザル亜科の可能性を排除するとマカカ属のサルがのこる。ところが、マカカ属は、19種（Fooden, 1980）と種数が多く、いくつかの種はサイズのちがいによって排除できるものの、積極的な種の同定は困難である。

材料と方法

出土骨の遺伝子分析

(1) DNAの抽出

分析に供した出土骨試料は、10歳前後の成体メス（個体A）である。まず、右下肢骨をミニドリルで削り骨粉にした。削った骨粉は0.5MEDTA（pH 8.0）溶液中にて、暗所室温下、7～8日間震盪し、その間、2～3回EDTA溶液を交換した。その後、遠心（3,000 rpm、10分間）により上清を除き、さらにプロテネースKを含む溶液（0.5M EDTA 5ml、10% ラウシルサルコシル 300ul、50mg プロテネースK 100ul）を加え37℃で1昼夜から2昼夜インキュベートした。その後遠心（3,000 rpm、10分間）により得られた上清を等量の中性フェノール（pH 7.8）で2回、クロロホルムで1回処理し、3,000 rpm、10分間遠心後、セントリコン（Centricon concentrators 30、Amicon社）にて、3,000 rpmで30～60分間遠心を繰り返し（3～5回）、EDTAを除去した。最終的にカラムから約100ulのDNA溶液を回収した。再現性の確認のため、同様の操作を2回行い、2つの独立したDNA溶液をtemplateとしてPCR増幅に用いた。

(2) ＰＣＲ反応液

ＰＣＲ反応液は以下に示した。

反　応　液

template	1.00ul
3.5U/Taq DNA Polymerase	0.25ul
Expand HF buffer,10×conc. with 15mMMgCl2	5.00ul
2.5mM dNTP	4.00ul
10 mM forward primer	3.00ul
10 mM reverse primer	3.00ul
dH2O	33.00ul
Total	50.00ul

(3) ＰＣＲ増幅に用いたプライマー

ミトコンドリアDNA D-loopの可変域　242bpを増副するためにプライマーを設計した。使用したプライマーおよびＰＣＲ増幅の条件は以下に示した。プライマーの位置は図1に示した。増幅にはサーマルサイクラーPerkin Elmer Gene Amp PCR System 2400を使用した。なお、ＰＣＲ産物の精製はスピンカラム300（MicroSpin TMS-300HR Column；AmershamPharmacia Biotech社製）でおこなった。

使用したプライマー

mdl-L（forward）：5'-ATCACGGGTCTATCACCCTA-3'
mdl-79（forward）：5'-GCACGCAACCCCATTGCAGT-3'
mdl-99（forward）：5'-TATGCTGACTCCCACCACAT-3'
mdl-161（forward）：5'-TCGCACCTACGTTCAATATT-3'
mdl-244（backward）：5'-AAGCATGAATTAAATAACAC-3'
mdl-341（backward）：5'-GTTTGGATGAAGGTCGGAGA-3'
mdl-350（backward）：5'-CAAGAGTGGGTTTGGATGAA-3'
mld-393（backward）：5'-GGCTCCGACTGGATATGTTA-3'

ＰＣＲ増幅の条件

ＰＣＲサイクル		40回
Denaturation	94℃	30秒間
Annealing	50℃	30秒間
Extension	72℃	30秒間

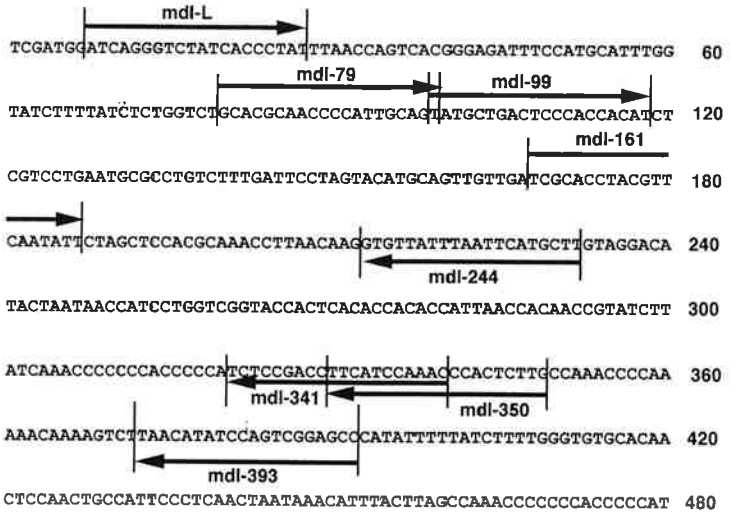


図１．首里城から発掘された、*Macaca*属の右下肢骨におけるミトコンドリアＤＮＡのD-loop領域のＰＣＲ増幅のために設計されたプライマーの位置。プライマーの設計に際しては、Hayasaka *et al*,（1991）の報告したニホンザルType Ⅰの配列（本図に示した塩基配列）を参考にした。

現存種の遺伝子分析

形態特徴から、出土骨はマカカ属のサルであることが明らかであった。沖縄周辺地域では、日本列島にニホンザル、中国およびインドシナ半島にアカゲザル、台湾にタイワンザル、インドシナ半島、マレー半島、フィリピン、インドネシアの島嶼部にカニクイザルが現在分布している。これらのサルは、いずれもFooden（1976）によって４つに分類されたマカカ属のspecies groupのうちの *fascicularis* groupの構成種である。首里城のサルは、これらの種のいずれかであろうと予想をたて、現存種について遺伝子分析をおこなった。比較のために、ニホンザル *M.fuscata*（ホンドザル *M.f.fuscata*とヤクシマザル *M.f.yakui*）、アカゲザル *M.mulatta*（中国、ラオス、インド）、タイワンザル*M.cyclopis*、カニクイザル*M.fascicularis*（フィリピン、インドネシア）について、ミトコンドリアＤＮＡ D-loopの相同部位の塩基配列を決定した。血液から調製したゲノムＤＮＡを試料として、Hayasaka *et al.*（1991）に準じてPCRによる増幅をおこない、上記のmdl-99、mdl-341のプライマーを用いてダイレクトシーケンシング法で塩基配列を決定した。

結果と考察

出土骨の遺伝子分析

はじめに、従来のD-loop増幅（242bp）のためにデザインした２組のプライマー、mdl-Ldl-393（1st PCR）およびmdl-99dl-341（2nd PCR）を用いて増幅を試みたところ、バンドは検出されなかった。そこで、この増幅領域を２つに分け、それぞれ増幅する大きさが150bp前後になるようにプライマーをデザインした。前半部はmdl-79dl-244（1st PCR）およびmdl-99dl-244（seminested 2nd PCR）、後半部はmdl-161dl-350（1st PCR）およびmdl-161dl-341（seminested 2nd PCR）を用いて増幅を試みたところ、２つのtemplateからそれぞれ約145bp（前半部）および180bp（後半部）のバンドが増幅できた（図２）。

これらの増幅バンドを精製して、塩基配列を決定し、前半部と後半部の配列をアライメントしたところ、200bpおよび239bpの塩基配列が得られた。これらのうち200bpの配列を現存種について得た配列とアライメントしたところ、図３に示したように、出土骨由来のDNAサンプルはヤクシマザルの配列と完全に一致した。

現存種の遺伝子分析

出土骨との比較のためにおこなったマカカ属４種のミトコンドリアDNA D-loop領域の塩基配列決定では、塩基置換にくわえて、塩基の挿入･欠失を含む突然変異領域が４箇所検出できた（図３の矢印Ａ～D）。

ニホンザルの場合、ホンドザルとヤクシマザルの間で１塩基(T)の挿入・欠失の違いが認められ(図３の矢印B)、ヤクシマザルでD-loopの全長が１塩基大きかった。なお、ヤクシマザルと同じ塩基が同じ部位に挿入されている例がインド由来のアカゲザルで認められた。しかし、ニホンザル同様にアカゲザル種内でもこの挿入変異

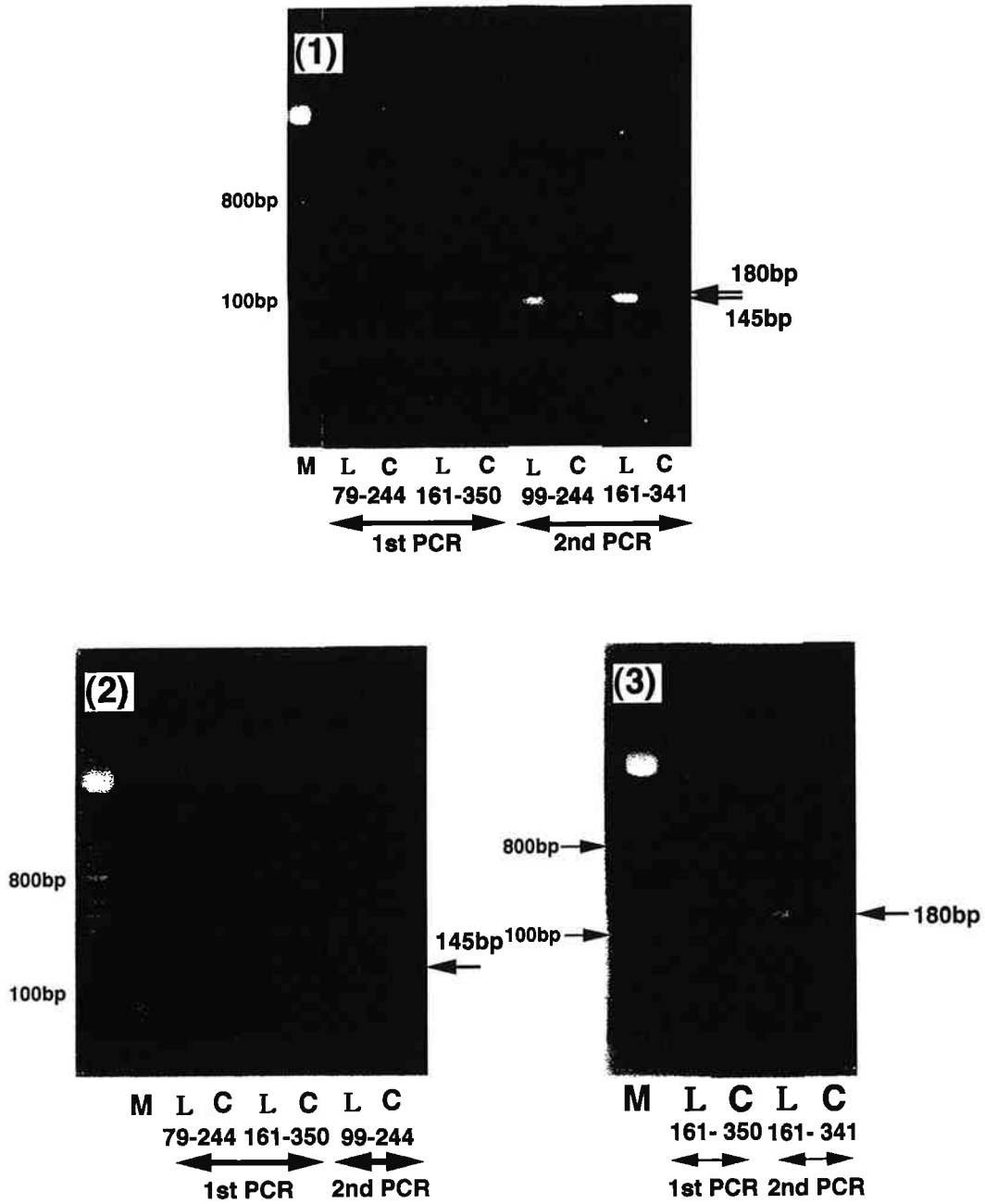


図２．首里城から出土した*macaca*属サルの右下肢骨におけるミトコンドリアDNAのD-loop領域のPRC増幅。
M:マーカー、L:サンプル、C:コントロール

(1) サンプル１のPRC増幅
右側:1stPCRによるmdl-79dl-244(前半領域)およびmdl-161dl350(後半領域)の増幅、右側:2ndPCR(semi-nested)によるmdl-99dl-244(前半領域)およびmdl-161dl-341(後半領域)の増幅。矢印は2ndPCR(semi-nested)において検出されたバンド(188bp,145bp)を示している。1stPCRではこれらのバンドは検出されていない。

(2) サンプル２のPCR増幅
左側:1stPCRによるmdl-79dl-244(前半領域)およびmdl-161dl-350(後半領域)の増幅、右側:2ndPCR(semi-nested)によるmdl-99dl-244(前半領域)の増幅。矢印は2ndPCR(semi-nestd)において検出されたバンド(145bp)を示している。1stPCRではバンドは検出されない。

(3) サンプル２のPCR増幅
左側:1stPCRによるmdl-161dl-350(後半領域)の増幅、右側:2ndPCR(semi-nestd)によるmd-161dl-341(後半領域)の増幅。矢印は2ndPCR(semi-nestd)において検出されたバンド(180bp)を示している。1stPCRではバンド検出されない。

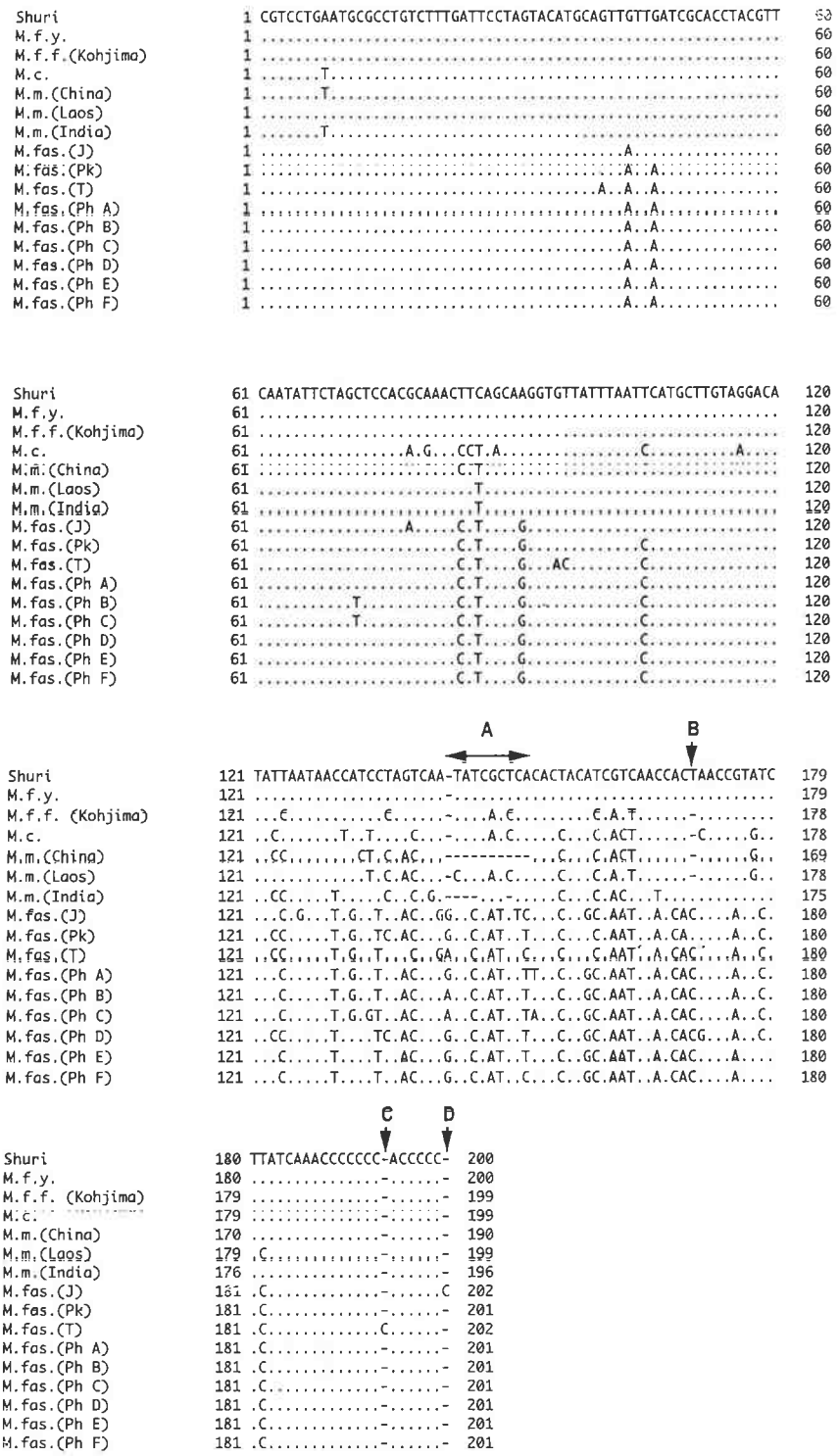


図３．首里城から出土した*Macaca*属サルの右下肢骨におけるミトコンドリアDNAのD-loop領域のPCR増幅により得られた塩基配列アライメント。アライメントはClusta l V(Higgins et al.1991)を用いて求めた。
Shuri:首里城出土サル、M.f.y.:ヤクシマザル、M.f.f.(Kohjima):宮崎県幸島のホンドザル、M.c.:タイワンザル(京都大学霊長類研究所の飼育個体)、M.m.(China):中国由来のアカゲザル(京都大学霊長類研究所の飼育個体)、M.m.(Laos):ラオスのアカゲザル、M.m.(India):インド由来のアカゲザル(京都大学霊長類研究所の飼育個体)、M.fas.(J):インドネシア島のジャワ島 Jatibarang のカニクイザル、M.f as.(Pk)インドネシア領ボルネオ島(カリマンタン)Pangkalanbunのカニクイザル、M.fas (T):インドネシアのスマトラ島南部のタブアン(Tabuan)島のカニクイザル、M.fas,(Ph A～D)を示し、欠失部位はハイフン記号(-)で表した。なお、本配列は、図１に示した配列の３行目冒頭から６行目前半の部分に相当する。

は多型的で、ラオスと中国由来のアカゲザルでは欠失していた。

アカゲザルの場合、複数の塩基が関係する複雑な挿入・欠失変異領域が認められた(図3の矢印A)。ニホンザル同様にアカゲザルでもすべての地域でこの領域の初めの部分に1塩基の欠失がある。一方、比較した3地域由来の試料のうち、ラオス由来のものは、これの欠失部分のうしろに欠失はないのにたいし、中国由来のものではさらに9塩基が連続して欠失し、インド由来のものでは断続的に合計4塩基(3塩基と1塩基の部分に分かれる)が欠失していた(図3の矢印A)。

タイワンザルの場合、ニホンザル種内のホンドザル同様の特徴を示した。

カニクイザルの場合、上記の各種とは異なる挿入・欠失変異が認められた。第1は他種にないAないしGの挿入箇所である(図3は矢印Aのはじめの部分)。第2と第3の箇所は、比較した配列の最下流部に位置するCの反復配列の中にあり、いずれも conserved sequence block (Walberg & Clayton,1981; Hayasaka *et al.*,1991)の構成配列である(図3の矢印CとD)。この部分の挿入・欠失変異は、カニクイザルの種内で地域的な違いがある。反復部分の基本構造は第2箇所(Cm)+A+第3箇所(Cn)[ただし、mとnはCの反復回数を表す]で、ボルネオ島やフィリピン諸島のカニクイザルでは m=7 n=5なのに対して、ジャワ島のカニクイザルでは m=7 n=6、スマトラ島南部洋上に位置するタブアン島のカニクイザルでは m=8 n=5 の個体がみつかった。なお、カニクイザル以外のサルでは、いずれも m=7 n=5でボルネオやフィリピンのカニクイザルと同じであった。また、ヤクシマザルとインドのアカゲザルだけに認めたTの挿入部分(図3の矢印B)にはカニクイザルすべてで塩基挿入があり、ジャワ島がTなのにたいして、ほかはCで多型的であった。

首里城出土のサルは、塩基の挿入・欠失部位においても、完全にヤクシマザルの配列と一致していた。従って、首里城出土骨は16～17世紀前後に屋久島から沖縄に持ち込まれたサルの遺骨と考えられる。

塩基の挿入欠失部位を除いて、相同と判定できたD-loop領域190塩基長にみられる塩基置換から、遺伝子の構造類似性をもとにニホンザル、タイワンザル、アカゲザル、カニクイザルの関係をみた結果を図4に示す。塩基置換サイトは190塩基中に45サイトあり、短い配列にもかかわらず情報量が多い。図4の結果では、タイワンザルとアカゲザルは分離できないものの、塩基置換だけからでもニホンザル、カニクイザル、タイワンザル/アカゲザルの3グループが区別できた。

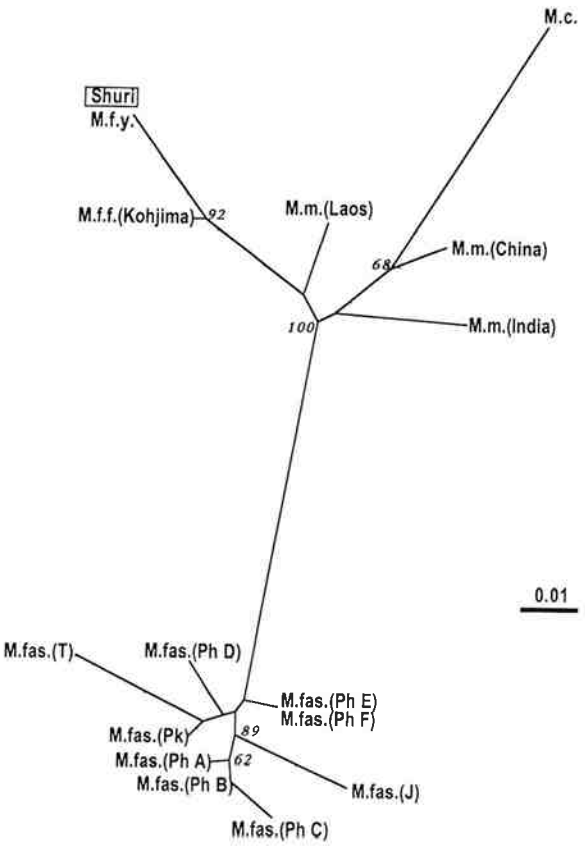


図4．比較したD-loop領域の相同部位の配列(挿入·欠失部位は除いた190塩基の配列)からNJ法で描いた各種マカクの配列類似性。PHYLIP(Felsenstein,1993)により、クラスタリングならびにbootstrap値を示す。
塩基置換数の推定は2パラメータ法を用い、transitionとtransversionの比は観察データから、20.5:1と仮定した。図中の集団名については図3を参照

今後の展望

ミトコンドリアDNAのD-loop領域は突然変異を蓄積しやすいため、種間および種内の近縁な個体群の系統評価に有用な分子標識として利用されている。今回の研究により、マカカ属のサルにおいても、種の判別に有用な変異がこの分子に蓄積していることが明らかになった。4種の比較では、塩基の単なる置換だけでなく、挿入・欠失タイプの変異がこの部分にかなり存在し、特定の部位にある塩基のの挿入・欠失だけでもマカカ属の種の違いを判定できることがわかった。さらに、こうした挿入・欠失タイプの変異には、種内の地域差を反映する例が、ニホンザル、アカゲザル、カニクイザルで観察された。こうした変異に関して種内の分布状況を今後の調査で明らかにできれば、サルを対象にした分子系統学、分子生態学はもとより、分子考古学の研究を進めるうえでも有益と考えられる。

今回の出土骨は、過去においても現在においてもサルの自然分布の証拠がない沖縄から発見されたものだった。状況証拠から考えて、人為的に外部から持ち込まれたサルの遺骸と推察できたが、その来歴

を問うには、形態情報にくわえて遺伝子分析からの情報が有用だった。

今後、有史以来のヒトとサルの交渉史を探るうえで、こうした遺伝子分析技術を利用した考古学的研究は新しい知見とヴィジョンをもたらし、霊長類学の新局面の開拓に貢献するものと考える。また、古骨や化石からの遺伝子情報を適正に評価するためには、現生霊長類の遺伝子特性を種内の地域間や、種間で調査することがきわめて重要であることを強調したい。

謝　辞

本研究の骨試料分布においては、名古屋大学文学部渡辺誠教授、沖縄県教育庁文化課盛本勲氏に多大のご協力を賜りました。謹んで感謝申し上げます。

本研究は、文部省科学研究費補助金(基盤研究Ｂ「後氷期におけるニホンザルの成立過程の総合的研究」課題番号 11440249 代表者:茂原信生)の援助を受けました。

引用文献

Felsenstein, J.1993: PHYLIP (Phylogeny Inference Package) version 35c. Distributed by the author. Department of Genetics, University of Washington, Seattle.

Fooden J 1976: Provisional classification and key to living species of macaques (Primates: *Macaca*). Folia Primat. 25: 225-236.

Fooden J 1980: Classification and distribution of living macaques (*Macaca* Lacepede, 1799). In Lindburg DG (ed): The macaques: studies in ecology, behavior and evolution, Van Nostrand Reinhold Company, New York, pp. 1-9.

Hayasaka K, Ishida T, Horai S 1991: Heteroplasmy and polymorphism in the major nonconding region of mitochondrial DNA in Japanese monkeys: association with tandemly repeated sequences. Mol. Biol. Evol. 8: 399-415.

Higgins. DG, Bleasby AJ, Fuchs R 1991: CLUSTAL V: improved software for multiple sequence alignment. CABIOS 8: 189-191

Horai S, Kondo R, Murayama K, Hayashi S, Koike H, NakaiN 1991: Phylogenetic affiliation of ancient and contemporary humans inferred from mitochondrial DNA. Philos. Trans. R. Soc. Lond. B 333: 409-417

Krings M, Geisert H, Schmitz RW, Krainitzki H, P嵩bo S 1997: DNA sequence of the mitochondrial hypervariable region Ⅱ from the Neandertal type specimen. Proc. Natl. Acad. Sci. USA 96: 5581-5585.

Oota H, Saitou N, Matsushita T, Ueda S 1995: A genetic study of 2,000- year-old human remains from Jpan using mitochondrial DNA sequences. Am. J. Phys. Anthropol. 98: 133-145.

Paabo S, Gifford J A, Wilson AC 1988: Mitochondrial DNA sequences from a 7000- year old brain. Nucleic Acids Res. 16: 9775-9787.

Walberg NW, Clayton DA 1981: Sequence and properties of the human KB cell D-loop regions of mitochondrial DNA. Nucleic Acids Res. 9: 5411-5421

謝　辞

1997年９月～1998年３月までの６カ月間にわたる発掘調査、その後の出土品等の整理及び報告書の作成を無事に終えることができました。

発掘調査に当てられた作業員や嘱託調査員の方々には、着手時の残暑厳しい９月頃から寒風吹きさす１～２月を経て体力と神経の消耗する発掘作業や遺構実測でずいぶん無理や面倒をおかけしました。

諸先生方、学兄の皆様には発掘調査・資料整理期間中には遺構解釈や遺物の鑑定でご指導・御検討をいただきました。

おわりに、県営公園整備に伴う発掘調査で、常日頃から発掘調査の便宜をとられ県土木建築部都市計画課の職員・関係者の方々には衷心から感謝申し上げます。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第１集

首　里　城　跡

―管理用道路地区発掘調査報告書―

発行年　平成13年（２００１年）３月

発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター

編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL　０９８（８３５）８７５１

FAX　０９８（８３５）８７５４

印　刷　株式会社　アシスト

〒901-1111　沖縄県島尻郡南風原町兼城577

TEL　０９８（８８９）６１００(代)

FAX　０９８（８３５）６０３３